THE CENTRAL REVIEW

中央公論

秋季大附錄號

第三十八年　第十號　第四百二十六號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社

今夏の一異彩

好評‖歡迎

純品質主義

鷹印麥稈帽子

あなたの御召料に適合する様に型と質に於て斯界優越の製品であります



東京
大阪
株式會社 高橋製帽所


今夏の



漁樵問答　　小杉未醒筆

大正十二年

中央公論

九月一日發行

秋季大附録號

第卅八年第十號

第四百二十六號

秋を待つ

秋が來る、秋が來る、もう秋が來る。どうぞ早く來て呉れ、一日も早く。

春、夏、秋、冬。四時の序を違へざる地球の溫帶圏に生れた吾等には、四時が交る迭る巡り廻つて來ることが絕對に必要だ。春、夏、秋、冬。其中の一つをだに缺く吾等の生活は、殆んど想像さへ出來ない。——吾等が其生活の樣式や資料を全然變へることに成功しない限りは。——

だから本當を云ふと、冬の寒いのも、夏の暑いのも、梅雨季の鬱陶しいのも、雷の鳴るのも、雹の降るのも、餘り苦情は云へない譯である。一見人間の生活に不利益らしく見ゆるいろ／＼の現象も、たゞ天候の單調を破ると云ふ意味以外に、大きな眼で觀ると、何れも皆人間の生活に必要な條件に相違無いのだから。

併しそれは理窟だ。登山の目的は山頂の壯觀を究むるにあつて、中途の急坂や險崖に喘ぐのにないと同じく、生活の目的は、生の幸福と享樂を全うするにあつて、努力や奮鬪や苦惱にあるのではない。努力や奮鬪や苦惱は、生の幸福と享樂を得る爲めの手段、道程——已むを得ざる手段、道程に過ぎない。

人間は單に生存する丈けでは滿足し得ざる生物である。生存より生活へ、——そしてより・よ・き生活へ、——最後に最もよき生活へと、彼れの欲望はいやが上に增進して停る所を知らない。そこにこそ人間としての生甲斐ある生活を見出すのである。

春、夏、秋、冬。吾等の現に生存しつゝある地球は、幸に四時の序を違へずに運行しつゝある。併し太陽の黑點の關係か、又は所謂近日點とか遠日點とか云ふものとの關係か。此二年ばかりは、夏は極めて暑く、冬は非常に寒い。天文學者や地質學者の說によれば、地球も、十年とか二十年とか卅年とか五十年とか置きに、小同期的に多少の異常狀態を現はし、十萬年とか廿萬年とか卅萬年とか五十萬年とか置きには、大同期的に激甚なる變動狀態を現はすものらしい。古生物學や地質學などを調べると、何十萬年か前に、地球が氣溫の一大激變に遭遇して、其上に棲息したあらゆる生物が全部死滅した證據が歷然たるもので、現在吾等と一緒に地上に棲息する生物は皆其後に出來た極く新らしい年代に屬するものなさうな。——さうして地球の現在の狀態は、大體生物にとつての順調時代らしく、こゝ何萬年位は先づ／＼安心あつて然るべしとの事だ。

併し吾等は何もさう先きの先きの事まで心配する必要はない。した所で何にもならない。人間は大體獨りぼつちのものは自分一代。子のあるものは子の時代。孫のあるのは孫の時代あたりまでを心配すれば澤山だ。曾孫の百年時代を心配して居る御老人ありとすれば、御當人が餘つ程耄碌して御座るのにお氣が附かれぬのだらう！。

の後とか、千年の後とかを憂慮するなど云へば一寸エラさうに聞えるが、實は馬鹿〳〵しい話だ、又僭越な話だ。生物進化、人間進化の原則を信ずるものは、人間は大體に於て、子の代は親の代より、孫の代は子の代より良くあり賢くあることに疑を挾まない。子の代や孫の代まで心配すれば澤山だといふのも、實は父母たり祖父母たる當人が心配せずに居れぬといふ意味なので、其心配が子や孫に素直に享け入れられるか、又は果して子や孫の幸福を增進するや否やは別問題なのである。刹那とか現在とか云ふ言葉の哲學上の解釋は別として、人間はどうしても、廣義に云ふ刹那主義者、現在主義者なのである。——であるより外にありやうがないのである。若しさうでないと思つてゐる人があれば、それは餘つ程お目出たい人であり、又は隨分頭腦のよくない人である。

詮ずる所、人間は生の幸福と享樂とを——最大の幸福と最大の享樂とを求めて活きてゐるのである。努力や奮鬪や苦惱やは其幸福と享樂を得る爲めの已むを得ざる手段であり、道程である。十歩にして胸を拊ち、五十歩にして膝を撫する急坂の喘ぎは、眺望遠く風涼しき山頂の快樂を味ふ爲であり、雨中に苗を植え、炎天に草を取る農人の苦しみは、豐かに實つて、稻穗長く黃に首垂るゝ收穫時の歡喜を得んが爲めである。

春もいゝ。いろ〳〵の草は芽を發し、いろ〳〵の花は咲く。生物と云ふ生物は皆其生きてゐることに目覺めて歡びの聲を擧げる。併し春は何となく騷がしく、何となく慌しい。美酒の底の滓、大醉の後の二日醉といふやうな一味の混濁した感觸はどうすることも出來ない。夏は暑い。夜がいゝとか、風がいゝとかいろ〳〵理窟はつけて見るが矢張り暑い。苦しい。冬は寒い。雪が降り、水が氷り、空つ風が吹き捲くる。之もいろ〳〵理窟はつけて見るが矢張り寒い。いやな季節だ。そこになるとどうしても秋だ。一年中の最好季節はどうしても秋だ。

秋を以て一年中の最好季節とする思想は北半球の溫帶に住むあらゆる國民、人種に共通するものと見て差支ないだらう。支那や日本の詩歌には固より、歐米の詩人にも秋を讃美するの作が多い、

秋に關する古來の名詩や名歌を引く餘白はこゝにはない。又秋を讃する佳句を得て讀者に誇らんとする餘裕も野心もない。之を書きつゝある八月十日は、曆面でこそ立秋後三日なれ、東京は朝の九時に已に八十四度といふ暑さだ。兎ても秋と云ふ氣はしない。併し九十度を超す眞晝の暑さの中でも、一寸風が立てば、其風の中に多少の冷いやりとした秋の氣配を摑む事は出來る。此雜誌が世に出てから十日も經てば、朝夕の風の中にしみ〴〵と秋の涼しさを感じ、見渡せど目に見ゆるもの何もなき碧落の中に秋の色を味はひ、地上のあらゆる草木や生物の姿の中に、靜かに嚴かに秋の心を噛みしめて「本當に秋が來た!」と叫び得るだらう!。其時こそ吾等は山頂に立つ登山者の如く、收穫を歡ぶ農人の如く、堪へ忍んで來た夏の暑さも忘れ、次いで來るべき冬の寒さも思はず、飽くまで刹那主義者となり、現在主義者となつて、心ゆくまでしみ〴〵と生の幸福と享樂とに浸るであらう!。

あゝ、其「秋」よ! 「秋」よ! どうぞ早く來て呉れ、一日も早く。(TT生)

中央公論



第卅九年第十號
九月號
第四百二十六號

現代批判の原理としての哲人主義

田中王堂

一、緒言

一、現代に於ける指導者の資格の必具特徵

孟子見梁襄王。出語人曰、望之不似人君、就之而不見所畏焉。卒然問曰、天下惡乎定。對曰、定于一。孰能一之。對曰、不嗜殺人者能一之、孰能與之。對曰。天下莫不與也。此れは、孟軻が梁の襄王に謁した時、兩人の間に酬酢された問答に關して彼れのなした報告の一節である。

こゝには對人論法が用ゐられたために、孟軻の意見は消極的の表現を取つて居るが、若しわたくし共にして其れをして積極的の表現を取らしめ、喜生人者能一之とか、努生人者能一之とかし、そして、其れの解釋を出來る得るだけ文字的にと等しく形容的に擴充し、潤澤し、洗錬して行くならば、彼れの對象は萬古に亙つて、人間の生活のあらゆる部門に於けるあらゆる指導者に取つての最高標識たるに十分であるとわたくしは信ずる。試に追究して見よう。活動の種の殊なるに隨つて、其れの用ゐる手段の異なつて來るのは無論のことであるが、政治家には政治の機能に順じて『人を生かす』ことの外に一つでも職分があり得るか。産業家には産業の機能に順じて『人を生かす』ことの外に一つでも職分があり得るか。その他、藝術家にしたところで、科學者にしたところで、乃至、歴史の、若しくは、哲學の研究者にしたところで、それぞれ、其れの分野に於て『人を生かす』ことの外に一つでも職分があり得るであらうか。然し、人間の生活の鑑容も、理想も恒に變遷して息まない。隨つて、之れが機關たるものの樣式と構成とは絶えず改造されなければならない。ここに於て、其等の孰れの一つにしても、一つの特定の境遇の下に、如何なる樣式と構成とを有つことが『人を生かす』方便として、最も適切に其れの本來の機能を發揮する道であるかが重大な問題となるのである。そして、『善く燒けた麵麭のみが、獨り、眞の麵麭である』と謂つたヘエゲルの意見に從つて、いつの時代に方つても、眞の政治家の眞の産業家の、眞の藝術家の、眞の科學者の、そして、歴史の、哲學の眞の研究者の極めて稀有である理由である。何故ならば、苟も此等の人々にして眞ならんとすれば、彼等は情操に於てさうであるに止まらず、又、實行に於てもさうでなければならぬ。言ひ換へれば、洞察と知識と才幹との卓越した結合に於てさうでなければならぬからである。

究竟するに、人間が生活することは單純ではないが、單一な仕事である。それは彼れの欲望を發動させることである。隨つて、善く生活することは（プレトオの用語例に從つて）公正に其等の欲望の一つ一つを發動させることであ

る。然し、(こゝには、彼れがさういふ風に觀るに至つた理由や、歷史に就いて詳しく說明して居るわけにゆかぬが、)人間は、夙に、異生にして異質なる二つの要素の交涉より成り立つものであるといふ風に彼れの生活を觀ることになつた。此等の二つの要素は卽ち、通常、性情と呼ばれ、環境と呼ばれて居るところのものである。そして、彼れはだんだんに前者を心的のものと想像し、後者を物的のものと想像することにまでなつた。一旦、この二元的の見方若しくは、考へ方が人間の覺悟の中に根柢を作つて以來、彼れが彼れの生活を改造する、一層正確に言へば、彼れの生活の異なる部分の間に生ずる矛盾を改整する方法は二つの樣式を取つて、性情の陶冶が目的とされるか、環境の整頓が目的とされるかの孰づれかの一方に偏することになつた。そして、今日に至るまで久しき歲月の間、性情といひ、環境といつても、もともと、同生にして同質、たゞ或るエコノミイの見地より爲された作用上の區分であつて、一方のはたらきの特色は他方のはたらきの特色を假定することに依つて限定されるのであるから、結局、性情の陶冶は環境の整頓を伴つて、始めて其れの實を擧げ得、環境の整頓は性情の陶冶を竢つて、始めて其れの功を全うし得るものなることの極めて平明なる、否、極めて平凡なる眞理を體認することが出來なかつたのである。かういふ見方、若しくは、考へ方を以て人間の生活が觀照され、若しくは、取り扱はれた時に、審美的に、理論的に、そして、實行的に其れと實際の事實との間に越ゆべからざる鴻溝の劃せらるのは自然である。然し、其の場合に於ても、彼れは此等の偏頗な、言ひ換へれば、抽象的な見方、若しくは、考へ方の孰づれの一つもの缺陷を訂正しようとはせずして、たゞ、當時、偶然應用されて居た一方のものを棄てて、他の一方のものを試ることだけを繰り返して來たのである。それほどまでになく、一方の缺陷が彼れの情操に映ずるまゝに其れを塡補するために他の一方が取られ、兩方のものが併存するにしても、其等は殊なる興味に依つて、生活の異なる部門の觀照、若しくは、取り扱ひに用ゐられのであるから、此等の二つの見方、若しく

は、考へ方は、時には相接することはあるとも、決して合議し、努力することはなかつたのである。わたくし共は性情の陶冶のみを目的とする様式の極端なるものを神秘主義と呼び、環境の整頓のみを目的とする様式の極端なるものを唯物主義と呼ぶのである。斯くして、わたくし共は過去に於けると等しく、(大分の程度に於て)現在に在つても、神秘主義的の個人と國民とを有つ、唯物主義的の個人と國民とを有つ、此等より數に於て遙かに多く神秘主義的であると同時に、唯物主義的である個人と國民とを有つ、然し、わたくし共は、不幸にして、性情と環境との間に對用を識別するが、二元を提造せず、隨時、性情の要求に依つて環境を醇化し、環境の條件に依つて性情を訓練しつゝ、的確に現實を把住する結果として、大膽に其れの中に理想を發見する、若しくは、其れの中より理想を發展させる理想主義的に現實主義的たる個人と國民とに至つては、寔に寥々たる曉天の星の數だけさへも有たぬのである、當分のうち有ち得さうも無いのである。若し現代に於て世界的の疾患なるものが幾つでもあるならば、其れの情操に關し、其れの思想に關し、其れの制度と政策とに關し、一方に於て神秘主義的たり、他の一方に於て唯物主義的たるの一事に在るとわたくしは考へさるを得ぬ者である。こゝに、わたくしは其れの症狀を說いて居るのではない、直ちに其れの病源を斷じて居るのである。さうすると、わたくし共の中に、わたくし共日本人は個人として、國民として、全然、この疾患の厄を免れた唯一の民族であると言明し、證明しようとする勇氣ある者が一人でも有るか。

否。炳乎たる事實は、今日、わたくし共日本人は不思議な運命の下に二重にこの悲むべき疾患に罹つて居ることを語るのである。

わが國は最近六十年間に於て、西洋の文化より二度まで刺激を受けた。其れの最初のものは明治の初年に於て受けたのであり、其の第二のものは大正年間に入つて受けたのである。最初のものは彼の土に在つて十八世紀より十九世紀の

上半に至るまで人心を風靡した自由化の運動に接觸した影響であり、第二のものは十九世紀の後半より今世紀にかけて、特に世界大戰の後を承けて、人心の歸向を決しつゝある平等化の精神を感得した結果である。自由の觀念にしても、平等の觀念にしても、其等に含まれた意義の協同點を揮推して出來た友愛の觀念と倶に、人類解放の永遠の道程に於て必然に發露し發動しなければならぬ觀念である以上、わが國がさきに自由化の運動に接觸し、今、又、平等化の精神を感得し、之れがためにわが同胞の生活に新たな、そして一層高き總合を豫想する或る動搖が生じたとするならば、理屈としては、卽ち、抽象的には、そこに賞讃さるべきものばかりであるやうに思はれる。然し、世の中に理屈として、卽ち、抽象的に賞讃さるべきものであつて、實際に於ては、卽ち、具體的には非難さるべきものとなることが尠なくない。是等の再度の刺激がわが同胞の生活に與へた感化の如きも、確かに其等の一つである。然し、誰れが其れの責任を負ふべきであるか。結局、其れはわたくし共日本人であるに定まつて居る。何故ならば、無理會を以て彼の土に於ける自由化の運動の成績を使用し、沒批判を以て其れに於ける平等化の聲言に雷同して居るわたくし共の態度が今日わたくし共に取つての焦熱問題の甚たる困迷と混亂との大部分を馴致したからである。わたくし共は外存の興味よりして、無理會に自由化の運動の成績を使用した。この結果として、自由の觀念を以て專制の傳統を溶解することが出來なかつた。わたくし共は輕浮な氣分よりして、沒批判に平等化の精神に雷同して居る。この結果として、平等の觀念を以て差別の制度と思想とを改整することが出來ないのである。若しわたくし共にして外來の自由の觀念に依つて完全に、固有の專制の制度を溶解することが出來たならば、(後者に潛む善き要素、例へば忠誠の如きものは自然に前者に反動して、其れの意義を變更することゝなるから)、彼の土に在つて抽象的のものは此の土に於て風土化され、國民化されて、具體的のものとなつたであらう。又、若しわたくし共にして外來の平等の觀念に依つて、正確に固有の差別の傳統を改整す

ることが出來たならば、(この場合に於ても、後者に含まれた正しき要素、例へば卓越の認識の如きものは自然に前者に反動して、其れの意義を變更することになるから)、彼の土に在つて外形的のものは、此の土に於て、風土化され、國民化されて內質的のものとなつたであらう。然し、事實はさうでなくして、さきには、固有の專制の制度と外來の自由の觀念とをして交錯せしめたが、其等をして協同せしめるに至らず、わたくし共の生活をして、新たに一方に於て、神祕主義的たり、他の一方に於て、唯物主義的たる誘因を作らしめたのである。其の混沌たる情操と理會とをそのまゝにして置いて、今後、外來の平等の觀念を迎へることとなつたために、其れと固有の差別の傳統とをして糾紛せしめるが、其等をして融合せしめずに居る。現にわたくし共の生活が更に一層複雜した形式を取つて、一方に於て、神祕主義的となり、他の一方に於て、唯物主義的となつて居るのに大した不思議はない。わたくしが刻下に於けるわたくし共の生活樣式を目して、其れは二重に神祕主義的であり、同時に、唯物主義的であるとするのは、此の炳乎たる事實あるに依るのである。さればこの歎ずべく、悲しむべき事情の下に發生するものは、政治にしても、道德にしても、產業にしても、藝術にしても、科學にしても、哲學の研究にしてさへも、如何なる聰明の(若しくは、不聰明の)上に立ち、如何なる組織を取るべきものであるか、現に取つて居るかは識者の指摘を竢たずして明白である。

『天下は一に定まらん。』人間の生活は、結局、理想主義的の卽ち、現實主義的の對用的活動に落ち着くべきである。『人を殺すことを嗜まざる者、能く之を一にせん』人間の有てるあらゆる欲望を尊重し、其等の全體より其等の一つ一つの權利とはたらきとを十分に認容した後、素直に、到徹に親切に其等の發動の經過と體現との意義と指標價値とを考察し、評定する者が、獨り、政治に於て、道德に於て、產業に於て、藝術に於て、科學に於て、そして、哲學の研究に於て、能く、人間の生活の現に墮しつゝある、一方に於て、神祕主義的たり、他の一方に於て、唯物主義的たる二元的狀

態を統一して、此等をして、理想主義的なる、卽ち、現實主義的たる對用的活動に落ち着かしめるのである。

こゝに、わたくしは、斯かる企畫の一資料として、哲人主義を提唱する者である。

二、哲人主義の趣意を解説す

今日に到つては、哲人主義なる言葉は可なり汎く世間に通用されることになつた。然し、わたくしの知り得る限り、哲人主義なる言葉はわたくしの創意に成つたものである。わたくしは、(その實、極めて謙遜な要請としてではあつたが)自分の體驗と反省とを基礎として、人間の生活の事件に關して、新たに、獨自に之れが觀照と批判との方法を立しようと企てたのであつた。されば、他の人々が如何なる意義を附して哲人主義なる言葉を使用しようと、其れは、無論彼等の自由であるが、わたくしとしては、當初、わたくしが哲人主義なる言葉を鑄造するに方つて、如何なる志向を其れに托しようとしたかを説明することは一緊要事に屬せねばならぬ。

哲人主義に關して最も普通に受け取られて居る見解は、其れとデモクラシイとを對立せしめ、兩者を種別せずして、類別して居ることである。例へば、彼等の見解に從ふと、(政治に限つて言つても、)少數の賢者の意思に依つて行はれるのが哲人主義であつて、多數の民衆の欲求に依つて決せられるのがデモクラシイであるのである。然し、この見解ほどわたくしが哲人主義を通して運出しようとして居る志向より遠かつて居るものは無い。わたくしの理會からすれば、そのやうに哲人主義とデモクラシイとを解釋しては、一擧にして兩方のものより其れの合理性を褫ひ去り、哲人主義を非哲人主義となし、デモクラシイを僞似デモクラシイとして了ふことになるのである。わたくしからすると、哲人主義は一つの類名である。デモクラシイは一つの種名に過ぎない。デモクラシイは哲人主義が或る文化と事情との上に於て、

偶、取る其れの一つの發相であるのである。デモクラシイに同格に對峙するものは專制主義若しくは其れに類似のものであつて、其等は悉とく類型哲人主義の變形であらねばならない。かういふわけであるから、わたくし共は或る文化と事情との下に在る民衆專制主義に依つて支配されることが一層便利であるか、デモクラシイに依つて支配されることが一層便利であるかと問ふことには確かに一つの意義はある。然し、彼等が哲人主義に依つて支配されることが望ましくあるか、否かと問ふことには何等の意義もあり得ない。何故ならば、そんな事を問ふことは彼等が人間性を有つて居るか、否かと問ふと同一であるからである。

若しこの世の中に『神聖にして惡を爲すこと能はず』といふ宣言の與へられるものが一つでも有り得るならば、其れは人間全體の協同作用に限られねばならぬ。決して彼れは惡を爲すことが出來ないといふのではない。たゞ、彼れは長い間に亙つて彼れ自づからの中に其れを改めて行く力を有つて居るからである。この眞理に關して、わたくしは、ファウストの序曲に於て對話して居る天使ガブリエルの意見によりも神の意見に同意する者である。哲人主義は人間に絕對の信を置き、彼れの生活を組織する要素の一切を肯定して、其等のはたらきの中に其れの統一と分化と變遷との原理を發見しようとするものである。然し、哲人主義は何等の立場を定めず、漫然其れを發見しようとするのではない。其れは現代の要求のパウスペクチヴより、一層嚴密に言へば、刻下に於けるわが國の要求のパウスペクチヴより、人間の選擇化と理想化とのはたらき振りと方向とを解釋して、其れを發見しようとするのである。

わたくし共日本人に取つて、眞なる意味に於て、若しくは、正しき志向に於て問題とさるべき問題はたゞ一つしかあり得ない。其れは方便としては如何なる形態と構造とを取るにしても、あらゆる複雑なる關係に於て、わたくし共の生活を一層善きものにするに在るといふことである。隨つて、わたくし共は人間として人間性を享有する限り、過去に於て

出現したものは一つとして全然『外的』であり得ないと同時に、又、一つとして全然『内的』であり得ない、言ひ換へれば、一つとして參考となり得ないものはないと同時に、又、一つとして模範となり得るものはない。結局わたくし共は、わたくし共の生活の中に、わたくし共の生活に依つて、其れが標準を創造せねばならぬ。哲人主義はこの目的のために重要なる或る物を貢獻しようとするのである。

何故にわたくしはわたくしの主張する見解の稱呼として哲人主義なる言葉を鑄造したか。

カアライルは、新らしく文化を創造することに關して、英雄が萬能であり、凡俗が絶對に無能であることを證明せんとして、英雄主義なるものを唱へた。ニイチエは、品性として常人の卑むべき總べてのものを有ちながら、尊むべき一つのものをも有たないために、眞にわたくし共の崇敬に價する品性の出現の氣運を催促せんとして超人主義なるものを說いた。彼等の心の中に於ては、英雄と凡俗と、乃至、超人と常人とは其の種の相違に依つて永遠に隔絶されたものであつたのである。されば彼等にして英雄と超人との價値を高揚すればするほど、それだけ、凡俗と常人との價値は低下することとなつたのである。わたくしが哲人主義を立する氣分と理會とは此等兩人の其等と正反するものである。

フェルヂナンド・ラサルは彼れの戀人より、ビスマークが賢者であるか、どうかを尋ねられた時、彼れは彼女に答へて、『さあ、若しビスマアクが賢者であるならば、自分は愚人である。若し自分が賢者ならば、ビスマアクは確かに愚人であらねばならぬ』と言つたさうである。英雄と凡俗と、乃至、超人と常人との關係の解釋に關して、果してわたくしが賢者であつて、カアライルとニイチエとが愚人であつたのであるか、或は、彼等が賢者であつて、わたくしが愚人であるかは、わたくしの見解と彼等の見解との前に立つ高明なる讀者の公正なる審判に任せることとする。たゞ、わたくしの主張する見解と彼等の主張する見解とは、到底、兩立し得るものでないことだけは明白である。何故ならば、わた

くしの哲人主義を立するのは、人間の根本性情の根本研究よりして、英雄と凡俗、乃至、超人と常人との相違ゐ種のものより寧ろ、程度のものとし、兩者の機能の間には、普通に、輕卒に想像されて居るよりも一層契合するところあるは事實を發揮するためであるからである。

『夫婦之愚、可以與知焉。及其至也、雖聖人亦有所不知焉。夫婦之不肖可以能行焉。及其至也、雖聖人亦有所不能焉。』わたくしは一個のヒユウマニストであつた『中庸』記者のこの意見に裏書きするに躊躇せざる者である。上賢にも際涯なく下愚にも際涯はない。然し、哲人主義は何人にしても、苟も人間性の分受者として、その殆ど無限に近い系列の上に或る位置を占める以上、彼等の總べてを通じて、其の生活をして可能ならしめる條件と其等のはたらき振りとの如何なるものであるか、如何なるものであらねばならぬかを指摘し、說明しようとするものである。哲人主義の理會に從へば、總べての個人は悉とく哲人主義的の素質を有し、哲人主義的に感じ、考へ、行ふことに依つて、極言すれば、それぞれ一個の哲人であることに依つて、彼等の生活を支持し、繼續して居るのである。人間は誰れ彼れの別なく、永久に、種族的に、個人的に、そして、社會的に、生長の道程に在る。されば、或る個人と或る他の個人とを商較する時は、その間に、性來よりして、天才と庸才との相違も見出だされるし、修養よりして、能者と不能者との相違も見出だされる。然し、此等の相違の如きは彼等の悉とくがそれぞれ一個の哲人たるの素質を有し、一個の哲人として生活して居ることの事實を一毫と雖も毀けるところは無いのである。何故ならば、彼等の相違するところは彼等の一致するところに比して言ふにも足らぬほど微小であつて、その一致するところのものこそ、彼等の各をしてそれぞれ一個の哲人たらしめて居る要素であるからである。彼等の各にこの哲人主義的の要素あるがために、彼れは個人として、どう云ふ風にかおのれの欲望を調節し社會人として、どう云ふ風にかおのれの意志と他人の意志とを整齊して居るのである。

わたくしは現實主義者である。如何なる場合に於て、如何なる事件を考慮し、取り扱ふにしても、到頭現實主義の立場を離れることの出來ないのはわたくしの思索方法の特徴である。わたくしは茫漠たる憧憬より來たる空想を以て總べての個人を個々の哲人と潤色して居るのではなくして、的確なる觀察より自然に生ずる公準に依つて、彼等をさうと斷定して居るのである。されば、若し世間に總べての個人を個々の哲人とすることに反對する者があるならば、彼れの反省を求めるために、わたくしが彼れに對つて用ゐるものは次ぎの一句である、『あなたの考へられる通り、(わたくしがこゝで說明して居る意味に於て)總べての個人が個々の哲人でないとしたならば、あなたはどうして、個人として、社會人として、現に彼等の營んで居る生活の樣式を說明することが出來ますか』、と。

『孩兒は一個の哲人として生まる』とヴォルテヤは言つた。人類の多數は終生『無言のミルトン』であり、『無名のクロームウェル』であるに過ぎないことは事實である。然し、彼等にして大詩人の詩想に感激し、大政治家の政策を理會するところがないならば、如何なる大詩人、如何なる大政治家と雖も、決して、この世の中に顯現し得るものではない。つまり、天才や偉人のために環境を準備するものは民衆であるからである。かう考へて來ると、あれほどに凡俗を輕蔑して出來たカアライルの英雄主義にしても、亦、あれほどに常人を卑下して出來たニイチェの超人主義にしても、等しく二大矛盾を含んで居たとせねばならぬ。何故ならば、カアライルの如く、新らしき文化を開拓するのは少數の英雄であると言つても、若し多數の民衆が彼等の計畫の成就に協同しないならば、其れは一つの理想に止まつて、新らしき文化は到底實現される機會は來たらぬであらうし、又、ニイチェの超人と常人との間には如何に絕大なる懸隔があると說いても、若し其の超人の出現の材料となるものは彼れの出現するまで努力し行く常人そのものであらねばならぬからである。この事實は、既に英雄と凡俗と、乃至、超人と常人との間に儼として共通性の存在することを假定して居る。そし

て、この共有性こそ總べての個人の素質をして哲人主義的たらしめ、總べての個人をして（大小の、深淺の、そして、程度の相違はあるが）哲人たらしめて居るのである。苟くも人間としてこの世に生れた者は、誰れ彼れの差別なく、哲人なるが故に、哲人たらざるを得ない故に、わたくし共が現に視るやうな、政治や、道徳や、産業や、科學や、藝術を作り、且つ、有つことが出來るのである。一口に言へば、社會生活を營むことが出來るのである。

二、理　論

一、哲人主義の心理的根據

『汝自づからを超越せよ』とはニイチエが絶えず彼れの同胞に對つて與へた警告であつた。然し、人間は彼れのこの警告を待たずして、おのれ自づからを絶えず超越して居る。人間はおのれ自づからを超越することに依つて、始めて彼れの生活を持續することが出來るのである。詮ずるに、おのれ自づからを超越することは人間に取つて最大なる特徴である。然し、彼れがおのれ自づからを超越することは、ニイチエが空想したやうに、常人が超人の橋梁となるためにではなくして、たゞ、常人として滿足に生活するためである。

こゝに、如何なる事實を指して、わたくしは人間の自己超越と呼んで居るか。わたくしは彼れの生活様式の改造、特に、其れの初期に方つての衝動の合理化を指してさう呼んで居るのである。

人間の生活は衝動を以て始まるが、衝動を以て畢らない。初め、何等の目的をも有たないが、終には、或る目的を有つことになる。そして、此れは盲目なる衝動が、其れの發動に依つて本來おのれに内具する意義に開眼せしめられた結

果である。さきに彼れが理想を有たなかつたと見えたのは、其れが衝動の中に潜在して居たのであつて、今彼れが理想を有つに至つたと見えるのは、其れが衝動の表に顯現したまでのことである。

それぞれ内容と要求とを異にする數多くの衝動を統一することを人間の生活の特徴とすることに異議を挾む者は恐らく一人もあるまい。何故ならば、人間以外の動物の生活に於ても、其れに必要なる本能の數々は統一されて居る。或る意味では、人間の生活に於けるよりも一層よく統一されて居るやうに見える。然し、其れは既定の與料として自然に統一されて居るのであつて、其れが、時々、刻々、正に解決さるべき問題として反省を以て統一されるのは、獨り衝動を其れの要素とする人間の生活に於てだけである。そして、嚴密なる意味での統一とは、反省を通して、實現される統一に限らるべきものであるからである

人間以外の動物が齊しく有たないのに、どうして人間のみが政治や、道德や、藝術や、科學や、乃至、哲學やを有つに至つたか。其れは、彼れの生れ享けた衝動を統一するためである。極言すれば、彼れはそんなものを有たないでも生活出來るのに、贅澤にさういふものを工夫したのではなくして、そんなものを工夫しなければ生活出來ないから、必要に迫られて工夫したのである。モオゼの法律も、ペリクリスの政治も、プレトオの哲學も、ミケエランジエロの彫刻も、シエキスピヤの詩も、ニュウトンやダアウインの自然科學も、悉とく人間が彼れの衝動を統一する工夫の過程の中に波瀾した醍醐に過ぎぬ。さうして見ると、經驗を離れて獨存するといふ意味に於てではなく、其れの刺激に應じて展開するといふ意味に於て、如何なる經驗を閲し、如何なる方法に依つて人間の衝動が統一されるかを究明することは、彼れが生活の中に見出されるあらゆる制度と、計畫と、理想とを理會するに必須なる唯一の鍵として、わたくし共に取つて重要なる仕事であらねばならぬ。

個々の衝動の間を散漫に結び付け、茫漠と其等の活動の範圍を制限するものは遺傳的の、若しくは、生理的の約束より外に何物もない。隨つて、個々の衝動は大體に於て孤立して居る。其等は孤立して居るが故に、發動するに方つては其等の一つ一つはおのれの滿足のために絶對權利を要請する。されば、かゝる狀態の繼續する限り、異なる衝動を其れの成分とする人間の生活は、いつまで經つても、十分なる意味に於て、成立する筈はない。然しながら、わたくし共が現に見る如く、其れが成立して居ることは事實である。そこで、現に生活が成立して居るならば、如何にして其れは可能となつたかといふことが一つの問題となる。

之れが說明の方法の一つとして古代人に依つて捏造されたものがある。其れは隨分無理なものであるが、眞理を目的とせずして教訓だけを目的とする場合には極めて便利であるがために、今日に至つても、猶ほ、人類の多數に依つて襲用されて居る。其れは文化の推移と人智の進化とにつれていろいろの變形を取つて居る、中には、學的形式で修飾されて居るものもあるが、其等を一貫する假定は同一である。其れは一つの行爲を決定するに方つて、各人は不思議に確執と協同との二つのはたらきを體驗するのみならず、統一の方は命令の形を以て現はれ、確執の方は其れへの反抗の形を以て現はれるがために、古代人に依つて此等は二重の作用とされずして、二種の原理とされたのである。或る時は、一方が肉とされ、他の一方が靈とされた、或る時は、一方が嗜慾とされ、他の一方が理性とされた。或る時は、一方が人欲とされ、他の一方が天理とされた。甚だしきに至つては、一方が神の命令とされ、他の一方が人間の性情とされた時もあつた。然し、此等の孰づれにしても、同樣な動機を以て同一の體驗を解釋した結果である。過去に於て結晶した信仰と、其れに學的組織を與へようとした倫理說とは大抵この二元的解釋を無雜作に受け取つて、其れの上に築かれたのであつた。

然し、わたくしがこの種の說明に滿足出來ないのは、どういふ理由で、何の必要あつて、そのやうに絶えず相剋しなければならない二つの原理が善く生きるといふ單一なる目的しか有たぬ人間の生活を構成する要素として植ゑ付けられたかといふことである。この疑問に答へて、その理由は解からないが、たゞ、事實がさうであるから、わたくし共は其れを事實として承認するより外に道はないといふ者があるならば、わたくしは彼れに對つて、更に、この種の解釋の中には、一層滿足出來ない難點のあることを指摘しなければならない。其れは他でもない。一つの行爲を決定するに方つて對立したものが、次の行爲に在つては協同し、新たに對立するものは、さきに協同したものから分派することである。つまり、肉と靈、情慾と理性、人慾と天理、乃至、神の命令と人間の性情等の對立は、判斷作用に於て暫らく作用的に分裂する主辭と賓辭との對立と其の性質を等しくするものであつて、行爲の決定される瞬間に方つてのみ、確執しながら協同するために、暫らく作用的に取る役目に過ぎない。さう解釋して、始めて、わたくし共は人間の生活の進行と、其等の對立との間に實際に見出だされる親密なる關係を會得することが出來るのであるといふことである。

それでは、事實の眞相はどうであらうか。如何にしてこの衝動が人間の生活の機關として有機的にはたらき得ることになつたか。さうはたらくことの可能である根柢はどこにあるか。そして、其れは何であるか。

戀愛は盲目であると言はれて居る。そして、確かに其れに相違ない。然し、盲目であるのは戀愛ばかりではない。畢竟するに、人間の衝動の總べては盲目であるのである。人間は彼れの生れ享けた衝動の實現に興味を有し、其等の滿足に對して價値を感ずる。これは最後の事實であつて、其れに關しては何等の說明をも與へ得らるべきではない。わたくし共の言ひ得ることは人間のさうである理由は何人にしても解からないが、たゞさういふ風に生れ付いて居るといふだけのことである。例へば、人間は何故に醉ふか、歌ふか、舞ふか、何故に醜より美を愛するか、何故に害を避けて樂に

就かうとするか、そして、最後に、（普通の場合に於て）死を嫌つて生を續けようとするか。此等の事に關しては、たゞ、其れは彼れの本然の性の然らしめるところであると言ふだけのことであつて、別に說明の與へられやうは無い。强ひてしようとすれば、生理的の、若しくは、精神的の理由が與へられないことはないが、其れは、既に此等の衝動の價値の肯定し、その價値を高揚することが絕對の善であると假定しての後の理由である。事實この一角よりすれば、ショオペンハウエルが宇宙の存在を盲目意志の發動に歸したのにも多分の眞理は含まれて居た。

個々の衝動の性質に就いて考察すれば、一つとして不合理でないものはないが、其等の總べてを彼れの生活の成分とし、機關として人間が生れ享けて居る以上は、彼れに取つて幸福である道は、（尤も、時代の傾向や、個人の理想に依つて多少の相違はあるが、）大體から言へば、其等の一つ一つに相應な滿足を與へ、其等の孰づれの一つにも不相應な滿足を與へないで、生活全體の利害より其等の總べてを統一することであらねばならぬ。さうする工夫と手續きとをわたくし共は衝動の合理化と呼ぶのである。衝動の中核は、其れがさうであることに對して何等の說明をも與へられないといふ意味に於て、永久に不合理のものとして殘らねばならぬ。性慾とか、食慾とかいふものの根本特質は永久に變はらない。若し此等の變はる時期が來たるとするならば、其れは人間が今日わたくしに依つて理解されて居るのとは全然別種の意味を有つものとなつた曉であらねばならぬ。然し、衝動の末梢、即ち、一つの衝動と他の衝動との接觸し、交渉する部分は無數の樣式と無數の方向とに於て無制限に合理化され得るものであり、又、現に合理化されて居るのである。野蠻人と文化人との間に見出される性慾や、食慾の性質に雲泥の相違ある外觀を呈して居るのは、不合理なる其等の中核の相違より來たつて居るのではない、合理化され得る其等の末梢の相違より來たつて居るのであつて、其れは、主として、野蠻人に在つては、其等の滿足が生活全體の調節より生ずるエコノミイと美感とが闕けて居るが、文化人に在

つては、其等が、十分に、そして、極めて微妙にはたらいて居るからのことである。

或る衝動が其れの對象を求めて、一度外界にある或る一つのものに向つて發動すると、其れは卽ち其の物の固有の性質に逢著し、其れのおのれへの反動に依つて、其の物の意義を理會すると同時に、其の行動の價値を體驗することになる。例へば、孩兒が赤い色を喜び、其れを口にしようとして彼れの手を延ばして火を掴み、赤い色と熱との必然に結び付ついて居るのが火の固有の性質であつたことを理會すると同時に、赤い色を欲するがために火を掴む行動がおのれの幸福に對して如何なる價値を有するかを體驗するやうなものである。赤い色と熱とが火の性質としてそこに必然に結び付いて居ることを理會するのは物理世界を整頓する知識の萌芽である。赤い色を捕へんとして、併せて、熱を捕へる行動がおのれに對して如何なる價値を有つものであるかを評價するのは道德生活を建設する感情の萌芽である。斯くして、衝動が一度發動すると、倏ちにしてそれまで昏々として衝動の中に眠つて居た知識と感情との二つの側面が顯現することになる。さうなつて來ると、これまで無目的に盲動して居た（何故ならばおのれの行動の終局の價値を測量せず、又、さうすることが出來ずしてはたらいて居たのであるから）衝動は有目的に活動する、（何故ならばおのれの行動の價値を豫想してはたらくことになつたから）欲望、若しくは、意思に變形する。欲望、若しくは、意思とは、一方に於ては客觀的事實を整頓する知識の側面を備へ、他の一方に於ては主觀的滿足を評價する感情を具へるに至つた段階にある衝動の謂である。言ひ換へれば、欲望、若しくは意思とは手段を含む目的を有つに至つた衝動の謂である。

こゝにわたくしは價値といふ言葉を使つた。そして、其れは生活全體の利害に對照せしめられて定まるもののやうに說いた。完全なる意味に於て價値と呼ばれ得るものは、さういふものであらねばならぬ。然し、價値がこの種のものにまで發展するには、其の間に或る過程を閱さなければならない。されば、價値を論じて其れの最後の段階に到達するまで

の闘の過程を不問に附しては價値の性質を談じて問題を解くの嫌あるを免れない。そこで、わたしは共等の過程に就いて静しく考察するところがなければならない。

さきに、わたくしは最初に衝動が外界に向つて發動する結果として、共れが慾望、若しくは、意思にまで變形する一例として孩兒が初めて火を捕へる場合を假想した。あの場合に於て赤い色を捕へようとするのは、共れが彼れに取つて一つの價値であるからである。その場合に於ては、他に共の價値を制限するものは一つもないのであるから、共れは絶對の價値である。然し、其の赤い色が火に於て熱と結び付いて居ることが發見された時に、赤い色の價値は絶對のものより相對のものに變更される。この價値の變更は赤い色を捕へようとする衝動の外に在つて、共の行動を生活全體の利害に對照せしめる他の衝動に依つてなされる改價より來たるのである。この事の可能であるのは、孰づれの衝動にしても（たとひ共れの初期に方つては、孤立して居るやうに見えるにしても、もともと、共等の總べては過去に於て、自動的に協同し、生活の機關として役立つて來た本能より變形したものであるといふ極めて單純なる理由よりして、）おのれの欲求の滿足を主張するが、共れがさうするのは生活全體に對して一つの機關として共れの支持と發展とに貢獻するためであるから、同時に、この要求が全體の幸福に取ってどれだけの價値あるものであるかの點に就いて、等しく生活に對してそれぞれ機關たる他の衝動と合議に入る理會と雅量とを有つて居るからである。されば、共の行動の價値が評定され、修正されて、當初のものより別のものとなつても、共れは他の衝動に依つて抑壓されてさうなるのではない、當の衝動を含めて總べての衝動に依つて共れの上に十分なる考慮が費やされ、そして最後に當の衝動はその合議の結果を承認してさうなつたのである。

こゝに、平常酒好きな一人の勞働者があつて、或る日、彼れはその日の賃金を受け取つての歸途、とある酒屋の前に

通りかゝつたと假定する。彼れにして尋常の精神狀態に在る限り、彼れの心の中に起る飲酒の衝動は、平常、彼れの生活に於て結び付けられた彼れの妻子の幸福を欲求する衝動、隨つて、米鹽の供給を氣遣ふ衝動を惹き起すであらう。そして、其等の衝動は飲酒の衝動の要請を議題として合議に入るであらう。この場合に於て、飲酒が遂行されるにしても、若しくは、其れが中止されるにしても、飲酒の衝動が發言權を使行し、其れの價値が討議された事實に關しては些の相違もないのである。俗人は最後の決定が一つの權威を有つがために、其れの發動の箇處を當の衝動の外に求めようとするのであるが、わたくしからすれば、當の衝動がその決定に與つて居ればこそ、その決定が其れに對して一つの權威となり得るのである。若し古來神の命令が總べての權威の淵源であつたとされて居たならば、其れはたゞ人間の欲求の結晶であつたからである。此の世の中に、人間の欲求の埒外に在つて、然かも人間の衝動を支配する權威となるものが一つでもあり得るとは、わたくしはどうしても考へることの出來ない者である。

これまで、わたくしはわたくしの議論を簡明にするがために、專ら衝動を中心として其れの合理化の徑路に就いて述べ來たつたのである。然し、其れを知識の側面と感情の側面とにかけて、其等の合理化に就いて述べても、例へば、其の初め、知覺に含まれた概念がどうして其れより作用的に派出し、終に如何なる樣式を以て其れを支配するに至つたかといふことや、其の初め、渾沌たる一般情操からどうして苦樂感と美感とは作用的に分岐し、其の後、兩者は如何なる關係で互に交錯して來たかといふことに就いて述べても、其の結果は大抵同一であつたであらう。否、衝動の合理化に關するこれまでのわたくしの議論は、其の裏面に於て其れと併行して來て居る知識と感情との合理化を假定し、其等の援助を其れの背景として始めて成り立つ議論なのである。

衝動は、一見したところ、孤立したものである、尠なくとも、孤立する傾向のあるものである。人間に取つて生活と

名付けられ得るほどの生活には、どういふ風にか統一がなければならぬ。然し、生活が衝動を其れの材料として居ることは事實である。そこで、衝動と生活全體との關係を究明することは、古來、人間のあらゆる知的努力の窮極であつた。遠き昔に於て現はれたプレトオの理念說、プロティヌスの派出說の如きは姑らく措いて問はず、近世に至つて現はれたものの中では、ライプニッツの單子論と、カントの綜合判斷論と、ジエムスの觀念互透論とは最も傑出したものであつて、孰づれも事實の眞相の一部を闡明して居るものとわたくしは考へる。俗人の俗見に隨へば、ライプニッツの單子論は形而上學の形を取り、カントの綜合判斷論なるものは認識論の形を取り、ジエムスの觀念互透論は心理學の形を取つて居るのであるが、こゝではそんな相違には拘泥しないで宜しい。わたくしからすれば、此等は、齊しく、衝動が生活の材料となつて、現にわたくし共が見る如く、其れを組織して居るならば、其れと生活全體との關係を如何に理會すべきかを考察しようとしたのである。

叡智の明識の程度には相違はあるが、それぞれ、おのれの叡智の程度に隨つて、他の單子のはたらきを反映する無數の單子に依つて宇宙は成り立つて居ると考へたのはライプニッツであつた。人間の心に先驗的なる其れの特徵に依つて、其れに與へられた材料を綜合することからのみ知識は成り立つ、言ひ換へれば、全體の意義が先づはたらいて居らないならば、決して部分の綜合は成り立つものでないと考へたのはカントであつた。ジエムスに至つては、一つの觀念の內容は其れに先き立つ觀念の內容と、其れに續いて起る觀念の內容とに依つて浸透されて居るのである。それ故に、個々の經驗の性質は普通に受け取られて居るよりも、遙かに錯綜した組織を有つたものであると考へて、物の意義を構成するに與つて其れの『線暈』の重要なることを高調したのであつた。わたくしは此等三氏の所見をそれぞれ其の實質價に於て受け入れる。何故ならば、此等の三氏はそれぞれおのれの取つた觀點に立つて、事實の眞相の一部を闡明して

居ることは、苟くも傳統の窠臼を脱し、學派の注脚を離れて、清新の氣分と眞劍の態度とを以て彼等の所見を檢討し得る者の齊しく認識しなければならぬことであらう。衝動の合理化に關するわたくしの解釋も（箇中の消息は明敏なる讀者の容易に看取し得るところであらうが）眞理として彼等の所見を假定して、始めて學的説明として成立するものなのである。そして、わたくしの哲人主義が、衝動の合理化に關するわたくしの解釋に根柢して居るものであることは言ふまでもないことである。

哲人主義とは衝動の合理化の過程の最後の樣式に與へられた名稱であつて、其れは衝動の合理化の最も複雜なる、最も高貴なる、そして、最も自由にして、同時に、最も莊嚴なるものである。其れは、個人の生活を支配する最上の原理であり、社會人の生活を支配する最上の原理であるのみならず、最上の原理として國際人の生活をも支配しなければならぬものである。政治や道德の運用が其の原理に依つて行はれるのみならず、產業や、科學や、藝術の體系と雖も其の原理の上に立たなければならぬものである。

德川時代に生れたに拘はらず、秀でた一『近世人』であつた賴山陽は『眞故新』と謂つた。尠しく觀點を變へたならば、『眞故大』とも、『眞故玄』とも謂へよう。哲人主義は生活を考察する、批判する、統一する一つの見方として、其れの効用は洪大であり、其れの意義は幽玄であるが、其れは、たゞ、生活の眞實を把持してゐるためである。哲人主義の原理は生活そのものの原理である。哲人主義の原理は其れが現はれる前に數千年の間、否、數萬年の間、人間の生活に依つて表出され、組織されて來たものである。哲人主義はたゞわたくし共が現代に生きるといふ特殊の興味より、素直に其れを考察し、忠實に其れを作圖しただけのことである。

人間の固有の性情より自然にいろいろの問題が生じて來る。如何にして雜多を統一すべきかといふことも其等の一つ

である。如何にして變化しながら繼續を保つべきかといふことも其等の一つである。如何に有限の力を以て無限の欲求を滿たして行くべきかといふことも其等の一つである、總べて此等の問題は、人間の生活そのもののおのれに課したものであるから、人間の生活が持續せらるゝ限り、或る範圍に於て、或る風に解決されて居ることは明らかである。然し其れは多くの場合に於て批判的にでなく、たゞ、素朴的にであつた。其の結果として、解決されない部分は絕えず[illegible]として堆積されて來た。此等の問題を概括して之れが解決に或るヒントを與へようとするのが哲人主義の目的であり、職分である。

衝動の合理化の過程は（其れのプロセスより言へば）代償と（其れの意義より言へば）代表との原理を發見するに及んで、其れの頂點に達したのである。

わたくし共が生活して行く上に於て、時々逢著する特別に困難なる破目をヂレンマと呼ぶ。然し、嚴密に考察するとわたくし共の生活に於てヂレンマである事件と、其れの生ずる場合とは普通に想像されて居るよりも遙かに夥いのであることをわたくし共は知らねばならぬ。成長して豐富な體驗を有ち、自由な計畫を立てる人間にして、同時に、若しくは、相續して並立しない欲望の間の選擇と、其等の一つ一つの實現に關する一つ以上の方便の間の取捨とに心を痛めない者が一人でもあるか。其等の欲望の一つを滿たし、其等の手段の一つを取上げることは、やがて、其れ以外の總べての欲望と、其れ以外の總べての手段との拒否を意味さなければならない。然し、其等の欲望の總べてと其等の手段の總べてとは、彼れに取つて價値があつたればこそ、心象となつて、彼れの念頭に浮んだのではないか。されば、力及ばざるがためとはいへ、一つを殘して、他の總べてを放擲するといふことは彼れに取つて犧牲であらねばならぬ。そして、犧牲の拂はれるところには、必らず一つのヂレンマは橫はるのである。この點からすると、人間の生活は大なる、そして

小なるヂレンマの連續であるといつてもよい。之れに加ふるに、生活の環境も絶えず推移し、生活の理想も絶えず變遷するがために、欲望と、其等を滿たす手段とは、等しく數を增し、其の質を異にして居ることの事實を以てすると、實際に於ける人間の生活は可なりに紛糾して居ることが推察出來る。隨つて、衝動合理化のプロセスの內容は其れの輪廓に關してさきにわくしが叙述したよりも餘程複雜なものであることが推察出來る。わたくし共にして、一旦、こんな事を想起すると、そこに必然に生ずべきヂレンマの重みのために殆ど窒息して了ひさうな感じがしないでも無い。然し、事實として、何人の生活にしても、それほどに逼迫し、窮迫して居らないのはどういふわけであるか。わたくしからすれば、其れは代償と代表との作用がはたらいて居るからである。

カアライルは、あの『サアトル・レサアトス』の中で『永久の否定』の章に次ぐ『永久の肯定』の章に於て、『汝自づからを拒否せよ、汝の一切の要請を拒否せよ』と叫んで、自己否定が萬人に取つて幸福なるべき唯一の道であることを力說して居る。古來、自己を否定することは賢者の擇ぶべき窮竟の生活方針であると說いた者はカアライルの外に澤山ある。然し、人間にはヂレンマを解決する方法として自己を否定する外に何ものをも與へられて居らぬであらうか。『世界の總べての人々は相談し合つて一夜の中に男も女も、老人も小兒も、一人殘らず自殺して了つたらば、これほど彼等に取つて幸福なことはあるまい』と、ジオジ・エリオツトは言つたのであつた。或はさうであらう。然し、彼女と雖も、其れは到底一つの出來ない相談であることを知つて居つたがために、卓越した藝術家となり『ロモラ』や『ミツドル・マアチ』のやうな優秀な小說を書き、新人道主義のチャンピオンたることを務めたのであつた。

生に執著し、生を續けることに最大の興味を有つて居るといふことは、人間に取つて根本の事實である。總べての問題はこの根本事實に對照して解決さるべく、總べての情操と、思想と、行爲との價値はこの根本問題に對照して評價さ

ろべきである。生に執着し、生を續けることに最大の興味を有つて居りながら、自己否定を説くのは一大矛盾である。何故ならば、自己否定は、畢竟するに、生活否定であるからである。總べての正しき覺悟と方針とは自己肯定より始まらねばならぬ。自己肯定とは自己の全體を肯定することである。但し、自己全體を肯定すると言つても、其れは現にわたくし共が棲む世界の構造と、現にわたくし共が有つ人間の性情とを計算の中に入れた上であることを記憶せねばならぬ。若し其等がどうしてもわたくし共の欲望の中の或るものの並立することを許さず、其等の實現の手段の中の或るものの併用を許さぬならば、そして、其等の制限はわたくし共の力で性急に左右することの出來ないものであるならば、わたくし共としては、結局、其等の制限に服從する外に道はない。斯くして、精神的に自己全體を肯定するのと、物質的にさうするのとの間に相違が出來る。『人有不爲也、而後可以有爲』と孟軻の言ひ、『もし右の手なんぢを躓かせば、切りて棄てよ、五體の一つ亡びて、全身ゲヘナに投げ入れられぬは益なり』とキリストの言つたのは確かに精神的に自己の全體を肯定するために物質的に其の一部を否定して居たのである。

『決定は否定である』といふ諺があるが、一層深く考へる時、否定は肯定である、精神的に全體を肯定するために、たゞ、物質的に其れの一部を否定するに過ぎないことをわたくし共は覺るのである。然し、さうすることを消極的のあきらめと感ぜしめず、積極的の主張と感ぜしめるのは代償と代表との作用である。嘗てロシアの一少女バッシカトセッフは『わたくしは總べてのものを知りたいと欲ふ。總べてのものになりたいと欲ふ。』と叫んだのであるが、此れは恐らく單に衝動としては多くの人の心に宿る祈願であらう。然し、多くの場合に於て、詩人たることと政治家たることとは兩立せず、又、哲學者たるの資格と實業家たるの資格とは兼有され得ない。この事實に拘はらず、一旦、此等の職業の孰づれの一つに於てでも身を立てた者は或は、立てようと志した者は、其れの中に一つの樂地を見出して優々自適し、他の

職業を美むの念慮も餘裕も有たないことになるのは、代價と代表との作用である。

わたくし共の價値を置く一つ以上の欲求がはたらく時、其れを實現しようとしてわたくし共の價値を置く一つ以上の手段が思ひ付かれる時、そこには必然に其等の間に爭鬪が起らねばならぬ。然し、其等はもともと協調する性質を有つたものであるから、終には或る形に於ける一致に落ち着くものである。其の場合に、其等の中の一つは取られて他の總べてが捨てられると、其等の總べてから夥しづゝ取られたものの調和に依つて、全然新らしいものが作られると、乃至、其等の總べてが一切捨てられて了ふとの間には物質的には非常の相違があるが、精神的には相違はないのであつて、此等の孰づれに於ても、最初、其等の各の中に不完全に潛在して居た自己は、このプロツセスを經て完全に統一されて顯現するのである。さればいづれの結果に歸着するにしても、其等の總べては其の最後の結果の中に十分にはたらいて居るのである。わたくし共は、プロツセスよりこの事實を觀察して其れを代價と呼び、意義よりこの事實を評價して其れを代表と呼ぶのである。人間は代價と代表との作用に依つて一層賢くなつて自己全體を肯定するのである。

代價と代表とが合理生活の精髓を作して居ることに一點の疑もない。されば、其れの實例をわたくし共の日常生活より擧げようとすれば、わたくしは餘りに其等の多きに苦しまざるを得ない。矛盾する知覺よりどうして統一を有つ實在が形造られるか、矛盾する欲求よりどうして統一を有つ理想が形造られるか、矛盾する假想よりどうして美の對象が形造られるか、此等は悉とく代價と代表との作用に依つて、其等の知覺と、欲求と、假想との上に選擇と醇化とが施されたためではないか。

事實さうであるとすると、わたくしはこれまで人間の生活に關して考察し、反省した人々が、代價と代表との作用をあのやうに無視して、無視しないまでも、あのやうに重要視しないで、いろいろと迂遠なる、或は、低迷せる說明を試

みたのを不思議とする者である。

二、哲人主義の社會的發展

この頃、ジエエ・ダブリユウ・スウエインといふ史學者があつて、『歷史とは何ぞや』といふ問題を提出し、畢竟するに其れは各歷史家が過去の事實を假り、其れの叙述に托して信仰に關し、政治に關して自分の確信と主張とを公表したものに過ぎないと斷じた。此れは大した創見とさるべきほどのものではないが、確かに多分の眞理の含まれて居ることを否むわけに行かぬ。

兎に角、其れの材料を過去の出來事に取り、其れの意義を發表することを名目として居る歷史にして既にさうである。其れの材料を人間の性情一般に取り、其れの意義を發見することを其れの唯一の職分と標榜して居る哲學にして、更にさうであるのは自然であり、當然である。この事由からして、ジエムスも哲學を割義して『氣分の學問』としたのであつた。然し、或る哲學者が自分の確信と主張とを眞理の體現として公表し、彼れの同時人が其れを、又、眞理の體現として受け入れるならば、其れは適切に當時に生きる總べての人々の生活を說明し、指導して居るためであると觀ねばならぬから、若しさういふものがある場合には、(哲學の範圍に限り)斯かる哲學の外に、上に、第一義に於ける普遍性を有つたものが一つでもあり得るとはどうしても考へられない。されば、これまで、一時代毎にさういふ意義を有つた哲學が出現し、其等は、生活の連綿に並行して、其れの指標價値として相續して來たものとすると、生活が全然過去に反對して其れを否定することが出來ないと同じ道理で、新らしく興る哲學は過去の哲學に反對して其れを全然否定することは出來ない筈である。前者が正しきものとして爲し得る事は、後者を改釋し、おのれの系統の一部として其れを抱擁す

るだけである。さうする結果は、嚴密なる、そして、充實したる意味に於ける新しき哲學の構成であらねばならぬ。この點よりすると、わたくしはヘエグルの Antithesis を批評して、其れは Heterothesis でなければならぬと言つたリツケルトの意見に贊成する者である。さうすると、十七世紀十八世紀に亙つて、當時の生活の要求に應ずるがために工夫された個人主義が今日の生活の要求よりすれば、其れが如何に不完全なものであり、不妥當なものであるにしても、全然虚僞のものとして其れを否定し、現代の哲學のために反個人主義としての集團主義、即ち、個人の動力と創意とを沒却した集團主義を唱道する所爲にわたくしは雷同することの出來ぬ者である。十七世紀、十八世紀に亙つて勃興し、倏ちにして、歐洲の天地を風靡した個人主義は其の實、其れに先き立つこと三百年の昔、文藝復興期に於て人間の永遠の解放のために彼れの心に植え付られたあの種子の自然の成熟を遂げたのに過ぎない。成る程、其れはわたくし共が今日有つて居る理會と聰明とからすれば、當時の行き掛り上、隨分偏頗なものであり、不徹底なものでもあつたに相違ない。然し、大綱としては、人間は是非一度は經過しなければならぬ必須なる段階であり、修練であつたのである。人間はあの個人主義の方法に依らずして、どうして實際におのれの生活の尊貴に關する自覺の發展と、おのれの力量の權威に關する自信の增大とを試驗し、證據立てることが出來たであらうか。されば、わたくし共は個人主義の缺陷に就いて反省するのはよい。然し其れの意義を理會し、其れの功績を收めんことを一刻も忘れてはならない。

わたくしは、わたくしの歷史觀と哲學見とよりして、人一倍にあの個人主義の永遠價値を認める者である。されば、わたくしがあの個人主義の缺陷を訂正する方法は個人の動力と創意とを沒却する集團を唱道することではなくして、社會的に、若くは協同的に個人の動力と創意とを高揚することを目的とする徹底個人主義を唱道することである。そして、わたくしの徹底個人主義はさきにわたくしが略說した個人の生活原理たる代償と代表との作用の社會的に、若しく

は、協同的にはたらいて居る事實の上に立脚するものである。

ロツクが、「人間の心の中には感覺に依つて取り入れられたものの外に何物もない」と言つたのに對して、ライプニツツは、若し其れが智力の中に無いとしたならば、」と言つて、彼れの唯理説の立場よりロツクの感覺論を訂正しようとしたのは有名な話である。然し、わたくしは感覺論者でもなく、又、唯理説者でもない。わたくしは衝動の合理化といふ單一なプロツセスを機能的に考察することに依つて、そこに人間の生活の一切の原理を見出だそうとする作用主義即ち、哲人主義を取る者である。されば其れの説明が個人の生活より社會人の生活に移されるに方つて、わたくしは新らしく何物をも附け加へる必要を感じない。わたくしからすれば、個人の生活は蘊蓄的に社會人の生活であり、社會人の生活は開展的に個人の生活であるに過ぎない。原理としては個人の生活に於て含まれないものは、社會人の生活に於ても見出だされよう筈はないのである。然し、樣式に於ては、個人の生活と社會人の生活とは全然同一であるとは言へぬ。そして、兩者をして最も力強く異ならしむるものは、個人の生活に在つては衝動の合理化は單數の意思を實現するためにはたらくのであるが社會人の生活に在つては、衝動の合理化は複數の意志の協同のためにはたらくことである。

人間は『社交の動物である』と道破したアリストオトルの言葉も今は一つの平凡なる通智となつた。然し、其れは如何に平凡となつても、やはり、甚深の通理たるを失はない。人間以外の動物も群居を愛するが、其れに加へて、嚴密なる意味に於て社交を必要とするは、獨り人間だけである。人間は社會生活、若しくは、協同生活を俟つて始めて完成され得る性情を生れ享けて居るのである。社會生活、若しくは、協同生活を必要とすると言へば、其れは直ちに人間の生活の二大特徴となつて居るものが何であるかを暗示する。其れは一、異なる個人の間に存在する叡智の相違と、二、彼等の間に才能の適應性の相違とである。總べての個人は悉とく此等の特徴に依つて影響されて居るが故に、集團生活の

エコノミイから、彼等の間に職業の融通が行はれ、統卒と信頼の依立が行はれることになる。此等の孰づれもは、既にわたくし共が個人の生活に於て其れの原理として見出だした代償と代表との作用を其れの原理として可能されて居るのであることは言ふまでもない。

若し人間にして獨居の動物であつたとしたならば、各個人はてんでに孤立して彼れの生活を持續し、彼れの受け繼いだ文化を子孫に傳へるに必要なる一切の仕事をおのれの手一つでなさなければならなかつたであろう。衣食住に關する事は無論のこと、彼れの子供を現在の文化に入門させることさへも彼れの手一つで爲さなければならなかつたであらう。然し、彼れは、事實、社交の動物であるがために、彼れの才能の適應性に隨つて、人間の生活一般に必要なる或る一つの仕事を擇んで其れに執掌し、其れに依つて彼れの屬する集團に事へると同時に、同一集團に屬する他の個人が同じ理屈に依つて製作した、若しくは、修練した成果の彼等自づからに取つて過剩となつた部分を彼れの生活の要求に應じて受け取つて、彼れ及び彼れの子孫のために其等の生活の持續を圖つて居るのである。されば、俗に有無の交換と呼ばれて居るものは、其の實、才能の適應性の交換であるのである。斯くして、一つの集團に屬する總べての個人は、それぞれおのれの才能の適應性に隨つて一つの專門を擇び、其れに執掌することに依つてその集團全體のために最も優れた文化を建設し、最も巧みな方法で其れを後世に傳へて居るのである。斯くして、各個人は彼れの屬する集團の欲求のために代償としてはたらき、其れの成績はその集團の能力を代表して居るのである。

一つの集團に屬する各個人の間に、叡智の相違のあるのは、彼等の間に才能の適應性の相違のあると等しき程度に顯著な事實である。わたくし共は教育や制度の改善に依つて、現に各個人間に見出だされる其れの相違を次第に減縮することに努めて行かなければならぬ。然し、たとひ永久に其の努力を續けるにしても、わたくし共にして神秘な自發變化

の傾向を生物界と人間界とより全然除き去ることが出來ないならば、どんなに教育や制度を改善しても、各個人間に見出だされる叡智の相違を全然除き去ることは永遠に不可能であらうと思はれる。そして、其れが個人間に專制と誤解とを齎らす程度に於ては好ましからざるものであるが、理會と信頼とを增す程度に於ては望ましきものであるならば、何故に世人の或る者は無下にこの事實に眼を閉ぢようとするか。眼を閉ぢることをデモクラシイの時代に生きる者の徳義の一つであると信ぜんとするか。わたくしは其の理由を了解するに苦しむ者である。

天才を天才と評價して、凡人をして一歩でも其れに近か付かしめることは、天才を凡人と評價して、凡人をしていつまでも凡人たるに安んぜしめるよりも遙かに合理である。意義ある平等化は手段としては兎に角、目的としては高きものより削り取つて低きものに一致させる種のものではなくして、低きものを築き上げて高きものに一致させることであらねばならぬ。

各個人間に見出だされる叡智の相違の根柢は何であるか。窮極、其れは人間の子の出產に伴なふ自發變化の傾向に歸する外はない。然し、其れが實際生活に於て如何にはたらいて居るかに就いては、多少の說明の施され得ないことはない。人間の置かれた（物質的の、及び精神的の）環境は絕えず無限に變はつて居る。隨つて、其れに適應するためには、各個人の生活方針も無限に變はらなければならない。然し、現にそこに生活を續けて居る者は既に彼等の過去に於て形造られた習慣や、制度や、言語や、概念に依つて制限されて、無限に變はつて行くことが出來ないから、彼等の生活方針の樣式と方向とを轉換するために彼等の子供として新たに此の世に生れ出づる者は、自發變化に依つて彼等の兩親よりも一層自由に、一層大膽に其れを轉換する能力が與へられ居る筈である。然し其等の子供の總べてはこの點に關して一樣に生產されて居らぬ。其等の中で空漠に未來に憧憬して彼等の勢力を渙散して了ふ極めて少數者と、姑息に過去に

執著して彼等の勢力を痲痺さして了ふ少數者とを除いて、正しき知覺と正しき情操とを以て現在に適應して生きて行かうとする最大多數の中にも、わたくし共は大別して二種の型を見出だすのである。其等の一つは新らしき生活方針を創造する型であつて、他の一つは、一旦其れが創造された時、始めて其れの意義を理會し、其れの價値を鑑賞して、彼等を尊信し、彼等に服從して行く型である。『必要は發明の母である』といふ見解と、『發明は必要の母である』といふ見解とは、どちらも眞理の半面を把持して居るものであるとするならば、前の見解は天才の仕事に方向を與へる民衆の欲求が新らしき生活方針の材料を供給する事實を指して居るのであり、後の見解は民衆の欲求に最後の統一を與へる天才の仕事が新らしき生活方針の樣式を決定する事實を指して居るのである。

民衆も天才も彼等の置かれた環境に於て、彼等の生活の中に生じ來たつた矛盾を意識し、新らしき生活方針に依つて其れを安貼しようと心掛けて居ることに相違はない。たゞ、彼等の間に睿智の相違のあるがために、民衆はそれの氣運を發酵するに止まり、其れを醇化し、統一するのは天才の活動に俟たなければならないのである。かういふわけであるから、新らしき時代を作るのは民衆であるか、天才であるかの問題は、其の問題の意味の取りやうに依つてどちらとも答へることが出來る。其れの氣運の方から言へば、確かに其れは民衆である。其れの大成の方から言へば、確かに其れは天才である。民衆と天才との間の關係は政治や、道德や、產業に於て無論この通りであるが、兩者の關係が絕無でないまでも、疏遠であると普通理會されて居る藝術や、科學や、哲學に於てもこの通りでなければならない。狹義に於て創造する者は天才であるが、始めに其れに刺激を與へ、終りに其れに裏書きと支持とを與へる者は民衆である。藝術の創造と鑑賞とは其の性質を同じくするものである。たゞ、鑑賞は創造に比して其の感激が一層不自由なだけであると謂はれて居る。其れはさうであらう。然しながら、如何なる創造も其れの價値の確立のためには、其れの共鳴する鑑賞の保障が

なければならないことは明瞭である。

一つの新らしき運動を形造ることに關して、民衆が如何なる貢獻を爲し、天才が如何なる貢獻を爲すかを、最も適切に物語るのはキリスト敎の創立者と、其れの信仰者との關係である。

キリスト敎の骨子を爲して居るものは、其れの道德ではなくして其れの敎理であるとすると、キリスト敎の創立者はキリストではなくして、使徒ポオロである。謂ふところの『山上の說敎』なるものは如何に深遠な心法を說いたものにしても、あれでは、當時のギリシヤやロオマを精神的に征服することは出來なかつた。ギリシヤ人やロオマ人の心が翕然として其れに赴いたのは、使徒ポオロに依つてユダヤ人の傳說を勝手に剪裁して工夫されて出來た窮極の神話であつた。

彼等の祖國の盛時に方つては、個人の幸福、若しくは、完成と國家の保護、若しくは感化とは到底離して考へることの出來ないものであつた。道德にしても、信仰にしても、國家と個人との關係を外にして成り立つものではなかつた。然し、國家がだんだんに其の勢力と存在とを失つて行つた。彼等は外に向つて彼等の情操や行爲の支持と標準とを求めることが出來なくなつた結果、彼等は其れを內に對つて求めざるを得なくなつた。然し、彼等が其れを內に對つて求めた時に、そこに彼等は何物を見出だし得たか。彼等が見出だし得たものは、たゞ、冷靜なる、若しくは、冷酷なる理智の權化たるストアの神だけであつた。然し、そんな神が生氣潑剌たる國家生活の代用を爲し得るものではない。彼等はこの荒凉たる大宇宙の中に個々寂しく取り殘された孤獨者であつた。彼等の心の中に再び生に對する興味を蘇らすものは、自然の攝理者たる神ではなくして、超自然の實行者たる神でなければならぬ。この時に方つて、使徒ポオロは彼等に對つて、人間の罪の贖のために、其の獨り子を地上に降し給へる無限の慈悲ある神のあることを巧みに、そして、熱心に宣傳したのであつた。其の神は確かに彼等に『知られざる神』であつたのである。然し知られざる神なるがため

に、彼等の絶望した心に取つては無上に有難く、尊きものであつたのである。

さうすると、民衆の欲求の暗示するところがなかつたならば、使徒ポロオの神話も出で來たらなかつたであらう。然し、其れと同時に、使徒ポオロが其れを把握し、醇化して、一つの教理の形に於て彼等に與へなかつたならば、彼等は永久に彼等の欲求を滿たす對象に逢著することが出來なかつたであらう。

この世の中に於て、如何に偉大であるとも、獨力で新らしき時代を作り出すほど偉大な者は一人もないが、亦、如何に微小であるとも、其れに對つて何物をも貢献しない程微小な者は一人もない。されば、一つの集團の文化の持續と開拓とは其れに屬する總べての人々の功績に歸せねばならぬ。然し、（わたくしが説明して來たやうに、）彼等の間に容智の相違があり、容智の相違に從つて役目の相違がある以上は、わたくし共にして其等を無視し、或は強いて無視しようとするのは不公正であり、不合理である。『各人を一と算へ、一以上にも、一以下にも算へるな』といふことは、ロオマ法の大精神であつたが、此れは、たゞ法律の上に於ける公正の觀念である。決して容智の上に於ける公正の觀念ではない。容智に關しては、其れの相違に應じて、或は、ある人を一以上に算へ、或は、ある人を一以下に算へて、始めて社會人としての各個人に對して公正となるのである。

『各人を一つの目的として取り扱へ、決して手段として取り扱ふな』とカントは教へた。然し、各個人を一つの目的として取り扱ふといふ裏面に於ては、各人は交互に、他人に對して自づから手段とならなければならぬといふことを意味する。つまり、各人は、總べて目的であり、同時に、手段でなければならぬといふことになる。キリストは、自分等の中で誰れが最も大なる者であるかと彼れの弟子たちに問はれた時に、彼れは、「汝等の中で最も善く他人に事へる者が其れである」と答へたのであつた。然し、多くの人々の欲求を醇化して、彼等のために其等を一つの意思となし、多く

の人々の行動を統一して、彼等のために其等を一つの行為となし得るものにして、始めて、善く他人に事へることが出來るのである。**して見ると、善く他人に事へて居る者は、事へることの出來る者は、叡知に於て劣れる者よりも、優れる者であらねばならぬ。**

個人の契約に依つて、初めて國家は成立したのであると強說した『社會契約』の著者ルウソオでさへも、國家の政治方針となるものは、總數意思ではなくして、一般意思であるといふ思想を懷抱して居たのであつた。然し、一般意思の形造られるのには、そこにはたらく哲人主義の代償と代表との作用に依つて、叡智の階統が總數意思の上にだんだんに醇化と統一との工夫を施して形造られるより外に道はないのである。

さきにわたくしは社會生活、若しくは、協同生活の可能であるためには、其れを組織する各個人の間に才能の適應性の相違からと、叡智の相違からとの二重の代償と代表との作用がはたらかねばならぬと提言し、そしてこれまで別々に其等の一つ、一つに就いて考察して來た。然し、わたくしがさうしたのは主として便宜のためであつた。實際の生活に於ては、此等は二つの體系として相並んではたらいて居るのではない。交錯し、相依して一つのものとしてはたらいて居るのである。さうすると、實際生活に於て、代償と、代表との作用は如何なる最後の様式を取つて居るかをわたくしは拗しく諦察しなければならない。

一つの集團に屬する總べての個人は、人間として大抵同じやうな數多くの欲求を有ち其等は大抵同じやうな風に統一されねばならぬ。一層正確に言へば、統一されるやうに變更され、分化されて行かねばならぬ。此の事が、此の一事が總べての個人に課せられた唯一の問題である。彼等が社會生活に入り、協同生活を營むに方つても、彼等に取つて此れを外にして別に問題のありやう筈はない。たゞ、或る者は才能の適應性の相違と、叡智の相違とに含まれた約束に依つ

て二重に制限されるが故に、或は、其等に依つて二重に便宜が與へられるが故に、この問題の解決が其等の事實の認識と利用とから傳彩されるわけである。

總べての個人は代償と代表との作用からそれぞれおのれの才能の適應性に随つて、或る一つの職業に擇ぶことに依つておのれの才能の發展を遂ぐると同時に、彼れに固有する他の欲求を滿たし、又、既におのれの才能の適應性に随つて同一の職業を擇んだ彼等は、代償と代表との作用からおのれの叡智に随つて、誰れが指導者となり、誰れが信頼者となるかを定めるのである。否、自然に定まるのである。さうすると、社會生活、若しくは、協同生活は(理想的に解釋し抽象的に叙述すれば)それぞれ異なる中心點を有ち、異なる階統を形造りながら、互に重なり合ひ、感化し合ふ多くの制度的の(例へば、政治や、軍備に關するものの如き)及び精神的の(例へば、産業や、藝術や、學問に關するものの如き)組合に異なる資格を以て屬する人々に依つて組織されて居るのである。こゝに、わたくしは何故に其等に屬する異なる人々に依つてと言はないで、故らに、異なる資格を以て其等に屬する人々と言ふか。其れは、どんな個人にしても、人間として多くの欲求を有つ以上は、たゞ一つの組合に屬すといふ者は殆ど皆無であつて、彼れは彼れの主なる才能に随つて、一つ、二つの組合に屬しながら、他の欲求に依つて、別に四つも五つもの組合に屬して居るからである。或る人は彼れの才能の適應性に随つて、主として産業の組合に屬して居るが、同時に、彼れは市民として政治の組合にも屬し、信者として宗教の組合にも屬し、鑑賞家として藝術の組合にも屬するやうなものである。此れと殆ど同じ事の彼等の異なる資格の關係を適宜に變更して、藝術家に就いても、學者に就いても、其の他、あらゆる職業に從事する人々に就いても、言はれ得ることは容易に推測出來る。此等の組合は生活の根本欲求を滿たす機關として成り立つたものであるから、悉とく同格の價値を以つて協同すべき筈であり、そして、事實、だんだんさうなつて來て居る。然し、過

去に於ては、たとひ實質に於ては名目に於てほどではなかつたとはいへ、政治上宗僧とか他のものを超えて絶大の威力を振つて居たのであるが、其れはたゞ、當時の文化の特徵が然らしめたのであつて、決して、其れを以て永久の傾向と見做すことは出來ない。

又、わたくしは、此等の組合は同格の價値を以て協同すべき筈である。そして、事實、さうなつて來て居ると言つたが、こゝに同格の價値といふことは、機能的の意味に於て理會さるべきであつて、算術的の意味で理解さるべきではない。何故ならば、此等の組合の間にも、代償と代表との作用は自然にはたらくのであるから、如何なる國民にしても、政治の組合、藝術の組合、若しくは、産業の組合の孰づれの一つを全然缺ひては個人的にも、社會的にも、生存することは出來ないが、或る程度にまでは、或る組合のはたらきが非常に、若しくは、不自然に發達して他の組合のはたらきを壓迫し、其れが其の國の國民生活を統率する一般基調となることがある。英國の如く政治的に發達した國民は、政治のはたらきの中に藝術のはたらきと學問のはたらきとを吸收し、米國の如く産業的に發達した國民は、産業のはたらきの中に藝術のはたらきと政治のはたらきとを吸收し、フランスの如く藝術的に發達した國民は藝術のはたらきの中に政治のはたらきと産業のはたらきとを吸收して居るやうなものである。さうして、さうあることは或る限度に於て、此等の國の國民性の强みとなることは勿論であるが、その限度を逸しては往々其れの弱みとなるものである。

事實に面してわたくしは此等の二つの釋明をして置かねばならぬが、之れを要するに、一つの集團の内に在つて、其れの生活機關としてはたらく總べての異なる職業は、其等に從事する人々の容智の多寡に依つてそれぞれ主權の發動を生ずる階統體を形造り、其等が同格の價値を以て互に牽制し協同して居ることは、大體に於て社會生活の一大特徵であるとせねばならぬ。（次號完結）

整腸消化劑ビオフェルミン

ビオフェルミンは本邦嚆矢の糖化菌含有乳酸菌製劑にして整腸と消化の兩作用を兼有し、諸般の腸疾患の治療並豫防に對し賞用せらる。

ビオフェルミンに對する知名醫家の實驗報告二百有餘に達し殊に小兒の消化不良、綠便、下痢に應用し卓効あり。

粉末及錠劑あり、全國有名藥店に販賣す

製造元 神戸市二番町 株式會社神戸衛生實驗所

發賣元 武田長兵衛商店 大阪市東區道修町

神經衰弱 ヒステリー 不眠症 特効 カルモチン

カルモチン錠 二十錠入(金九拾錢) 百錠入(金貳圓四拾錢)

安意に且つ容易に服用し得らるる鎭靜催眠劑にして神經衰弱、ヒステリー、神經性不眠症等に應用し確實に奏効す。

醫學博士山田鐵藏先生、醫學博士佐多芳久先生、醫學博士矢尾板四郎先生、醫學博士荒井恒雄先生の實驗報告集あり、郵呈す。

◇全國有名藥店に販賣す

發賣元 武田長兵衛商店 大阪市東區道修町

關東代理店 小西新兵衛商店 東京市日本橋區本町

都市の叛逆

澤田謙

都市篇

一、江戸の文化

ドン・ロドリゴ・デ・ビベーロは、慶長のころ江戸の街を見てその見聞記を次のやうに記るしてゐる。

『其施政はローマ人の市政と競ふべく、注目すべきこと亦尠からず。市街は互に優劣あることなく、皆一様に幅廣く又長くして、直なること西班牙の市街に勝れり、家は木造にして、少數は二階建なり。而して外觀に於ては、我家屋優れたるが如くなれども、内部の美なるは、彼遙に勝れり。又道路の淸潔なること、何人も之を踏まざるならんと思はるゝ程なり。

『市街は皆門を有し、人と職とによりて區分あり。一街には大工のみ住し、他職のものは一人も雜居せず、他街には靴工あり、鐵工あり、商家あり。略言すれば、想像し得べき各種の職業の中には、歐洲には見慣れざるものも尠からざるが、何れも一區に分居せり。

『商賈も亦同じく、銀商は一區を專有し、金商、絹商、其他皆之に準じ、他商の同街に雜居するもの嘗てあるなし、鶉、雁、鴨、鶴等の獵鳥、家鷄、其他諸鳥を賣る爲め、特別の場所あり、他街にては家兎、野兎、猪、鹿等の獵獸を販き、其數亦甚だ多し。

『又魚市場といふ一區あり。奇異なる爲め、予は特に其所に誘はれたるが、同所には川と海とに産する諸種の魚の、鮮しきと干したると、鹽したるとあり。又數個の大にして水滿ちたる釜に、生魚數多あり。欲するものあるを待ち之を賣るべし。而して魚を賣るもの多きが故に、市街に出で時により又其必要に應じて之を販賣す

『青物並に果物も、亦各其區あり。而して諸品其種類多く、分量大なるのみならず、又淸潔に陳列しあるを以て、買ふものの嗜慾を增加す。

『又旅店相並び、其間に他家を挾まざる數街あり。馬の賃貸をなす街あり。旅人は二レグア毎に馬を更ふる習慣なるが、馬の數甚だ多きが故に、旅人の到着せるとき出で丶其馬のよく步むを示し、之を勸むるもの多くして、其撰擇に迷ふことあり。

『醜業婦の區は常に町外れにあり。武士並に諸侯は他人民と異りたる區に住み、普通人並に同格ならざるものは、彼等と雜居せず。彼等の居は門扉の上部に定紋を畫き、之に金飾を施せるによりて識るべく、之が爲めには非常なる金額を費し、中には二萬ドカド以上の價あるものあり。』

二、東京の都市計畫

これは慶長のころの話である。それから二百五十年經つた。明治維新とともに、江戸の街は東京市とかはつた。いま人口二百四十萬の大都市として『錢一つ賣れぬ日はなき』江戸の賑はひも、その雜沓には遠く及ばぬ繁榮である。『江戸のめぐりは此の如し。其内の大名町、商人の市の棚、諸職人の家々、小路々々町々、たてよこの橋までも、にぎやかさ。人の往來、黑土を蹴上げて、よそ見をして通るものはつきたをされ、ふみころばされ、口をあきてゐるものは、息のつまるほど沙ほこりをふきいれらる、白きものは鼠色になり、赤きものは紫になるほど沙ほこりは立ちあがる』と、東海道名所記の驚ろきしも、幸にして昔の面影そのまゝである。

われ等はドン・ロドリゴ・デ・ビベーロの記事を讀んで、江戸の街の賑はひを偲ぶといふよりも、むしろ紛糾せる現代東京市の都市計劃を顧みて、古人に對する羞恥の情に堪えないではないか。武家地、町地、寺社地の區劃整然として、三奉行の指さすがまゝに、自治體の本義を體明してゐた江戸政の方が、いかに優れたらずやと感ずるものも、おそらくは少くあるまい。

日本の現代都市は、なにをもつて古人に誇らんとするのであるか。

押しこまれたとき膝が出つてゐたら、降りるまでそれを延ばす機會を與へられぬ市街電車がある。しかしこれを以つて誇とする勇氣は、おそらくわれ等の所有せぬところである。そのほかに、夕になれば急に暗くなる電燈があり、可燃性瓦斯の代りに空氣を送つて、メートルをグル〳〵廻はす瓦斯があり、貸長屋のやうな煉瓦建が若干ある。しかしこれはみな西洋からの間に合はせの借りものに過ぎない。そのほかに何があるか。

都市で一番問題になるのは道路である。昨年アメリカから市政學の權威ベアード博士が來た。東洋一の大停車場たる東京驛に一行が着いたとき、無邪氣な令息は、敷きつめた小砂利をい

ちりながら訊ねた。

『こゝは濱邊ですか？』

都市の道路といへば、砥石のやうに磨きをかけたものと思つてゐるアメリカの少年に、砂利の敷きつぱなしが濱邊と感ぜられるのに不思議はないが、この質問に赤面しないものは、現代の都市人たる資格はない。ベアード博士の萬言の批評よりも、この少年の質問こそ、われ等の肺腑をつくではないか。

郊外電車を利用する人は、毎朝長靴ばきの多くの青年が、どやどやと乘りこんでくるのに會ふであらう。これは早朝を郊外に乘馬する紳士ではない。泥田のやうな道をふみ渡るために、長靴はなによりも生活必要品なのである。『見しは今、江戸町の道雨少しふりぬれば、どろふかうして往來安からず、去程に足駄のはの高さを皆人このめり』（慶長見聞集）とは、東京市の道路評として適切である。

『日本の道路には魚が棲んでゐる、うですね』といふ外人は、いやな皮肉家である。口の惡い外國人は、日本の都市には『道路』といふものはない、たゞ『泥路』があるのみだと言ふ。むしろ私は言ひたい。日本には『都市』はない、たゞ人間と建物との集合があるのみだと。

三、都市の發達

日本に都市なしと私は言ふ。しからば都市とは何ぞや。

都市とは、時代の支配する社會的勢力が、大衆の人口を一地點に集中して、そこにその時代の文明の粹を發揚せるものを言ふ、二三の人の集合によつて都市の成立せざる如く、徒らなる人口の集中は、それに文化建設を伴はざる限り、もつて都市と稱することを得ない。

文明とは人民の波である。その波の頂上に立つのが都市である。從つて都市は、その古今と東西とを問はず、つねに社會の中心的地位を占據する。そしてすべての文明の特質は、高度に發達せる都市生活と一致する。

東洋古代の都市は、何れも『王と神の城』であつた。城砦と宮廷と拜殿とが、つねに都市の心臟をなす。テーベ、メンフィス、バビロン、ニネベ、スザ、エクバタナ。これ王者の大庭園である。ニネベの都は、三日路の長さを有したりといひ、（舊約ヨハネ傳第三章）バビロンは周圍四百八十シュタディウムに達する城壁に圍まれたりと傳へらる（ヘロドタス）幽蒼な森の彼方に隱見する數十方哩の宮殿樓閣は、ギリシア人の驚ろきであつた。項羽兵を引いて咸陽を屠るや、秦の宮室に火を放つ、三月

絶えずと。蓋し壯觀なるべーである。

アクロポリスを中心とするアテネの都も、七つの丘に立ちならぶローマの都も、征服者の城砦である。そして當時の文明とは、アテネとローマの文明を除いて他にない。アテネ二萬の自由民が、日々閑雅なる生活は、もとより十萬の奴隷の勞役の結果であり、デロス同盟の被征服諸邦よりの、朝貢の享樂に過ぎなかつた。ローマ市民の逸樂も、地中海岸いたるところに占在せる、農商工の殖民地の汗の價であつた。そはもとより否まれぬ。しかしそれと同時に、アテネとローマとが、文明の都たりしことも、否定することはできない。

ローマの世界は、蠻人の鐵蹄に蹂躪された。歐洲の文明は、わづかに侯伯の城門と僧正の庵室に、餘命を保つた。そして人民安堵の地も、その周圍に限定され、從つて中世の都市は、諸侯の劍と僧侶の十字架の下にのみ發達したのである。

中世の都市は、手工業の發達につれて、ギルドの完成となり商業の隆盛とともに、いはゆる自由市を發生せしめて、漸くにして近代的都市の素地をつくつたのであるが、その一種の軍事市、政治市たりし面目に至つては、これを蔽ふに由がない。

およそ社會力は人口を吸收し、人口の密集は文化建設を發生せしめる。都市とは人口集中と、文化建設との結合體である。

青丹よし奈良の都は荒れはてゝ、いまは鹿の啼く野に秋情をそゝり、星月夜鎌倉の府は廢れて、紅塵碧眼の遊樂場と化してしまつたが、なほ往時の面影を偲ぶには足る。人口の集中するところ、文化の建設なからざるべからず。

四、現代都市の特質

現代都市は、産業革命とともに生れた。その商工都市たる點において、軍事市政治市たる古代中世の都市に對し、著るしい特色をなす。從つて現代の都市は、單なる消費體たるに止まらずして、同時にまた偉大なる生産體である。

資本主義文明は手工業を撲滅して大工業を建設した。すべての變化はこれに胚胎する。都市の親方と徒弟は衰微して、資本家と勞働者がこれに代つた。いま都市の人口の大部分は、この二大分野にわかれる。

中世の都市は武力の支配する王國であつた。しかるに近世のデモクラシーは、武力の支配を否定した。かくして社會の重心は、政治を去つて經濟に移る。わが年若き『産業』は、このとき立つて、諸侯の抛棄せる社會權を自らのために相續したのである。そして危ふく地方農民に移らんとせる社會權を、都市のためにこ分手したのである。

現代の都市は『産業』の建設せる都市である。産業が社會を掌握するとともに、現代の都市は發達した。そして産業組織によつて都市を經營するのである。

現代文明が産業文明である如く、現代都市は大會社と大銀行と大工場の都市である。それは少數資本家のポケツトによつて生活する、大衆勞働者の都市である。從つて都市住民の大部分は借家人だ。『ニウ・ヨーク市民の八十八パーセントは借家人であり、マンハタンの或る區の如き、一萬三千六百六十二世帶のうち、住宅を所有するものは十四戸にすぎなかつた。現代の都市は『家なき兒』の集合所である。

家なき兒は都市を家とする。都市の文化建設の社會的必要は、この故にますます重加する。住宅、上水、下水、道路、電車、電燈、電話、瓦斯、學校、養老院。これ等はすべて私人のことではない。都市の仕事である。『家なき兒の家』たる都市の仕事である。むかし大家族が自己の住家を經營したやうに、都市はこれ等の仕事を經營しなければならぬ。

これは重大なる變化である。産業文明はその都市生活を、根本から變革した。從つて都市經營もまた、著るしい時代特色を帶びてこなくてはならぬ。

かくしてヨーロッパの都市は、最近五十年の努力をもつて、都市の文化建設を完成した。殊にアメリカの都市が[illegible]上に[illegible]したのは、三十年以來のことである。イギリスのゼイムス・ブライス卿（有名なる American Commonwealth の著者）は、一八八八年において『アメリカの市政は、アメリカン・デモクラシーの失敗を物語るものの一である』と宣言した。それより三十年、彼れは言つた。

『アメリカの都市の發達は、まさに驚異に値する。過去における自分の結論は、もはや眞實でなくなつた。』

文化建設は都市自體の事業である。

私はさきに日本に都市なし。たゞ人口あるのみと言つた。そは日本の都市に、人口集中の社會現象ありて、文化建設の社會施設なしとの意である。日本の都市は、都市の第一要素（人口集中）を具備するも、第二要素（文化建設）を有しない。これ日本に『都市』なき所以であり、私の『都市の叛逆』を論ずる因緣である。

現代は叛逆の時代である。日本の都市は、叛逆の時代を經てはじめて都市となり得る。都市は都市のために、叛徒たるの榮光を擔はねばならぬ。

五　都市人口集中の傾向（一）

現代の都市は、その質において古代中世の都市と異るごとく、その量において特色を有する。その人口集中の過激にして急速なる、有史以來曾つて見ざるところである。

アテネが繁榮を極めし時代において、その都壁内の人口は合せて二十萬、自由民は二萬に過ぎなかつた。ローマと雖も百萬を出づる僅少にすぎず。しかるに現代の地球は、十八世紀の末期における、ロンドン、パリ、ベルリンを凌駕する都市、百をもつて數ふるのである。

試みにウェバア博士の大著『十九世紀における都市の發達』から、歐米各國の都市人口の、總人口に對する百分率の變化表を引用して、十九世紀における急激なる人口都市集中の傾向を見やう。これは博士が辛苦の結果、詳細なる研究に基いて作成したもので、十九世紀の初期から、中期を經て、末期に至る都市人口の集中的傾向を表示したものである。

	調査年	人口二萬以上の都市(パーセント)	人口一萬以上の都市(パーセント)
イングランド及ウェールス	初期(一八〇一年)	一六・九四	二一・三〇
	中期(一八五一年)	三五・〇〇	三九・四五
	末期(一八八九年)	五三・五八	六一・七三
スコットランド	初期(一八〇一年)	一三・九〇	一七・〇〇
	中期(一八五一年)	二七・七〇	三二・二〇
	末期(一八九一年)	四二・四〇	四九・九〇
フランス	初期(一八〇一年)	六・七〇	九・五〇
	中期(一八五一年)	一〇・六〇	一四・四〇
	末期(一八九一年)	二一・一〇	二五・九〇
イタリー	初期(一八二〇年)	四・四〇	—
	中期(一八四八年)	六・〇〇	—
	末期(一八八一年)	一三・三〇	二〇・六〇
プロシア	初期(一八一六年)	六・〇〇	七・二五
	中期(一八四九年)	七・八〇	一〇・六三
	末期(一八九〇年)	二三・〇〇	三〇・〇〇
ドイツ	初期(—)	—	—
	中期(—)	—	—
	末期(一八九〇年)	二三・八〇	二七・六〇
オーストリア	初期(一八〇〇年)	三・五六	四・三七
	中期(一八五〇年)	四・二〇	五・八〇
	末期(一八九〇年)	一二・〇〇	一五・八〇
ホンガリア	初期(一八〇〇年)	二・三一	五・三五
	中期(一八五〇年)	四・五五	九・一〇
	末期(一八九〇年)	一一・二六	一七・六〇
ベルギイ	初期(一八〇〇—一八一〇年)	八・七〇	一三・五〇
	中期(一八四八年)	一六・六〇	二〇・八〇
	末期(一八九〇年)	二六・一〇	三四・八〇
オランダ	初期(一七九五年)	二四・五〇	二九・五〇
	中期(一八四九年)	二一・七〇	二九・〇〇
	末期(一八八九年)	二九・三〇	三三・五〇
アメリカ合衆國	初期(一八〇〇年)	三・八〇	三・八〇
	中期(一八五〇年)	九・八〇	一二・〇〇
	末期(一八九〇年)	二三・八〇	二七・六〇
カナダ	初期(—)	—	—
	中期(一八五一年)	七・四〇	八・五〇
	末期(一八九一年)	一四・二〇	一七・一〇

十九世紀は産業主義が進行的を卷しつゝ前進したる時代である。その間における人口の都市集中の傾向は、かくの如くに著大なもので、村落人口の百分率は年々減小するに對し、都市人口の百分率は二倍三倍となつてゐる。しかも産業主義發達の速力が、急に角度を變へたのが二十世紀であつた如くに、二十世紀に入つてから、都市人口集中の傾向は、さらに著るしくなつた。

假に一八八七年の萬國統計學會の決議に基き、人口二千をもつて都市と村落との分界嶺とするならば、イギリスの如きは、十九世紀の中期までは、都市と村落との人口がほゞ匹敵してゐたものが、一九一一年には、都市人口は全人口の約八割弱を占むるに至り、人口十萬以上の大都市ですら、全人口の三割八分に當つてゐる。

十九世紀の中葉、全人口の三割强にすぎなかつたフランスの都市は、一九一〇年には四割四分を占むるに至つた。その頃はるかにフランスの下位に立つてゐたドイツが、一九一一年の統計によれば、全人口の六割が都市人口となつてゐる。

六、都市人口集中の傾向(二)

われ等はアメリカ合衆國については、やゝ詳細なる統計を有する。殊に一八九〇年より一九二〇年に至る、都市の發達表を紹介する。第一表は都市數の變化で、第二表は人口實數の増加、第三表は全人口に對する千分比の進行である。

(第一) アメリカ合衆國の都市數

	一八九〇年	一九〇〇年	一九一〇年	一九二〇年
都市	一、四一七	一、八〇一	二、三一三	二、七八七
百萬以上	三	三	三	三
五十萬以上百萬以下	一	三	五	九
二十五萬以上五十萬以下	七	九	一一	一三
十萬以上二十五萬以下	一七	二三	三一	四三
五萬以上十萬以下	三〇	四〇	五九	七六
二萬五千以上五萬以下	六六	八二	一一九	一四三
一萬以上二萬五千以下	二二八	二八〇	三六七	四五九
五千以上一萬以下	三三九	四六八	六一二	七二一
二千五百以上五千以下	七二六	八九三	一、一〇六	一、三二〇
村落(二千五百以下の村落)	六、四九〇	八、九三〇	一一、八三二	一二、九〇五

(第二) アメリカ合衆國人口都市村落別

	一八九〇年	一九〇〇年	一九一〇年	一九二〇年
全國	六二、九四八千人	七五、九九五千人	九一、九七二千人	一〇五、七一一千人
都市	二二、二九八	三〇、三八〇	四二、一六六	五四、三〇五

百萬以上	三、六六二	六、四二九	八、五〇一	一〇、一四六
五十萬以上百萬以下	八〇六	一、六四五	三、〇一一	六、二二四
二十五萬以上五十萬以下	二、四四八	二、八六一	三、九五〇	四、五四一
十萬以上二十五萬以下	二、七八二	三、二七二	四、八四〇	六、五一九
五萬以上十萬以下	二、〇二三	三、七〇九	四、一七九	五、二六六
二萬五千以上五萬以下	二、二六九	二、八〇一	四、〇二六	五、〇七五
一萬以上二萬五千以下	三、四二九	四、三三八	五、五二四	六、九四三
五千以上一萬以下	二、三七三	三、二二八	四、二五五	四、九九八
二千五百以上五千以下	二、五〇七	三、一〇三	三、八八〇	四、五九四
村落	四〇、六四九	四五、六一四	四九、八〇六	五一、四〇六

（第三）總人口に對する人口千分比

	一八九〇年	一九〇〇年	一九一〇年	一九二〇年
都市	三五四	四〇〇	四五八	五一四
百萬以上	五八	八五	九二	九六
五十萬以上百萬以下	一三	二二	三三	五九
二十五萬以上五十萬以下	三九	三八	四三	四三
十萬以上二十五萬以下	四四	四三	五三	六二
五萬以上十萬以下	三二	三六	四九	五〇
二萬五千以上五萬以下	三六	三七	四四	四八
一萬以上二萬五千以下	五四	五七	六〇	六六
五千以上一萬以下	三八	四二	四六	四七
二千五百以上五千以下	四〇	四一	四二	四七
村落	六四六	六〇〇	五四二	四八六

その間僅かに三十年である。しかるに十九世紀末において、人口五十萬以上の大都市は、合衆國中僅に四にすぎなかつたが、一九二〇年には三倍して十二に達した。人口五萬以上の五十八が、一躍して百四十四となつた。人口二千五百以上の都市數千四百は、倍加して二千八百弱となつてゐる。

さらに最近三十年間の村落人口增加數は、四千萬が五萬一千人にすなはち二割六分の增加率を示せるに過ぎざるに反して、都市人口は二千二百萬が五千四百萬に增加し、すなはち約二倍半となつたのである。うち最も著るしいのは人口五十萬以上の大都市で、人口百萬以上においては三百六十六萬が一千萬に、すなはち約三倍弱となり、人口五十萬以上百萬以下においては、八十萬が六百二十萬に、すなはち約七倍半となつてゐる。

全國總人口に對する都市人口の千分比においても同様である。十九世紀末において都市三分の一、村落三分の二の形勢にありしアメリカ合衆國の人口分布は、三十年間に位をかへて、都市五一四村落四八六となつた。うち人口五十萬以上の大都市の千分比は七一から一五五となり、すなはち現在においては、

全國總人口のうち一割五分五厘までは、人口五十萬以上の大都市に生活してゐるわけである。

　これが僅か三十年間の變化である。

七、大都市の人口吸收力

　以上の統計表にも見る如く、人口の都市集中的傾向のうちで、その最も顯著なものは、人口五十萬以上の大都市の、人口吸收力である。これをヨーロッパの三大都市について見やうか。

　ロンドンの人口は、十六世紀の中頃においては、その繁盛を對岸のアムステルダムと競ひ、歐洲屈指の大都と稱せられたが、人口は當時僅かに十二萬と註せられる。それが十七世紀の末期に至つて、人口五十萬に達したといふので、すでに當時の驚嘆であつたのである。しかるに十九世紀の初頭には、忽ちにして百萬に垂とし中頃には二百五十萬、末期には五百萬を突破した。まさに驚ろくに足る急速力である。現在では大ロンドンは、人口七百五十萬を算して、まさに世界第一の大都である。

　パリにしてもベルリンにしても、ロンドンと同様である。十四世紀の初頭において、人口僅かに三萬にすぎなかつたパリは、百倍して現在は三百萬の大都となり、花の都の名を恣にしてゐる。十九世の初に、人口二十萬をもつて、異數の大都と稱せられてゐたベルリンは、いまや三百八十萬の人口を擁する。十九世紀の百年は、地球の表面を一變してしまつた。

　これ偏へに產業主義の齎らせる變化である。現代に都市を『產業都市』と稱する所以の一は、全くこゝにある。而して殆んど封建都市の經歷を有せざる新大陸の都市は、この產業都市たる面目を、最も露骨にあらはしてゐる。アメリカ合衆國の三大都市について、これを見やうか。

　十八世紀末において、ニウヨークは人口五萬に足らず、フイラデルフイアは三萬に足らざる小市であつた。いまアメリカ第二の大都市たるシカゴの如き、無名の一寒村にすぎなかつた。十九世紀初頭においても、ニウヨークは人口八萬足らず、フイラデルフイアは四萬にすぎぬ。それから四十年經つた。一八四〇年にはニウヨークは人口四十萬、フイラデルフイアは十萬の都市となつてゐた。このときシカゴは人口四千の地方都市として、始めてこの世に出現した。それからまた五十年を經過した。一八九〇年には、ニウ・ヨークは人口二百五十萬、シカゴとフイラデルフイアは、各々百萬を超ふる、押しも押されぬ大都となつてゐたのである。

現在においては、ニウヨークは人口五百六十二萬、シカゴは二百七十萬、フイラデルフイアは百八十二萬の大都である。驚ろくべきは産業都市の發達ではないか、詳しくは次表を見よ。

アメリカ三大都市人口増加表

	ニウヨーク（千人）	シカゴ（千人）	フイラデルフイア（千人）
一七九〇年	四九	—	二九
一八〇〇年	七九	—	四一
一八一〇年	一二〇	—	五四
一八二〇年	一五二	—	六四
一八三〇年	二四二	—	八〇
一八四〇年	三九一	四	九四
一八五〇年	六九六	三〇	一二一
一八六〇年	一、一七五	一〇九	五六六
一八七〇年	一、四七八	二九九	六七四
一八八〇年	一、九一二	五〇三	八四七
一八九〇年	二、五〇七	一、一〇〇	一、〇四七
一九〇〇年	三、四三七	一、六九九	一、二九四
一九一〇年	四、七六七	二、一八五	一、五四九
一九二〇年	五、六二〇	二、七〇二	一、八二四

これが僅かに百三十年間の變化である。なんと驚ろくべき數字ではないか。

八、日本の都市人口増加率

驚ろくべきことは、都市人口集中の傾向が、日本において甚だ遲々たることではない。ある意味において、歐米文明國のそれを凌駕してゐることである。

こゝに帝國統計年鑑によつて、都鄙別人口増加の統計表を作つて見る。但しわが國の都市と村落との人口分界線は、萬國統計學會の決議による人口二千を標準とせずして、高く人口一萬となつてゐる。日本の標準に從ふならば、人口十萬一人以上が大都會、五萬一人以上十萬人以下が中都會二萬一人以上五萬人以下が小都會、一萬一人以上二萬人以下が地方都會で、人口一萬人以下を村落としてゐるのである。

次にこの標準に從つて、明治二十一年末以來、大正九年十月一日までの、三十二年間の統計表を掲げる。但し戸籍上の現住人口によるもので、大正九年の人口數が減少したやうに見えるのは、これ丈けが國勢調査の結果によつた故であつて、事實減小したわけではない。

（第一） 日本の人口増加表

	大都會（千人）	中都會（千人）	小都會（千人）	地方都會（千人）	村落（千人）
明治二十一年末	二、四三二	五三四	一、二三三	九四一	三四、八九六
明治二十六年末	二、五二五	七七九	一、五〇二	一、九二三	三五、三五四
明治三十一年末	三、四六八	七二一	一、七六八	二、〇〇五	三七、三六〇
明治三十六年末	四、四七〇	一、〇二七	二、〇二二	二、四八一	三八、四九四

明治四十一年末	五、五三七	一、三五一	二、四三三	一五、八六	三六、八四三
大正二年末	五、九六八	一、八六六	三、九三四	四、四九七	三九、五四五
大正七年末	七、一九三	三、二八二	三、九〇四	五、〇三三	三九、九八七
大正九年十月一日	六、七五四	三、一〇五	四、一〇三	五、〇七四	三七、九二七

(第二) 全人口に對する千分比表

	大都會	中都會	小都會	地方都會	村落
明治二十一年末	六〇、四	一三、三	三一、七	二三、五	八七一、一
明治二十六年末	五九、八	一八、八	三五、七	四五、四	八四〇、三
明治三十一年末	七七、〇	一七、〇	三八、五	四三、九	八二三、六
明治三十六年末	九二、一	二二、二	四一、六	五一、〇	七九三、〇
明治四十一年末	一〇七、〇	二六、一	四六、九	六九、三	七五〇、七
大正二年末	一〇七、七	三三、六	五三、二	八一、六	七二三、九
大正七年末	一二五、五	三九、三	六七、〇	八七、二	六八〇、八
大正九年十月一日	一二〇、七	三七、六	七三、三	九〇、七	六七七、七

すなはち明治二十一年から大正九年までの三十二年間に、村落は人口三千五百萬弱から三千八百萬弱に、僅か八分の人口増加を示せるにすぎざるに反して、都市は五百萬から一千八百萬へ、實に三倍半の人口増加を示したのである。そのうち大都會は二百四十二萬から六百七十五萬に、中都會は五十三萬から二百十萬に、小都會は百二十七萬から四百十萬に、地方都會は九十四萬から五百七萬に増加した。その増加率は、大都會が二倍八、中都會が三倍九、小都會が三倍二、地方都會が五倍三の人口となつた勘定である。

次に千分比についてこれを見れば、日本の都會は明治二十一年において、全人口千に對して、僅かに一二九を有するにすぎなかつたが、大正九年においては、一躍して三二二に達した。すなはち人口一萬以上の都市をもつて、なほ全人口の約三分の一を包容してゐるのである。

さらに大都會は、その千分比六十から百二十に、中都會は十三から三十七に、小都會は三十一から七十三に、地方都會は二十三から九〇に上つた。それぞれ二倍乃至四倍のパーセンテージを占むるに至つたのである。

この統計表をもつてしては、日本の人口都市集中の傾向が、必ずしも歐米文明國におくれたりとは言ふことはできまい。

九、日本の六大都市

東京、大阪、京都、神戸、横濱、名古屋、これを日本の六大都市といふ。横濱が人口四十二萬五千たるのほか、他はすべて五十萬以上の人口を有し、大都市たるの面目に恥じない。しかるにこれを市制施行當時に見るに、獨り東京が人口百三十十萬を有するのほか、大阪の四十七萬、京都の二十八萬、神戸の十三萬六千、横濱の十二萬、名古屋の十六萬、すべて五十萬以下

の中都會にすぎなかつた。その後の發表次表の如し。

六大都市人口增加表

	市制施行當時(千人)	日露戰爭當時(千人)	大正二年(千人)	大正十年(千人)
東京	一、三七六	一、八七一	二、〇〇三	二、四三八
大阪	四七二	一、〇二六	一、三八七	一、三四七
京都	二八〇	三八二	五〇八	六四三
神戸	一三六	二九七	四四一	七一五
横濱	一二二	三三二	三九六	四二八
名古屋	一六三	二九三	四四八	六二三

すなはち市制施行當時に比すれば、東京が一倍七七に、大阪が二倍八五に、京都が二倍二九に、神戸が五倍二六に、横濱が三倍半に、名古屋が三倍八八に增加したのである。

そればかりではない。日本の現在の都市人口の數は、決して歐米文明國の下位にあるものではない。

人口百萬以上と言へば、世界屈指の大都市である。アメリカ合衆國は、流石に大國のこととて、ニウヨーク、シカゴ、フイラデルフイアの三都を有するが、これを日本と面積において伯仲の間にある、獨、佛、英、三國について見るに、ドイツには獨りベルリンあるのみである。フランスも亦パリ一市に止まる。產業主義の祖國たるイギリスにして、漸くロンドンとグラスゴーの二市を有するに過ぎない。これに對して日本が、東京と大阪の二大市を有することは、人口集中の程度において、決して文明國の人後におつるものでないといふことを、明瞭に物語るものである。

さらに人口五十萬以上の大都市について見ても、これと同樣の事實を發見する。日本は前述の如く、東京、大阪、京都、神戸、名古屋の五市は、優に五十萬を超えてゐるのであるが、これに對抗しうるのは、ヨーロッパにおいて僅かにイギリスあるのみで、ロンドン、グラスゴー、バアミンガム、リヴアプール、マンチエスターこれである。フランスに至つては、パリとマルセーユの唯二つしかなく、ドイツ聯邦內にも、唯ベルリン、ハムブルグ、ミユンヘン、ドレスデンの四市しかない。

これを以て觀るに、現代日本の都市が、人口の點において遜色あるものの如くに思ふのは、全然數學上の根據を無視せる議論である。都市計畫について論をなすもの、たま〳〵『歐米の例を以つて、直ちに日本を律すべからず』と放言するものがあるが、若し人口の數をもつて文化建設の基準となすならば歐米の實例は直ちに我が範となすに足るのである。

人口集中の程度において日本は決して歐米の人後に落つるものではない。

一〇、人口の密度

マンハタンにたちならぶ、スカイスクレーパーの森林を見て來た人達は言ふ。

『歐米の都市は立體的に發達し、日本の都市は平面的に發達する。從つて人口の數は同一でも、その密度が異なる故に、都市の容姿を異にするのだ。』

都市の發達に平面と立體の差のあることは、それは事實である。しかし都市人口の密度において、日本の都市が歐米に劣れりとなす事は、それは僞である。

疑ある人は次の表を讀め。

都市密度表

	調査年	人口（千人）	面積（千坪）	密度（一千坪に付千人）
大ロンドン	（一九二一年）	七、四七六	二三三、八二〇	三二
ロンドン府	（一九二一年）	四、四八四	九一、五一〇	四九
ロンドン市	（一九二一年）	一三	八〇九	一六
大パリ	（一九〇八年）	四、〇四〇	一四三、一七五	二八
パリ市	（一九〇八年）	二、八〇〇	二四、二〇〇	一一六
大ベルリン	（一九一九年）	三、八〇六	二九九、七七〇	一三
ベルリン市	（一九二一年）	一、九〇七	一九、六六三	九七
大ニウヨーク	（一九二五年）	五、三三六	二五四、一〇〇	二一
マンハタン區	（一九二五年）	二、二九五	一五、一二五	一五二
ブルクリン區	（一九二五年）	一、八二五	五七、八一五	四〇
クヰンス、ブロンクス及リチモンド區	（一九二五年）	一、二一三	二〇一、一六三	六
大東京（東京都市計畫區域）	（一九二〇年）	三、三五四	一六五、五四八	二〇
東京市	（一九二〇年）	二、一七三	二四、七七八	八八

すなはち、わが東京市には、實に一千坪に八十八人の人が住居してゐるわけである。歐米の都市のうちで、これを凌駕するものは、ひとりパリの百十六人あるのみ。ロンドン府は四十九人、ベルリン市は二十七人、ニウヨークは二十一人にすぎない。アメリカの富の半ばを集めてその繁榮世界に冠たりと稱せられ『アメリカの心臟』といはるゝマンハタン區は、その密度が一千坪につき百五十二で、東京市密度の二倍足らずになつてゐるのは、それを止むを得ない。しかし驚ろくべきことには、その密度さへ、わが淺草區の百六十二人、神田區の百六十人に對しては、はるかに下位にあるのである、

歐米の都市は立體的に發達し、日本の都市は平面的に發展する。この事實は、直ちに日本の都市の密度の小なるを豫想せしむるにも拘らず、事實はこれに反して、日本の都市の方が密度が大である。この事實は一體何を物語るのか。

一は日本の都市住民が、平均して狭小な地積と空氣とをもつて滿足してゐるといふことである。そして他は、歐米の都市においては、道路や公園や、その他公共施設、閑地などに利用して、都市居住者の文化生活に資してゐるべき土地を、日本の都市はこの土地に、狭い小路と低い家根の貧民窟をこさへて、無理やりに人間を押しこんでゐるといふことである。

これを要するに、日本の都市が都市たらざる所以は、人口の少いことでも、密度の小なる故でもない。偏へに文化建設なきの爲めである。

二、都市の文化建設

私は再び聲を大にして叫ばなければならぬ。

『日本には都市はない。たゞ人口があるのみだ。』

マロニエの香り高きシャンゼリゼーのあたりに遊歩しなれたるフランス人。『百萬の足をもつ』マンハタンへ、一萬五千乃至二萬人を乘せたる地下電車を、一分間に一列車づゝ輸送しつゝあるアメリカ人。綠深き郊外住宅の後庭に、夕日を浴びつゝテニスを享樂せる中流イギリス人。かれ等が日本の都市を見て、『都市』といふ感を起さぬのに、何の不思議があらうか。

都市とは單なる人口集中の謂ではない。

こんな話がある。

或るフランス人が日本に來た。彼れは日本人から心づくしの歡待をうけた。彼れは是非日本の『美はしき』都市を見て、國の土産話にしたいと思つた。ある晴れたる日、自働車に乘つて東京の繁華な街を走るやうに命じた。

運轉手は『オーライ』と叫んで、自働車はホテルを離れた。アメリカの地方都市に見るやうな、無風流なしかも粗雜な煉瓦建の間を疾驅した。それから『ゲタ』をはいた小さな日本人がノロノロと騷々しいアスファルトを踏んでゐる街を通つた。彼れは『これは都市ではない』と思つた。なぜなら蜘蛛の巣のやうに、天空に電線がはつてあつたから。

運轉手は彼れを振りかへつた。『美はしき東京の街』を見るべく熱心なりし彼れは、『ゴー・アヘッド』と命じた。運轉手は心得て車を走らせた。自動車は無限に立ちならぶ低い暗い木造家の下を、はげしい震動を與へながら無限に走つた。しかし『美はしき東京の街』はなかなか來なかつた。

そのうち車の左右から、次第に低い家の軒が失せて、その代りに青々とした田と畑が出て來た。彼れがあつけにとられて、身はバビロンにあるのではないかと思つてゐるうちに、三十分ばかりにしてまた人家の雜沓のうちに入つた。そして自動車は

へたとゝまつた。前面には大平洋の波がよせてゐる。」

彼れは訊ねた。『こゝはどこだ？』

『Yokohama』それが答であつた。

日本に都市はない。たゞ人口があるのみである。若し文明の波の頂きに立つものをもつて都市とするならば、日本には都市はない。日本人は都市を欲しないのか。

日本を遊歴する西洋人は、みな美はしき日本にあこがれて來る。しかし如何にお世辭のよい西洋人も、日本の都市の美觀を褒めるべきボカブユラリーをもたぬ。仕方がないから、かれ等は『フジヤマ』を驚嘆する。そして『ゲイシヤ・ガール』を讃美する。日光と箱根とにお世辭の百萬遍をあげる。それで足りなければ、『美はしい日本人の心』を讃へる。そして『オルヴォア』だ。

ある茶の席で外國の友人は私に聞いた。

『日本人は生活を樂しむといふ欲望をもたぬのか』と。

私は赤面した。

一二、都市建設の努力

美はしい歐米の都市は、決して努力なしに建設されたものではない。それは五十年の辛苦經營の賜である。不斷の努力の結晶である。私はこゝに事々しくかれ等の行蹟を記すことをしない。その代りに、われ等が野蠻時代と稱する古代の都市の、幼稚なる(!)都市建設のあとを回顧する。そして自問しやう。

『日本の都市よ。汝は古代に恥じずや』と。

フリンダース・ペトリー教授は、エジプトの砂漠を掘つて、砂の下に一つの都市を發見した。その名をカーハンといひ、いまより四千五百年以前の都市であるといふことがわかつた。

カーハンの街は、イルラハンのピラミツド築造に從事した職工に住宅を供給する目的で作つた町で、教授の説くところによれば、新市街カーハンの計劃は、一人の建築家によつて纏められた、秩序ある組織的計畫である。市街は東西の二區に分たれて西區がすなはち職工の集團住宅地となつて、厚い壁でその周圍を繞らしてゐる。

その東西に通ずる長い筋の街路には、中央に幅二十二吋の石造の開渠が築造してあり、路面はこれに向つて緩い勾配がついてあるから、雨水と用水の吐道として、街路の泥濘を防ぐ。この市街地下水組織の如き、下水設備なき日本の都市に對し、四千五百年前早くも頂門の一針を投じてゐるではないか。

職工住宅は、いづれも四室または五室から成つて、階段によつて屋上に通ずる。屋上は薪炭や藻類の納屋であつたらしく、

屋根は木の桁で作られ、これに穴を明けて蘆茅の類を束ね、屋根の內外には壁を塗り固めてあつたと記錄されてゐる。

セミラミス女皇の築造せるバビロン府の都市計畫に至つては、さらに雄渾を極めたものである。

バビロンは、當時の文明の血脈たる、ユーフラテスの河畔を選んで建てられた。これ交通路を掌握するものが、結局文化を支配する所以に徹底せるもので、女皇は當時の一流の建築家と美術家を聘して都市計畫を定め、その築造せる大宮殿の如き、今日の建築家をして唾涎せしむるものがある。

その都府の固めとして繞らした城壁は、周圍四百八十シュタデイウムに達し、所々に物見塔を備へ、城壁の高くして厚く頑丈なる、なほ頂面によく戎車を並驅するを得た。

ユーフラテス河には、徑間二十尺、長さ九町に亘る大拱橋が架せられ、その兩岸を固む護岸は、城壁にも比すべき廣大さがあつた。一時その流心までも變更して、河床にトンネルを穿ち、もつて全市を睥睨する兩宮殿の聯絡に備へたる如き、その雄大むしろ今人を驚嘆せしめる。

アクロポリスを中心とするアテネの都市計畫が、このシヴィツク・センタアを繞らすに、市內各區の公共紀念建築をもつて配置せる如き、プリーヌ市が、內幅百二十呎、長さ二百三十呎の步廊を有するアゴーラを中心として、建築及び住宅區域を八十のブロックに分ち、もつて市民の都市生活を統制せる如き、紀元前幾千年の都市計畫が、却つて日本の現代都市を瞠若たらしめる。

一三、市長難

見よ。都市とは單なる人口の巢窟ではない。その時代を反影とする文化建設である。

日本の都市も、近時著るしくこの文化建設の事業に眼覺めつゝある。『都市計畫』といふ言葉が、現代の流行語の一つとなつたのも、すでに久しい。日本の都市は、都市としての自覺に眼醒めつゝある。

今年の春、後藤市長がヨッフエ事件をきつかけとして、突如その職を辭するや、東京市はいつもの通りに市長難に陷つた。『市長難』とは人物難ではなくて、地位難である。自覺しつゝある都市の事業は、その質と量とにおいて山積重課し、市長としての快腕を振ふべき素材は多いにも拘らず、その利刀はすでに銹びて、用をなさざるの謂である。

そは何を意味するか。現在の市長の職能權限は、この大事業を敢行すべく、あまりに薄弱なるを言ふ。彼れの頭上には、つ

ねにダマスカスの劍が吊されてゐる。東京府知事があり、警視總監があり、そしてこの上に內務大臣があり、鐵道大臣があり、農商務大臣があり、さらに大藏大臣がある。かれ等は東京市長を支配する主權者の代辨人である。すべての仕事がこれ等の監督官廳の指令をまたずしては、決して行はれることはない。

魚市場移轉の命令は、すでに三十五年以前に發せられてゐる。(斷つておくが、魚市場は東京市の市場で、警視廳の專用市場ではない。しかしこの移轉命令は、警視廳が出したものだ。)しかもいまだに實行されぬ。そしてその決定權は、農商務省がもつてゐる。

高速度鐵道を建設せんとするか。それは東京市を眞の都市たらしむべき、都市計畫事業の大動脈をなすものである。將來の都市はその線を中心として定まる。そしてそれは東京市自體のための鐵道である。しかし決定權を有するものは鐵道大臣で、鐵道省がすでに敷設認可を與へたる私立會社の數、いま幾何に上るや。私は知らない。

東京市の財政難は、すでに傳統的である。すべての事業と計劃とは、財政難の理由によつて否定せられる。しからば東京市はいかにしてこの財政難をきりぬくべきか。その方法は一つもない。なぜなら東京市には財政權はないから。國税と府税に附加税を課する以上には、都市に財政權はない。あるのは遊興税と車税とである。

租税がとれなければ、市債を募集しろといふか。市債を募集して、將來何によつてこれを支辨するのか。結局財政は租税にかへる。そしてこの市債さへも、大藏省は「當分」許可しない方針だといふ。

かくの如き行政權と財政權とをもつてして、日本の都市はいかなる事業ができるか、若しできたらそれこそ奇蹟である。すべて事業は地位がこれをする。地位なしに事業ができるものなら、ナポレオンはフランス皇帝になる必要はない。砲兵中尉のまゝで、上官に指揮されつゝ歐洲を併呑したであらう。有爲の青年も、總理大臣の椅子を目當に勵精しないですむ。內務省屬のまゝで國家の政治ができるわけではないか。

市長難は人物難ではない。地位難である。日本の都市がまだ都市となれないのは、市理事者の罪でも市民の罪でもない。制度がそれを妨げてゐるのだ。

一四、都市の叛逆

日本の都市の歩み行くべき目標は、都市計畫である。そして

その歩み行く力は、都市の自由である。

目標はすでに定まつた。問題は『力』である。日本の都市は、都市計畫を實現するに要する、行政權と財政權を有するか。それが問題である。若し行政權と財政權とを與へないで、そして都市計畫を實行しろと言ふならば、それは命ずるものの無理である。四肢を縛しておいて、オリムピツクに優勝しろといふものの無理である。

いま都市計畫實行の必要は、焦眉の急に迫つて來た。それとともに、都市がこの縛を解き放つべき必要も、目睫のうちに現出した。いまこそ都市の叛逆の時である。

近世國家は、その組織完成の必要から、すべてのものの權利を奪つて、これを國家主權に併合した。民本主義の名の下に、人民の自由權の名の下に、國家以外の組織をすべて否定した。諸侯の封建國家は、近世國家に滅ぼされた。そしてそれと同時に、封建都市もその自治權を國家に掠奪された。

現代の産業都市は、實にこの掠奪されたる自治權を、自らのために奪還せんとするのである。そして都市は叛逆する。

封建都市は、諸侯の劍の庇護の下に、その自治權を享有してゐた。現代の産業都市にこの武力はない。しかし大會社と大銀行とを中心とし、繞らすに大工場の煤煙をもつてし、交通機關の四肢を遠く郊外にはれる現代都市は、その社會的實力において、果して封建都市の下風に立つものであらうか。

國家政治の主權の基礎は、社會學上その有機體説におかれてゐる。國家はある意味において有機體である。しかしその意味において、都市はより以上完全なる有機體である。資本と勞働との組織せる都市の産業組織は、それ自體一つの意思主體である。意思主體は自由と獨立を要求する。これなくして主體は成長しない。都市は自體の成長のために、行政權と財政權を要求する。そして奪はれたる自由をとりもどすために、都市は國家に叛逆するのである。

日本の都市よ！ 私は直接に汝によびかける。叛逆せよ！ 國家にむかつて叛逆せよ！ 都市の自由と獨立のために。その行政權と財政權のために。汝が單なる人口の集中狀態を脱して、まことの意味の都市となるために、そして歷史の意志を尊重せんがために。

日本の都市は、それを一つの榮光として、勇んで國家に叛逆しなければならぬ。

叛逆の進行曲はなりひゞく。

一五、都市の三大傾向

現代都市の傾向は、その方面において、その內容において、その形式において、すべて國家政治に叛逆する。

その傾向において著るしいものは、都市の『獨立的傾向』である。ながく國家統治の下にあつて、政治の支配の下に辛ふじてその生を持續し來りし現代の都市は、いまやその力に眼覺むるのときが來た。力の自覺は、自由と獨立の要求である。國家のための都市ではない。都市のための都市である。かくして現代都市は、獨立的傾向を帶ぶるのである。

國家にあらずんば、なに事もなしえなかつた時代は過ぎた。いま産業は獨立した。都市は現代産業の城砦である。資本と勞働との組織する産業團體として、都市は社會の實力である。都市はいつまでも、國家のために支配され、國家によつて經營さるゝことを喜ばない。その効果の如何は、現代の日本の都市はあまりによく知つてゐる。もはや『癩病患者の額に輝くダイヤモンドの冠』をもつては滿足しない。都市は自らの力によつて歩まんと思ふ。これを都市の獨立的傾向といふ。

その內容において、現代の都市は次第に『非政治的傾向』を帶びて來る。近時市政の上に、科學的經營（Scientific management）とか、能率（efficiency）とかいふ聲が高くなつたのは、その一象徵である。都市をもつて一行政團體と觀る社會觀念は、現代都市の實體を捉ふることに失敗した。いま都市は一事業團體である。政治原則は廢れて、事業精神が都市に君臨する。

その最も著るしい例は、現代流行語の一たる『都市計畫』である。都市計畫とは、市區改正の義ではない。都市に事業的精神を注入して、都市を公共事業化せんとする企てである。現代の都市は、都市計畫の一路に向つて進む。そはもはや政治問題ではない。電車、電燈、瓦斯、水道、下水、港灣、河川、道路住宅。これ等百般の事業的經營を、いかにして資本經濟的に行はんかの問題である。都市は國家政治より獨立するとともに、その內容を非政治化せんとする。

現代都市の形式的傾向とは、その著るしい『集權的要求』である。都市が政治國家から獨立して、事業主體化せんとする以上、その經營は集權的たらざるを得ない。『チエクス・エンド・バランセス』は、民本主義の政治原則である。政治はこれによつて、平衡を得るかも知れない。事業は平衡よりも、集權的經營を求むるのである。

およそ事業は、平面的には營まれない。政治は水平を欲するも、事業は立體的經營を要求する。一點より放射する立體的ピラミツドこそ、すべての事業の典型である。都市が獨立の事業

主體として、その都市計畫を實行するに當つては、水平的なる『チエクス・エンド・バランセス』を、絶對的に厭み嫌ふ。

現代の都市は、集權的色彩を濃厚にしつゝある。そしてその偉大なる手は、遠く郊外に延びる。『郊外を征服するものは、都市を占領するものである。』都市がその集權的組織をもつて、郊外地を包容する大都市制度を完成したるとき、都市の獨立の事業的組織は、はじめて完成するのである。

現代の都市は、獨立の事業的組織である。いなかくならんとて努力しつゝあるのである。そしてそのために、永き國家の束縛より脱せんと、叛逆しつゝあるのである。

見よ。叛逆の進行曲はなりひゞく。日本の都市よ。逆徒たるの光榮を避くることなかれ。

行 政 篇

一、文明の誇り

文明の中心は、つねに都市にある。

都市とともに、教育と文化と藝術はきたる。科學と發明と産業ともまた都市のものである。産業文明の粹は集つて、こゝに都市を發生する。

蒸氣と電氣と交通機關とは、地球の表面を變化した自然に對する人間の挑戰。それが五千年の人類の歴史である。そしてわれ等が機械文明は、漸くにして自然を征服し終つた。その畫龍に睛を點ずるものが、すなはち現代の都市である。

都市は機械の機械である。都市の文明に對するは、あたかも蒸汽機關の家内工業に對するが如し。そはすべてに立ち優る最大の機械である。人間の發見せるものにして、都市の成果に優るものはない。

都市は人類の作成せる最上の藝術品である。そして文明の誇りである。

都市は世界の富の總勘定場である。そして地球の普天率土の朝宗する手形交換所である。

このところにおいて、人間の運命は決定される。そは强權の命令によるのではない。人間の暗默の欲求と需要によつて然るのだ。

都市の欲求が、山腹の牧童や、アラスカの漁民の生活と、アメリカやロシヤの小麥畑と、熱帶の植林と、オーストラリヤやアルゼンチンの羊毛場を動かすのである。フランスの葡萄園とピッツバーグの製鍊場とを指導するものも、また都市の欲求である。都市の欲するところに、王者も政治家も、金融業者も工業家も、みな調子を合はせる。その必要が、數千萬の勞働者

の手を鐵拳せしめるのだ。

二十世紀の都市は、地球といふ大機械の頭腦である。そはまた世界の心臓であり、神經系統である。

都市のこの社會的地位は、君王の命令によつて與へられたものではない。政治運動の結果に基くものでもない。そは歴史の盲目の意思によつて、社會進化の潮の作りなせる地位である。呟くことは無益である。

一方において都市は、犯罪と不倫との共同便所である。都市は人生の墓場である。三里に亙る煙突の煤煙は、水清き農村の青年を呼び集めて、そしてその汗と血とを搾り取つて殺す。都市は十九世紀の發明せる殺人機械である。

現代社會の犯罪の大部分が、經濟的犯罪なる如くに、多くの罪業は都市のものである。都市は社會の分光器である。すべての惡は都市に發見される。

都市は時代の希望である。そして文明の失意である。

二、土に還れ！

都市は産業文明のなせる、最大の文化悲劇である。『土に還れ！』("Back to the land!") といふ叫びは、人間性の深みから叫ばれる聲である。

ゴールキの小説に、『三人』といふ大作がある。イリヤといふ少年は、駝背の不格好な叔父につれられて、初めて都市に來た。『都會の人家は、丘の中腹に、密接した美しい列をなして、一段一段と高く、絶頂まで建ちつゞいてゐた。そして丘の頂上から一直線に、ほころしげに河を瞰下してゐた。教會の金色をなした十字架や圓頂閣は、人家の家根の上に高く聳えてゐた。太陽はいまのぼつたばかりであつた。その斜光は家々の玻璃窓に反射して、町全體がいろ〳〵の色で彩られ、黄金色に輝いてゐた。

「やあ、きれいだな」

子供は大きな眼を開いて、美しい、さながらの絵を、あされてものもいはず茫然と眺めてゐた。』彼れはこの始めて見た都會の光景を、ながく忘れることができなかつた。

しかし彼れの住ふ都會は、この『黄金色に光る』都會ではなかつた。それは場末の大きな灰色の建物であつた。それは狭くつて塵つぽく、そして陰氣であつた。その上喧嘩と、殺傷とは絶えなかつた。『イリヤの眼の前には、一日中なにか大きな、いろんな色彩のある騒々しいものが跳つてゐた。それが彼れを盲目にし、聾にするやうだつた。彼れはこの騒々しい、渦のやうな生活のなかで、ぼうつとして失神するやうに感じた。』

彼れは夢に、春と冬との豐かな故郷を見た。そして田園を憧れた。しかし都市の毒酒はしだいに彼れを捉へる。絕えざる都會の誘惑は、だん〴〵と彼れを墮落させた。そしてしまひには殺人を犯すに至つたのである。

都會の罪業は、この田舍から出た可憐な少年をして、つひに殺人までも敢行せしめた。彼れは男であつた。彼れはそれを自白した。そして彼れは都市を呪ふ大きな火の塊だつた。

警官は低い聲できいた。

「貴樣は良心に責められて白狀したのか」

「私は良心は少しももつてゐません」

イリヤはきつぱり言つた。

「貴樣の手に繩はかけないから、逃げるな。………たゞ逃げないと誓へばいゝ。――神かけて」

彼れは憫れむやうに警官の皺のよつた顏を見つめながら、重々しく言つた。

「私は神を信じませぬ。」

そしてイリヤは、暗闇の石の壁に、狂人のやうに身をうちつけて、むごたらしい死を遂げたのである。巡査がマッチを擦つたときには、頭は碎けて、脚の下には片方の手が落ちてゐた。巡査は地上から身を起こして、十字をきつて、疲れきつた、息のきれさうな聲でいつた、――

「主よ。この男の魂にも休息を與へ給へ」

これでゴールキの『三人』は終つてゐる。その丘の上に立ち列ぶ美はしい都市が、善良なる少年の魂のうちに入つて、彼れをなぶり殺しにする經路は、戰慄なしに讀むことはできない。

そこで『土に還れ！』といふ叫びは、人生の深みからの音聲をもつのである。

三、人間の力と歷史の意志

しかしながら問題は、果して『土に還り』うるか否かといふことにある。

地球の上に都市が出現したのは、それは社會進化必然の運命である。若し君主の命令によつて然るものならば、命令を取消すこともできやう。政治運動によつて都市が出現したものならば、反對の政治運動を起こすこともできやう。しかし都市の出現は、歷史の意志である。社會の流れが自然に築き上げた三角洲である。

『土に還れ！』といふ叫びは、社會歷史の流れをば、赤手をもつて押しかへさんとする無謀である。それは都市へ向つて流るゝ人民の流をせきとめて、歷史の運行を一世紀だけ逆流せしめ、われ

等の祖父の生活を、現代に出現せしめんとする白晝夢である。

都市生活を否定せんとする企ては、あまりに人間の果敢なさを自覺せざる計畫である。社會歴史の流に對しては、人間の能力は悲しむべく無力である。にも拘らず『土に還れ！』と叫ぶのは、その哀情憐れむべしと雖も、あまりに自然に對して強慢なる態度である。

若し人間に歴史の意志を翻へさすほどの力があるならば、人間は都市生活を營むとも、かの如き犯罪に陷るはづがないではないか。

われ等は、われ等人間の力の範圍内において、その最善をつくすに滿足しなければならない。

「人間の力の範圍内における最善の努力とはなにか？」

それは都市を、人類にとつて適當なる生活場とするといふことである。それだけの文化建設を、都市にほどこすといふことである。

都市計畫といふのは、蓋しその意味にすぎない。必らずしも都市の美觀を外國に誇らんがためではない。況んや都市の政治的野心を遂げんがためではない。人間苦を救はんとする、人間の果敢なき努力である。

われ等は苦痛なくして、都市に生活することはできない。そこでその苦痛を幾分か輕減せんとして、シャンゼリゼーの遊歩場に、マロニエの花が咲くのである。われ等は苦痛なくして、路面電車に一時間を揺られることはできない、そこでマンハッタンへ向けての高速度鐵道が、一分間に一列車づゝ運轉さるるのである。われ等は苦痛なくして、煤煙と塵埃のなかに生活することはできない。そこでロンドンの郊外に、綠に圍まれた美はしい住宅が經營さるゝのである。

都市計畫とは、市民の贅澤品ではない。都市生活の必需品である。

日本の都市が、この生活の必需品の供給を、市民に對して怠つてゐるといふこと。それはすでに述べた。それは社會的罪惡である。そしてその罪惡の原因が、都市の行政的・財政的無能力にあるといふこと、それもすでに述べた。日本の都市はこの社會的罪惡から免るゝためには、行政權と財政權との獲得を目標として、國家に對して叛逆しなければならないといふこと。それもすでに述べた。

これより行政權の獲得のためにする、都市の叛逆のことを述べる。

四、都制案の叛逆的意義

話は急に一轉する、

昨年の帝國議會に、いはゆる『都制案』なるものが、政友會、憲政會、及び革新倶樂部の三政黨から、殆ど同じやうな内容をもつて提出された。不幸にして議會を通過する運びに至らなかつたけれども、この趣旨には深い意味があるものと、ひそかに私は興味をもつて見たのである。

都制案の内容は、三案によつて多少の差異があるけれども、大體においては、日本の大都市の都市計畫を完成するために、その近郊地をこれに併合する。そしてその大自治體をして、所屬府縣から獨立せしめ、地方府縣と併立の地位において、内務大臣に直屬せしめやうといふのである。

都制案は、私の觀るところによれば、單なる市町村の合併問題ではない。また都市の格式向上の運動でもない。その社會的意義は、たとは不自覺なりとはいへ、『都市の叛逆』の精神に基くところにある。そして現代都市の、獨立的傾向と、非政治的傾向と、集權的傾向とを、代表せるところにある。

私はさう都制案を解してゐる。

都制案が、從來の市制に比すれば、著るしく國家の政治的束縛を脱するものなるは、これを看過することはできない。すなはち都市の獨立的傾向である。府縣の行政的監督は、全然これを排除することを得る。尤も内務大臣による一般的監視は、これを脱することはできないが、これは都市が國家内の都市たる以上止むを得ないところである、

殊に、都市が從來の府と市との事務と權限とを繼承する結果は、その行政事務と行政權との增大となつてあらはれる。事務と權限の增大は、自然にその行政的獨立を導くものであつて、法規上はたとへ幾多の束縛を有するとも、事實上は殆ど獨裁的自由を享有しうるものである。なぜなら、これまでは國家または府縣の事務を、都市がその委託によつて行つてゐたといふ觀念が、こんどは都市固有の事務といふことになるからである。

新らしき都市の事務とは、都市計畫事業である。むしろ都制案が近時急に實現的機運を釀成し來つたのは、都市計畫事業の急がこれを促進したものともいへる。この點において都制案は非政治的傾向を有力に代表する。なぜなら都市計畫は、事業としてのみ有効に實行されうべきものであり、而して都市計畫事業を都市の固有獨立の事務とすることは、そのうちから政治的色彩を離別して、事業的生命を注入する結果となるからである。

從來大都市の都市計畫事業は、府縣市町村の三部制によつて行はれた。府縣も都市計畫を行ひ、市も都市計畫の擔當者であ

り、そして近郊町村もその納稅者である。しかも都市は市會と市參事會を有するほかに、府縣會に市部會あり、府縣參事會に市部參事會あり。同一地域に重復的自治體あるやの觀を呈する。都部においてもこれと同様である。この三部制が、都市計畫の如き『事業』を遂行するに、はたして適當なりや否や、經過は多くの疑を挿むの材料を提供してゐる。

都制案はその實施によつて、これまでの三部制を破壞する。そして都市計畫事業を、都市獨立の事務とする。こゝにおいて都市の集權的傾向はます〱著るしく、いはゆる『郊外の征服』は、制度上の安定を得るのである。

見よ。現代の都市は、その方向において、(獨立的傾向)、その内容において(非政治的傾向)、その形式において(集權的傾向)、國家に叛逆する。そしていはゆる『都制案』は、この三大傾向を代表して都市の叛逆を象徴するのである。

五、都制案の由來

東京市に對して、特別の制度を設くべしとの議が、帝國議會に行はれたのは、明治二十九年以降のことである。以來政府が東京都制案を提出せること一回、貴族院の提出せること五回、衆議院が提出せること十回、外に建議案を可決したこと一回である。

しかるに、これまで政府と貴族院との提案は、つねにこれを『都制案』と名づけ、衆議院の提案はいつでも、これを『市政』と呼んでゐる。これは單に名前の上の差ではない。市を府の分子たることから脱却せしめて、内務大臣の直屬たらしめむとする點では、兩案とも同様であるけれども、その内容には著るしい差異があつた。すなはち、前者は都の首長を官選とし、且つ議決機關の權限を列擧主義に則つたのに反して、後者は市の首長を公選とし、また議決機關の權限を概括主義としたのである。

この内容上の差異が、これまで特別市制案の、實現されざりし主な原因である。

明治二十九年第九議會に、政府の提出した東京都制案は、府民の熾烈なる反對のために、貴族院審議中撤回された。次に明治三十年第十議會に、衆議院の提出した特別市制案は、衆議院を通過したけれども、政府これに反對し、貴族院またこれを否決した。

以來、明治三十二年第十三議會、明治三十三年第十四議會、明治三十九年第二十二議會、明治四十年第二十三議會、明治四十一年第二十四議會、明治四十二年第二十五議會、明治四十三

年第二十六議會、明治四十四年第二十七議會、各々衆議院から東京市制案を提出して、衆議院これを可決したけれども、貴族院において未議了のまゝ經過してしまつた。これに對して貴族院は、明治三十四年第十五議會、明治三十五年第十六議會、明治四十一年第二十四議會、明治四十二年第二十五議會、明治四十三年第二十六議會に、東京都制案を提出したが、これはいづれも貴族院を通過したのみで、反對に衆議院が未議了のまゝに經過したのである。

大正八年の第四十一議會には、衆議院に東京市に關する法律案が出たが、衆議院未議了のまゝで經過し、大正九年四十三議會では、特別市制に關する建議案が通過した。かくして昨今衆議院の都制案提出となつたのである。

顧みれば、都制案の沿革も、ずい分と古いものである。

しかも最近に至つて、都市特別制度施行に關する機運は、やうやく熟して來たやうに思はれる。

すなはち、第四十四議會には、特別制度の一部とも見るべき區制案の提出あり、第四十五議會では、特別制度の先驅ともいふべき、六大都市行政監督に關する法律案が通過し、大正十一年初頭には、內務省地方局から『東京都制案の綱要』が、未定稿として發表されたのである。

六、市會の態度

一方において東京市會もまた、都制案の實行運動を起してゐる。

東京市會がその實行運動を開始したのは、明治二十九年の特別市制廢止請願委員を設け、また新法案を議決したことに始まる。元來、東京、大阪、京都の三都に、特別市制を設くべしとの議は、明治二十一年市制制定當時からのことで、當時元老院は、右三都の市制は一般小市と區別して別に編成し、東京市の如きはむしろ數市に分つて、各々市長を置いて府知事にこれを總括せしむべしとの意見であつた。そしてつひに、明治二十二年、パリ市の例を範にとつて、三市に特別市制が設けられたのであるが、東京市會はこれに反對したものである。

この特別市制は、明治三十一年九月に廢止された。以來年を經るに從つて、都市の狀況は次第に變遷し、その事務もまた性質を異にするに至つたのである。東京市會の實行運動も、またこれに應じて、目的とする制度の內容は、時に多少の變更があつたけれども、或は建議案や請願案の議定に、或は實行委員の運動に、種々努力するところがあつた。しかも大體においては、年を經るとともにその運動が、ます〳〵熱心に且つ實行的

になつたことを認めなければならぬ

實行運動が漸く具體的になつたのは、大正七年市會成立の際における『高級特別市制調査委員』設置以來のことである。すなはち大正八年十月には、『東京市制案』が議定され、市會はこの成案を提げて、關係貴衆兩院議員によつて議會へ提出のことを畫策すると同時に、各方面の諒解と援助を求めるために、汎く實行運動を試みたのである。

この成案は不幸にして、第四十二議會の解散のために、議會に現はるゝに至らなかつたけれども、實行運動はこれを以つて終熄はしなかつた。すなはち、第四十三議會の開會に先つて、市會に『特別市制實行委員』を設置して、各區の擧げた十名内外の實行委員と提携して、朝野の諒解を求め、目的の貫徹に力めたのである。しかもこの度は前回の如くに成案を具することなく、單に適當なる制度の制定を望む旨を主張するに止めたので、この意味の建議が市部選出議員によつて議會に提出され、前述第四十三議會において可決された建議案といふのは、すなはちこれに基くものである。

しかし目的の貫徹は前途いまだ程遠し、從つて諸種の期成運動は、引き續き行はれてゐる。大正十一年六月の市會改選の際には、やはり實行委員が設置され、現在においてもなほその運動を持續してゐるわけである。

六、アメリカの自治運動

ベアード博士は東京市政の現狀を見て、『日本の都市を視察してゐると、いろいろな點で三十年前のアメリカの都市を見てゐるやうな氣がする』と述懷された。われ等は現在の都制案を觀察するとき、一八七五年ミッスウリ州に起つた、アメリカの『自治運動』(Home-Rule Movement)を回顧せざるを得ぬ。いづれも都市の叛逆運動である。

ホウ博士は曰ふ。——

『その(アメリカの都市の失敗の)原因は、かゝる失敗を生み出した事情のうちに見出される。そしてその事情たるや、都市の無力なることと、憲法及び州法によつて課せらるゝ多くの束縛にまで、淵源を有するものである。』

五十年前におけるアメリカの市政は、たしかにブライス卿の指摘せる如くに『アメリカン・デモクラシイの失敗を物語るもの』であつた。その都市の事務は一つも上らず、市政はボスの占領するところとなり、市會は『四十人よりなる泥棒會議』となる、都市計畫事業の如き一の見るべきものがなかつたのである。そしてホウ博士はその原因を、都市の法律的地位の無力と

いふことに歸してゐる。まことやアメリカの自治運動は、都市の法權向上の運動であつた。

再びホウ博士に從ふならば、アメリカ市政失敗の原因は、次の五條件に歸着するものであつた。

一、地方事務を處理するについて、都市の自由または自治が缺乏してゐたこと。

二、都市條件には多くの束縛があり、市理事者の權限には多くの制限があつたこと。

三、路面を利用する公共事業が、會社として私人の所有となつてゐたこと。

四、都市の計畫と建設について、私有財産權が優越權を占めてゐたこと。

五、都市計畫とその實行とが、市條令によらずして、州法によつて規律されてゐたこと。

『これ等の諸條件が、一般にわれ等の失敗の責を負ふべき、個人的、道德的、政治的の條件である。民本主義にはその機會が與へられなかつた。それはあまりに多くの障碍に對して働らきかけるべく餘儀なくされたのである。』

ホウ博士は論を進める。

『都市は國家の奴僕となつた。それは憲法と法律との規定する地域を占め、その與ふる權限を有する行政區劃にすぎない。またつねにさうであつた。法律上都市は、一個の村落または町と異るところがない。』

これがアメリカの都市の失敗の原因であり、アメリカの都市に、自治運動の起つた所以である。

アメリカの都市は、特に市條例によつて認められた權限以上に、なに者をも持たなかつた。しかもその條令たるや、なん時にても自由に變更し、また停止しうる。例へば都市の公債の如き、その募債額に非常の制限が加へられてゐた。かくして都市がなにをなし得よう。

七、アメリカの自治運動

ニウヨーク市政協會（Municipal Government Association of New York)は、ニウヨーク市の事態について、次の如く批評してゐる。

『ニウヨーク州の都市と村落とは、絶對に州立法の支配の下にある。立法權は、都市村落がいかなる權限を有すべきやを決定するばかりでなく、その權限を行使すべき態様までも規定する。』かくして純粹の市政事務に對する州の干渉が、ニウヨーク州の市政をして、政黨の爪牙となすの結果に陷れるは、他州に

おけると同様であつた。都市の設立も廢止も、課税も免税も、實際上多數黨の意のまゝである。立法權は、都市のうちに不必要な仕事を創設して、都市にその費用の支拂を强制することができる。立法によれば、市民の希望とは無關係に、不必要にして無益なる政治機關を、都市のうちに樹立することができる。こんなことどもが、每年數多くの特別令によつてなされたものである。』

自由を缺くといふことが、最も重大なる制度上の缺陷である。そこにアメリカの自治運動は基礎をおく。自由と自治とは都市の第一の要求である。そしてこれまでのアメリカの市政の失敗は、悉く自治の缺乏がその責を負ふべきものである。

アメリカの自治運動は、一八七五年、はじめてミスウリ州に起つた。州の憲法はセントルイスの市に對して、自ら市條令を制定するの權を與へた。市は條件を起草し、これを市の選擧民に附託する。州府會に附する必要なしといふのである。

この規定に從つて、セントルイスは一八七六年その條例を決定した。カンサス市は一八九〇年これを採用した。

一八七九年、カルフオルニアもまた自治規定をその憲法に認め都市をして自ら條令を決定せしめることとなつた、一八八九年、ワシントン州は、人口二萬以上の都市に對して、自ら市條令を制定するの權を認めた。コロラド、ワイオミン、ミネソタ、オレゴン、オクラホマ、ミシガン。みな相次いで自治運動を完成した。

一九一二年のオハイオ州憲法は、すこぶる廣汎なる權限を都市に與へてゐる。

一、都市と村落とは、その政治形態を自由に決定することができる。そのためには十五名の起草委員を擧げて、條令を作成し、人民の議に附すること。

二、州議會は一般法令または特別法令を決定し、都市または村落をして、多數決により採否を決定せしめることをうる。

三、州議會は都市行政についての一般法を規定して、自ら條令を作成せさるすべての都市または村落に對して、自働的にこれを施行せしめることを得る。

州の憲法はまた、都市の行ふべき行政事務について、多くの權限を分與した。

一、一般立法と牴觸せさる範圍において、警察、衞生、その他の規律をなすこと。

二、公共事業を買收、新設、所有、讓渡、運轉することを得る。そしてこれを擔保とする市債を發行することをうる。

かくしてアメリカの自治運動は、燎原の火の行く如く、忽ち

にしてアメリカ全土を蔽ひ、つひに今日の都市隆盛を來したのである。私はブライス卿とともに叫ばねばならぬ。

『アメリカ二十五年の市政の發達は、まことに驚嘆に値する。』

八、アメリカの都市行政

都制案が、いかなる行政組織を大都市に行はんとするか、それはまだ問題であるが、その制定には相當に大きな注意を拂ふ必要がある。ホウ博士は曰く『過去十年における市政の進歩は、大部分行政組織の變更によつて來たされたものである。』

そのうち最も重要な變更は次の通りである。

一、選擧制度として、單一、直接選擧制を採用したこと。

二、分局及び委員制度と二院參事會制度を廢止して、立法權を小數の一院に集中したこと。

三、短期投票をとつたこと。

四、行政組織として、フエデラル案、コムミツション案、またはマネジヤー案をとつたこと。

右の三案のうち、フエデラル案は、普通大都市の採用するところとなり、コムミツション案とマネジヤー案とは、人口一萬以下の都市がこれをとつた。地方にして言へば、東部地方は主としてフエデラル案により、西部地方はコムミツション案またはマネジヤー案を採用するものが多かつた。

三案の比較はこれを他日に讓り、こゝには主としてフエデラル案の梗概を紹介する。

フエデラル案は一名メエヤア案（市長案）ともいふ。その骨子は、立法權は區選出の一院市會に集中し、行政權はこれを市長一人に歸するものである。これまで市會や分科會や獨立部局に分割されてゐた行政權はすべて消失して、市長が唯一の行政首長となつたのである。そして市會は純粹の立法機關となる。

この改正によつて、市長は事實上の政府となり、市會は承認抗辯の團體にすぎざるものとなつた。市長の手にすべての權限を集中したことは、さらに地方行政事務を促進した。それと同時に有能な人物が都市政治に吸引されることとなり、しかも一つの經歷としても、またその實力を試むべき好機會としても、喜んで市長の職につくことになつた。

フエデラル案について、最も進歩せる組織を有するものは、一九一三年のクリーヴランド條例であるといはれてゐる。この要目は次の如し。

（一）市長は二年の任期をもつて、市民が直接に選擧する。市長はその市の責任ある行政首長である。

（二）市長の下に、法律、公益事業、公共福利、公共安全、

財政、公共事業の六局をおき局長の任命、免職は市長これを行ふ。

（三）右の六局のほかに、都市計畫委員會、情報部、市民事務委員會、その他無給顧問局をおく。

（四）市會は二十六名の議員よりなり、各區より一名づゝ、二年の任期をもつて選擧される。市長と局長とは市會に議席を有し、討議に加はることができるが、投票權はない。

市長、吏員及び市會に對する人民の監督は、いろ／＼な方法で行はれる。

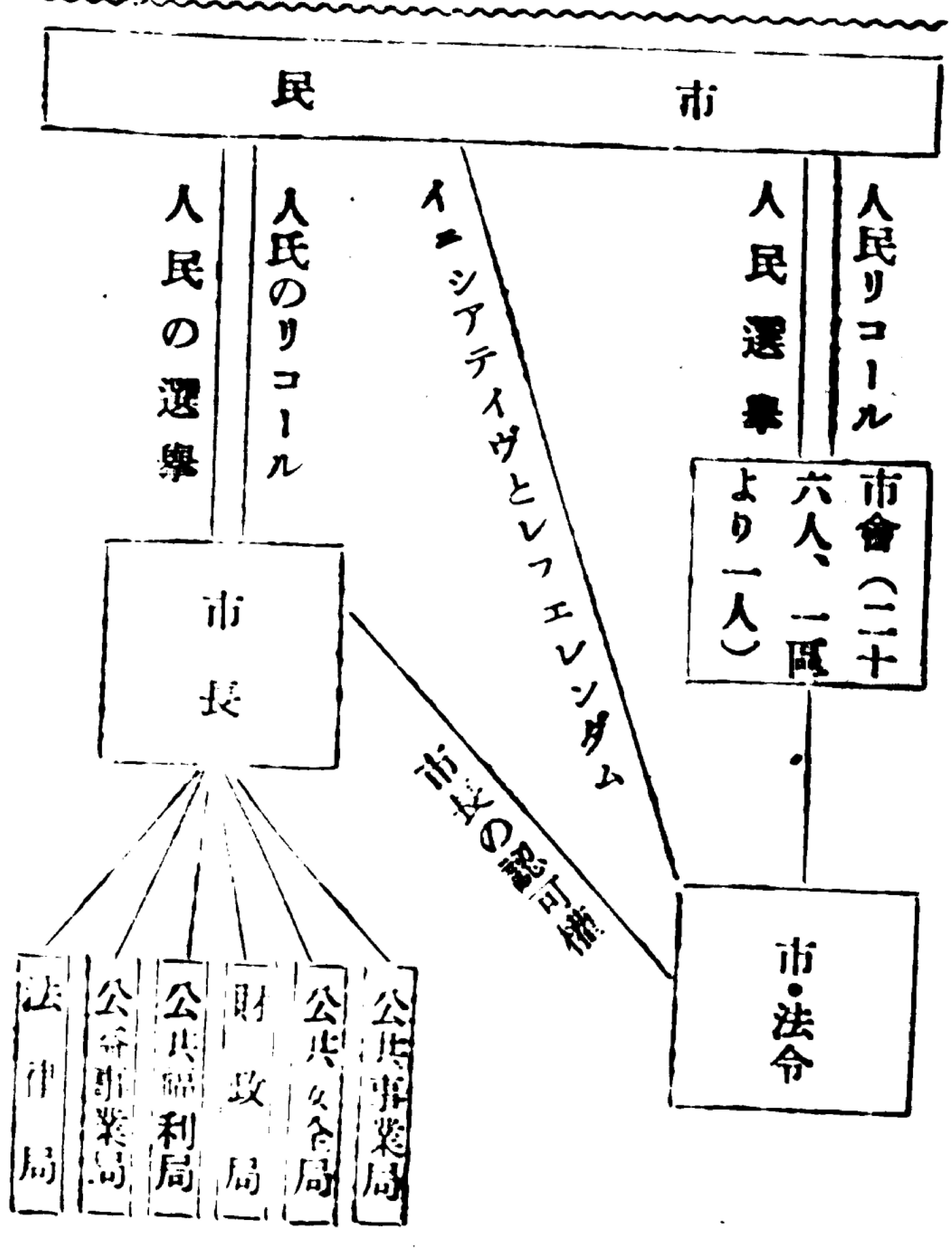
（一）、選擧については政黨を認めない。

（二）、選擇投票制を認める。

（三）、リコール（Recall）の制度を認め、全市においては選擧權者一萬五千、區については選擧權者六百の署名あるときは、選擧された公吏はその職を失ふ。

（四）、イニシアティヴの制度によつて、五千人以上の選擧權者の署名ある建議案は、必らず市會にかけなければならぬこととなつてゐる。若しその建議案が市會を通過しないときは、なほ更に五千人の選擧權の署名によつて、これをレフエレンダムに附することを得る。建議案がレフエレンダムにおいて、多數投票を得たるときは、直ちに市の法律となる。また一旦市會を通過した法律と雖も、選擧權者一割以上の請願によつて、レフエレンダムに附することをうる。

その行政組織を圖解すれば、次の通りである。



九、都市計畫事業

あまりにながくアメリカのことを私は語りすぎた。話はふたたび日本の都市にかへらねばならぬ。

大正十年九月八日、わが皇太子殿下は、東京市御歸朝祝賀會

において、次のやうな御詞を賜はつた。

『東京市ハ今方ニ都市施設ノ改善ヲ講究スト聞ク予ハ切ニ好成蹟ヲ得テ市民ノ幸福ト帝都ノ殷盛トヲ増進センコトヲ望ム』

これすなはち、歐洲の都市を視察し給へる皇太子殿下が、東京市の實情に顧みての、感銘深き御諚と拜察し奉る。われ等市民たるもの、ますく發奮の意を決するとともに、冷汗の感に堪えないものである。

都市計畫は日本の都市に對して、解決を迫れる謎である。この謎を解かないうちは、日本の都市は都市となることを得ない。

いま日本の都市は、その都市計畫の首途にあたつて、都制案なるものを有する。都制案の內容の細目に至つては、なほ多くの講究すべき問題が殘つてゐることは爭はれぬ。しかしそれが都市の獨立的傾向と、非政治的傾向に、集權的傾向とを代表する限りにおいては、都市は双手をあげてこれを歡迎しなければならない。いなその貫徹のために、双腕をはつて努力しなければならない。

都制案は都市計畫の大前提である。そはアメリカの自治運動と、その結果たる市條令の改正が、その都市計畫事業の前提をなしたると、同一の意味においてである。都市計畫の事業が、市民の覺醒と、有力なる市長とのみによつて行はれうるものと信ずるのは、あまりに組織の力を無視したる考である。都市計畫事業は一つの組織である。精巧なる機械設計である。その實現はたゞ、有効なる制度のみこれをよくする。

都市計畫事業といへば、前東京市長の八億圓計畫がすぐに聯想される。私は案の當否よりも、都市計畫なるものを、具體的の事實として、われ等の前につきつけられし態度そのものに、敬服するものである。八億圓計畫が實現されざる限り、東京市の前途には、いつまでも謎が殘される。

あゝこの謎を解くものは何ぞや。現在の東京市の行政權と財政權とが、果してこの謎を解くの能力があるか。私は大きく『否』と書かなくてはならぬ。後藤子には八億圓計畫と、都制案とを殘して、漂然として東京市を去つた。

われ等は都制案を鍵として、八億圓計畫の謎を解かねばならぬ。あたかもアメリカの都市が、その自治運動を關鍵として、都市計畫事業を完成したりしが如くに。

一〇、八億圓計畫

後藤前市長のいはゆる『八億圓計畫』なるものは、次の十六項目からなつてゐる。

（一）都市計畫の設計に基く重要街路の新設及擴張
（二）重要街路の鋪裝工事
（三）重要街路を占用する工作物（地下埋設物及路上建設物類）の整理
（四）糞尿及塵芥類の處分設備
（五）社會事業に關する各種の施設
（六）小學教育機關の擴充
（七）下水改良事業の完成
（八）住宅地の經營
（九）電氣及瓦斯事業の改善
（一〇）港灣の修築及水運の改良
（一一）河川の改修
（一二）大小公園及廣場の新設及改設
（一三）葬物納骨堂及墓地火葬場類の新設
（一四）市場及屠場類の新設
（一五）上水道擴張事業の完成
（一六）市廳舍及公會堂の新營

この計畫を見るときは、いはゆる都市計畫なるものが、一個のビズネスなりとの感を深うせざるを得ない。その範圍は、道路、運輸、水道、下水、河川、港灣、電氣、瓦斯、公園、住宅、市場、墓地、その他百般に亘つてゐるが、要するに市民に對して、いかによき『家』を供すべきやといふことにすぎない。

『家』とは單なる住宅をさすものではない。市民が四六時中、つねに住宅内に閉居するものならいさ知らず、その一日の半分を住宅外に生活する以上、市民の『家』はその住宅ではない。都市自體がすなはち市民の『家』である。そして都市計畫とは全市民の家の改造の問題である。

試みに思へ、いかにその住宅を、高壯にしかも優雅に設備したとしても、一度び足を門の外に出すときは、道路は泥田のやうにぬかり、空には電線網が巣をはり、電車は人をぶらさげてガタツキ、下水は道にあふれ、電燈はとき〲停電して全市を暗とし、杖をひくべき公園さへ坎に向かつたらどうだらう。市民はよき家をもつたといへるだらうか。

工場施設が問題となつてゐるときであつた。ある工場主は肩を聳やかして言つた。

『なるほどおれの工場の施設は完備してはゐない。勞働者の衛生にも悪からう。しかしその勞働者が、一たび工場の外に出て、道を歩みその住宅に眠るときの狀態を考へて見ろ。あのじめじめした裏長屋より、おれの工場の方がよつぽど衛生的だ。』

都市計畫事業は社會問題である。社會問題以上の社會問題で

ある。

話がまた岐路にそれた。

都市計畫の上から見たら、八億圓計畫はまだその序曲である。徹底的に都市計畫を實行して、全市民に對してよき『家』を供給し、もつてこの社會問題を解決せんと思ふならば、八億圓位で足るはづがない八億圓計畫をもつて驚ろくものは、共に都市計畫を談ずるに足りない。

二、都市計畫と都制案

しかるに東京市は、この八億圓計畫すらも、可決することはできなかつた。いや後藤子も、この八億圓計畫を、市會に提出することとすらしなかつたのである。それは一個の研究案として、非公式に公表されたにすぎない。

なぜであるか。

東京市には、都市計畫を實行すべき、行政權と財政權とがないからである。

都制案とは、この東京市に缺如せる權限を、新に賦與しやうといふ案である。

私はこの際具體的に、各種の都市計畫事業について、細目に亘る研究を披瀝しやうといふ野心をもたない。それは各題目について、獨立の論策をなすべき大問題である。しかしたゞこれだけのことは言へる、『都市計畫の事業は、その性質において、都市の事業である。都市にその遂行の責任と權限とが與へられたとき、始めて成就さるべき性質のものである。』と。

現在の市制は、この責任と權限とを、都市に與へてゐない。都市は一個の行政區劃にすぎない。これを自治體と言つてゐるけれども、それはたゞ市長を市會が選擧するといふの意味にすぎない。都市には獨立がない。たゞ行政上、地域を劃した國家の一部にすぎない。

若し都市計畫を實行するの責任と權限を有するものがありとするならば、それは『國家』だけである。すべてのものはいま國家にある。だから後藤子がその八億圓計畫を、東京市に提供したのは、いさゝか見當違ひだとも言へる。現在の市は無能力者だ。

しかし國家に、果してこれを實行するの誠意があるだらうか。いや若し國家がこれをやるとして、都市は默然と見てゐるべきであらうか。養老院に入れられた廢人のやうに、自分の仕事を他人にやつてもらつて、それで安んじてゐるのであらうか。

さうではない。東京市は都市計畫を自分でやるつもりでゐる。たゞそのつもりである。そして國家もそのつもりである。しかしつもりだけで、その必要な權限は一つもない。そこで八億圓計畫が、暗から暗にと葬られ去るのである。

私は、都制案が通過したら、直ちに都制計畫が、面目を一新するものと、斷言するほどの勇氣はない。しかし少なくとも、都制案の制定が、これに必要なる權限の一部を、都市に與ふるの結果となるべきは、これを豫想するに難くない。そして市民に對して、都市計畫についての興味と決心とを與ふべきことは。

都市計畫と都制案との關係の第一は、都制案なるものが、都市計畫に必要なる權限を、都市に與へるといふことにある。

第二に都制案は、都市計畫の區域たる近郊地を、大都市の區域のうちに編入して、その集權的施設を、可能ならしむるものである。

一二、郊外地の征服

現代大都市の傾向の一は、郊外地の都市生活に對する重要性が、日に日に增加するといふことである。從つて都制案の都市計畫に對する意義の第二は、この重要なる郊外地をもつて、都市の範圍内に編入するといふことでなくてはならぬ。

これを東京市の例について見やうか。その最近十年間の人口增加は、次の二表の如き結果をあらはしてゐる。

(第一) 東京市都市計畫區域人口增加表

	東京市	郡部				
		近郊			外郊	郡部計
		隣接町村	隣接せざる町村	近郊計		
	千人	千人	千人	千人	千人	千人
明治四十四年	一、九一九	二六一	一六〇	四二一	一九九	六二〇
大正元年	二、〇二四	二九七	一七〇	四六七	二〇四	六七二
大正二年	二、〇四七	三四三	一七六	五一九	二一二	七三〇
大正三年	二、一一五	三七三	一八九	五六二	二二三	七八五
大正四年	二、二五八	三九二	一九二	五八四	二二一	八〇五
大正五年	二、二九六	四二七	二〇七	六三四	二二八	八六二
大正六年	二、三六六	四九〇	二二四	七一三	二三四	九四七
大正七年	二、三四六	五一六	二四一	七五七	二三四	九九二
大正八年	二、三七四	五六八	二六二	八三〇	一四〇	一、〇七〇
大正九年	二、三七五	六四四	二九一	九三五	二四一	一、一七六
大正十年	二、四三五	六九〇	三二四	一、〇一四	二五六	一、二六〇
十年間增加人口	五一六	四二九	一六四	五九二	五七	六五〇

（第二）東京都市計畫區域人口增加率表

	東京市	郡部 近郊 隣接町村	郡部 近郊 隣接セザル町村	郡部 近郊 近郊計	郡部 外郊	郡部計
	千分比	千分比	千分比	千分比	千分比	千分比
大正元年	五四	一三九	六三	一一〇	二七	八四
大正二年	一一	一五三	三五	一一〇	三六	八七
大正三年	三三	八九	七五	八五	五三	七五
大正四年	六八	五〇	一七	三九	九	二五
大正五年	一七	八九	七六	八五	三四	七一
大正六年	三〇	一四八	七九	一二五	二二	九八
大正七年	九	五三	八〇	六二	二	四八
大正八年	一二	一〇〇	八五	九五	二七	七九
大正九年	—	一三四	一一二	一二七	三	九九
大正十年	二五	七一	一一二	八四	六〇	七九
十年間人口增加率	二六九	一、六四四	一、〇二五	一、四〇九	二八五	一、〇四八

すなはち、東京市においては、その人口は十年間に、百九十二萬が二百四十三萬五千となれるにすぎないが、隣接町村は、二十六萬が一躍して六十九萬となり、四十二萬九千の增加を示してゐる。增加率にして言へば、東京市の二割七分弱に對して、隣接町村は、十六割强となつてゐるのである。

これを郡部と市部と比較するに、ひとり隣接町村が異常の發達をとげたるのみならず、その隣接せざる近郊町村も、また近郊合計も、外郊も、郡部の合計も、ともに市部の人口增加率に超えてゐる。すなはち東京市の最近十年間人口增加率二六、九に對して、近郊は一六四四であり、隣接せざる近郊町村は一〇二五、近郊合計は一四〇九、外郊は二八五、郡部合計は一〇四八を示す。

概言すれば、東京市の人口は、やうやく飽和狀態に近して、その人口增加率は次第に停止に近づかんとしつゝあるに反して、郡部の人口增加はます〳〵急にして、最近十年間にしてすでに二倍以上となり、近郊町村は二倍四、隣接町村は二倍六となつてゐるのである。

これ都市の人口が、漸くにして郊外に溢れ出でんとする傾向を物語るものであり、同時に郊外地の都市計畫事業に對する重要性を、暗示するものである。

一三、郊外地の征服（一）

なにゆえに郊外地が、都市にとつてそれほどの重要性を有するに至つたかといふことは、都市學上重要な問題であるが、いまこゝに詳說しない。たゞ郊外地が、現在においては、すでに都市の一部として、不可分の有機的關係を有するに至つたとい

上事實を、率直に認めさへすればよい。

東京都市計畫が、一定の區域を設定して、これをその計畫の規準となしたのは、その區域をもつて、都市生活上の有機的機能と認めたるが故にほかならない。いまや都市は、都市のみをもつて單獨に立つことを得ない。從つて都市計畫は、郊外地を包容する大都市の建設によつてのみ可能である。

反對に郊外地は、都市によつて生活するものである。郊外地が異常の發達を遂げたのは、都市に隣接せるが故にほかならない。從つて都市計畫實行によつて、經濟上、精神上の利益を受くるものは、ひとり都市のみに限らず、郊外地もまた然りである。

かくの如く、いまや都市とその郊外地は、互に依立的關係に立つ。これ都市と郊外地との有機的機能が云爲さるゝ所以にして、同時に都市計畫事業が、大都市區域の設定を必要とする理由である。

假に東京市について見れば、東京の商業上の中心地點を、交通上の中心たる東京驛附近と推定し、これを中心點とする半經四里の圓圏を劃いて、その圓圏に包容さるゝ區域を、都市計畫區域と定めてゐる。そは今後交通機關の相當なる普及によつて、一般公衆が約一時間以内に商業中心地に集散しうべき範圍であつて、同時に都市生活の有機的機能を發揮しうべき限界と思考したものである。そしてこの圓圏を基準として、これに交通の設備、人口の密度、土地の形態、行政の區別などを具體的要件として、東京市及び東京市を繞る六郡八十四ケ町村を、東京都市計畫區域と定めたのである。

都制案なるものが、都市計畫事業を基礎として出現せる以上、そして都市計畫區域が、如上の考慮の下に決定されたる限り、都制を施行すべき區域を、大體において都市計畫區域の範圍に一致せしむべきは、多く論ずる必要はない。

都市計畫の事業は道路、廣場、河川、港灣、公園、鐵道、軌道、運河、上水道、下水道、土地區劃整理、運動場、住宅經營、市場、屠場、墓地、火葬場、塵埃燒却場、その他各般の事項に渉る。その範圍が廣汎に亙るのみならず、一として都市生活に密接の交渉を有たないものはない。そしてその都市計畫區域が、その事業の統一的一團として存立する限り、都市生活を律する自治制度も、これと併立して、不可分的に同一範圍に適用さるべきものである。

これを要するに、大都市の郊外地は、都市計畫の事業の故に、從つて都市生活の完成の故に、都市との間の有機的關係を有する。これは事實上の有機體だ。そして都制案は、この事實

上の有機體を、法制上の獨立組織化せんとする。

これが都制案の第二の意義である。

一四、自治とは何ぞや

私は結論に急ぐ。

後藤子が東京市を去るや、その感想をのべて曰く。『自分は東京市長の職にゐて、いろ〳〵な計畫を立てた。しかもその計畫は殆んどその緒についたばかりだ。たゞ一つ愉快に感ずるのは、東京市に自治の本義を普及したことである。』

後藤子はたして自治の本義を、東京市に普及したりや否や。自治とは市民の精神傾向であらうか。市町村をもつて自治體なりとは、誰が言ひ初めけん。

自治とは何ぞや。

ピンカード氏曰く。

『ほんとの意味の自治といふのは、地方團體の權限が、自分の事務を自分で處理するに足るほどの、充分に大きいものであるといふことだ。それは法律の干渉なしに、その事務を處理することを許されてゐるといふことだ。かくしてすべての都市の市民が、自分の生活してゐる狀態に對して、健全なる責任觀念を感得し、これ等の狀態に對して、明確なる變革と改進とを齎らす力が、たしかに自分達の掌中にあるといふことを、確信せしめることである。』

自治とは精神ではない。精神を發生せしむべき制度である。自治の權能を與へずして、自治を地方團體に强制するのは、それは國家の矛盾である。

都市自治の權能は、都市の叛逆によつて、始めて實現されるといふ私の確信は、この事實に基くものである。

都制案に對する批難は、いろ〳〵な觀點から、いろ〳〵に言はれる。しかしその方向が都市の獨立的傾向にあり、その內容が非政治的傾向を代表し、その形式が集權的傾向に向へる限りにおいて、都制案は都市の叛逆の一現象であり、從つて時代の動き行く一徵象なることは、これを明言せざるをえない。

もとより都制案の實施によつて、すべてが完成するものではない。いな都制案の實現は都市の叛逆の首途である。その第一步である。叛逆の旗をあぐべき、法制的基礎を與ふるものである。

都市は國家の干渉から離脫して、自らの足をもつて步むとき、始めて都市の任務を遂行することができる。そして眞の意味の、自治體となることができる

自治と國家の干渉とは、絕對的に矛盾條件である。

都市は叛逆する。逆徒たるの光榮にあらずしては、都市は都市たることを得ない。日本の都市よ。まづ自治を求めよ。行政的獨立を要求せよ。都制案を旗印として、行政上の獨立運動を起こす。これが都市運動の第一歩である。

財政篇

一、財政的獨立

都市計畫の前途にある日本の都市にとつて、いま一つ大いなる障碍は、財政上の國家依立である。都市は行政上の獨立とともに、財政上の獨立を要する。

すべて資本主義の經濟組織においては、主要の問題は金である。從つて都市の獨立とは、財政の獨立にほかならない。殊にいま都市は、前代未聞の都市計畫の時代に入つた。都市計畫ほど金のいる事業はない。これを喩ふれば、都市は投資の時代である。その結局においてひき合ふ事業であることは疑ない。しかし當面の問題として金が入要だ。

ジョン・バーンズ曰く、『良好な都市計畫に投資することは、その計畫が市の新設部分に加へられる場合でも、または市の既設部分の改正にある場合でも、とにかくそれを一年といふ短期から見れば、非常に出費の多いものなることは爭はれまい。若しこれを五年間といふ相當の年數から見るときは、その利益なることは首肯せられるであらう。さらに五十年を一期として逆觀するならば、もつと早く計畫を實施すればよかつたといふ後悔の念さへも、市民に起させる位に有利なることが、感ぜられるであらう』と。

まことに然り。都市計畫は引き合ふ投資である。同時に巨額を要する事業である。こゝにおいて現代の都市は、財政難といふ問題に、はたと行き詰るのである。

都制案が、行政的獨立を都市に與ふるとともに、財政上にも多大の便宜と餘裕とを與へることは、それは勿論のことである。殊に府縣と水平の地位に都市をおくことによつて、家屋税及び戸數割なる獨立税を、都市の財政項目のうちに加へることは、見逃し難き點である。しかし一方から考へれば、戸數割こそ日本の地方財政最悪の制度と言はるゝものであり、さらに戸數割と擇一關係にかゝる家屋税も、また等しく非難を免れない。

若し然りとせば、獨立税としての戸數割と家屋税には、多くの望を囑することはできない。茲に至つて都市財政は、依然附加制限を有する國税附加税によらざるを得ぬこととなり財政の獨立は得て望むべからずである。

私の意見をもつてすれば、戸數割はなるべく輕減すべしとなすものである。また家屋税にしても、その税法改正による增收を除くの外、增税は不可である。なぜなら家屋税は、都市人口の大部分を占むる借家人に轉嫁し、消費税的臭味を帶び來たるが故である。こゝにおいて私は、都制案のほかに都市の財政的獨立を求めなければならない。

この見地から、本篇においては、都制案を論外として、財政的獨立を論ずることにした。また事理よりしても、都制案にのみ財政的希望をつなぐのは、むしろ由なき業である。

われ等は行政的獨立と相並んで、別個の天地において、財政的獨立を要求する。財政的獨立のなきところに、眞の都市の獨立はない。

二、東京市の財政

試みにこれを、東京市の財政について見やう。大正十一年度初同決定豫算によれば、東京市の歳入次の如し。

東京市歳入表

	歳入額(千圓)	千分比
財產ヨリ生ズル收入	一、二三五	二三
使用料及手數料	一、七四三	三三
國庫下渡金	二三五	四
交付金	七七四	一四
府補助金	一六一	三
寄附金	一二八	二
財產賣拂代	八四二	一六
繰越金	三、〇六四	五七
市税	二三、三六七	四三六
市債及借入金	八、二〇〇	一五三
其ノ他	一三、七九三	二五九
計	五三、五四四	一、〇〇〇

かくの如く、東京市の歳入を支配するものは、二千三百萬圓の市税と八百萬圓の市債及借入金である。しからばこの歳入の約半額を占むる市税は、いかにして徵課されてゐるか。同じく大正十一年度初同決定豫算による。

東京市税表

	税額(千圓)	千分比
地租附加税	七三二	三一
國税營業税附加税	五、一七〇	二二一
所得税附加税	二、七三〇	一一二

賣藥營業稅附加稅	二	一
鑛業稅附加稅	一	一
取引所營業稅附加稅	六六	三
家屋稅附加稅	五、〇二八	二一一
府稅營業稅附加稅	一、〇三五	四四
雜種稅附加稅	二、七六二	一一四
雜種特別稅	三、二六六	一四〇
都市計畫特別稅	二、五七六	一一〇
計	二三、三六七	一、〇〇〇

見よ。東京市稅の根本をなすべき租稅は、その總額二千三百萬圓のうち、一千七百五十萬圓は、すべて國稅及び府縣稅の附加稅である。曰く附加稅、曰く附加稅である。特別稅はたゞ、稅額にして三百萬圓、全額の一割四分にすぎない。そしてその附加稅は、半は國稅の附加稅、半は府稅の附加稅となつてゐる。

これを喩ふるならば、東京市の財政は、半ばは國家に、半ばは東京府に依立する、寄生虫にすぎない。その財政は國家と府とによつて支給され、そして支配されてゐるのである。

しかもかくの如く、東京市の租稅收入が特別稅に薄くして、附加稅に厚き所以のものは何ぞや。曰く、想像しうべき稅目は、殆んどすべて國稅と府稅とに漁りつくされ、殘るところは遊興稅その他の小稅目にすぎないことである。その特別稅に如何に窮したるかは、都市計畫の實行に甚く多額の資金を調達するために、東京市計畫特別稅」なるものを認めながら、その內實は、地租、國稅營業稅、府營業稅、雜種稅等に對する「特別」附加稅を認容せるにすぎざることとである。

財政の獨立なき東京市の稅制において「特別」の增徵を得んと欲するならば、「特別」の「附加」を認むるよりほかにないのである。

從つて、市稅はすべて附加稅に向つて集中する。現在において、その附加稅は、法規の許す限度において、殆んど總ての稅種に及んでゐる。のみならずその課率に至つては、國稅附加稅においては、多く法定制限率以上に上り、法定制限率なき府稅附加稅も、またはなはだ高率に上つてゐるのである。

次表を見るべし。

東京市稅課率表

	普通市稅 實際課率	普通市稅 法定制限課率	都市計畫特別稅 實際課率	都市計畫特別稅 法定制限課率
宅地租附加	三〇六厘	二八〇厘	一二五厘	一二五厘

其他の地租附加	七二六	六六〇	一二五	一七五
國稅營業稅附加	四七〇	四七〇	一五〇	一七〇
所得稅附加	一五八	一四〇	—	—
家屋稅附加	三、九三九	—	—	—
府稅營業稅附加	一、三五〇	—	二五〇	四〇〇
雜種稅附加	一、三五〇	—	二五〇	四〇〇

かくの如き狀態にあつて、なほ都市計畫事業に要すべき財政上の餘裕を見出さんとするは、殆んど不能事に屬する。

本年春東京市が市長を求むるにあたつて『財政家』を候補に擧げんとの說があつた如き、識者の哄笑をかふの價値がある。この財政權をもつてして、なほ財政上の手腕を振ふことができる人があつたならば、それは英雄ではない。神だ。

財政難は東京市の根本弊である。しかし現實の財政權をもつてしては、人間の力ではとても財政難は救はれない。財政難を救濟するものは、人間ではなくて制度である。

都市の財政的獨立！　それ以外には方法はない。

三、地租委讓問題

そこに忽然として、地租委讓論があらはれる。

都市はいま都市計畫事業の首途に立ち、そしてそのために財政的獨立を求めつゝあるとき、そこに忽然として地租委讓論があらはれる。

都市財政を救ふものは、地租委讓である。

『地租委讓といふことは、初め一部の政治家(政友會)が、地方民の歡心をつなぐ爲、殊に明年の總選擧を眼前にひかへて、唱道した議論』であるさうである。然り而して、地租委讓反對論も、他の一部の政治家が(憲政會)が、明年の總選擧を眼前にひかへて、躍起となつて反對する議論である。

われ等をして、政治家の如からず、學者のごとくに語らしめよ。

地租委讓の問題は、これを政黨の玩具たらしむべく、あまりに重大なる國家問題である。そはひとり七千萬圓の金額處分の問題ではない。日本の租稅體系に關する問題である。私は地租委讓論が、政黨の甘言と僞瞞から放免されて、學界の眞面目なる討究に、移植されんことを希求する。

そして一個の學徒として、都市財政の上から、地租委讓論を觀る。

一個の學徒としてこれを觀るとき、地租の委讓は、もはや政治論ではない。なに人がこれを唱道し、なんの意圖をもつてこ

れに反對せるやは、もはや問題ではない。いま地租委讓を論ずるのは、政爭論の渦中に投ずることになるかも知れない。それは相當いやなことだ。しかし私は敢てその恥をしのぶ。若し地租委讓といふことが、都市の財政的獨立に關すること、しかく深からず、日本の租稅體系に及ぼす影響が、しかく甚大でなかつたならば、私はおそらく默したであらう。

しかし私は默さない。わが愛する國家と都市のために。

そこでまづ斷つておく。それは地租委讓といふことが、必らず營業稅委讓を伴ふといふことである。なぜなら地租と營業稅とは、ともに一つの收益稅として、一は農業者に他は商工業者に課するものであつて、一を委讓して他を國稅に殘こすのは、商工業者に對して不公平だといふのである。從つて農村に寛にして都市に酷だといふのである。

事理必らずしも然らざる所以は、後に至つて說くところである。しかしこれを租稅體系の上から觀るならば、この二收益稅はともに地方に委讓するにましたことはない。若し七千萬圓の財政剩餘金を、いかに處分すべきかといふ問題ならばいざ知らず、こと稅制整理の目的に出ずる以上、地租と營業稅とは、ともに地方に委讓すべきものである。

從つて以下說くところ、地租委讓に專にして、營業稅委讓に涉るところあるべきも、その立論は、兩者の併行的委讓を要件とする趣旨なること、豫め諒解を願ひたい。

四、租稅體系

地租營業稅の地方委讓に反對する論據のうち、最も手痛い反擊は、それが日本の租稅體系を紊すものであるといふ議論である。

論者は曰く『わが國の租稅制度の體系から考へれば、地方は營業稅と相對立して、直接稅法における左右兩翼をなすものである。この二稅あることによつて、農業者と商工業者とは、各自の收益に負擔を課せられ、稅法上の權衡をたもつを得るのである。然るに今地租を地方に委讓して、ひとり營業稅のみを國稅に止とめるといふことは、求めて租稅の體系を畸形的のものたらしめる譏を免れないであらう』と。

私は言ふ。——それでは地租と營業稅と、相並んで地方に委讓したらいゝではないか。始めつからさう言つてゐるではないか。

こゝにおいて論者は言をつゞけて曰く『すなはち地租と營業稅とは、租稅制度の體系において、不可分の關係にあるものであるから、その一を地方に委讓する以上は、他の一にもまた同樣

の處置に出でなければならぬ。然るにこの兩税の收入は、合して一億四千萬圓に上る。この好財源を失つて、國家は果してその租税體系を建てうるの自信があるか』と。

私は言ふ。——まことに然り、現在の日本の租税體系において、地租と營業税とが、國税直接税の兩翼をなすものなることは、私もこれを認める。しかし私は反問しなければならない。現在の租税組織が、つねに必らず理想的に完全なる租税體系であるかと。

なるほど地租と營業税とを地方に委讓してしまへば、現在の租税體系は、非常な動搖をうける。税額にして一億四千萬圓の財源を失ふばかりでなく、直税はその兩翼を失ふこととなる。しかし直税は、必らず兩翼をもたねばならぬのか。

地租と營業税との地方委讓によつて、租税體系が紊れるといふのは　理想的體系が紊れるといふ意味ではない。たゞ現在の租税體系に、一大變革を來たすといふまでのことだ。

そこで私は再び問ふ。——一體租税體系といふのは、なんのことだ。

租税體系といふのは、國税組織のことばかりではない。地方税制もまた租税體系の一部をなすものである。國税と地方税と、相並んで租税體系をなすのである。國税收入七億三千萬圓地方税收入六億四千萬圓。相並んでこそ完全なる租税體系をなすのである。しかるに一方地方税には、戸數割または家屋税の如き惡税をもつて、その財政組織の根本となさしめておいて、他は曰く附加税でもつてごまかし、地方税制の獨立を自ら破壞しておきながら、租税體系を云爲するくらい、それほど滑稽なことはない。

論者は、現在の租税體系が破壞されることを、なによりも恐れてゐるやうである。そこでこれから、現在の日本の租税體系が、どれほど『完全』なものであるかといふことを、調らべて見やう。

五、日本の税制

まづ國税組織から見る。

日本の國税の總額は、七億三千四百萬圓。その筆頭をなすものは、所得税の二億三百萬圓である。これが直税の大本として、左右に地租の七千四百萬圓と、營業税の六千六百萬圓を從へ、それに相續税、通行税、鑛業税、取引所税等を加へて、約三億八千萬圓の直税を形成してゐる。

これに對抗する間接消費税は、酒税の一億八千八百萬圓である。これがまた左右に砂糖消費税の四千三百萬圓、織物消費税

の四千二百萬圓、を加へ、その他醤油税、通行税等を加へて、約二億八千萬圓を算してゐる。

この直、税の三億八千萬圓と、間接税の二億八千萬圓に、關税及噸税の七千二百萬圓を加へて、合計七億三千萬圓の國税組織を形成してゐるのである。

大正十一年度歳入表次の如し

	千圓
地租	七四、一四四
所得税	二〇三、五七九
營業税	六六、八三八
相續税	七、一五九
通行税	九、二七六
鑛業税	八、三四三
兌換銀行券發行税	一一四
酒税	一八八、八三九
醤油税	五、六三九
砂糖消費税	四三、〇八八
織物消費税	四二、六一四
石油消費税	八八四
賣藥營業税	三〇九
取引所税	一〇、八七六
關税	七一、七四四
噸税	八五二
計	七三四、二九八

この國税體系は、若し關税中の消費税的分子を消費税のうちに加へ、さらに消費税と看做すべき專賣益金一億圓を加算すれば、消費税額は遙かに直税を凌駕することとなつて、租税體系を不備ならしむるものであるが、この際これを論外として、天晴完全なる租税體系なりとほめておく。

しかし地方税制に至つては、斷じて完備をもつて賞することはできない。

地方税制は、ほゞ三部に分かれる。一は戸數割と家屋税とその附加税だ。これが合計して二億六千五百萬圓。これに對抗するのが地租、營業税、所得税のいはゆる三税附加税で、これが合計二億圓。その他道府縣營業税、同附加税、雜種税、同附加税、其他諸税で、その合計が一億七千八百萬圓。全部合計して六億四千三百萬圓となつてゐる。

大正十一年豫算次の如し。

	千圓
地租附加税	一一三、五九〇
國税營業税附加税	五二、七七一

所得税附加税	二四、〇三八
戸數割及同附加税	二三六、一一七
家屋税及同附加税	二九、〇四八
道府縣營業税及同附加税	一八、四八九
雜種税及同附加税	七七、九一二
其他諸税	八二、一五五
計	六四三、一一一

そのうち戸數割と家屋税とが、租税中の惡税であることは世に定評がある。これを除けば他は三税附加税で、道府縣營業税や雜種税に至つては、國税の漁りつくしたあとを、塵芥箱をなめる犬のやうに貪つたもので、よからう筈がない。

見よ。日本の租税體系は、しかく完全である。その完全(?)たる國税組織を維持するために、地方税制はこのやうに虐げられてゐるのである。これが論者の棄さるゝを恐るゝ租税體系なのである。

六、英・米・獨・佛の租税體系

大體、地租と營業税とがなくては、租税體系が整はぬといふ。その考へ自體がおかしなものだ。眼を開いて歐米の例を見よ。と言ひたくなる。

イギリスの國税收入は、八十四億圓(一磅を十圓と見積る)。うち四十億圓弱が所得税で、二十億圓が麥酒、火酒その他の消費税である。これに關税の十三億圓、相續税の五億圓、超過利得税の三億圓。その他印紙收入や、法人利得税があるばかりである。地租及び家屋税として二千五百九十萬圓計上してあるのは、過去の殘骸にすぎぬ。それにしてもいかにその少額たることよ。

一九二一—二二年度豫算次の如し。

	千圓
關税	一、三〇〇、五二〇
消費税	二、〇五三、八七〇
相續税	五二一、九一〇
印紙税	一九六、三八〇
地租及家屋税	二五、九〇〇
所得税	三、九八八、八七〇
超過利得税	三〇四、五二〇
法人利益税	一七、五一六
計	八、四〇九、四八六

アメリカの國税收入は、五十八億九千萬圓(一弗を二圓と見積る)で、そのうち三十五億八千萬圓までは、所得税である。

これまで租税の大體をなしてゐた酒税は、禁酒國となるとともも

に廢止されて、いまは僅かに一億二千萬圓を有するにすぎない。その他は遺産税の三億圓、煙草税の五億圓、製造者消費税の三億七千六百萬圓、娛樂税の一億六千萬圓等で、これに關税收入の六億六千萬圓を加へて、六十億近くの國税體系をなしてゐるのである。地租と營業税とはどこにもない。

一九二二—二三年度豫算次の如し。

所得税	三、五八〇、〇〇〇 千圓
遺産税	三〇〇、〇〇〇
酒税	一二〇、〇〇〇
煙草税	五〇〇、〇〇〇
印紙税	九二、〇〇〇
運輸通信税	五四、〇〇〇
製造者消費税	三七六、〇〇〇
娛樂税	一六〇、〇〇〇
國立銀行發行税	七、七五八
其他の收入	四〇、〇〇〇
關税	六六〇、〇〇〇
計	五、八八九、七五八

ドイツは如何に、こゝもまた地租と營業税とは、地方税となつてゐる。一八九一年の租税改革によつて、プロシアの地租と營業税は市町村に委譲されてしまつた。プロシアの國税體系は、このときからだと言はれてゐる。戰時戰後の財政困難の際と雖も、地租と營業税とを地方から、もぎとるやうなことはしなかつた。財政の急を救はんがために、その税目は甚だ多岐に亘つたが、その租税の根本を、所得税六十五圓億（一マルクを五十錢と見積る）國難犧牲税十一億圓、賣上税二十七億圓等を中心とする、直接税及交通税においてゐることは、英米二國と同樣である。その税額は百三十億圓で、租税收入の六割五分以上を占めてゐる。

一九二一—二二年度豫算次の如し、

直接税及交通税	一三、一〇一、五〇〇 千圓
關税及消費税	七、三二九、五〇九
計	二〇、四三一、〇〇九

直接及交通税中主なるもの、

個人所得税	六、〇〇〇、〇〇〇 千圓
法人所得税	五二五、〇〇〇
資本利子税	七〇〇、〇〇〇
國難犧牲税	一、一〇〇、〇〇〇
賣上税	二、七〇〇、〇〇〇
印紙税	六五四、〇〇〇

通行運送税……………………六〇〇、〇〇〇

關税及消費税中主なるもの

關税	一、二五〇、〇〇〇 千圓
石炭税	二、二五〇、〇〇〇
煙草税	九〇〇、〇〇〇
輸出税	一、二五〇、〇〇〇
中央銀行及特殊銀行上納金及兌換券發行税	七六五、〇〇〇

ひとり地租、家屋税、營業税を、國税の體系のうちにとり入れてゐるのは、フランスあるのみである。そして租税體系が最も紛糾してゐるのも、またフランスである。フランスは租税體系を有しないとまでに言はれてゐる。

私は租税體系なきフランスの税制を、こゝに解剖するの煩に堪えぬ。たゞこのフランスと共通せる日本の租税體系こそ、世にも稀なるかなと祝福しておく。それに地方税制が、附加税主義をとつてゐる點まで、フランスと似てゐるとは、よく〳〵の因緣と見える。

尤もフランスは戰爭の直前に、所得税主義をとつた。惜しいことに戰爭のために妨げられて、その租説體系を整ふる暇がなかつた。しかし家屋税も、地租も、定率税として、家屋たには土地についての所得税の形式をとつた。また營業税については、一九一七年以來、その大部分を府縣と市町村に委讓した。次の如し。

(千分率)	國家收入	府縣收入	市町村收入
一九一三年	五七一	一七一	二五八
一九一九年	八〇	三一九	六〇一

七、都市の租税體系

都市の財政は、不動産税をもつて、その租税體系の基本となすを原則とする。これをニウヨーク・シカゴ・ロンドン・ベルリン・パリ、東京の六大都市について見んか。

調査年	歳入總額 千弗	不動産税 千弗	千分率
ニウヨーク(一九〇八年)	一四三、五七三	一〇九、四五三	七六三
シカゴ(一九〇八年)	四一、四四六	一七、六三三	四二四
ロンドン(一九一〇—一一年)	一三三、七五〇	六〇、三六〇	六〇〇
ベルリン(一九一〇年)	六八、五五六	六、〇〇〇	八七
パリ(一九一〇年)	七六、三九五	二〇四	三
東京(一九二〇年)	三六、七七二	三、五〇五	一三一

右のうちベルリンは、比較的に不動産税收入が少ない。これは一つはドイツの都市が、所得税に對する附加税を重くして、

娯遊税的課税法をとれると、他方において、路面を使用する事業、畜犬、港灣、料理店、質店、屠場、銀行、劇場、觀覽場等の公共的市營事業からの收入が相當に多額に上れるためであり、さらに進んでは、都市自體が驚ろくべく多くの市有土地を有するためであつて、その税制の未發達を物語るものではない。

いまだ入市税に固着するフランスの都市に至つては、論外である。

地租――すなはち土地所有によつて得る收益に對する租税――は、都市の有力なる財源をなすべきものである。なぜなら、都會及びその近郊の地價をつくるものは、都市自體であるからである。そして都市のつくれる地價をば、國家がこれに直接に課税して、都市に對してはほんの小率の附加税しか許さぬのは、本來顚頭の嫌があるばかりでなく一種の掠奪であるからである。

都市は自ら起つて、國家から地租を奪還しなければならない。

ダマシエケー曰く『ドイツの土地には限がある。しかるにドイツにおいては、年々約八十五萬の人口が増加し、そしてかれ等の大部分は、生産上且つは交易上最も有利な條件を具備する工業中心地において、その勞働と住居とを求める。これがために、これ等の工業地においては、土地は自ら獨占的性質を有し、從つて著るしい地價騰貴を來たすのである。』

然り。都會地の地價をつくるものは、都市に向つての急速なる人口集中の傾向に基くものであり、そしてこの人口の集中が、都市計劃事業を、都市の社會的義務となしたものである。

逆に言へば、都市人口集中といふ事實は、一方において都市計劃事業その他について、都市の財政から多くの支出を要求すると同時に、他方において、地價を騰貴せしめて、好個の財源を供するのである。この財源をこの支出に充つるのは、最も自然な方法ではないか。

國家が地租を徴收するのは、少なくとも都市について言へば、それは掠奪である。

八、地價と都市

市都の地價騰貴の現狀は、むしろ驚歎に値する。ユリウス・ウオルフ教授の計算によれば、ベルリン市の地價は、八十年間に約三百倍の騰貴を示してゐる。次の如し。

	百萬マルク
一八三〇年	一七
一八五〇年	四五

一八七〇年	六二三
一八九〇年	二、一八四
一九一〇年	五、〇〇〇

これが特定の地點になると、その騰貴率は、さらに驚ろくべきものである。例へばベルリン郊外のグルネワルドの如き、一八八九年に一平方ルートが四十マルクなりしものが、十年後の一八九八年には、七百マルクに奔騰した。

しかしこれをもつてまだ驚ろいてはならない。アメリカの都市の地價騰貴に至つては、さらに奇拔である。例へばシカゴのステート街とマヂソン街の角にある。一エーカー四方ばかりの屋敷の如きは、一八三〇年に價が二十弗なりしものが、一八九五年には時價百五十萬弗を唱へた。すなはち二十年間に七萬五千倍に騰貴したのである!

かくの如きはもとより異數の例である。しかしアドルフ、ウエバア教授の指摘するところによれば、それは決して無稽の計算ではない。シカゴの中心地における地價は、六十四年の間に六萬二千五百倍となつてゐる。

一八三〇年	二〇弗
一八四〇年	一、五〇〇
一八五〇年	一七、五〇〇
一八六〇年	二八、〇〇〇
一八七〇年	一二〇、〇〇〇
一八八〇年	一三〇、〇〇〇
一八九〇年	九〇〇、〇〇〇
一八九四年	一、二五〇、〇〇〇

日本の都市の地價騰貴も、またこの例に洩れぬ。例へば明治三十九年、大阪市が南北線開通の際に買收した。中ノ島三丁目郵便局前の地所の如き、當時坪平均七十一圓九十九錢で買つたものが、今日の評價は坪千二百圓を下らないといはれてゐる。すなはち僅か十三四年の間に、十七倍の騰貴を見たのである。殊に大阪監獄裏一帶の土地の如きそのあるものは、大正七年八月に坪七圓で買つたものが、今日坪百五十圓もするといふ。僅か三年にして廿一倍になつたわけである。

大阪市が登記所について調査せるところによれば、明治四十三年から大正九年までの十年間大阪市内で取引された地所の筆數三萬一千五百四十にして、その明治四十三年に取引された地所の平均原價を百として計算すると、大正九年に取引された地所の平均原價は、六倍一一の騰貴となつてゐる。

	平均原價	指數
明治四十三年	四五、七二六	一〇〇

明治四十四年	五五、一〇八	一二一
大正元年	六七、六一九	一四八
大正二年	七八、六一九	一七二
大正三年	六四、一四二	一四〇
大正四年	六二、四五三	一三七
大正五年	六九、五四六	一五二
大正六年	八一、五三九	一七八
大正七年	一〇三、三四八	二二六
大正八年	一四九、〇〇三	三二六
大正九年	二七九、四二三	六一一

この巨大なる地價騰貴は、なにを意味するか。人口の都市集中の傾向を、反面から立證するものにすぎぬ。地價はつねに人口に比例する。地價をつくるものは、都市人口である。

次表を見よ。そして人口の多寡が、いかに地價に影響するかを、一目にして瞭然たらしめよ。これはドイツのヘッセンの土地住宅検査官第一年報によるものである。(人口は一九〇〇年の人口、地價は一九〇二年及び三年の建築地地價一立方米突についてである。)

	人口	地價
アウエルバッハ	二、〇七一	四マルク ― 六マルク
バーベンハウセン	二、二二五	二 ― 三
バットナウハイム	四、五〇一	八 ― 四[illegible]
ダルムシュタット	七二、三八一	二五 ― 一〇〇
グロスゲラウ	四、四八六	二・八 ― 四
グロンシュタインハイム	二、二七六	三・二 ― 四
ヘッペンハイム	五、七七九	四 ― 五
ミツヘルシュタット	三、二二四	五 ― 一〇
オッフェンバッハ	五〇、四六八	三〇 ― 五〇
ウヰンペン	三、一五七	二・七 ― 三
サルムス	四〇、七〇五	一九 ― 四八

九、地方税と地方歳出

都市人口の集中は、一方において都市事業費を膨脹せしむるとともに、他方地價を騰貴せしめる。從つて地租はその性質上、都市計畫事業に向けらるべきものであるといふことは、すでに説いたところである。次に都市計畫事業が、いかに土地や營業の收益に、影響するかといふことを見なければならぬ、實に都市は、その全力をつくして、土地と營業との收益増加に努力してゐるのである。

次表は日本の市區の、歳出状況である。

電氣瓦斯事業費	一一〇、九八〇	千圓
教育費	五四、五四四	
衛生費	五一、五五八	
公債費	四六、〇三〇	
土木費	二三、五六七	
役所費	一三、八九五	
基本財産造成費	六、五九八	
社會事業費	五、七一四	
勸業費	一、二七八	

いま都市は、財政難に陷つてゐる。そしてその所以は、都市の歳出が擴大したるが故である。なに故それでは歳出は膨脹したか、殆んどみな都市計畫事業につぎこまれてゐることは、右の表を見ても明らかであらう。

都市計畫事業が、その地點の地價を騰貴せしめ、且つ附近の營業者の收益を增加せしめる所以なることは、殆んど多言を要すまい。道路が擴築され、舖裝され、電車が通り、瓦斯と電燈と水道とがひかれるやうになつて地價が一躍暴騰しなかつた例があるであらうか。名古屋市がその隣接町村を併合すべき旨を發表したとき、郊外の地價は一日にして倍になつたといふ。これ都市計畫事業の遠からず郊外地に行はるべきを、豫見してのことと思はれる。

ひとり都市のみならず、地方財政全體が、土地と營業との收益の增加に努力してゐることは、同じく次表についてこれを見るべし。

教育費	二八七、四九九	千圓
土工費	一五五、九五二	
電氣瓦斯事業費	一一一、九〇八	
役所役場費	八五、八一四	
衛生費	七一、六〇五	
公債費	七〇、二三九	
警察費	六〇、六一四	
勸業費	四六、七八九	
財産蓄積費	二三、六二四	
會議費	七、三七七	
道府縣郡吏員費	五、二四三	

もとより租稅學上の利益原則は、絕對の眞理ではない。擔稅者の側から考へれば、國家または地方團體の施設によつて利益を受くるが故に、國家または地方團體に租稅を納めるのではない。租稅は國民市民の義務である。從つて利益如何を標準として、租稅額を決定すべきものではない。

しかし利益原則は、その課税權の配分の場合においては、ある程度までこれを認めなければならぬ。地租と營業税とを、國税とすべきや地方税とすべきやとの問題を論ずるにあつては、或は地方税としては、如何なる税目が最も適當なりやとの問題を論ずるにあたつては、利益原則はこれをすてることはできない。

なぜなら、都市計畫の實行の結果は、必らず土地收益と營業收益に增價を生ぜしめるからである。從つて都市計畫事業は、自然的に、その財源を增加せしめることができ財政上、都市計畫事業を『引き合ふ』事業たらしめることを得るからである。

この意味からも、地租と營業税との地方委讓は、適當なる處置である。

一〇、徵税能力上の判斷

ワグナー教授は、一八九一年プロシアの租税改革に關聯して曰ふ。「國の三大物税たる地租と家屋税と營業税とを、市町村に委付することは、地方財政を有利とすることに、大なる實際的重要性を持つ』と。

いま日本の地方團體は、その歲出の膨張とともに、非常なる財政難に陷つた。この財政難を救はないでは、いはゆる『租税體系』は完成できない。これではそのために、なにか地方に財源を與へるとして、地租と營業税とのほかに、これに優る良好なる税目があるか。

地方團體としては、その課税技術上、地租と營業税以外に、獨立に課税しうべき良好なる財源はない。

地方團體は、その租税徵收について、二つの大きな限定を蒙つてゐる。その一は課税權が薄弱であるといふことで、その二はその區域が分割的であるといふことである。

國家税制上より見るならば、所得税は最も理想的な租税であるとされてゐる。しかしこれを地方に委讓したとして、果してよく適當に課税徵收しうるか。現在の租税組織においても、各國ともその進步したるものは、所得税中心主義をとつて、これを地方に委讓してゐる例を見ない。

次に消費税であるが、これも地方團體では捕捉に困難である。殊に轉嫁によつて、全國的色彩を帶ぶる消費税は、地方税として不向である。消費税といつても、その主なものは酒税であるが、酒税は必らずしもその土地の富力、從つて財政力を表現しない。

ひとり最も適當なるは地租と營業税である。地租と營業税とを並び行ふならば、大體においてその地方の富力と財政力とを

代らせしめることを得る。殊に地租の如き、その不動性は、地方團體をして、容易に捕捉するをえせしむる。營業においても、その存在が明瞭であるから、捕捉に困難を感ずることはない。尤も營業は、可動的なるために、一地方の營業重課は、その營業を他地方に驅逐するといふ短所はある。しかしその短はすなはちその長にして、もつて地方の租稅政策を、監督奬勵する結果となる。現に府縣においては、國稅營業稅の漁りつくしたこぼれを拾つて、相當の額の營業稅をこれに課してゐる。從つて地方團體が營業に課稅しえないといふ論は立たない。

バステーブルの言へるが如くに、田舍では土地の外に課稅すべきものは少ない。若し地方財政の急を救ふことが必要であり、そのために國稅の一部を地方に委讓することが必要であるとするならば、その最も適當なるは地租であり、第二は營業稅である。

この點から觀ても地租と營業稅の地方委讓は、適當なる處置である。

そのむかし國稅組織のうちで、最も重要な地位を占めてゐた地租は、次第に國稅としての重要性を脫却して、現在稅制中の九パーセントを占むるにすぎない。近世國家がその成立の當初にあたつては、地租は最も捕捉し易き稅なるの理由をもつて、つねに租稅中の主位を占めるが、國家組織の發達と、財政制度の完備とにつれて、他のより有力なる租稅が、次第に地租を下位に蹴落すのは、各國の例に見る通りである。

いま日本の國稅地租收入の、租稅、專賣益金、及び印紙收入合計に對する地位を、百分率にして示すと次の通りである。

一八六七―八年	七四
一八七三年	九一
一八七七―八年	八九
一八八二―三年	七五
一八八七―八年	六九
一八九二―三年	六一
一八九七―八年	四〇
一九〇二―三年	二七
一九〇七―八年	二三
一九一二―三年	一六
一九一七―八年	一七
一九一九―二〇年	九

地租はいま國稅中さほど重要な稅ではない。これ地價改修の必要に迫られながら、依然として明治三十一年の地租臺帳を基礎として課稅してゐるのは、この故である。しかも國稅として

かくまでまゝ子扱ひにされてゐる地租も、これを地方税とすれば、最も有力な税の一つである。地租委讓是なりとする所以である。

一一、都市の地價

日本は明治四十三年に宅地地價の大修正を行つた。そして宅地について、賃貸價格の十倍を原則として、新なる課税標準をとつたのである。これ宅地については、經濟界の變化によつて、その等級に非常な變動を來たしたからである。

しかもこの修正も、いまだよく徹底的なる能はずして、市街宅地にあつては現在法定地價の十八倍、郡村宅地にあつては現在法定地價の七倍二を超ふるときは、その點をもつてその地價と看做すこととしたために、地價の不公平は依然として從來のまゝに殘つた。

それのみならず、地價修正以來すでに十五年を經過した。その間の經濟の大變動は、四十三年修正當時の地價の不公平をば、さらに幾倍加して現出したのである。いま法定地價と實際地價との開きは、甚しきは幾百倍に上るものがあるといふ。その表面にあらはれたものでも次の通りである。

東京市各區土地最高價格評價表

區名	町名地點	一坪當價格	一坪當法定地價(圓)
日本橋	室町二丁目(三越附近)	一、二五〇	一〇〇
	通一丁目(白木屋附近)	一、五〇〇	八七・五
	兜町(取引所附近)	一、〇〇〇	六五
京橋	銀座尾張町新地(電車交叉點附近)	一、〇〇〇	八七・五
	南傳馬町三丁目(同上)	一、一〇〇	七七・五
麴町	有樂町一丁目(帝劇附近)	七五〇	四三
	永樂町一丁目(東京驛附近)	一、一〇〇	四〇
神田	須田町(電車交叉點附近)	一、〇〇〇	七〇
	小川町(同上)	六〇〇	五八
芝	芝口一丁目(新橋附近)	六五〇	五四
	櫻田本郷町(電車交叉點附近)	四〇〇	三四
麻布	新網町二丁目	二五〇	二〇
	三河臺町(六本木交叉點附近)	三五〇	一九
赤坂	田町三丁目(溜池附近)	三三〇	一八
	青山南町六丁目(高樹町交叉點附近)	三二〇	一五
四谷	傳馬町三丁目	九八	三三
	鹽町二丁目	八七	三
牛込	肴町(神樂坂附近)	一〇五	七
	山吹町(江戶川電車通)	六五	八・五

小石川	表町（傳通院前）	八四	八
	白山前町（白山上）	八〇	一七・五
本郷	本郷三丁目	一〇一	三五・五
	淺嘉町（駒込通）	八一	一六・五
下谷	下谷町二丁目（車坂附近）	一〇七	四四・五
	上野町一丁目（廣小路附近）	九九	三三
淺草	茶屋町（雷門附近）	一、〇〇〇	六〇
	茅町一丁目	三〇〇	四八
本所	小泉町（國技館附近）	三〇〇	二八
	中ノ郷竹町（吾妻橋附近）	三三〇	一九
深川	西森下町（新大橋向附近）	二〇〇	三
	黒江町（永代橋向附近）	三三〇	一七

事情つひにかくの如きものである、この數字は一方において、都市と地價との關係を、最も有力に物語るものなるとともに、他方においては、日本の地租制度の不公平を、最も雄辯に立證するものである。

若し地租が地方に委譲せられ、そして東京市が適當なる地價修正を行ふとすれば、たとへその課率を半減しても、實收額はさらに增加するにちがいない。

一二、課税標準の問題

假に地租を地方に委譲したとして、第一に改正を要するのは、課税標準の問題である。

日本の地租制度の根本的の誤りは、第一にこれを國税としたといふことであるが、第二には、收益制臺帳制をとつて、價格制近實制をとらなかつたといふことである。都市の地租に、上述の如き不公平を生じた主な原因は、この制度上の缺陷に基く。

收益制をとつた結果、無形收益を擧げつゝあるもの、時世の變遷または地方施設によつて土地價格の騰貴を受けつゝあるものは、すべて徴税を免れてしまつた。特にこの傾向は、市街地において大きい。ビルンバウムの言へるが如く、土地價値税は、租税の一層公平且つ滿足なる分配を齎らすことは、明らかである。なぜならこの制度は、投機土地と營業土地との一層鋭き課税を可能として、これによつて小なる勞働者住宅の負擔輕減を齎らすからである。

投機土地を重く課税するの必要あるは、こゝに多くの言を費やす必要はない。若しそれ奢侈用の土地に至つては、都市重要の地點に土塀を繞らし、徒らに廣大なる庭園を構へて獨り樂みながら、しかも收益なきの故をもつて課税を逃るゝのは、社會

的の罪惡である。價格制は巧にこれを捉ふる。

およそ資本主義の經濟組織は、所有それ自體が價格である。それが現に收益をあげつゝありや否やは問ふところではない。たとへそれを利用せずとも、利用せざることそれ自體が大なる給付能力を物語る。特に、都市にあつては速に收益制をやめて價格制にうつらねばならぬ。

かく課税公平の上からも、また社會政策の上からも、價格制は收益制にまさるものであるが、さらに財政收入上から見ても、價格上進の努は、收益增加の傾よりも大であるから、この點においても有利である。殊に地價騰貴甚しく、また財政的發達大なる都市においては、この點は强く主張さるべきものである。

次に臺帳制は、臺帳制定に長年月と多金額を要するために、租税の公平を失するの結果となる。臺帳制度に長年月を要することは、同一調査期中でも、初めに決定したものと、最後に決定したものとの間には、不公平を生ずる恐れがある。殊に土地臺帳の作製は、非常にうるさい仕事であるので、一度決定するとなかなか修正されない。プアイフアーの言へる如くに、臺帳は永久的に定めらるるを得ぬ。たとへ餘り短い期間ではなくとも、ときどき改定することが絶對に必要である。しかるに臺帳修正はどうしても延々になりがちだ。これが臺帳制度の最も大きな欠點である。

殊に市街地においては、地價は年々非常の勢で貴騰する。十年にして十倍となる如きは珍らしからぬ。しかも十年に十倍になれば、二十年には百倍となる。若し臺帳の修正を二十年放棄しておけば、九十九倍の不公平を生ずるわけだ。少なくとも市街地では、近價制をとらなければならぬ。

かくの如く臺帳制度は、課税の公平を得がたいのみならず、税收入上の時勢順應力を有しない。收入不動となつて、財政上必要な增收が得られないのである。國家財政のやうに、他に種々の有力な税源があつて、よく時勢に順應することを得、殊に租税體系上の地租の地位が墜落せる今日においては、一つ位といふ意味で、地租收入を不動としておくことはいゝかも知れないが、他に多くの税源を有せざる地方團體においては、是非近價制をとる必要がある。

近價制を採るとして、最も困難な問題は、いかにして年々の評價を行ふべきやの點である。しかしこれも所得税と同樣に、大體において申告主義を採れば、大した不便なくして課税しうる。不正申告を避くるためには、地方團體に强制買收權を與へて、若し課税者の評價と申告との間に、あまりに大きな差異が

あるときは、申告價格の幾割増かにて、强制的に買收し得ることとしておけば、大體において申告の公平を得ることができる。

一八九三年のプロシアの租稅改革において、地租が地方に委讓されたとき、その收益制臺帳制をとるか、價格制近實制をとるかは、各地方團體において、自由に選擇し得ることとした。その結果は、まづ大都市が相率ゐて價格制近實制を採ることゝなり、その他のドイツでも、段々これを行ふものが增して來た。

少なくとも都市においては、價格制近實制は、非常なる得點を有する。この點は地租委讓の際に、特に留意すべき問題であると思ふ。

一三、農民の負擔如何

地租委讓問題は、はじめ地方農民の負擔輕減の趣旨にて立案されたものである。しかるに私のいままで說いたことは、主として都市の財政の獨立の問題である。

農民の負擔の輕減は、はたして如何。

惟ふに等しく土地といふも、都市と村落との間には、非常な差異が生じて來た。これを經濟的に言へば、都市の土地は主として商工業地であり、村落の土地は大部分農村である。稅制上から言へば、一方は宅地で、他方は田畑である。

商工業地の經濟的根據は、その收益といふことよりも、むしろ所有といふ事實に重點をもつ、すなはちその大部分が獨占的價値である。しかるに農地においては、獨占よりもむしろそれから生ずる收益如何が、非常の經濟關係をもつのである。この二者の本質的差異の分離は、資本主義社會組織の進行とともに、ますます色彩が顯著になりつゝある。從つて地租委讓問題については、都市と村落とについて、別々の考察を必要とする。

しからば果して地租委讓は、農民の負擔を輕減する結果になるであらうか。

論者は曰く「地租の委讓が、地方民の負擔を緩和するに、確實なる方法であるとは斷定できない。現に一部の論者は、委讓後における塡補財源として、財產稅の創設を主張してゐるが、財產稅の如き、その實行されたあかつきにありては、結局地方民殊に地方農民の負擔を加重するの具となるであらう。蓋しかれ等は土地をもつて重なる財產の形態とする一方に、土地はその性質上、租稅の逋脫を至難ならしめ、且つ評價の嚴正に行はれ易いものであるとすれば、財產稅が都會の商工業者に對するよりも、地方農民に對して殘酷なる負擔を加へるに至ること

は、あらこうべからさる所に歸する。か〻る特質を有する財産税を創設し、これを地租にかはらしめることによつて、果して農民に有利なる結果を齎らすを得るであらうか。地租の地方委讓を主張する論者が、一方に財産税の創設を唱道しながら、前者をもつて農村の救濟農村負擔の緩和に効果ありとするが如きは、世人殊に農民を愚にすることと甚だしきの所説である。』と。

この議論は、相當に有力に行はれてゐるが、それは三つの重大なる誤謬の上に立つものである。

第一に、地租と營業税との地方委讓が、必然に戸數割と家屋税の減課を意味するといふことである。戸數割はほとんど爲體の知れない珍税であるが、農村においては結局土地負擔に歸すべきは、明らかな點である。地租委讓はこの點において、不合理なる土地負擔を脱せしめる。

第二に、財産税が地方に重課されるといふ考へは、財産税が所得税の補完税的性質を有することを、理解しない所以である。いま國家の富は、次第に農村を去つて都市に集中しつゝある。この事實は、市區と町村との所得税負擔率を見ても明瞭である。從つて財産税が、都市の商工業者をあまりに重課する批難こそあれ、農民にとつて不利であるとは、いかにも首肯し難い議論である。

第三に、論者は土地の逋脱を云爲するが、動産とても同様に逋脱は困難である。その主なるものは株券であるが、これは到底かくしきれるものではない。假に若し商工業の財産が逋脱され易いとするならば、所得税のやうに、課税物體によつて税率をかへればよいではないか。

これを要するに地方農民としては、地租委讓によつて、結局從來國税の形式で收めてゐた位の額を、戸數割の輕減によつて利することになるであらう。その利益を全國合計七億圓と見積り、その代りに七億圓丈けの財産税を起したとすれば、計算はつひに容易である。なぜなら七億圓の大部分は、これまで地租を拂はなかつた財産に移轉さるゝことになるから、それ丈け地方農民は得をするわけである。

營業税についても、同様のことが言はれる。だからこれは略する。

要するに地租と營業税との地方委讓が、地方農民や小營業者の負擔増加になるとは、甚しい考へ違ひである。負擔が増加するものは、財産所有者である。財産所有者とその代辯者が、資本家の利益のために委讓論に反對するのなら、なるほどと思ふ。農民や小營業者のための利益に名を藉りて、委讓論に反對するのは、全くもつて御見當違ひである。

一四、反對論のユーモア

都市財政の問題としては、地租と營業税の委讓問題のほかに、いろ〳〵ある。殊に受益者負擔の原則、土地增加税、間地税の問題の如き甚だ重要な問題である。しかしいまそれに及ばない。

地租と營業税の地方委讓についても、詳論すればまだいろ〳〵ある。しかしこゝには大綱を示すに止めて、細論に亙らない。

最後に雜多なる反對説を紹介する。その反對論が純理上有力である故ではない。それが案外有力なる人士によつて、しかも眞面目に唱道されてゐるからである。

それは時代錯誤のユーモアさへある。

その一は、地租を地方に委讓することは、國體を傷くる所以であるといふ議論である。詳しく言へば、地租は國と離るべからざるもので、國體とも密接なる關係があり、地方民はこれによつて愛國心を養ひつゝあるのに、これを地方に委讓すれば、かれ等の精神上に由々しき變化を來たし、國の基礎を危ふくするものであるといふのである。

なるほど地租といふものは有難いものだ。疲弊してゐる農民から税金をとつておいて、それで愛國心が涵養されるんだから面白い。さうなると、地租を二倍にすれば、愛國心は二倍になるのだらうか。そして國體はます〳〵發揚して、國の基礎は二倍の强味を得るといふのだらう、可哀さうなのは、地租を納めたくも土地をもたぬ地方の小作人、農業勞働者都會の借家人、賃銀勞働者だ。いつそ愛國心を普及するために、土地を萬人に分配したらどんなものだらう。それならば私も贊成する。

その二は、地租は明治維新以來の有力なる國税だから、これを手離してはならぬといふ議論である。詳しく言へば、委讓は舊幕時代の三百諸侯の自由賦課に逆轉せしむるものであり、折角維新後苦心してこれを統一し、公平にしたものを、再び解放して不公平にするのが、不可なりといふのである。

この論の首唱者が、松方老公であると傳へられてゐるのは、一寸面白いことである。この議論を現代人にも理解できるやうに説明するためには、すべて古いものは分らずよいといふ原則を立證しなければならぬ。從つて人民は小供のときに着てゐた着物を死ぬまで着てゐなければならず、立身しても裏長屋に住んでゐなければならず、反對に零落しても大邸宅を構へねばならず、物の賣買移轉は一切禁止しなければならぬわけだ。そして税制の改正といふことは、なに事によらず一切不可となる。

老公に對しては甚だお氣の毒だけれども、老公等の苦心して統一された地租は、時勢の進展とともに、だん〳〵國税としての地位を低下して來た。一時租税體系の主位に立つて、財政を指導してゐた地租も、いまではだん〳〵裏長屋住ひに零落しつゝある。そこで地租委讓は、この國税としては零落した地租に、地方に別莊を建てゝやつて、それに移轉せしめ、地租の本分を十分に發揮せしめやうといふのである。委讓について、老公から一言の感謝を聞くとも、不平の聲を耳にするとは、いさゝか心得ぬ次第である。

おそろしいのは、時代の變遷である。

その三は、前項の松方老公の意見にも一寸見えたが、地租委讓は地方的に地租を不公平にするといふのである。詳しく言へば、國家が統一的に地租に課税してゐるからこそ、地租の統一公平はあるが、地方別々に課することとすれば、おそらく不統一不公平に陷るであらうといふのである。

なるほど現在の地租は公平なものである。明治三十一年の地價臺帳を基礎として課税する地租は、三十一年以來の公平を、今日に至るまで持續してゐるのである。をしいことには四十三年に宅地について大改修が行はれてしまつたが、それでも大體においては明治三十一年の決定を動かさぬ方法を採つてから、その時代の公平はいまでも持續されてゐる。尤も三越附近の土地を、私が百圓と値をふんだらぶんなぐられるが、國家が法定する分には、それが公平なのである。

もとより地價修正は、國税たると地方税たるとを問はず、行はふと思へば行へることである。從つて法定地價の不公平を理由として、地租委讓を主張するのは間違つてゐる。しかしこの不公平を敢てしながら、地租委讓が地租を不公平にするといつて反對するのは、一寸妙な氣がする。それに國税としておいては、いつ地價が修正されるやら、見當がつかない。尤も地方に委讓しても、すべてが直ちに修正を行ふや否や、にはかに斷言はできないが、少くとも地方にその機會を與へ、これによつて財政的獨立をなすの能力を賦與するのは、租税體系上然るべきことではなからうか。

委讓反對論のうちには、そのほかなか〳〵面白いものがある。時代錯誤のユーモアは、なか〳〵盡きない。しかし溺れない先に陸にあがる。

一五、叛逆の進行曲

つひにわれ等は、行きつくべきところまで着いた。

現代の都市は、都市計畫といふ大きな謎を與へられた。その

謎語を解くべき鍵は二つある。一つは行政權の獨立で、他は財政權の獨立である。

私は都制案を中心として、都市の行政的獨立を說いた。それから地租と營業税の地方委讓を骨子として、財政的獨立を考察した。都制案にしろ委讓論にしろ、その提唱された當初の目的は、むしろ他にあるものである。しかしこれを都市といふ特殊の觀點から觀れば、一個の都市叛逆の運動である。

いま日本の都市は、行政的依立と、財政的窮迫とに、苦しめられつゝある。都制案と、委讓論とが、これを解放するの手賴となるは、疑なきところである。日本の都市よ、まづこの二つの手綱を汝の手に握れ。そして雄々しく立つて行政財政の獨立を計れ。そのときこそ汝は都市たるの名に恥じない勇者として、賞揚されるであらう。

現代の都市よ。叛逆を忘るゝ勿れ。

もとより事は都制案と委讓論をもつて終局を告ぐるものではない。そはたゞ手賴である。日本の都市の進行すべき原野は廣い。都制案と委讓論とは、たゞその第一歩を與へるものにすぎない。しかし一歩を土につくるものと、坐して動かざるものとの距離は、その差實に無限大である。

日本の都市はいまだ少年期である。叛逆の青年期を經過するにあらざれば、完成の壯年期に入ることはできない。まづ第一歩を土につけよ。聞け。

叛逆の進行曲は鳴りひびく、勇躍して都市計畫の進軍に參加せよ。

（完）

反動政治の運命

法學博士　米田實

一

前後五年に亘れる世界の大戰爭は、多數の人民によつて幸福な人類社會を、實現する階段と目せられて居た。歐米の政治家

は所謂デモクラシーの爲めに、世界を安全にするものと叫び、理想家は戰爭を絶滅せしめて、國民の大負擔を減少し、更に勞働者階級の境遇を改善し、國民的一般生活を向上せしむる絶好の機會であると說いたものであつた。勿論之には交戰國政府當局が餘り戰爭を欲しない人民を瞞着して、最大の努力を戰爭に致さしむるといふやうな策略もあつたであらうと思ふ。併しながら斯く敎へられた各階級は此戰爭を以て自己の運命の發展の好機と爲したので、愈大戰爭終了せんとするや、彼等は各國を通じて一は國際平和を確保し、一は各人の幸福な生活を作り出さうと活躍し出したものであつた。さうして此事實は國際政治に於ては、國際聯盟の組織にも反映したのであるが、又國內政治に於ても比較的漸進主義の國家にありては、參政權の擴張として現はれた、英國の如き顯著なる一例である。又米國に於ては婦人參政權の確立を見るに至つたのであつた、中央歐羅巴に於ても獨逸では、外界卽ち聯合諸國の壓迫てふ副原因にも助成せられて、帝制を顚覆せしむると共に、選擧權の大擴張を見たのであつた、而して是等諸國――國民性が割合に穩健であつた諸國に反して、其政治的發達が不健全であり、傳統的政府が一層無能を暴露して居り、又一般國民性が矯激である國柄に於ては、現狀に對する不滿足から更らに極端なる事例となつて現はれたのであつた、卽ち露西亞に於て現はれた一九一七年の革命並に過激政府確立は今之を說かぬとして、歐羅巴の他の部分に於ても同種類の諸現象が現はれたのであつた、それは戰爭終了と共に現在の政府を信用せず、議會に信賴を置かず、其政治機に慊らないとする人民の感情が反映して、第一に社會主義的、ボルシエヴィキ的の活動の機會を造つたことであつた。然かも此ボルシエヴィキ的、社會主義的活動が、政治的訓練を有せず經驗に立脚しない面々によつて、行なはれたるが爲めに、割合に其實際的利益を國民一般に齎らさず、唯徒らに秩序を紊し平和を攪亂せしむるに止まることが、多數によつて認識せられて來る時に、是等の期待を裏切られ半ば失望した人心は急激に一轉して、全然反對の方向に突進する傾向を生じた、而してそこに隙て機會を窺へる反動政治家の出現を扶け、之が成功を可能ならしむるに至つたのである。今具體的に之が例を擧げて見るに、第一には一九一九年春の共產黨政治が同年夏に仆されて、所謂白色恐怖政治を實現し、今日尙之を繼續せしめつゝある人口八百萬の洪牙利國の如き、顯著な一例であらうと思ふ、次には一九一九年より同二〇年にかけて、ボルシエヴィキ社會主義系の活躍を見せしめたが、一昨年より昨年にかけて反動系のファスシスチの活動を來し、昨年十月末以來之に政權を掌握せしめて

居る人口四千萬の伊太利が第二の例であらうと思ふ、而して更らに一九一九年夏農民黨政治を實現せしめたが、本年六月軍人系ブルジョア系の政治を復活せしめた人口五百萬の巴爾幹半島「勃牙利」が第三の例であると考へる、勿論此間に於て三國の事情が總て同一であるといふ譯ではない、例へば洪牙利の變動には外政的影響が多く、外國の壓迫が盛んに加はつて居たといふことも考へなければならぬ。勃牙利は從來巴爾幹の諸邦中黨爭の色彩が强かつたことを忘れてはならぬ。そこで比較的外國の壓迫干渉等の原因が加味されず、純粹の國内的事情のため變革を見たものは伊太利である。從つて伊太利の現狀に評論を加ふる場合には、最も單純にして且純粹の點あることを便利とする差違がある、併し大體から云へば三國の形勢が皆軌を一にせる點あることを拒む譯には行かない。

吾人から見ると、歐羅巴に於ける此現象――斯の如き經路を取つた政治的變動といふものは、不思議でも何でもない、戰爭後不安定であり、さうして從來の政治には不滿足であり、何等かの新政治を希望し、變革を待望して居る人心が其第一に採んだ急進的變革が、彼等の希望するやうな好結果を齎らさないことを發見した時には、又次に何物か全然前者と異れるものを捉へて、戰爭中に夢想して居つた樂園を實現しやうとするのは、自然でないとは云へないのである。併し我日本では近頃此反動的現象が、歐洲諸國に起つたのを見て盛に世界の大勢を呼號し、恰も此反動的潮流を以て恒久性あり、永續性あるものなるかの如く唱へて居るものが見える、之には歐洲の反動的潮流を喋々して以て、我日本に於ける進歩主義を阻害し、又近頃幾分擡頭し來れる國際平和思想を掃蕩せんとする、丁髷者流の策戰も加はつて居るのであらうと思ふ、併し何分世界の文化に觸れて年未だ久しからざる爲めか、動もすれば盲目的摸倣になり易い我國民に取つては、斯くの如き宣傳は容易ならざる現象である、世人若し之が爲めに其進路を誤る時は、將來に一大深憂を貽しはせぬかと思ふ。依つて予は此際少しく歐羅巴に於ける所謂反動的政治の現狀を觀測し、それが果して永續性を有するか、果して堅固なる地盤の上に樹立せられて居るものであるかどうかを研究して見度いのである。

二

先づ洪牙利より觀察を進めて見やう、洪牙利は世界大戰終了の時に於ては、一種特別の境遇に置かれたものであつた、それは何かといへば獨逸に味方し敗北せる結果、其領土の一部は羅馬尼に奪はれ、他の部分はチェックスロヴァキアに獲得せられ、又

他の一部分はユーゴースラヴィアに取られなければならぬことゝなり、爲めに人口二千萬を算した同國は、忽ち八百萬の小國とならねばならぬ運命に陷つた、之は同國民に取り最も悲むべきことであるが、併し他方から觀れば同國は多年墺太利より、分離し獨立せんとする熱が盛であつた、それは一八四八年の叛亂にも現はれて居り、近く二十世紀初に於ては彼の有名なる銀行獨立問題及び、軍隊獨立問題其他に獨立熱が反映して居つたのである。從つて戰敗後分裂の地位に立つた同國は、國の所謂對外的地位卽ち國際關係問題には失望した譯ではあるが、一方新國として獨立することになつたので、此機會に國の傳統的政治を一新し、新しき國民生活を實現せしめやうとする考へが、相當民間に擡頭して來たのである。而して此間に乘じ行はれたものは卽ち彼の一九一九年三月二十一日以後四ケ月に亘つて、同國を支配したベラクーンの所謂共産的政府の設立であつた、尤も是より先き一九一八年十一月三日洪牙利獨立黨の首領カロリー伯が、獨立共和政府を樹立し內閣を組織した、伯は戰後の新形勢に鑑み、國內の大地主及び貴族の不動産を一般貧民に分配し、就中農地を小作人其他に分配するの策を取り、或意味に於ける共産政府の先驅とも見る可きものであつたが、彼は諸種の難局に逢着すると共に、聯合國の洪牙利國に對する態度に反對するの意味により、一九一九年三月遂に政權を共産黨に讓り跡を逃いたのであつた。ところがベラクーンの共産政府となるや、彼等は露西亞のレニン系共産政府と聯絡を執り、殆ど勞農露西亞政府に指導されて、總ての行動を左右するといふが如き姿が見へた。新發布の法律などを見ても家屋は一切國有とし、各人一樣に家賃を拂はねばならぬことゝ爲し、室數の割當なども家族の人數により一人一室と限定して使用を許し、又勞働階級を第一位に置くとゝ定め、教育は無料とし、勞働者のために大學を設立すること、文化教育は勞働者の財産なりといふやうな法律制度を定めた。其他所謂勞働階級に偏重する政治を行つたが、元來此ベラクーン等は何等政治的訓練を有せず、國內の土地分配問題などに就ても、餘りに極端なる政策を執つた爲めに、最初議會政治に厭いて居り、又從來の洪牙利政治家に愛想を盡かして居た洪牙利國民も、又た是等の過激主義者に國政を委ねて置く時は、國運を危機に陷るゝのみならず、國民全體の幸福が是等の政治的訓練なき共産主義者の努力に依つては、到底確保すること困難なのを悟るに至つたのであつた。

而して斯く洪牙利人が共産政治の狂暴なるに驚き、其施政に愛想を盡せることは、遂に洪牙利領內に於ける反對派の勃興を來し、アラドゼゲド其他に反對派政府の確立を見るに至り、之

が羅馬尼軍隊の加勢をも受けて、過激派政府を顚覆せしむるに至つたのであつた。而して一九一九年八月六日にはハプスブルグ王家ヨセフ太公の新政府が、洪牙利首府ブダペストに於て成立し、活動家として名あるフリードリツヒ氏が首相となつたが、其後聯合國側に於てハプスブルグ王家系統の勢力恢復を希望しなかつた爲め、同年八月末聯合國側よりヨセフ太公の位を退かんことを求め、次で聯合國を代表せる英國人サー、ジョージ、クラーク氏（チエツクスロヴアキア駐劄英國公使）の盡力もあり、同時に洪牙利國民の希望もありて、茲に洪牙利國民軍總司令長官ホルチー提督が、進んで政局に當ることゝなり、翌一九二〇年三月一日攝政の位に卽いたのであつた。

此軍人系にして餘程反動的傾向を有せる政治が、洪牙利に於て成立し得た所以のものは、聯合國との外交的關係の援助などもあり、其他種々複雜せる原因もあつて、洪牙利國民の單純なる選擇によつてのみ出現した變動とは言へないが併し洪牙利國民がベラクーンの政府に厭き、何等か今少しく堅實性に富む、異れる性質の政治を希望して居つたことは確かであつた、其結果として生れたものが卽ちホルチー執政であるから、同國民の選擇が含まれて居ないとも言はれない。然らば洪牙利國民が一度選擇せる此反動的なるホルチー提督の下に於ける政治は如何といふに、思ふ存分に所謂反動主義を發揮してゐる、先づ其一例を擧ぐれば、一九一八年ヨセフ太公政府樹立後より始められて、其後も繼續して居ることではあるが、盛に社會主義系統の人間が反社會主義系統によつて虐殺されるといふことである、さうして此行爲が事實上新政府の默認の下に行はれると云つても差支ない、尤も虐殺されたものゝ多くは猶太人で、一九一九年丈けでも既に三百七十名と註せられて居た、其後も相變らず幾分繼續されて居る、政府は之に對して保護政策を講ぜんともせず、外人は之を呼んでホワイト、テーラーと稱して居る、佛蘭西、亞米利加、英吉利などの論客は之を露西亞の赤禍に對比して白禍と唱へ非難して居る位である、單にそれのみでなく一九二〇年及び二一年にかけては新政府は、曩に制定された社會政策的立法を始め勞働者味方の立法を廢棄し始めた、其二三例を擧げるとカロリー執政時代卽ち一九一八年末、通過した土地分配の法律、就中大地主貴族及び寺院に屬する土地を、報償なしに小作人其他貧窮農民に分配することに定められた法律は改られた、新洪牙利政府――具體的に云へばテレキー内閣の下に於て制定せられた土地改革法律は、右の分配法を廢止し小作人は報償金を支拂ふて之を獲得しなければならぬと改正された、大地主の大農園は當然分割せらるべきものなりと云ふが如き保障は

取消されたのである、從つて事實上から云へば一度社會政策的に大農園を小作人其他に分割し、一は以て小作人の向上を計り、他は從來放棄せられ、即ち耕作されて居ない農園を、社會のため速かに利用しやうとする生產的政策も亦行はれなくなつて了つた。

次には此新政府も議會も、現在の政治組織を飽くまで維持する爲に、種々の壓迫法律を制定して居る、例へば各種のフリーメーソン的團體を解散せしめ、人權上重大なものと認めらるゝ集會の權、新聞紙の言論自由の權等を制限し、或は活動寫眞會社に對しては免許制度を利用し種々面倒なる條件を附して、政府に味方し現政府を維持せしむるものに特に之を經營せしめ、然らざるものには從前免許を得、經營して居たもの迄も、其免許を取消し轉業を強ゐて居るのである、又苟も外國等に於て自國即ち洪牙利國の名譽を失墜し毀損するが如き言動を爲し、若くは宣傳を爲す洪牙利人ある時は、嚴刑に處するの法律さへも作つて居る、然も該法律は極めて曖昧であるだけそれだけ適用の範圍が廣く、非常なる無理の存在することを忘れてはならぬ。其他兎角軍人の利益を計り、資本家の利益を擁護するが如き法令を濫發し、以て反動政治の本職を遺憾なく發揮して居ると云つて差支ないのである、茲に於て問題は起る、「此反動政治が果して安固な狀態に置かれて居るか、果して永續性を有する形勢を示して居る乎」

長文に亘る說明は之を避けるとし、主として要點を述ると、洪牙利の人心は一度ベラクーンの節制なき政治に厭惡し、今少しく安定した政治を希望したが爲めに、一九一九年及び同二〇年に於ては、此反動政治を歡迎したけれども、今や亦人心漸く之に厭き始めたる形勢が現はれて來た、人心離叛の最も顯著なる事例は言ふまでもなく、昨年の總選擧に對する政府の壓迫並びにそれにも係らず反對派即社會黨が相當の增加を見たことであらうと思ふ、何をか政府の壓迫と言ふ、他無し、政府は有りと總ゆる手段を試みて、急進派社會主義若くは自由主義系統の擡頭を妨げたのである。即ち昨年五月六日に於て行はれた總選擧中、政府は反對派の候補ある時は一律的に之を捕縛し、選擧當時人民と接觸するを得さらしめ、及び到處地方官吏をして選擧に干涉せしめたのである、其他選擧干涉の名物男とせられて居る、コリーウス、ゴンボス等の傍若無人なる振舞は、甚く人民を畏懼せしめたものであつた、此選擧の結果として政府は表面に於て百四十名の與黨議員を得、之に准政府黨二十六名を加へ、兎も角も外形上、議員總數二百四十五名の議會に於て、百六十六名の多數を有して居るに相違ないが、一方反對派の狀況

を見るに七十八名の議員中に於て、政府が最も勢力を得せしめさらんと努力し、干渉を試みたる社會黨議員が却つて激增を見二十五名を算するに至つたのである、社會黨員は政府が何とかして彼等を落選せしめんと努め、干渉を加へたるに拘らず是れだけの勢力を作つたのである、同時に注意すべきことは政府黨は假令數に於て多しとは云ひながら、此選擧に於て當時ペトレー內閣の大臣連中約五六名が、第一選擧の場合に落選したといふことであつた、是なども明かに人心が政府を離れて居るといふ現象でなければならぬ、要するにホルチーの執政は其成立の最初に於ては、曩のベラークン治下の混沌狀態に對して、一度は人民の歡迎を受けたのであるが、今や其壓迫的政策に漸く厭かれたる狀あることは爭ふべからざる事實である。唯た今日チエツクスロヴアキア國及び羅馬尼國其他の聯合國は、洪牙利側よりする國際的禍因を憂ふる爲め、洪牙利の現狀維持を希望し、止むなく現政府を支持しつゝあるので、ホルテイ執政は勿怪の幸運に會して居るが、是等諸國が今日の政策を變更し無干涉策に復歸する時期が到來したならば、必らずやホルチー執政の沒落は實現せねば止まぬであらう。

三

然らば一轉、目下伊太利の政界を支配して居るベニト、ムソリニーの、所謂フアスシスチ政府の前途を見ばどうであらうか、少しく之を檢して見やう、併し之には先づ伊太利國民が、フアスシスチをして勢力を得せしめた經過並に原因を見ることが大切である。ベニトムソリニーとは如何なる人であるかと云へば、彼は未だ滿四十歲にも足らぬ若者である、鍛冶屋の子に生れた彼は體格偉大にして眼光銳く、其口元を見、顏を見ても決斷力に富んだ活動家なことが分る。本來社會主義者で大いに革命を主張した歷史を有つて居り、曾て社會主義新聞アバンチーの主筆ともなり、又伊太利社會黨幹部の一員となつて居た時代もあり、歐羅巴全般に於ける社會黨運動及び勞働運動にも携はり、大いに努力した經歷を有して居る、然るに彼は世界大戰勃發するや、急に戰爭論者となり伊太利の戰爭參加を熱心に主張し、一度自己の意見が社會黨に容られなくなるや、遂に社會黨を脫して反對側に立つに至つた。是れ恰も一九一一年伊太利社會黨の名士ビソラチーが、伊太利發展の見地からトリポリー戰爭に贊成し、其事が原因となり社會黨と手を別つに至れる前例と、甚だ相似たるものあるを思はしむる、此ムソリニーの戰爭鼓吹は實に一九一四年十一月ミランに開かれた社會黨大會に行はれたのである、之が爲め黨外に逐はるゝや、彼は自からボ

ボロヂイタリアなる新聞を發行した、彼は此時社會黨を棄てたのではなかつた、自分の起した新聞に於ては依然として社會黨を標榜した、唯だ頻りに伊太利の中立に反對し、速かに戰爭に參加して伊太利國家の發展を期せなければならぬと主張した丈けが違つて居たのである、而して翌一九一五年伊太利が愈戰爭に參加すると、彼は自から進んで軍隊に入らんことを求めたが、政府は彼が曾て社會黨たりし歷史に鑑み、容易に入隊を許さぬので、彼は法律の規定で彼が入隊せねばならなくなる順番迄待たねばならなかつた、そして彼は許されて軍隊に入ると、殆ど直ちに負傷したのである、彼は勳功により皇帝から勳章を授けられたが負傷の結果除隊とならねばならなかつた、其後彼は再び言論機關に携はり大に活躍を續け、社會黨の非戰論を相手として堂々と戰つた、斯くする內、彼と社會黨との距離は一步一步遠かるのを認めたのであつた。一九一八年十一月戰禍歇まり愈講和となるや彼は一九一九年三月始めてミランに於て、所謂今日のフアスシスチなる極めて小さい地方的團體を作つたのであつた、其團體は一の革命軍隊の如き性質のもので、社會主義に反對し國家主義を高調し、伊太利國家の大發展を唱導する機關たらしむると同時に社會主義的、國際主義的團體を敵として腕力に依る爭鬪を持續するを使命として居たのであつた、

其後ムソリニーの此のフアスシスチ計畫は詩人ダヌンチオハヒユーメ占領と相應じ、其占領を援けて、大いに伊太利の國民主義を皷吹するに功ありしことも疑ひなかつた。一九一九年同二〇年の伊太利では社會黨の勢力が最も盛であつた、是れ恰も一九一九年十一月の總選擧に於て、社會黨は百六十の議席を占めて多數黨となり、羅馬敎黨派人民黨の如き百三名を以て第二位に下り、自由民主黨亦九十三名を以て第三位に落ち而して國民黨的系統の如きは殆ど其姿を見せなかつたといふ狀態に照しても明了な所である、政情此の如くであるから社會黨は議會に於て志を得、時のニツチ政府、ヂヨルチー內閣等を威嚇して、政治的に其志を行ふに努めたのみならず、國內に於ては或は到處工場占領を斷行し、又伊太利國內に於て約八千の市村等自治團は、殆ど社會黨の下に置かれたるかの如き狀態に陷り、市長を始め市會議員等多數は、社會黨員であるといふ現象を呈した、此間に於てはムソリニーは難境に立ち、殆ど其日の食物すら得る能はざるの窮境にあつたことも少なくなかつた。併し勢ひは轉じた、一九二〇年に於ては社會黨が除りに無謀なる工場占領を斷行するのみか、軍人を虐待し、又た反對派に無法な迫害を加へ就中一九二〇年十一月ボロナの市會に於て議席の多數を占めて居る社會黨が少數派を脅迫し、市會議事堂にて戰爭の功勞

者ジョルダニー氏の虐殺を敢てしたる事件は、大いに伊太利國内の人心を刺戟し動搖せしめた、之と共に同月伊太利戰勝記念祭で、尙武心が動き、此間にフアスシスチは漸く人民の同情を得來り、又た其後ダヌンチオのヒユーメ遠征終了の結果、伊太利に歸來した靑年隊連も、フアスシスチに加はりて活躍を開始し、又過去二年間に於ける社會黨の暴行續出の爲めに、之が制壓の必要を悟つた資本家階級事業家階級も、フアスシスチに對し金錢上の援助を與へたので、フア團は優勢となり、國內到る所、社會黨征伐を開始した、而して昨年八月社會黨が總同盟罷業宣傳を宣言した場合に、フアスシスチ團は武力を以て此總同盟罷業の破壞を聲明し、首尾能く同盟罷業を失敗せしめたので益聲望を高め、昨年八九十の三ケ月間に入會者非常に增加し第一線の會員五十萬人を數え、第二線の會員百萬人を算し、其勢力は殆ど伊太利全國を震蕩するの慨を示した。

形勢斯の如く進展し來ると共に、ムソリニーは最早社會黨の征伐のみを以て滿足せず、伊太利の政治改革を呼號し、自から政界に立たんとする希望を有するに至つた、尤も是より先き一九二一年時の首相ヂヨルチーは、其總選擧を行ふに際し幾分社會黨の勢力を抑壓する爲め、フアスシスチを利用せんとする策に出でた、其結果として一九二一年五月の總選擧には、社會黨は前回よりも議員數を減少し、百二十一名を占めて第一位に居つたがフアスシスチからも亦始めて玆に議員を選出することと二十八名に及び、ムソリニーも其中の一員として選出されたのである、彼は此時以來自から伊太利政界に立ち政治を左右して見たいといふ鬱勃たる雄心を懷いた、而して昨年八年の總同盟罷業の壓服に成功するや、黨員は續々增加した、此形勢を看取した彼は愈政權掌握の志を堅め、先づ十月二十四日ボロナに於てフアスシスチ團の總會を開き、九萬の同黨員が之に參會するや、席上ムソリニーは伊太利の政治はフアスシスチ の下に於て行はなければならぬことを絕叫した、尤も彼は之より先き十月五日ミランに於ける演說でも『今や伊太利には二個の政府がある、一は形式上の政府であり他は實質上の政府である、形式上の政府とは今のフアクタ內閣であり實質上の政府とはフアスシスチである』と呼號したのみならず更に『此形式上の政府は將に實質上の政府に地を讓らねばならぬ』と叫んだのであつた。斯の如く彼が政府に向つて政權を求むるやフアクタ內閣は已むを得ず自ら辭職を決心し、遂に同月二十八日前首相にしてフアスシスチ系に近きサランドラ氏に內閣組織の大命は下つた、這は要するにサランドラを首相としてムソリニー氏等フアスシスチ一派に閣員の議席を與へて、一の妥協策を講ぜしめんとする

ものであつたが、ムソリニーはサランドラ内閣に入ることに同意しなかつた結果サ内閣は遂に不成立に終た、玆に於て伊國皇帝は決然としてムソリニーに對し自から新内閣の組織を命じ、十月三十日市民歡呼裡にムソリニーの入都を見、翌日新内閣の組織を見るに至つたのであつた、同内閣に於てはムソリニーは自ら總理大臣として内務外務兩大臣を兼ね、豫て關係淺らざるデーアス將軍を陸軍大臣となし、殖民大臣にはファスシスチ系統のステファニチ氏を以て之に當て、司法大臣農務大臣は自國から出し、國庫大臣、公共工事大臣は自派に近き國民黨系より加へ、更に一兩名の大臣を羅馬教派より取り、又文部大臣は民主黨系より取つて、玆に新内閣は成立を告げたのであつた。此ファスシスチ内閣出現に就ては、從來の伊太利政治家之を希望して居た譯ではない、皇帝又斷乎之に政權を委するの可なるや否やに就て、尠からざる疑問と不安を有つて居たが、若しもムソリニーを招致し内閣を成立せしめず、ファクタ内閣の最初建言せるが如く戒嚴令を布くこと丶なるならば、所謂伊太利軍隊と民間のファスシスチ團とは相對して、玆に内亂を勃發し伊太利將來の運命を危殆に瀕せしむる虞れあることを考へ、一の妥協策として此擧に出でたものであつた。

四

以上で、ファスシスチ派の内閣追取の徑路は、略ぼ之を盡したと思ふが、之に續ひて考へねばならぬのは、此反動的政治は、我日本の反動的論客が言ふ如く、永續性を有するか如何である、予は此點につきては、遺憾ながら、永續性を承認することが出來無い、その理由の第一は此團體をして勢力を得せしめた伊太利の政情その者にあらねばならない、蓋し近年伊太利の傳統的政治は議會と政黨とを含みて、共に人民に厭かれ、人民の前には殆ど信用皆無の狀を呈して居たのである。之は伊太利の政治が殆ど人民の意を代表せず、人民の利益とは遙かに乖離して居た爲めであつた。先づ世界大戰爭以前に於ては今日八十歳の高齢に達して居る例のヂョルチー等が、最も勢力を有し選擧も議會も内閣も、悉く彼が意のまゝに左右せられ行動して居つたと云ふも差支ない、よく西班牙に就て循環内閣といふ言葉がある、之は政治家が私に政權を授受し順番に交代して内閣を組織し政治を行ふのであつて、人民の意思は悉く蹂躙せられ何等内閣を左右する力を有しないを謂つて居るのであるが、伊太利又之と軌を一にし、ヂョルチー等は自己が政府に立ち政を行ふ場合、在職時間が長くなり過ぎて、漸く人心に倦怠の狀現はれ

んとするや、自から進んで位を去り、自己の傀儡となるべきものを後繼內閣組織者として殘し置き、其傀儡が一定の期間を經ると、次は再び自から出馬して國政の局に當るの手段を執つて居た。翻つて議會の諸政黨は如何といふに、殆ど國家のために國政を議するにあらずして、一種の私利私益交換のため政治を取引して居るに過ぎない、或場合には一黨派の私益を計るを主眼とし、或場合には議員個人の利益を計ることを目的とすると言ふ差別があるに止まつた。斯の如き政府及議會には人民の信任もなければ權威もなかつた、又た內閣にも議會にも眞の勇氣も信念も無かつた、そこで世界大戰爭の勃發に際しても時の議會も政治家も之に參加するの勇斷なく、殆ど獨逸系に左右せられ、伊太利國民が熱望して居る所のトレンチノ、トリエスト、アルバニア等を自國の勢力下に包括せんとする所謂大伊太利實現の爲めの參戰などは夢にも考へない所であつた、併しながら當時國內に於ては國民の參戰熱頗る熾烈となつた爲め、議會の多數は不參戰派であつたに拘らず、人民に鞭韃されて漸く參加の段取となつたのだ、之はヂョリテー氏勢力失墜を齎らした世界大戰迄の形勢であるが大戰參加後はドウかと言ふと、サランドラ內閣、ボセリー內閣、オルランド內閣、ニッチ內閣等の各執政、從前の內閣以上に無能と無氣力とを示したのである。之はヂョルチーの勢力失墜以來、第二流第三流の能力なき平凡政治家が政局に當つたからでもあつた、就中戰爭が終了すると、擧國一致の狀態が破れたので政府が所謂小黨分立の議會に頭を抑へられて、何事も爲す能はず手も足も出ぬ窮地に陷つたことも、疑ひ無かつた、即ち、假りに政府が一事を爲さんと欲すれば各黨派の贊否區々にして政府は何れの黨派の御機嫌をも損はざることに腐心し、爲めに何等の施設をも行ひ得ざる狀態となつたのである、加ふるに、戰後伊太利では國內の物價は三倍四倍に昂騰せるに反し、勞働者の賃金は之に伴はざるものがあり、資本家富豪階級などは盛に暴利を貪り、隨所に成金振を發揮して甚く勞働者其他下級人民の反感不滿を買つて居た。此間政府の施設は見る可きものが無かつた、之れ痛く人民をして傳統的政府に飽かしめた一であつた、無論之以外にも、伊太利が戰爭に於て、折角多大の努力を費せるに拘らず、僅かにトレンチノトリエストを得たるに止まり、伊國民の大伊太利實現の思想から云へば、其豫想に外るゝ所のものが多かつたのも、伊太利人の政府不信用の助因ともなつた、即ち隣國ユーゴースラヴィアは人口六百萬から、一躍一千二百萬の有力なる國家を建設し、又た今は土耳其領となつたけれども、當時亞細亞土耳其で伊太利が最も其領有を希望して止まぬ所であつたスミルナ地帶は、

當時希臘に獲得さるゝことに定つて居た、是等の外交的失敗は戰爭の齎したる經濟的苦境及之に關聯する政府の失敗と共に、伊太利人民をして、從來の政府議會を信用せしめず、新らしきものに眼を向けしむるに至つたものである。

而して斯くの如く舊來の傳統的政府及議會に失望した伊太利人は、先づ一九一九年、一九二〇年の第一期に於て新奇であつた社會黨に奔り、之が勢力をして一時伊太利の社會に思ふ存分に雄飛せしめたものである、然かも社會黨が實際伊太利人民の期待に合せず、徒らにその亂脈であり、建設的でない行動の連續に依つて社會不安を齎らすのみで、何等社會の幸福に貢獻せぬことが分明して來る、彼等は、一轉一九二一年及一九二二年の第二期に於て反撥的に新らしく起つたファスシスチ團に向ひ、之に依つて不滿足な現狀から脫却せんとするに至つたのである。

五

殊に忘れてならないのは此第一期に於て社會黨を援けて其成功を齎らし、第二期に於てはファスシスチを助けて其成功を得せしめたるものゝ少からざる部分が、殆ど同一分子であつたといふことである。其第一は戰地より歸來した除隊兵士及び、學生子弟を含む青年であり、第二は勞働者である、先づ青年から說かんに、伊太利通の英國人ミラー、米國人コリンス等に言はすれば、伊太利青年は平時の生活に於て英氣を漏すべき機會が甚だ少ない。英米の青年なればクリケットを試みるとか、フートボールを行り其他盛んにスポーツを親むなど、自然的に英氣を漏らして居るが、伊太利の青年にはそれが缺如して居る、從つて彼等の鬱勃の氣は何處にか出口を見出さねばならない、さういふ心理がある處に、恰も世界大戰終焉を告げ、所謂平凡なる自由主義的政府の施政が人心を倦怠せしめたので、彼等は自ら何か新らしい勢力に心を寄せ之に依つて、自分等の活動の機會を作り、英氣を發散せんとして、所謂社會主義の面々に味方したのであつた、之には青年もあり同時に兵士もあつた、世間では一九一九年より同二〇年に亘る社會黨の活動に於ては、伊太利の退職軍人が非常に虐められたと考へ、詰り軍隊を敵として斯る暴行を社會黨が働いたやうに云れて居るが、それは主として將校を虐待したのであつて普通の兵士は、當時社會主義系に味方して居た、即ち時の總理大臣ニッチ氏の如き、社會黨に對して强き壓力を加ふることが出來なかつたのは、實に氏が當時軍隊既に赤化せりと信じて居たからではなかつた乎、然り少くとも當時は軍隊の內部も歸休兵の心理も、赤化的傾向を帶びて

居た、其當時の社會黨は議會に於て百六十名の議席を占め、最大の政黨として立ち、一方議會以外に於ては市町村會等の自治團體を自己の圏内に掌握し、多數の市長町村長を自派より選出し、市廳市會議事堂の屋上には、伊太利國旗は降ろされて赤旗翻るの暴狀が到處に演ぜられた、斯る形勢を致したるものは極めて少數の極端なる社會主義、若くは共産主義に堅まつて居るものゝ力ではなくして、現狀不平の面々が最初其少數者の活動を援助し同情した結果であると云つて宜い。ところが、若い人人の期待は裏切られた、社會黨は唯徒らに亂暴を行ふのみにて期待された理想的政治の更に實現せられざるを見ると、是等青年連の心理は日を逐ふて社會黨を離れ、遂に異れる潮流に頭を向けた、これが反動派の擡頭と政權掌握を助成したことは言ふ迄も無い、然らば第二の勞働者は如何といふに、先づ一九一九年及二〇年に亘りて大いに社會黨を助け、一時伊太利の赤化と目せらるゝが如き形勢を釀成せるものは、即ち伊太利勞働者であつたが、今日又フアスシスチに味方し、其勢力を助長せしめつゝあるいも亦伊太利勞働者であることを忘れてはならない。本來伊太利の勞働團體は常に政黨と聯絡を保ち、行動を執つた歴史を有つて居る、社會黨と聯絡するものもあれば、羅馬教と連繋するものもあり、亦國民黨と聯絡して居たものもあつた。然るに今次の事件に就て見るに一九一九年及二〇年の間に於ては、伊太利總勞働同盟會は會員二百二十萬の多きを算して、勞働運動の中心となり、大いに社會黨を援けて大活躍を行はしめたが、社會黨の努力の結果、勞働者の境遇は豫想せるが如く改善せらるゝに致らず、例へば工場占領等種々な亂行も勞働者の境遇改善に何等の貢獻もせぬことを見ると、彼等はその期待が裏切られ、今度は全く違つた方面に何ものかを求めんと考へ出した、之がフアスシスチ國の發展の機會を造つたとは言ふ迄も無い、殊にフアスシスチ團の首領ムソリニー氏は、元と社會黨員でもあり、常に勞働者の味方を以て自ら居る人である、彼は「予は勞働者を愛する、予の生涯の最上の抱負、最大の希望は彼等の待遇を善くするにあつた」と公言して居る人である、（無論彼は他方に於ては社會黨征伐のため資本家から金を取つて運動費に充てたこともあるには違ひ無いが、併し彼は同時に勞働者の味方を以て大いに天下に宣傳したのである）斯くて社會黨に期待を滿たし得なかつた勞働者は着々とムソリニー麾下のフアスシスチに馳せ參ずるの傾向を示して來た。又た一方フアスシスチでは國民勞働協會なる團體を作り、勞働者を糾合することにも努め、勞働者は吾々フアスシスチに依るにあらざれば其の、幸福を確保する能はざる旨を絶叫して居た、此誘惑に

動かされたる勞働者は、續々としてフアスシスチの勞働團體に走り、今や團員百萬を數ふるに至り、前の所謂伊太利總勞働同盟會は、會員着々減少して八十萬人に下り、昨年に於ては遂に社會黨との提携をも中絶するに至つたのである。

之を要するに伊太利の所謂青少年分子も亦、壯年老年の總てを包含する多數の勞働者も、最初は新らしき社會主義に救ひを求めて之を援助し支持して、其結果芳しからざるを見るや更に新らしきフアスシスチに向つて馳つたのである、然らば今後フアスシスチは果して青年連の期待に副ひ、又多數を占むる勞働團體の期待に副ふであらうか、社會黨が曩に失敗した覆轍を踏むが如きことはなからうか、是れ吾々の面前に現はれて將に解釋を求めんとする難問題で無ければならぬ。

要するに今日のフア團政權掌握が、決して少數の牢固な國粹主義者、頑冥分子の實力に出たもので無く、「現狀不平」に動かされて居る上記分子の力に依ることを考ふると、予は基礎に於て先づ彼等の政治の持續性が頗る薄弱なることを思はねばならない。

六

併し本來の基礎が弱くとも、執政以後のフアスシスチ團の政治が善政であるとすれば、多少その永續性を思はしむることも出來るだらう。然らば昨年十月三十日伊太利の政權を掌握した以來の、鍛冶屋の息子ベニトー、ムソリニーの政治は果して如何であるか、今少しく之を檢して見やう。淡泊に言ふと、彼の政府も多少善政を行へることは疑ひがない、それは近頃非常の不足を告げ困難に進みつゝありし伊太利の財政に對し、一救治策を講じたことである、元來フアスシスチには所謂政治家として見るべき人物を有しないのであるが、幸に財政に於てはパヂユワ大學經濟學教授であつたステフアニ教授を大藏大臣に得た、その下に於て、從來一年の財政不足八十億リラの巨額に達せるものが、今や大減せられて十一億リラに引下げられた、是れ同教授が就任と共に情實を排し、先づ大藏省の人員整理及び經費の節減を行ひ、進んで政府部内各省に亘り經費節減を行はしめた結果であると勿論である、此外、氏とムソリニー氏と協議の結果伊太利國有鐵道に對して大斧鉞を加へ、約二十四萬の從業員を十八萬に減じ即ち六萬人を淘汰せるが如き、或は其他各種の組織に整理を加へ、改革を施せる點は大いに美とすべきものがある、又葡萄酒消費稅其他によつて財政收入を增し、國庫の收支豫算を相償はしめんとせる策の如き甚だ賞讚すべきものである、尙之を外にして幾分人氣を惹いて居る政策は、郵便局の小

包郵便事務を官業より分離して民間に委せんとしつゝあることであらう、從來伊太利の小包郵便の遲延甚しかつたことは、內外人共に多年苦痛とせる所であつた。電話事業も亦今や民間の經營に移せんとして協議を開始して居る、此外伊太利に於ては政府が政黨操縱の關係より、獵官運動を制止することと能はざる結果、必要の程度を超へて居た官吏の數を減少せることなど、成功の一と見て差支ない、是等の點は大體に於てフアスシスチ政府の美蹟として、少くとも伊太利に於て好評を贏ち得たる一分子と云ふを憚からぬ。併し之と同時にフアスシスチの失政も尠少ではない、長く人心を繫なぎ得るや否や頗る疑はしき事件を起しつゝあることは、又悲しむべき次第ではなからうか。即ちムソリニー氏は一度其位に即いて以來。行政官に至るまでフアスシスチ團員を以て之に充てんとする態度を執り、如何に有能であり如何に技能を有する官吏にても、フアスシスチに快からざる態度を持するものに對しては、用捨なく免職しフアスシスチを以て之に代らしめつゝある。元來フアスシスチは暴力を以て社會黨と爭ひ、玆に政權を掌握したものであつて、例へば社會黨の集會所を襲ふて之を破壞し、社會黨の市會を襲ふて無理無體に市會議員等を辭職せしむるといふが如く、暴力本位によつて行動した分子であつて、政治的手腕を有するもの極て尠ない、然もそれ等のものを重要なる官職に就かしめつゝあることは、是れ大なる失政の一に數ふべきであらう。それから前ニツチ內閣時代に組織された人員約四萬人の警察隊を廢止し之に代ふるに自分の味方のみより成る、殆ど私的團體と云つて差支なき約八萬人の黑色警護隊を新設したなど、批評の的となつて居る、又たムソリニーは其執政の最初に當り今後フアスシスチ團體の暴力使用中止を聲明せるに拘らず、事實は之に反し市町村の選擧に於て正當に選出せられたる、社會主義者若しくは羅馬教黨の官吏などに對し、依然極端なる暴行を加へ辭職を强要せる等の事例に乏しくない、パレジヨに於ては地方行政官吏は之が爲めに全員辭職を餘儀なくせられ、コモーといふ所でも其市會が度々フアスシスチに苦しられた結果、市政當局者は勿論市會議員まで大いに憤慨し全部職を去つたといふやうな事件も起つて居る、又ベーラといふ所にては地方の選擧に際して政府反對派は候補者を立てることが出來なかつた例もあつた、即ちフアスシスチは現政府成立の後に於て、非公式に地方自治團體等の政務執行を妨害して居る有樣である、又たフアスシスチに反對する新聞紙に對しては今や言論の自由なく、政府として直接是を壓迫することと能はざる場合には、地方に在る同派團體をして暴力を以て新聞社を破壞し或は妨害を加へて其發行を阻止し

て居るのである。尙ムソリニーは伊太利政界の革新を呼號せるにも拘らず、事實に於ては實業家銀行家等と相結託し、自己の味方たる銀行に後援するが如き態度をも盛に執つて居る。一例を擧れば伊太利には彼の有名なるバンカ、コンマーシヤルといふのがあり之と對抗せる銀行にペロン銀行がある、ペロン銀行といふのは常にファスシスチに味方たりし關係よりファスシスチ政府は同銀行に對して大いに肩を持ち、ペロン銀行とバンカ、コンコマーシヤル其他の銀行團體との競爭に於ては、事の善惡是非に拘らずペロン銀行を有利の地位に置くなど、頗る偏頗の措置を執つて居る、最近ペロン銀行當事者に對して起つた世界大戰の費用に關する一種の刑事訴訟迄も、ムソリニーの干渉によつて放棄せられ、ファスシスチ味方の銀行當事者は投獄の慘運から免るゝに至つた、斯の如きことは即ちムソリニーの政治に於て漸く人心を離叛せしむる傾向を招致するものではあるまいか。加之ムソリニーが昨年政權を掌握するや、伊太利議會に對し彼は、曾て世界に類例なき要求をした、それは向ふ一ケ年間伊太利政治の實權を自分に與へよといふことであつた、議會は爲めに實際の職能を中止し、所謂憲法政治は全然中絶されたと云つても差支ない、それは餘りに無理なる要求であつたが、彼は當時「自分の手には武裝せる三十萬の青年が居る、彼等は命令一下何時にても任務に服するの用意あり」と叫び、「議會の閉鎖を斷行するが如きことは一朝の茶飯事である」と絶叫したのであつた。ムソリニーに國政の全權を委ねるの案は、無論議會に於ける多數は衷心贊成を表しなかつたが、遂にムソリニー威壓の下に贊成二百十五反對八十の差を以て此類例なき要求は可決された、併し云ふまでもなく五百餘名を數へて居る伊太利議會に於ては、二百十五人は少數である、然も議會の半數は斯の如き無理なる要求に投票するを欲せずして缺席した爲め、少數の出席議員にて行はれた投票は、ムソリニーの威壓も加はり多數を占めて、此案は可決されたに過ぎなかつた。

斯くてムリソニーは殆ど議會なき政治を行ひ、議會は今や會議を開く回數も少くなり、同時にムソリニーの國政上に於ける失政失敗に就ては、彼は議會と共に政治を行ふよりも、一層大なる責任を負はなければならぬ立場に陷れることは、最早否認し能はざる所である。

七

以上述べたる所はムリソニー政治の永續性を裏書する材料とはドウしても見られぬのである、然も尙ムリソニーの執政は更に失敗を重ざるを得ざるが如き狀態に立つて居る、それは何か

と言ふに、近頃伊太利に於て重大な勢力を占むる羅馬教派即ち人民黨と、フアスシスチとの關係が相乖離するに至たことである。ムソリニーは一度政權を獲得するや、彼の怜悧なる成るべく羅馬法王と密接なる關係を保ち其援助を求めて、自己の地步を一層安固にせんと考へた、羅馬法王亦ムソリニーに對して相當同情を表し、其關係の密接なることは本年二月內務次官アルド、フインチ氏の結婚式當日、ムソリニーも出席せる際、大僧正ヴンヌテリー師は羅馬教會のムソリニー氏支持を意味する言明を行ふて、大いに世上の注目を惹いた事例に照らしても明かである。ムソリニーも昨年の內閣組織に際しては、羅馬教黨より勞働大臣としてカバゾニー氏を取り、外務次官としてバサロ氏を入れ、其他司法次官工務次官を同黨から取つたのであるが、是等もムソリニーのフアスシスチと羅馬教系人民黨との聯絡を支持せんが爲めの策であつた、今日伊太利議會に於ては、第一位の社會黨を除いては人民黨最大政黨である、現に社會黨の百二十一名に對して百七名を占めて居る政黨である、之が首領としては、本年四十三歲のスツルゾと云ふ極めて雄腕且つ非凡なる政治家が居る、此兩派の結託は實にフアスシスチの力を强からしめたる所以の一であつた、ところが本年四月人民黨は其總會に於て、フアスシスチの施政振に就て完全に贊成する能ざる點あるが爲め、條件付でムソリニー政府を援助するといふ程度に止め、行動の自由を維持することに決議したのであつた、此總會に於ける決議のためムソリニーは遂に人民黨の勞働大臣を初め三次官の辭職を要求し茲に兩黨の提携は破るゝに至つたのである、思ふに人民黨即ち羅馬教黨派の勢力は恰も羅馬敎の勢力强大なると共に議會以外に在りて、可なり根强い潜勢力を有して居る、そこで社會黨に反對して居たムソリニーは此人民黨を自己藥籠中のものとするに於ては、將來の勢力繼續に甚だ好都合であつたと見るべきであるが、比較的穩健なる同黨とも遂に提携を斷つに至れることは、勢ひ彼が政治的の勢力にも激減を來す原因となりはすまいか。更に彼を誤らしめはせぬかと思ふものは、彼の新選擧法改正案である、伊太利は一九一九年までは小選擧區制を採り、五百八の小選擧區より五百八の議員を出して居たのであつたが、一九一九年に至り大選擧區制を採り、全國を五十五區に別ち之と共に比例選擧制を採つて、少數代表の機會を作つたのであつた、所が本春に於てムソリニーはフアスシスチ系の策士と謂るゝビヤンシー氏の選擧法改正案を採用するに至つた、是れ最近まで行はれた大選擧區比例選擧制でもなく、其以前の小選擧區制に復起するものでもない、殆ど他の何れの國に於ても存在し無い一種妙なる大選擧區制を採用

したのである、即ち全面積三十一萬吉米人口四千萬を含む伊太利全國を以て、一の選擧區と定め、恰も日本國全國を以て一の選擧區とするのと何等選む所なきものとした、其方法は選擧民は一選擧區に於て連記により驚くべき候補者數に一度に投票をするのである、ファスシスチが何故斯の如き策を講じたのであるか、今やファスシスチは新しき政治を執つて居るが其黨員は青年である、所謂暴力によつて政權を獲得したものである、從つて其黨員にも有力なる人物、學識あり經驗ある人物、個人として人心を集めるやうな人望家はない、若し局部々々に選擧區を作り一々候補者を立て黨派と云ふことの外に候補者の人物によつて選擧をなすやうな制度ではファスシスチは選擧に於て勝利を得ることが困難である、故に一國を一大選擧區となし、驚くべき候補者の名前を連記して國民が投票しなければならぬとすれば、選擧人の頭腦には候補者個人個人の問題が輕くなり、專ら何黨と何黨といふ所謂政黨關係に依り決定され、人物無きファ派としては甚だ好都合である、ムソリニー氏は此案によつて五百餘の議員中少くとも三百五十名以上を占め、大多數を收め得られると考へた、のみならず斯の如き選擧組織の下に於ては個々に活動するものゝ力は弱く、大なる活動機關を有つて居るものが勝ち易いのである、即ち政權を握つて居るファスシスチ國が勝ち易い、思ふに一九一九年の比例代表選擧法は、社會黨と羅馬教系人民黨の選出に便宜であつたとは、最近の經驗に於て承認されて居る所であるが、ムソリニー氏は此新制度に依て一は社會黨を打破し、一は自派を激增する一擧兩得の策に出でんとするのである、然かも國民から候補者の選擇力を奪ふとも言つて善い此驚くべき大選擧區制が果して國民に贊成されるであらうか、殊に此選擧法案は已に始めて居る羅馬教黨とファスシスチとの乖離を一層深からしむるのみならず、ファスシスチの大切な味方たる南部伊太利の國民黨をもファスシスチより離反せしむる危險がある、如何となれば此案は南部伊太利に都合が惡いからである、新選擧法による時は南部伊太利より選出さるゝ議員の數は勢ひ減ぜらるゝの關係にあるからである、ムソリニーの所謂專制獨裁政治免許の期限は一ヶ年間であつて、當さに今年末に盡きるのである、故に彼が斯の如き選擧法を採用しそれによつて、自己の勢力を維持せんとする苦衷は察するに餘りあるが、伊太利人民が愚物にあらざる限り、容易に之に屈服するものとは信じられないのである。

次ぎに勞働者間に於るファスシスチの聲望も、近頃漸く減じつゝあるを見る、それは何故であるか、本年三月十一日ファスシスチは勞働八時間制を布き其法令を發布した、無論惡くない法

令ではあるが、彼は法令を發布すると同時に勞働者の時間を嚴行し、同盟罷業を行はしめないと云ふが如き態度を取つて來た、之は彼が伊太利の國情に考へ、遠くその將來に想到したる一の愛國的觀念より出でゝ居ることは疑ひなき所である、今日伊太利は國外より物質の供給を仰がなければならない、輸出少なくして輸入が甚だ多いといふ狀態である、此際伊太利の國情としては生産を盛んならしむることが重大なる事柄である、彼は此見地から同盟罷業及勞働者の緩怠を排斥しやうと企てた、ムソリニーはそれを說くに彼一流の言を以てした『即ち國民は子孫のために働くものである、現代人は現代人だけに對して義務を負ふにあらずして、子孫に對しての義務を考慮しなければならぬ、現代人は子孫に對して義務を負ふが故に働かねばならぬ。』即ち彼は子孫に對する義務を考へよと云つて現代人に勞働を強いて居る譯なのである。『故に勞働者も同じく勞働に從事し多少の供給不十分には忍耐し滿足しなければならぬ』といふ解釋を下し、それを基調として種々なる對勞働政治を行つて居るのであるが、勞働者が社會黨に背ける原因は何であつたかと云へば、社會黨が良い餌を以て勞働者を胡魔化し、實際勞働者が社會黨に味方して活躍せる後に於ては、大した獲物はなく樂園の夢は覺め果てムフアスシスチに走つたのであるが、フアスシスチが一度政權を取つた後は、多少勞働者の味方として境遇改善に力を盡す如く見えたが、實際政治に當面するや、却つて勞働者に犧牲を強ゆるが如き態度を執りつゝある、這は果して永く勞働者をしてフアスシスチに味方させしむる所以であらうか、殊に伊太利の如き國民性の浮動常なき國柄に於て、動もすれば火山の如く爆發し易き不堅實なる國民に對して、斯の如き道德的解釋による負擔の過重を勞働者に強ゆるが如き案は、成功と云ふべきであらうか、最早現に此案に對する不平が隨所に擡頭しつゝあることは、如何にしても吾々の輕々に看過するを許さぬ點である。

それから又フアスシスチが伊太利國民の人心を收め、少くとも伊太利青年の信賴を把握した原因の一として加へなければならぬものは、伊太利の國際的地位を確立するといふ宣言であつた。即ち伊太利は世界大戰に對して大いに努力したけれども、希臘或はセルヴイアの獲る所のもの多かりしに反して、その獲る所甚だ少かつた、此媾和外交の失敗は伊太利青年に取り大なる不平であつた、フアスシスチは此機會を捉へ對外發展を呼號して、大いに伊太利青年の心を自分の方に引付けた、少しく具體的に言ふと、伊太利とユーゴースラヴイア間の爭ひであるフユーメ地帶を、結局伊太利のものとすることの如き、又或時

期に於て目下佛蘭西領であるコルシカ、及び英國領モルタ島の如きも當然伊太利に所屬すべきものであると主張する如き、ダルマチアは恰も一九一五年伊太利の參戰に際し、英佛等は之を伊國に與ふることを約束したのに、講和會議に於てはダルマチアは伊太利に與へられなかつた、それが不都合だから、適當の方法で獲得を圖る可しと言ふ如き即ち是れである、併し愈フアスシスチ團として、政權を掌握した今日、歐羅巴の平和なる國際關係に急に理由なく風波を起し、帝國主義を行ふことは許されない、現にムソリニーは首相就任以來、對外關係に於ては意外に穩健なる態度を執つて居る、是は好んで執つて居るにあらずして、已むを得ず玆に出で居るのであらう、併し事情は孰れにあるにせよ、一兩年に於てムソリニーが急激に此方面の形勢を一轉して、彼が靑年に約したるが如き膨脹政策が行はれ得可くもないのは、是豈少くとも今日外交政策の立場から、ムソリニーに味方せる一部の分子をして、離反せしむるの原因となるのではあるまいか。右の外、フアスシスチの政府には下の二個の不利なる事情あることを示して居る、其第一は何と云つても腕力本位を以て政權を獲得したのであるから、內部に人物が少く智識階級が極めて少ないことである、政權を取るには力を以て出來たが、政權を維持するには仍且智惠と人物がなくては出來ない、それが各種の政治上の困難と相俟つて、多くの面倒を惹起して居る。其第二にはフアスシスチは元來一の的確なる政黨といふことは出來ぬ、政綱によつて作られた黨派ではない、感情といふ分子に重きを置いた一つの運動であつた、運動だけでは政治は行はれない、實際政治に於ては政策を定めなければならぬ、或は政策を定めることによつて、今まで提携せるものも離れざるを得なくなつて來ることである、現に同派の內部に弗々內訌紛爭を惹起しつゝあるのを見る、一例を擧れば本年四月二十四日ムソリニーはフアスシスチ大會議を催し過去に於るフアスシスチ團體を改造し、現在六十萬人の會員以外は今後新入會者を拒否することに決定し、同時に會內の紛爭を中絕することを決議した、斯の如きは同派內に種々なる分子が介在し紛爭の愈強くなりつゝあることを意味するものである。又た從來各地方に設けられて居たフアスシスチの高等委員を廢止し、中央のフアスシスチ大會議の決定を實行するために二十名の理事を設けた、尙注意すべきことは此理事の中には一名も彼等側の所謂民兵司令官を入れてないことである、是亦內部に內訌を生ぜる結果別に勢力を作り或は兵力を有するものなどを排斥せんが爲めであつた、又たムソリニーは更に令を發し、地方其他に於けるフアスシスチの幹部的地位に在る人々に對し、前以てムソリニ

ーの許可を受くるにあらざれば政治上に關する自己の意見を發明するを得ずと命令し沈默を彼等に要求した、表面的には「下手に彼等が口を辷らす時は、累を政府に及ぼす虞がある」といふのであるが、事實は已に同派内部に種々の軋轢があり、異れる議論が行はれるのに原因して居るのである。卽ちムソリニー氏は紛々たる内訌に對して彼等に沈默を守らしめ、以て自己の專制的意見を強ひ且つ行はんとするのであるが。果してムソリニーの專制的訓令をフアスシスチ團が久しく容認するや否やは、大なる疑問である、斯くまで奴隷的地位にフアスシスチ團の有力者が甘んずるものとも思はれないのである。今フアスシスチの内部的紛爭として具體的に現れた一例を擧ぐれば第一、ナポリに於て同派の分裂を見たことである、第二彼のフアスシスチの名士として議會に於て可なり勢力を有せるムスリ氏が、六月一日議會に於て思ひ切つたるムソリニー政府の批評を行つたことである。是等はムソリニー派の内部に取り、一葉落ちて天下の秋を知るが如きものではあるまいか。之を外にしては單にムソリニー政府が政治を執ることが時間の經過と共に、厭き易き伊太利人、殊に多くを希望せる伊太利人民が、今や何等か或期待を裏切られたるかの如き心持となり之を支持するの熱度漸次冷却し行くことも亦、フアスシスチ政府の運命に不利なる一因を爲すものであらうと思ふ。之を要するに伊太利が所謂反動政治を實現せしめたものは、從來の政治が多年の傳統に支配されて新生面を打開せず、國民をして之に厭き果てしめた影響に外ならない。而して彼等が最初救ひを社會主義一派に求め、一九一九年及び二〇年に亘りて之を支援したが、其結果がその豫期を裏切つたので遂に一轉して一時的ではあるがムソリニーの反動派に走つたのである、併しながら今や此反動派政治も基礎に於ても、その實際政治に於ても、缺陷多く、人心漸く離叛せんとしつゝあるは否み難き事實なることを忘れてはならない。

八

伊太利は以上の如くである、然らば第三の例たる勃牙利は如何、誰も知る如く最近六月六日勃牙利では反動派の革命が起つたのである、勃牙利國は一九一九年八月以來農民黨の首領スタンブリスキー氏が首相となり、今日に至つたものであつた、スタンブリスキー氏は元農民の出であり、少にして新聞記者となり、後議會に入り、世界大戰中は勃牙利の獨逸參戰に反對し、國王フエルヂナンドと衝突して遂に獄に降つた人であつた、戰爭後放免せられ、一九一九年勃牙利の外交關係が面倒なる時機

に貢獻すると共に、一面勃牙利國內に於て廣く民衆の輿望となり、他面講和會議の事情がスタンブリスキー氏の勃牙利首相たることを便とする事情となつた爲め、茲に同年八月以來同氏は同國の政局に立ち、今日まで巧みに外政を處理すると同時に內政に當つたのであつた、氏の根據は農民黨であり、農民は勃牙利人民の七割五分乃至八割を占めて居る關係上、從來の政府が所謂ブルジョア階級の代表者であり、然も國王を繞る少數の職業的政治家並に軍人を基礎とせるものであつたのに對して、彼の政治は誠に極端なる對照を呈したものであつた、彼は一度政治を執るや漸次社會政策を行ひ、農民の便利を計り大地主の土地を分割して、小作人の利益を擁護したのみならず、軍國主義を排し平和主義に走つた傾きもあつた、所が本年六月に入り突如倒壞するに至つた、其倒壞せる原因には二個の理由がある、一は彼は共產主義には賛成ではなかつたが、從來の保守的なる勃牙利政治家及び軍人などから見れば、極端なる社會主義系統と目せられたのみならず、彼の治下に於ては遺憾ながら國內の秩序は完全に維持し得られなかつた、即ち大分規律弛廢の傾きがあつたと同時に、マセドニア等に關する外交問題の失策も加味されて、一部人士間には多少厭惡の念を懷く事情もあつた、此一部人心が彼の政治に厭いて居る虛に乘じて、政府を乘取つ

たのが從來のブルジョア階級系の政府の基礎を動かしたのであつた、スタンブリスキー氏は本年四月末に行はれた總選擧に於ては、壓倒的なる干渉策を行つた爲めでもあつたが、兎も角總選擧は議會に於て多數を占めた、即ち彼の味方たる農民黨は二百十二名を數ふるに反して、反對黨は僅か三十三名を占むるに過ぎなかつた、表面から觀察する時は彼の政治は今春に於て最も安固なる狀態に置かれたるもの丶如く信じられて居たが、實際は既に本年五月頃に於て最も猛烈なる反對派の反抗は開始せられた、所謂ブルジョア階級軍人階級及び舊政治家階級の反對は、既に昨年夏に於て結晶され、同年七月には反對派の連衡を策し、爾來反抗派によつて着々革命策は講ぜられ、本年五月には勃牙利首府ソフィアに於て小波瀾が突發した、越へて六月九日にはタンコフ教授ザラロフ將軍、ルーセフ將軍などを中心とする革命團體は、遽かに行動を開始し、午前三時各大臣の邸宅を襲ふて閣員連を捕縛した、當時首相スタンブリスキーはソフィアに在らず郷里に旅行中であつた、之を幸ひに難を逃れんとしたが遂に暗殺されて了つた、革命當時首府ソフィアでは憲兵隊は其陸軍軍隊の爲めに悉く武裝を解かれ、鐵道電信局を初め各官省など皆軍人團に占領された、同時にタンコフ教授は國王に謁見して新內閣組織の勅命を請ひ、ザラロフ將軍はソフィア知事となり、タンコフ教授

は自から總理大臣となり、ルーセフ將軍は內務大臣となり、カルコフ大佐は外務大臣となつて、新內閣は成立されたのである、勃牙利の此革命は無論伊太利のそれとは多少其事情を異にし、巴爾幹特別の事情を有すること勿論である、巴爾幹が從來黨爭盛んであり、殊に近頃スタンブリスキーが反對派の政治家を捕縛して牢獄に投じ、動もすれば世界大戰當時は勿論、古き以前に遡り一九一二年頃の巴爾幹戰爭に於ける失態などを問題とし、反對派を裁判に附したなど、紛爭の一部原因となつたものである、故に伊太利ほどに明確に之を批評することは出來ぬ、併し大體に於て此處にも巴爾幹としては幾分進步せる所謂民主的政治、或點に於ては社會主義系に近き政治が行はれ然かも其結果人民の期待せるが如き効果を齎さず人心多少變動を思ふの狀態を呈したのに乘じて守舊的政治家及び軍人團など相聯絡し、玆に新に反動政治を立てたと言ふことは、疑問の餘地が無い、卽ち之も亦所謂反動派擡頭の一例として引例しなければならない。玆に於て乎問題となるのは果して此反動政治は永續性を有するであらうかと言ふことである、予は之に對し洪牙利に對して考へ、伊太利に對して考へると同樣に、長く其政治を維持さるゝことを信じ得ないものである、何ぞや、勃牙利人口の七割五分を占むる農民は同國の最大勢力である、急激に政治的行動に出でんとはしないとしても、如何なる政府も之を味方とするにあらざれば政權を維持し難いからである。既にスタンブリスキー治下に於て英佛伊等に公使たりし諸政治家が、今や農民を糾合し捲土重來策を畫しつゝありと近着の歐羅巴諸新聞に傳へられて居るではないか。

九

以上大體に於て目下歐羅巴に擡頭しつゝある、所謂反動政治の形勢を述べ得たと思ふ、斯く考へ來ると、近來模倣的に我國に起り來れる反動政治鼓吹の面々は、果して彼等の所謂時運に副ひ得るものと言ひ得るであらうか、殊に伊太利其他歐洲では社會黨系の狂暴的活動に對する人心慊厭の後に於て起つたのであり、それも永續性あるものではない、然るに日本に於ては社會主義の如き殆ど無勢力で、何等活躍せる歷史もなく、從つて之に對する人民の反感も失望も無い、唯存在するのは從來の政治的缺陷に對して、政治及び政黨に對する不信賴の念あること、伊太利と同一なるものがある丈けに過ぎぬ、併し之を以つて所謂國內の反動的大運動を成功せしむる十分の原因とするには未だ條件を缺如して居るのではあるまい乎、就中彼等が世界の大勢なりとして紹介せんとして居る、歐羅巴の反動政治の

運命も亦餘り芳しからざる現狀なるに於て、彼等自身先づ自ら反省しなければならぬではあるまい乎。（完）

信仰の破壞より信仰の建設へ

井上忻治

一　序言

文明は常に少數の統導的思想を基礎として化成する。これ等の思想が、時の經過に於て段々凋衰して行つた後に、遂に全くその勢力を失つてしまへば、これに支持されて居た文明は、既に終局的の滅亡に運命づけられて居るのである。文明の機構をなす社會組織に於ても、この關係はまた同樣なのである。即ち、私共が若し文明のメカニズムに少しく滲透して見たならば、一つの社會は、その制度に於て、その信仰に於て、その美術に於て、常に遺傳と傳統とによりて確立されたる思想、感情、俗習及び考へ方の――そしてこれ等の全體がそれの力を構成する――一組成體を表現するものである。ことを、容易に發見することが出來るであらう。この道德的遺產が――法律制度の中に於てゞはなく――集團精神の中に堅固に保存され、支持されて居る間に於てのみ、社會は凝集力を有する。この遺產が分散する時から、社會は凋衰する。そしてこの分解が完全の度に達したときに、社會は、まさしく、その崩壞の最終審判を受けて居るのである。

文明の中心を形作る各種の思想中で、歷史上最も優越なる地位を占めて居るものは、宗教的思想であつた。宗教的信仰は人類の歷史の中に見出される最も大きな力であつた。信仰は人間生活の支柱であつたかに見える。またあらゆる文化の源泉であつたかに見える。かくて、宗教的信仰は、社會進化の過程を支配する心理的要因として、何れの時代にありても、歷史上極めて重大なる役割を演じて來たのである。

社會進化は凡て三個の因子によりて支配されて來た。即ち、

政治的、經濟的、心理的のそれである。これ等の要因は、何れの時代に於ても認められる普遍的事實であるが、しかし、その相互の間に於ける重要さの程度に至りては、固より時代と國民とによりて、自のづから一様ではない。

民族性、信仰、意見、社會感情等、これ等の心理的要素は、概して、古代から中世を通じて、社會進化の上に最も主要なる地位を占めて居た。殊に、中世の社會は專ら宗教的信仰によりて維持されて居た。宗教は中世文化の根幹であつたと同時に、また社會存立の根本的基礎であつた。しかるに、近代の社會に於ては、この基礎が根本的に覆さるゝと共に、一體に政治的要素が特に重要視されることになつた。即ち、國民の幸福は凡て彼等の制度に依屬する。この制度の改廢によりてのみ、國民の運命は決せらるべきものだと、一般に信ぜられるようになつた。それ故に、一般政治家、殊に近世社會主義者は、凡てこの要素に大きな重要さを認めようとするのである。そして、産業組織のまだ著しい發達を見なかつた國民生活の孤立的時代に於ては、經濟的要素は社會進化の上に極めて微弱な力しか有たなかつたのであるが、産業革命來、近代の産業組織に根本的變革が行はれると共に、社會は段々と經濟的法則の必然性に服するようになつて來た。かようにして、經濟的要素が、社會進化の上に、專らその主要なる地位を占めることになつたのが、最近に於けるそれの根本的傾向なのである。

現代に於ける各種の科學的、産業的發見は、現代人の生存條件を根本的に變革した。實驗室內で發見された單純なる一化學反應は、克く一國の盛衰を支配するまでの力を有つた。機械の進步は、現に世界文化人の何割かの生活を覆滅するだけの威力を發揮しつゝあるのである。物質的文明の異常なる進步に伴つて、新しき生活價値は、次ぎから次ぎへと、無限に造り出された。從つてまた現代人の要求は無限に擴大されて來た。併しながら、これを滿足せしむべき手段は、少しも與へられては居なかつた。この事態は、遲かれ早かれ、個人生活の破綻と社會の行き詰りとに終るべきは、蓋し、避けがたき必然の歸趨であつたのである。今日の社會相が即ちそれなのである。

近代人は社會進化を支配すべき心理的要素の意義を閑却した。しかし、心的要素は近代生活の構成に於て、決してその存在理由を失つたものではない。國民生活の運命に關する最後の鍵を握つて居るものは、今日に於ても、矢張りこの心的要素なのである。殊に一國民が經濟的法則の殘忍性とその暴虐とから遁れ得る範圍は、常にその國民の心的構成、就中、その民族性と信仰とによりて規定されて居るのである、例へば、類似の制

度を有し、類似のミリユーの中に生存する多くの文明國民は、その文化の段階若しくはその文化の性質に於て、實際それぞれ著しく異つた地位を占めて居るのであるが、この運命の相違は一體どこから來るのであるか？　また或る國民は經濟的法則の支配の下に漸次奴隷化されて、彼等を支配するこの法則の必然性に向つて反動するがためには、僅かに無力なる保護法を用ひることしか知らないのに對して、他の國民は、却てこの經濟法則を彼等の必要に服從せしめようと試みて居る。この相違は一體何處から來るのであるか？　蓋しこの事實は、社會進化を支配する心理的要素の研究によりてのみ解決せらるべき問題なのである。

人間の幸福は理想の中に宿つて居る。集團生活は常にこれを統導する共通理想を必要とする。人心を統一するに足る或る理想の確立されて居ない社會は、到底永く存續し得るはずのものではない。そして幸福は外界の事物に於てのみ求め得べきものではない。幸福は人間の衷に、人間自からが造るべきものなのである。近代人は自由平等の空虚なる名辭の下に、中世の理想を無雜作に破壞し去つたのであるが、これに代るべき彼等の理想は果して建設されたか。一切の精神的價置が物質的價値に轉換されたことが、恐らく、近代生活の凡てゞあつたのではなからうか。結局、人間は理想なしに生き得るものではない。今にして、現代人は自由主義の幻滅の前に、この嚴粛なる事實をまざまざと見せつけられて居るものではあるまいか？

現在はあらゆる意味に於て、世界の歴史に一回轉を來そうとする過渡時代の一つを代表する。わたし共は今正に歴史の分水嶺に立つて居るかに見える。次第に亡び行かんとする舊文明の蒼白なる世界を後ろに眺めながら、私共は今。自由と淨福との世界へあこがれつゝ、行く手を包む薄明の狹霧の中に、わたくし共の新たに辿り行くべき新世界への幸福なる道を探し出そうとして居る。

後に述べるがように、近代文明によりて運命づけられた生活様式のお蔭で、現代人はその生活の中から信仰の支柱を失つてしまつた。信仰喪失は現代生活の最も根本的な特徴の一つである。そして現代生活の行き詰りを招來した各種の原因は、結局この心理的一事實に還元されるように思はれる。それ故に近代生活に於て失はれたるこの信仰の回復といふことに、結局、來るべき時代に對する重要なる契機を見出すべきではなからうか？　私は、同時に、現代文明に對する一批判として、この問題を考察して言たいと考へて居る。

二　文化と宗教的信仰

歴史の連續關係に於て成立し、發展する凡ての文明は、常に若干の共通信仰によりて支持されて居た。そして、この共通信仰は、何れの國民の間にありても、その生活の發展に於て、常に基礎的の役割を演じて來たのである。國民的存在と國民的生活とに於ける共通的信仰の意義は、わたし共が恐らくそれの重要さを誇張し得ない位、根本的のものである。文明は凡て、一國民若しくば尠くも一都市の凡ての個人に共通なる信仰をその基礎に有つて居た。これなしに化成され、維持された文明の例を、わたし共は一つとして、歴史の中に發見することが出來ない。假令、それが一時的のものであるにせよ、兎も角もこの信仰の共同は、これを有する集團に異常なる力を與へる。わたし共はフランス革命の當時に於て、その最も顯著なる實例を見た。即ち、民約議會のフランス人が武裝のヨーロッパに抗戰して、克くあのような勝利の凱歌を擧げ得たのは、全く全國民の精神を鼓舞した新しい宗教的信念——假令それか暫有的のものであつたがために、永續する譯には行かなかつたにせよ——の賜物にほかならなかつた。同樣にまた、近くは日淸、日露の兩役に於ても、わたし共は、私共の祖先的遺傳と民族的傳統とに由來する國民的信念が創り出した一種の神性の力に、正しい意味に於て、その捷利の要因を歸せない譯には行かない。

集團生活に於て確立された信仰の最も大きい恩惠の一つは、集團に共同感情、共同思惟の形式を與へることである。從つて、信仰の建設は、集團の間に一つの類同精神を作り出すことになる。信仰か文化の凡ての要素にその烙印を附するのは、全くこのためにほかならない。共通信仰は恐らく一つの國民精神を創り出すだけの力を有つて居る。それは常に、一國民の感情及び思想の統一的方法を形ち作る最も有力なる一要素を構成するものである。一つの信仰が、一と度、常識の中に確定されることになれば、それは常に生活の定規となり、判斷の試金石となり、知見の基準となるのである。そして、人々は最早、この新しい信仰と一致するものでなしには、何物をも受け入れることが出來なくなるものなのである。中世の基督教、アラビヤ人のイスラエル教のごときは、正にその最も著しい例であつた。その統導的信仰は、哲學にせよ、文學にせよ、美術にせよ、その他文化の凡ての要素に、常に動きのない極印を附して居たではないか。即ち、こゝでは、信仰が人間生活の最高の公準であつて、一切の事物は、その發明の憑據を、悉くこの信仰に求めて居たのである。

我國に於ても、英邁なる聖徳太子の大偉業によりて、佛教が一ト度國民的宗教として確立されて以來、千二百有餘年の間、この共通信仰が我が國民の精神生活を、どれほど力強く支配して來たかは、今更言ふまでもない。この佛教民衆化の事業によりて「法華經」、「維摩經」、「勝鬘經」によりて基礎づけられた東洋佛教の大革命は、わが國土に初めてその發祥の地を見出したのであつた。かくて比丘比丘尼の宗教は、初めて在家善男善女の宗教として解放された。その信仰は國民道徳の基礎となつた。この共通信仰によりて一般に行き亘つた三世因果の教理が、どれだけ國民の生活を淨化し、深化し、且つ豐富にして來たかは、殆ど想像も及ばないほどであつた。儒教から派生したと言はれる武士道にしても、矢張りその根幹を著しく培つたものは特に足利時代以來わが國文化の源流をなして居た禪の思想であつたことに疑ひはない。若しこの深い根柢がなかつたならば、武士道の道徳は、わが國特有の國民精神として、到底あのような美果を結ぶことが出來なかつたに違ひない。そして、その後徳川時代末期に至るまで、わが文化の園に咲き誇つたいみじき藝術の想華が、おしなべて、佛教の思想、若しくばこれによりて孕くまれた敬虔なる宗教的情操に、その深い根を下ろして居たものであることは、また明らかに認められる事實である。

要するに、大きな文化には、常にその背後に宗教的信仰があつたと言つても差支ない。そして、共通信仰の衰滅は、多くこれ等の文化の頽廢を伴つて居た。それ故に歴史上の大時代は、まさしく、力強い信仰が一般的に活躍する時代であると言はれるのは、恐らく理由あることであらう。

科學は屢々神を撲滅した。そして、その鋭い折伏の刄を振り翳して、あらゆる神性の秘密の殿堂を闖かうとする。しかし、科學の精英を以てしても、尚ほ彼が征服した神の不思議なる支配を拒む譯には行かなかつた。どんな文明でも、いまだ神なして成立し、若しくば發達し得たためしがない。最も隆盛な高揚の極に達した文化でさへも、冷靜なる理智的の見方によれば、論理も、眞理も、若しくば單純なる常識の一片でさへも具備して居ないかのような素朴なる宗教的教理に、屢々依存した。論理や理智は、決して民衆の眞の指南車ではなかつた。非理性は、人間の認識するかぎりに就て、常にその行動の最も有力なる動因の一つを構成したのである。パスカルの言つたがように「感情は理屈では判らない理屈を有つて居る」。そして、この不思議な理屈が、屢々人間の行動を支配する大きな力を作して居るのである。世界が變革されたのは、理智の煌きによつてゞはなかつた。これが熱烈なる宗教的感情に凝結した時に、初めて

人心を動かすに足る不可抗の力となつて、新しい文明の基礎を形ち作つたものなのである。假令想像の上に樹てられた宗教であつても、それが文明のすべての要素の上に拭ふべからざる色彩を印影して、それの法則の下に、限りなき多數の人心を支配する間は、聰明なる理性の大盤石の上に建設された哲學の、どんな莊嚴な組織でも、民衆一般の生活を、根本的に動かすだけの力は有たなかつた。のみならず、その存在と權威とは、常に暫有的のものでしかなかつた。何故と言ふに、民衆は將來に向て、常に或る充さるべき期待をのみ要求して居るのに、哲學は民衆に向て、實際は、單に空なる論證をしか提供しなかつたからである。而るに、宗教が民衆に與へるものは、常にこの將來に於ける豐かなる希望であつた。そして、宗教感情は本來理想感情と同義なのであるから、宗教はまた常に人心を振作し、鼓舞し、魅了し、煽揚するに堪能な一つの理想を與へたのである。世界の人心に最も偉大なる支配が創造されたのも、人類文化の共通寶庫を形造くる不朽の藝術が、暗冥の無の中から生れて來たのも、悉くこの純潔なる宗教的感情の不思議な魅力に糸を曳いた神秘的靈感によるものにほかならなかつた。

壯麗なる美的創造の最も豐かなる記錄は、熱烈なる宗教的信仰の力強く支配する世界に於てのみ見出された。信仰は文化の最も貴重なる要因であつたと同時に、また何れの時代にありても、その文化の基調をなして居たのである。それ故に、若し文化が一般に精神的生活を中心として考へらるべきものだとするならば、宗教と藝術とは、まさしく、文化の最も根本的なものとされねばならない。カーライルの所謂文化の積極時代は、常に信仰の時代であり、それの消極時代は、常に無信仰の時代であつたのである。

三 道德的生活の基調としての宗教的信仰

集團生活若しくばその文化の發展に對して、何故に、宗教的信仰は、歷史上、かくも大きな力を有つたのであらうか。その理由を理解するがためには、先づ第一に、わたし共の道德的生活に對して、信仰の有つて居る意義を知ることが、何よりも肝要なことである。

わたし共の生活が理智と情意との協力によりて營まれて居るものであることは言ふまでもない。一般に、わたし共の生活の運營は一定の觀念に基いて居る。併し、わたし共の生活は何時でも、理智によりて證驗された觀念に基いてのみ運ばれるものだと思つてはならない。わたし共の感覺には元々一定の限界か

ある。これに基き、わたし共の認識にも、また自のづから一定の限度がある。そして、それは必ずしも完全なものではない。從つて、理智はわたし共の限りなき欲求の全部を充す譯には行かない。併し、人間はその欲求の發動をどうすることも出來ぬものではないのである。欲求は充されねばならない。こゝに信仰の必要が生じて來る。卽ち理智によりては承認することの出來ない場合でも、わたし共の感情は、或る對象の實在性を、どうしても信ぜずには居られないことがある。そうなると、理智の判斷など便々と待つては居られない。想像や推測の働きによりて、わたし共は直ちにこれを眞理だと認めてしまふのである。それ故に、或る判斷を眞理だと確信する信仰は、必ずしも理智に基くものではない。信仰の本質は常に單純なる實在感情なのである。併しながら、人間はこの實在感情なしては、一日たりとも生き得るものではない。要するに、わたし共の生活は、一口に云つて了へば、この實在感情によりて指導されて居るのである。それ故に、わたし共の日常生活は、信仰なしには營まれない。例へば、最も卑近な一例を取つて見るならば、今日の次ぎには明日が來るといふ信仰がなかつたらば、わたし共は一刻たりともその生に安ずることは出來ないはずである。この場合天文學上の知識を有つて居る人々、又は「自然の過程は均齊なり」といふ假定の下に、凡ての物事を考へて居る科學者達にはそう信ずることに充分の理由があるであらうが、無知の人々にはその理屈は判らない。たゞ實踐上そう信ぜざるを得ないので信じて居るといふだけなのであ。併し、その信仰が、假令素朴的であらうと、理智的であらうと、兎も角もこの信仰がわたし共の生活に欠ぐべからざる一つの指導意識であるといふ點に於ては、少しも異はりはないのである。

死にたくない、生きたい、しかも成るべく完全に、成るべく有意義に生きたいといふ人間の衝動若しくば欲望は、わたし共に取りて最も本質的なものである。人間の自覺が進むに從つてこの衝動若くば自己充實の欲望は、益々强烈に働いて來る。從つてこの欲望を滿足せしめむかために現はれて來る生活感情は、勢ひ自己を超越した或る對象を認めて、凡ての根據をこれに求めようとする方面に嚮つて行くのは、極めて自然にして、且つ必然の過程なのである。この場合、その對象の實在を信ずるのは、必ずしもそれが道理だからといふのではない。こう信ぜなければ、どうしてもわたし共の生活感情の滿足を見出すことが出來ないからである。これが卽ち宗教的信仰の本質であつて、この場合に、實在感情若しくば合理性の情緒は最も强く現はれて居る。この熱烈なる信仰が、一と度、魂の奧底から燃え

出して來たならば、その炬火は倏ちにして凡ての事物を燒き盡さねば息まないであらう。一切のものは信仰の前に慴伏せねばならぬ。その聖火の前に、萬妖は悉くその影を潛めねばならぬ。老病死の苦惱から遁れ、五慾の煩惱から解脫して、無明照破の淨光に浴するの悅びは、この心境以外には覓められない。一切無礙の生活は、この慧光を得て初めて可能なのである。

集團生活に於ける宗教的信仰の最も貴重なる意義は、道德生活の淨化である。蓋し、連帶人の協同生活が圓滑に運ばれて、個人の自由と社會の統一との間に見出さるべき理想の實現は、結局、各自人格の相互完成に俟つのほかはない。而るに、個人の人格の完成といふことは、理智と情意との諧調によりて、性格の健全なる發展を導くことである。これがためには、先づ第一に理智の正しき意味に於ける開發を必要とする。何故なれば、理智の適正なる啓明によりて、感情及び意思の作用は、常に合目的に指導され、規整されるからである。理智の開明とその正しき判斷とによりて、行動の動機を組成する素材は、常に豐富にされるとともに、また適當に取捨される。そしてこれによりて動機そのものが純化される。從つて、これを行動に導くべき情意の品質と作用とは、またその程度に應じて、自のづから淘冶され、純化される。こゝに理智の道德が成り立つのである。而るに、實際に於ては、理智の力には限りがある。感情の流動には窮まりがない、それ故に、理智によりて、情意の作用を完全に規正するといふことは、到底不可能なことである。生活の基準としての道德の機能には、常に理智の能力によりてその限界が與へられて居る。或る程度を超へた情意の要求は、理智の力ではどうすることも出來ない。そこで、人格生活の第二の原理として、情意そのものゝ力によりて情意を淘冶し、指導すべき方法が工夫されねばならない。この方法は即ち宗教なのである。宗教的信仰は、或る熾烈なる實在感情に基きて、感情を常に一定の方向に誘導する。與へらるべき動機の力を強大にする。かくて、變轉極まりなき情意は、不動の信仰を得て、初めてその安住の位相を見出すことが出來るのである。

世には、宗教を無用の長物だとして、斥けようとする所謂道德萬能論者がある。道德の規範さへ確立されゝば、個人の人格生活なり、社會の協同生活なりの目的は、必ず完全に達せられるものだと、彼等は簡單に言ひ切つてしまふ。元より、道德はわたし共の內面生活を規律するに堪能な一つの生活原理であるには違いない。從つて、道德を實現しようとする努力によりて、わたし共の生活は淨化され、各自がそれの規範を尊重することによりて、協同生活の調和は實現されねばならないはずで

ある。が、しかし、わたし共の內面的自覺が充分でない場合には、道德の與へる規範は、單に概念的な客觀的、他律的强制に墮してしまふのが常であつて、わたし共の內面生活を規律すべきその眞の目的は、これによりて少しも達せられるものではないのである。例へば、等しく約束を守り、慈善を行ふといふのでも、若しそれが、單純な功利的動機から出て居るものであるとするならば、それは他律であつて、自律ではない。從つて、それは、わたし共の內面生活の完成に少しでも貢獻するものではない。かゝる行爲に、わたくし共は道德的價値を認めることは出來ない。しかし、世の中に道德と稱せられるものは、大概これなのである。卽ち、大多數の人々には、善惡乃至當爲の判斷は、伸縮自在な各自の主觀的利害を離れては、全く無意味なのである。彼等が甚だしい不便を忍んでも約束を守るのは、自分の社會的利益が、信用を保つことゝ重大な關係があるから、そうするのであつて、利益そのものは正でも不正でもない。たゞ或る他の利益關係に對してのみ、正であり不正であるのである。そして、それ等の利益にしても、また等しく、善惡の觀念を超越した主觀的與料たるにすぎない。而るに、宗教的自覺を伴はない所謂道德萬能論者の多くは、兎角、かような道德主觀論に墮し易いのである。

主觀論者からいへば、內界と外界との關係の調和が、善の凡てなのであるから、追從でも、妥協でも差支へない。苟くもそうすることが、自他の調和を計る上に於て、有効でさへあれば、それが卽ち善事なのである。阿諛とか無節操とかいふ言葉は、彼等には通用しない。何故といふに、道德的感情は、それ自體には、何等の善でも惡でもない單純な與料にすぎないのであるから、自分の道德的感情が周圍の事情と調和しがたいような場合に立ち至れば、何時でもその感情を去勢して妥協することが、彼等には自由なはずだからである。而るに、理想は絕對であつて一歩たりとも枉げることは出來ない。理想を犧牲にして世と妥協するがごときは、最も恥つべき惡德である。これがためには敢て鬪ひを辭せない、貧窮も厭はない、迫害も意としないといつたような高調な道德は、到底彼等には望まれない。一切の悲劇は胸底の信仰が喜んで受ける嚴肅なる饗應だと心得て、死線を冒してまでも敢然と猛進するような悲壯なる道德は、迷執の自我を超越した眞の宗教的自覺に生きる人々に於てのみ、初めて期待さるべき道德なのである。

眞に宗教的自覺を得た人々にとりては、自分のためとか他人のためとかいふようなことはない。常に自他一如である。彼等の道德的精進は道德的規範に對する義務意識をさへも超越して

居る。自のづから湧き出る衷心の要求に迫られて、どうしても、そうしなければ彼等の如實の感情が滿されないからそうするのである。道德的精進は、彼等にとりては、常に一種の衝動的必要の形を取つて現はれて來る。それ故に、道德の理想は宗教を俟つて初めて完成されねばならぬ。宗教生活は道德生活の最後の階段なのである。宗教意識から派出しない道德意識には、到底わたし共の全人格を支配するだけの力はない。最高の道德的生活の實現は、常に純潔なる宗教的情操を基調としてのみ可能なのである。そして、各自の道德的生活の完成は、やがて協同生活に於ける連帶の完成なのである。それ故に、尠くも或る程度に於ける共通信仰を基礎としない社會に於ては、到底、美はしき連帶生活の實現を見ることは出來ない。自由と淨福との生活は、連帶人の内面的革命によりてのみ、初めて達せらるべき境地なのである。

そして、單純な功利的立場からでも、わたし共はまた宗教的信仰の必要を、是非とも高調せねばならないことを痛感する。

わたし共が複雜なる日々の生活事實を整頓して行く上に於て、一々理智の煩瑣なる批判と指揮とに待たねばならぬといふことは、わたし共と取りて堪へがたき苦痛である。そして、それはまた、幸福なる生活の全目的を追行するために、わたし共に取りて、必ずしも最も有効なる方法でもないのである。理智の惱ましき努力を出來得るだけ輕減して、わたし共の日常生活が、或る程度に於て、恰かも機械的に運ばれてあるかのように成るべく生活の運營を單純化し、統一化するといふことが、結局、わたし共の生活を幸福に導く所以なのである。それはわたし共が當然取らなければならない態度である。そして、それは情意生活の適正なる訓練に俟つのほかはない。またわたし共の將來に横はる限りなき不測の事變や、悲慘なる不幸に當面して、少しの狼狽もなく、適當に且つ沈着に、これに應酬して行く上に於ては、常にわたし共の生活全體の方針を指導すべき確固不拔の信念が、豫じめ構成されてあることが、是非とも必要なのである。殊に、近代生活に於ける分業の精緻は――現在の社會組織に於て見るがごとき不合理なる樣式に於ける――益々美はしき人格生活の諧調を妨ぐるの危險を藏して居るだけではなしに、また、人間そのものを片輪にしてしまふ傾向を、著しく有つて居るものであるだけに、この必要は益々痛切に感じせられるのである。しかるに、理智は到底この必要を最後にまで充し得るものではない。また、特に近代人のために恩惠づけられた優秀なる科學的智識にしても、個々の生活事實を整頓し處理するがために、わたし共のために貴重なる役目を勤めて居るも

のではあるが、しかし、わたし共の生活全體の大方針に從つて、これを動かすべき原動力を與へ得るものではない。それは堅固なる宗教的信念に俟つのほかはないのである。それ故に信仰はわたし共のために運命づけられた最も根本的な必要であらねばならぬ。

本來、信仰は人間の必要、そして就中、その願望の表現であつたものが、長い進化の過程の中に、漸時改修されて、直ちに人間の願望の本能的領域を支配するようになつて來たものである。宗教的感情、即ち神的、政治的、若しくば社會的の或る信仰に服することの必要は、人間の有つて居る最も命令的な本能の一つである。人間は彼を壓迫する暴君の支配を脱することは出來ても、更に別の意味に於て命令的な信仰の支配を、どうして免かれることが出來よう？「幾らもがいても繩は解けない、信仰の繩から脱する唯一の道は、精神的に全く無能になることだ」と、ジエームスは言つた。信仰は人間の全生活の上に、嚴粛に君臨して居るのである。共通信仰が常に集團生活の血脈をなした所以は、自のづから了解されるであらう。

四　人生に於ける宗教的信仰の意義

人生とは何ぞや？——恐らく、これは小さな人間の智慧では、結局解くことの出來ない永遠の謎であるかも知れない。それにも拘らず、それは人間の凡てに科せられて居る最も深刻な問題である。わたし共が苟しくも人間に生を享けて來たかぎり、わたし共は、否應なしに、わたし共自から、この問題に對して何とか解決を與へない譯には行かないのである。そして、自から與へるその解決如何によりて、わたし共の生は限りなき悦びともなれば、また極みなき苦しみともなるであらう。世の中が明るくも見えれば、また暗くも見えるであらう。この世界が歡喜の泉であるか、または恐怖の谷であるかは、要するに、わたし共が自からの生に與へるその解釋次第で、何れとも決まることになるのである。

物質主義者は冷やかなる自然界の法則を以て世界の凡てを説明し去らうとする。彼等は、人間生活の凡ての現象をさへも、また何の躊躇もなく、自然界を支配する因果の法則を以つて説明し去らうとする。彼等の要求するものは、常に、初めから假定として定立された或る自然的法則の普遍妥當性である。即ち、人生問題に關して言ふならば、一般生物の生命といふ生理的原則によつて、人間の生命をも、その類概念の中に説明しようとするのである。

この法則に從へば、人間の生命は、その死の瞬間に於て、肉

體と共に、完全に且つ永遠に終滅する。そして、わたし共の人間的な調和的存在は、死と共に、有形的にも無形的にも、完全に亡びて了まふことになるのである。若し、わたし共の生命的存在が、彼等の言ふがように、他の一般動物と等しく、單にわたし共の生理的一生の間しか存續しないものであつて、凡てが死とともに永久に終滅に歸して了まふものであるならば、結局、人間の生は虚無に等しい。わたし共の感情は、果してかような虚無に滿足し、安立して、その陽炎の生を樂しむで行くことが出來るであらうか？　かような考へ方が、假りに自然界を説明する思惟の形式として妥當なものであり得るとしても、人間の精神界若しくばその價値生活の上にまで果して當然その妥當性を要求し得るものであらうか？　わたし共は動物としての一存在であると同時に、また人間としての一個の價値的存在である。若しこの原則が世界の一般現象を説明する普遍的法則であるとするならば、これ等の自然法則は世界秩序の一部であらねばならぬ。從つて、道徳的秩序を要求する價値的存在としてのわたし共の上にも當然主張されねばならないはずである。若しこゝまでその普遍妥當性が要求され得ないかぎり、動物的存在であると同時に、また一個の價値的存在であるところの全體としての人間の上に、直ちにこの自然的法則を、そのまゝ文字通りに適用するといふことは不可能であつて、それは全く不當の企てゞあるとされねばならない。

わたし共が既に道徳的生物として一つの價値生活の上に生きつゝあるものであるかぎり、わたし共はどうしても、かような解決を認容することは出來ない。若し、わたし共が單純なる動物的存在に過ぎないとするならば、第一、人間界に行はれる道徳的秩序の根據は、一體どこに見出されるのであらうか。若し、わたし共の道徳的生活に、生理的生命以外の何等かの根據がなかつたとしたならば、結局、善惡の區別もなければ、正邪の差別もない。世の中に、善人も惡人もあるべきではない。葉末の露にも等しい果敢い、短い一生を、何を苦んでか、わたし共は齷齪と屈托して暮らす必要があらう。敢て他人のことなど構ふには及はない。勝手放題に暮らしたが良いではないか。出來るだけ享樂生活に浸つて、ありとあらゆる官能的滿足を求めたからとて、何の憚るところがあらう。かうして面白可笑しく一生を過すことこそ、却て、最も賢明な方法ではないか。またわたし共の生がこんな無意味な虚無に過ぎないものであるならば、私共は、何を苦しんで、毎日たゞ生きむがために、徒らに苦勞する必要があらう？　一層一と思ひに自からの生を斷つてしまふのも、またさつぱりして良いではないか？　この場合、

生命の否定は、本質的に、善でも惡でもないからである。——かうした疑問は、恐らく、當然起り得るはずではあるまいか？いや實際そうなのである。唯物的人生觀こそ、あらゆる耽溺生活や、惡魔的沒義道や、刹那的享樂主義や、デカダン的傾向の母であつて、また他の一面に於ては、或る種の厭世觀や破壞的思想の父ともなつて居るのである。

凡ての人が等しく自己の生活を肯定し得るのでなければ、個人的にも社會的にも道德的生活は成り立ち得るはずがない。それ故に、若し物質主義が人間の價値生活をも含めて、完全に說明することが出來ない以上、それは決して完全なる思想體系とは言はれないのである。

人間は常に價値的要請の概念を有つて居る。わたし共の自然的生命は假令暫有的なものであつても、わたし共の眞の生命は永遠に存續させたい、わたし共の精神的勞作は、わたし共の死後に於ても、わたし共の生命の片鱗として、どこかにしつかりと保存されてありたい。"かう言つた切ない願望は、人間に特有な普遍的衝動なのである。そして、この衝動があればこそ、わたし共の一切の價値生活は可能となり、有意義となつて居るのである。元より、かような考へ方は、見方によりては合理的でないかも知れない、矢張り存在世界に於て免かれがたい一つの迷妄に過ぎないものであるかも知れない。が、しかし、それが假令迷妄であらうとも、それは否定しがたき人生の事實である。悲痛なる人間衷心の希望である。そして、既にかような嚴肅なる衝動が人間に存する限り、この衝動の要求は必ず充されねばならぬ。何故といふに、自然は決して充足の不可能なるがごとき衝動を形成するはずはないからである。それ故に、永遠に生きむとする衝動と、この衝動の充足とは、常に對立的に制約されたものであ　ねばならない。併しながら、こゝに謂ふ所の充足とは、勿論、認識論上の感覺的對象に關はるものではない。一つの價値認識の直觀的對象をなすものなのである。從つて、この價値認識による永遠的生命の存在は、假りにそれがわたし共の强烈なる衝動、若しくば本能の要求に基く一つの對象概念にすぎないものであつても、兎も角も、わたし共はこの生命力の永遠性を、どうして否定することが出來よう。そして、自然との關係に於て、この永遠に亡びざる生命は、確かに一つの大きな不思議であらねばならぬ。かくて、可見的自然、即ち現にあるがようなこの世界は、單に實在の外面的現象に過ぎない。わたし共が現實の自然から受け取るところのものは、人間に啓示された實在の最後の言葉ではない。實在の充分なる意義は、わたし共の眼に見えない永遠の世界、即ち未來世に於て存

するものでなければならないといふ確信に、結局わたし共は到達せざるを得ないのである。

一と度、かうした體驗が得られたならば、自分の生命を内省し、宇宙の實相を直視するわし共の心の奥底から、超自然に對する遣る瀬ない思慕と虔信との情緒が、自のづから油然として湧いて來るに違いない。宗教的信仰はかくのごとくして形成される。それ故に、宗教的信仰は、各自の教理や信條が假令何であらうとも、自然界の謎を解決すべき或る不可見的世界の存在を信ずることをもつて、その本質とするものである。

この信仰によりて、わたし共の永遠なる生命が初めて肯定され得るものとするならば、そして、不可見的世界を想定することによりて、初めて人生に生くべき眞の價値が生じて來るものとするならば、わたし共は、當然、この精神的世界の存在を信ずる權利を有つべきではなからうか。否むしろ、そうすることは、最も妥當なる生活方針として、わたし共が當然取らねばならない態度ではなからうか？　世の中には、單に眼に見え手に觸れる事物でなしには、何物をも認容することの出來ない自然主義や唯物主義の思想にどん底まで浸り込んだ偏狹な精神の持主が多い。否むしろそれが現代人の代表的定型なのである。しかし、かういふ人々も矢張り一つの守り本尊を有つて居る。「科學」といふ偶像が即ちそれなのである。この偶像崇拜者は、自分達の信じないものは、何でも彼でも、一概に非科學的だと言つて退けてしまふ。併し、この自然の世界は、單に眞正な永遠の世界への入口でしかない。即ち精神的な或る永遠的存在の一つの表徴にすぎないものだと信ずるわたし共の内面的要求に、冒しがたい強い權威の存することは、科學者に取つて大切な自然的因果律に對する彼等の内面的要求に於けるそれと、少しも選ぶところはないのである。宗教的信仰の眞實性を、何者か否定することが出來よう。科學は決してそのような權威を有つて居るものではない。人間の知識は無知の大海から掬ひ取られた一滴でしかない。智慧の無量海は直觀の支配する世界の所領である。佛陀の慧見は論理的證驗を超越した眞如の光であつた。信仰の眞實性は、宗教的要求の暗示するがまゝの不可見的世界を實在するものとして、わたし共の行動することとその事に存するのである。そして、これによりて、人生が眞に活くるに價するものとなつて、現世に於ける苦惱や困窮や不幸が、わたし共の生に對する愛着を少しも減ぜないばかりではなく、永遠の生を思ふわたし共の努力を却て益々鼓舞する所以であるならば、わたし共は人生に於ける信仰の價値を寸毫も疑ふことは出來ない。かの舊約聖書の中に見出される厭世的の言辭は、捕虜時代

のユダヤ人の口から出たものではなしに、却てソロモンの榮華の時代に於ける遺産であつた。有信の人々に取つては、苦惱は絶望の母ではなくて、却て希望の父となるのである。それ故に、現實生活に於けるあらゆる不滿と苦惱とから、わたし共を徹底的に救濟してくれるものは、信仰の光でなければならぬ。矛盾と困難とに滿ち滿ちた不合理な現實生活を合理化して、そこに永遠なる生の歡喜を見出ださうとする信仰生活を措いて、またどこに眞の生き方があり得よう。信仰は人生の點睛なのである。

五　現代人の無信仰と心靈不安の時代相

個人の生活に於て、はた集團の生活に於て、信仰が如何に重大なる意義を有つて居るものであるかは、簡單なる上來の説明によりても、ほゞ明らかにされたことであらうと考へる。現代人はこの信仰生活に對して如何なる地位を占むるものであらうか？

私は斷言する、現代人は信仰生活から絶緣してしまつた、そして信仰喪失は現代人の最も根本的な特色の一つであると。現代文明は資本主義の文明である。現代社會は資本主義の社會である。近代資本主義の原理は物質主義と科學とであつた。そしてその信條は黄金萬能なのである。貨幣價値は現代人に取つては、恐らく、人生の最高價値であるに違いない。現代人の重ずるものは質よりも量である。質的價値は常に量的價値に轉換される。人格價値は物質價値に還元される。勞働は商品なのである。勞働は機械の下に臣屬せねばならぬ。温かい血汐の勞働よりも、冷たい鐵片の機械の方が、遙かに大きな貨幣價値を有つて居る。現代人の理智はこの道理を餘りに克く理解して居た。かうした社會組織の下に於ける現代人に與へられる教育が、また極端な主知的職業教育であるべきは、極めて當然なことであつた。如何にせば、より堪能な貨幣價値の生産機械に仕立て得るか。これが、結局、現代教育の根本精神とされて居るである。かうして仕立て上げられた機械的現代人に、どうして人格生活の諧調が望まれよう。現代教育は人格を亡ぼして機械を作つた。現代人の情意生活は何時の間にか破産して居るのである。

黄金を唯一の守り本尊とする現代人に對しては、神や佛は畢竟空なる幻影でしかない。科學といふ精英なる武器に全幅の信賴を捧げて居る現代人に對して、架空な想像の産物でしかない宗教が、果して何の交渉を有ち得よう。超自然的存在に對して

驚異と畏敬とを捧ぐるがごとき純眞なる情緒の流露を、若しもわたし共が現代人の意識の中に見出そうと欲するならば、それは寧ろ、一個のパラドックスであらねばならぬ。蓋し、美や靈に對する憧憬の熱情は、創造人に與へらるべき特性であつて、機械人に與へらるべきそれではないからである。自然征服の長い戰ひの經過に於て、冷たき知識(ウイッセン)の跡の下に、信仰(グラウベン)の花咲く園を蹂躙して、絶へず科學萬能の凱歌を奏して來たのが、即ち現代文明なのである。神秘や奇蹟は近代人の仇敵であつた。科學は一歩一歩奇蹟を征服して來た。「世界に奇蹟の起らないことが永遠の奇蹟なのだ」と放言したポアンカレの言葉こそ、恐らく勝ち誇つた現代科學の擧げた最後の鬨の聲であつたらう。しかし、この鬨の聲こそ、失はれたる現代人の尊い心靈を、近代文明の墓場の中に永久に葬り去るべき悲痛なる弔歌ではなかつたらうか?

現代人の宗教的情操は殆ど完全に去勢されて居る。かくて道德的生活の基調は最早永久に失はれて居るのである。現代の眞の危機はこゝに存するのではあるまいか。現代人の社會生活のどこに、眞實なる連帶の事實を見出すことが出來るか。人格的協同の美はしき友愛關係を發見することが出來るか。凡てが爭奪であり、啀み合ひであり、反情であり、猜疑であり、欺瞞である。現代の社會は、僅かに外部的權力の惰勢的壓力によりて支持されて居るにすぎない。社會の心理的基礎は既に完全に崩壞して居る。危險は內部に存するのである。

宗教に對する現代人の冷淡さと不熱心さとを見よ。現代人は宗教に對しては全然無關心なのである。宗教に對して殆どその興味の全部を失つて居る。佛教にせよ、基督教にせよ、回々教にせよ、これ等の歴史的宗教が今日尚ほ存續して居るのは事實である。しかし、それは單に形に於てであつて、人心に對するその支配力は、最早とつくに失はれて居る。今日わたくし共が見るものは單にその形骸にすぎない。現代人は單に因襲としての宗教を知り、形式的儀式の祭壇としての教會や寺院の存在を認めて居るだけなのである。各自の教義、信條が假令何であらうとも、信仰生活の本質は敬虔感情にほかならない。現代人のどこに、かような純潔な情調が認められよう。

現代人の上下に亘りて盛に流行する迷信の淺間しさを見よ。かの怪しげなる淫祠、邪教の繁盛は、既に基本的信仰を喪失せる現代人の心理を反影する何より明らかな實證ではないか。これ等の病的信仰は、恰かも蒼海に起る波浪のやうに、その日その日の出來事の影響の下に、突如として生れて來る。何かの事情がこれを生み出せば、模倣と傳染とが直ちに布教の役目を

來まつて、これを播布する。しかし、それは少しも生命の本質に根差して居るものではないのであるから、事情の經過と共にまた電光のごとくに消え去つて了ふのである。

何れの時代、何れの民族にありても、その制度、その法律、その美術、その教育、これ等文化の凡ては、常に遺傳と傳統とによりて鮮明に色づけられた宗教的感情、若しくば一般的信仰の基調なしには成立ち得なかつた。而るに、この信仰は、現代文明を特質づける人間理智の無反省なる專制に伴つて、日と共に衰滅に歸した。そして神性の秘密の領域を益々冒瀆しようとつゝある科學が、自からこれに代つて、人間一切の生活内容の上にその支配の全權を主張しようとする。これが現代心理の最も顯著なる特質である。現代人の集團生活が最早普遍的信仰の基礎を失つて居ることは言ふまでもない。これは、歴史的に、社會心理的に考察して、集團生活の存立と進化とのために、極めて危險なる徵候ではあるまいか。私は確かにそう信ずるものである。

陰鬱と、焦燥と、興奮とは、現今の時代情調である。今日多くの國民の間に見出される極度の神經過敏な狀態に於て、わたし共がその例を發見するに乏しくない最も輕微な原因に基いて誘發される過激なる感情、最も些細な出來事を機會に、恰かも電火のように爆發される憎惡、憤激、狂亂、熱情の迸發に、また畢竟するに、極度なる情操的基調を喪つて居る現代人に、特有な心靈不安を反影する一面にほかならない。

最早どんな基本的信仰も支配しないこの感情の放縱にして極端なる動作は、感情を著しく惡化しないでは濟まない。先づ、議會の墮落に見よ、議政壇上の神聖は常に暴力によりて穢されて居るではないか、そこに行はるゝものは、言論の爭ひではなくて、腕力の爭ではないか。暴行は隨所に行はれる。最近頻發する學生騷動に見よ。各種集團運動の慘狀に見よ。今の世に淳風美俗を說くかごときは、寧ろ痴人の夢ではあるまいか。立憲國民の最大恥辱とすべき直接行動は、現代の社會に於ては、むしろその唯一の信條であるかも知れない。力が唯一の決定者なのである。

道德に於て、宗教に於て、政治に於て、法律に於て、教育に於て、最早、嘗て在つたような權威の何物も存せない。そして何人も、これ等の生活内容に對して、一つの定まつた方向を見出すことは出來ない。この時代相、この社會相にありては、喪心せる權力の代りに、所謂輿論若しくば民衆感情が、凡ての事物を主宰する。そして輿論は新聞雜誌といふ活殺自在の有力なる武器を利用し得る特權を有つて居るので、政府の職責は、

日に益々困難となり、信念をも定見をも有せない多數政治家の態度は、日を逐ふて益々動搖的になるばかりではなく、爲政者は民衆的意見を指導する代りに、常にこれに盲從する。意見の絕へざる動搖に支配されて、恰かも夢遊病者の哀れさと慘じめさとを餘儀なくされて居るのである。現代文明の誇りの一つに數へらるべき輿論の勢力と、そしてまた、現代の特徵ともいふべき民衆運動の影響とは、善い意味に於ても、惡い意味に於ても、政府の行動に於ける安定性を奪ふに充分なる力を有つて居る。民衆的意見のかくも動搖的であつて、しかも强大なる力は、單に政治だけではなして、文明の凡ての要素にまで及ぶものである。輿論は藝術家にその作品を、教育家にその訓育方針を、裁判官にその判斷を强制する。

民衆的意見の勢力に伴ふ一つの社會的危險性は、それが一種のメスメリズムの作用を伴ふ傾きのあることに於てゞある。それが、人々の思想に無意識的に作用して、人々の思想を無條件に改修(モディファイ)することに於てゞある。例へば、既に長い經驗の後に、西歐諸國が現に惱みつゝある陪審制度の救ふべからざる弊害の一つは、民衆的意見の下に、有罪又は無罪を言ひ渡す裁判官が、屢々その理由の何であるかを知ることなしに、たゞ無意識にその意見に聽從する場合が尠くないことだと言はれて居る。即ちこの場合、彼等の理智は、群集心理のメスメリズムによりて、識らぬ間に彼等の精神中になされた變節改論に、無條件なジヤスティフイケーションを與へることのためにのみ役立つて居るのである。言論界に於てゞさへも、時としては、言論そのものが却て民衆に媚びて居るかに見えるようなことがないでもないが、しかし、それは、必ずしも意識的にそうなのではなく、言論家その人が時代のメスメリズムにかゝつて居るがためなのではなからうか?。

併し、私は、これによりて、社會進化の過程に於ける民衆精神の重要なる意義と價値とを否認する積りはない。たゞ無反省に科學萬能を信奉する現代人の理智偏重の生活原理が、正しい情操的基調を缺いだ民衆精神の發現に際して、一種の社會的危險を作なふ場合の少なくないことを言はふとして居るのである。

六　近代生活に於ける信仰喪失の由來

現代人はどうしてその生活から信仰の基調を失つたのであるか。私はその由來をこゝで搔摘んで說明することにしよう。

近代生活の最も一般的特徵は、中世の他律から自律に轉じたことだとされて居る。蓋し、個人の立場から見て、中世の生活

樣式が、信仰、道德、學術、政治等、その凡てに亘りて、教權又は國家といふ普遍的原理によりて規定されて居たのに反して、近代のそれが、總て個人的原理に轉換されたことが、時世の轉回を來し、文明に轉機を與へた中心特徴だと言はれるのである。そして、この個人の自律は、ルネッサンスに於て發見された「我」の覺醒に發祥する。この「我」の自覺は、やがて、宗教改革となり、啓蒙運動となり、政治革命となりて、長い間教權及び國家によりて加へられた悲慘なる外部的桎梏から、わたし共人間を解放して呉れた。卽ち、今日わたし共が享有しつゝある參政權や信教の自由は、約二世紀の間、「我」が苦戰健闘の末に、漸く贏ち得た貴重なる遺產として、わたし共現代人に傳へられたものなのである。しかし、この信教の自由は、また或る意味に於て近代人がその尊い魂の一部を齎渡す手附けであつた。何故なれば、これによりて共通信仰に基く社會連帶の精神的基礎が破壞されたばかりではなくて、更らに、個人生活に於ける信仰の廢棄も、また外面的に、その確實なる保障を得たからである。

近代人は理智の前には盲目であつた。近代人が教權や國家の外部的壓迫から救はれたのは、固より開明された理智の力であつたに違いない。理智は實際近代人の救濟者であつた。それ故に、近代人に取りて、理智が何よりも尊いものとされたからとて、そこに少しも不思議はなかつた。が、而し、兎も角も、十七、八世紀ほど、理智が人生に對して優越な地位を占めたことはない。專ら理智に人生の本質を認めようとする傾向、人間生活の全體を支配する特權は、正に理智が專有すべきものだとする極端なる理智偏重的傾向は、この時代に於て最高調に達した。理智の至上權威といふことは、カント以前の代表的哲學者に共通の信條であつた。例へば、ベーコンに取つては、知は自然を克服利用する力を人間に與へるといふ意味に於て「知は力」――Scientia est potentia――であつた。スピノーザに取つては、知は世界及び人生の實相をわたし共に知らしめ、情念の繫縛からわたし共を解脫せしめるといふ意味に於て、「知は力」であつた。かようにして、人生の他の一面を占むる情意の地位は全く無視された。わたし共の生活に於て最も大切な實踐理性の基礎は、無雜作に蹂躙されてしまつたのである。

就中、十八世紀中葉以來、有力なる風潮を作つた無神論、若しくば成立宗教を否認する理神論の影響の下に、宗教に對する無關心は益々その度を高めて、殆ど信仰生活の危機を現出するまでに至つた。そして、中世紀以來、政治及び宗教と密接に結び付いて居た一般道德上の觀念まで、これがために權威を失つ

て、同時にまた道德上の無關心と無信仰とを誘致するに至つたのである。

しかし、近代人の宗教感情を失勢するために、そこには、更に避けがたき根本的事情を存した。自然に對する「我」の挑戰が卽ちそれである。蓋し、教權及び國家の束縛から脱することによりて「我」はその社會關係に由來する壓迫からは解放され得たとしても、「我」には「自然」といふ更に有力なる暴君の壓迫が殘されてあつた。「我」が完全なる解放を得ようとすれば、是非ともこの自然を克服する必要があつた。既に教權を征服し、國家を征服した「我」に取つては、自然征服はその第三期戰である。しかし、自然は變幻極まりなき大きな怪物である。この無窮の勢力は、到底、一朝一夕にして克服し得べきではない。その戰は、勢ひ永久の持久戰たらざるを得ない。そして、「我」の捷利によりて人間生活に於ける主宰權を獲得した理智は、先づ自然科學上の機械觀を以て、その征服戰を初めたのである。かくて、機械論的、決定論的哲學は、十七、八世紀の思想界を風靡して、甞て神の子と言はれたわたし共人間をも、また無機物同樣な「機械」にまで改造しようとしたのである。ラメトリーがその著述に與へた「人間(卽)機械」――「L'Homme Machine」――の標題は、正しく近代人に烙きつけられた正眞正銘の極印であつたらう。そして、自然科學的世界觀や機械觀的人生觀の正統なる承繼者が唯物論であらねばならなかつたことは言ふまでもない。唯物論的傾向は、また時代の風潮を作つたのである。

近世啓蒙思潮の基礎を成したものは、實にかくのごとき自然科學的風潮と唯物論的傾向とであつた。大革命の激成によりてその怖るべき破壞運動を完成した啓蒙思潮か、果して如何なる結果を生み出したかは、蓋し想像するに難くあるまい。卽ち、この運動の貴重なる動機を成したヒューマニズムの要求は見事裏切られて、その理想は一つとして實現されなかつたのである。從來、個人相互の間を連結する楔子の役目を勤めて來た宗教及び道德の根柢は、自然科學的主知主義のために潰滅されて了つた結果、協同生活に於ける連帶の基礎は破壞されて、遂に個人の調和と社會の統一とを實現するの道なき混沌たる道德的無政府の狀態が誘致されるに至つたのは、極めて當然の徑路であつたと言はねばなるまい。蓋し、機械人のためには、法律はあつても道德はなく、科學はあつても宗教はないはずだからである。かような譯で、久しく歷史的に成立つて居た社會的結合の紐帶は、無慘にも破壞されてしまつた。が、しかし、これに代るべき新たなる協同生活の連帶は、一向に生れては來なかつ

た。その齎した結果は、たゞ極端なる個人的野心の奔放と、貪婪飽くなき主我的物慾との忌むべき風潮以外には何物もなかつたのである。

ルネッサンスと教權の沒落とによりて、成立宗教は、單にその傳説の憑據に動搖を來したばかりではない。日とともに隆盛に赴いた自然科學の進歩に伴つて、天啓の眞理は、何時の間にか、すつかり科學の眞理を以て置き換へられてあつたのである。勢ひ、成立宗教は日ましに人心から遠かつて行くのほかはなかつた。かくて、人間の心靈的生活は永劫に失はれた。美と聖と榮光との源流は永遠に涸れ果てた。そして、たゞ權勢と物質的享樂とを最高の理想、最大の幸福とする惡魔の精神のみが、永久に人間の心に植へ付けられたに止まつた。蓋し、感覺論、自然論、唯物論、無神論、これ等物質主義の原理によりて指導された民衆が、共同の普遍的信念によりて動かさるゝことなしに、只管個人的の利害によりてのみ行動するようになるのはむしろ必然の歸趨であつたからである。その結果、ヒューマニズムの期待に背いて、個人の自由は毀けられ、社會の調和は破られ、革命また革命、世は極端から極端に走つて、一般民衆の福利は、往時の貴族、僧侶の代りに、一部の野心家や煽動家の意のまゝに蹂躙さるゝに至つた。嘗て古ローマの死の都を支配した imperium et dominium（支配と所有）は、更に鋭い形に於て、近代人の生活原理となつた。經濟的主知主義としての近世資本主義と、合理的勞働搾取としての現代式アブサンティズムとは、正しく主知主義の論理的歸結であつたのである。かくのごとくして、道徳上の無理想、宗教上の無信仰の時代が展開されて來た。現代生活を鮮明に特色づけて居る信仰喪失の時代相は、遠くこゝに由來するのである。

七　主知主義と生活の機械化

以上大掴みな説明によりても明らかなるかように、「我」の自覺によりて、人間が進んで獨裁權を與へた理智は、その實、人間に取つては、獅子心中の蟲にほかならなかつた。人間は最後に現はれたこの暴君の壓制によりて、更に著しく、自已內部の乖離に苦まねばならないことになつた。理智の遵奉する主知主義によりて與へられたる機械觀的、唯物論的、自然科學的世界觀、人生觀によりて、人間は却てその自主、自由、自律の凡てを斷念せねばならないような、妙な運命に陷つたのである。何故といふに、人間が單に自然の一部でしかないならば、「我」の自律と人格の價値とは當然否定されねばならないからである。獨自の目的を立てゝ、自由に活動しようと期して居た人間は、

彼れ自からが征服するはずの自然から、却て逆に、彼れ自からの一切の運命を規定されねばならなかつた。かくて人間は自から承認したこの最後の暴君からして、教權や國家のそれからよりも、更らに峻烈な、更に嚴肅な壓迫を受けねばならないといふ自縄自縛の運命に陷らざるを得なかつた。理智と情意との罅隙――こゝに「我」はその避くべからざる破綻の因を藏して居たのである。

そこで、十八世紀末から十九世紀前半に亘つての一般ヒユーマニズムの傾向、殊にフランス哲學の凡ては、前記啓蒙思潮の主知主義によりて失はれたる協同生活の紐帶を如何にして回復すべきか、破壞された普遍的信仰を如何にして再建すべきか、これを以て、何れもその根本動機とせねばならなかつた。何といふ皮肉であらう!。彼等ヒユーマニストは、何づれも社會生活に於ける新たなる共同連帶を發見せむがために、死力の限りを盡した。しかし、その手を替へ品を替へての熱心なる講説も獅子吼も、殆ど少しの効果をも奏せなかつた。嘗つて中世紀のカストの制度に於て見たがような、美はしき連帶的諧調生活の幸福なる狀態は、最早永久に失はれて、遂にその理想を回復するの道はなかつた。實踐理性の講説によりて、理智のために虐げられた情意の特權を回復しようと企てたカントの雄大なる批判哲學ですら、經濟的主和主義の前には、遂に少しの權威さへも見出されなかつた。資本主義と自然科學とは、互に相倚り、相扶けて、益々產業革命の雄圖を完成した。十九世紀の經過に於て、資本主義の庇護の下に、自然科學が空前の大偉觀を呈するに從つて、理性深化の意識と人格の價値感情とは益々失勢されて、世は擧げて物質主義の亡者と化した。かくて、荒さみ果てた現代人の情緒に言ひ知れぬ時めきを喚び起して、十九世紀の一部に燿びやかな花のごとき色彩を與へたローマンテイズムの紀念は、倏ち北光のように消え去つて、最早跡方もない。蓋しそれが中世神秘說の返り吹きであるかぎり、所詮は、近代思潮の叛逆にほかならなかつたからである。唯物論的主知主義の病根は、既に現代人の骨の髓にまで喰い入つて居るのである。

主知主義の信條とする科學は、恰かも人間生活に最も危險なる放縱、慢心、冒瀆のあらゆる罪惡の淵源であつたかに見える。しかし、それは固より科學そのものゝ罪ではなかつた。ヒユーマニズムが科學を採り入れた本來の動機と志向とは、決して科學を生活の唯一の手段として、その萬能を許すことではなかつた。害惡の責任は、後に述べるがように、ヒユーマンズムの本來の志向に反して、科學の絕對化を企てた近代人の主知主義的生活方針と、殊に、これを濫用した資本主義的精神とに歸せ

らるべきである。即ち、詩意の要請を無視してか、若しくばこの方面との諧調に頓着することなしに、科學を唯一の道具として、しかも無制節にこれを使用した不當なる理智の專制に、總ての害惡と破綻との禍根を存するのである。科學は固より人間の生活改善のために、近代人の案出した一つの勝れた方便であるには違いない。併し、それは、わたし共の祖先が案出した宗教がまたそれであつたがように、只それだけなのである。それにも拘らず、近代人はこれを殆ど唯一の道具であるかのように心得て、この新鋭の道具の前には、最早宗教は無用だとして、この祖先傳來の家寶をまで捨てゝしまはふとしたのである。併し、人間の理想なり、欲求なりは、單に科學の證驗する範圍に止まるべきではない。のみならず、現に科學が證驗する部分に於いてすらも、その普遍妥當性を立證すべき何等の客觀的公準を存する譯けではない。既にそうだとすれば、たゞこれだけの簡單な理由からでも、無反省に科學萬能を信ずる近代人の考へ方は、理智のイリユージョンにほかならないのである。

併し、それが假令イリユージョンでなくても、兎も角も、盲目的な科學萬能思想が、現代生活の根本原理とされて居ることだけは事實である。從つて、資本主義精神の下に、科學が現代生活に與へた凡ての様式は、生活の機械化であつた。現代社會の様式は巧妙なからくり仕掛の機械組織なのである。併し、これが何程巧妙であらうと、所詮は機械組織に外ならないのであるから、その中に見出される個人の生活は、自由たる人格の獨自的展開ではない。與へられた志向の機械的運營でしかない。そこには人間の本質的殊別價のために、どんな地位も與へられては居ない。個人のイニシアチブを尊重すべき何物をも存せない。どんな創造の自由も、どんな生命の飛躍も許されては居ない。凡てが齒車仕掛なのである。わたし共はこの齒車の中に、それぞれしつくりと填め込まれた機械の一片でしかない。それ故に、そこでは、私共の內面生活の原理が外面生活の様式を規定するのではない。外面生活が絶對の權威をもつて、わたし共の內面生活を獨裁して居るのである。魂は機制の冷たい鐵鎖に繋かれて居る。それ故にまた、現代文明の本質は機械文明なのである。そして物質文明なのである。現代文明のメカニズムが與へ得る生産は、一般に、製作であつて創作ではない。加工であつて創意ではない。複製であつて獨創ではない。量の文明であつて質の文明ではないのである。若し、文明と文化とを區別する例に倣つて、文化を生命の表現として觀るならば、現代には文明はあつても文化はない。現代は文明の高揚時代であつて、同時に文化の闇黑時代なのである。そこには、人間のた

めに眞に本質的な事物の殆ど何物も見出されい。凡てが物の假象なのでめる。

かようにして、理智の獨裁下に於ける現代の盲目的科學萬能主義は、文化の源泉を斷り切るとともに、人間を立派な機械にまで頽落せしめた。そして、この機械作用の前に自由を失つて居るものは、被支配者や無產者ばかりではない。また支配者も有產者も、みな一樣にそうなのである。彼等は權力から、財產から自由であるのではなくて、實は、權力そのものから、財產そのものからあやつられて居る傀儡にほかならない。これが卽ち現代人の所謂價値の不動位相なのである。しかし、かような永遠の死にも等しい生活は、理想と希望との前に、生くべき人間性の純眞と情熱とが、多少とも脈管の中を流れて居る人々に取つては、地獄の生活にもまさりて惱ましきものであるに違いない。理智は機械の創造力のみを見て、その惡用から生じ得べき怖るべき破壞力を見なかつた。一つの生活の道具であるべきものを、恰かも生活の原理そのものであるかのように考へ、生活の若しくはその改善の一つの方便であるべきものを、人間全生活の樣式そのものであるかのように考へるまでに、現代人は科學のイリユージョンに魅惑されて居るのである。その實これは科學本來の職能を無視するものであつて、科學に取つては全く難有迷惑なことであるべきではあらうが、しかし、それは兎も角、盲目的主知主義を信奉する現代社會の支配者は、政治に、法律に、經濟に、敎育に、道德に、人間のあらゆる生活內容に亘りて、一樣に、機械化の樣式を與へることに、少しの躊躇をもしなかつた。あらゆる生活內容を通じて、現にわたし共を苦しめつゝある現實生活の解きがたき矛盾と紛糾とは、悉くこの機械化の作用にほかならない。そして、あらゆる人生の不幸と、頹廢と罪惡とは、悉くこの機械化の作用に運命づけられた實りにほかならない。こゝに現代文明の惱みがある。そして現代人の惱みがある。

八　資本主義の末路

生活の機械化、現代生活の實體はこの一語を以て盡きる。その生活の機械化によりて、現代生活が旣に行き詰つて居ることに就いて、最早疑ふの餘地はない。近代人は外面生活に生きて、內面生活に亡びたのである。社會の外部的組織に於ける機械化の完成は、同時に個人生活の完全なる破滅を意味するものにほかならなかつた。

古代は人道によりて生き、中世は神によりて支配された。そして、近世は神を捨てゝ、再び新しい意味に於て古代の人道に

歸らうとしたのである。近世ヒューマニズムの主唱者等の熱誠なる叫びは、わたし共の父祖達の胸底に、年久しく鬱積して居た情熱を喚び醒すに充分であつた。その情熱の中に炎と燃えた自由主義の精神は全世界を征服した。近代生活の黎明の空は朗らかに明け放れた。人類の歴史は一變された。しかし、既に心に神を捨て去つた近代人の理智は、ヒューマニズムの導師達が傳へた寛容なる博愛的精神を承繼するには、餘りに荒み果て居た。近代人の理智は、眞に人道を擁護する菩薩の心ではあり得ないで、却てこれを破壞する夜叉の精神でしかなかつた。それ故にこそ、近世の自由主義は、ヒューマニズムの假面を被つた資本主義と稱する經濟的主知主義の夜叉手によりて操らるゝ傀儡と化してしまつたのである。この傀儡師の毒手によりて造り上げられた社會の實相は何であつたか。資本主義社會の機制の後ろには、常に無反省なる物質主義の怖ろしい吸血鬼が潜んで居たのである。貨幣價値以外の何物をも知らないこの吸血鬼は人間に最も本質的な精神生活の血脈を吸ひ盡して、人間を單純なる動物にまで墮落せしめたではないか。資本主義によりて人格生活の基礎は殆ど完全に破壞された。そして近代人は常にホッブスの所謂送り狼を道連れにして、再びローマの奴隷の生活に復歸したのである。かようにして、資本主義制度と共に、かの中世カストの幸福なる連帶の諧調と、ギルド工匠の美はしき創造の自由とは、永遠に失はれてしまつたのである。

階級生活の鐵鎖を破つた近代人と、階級の桎梏に甘んじた中世人と、その何れが果してより幸福であつたらうか、その何れが果してより道徳的であつたらうか？、中世の階級制こそ、却て、より幸福なる連帶生活の理想を實現して居たのではないか？わたし共は悲痛にもこの事實を承認せざるを得ない。即ちこの階級制に於ける個人の不平等は、能力と、功績と、社會的奉仕との不平等に、その起原と存在理由とを有つた。僧侶及び貴族は、その物質的、知力的優越のために彼等に課せられたる社會的奉仕の義務を怠らなかつた。賤民は、平和の保障と生命財産の保護とのために、彼等から享受する恩惠の故に、彼等に捧ぐべき尊敬の至誠を忘れなかつた。"Lord", "Sire", 又は "Seigneur" の尊稱は、この時代に於ては、扶持する保護者、指導する長老の意であつたと言はれる (Taine, Origines de la France contemporaine, Livre I. p. 1(8)。そこには分賦的正義が立派に實現されて居た。「優越は義務を伴ふ」の原則が嚴格に支持されて居た。中世人は、假令外面的には死んで居ても、尚ほ内面的には生きて居たのであつた。しかるに、この平和に滿ちた幸福なる状態は、如何にして變化したか。これを破壞し

たものは、獨裁的中央集權の發達に伴つて、その腹黒き陷穽であつたかのアブサンテイスムへの墮落ではなかつたか。そしてこれを完全に覆滅したものは、かのフランス革命の平等原則ではなかつたか。

而るに、近代の自由主義は、これに代るべき如何なる連帶の理想を實現し得たであらうか。革命標語の「友愛」の文字は、徒らに革命人の自己陶醉のために役立つたかの革命時に於けるプラトニックな熱情の紀念に過ぎなかつたではないか。實際に於ては、平等の名によりて、個人は相互連帶の凡ての義務から引き離されたのである。そして、各人は、同胞の休戚をば一切念頭に置くことなく、只々主我的に、利己的に、自分自からの福利をのみ追及して居るのである。自由主義の與へた資本主義的勞働搾取制度は、極めて巧妙なる科學的考案に基く更に峻烈なるアブサンテイスムにほかならない。かくて、美はしき連帶道德の光は、近代生活の黎明と共に、既に永久に消え去つて居る。人格的協力を本質とする有機的連帶の事實は、最早、現代社會の何處にもこれの見出すことは出來ない。それ故に、近代革命の擧げた自由主義の凱歌は、その實、やがて死の旅へとその蹌踉の步みを運ぶべく、運命づけられて居た個人の、悲しい門出を送る挽歌でしかなかつたのである。自由主義は近代人を幸福なる榮光の世界へ導いたのではなくて、却て、永劫なる闇黑の墓場へと導いたのである。そして、その先達は理智の無反省なる專制に奉仕する資本主義といふ傀儡師であつた。

ローマの奴隷的精神への墮落から、人間性の尊嚴を救濟して與れたかのキリスト教は、近世の無反省なる科學的精神によりて、痛ましくも征服された。しかし、これと共に、かの類い罕れなるゴシツク藝術のいみじき諧調の美を誇つた中世紀の自由なる創造的精神は、また永久に失はれた。そして、近代文明を裝るに最もふさはしき單なる感能的自然主義の藝術が、これに代つて、獨り世界を風靡するに至つたのである。近世に於ける最も大きな奇蹟であつて、しかも稻妻のごとくに消え去つたかの浪漫期の藝術を除いて、眞に永遠の名を値する如何なる藝術を、わたし共は見出し得るであらうか。機械化の生活に、どうして卓越なる藝術的創造が求められよう。美は超自然の奧から流れて來る靈感の光だからである。

これを要するに、近代の科學的精神によりて、一と度宗教道德の覊絆が斷ち切られた後に、人心と社會とを指導する最高の原理は、物質主義以外の何物でもなかつた。科學の信條が統制であるならば、物質主義のそれは、權勢と支配と所有との獨占であらねばならぬ。資本主義と帝國主義若しくば軍國主義とは、

正しくこの信條に最も忠實なる奴僕であつたのである。近世科學は、孜々として倦まざるその目醒ましき自然征服戰に於て、機械文明、物質文明を殆ど完成の域にまで齎らした。そして、理智の盲目的獨裁の下に、物質主義の走狗となつた近世科學は、十九世紀の經過に於て、資本主義社會と軍國主義國家との統制のために、その最後の傑擧を築いた。かくて、資本主義文明は爛熟した。今回の世界大戰は、正しく、この爛熟せる近代資本主義文明の總勘定であつたのである。かの恐るべきカタストロフを招來した原因は、決して一人の皇帝や、一國の爲政家又は軍閥の野心に存するのではない。大戰は、近代的資本主義文明の機構の內部に蓄積された破壞力が、爆發すべき時期に達して、當然爆發したに過ぎないのである。大戰は近代の資本主義文明に免かれがたき運命であつた。そして、ロシアの崩壞と獨墺の壞滅とは、單にこの總勘定のバランスシートに基く整理の序幕にすぎない。整理は完成されねばならぬ。わたし共は、こゝに近代文明卽ち資本主義文明の末路を見るのである。資本主義文明は明らかに崩壞の緒に就いた。時代は正しく轉回せねばならぬであらう。

九　科學萬能思想の破綻と人道主義の眞精神

上來說明するがやうに、現代の資本主義文明の行き詰りと共に、現代人の生活が既に破綻の危機に瀕して居るものであることは疑ひない。この事實は本質的に何を意味するのであるか？。

私にはこゝに考ふべき二つの問題がある。

その第一として、上記思想上の主知主義と近世ヒューマニズムとの關係に就て、先づ私は考へて見たい。

人間の生活は理智と情意との協力によりて運ばれる。この兩者の諧調關係が純化されるに從つて、それだけ人間の幸福は增大されるのである。ヒューマニズムの理想が、またこの人格的諧調生活の實現に存するものであることは言ふまでもない。中世人が、主として、情意の陶冶によりてその目的を達しようとしたのに反して、近世初期のヒューマニストは、更に理智の組織的反省によりて、一層有効にその目的を達成しようと企てたのである。それ故に、ヒューマニズムの期するところは、一方に於ては、理智の反省によりて、人間の衝動そのものを純化

し、若しくば欲望そのものを合理化すると同時に、その欲望相互の關係を規整することであつた。そして他方に於ては、他人の欲望との關係に於て、自己の欲望を等しく理智の反省によりて、合理的に規整することであつた。彼等は理智の聰明なる反省に基くこの規整作用によりて、自己の人格生活の完成を期し、且つ他人との人格的協同生活の理想を實現せしめようとした。これが卽ちヒユーマニズムの志向なのである。彼等が啓蒙を說き、科學を主唱したのは、全くこの目的にほかならなかつた。それ故に、ヒユーマニズムが人間の生活方法として科學を採り入れたのは、理智の專制の下に、情意の要請を壓迫する方便としてではなかつた。却て科學の正確なる知識によりて、理智の闡明を期し、その組織の改整を圖り、これによりて情意生活の純化に貢献しようとしたに過ぎない。宗教的要請を拒否して、宗教を道德の知的原理にまで隸屬せしむるがごときことは、決してヒユマニズム本來の志向ではない。感情を感情そのものによりて陶冶し、これによりて價値生活の目的を一層力强く實現せしめようとする正當なる宗教的要請を拒むべき理由を、ヒユマニズムは少しでも有つて居るものではない。また有ち得べきものでもないと私は確信する。ヒユーマニズムが科學と提携したことの功績は、科學を以て宗教に代らめることではなしに、人間の價値生活に缺ぐべからざる宗教的要請を、科學によりて純化し、合理化して、人間性の完全なる實現のために人生に於ける宗教の貢献を一層大ならしめることに存するのである。また存せねばならぬのである。ヒユーマニズムは決して無反省に、科學の萬能を認容すべきではない。若しそうであつたならば、それは明らかに、ヒユーマニズムの墮落を意味するものであらねばならぬ。そして、自らその尊嚴を冒瀆し、自からその價値を貶黜するものであらねばならぬ。それ故に、科學を以て宗教を亡ぼし得るがごとくに思つたのは、ヒユーマニズムの寬容なる精神と、その志向とを無視して、無反省なる科學萬能思想に囚はれて居る近代人の妄想にすぎないのである。固より、人間の宗教的衝動は、科學の進步に伴つて、益々純化される。この意味に於て、科學は信仰生活の進化に尠からず貢献しつゝあるものではあるが、しかし、科學の限界はこゝに止まるべきである。何故なれば、知識は人間の衝動を合理化し、これを整齊するだけに止まつて、衝動そのものは知識の力でどうすることも出來るものではないからである。加之、宗教的欲求は、人間の衝動の中で最も本質的な、そして最も根本的なものゝ一つであつて、人間の價値生活を促進する上に於て、極めて貴重なる貢献をなしつゝあるものであるからである。

動物の生活は單なる事實であるかも知れない、しかし、人間が生活するといふことは、決して單一なる事實ではない。人間は動物の生活と區別さるべき價値生活の一を有つて居る。その生活事實の一つ一つに内的生命が宿つて居なければならぬ。別語を以て言へば、人間の生活は物質主義と精神主義との絶へざる闘爭の過程なのである。そして、人間の理想が益々向上するに從つて、この闘爭の過程は、愈々有効に、愈々力強く進展して人間の價値生活の内容を益々豐富にすることになるのである。わたし共の靈魂は、一面肉と結び付いて、個性の現實に膠着しつゝも、また他面に於ては、これから離脱して、神性の理想に向かはふとして、絶へずもがいて居る。人間はどうしても神なしに生活することに於て成功しなかつた。また將來とても成功し得ようとは想像されない。何故なれば、神は結局人間の描いた理想にほかならないからである。それ故に、私は斷言する、科學萬能の思想は決してヒユーマニズムの志向内に屬すべきことではない、そして、ヒユーマニズムは決して宗教を拒否するものではないと。

私はヒユーマニズムの精神をかくのごとく解して居る。そして、近世初期のヒユーマニストが、中世の教權主義に反對して、近代生活の基礎をヒユーマニズムに置かうとしたことは、確かに近代生活に對する大きな貢獻であつたと、固より私は考へて居る。何故といふに、彼等ヒユーマニストの抱懐した根本精神は、上述するがように、わたし共の生活から宗教的基礎を除去しようと企てたのではなしに、單に中世生活に於て虐げられたる理智の正當なる地位を回復して、情意との調和を一層有効ならしめることにより、人間性の要求を全義的に充足せしめようと期することに存したからである。そして、これを措いて、わたし共に最大の幸福を齎すべき方法が、他に一つとして存在しようとは想像することが出來ないからである。感覺的認識に一定の限界を有する科學的知識を以て、直觀若しくば想像の世界を否定しようとするがような、あられもなき非望を、決してヒユーマニズムは抱いて居たものではない。ヒユーマニズムの志向は、單に全體としての人間性、即ち人間のあらゆる能力の完全なる調和的發展を期することに存した。そして、これがために缺ぐべからざる手段を、理智の啓明と、その組織の改整とに求めようとするに止まつた。ヒユーマニズムは、同時に最高度の究理的、倫理的、宗教的、美的活動を要求するのである。價値の綜合生活を要求するのである。それ故に、ヒユーマニズムは決して科學と宗教との兩立を妨ぐるものではない。そして、敢てキリスト教の理想を否定するものでさへもなかつ

た。殊にそれの博愛的精神は、また同時にヒユーマニズムの精神であつた。ヒユーマニズムは知性の開明によりて、この理想を達成しようとしたのであつたが、近代人の知性の啓發が、同時に情操の純化を伴はなかつたがために、知識はその本來の職能を果すことから遠かつて、却て完全なる人性の發展を妨ぐる桎梏とさへなつたのである。それは何故であるか。蓋し、ヒユーマニズムが徒らにその功を急がむがために當初の志向を裏切つて、遂に無反省な盲目的主知主義にまで墮したからである。これがために近世の經過に於て、知識は人性の渾成のために役立たずして、却て生活の不調和なる分裂を來した。そして、多くの人間を不幸の深淵に導くことにさへなつた。而し、これは歴史の經過に於て止むを得ない過程なのである。何事にも行き過ぎは免かれがたい。そして、この行き過ぎが、結局は、更に來るべき進歩の母となるのである。ローマの奴隷的精神から人間を救濟したキリスト教が、教權中心主義に墮したことは、また同樣に新思想に免かれがたい行き過ぎであつた。そしてこの行き過ぎが、それ自體の中に變革の酵母を醸成し、遂にヒユーマニズムの機運を生むで、時代の轉回を見るに至つたのである。これと同樣に、近世のヒユームニズムは、盲目的主知主義への行き過ぎによりて、また、それ自體の中に、等しく破綻の原因を醞釀しつゝ、更らに時代の轉回を待ちつゝあるものであると、私は考へる。

現代文明に毒素を撒き散らしたものは科學だとして、これを呪ふ聲は可成りに高い。そして、それは事實の認識としては、決して謬つて居るものではない。科學が近代文明の進歩の最大要因であつたと同時に、また近代文明の缺陷を助成する上に大きな役目を勤めたものであることも否定しがたい。しかし、それは宗教が中世文明の根幹であつたと同時に、またその弊竇の最大原因をなしたといふのと同一の意味に於てゞある。道具の現實的使用價値は、元より利用者の志向によりて制約される。が、而し、道具自體の志向に存する價値位相は、これによりて毫も左右さるべきではない。それ故に、生活の方便として考へられた宗教若しくば科學か、假令、時代の文明に何程の禍因をなしたからとて、これを以て、直ちに宗教若しくば科學自體の價値を評價する理由となすべきではない。科學が一面現代文明の禍因であつたといふのは正しい。しかし、これがために直ちに科學の存在を呪はんとするがごときは、愚蒙の甚だしきものである。即ちそれは、平等思想が却て近代社會の病因をなしたといふ理由を以て、必ずしも平等思想そのものを呪ふべきでないのと一般である。現代文明を荼毒した眞の責任者は、科學萬能

を妄想して、無反省にこれを絶對化しようと企てた主知主義そのものなのである。主知主義は實に近代文明に救済すべからざる禍因を植付けた。若し、教權中心主義が中世文明の病根であつたとするならば、科學萬能主義は、また明かに近代文明の病根であつた。そして前者が人間の理智生活を壓迫する暴君であつたがように、後者は、また等しく、人間の情意生活を壓迫する暴君であつた。その何れの場合に於ても、人間の生活の半面が失はれて居る。現代生活に於て見出される矛盾は、結局、この事實にその根本原因を有するものであると、私は考へる。中世文明の崩壞が生活内部の乖離に、その眞の原因を藏して居たがように、近代文明もまた等しく、生活内部の乖離に、その崩壞の根本的原因を藏するものであることを、私は固く信じて疑はない。何故といふに、理智と情意と、その何れに對しても、獨裁は到底許さるべきではないからである。

　ヒユーマニズムの崇高なる精神が裏切られて、近代文明の經過に於て、その美果を結ぶことが妨げられたばかりではなく、却てその反對を招來するがごとき結果に立ち至つたのは、正しくヒユーマニズムの精神を誤用して、遂に物質主義にまで墜落した無反省なる主知主義の罪なのである。科學萬能の思想は、決して、ヒユーマニズムの眞精神ではない。科學萬能の思想によりて去勢されたる現代人の心靈生活の復活を企つることによりて、近世ヒユーマニズムの精神は、初めてその終局たる光を發揮することになるであらう。

　私はまたヒユーマニズムに信頼するものゝ一人である。それ故に、科學萬能を信奉することの代りに、現代の盲目的科學萬能思想に反對しようとするのである。そして科學の優れたる使命を尊重すると同時に、また心靈生活の永遠性を擁護しようとするのである。失はれたる心靈生活の回復、ここに來るべき時代の使命が存する。

十　「我」の破産と宗教的自覺

　第二に、私の考へて見たいことは、「我」の自覺に關する問題である。

　近代生活は「我」の自覺に初まつた。若し、近代の思想史を「我」の自覺史と言ひ得るならば、近代生活は、正しく、その目醒めたる我の奮闘史であらねばならぬ。上述するがように、「我」は先づ、その第一期戰に於て、教權を倒し、第二期戰に於て、教權を覆し、第三期戰として、更らに自然征服の持久戰に移つて、今日に及んだのである。而るに、この第三期戰の途中に於て、「我」は更らに新たなる外敵を見出した。それは何であ

るか。資本主義の王國を支配する金權が卽ちそれである。わたし共が現在見るところの社會狀態は、卽ちこの金權の壓迫に對する「我」の抗爭を意味するものにほかならない。

何といふ痛ましい事相であらう！惡戰苦鬪の結果、漸くにして一人の大敵を倒したかと思へば、また直きに、新手の大敵が入れ替り立ち替り、現はれて來る。加之、自然若しくは外界に對する持久戰に於ては、一日たりとも、わたし共はその戰線から退くことは出來ない。不眠不休の戰鬪を續けて行かねばならない。一刻の安息すら與へられない。何といふ痛ましき生であらう。しかし、「我」に目醒めた近代人に取つては、これは如何にしても避けがたい永劫の運命であらねばならぬ。蓋し、近代人の發見したる「我」は、矢張り自然の一部に過ぎないものであるかぎり、わたし共には、何としても、自然の法則の支配を遁れ得べき道はない。そこには、因果律と進化の法則とが嚴然として控へて居る。假令、當面の社會問題が、わたし共のために、どんなに有効に、幸福に解決されようとも、それは結局一時の偸安に過ぎない。旣に人間が生存競爭といふ悲痛なる事實に於ける優勝劣敗の自然法則から、片時も免がれることの出來ないものであるかぎり、外面生活の痛ましい葛藤から、わたし共が自由になるといふことは、到底望まれない永久の不可能事とされねばならぬ。單なる生活の外部組織の立て直しや、一時の生活改善によりて、わたく共は、この生活の苦惱から、永遠の「世界苦」から、到底救はれ得るはずのものではない。果してそうだとすれば、「自我」を知らなかつた未開人の方が、近代の所謂最も進歩した文明人よりも、遙かに幸福であつたと言はねばなるまい。卽ち、近代人は「我」に目醒めることによりて、却て永劫に救はれない苦惱を得たのである。して見ると、近代人は恰かも、永遠の「失樂園」に、自から求めて墮獄したようなものである。

而るに、事實上、また、わたし共の現實はこの悲痛なる事實を承認しない譯けには行かない。果して、そうだとすれば、「我」こそわたし共を苦しめる眞實の暴君ではあるまいか？。實際そうなのである。あらゆる生活苦は、悉くこの「自我」に膠着した迷妄にはほかならない。支配と所有と執着とは、自我の自目的本能の最も好むところである。それ故にこの苦惱は、外的手段によりては永劫に除くことの出來ない苦惱なのである。わたし共が現在逢着して居る生活の破綻は、理智によりて發見された近代人の「我」が、辿り行くべき必然なる生活過程の一つにほかならない。こゝに「我」の破産がある。

そこで、わたし共は考へねばならぬ。若し「自我」の眞相が

からいふものであるとするならば、わたし共はこの「自我」そのもの丶繋縛から脱するよりほかには、結局、永劫に救はるべき道はないはずではないか。「自我」そのものを超越するか、若しくばこれを克服する以外には、わたし共の生くべき道はないのではないか。そして、宗教は凡てこの事實から出發する。それ故に、人生問題にしても、社會問題にしても、結局、その最後の解決は、これを宗教に求めるのほかはないのではないか。私は確かにそう信ずるものである。しかし、そんな自我の克服といふようなことが、一體、わたし共に可能なことであらうか？　この問題を決することは、先づ第一に「自我」そのものの正體から明らかにしてかゝらねばならないのであるが、しかし、こゝではこの問題に就いて、深入りすることは許されない。たゞ筋を運ぶに必要なだけに止めて置く。

「自我」は一體、本質的に存續する實在なのであるか。こゝで問題とされるものが、單に認識の對象としての自我であるかぎり、それは、決して本質的に存在する何物でもない。蓋し、本質的存在は、常に變化なき恒久的性質のものでなければならない。併し、認識するといふことが、既に變化的な感覺機關を通じての一つの作用に過ぎないものであるかぎり、一刻も定住することのない心理作用の上に、そんな恒久的實相が固より映り得ようはずがない。それ故にわたし共の認識する自我は、決して本質的に存在するものではないのである。若し本質的存在としての自我、即ち、わたし共の眞の存在があるとすれば、それは、わたし共の感官の認識形式によつては、到底知ることの出來ない超越的のものでなくてはならない。そして、わたし共は、この眞の存在を拒否すべき何等の權利をも有ち得るものではないのである。しかし、わたし共が認識し得るかぎりに於ける自我は、常に變化的、流轉的のもので、決して本質的に存在するものではないといふことだけは、わたし共は確かに言ひ得るのである。即ち凡ての個體的存在は、各要素群の相關的狀態に於ける一時的の存在にすぎないのである。從つて、認識の上では、決して不變的恒久的、本質的の自我といふものは、成立ち得ない。凡てか否定なのである。それ故に、わたし共の認識する自我は、結局、佛教でいふ「無我」に歸してしまふのである。

自我の正體が既にかくのごときものであるとするならば、謂ふところの「我」は、決して克服し得ないものでも、超越し得ないものでもない。結局、わたし共が自己の眞の存在を認めるか認めないかの問題である。こんな流轉的な、一時的な存在以外に、わたし共が、恒久的な、本質的な眞の自己の存在を認め

ることが出來て、その自覺の域に達しさへすれば、「我」の現實態から受ける迷執の繫縛を振り切つて、自由の心境を體驗することは、固より可能なことゝされねばならぬ。そして、それは、必ずしも困難なことではない。たゞわたし共が、眞に自己の上に目醒めるか否かの問題でしかないのである。そして、わたし共の自覺がこの程度まで達せなければ、あらゆる現實的繫縛を超越した眞の自由は、到底味はれるはずのものではない。それ故にわたし共がたゞ徒らに現實の自我に執着して居る間は、何時までたつても、眞の自由は得られない。わたし共が、眞の自己に衝き當ることの出來るまでは、人生のあらゆる困難と、矛盾と、紛糾とは、永久に未解決のまゝに殘されるのほかはない。この超我の心境にまで到達することによりて、わたし共は、社會から、人生から、自然から、初めて完全に解放されることが出來るのである。わたし共の自覺は、結局、こゝまで來なければ完成されない。日に日に自我の破產に脅威せられつつある現代に於ける自我の倫理教育は、今日また等しく破產の危機に頻して居るではないか。「我」の自覺は更らに一段の飛躍を要するのである。

わたし共の現實の存在は、要するに「我」の假現であつて、無常なる流轉の一時的形相でしかない。わたし共の束縛された官能生活や、常に對象に支配されて居る惱ましい現實生活は、すべて自我の無明な迷執に囚はれた渴欲の所產でしかない。それ自體執着を値する何物でもないのだ。――若し、わたし共が眞の自己に目醒めて、一と度かう言つた體驗に達し得たならば、たゞそれだけでも、わたし共の生活が、どれだけ明るくなつて來ることだらう！ 生活の現實の壓迫から、わたし共をどれだけ自由にして吳れることだらう！わたし共の生活は、凡て眞の自己を實現せむがための不斷の精進だと意識することによりて、どれだけわたし共の生活が淨化されることだらう！それ故に、私は言ふ。心を空しくして、眞實なる自己の存在相を凝視せよ。自我の迷執に囚はれたる無明の闇は、倏ちにして照破されるであらう、そしてそこに初めて永遠なる淨福の世界が展開して來るであらう。妄執の忌はしき渴欲を征服せよ。對象は倏ちにその存在のすがたを變ずるであらう。そしてそこに初めて囚はれざる自由の生活が展開して來るであらう。そして、自我の繫縛から離脫して、渴欲の妄執を征服することは、決して現實の生活を破ることではなくて、たゞ生活の價値位相を轉換することなのである。

そこで、私は最後の大切な問題に到着した。わたし共が現實の不合理なる生活から救はれる唯一の方法は、わたし共の自我

そのものを克服することのほかにはない。そして、それは、人間の本質に於て可能なることであるのを知つた。然らば、その方法は何であらう？。これがわたし共に殘された最後の問題なのである。

私は遺憾ながら、こゝでこの問題を充分に發展するだけの暇がないので、たゞ直截に言つてしまふ。わたし共を自我の繋縛から自由にするものは、要するに、たゞ正しく意識する意思、合理的なる意思、囚はれざる意思、正當に方向づけられたる意思のほかにはない。勿論、かような意識的意思もまたわたし共の生命衝動の一つの働きにすぎないのであるから、等しく、わたし共の欲望や渇愛の産物であるには違ひない。決して、わたし共の自我以外のものではない。しかし、それは迷妄的存在たるわたし共の精神の底深く埋沒する夜光の珠璧なのである。この夜光珠の煌きによつて、自我の迷執は自のづから霧散する。そして、そこにわたし共の眞の存在が、初めてすがたを現はして、渇欲が自のづから征服されることになるのである。何故なれば、わたし共の正しき認識の過程に於て、自覺せる意思は、倏ちにして慧智の産物となるからである。しかし、この夜光珠を掘り出すものは、單なる理智の力ではない。理智は寧ろその準備を整へるにすぎない。そこには熱烈なる信仰の槓杆を必要とする。それ故に、わたし共が、眞實の自己を掴んで、永遠の生命に精進し得るがような生活は、理智の獨裁の下には、到底望まれない境地なのである。そこには常に素直な敬虔な、宗教的情操と、純眞な信仰の美はしき協調を必要とするのである。

事物の合理性に對する欲求の熾烈なること、現代人に及ぶものはない。現代人は合理的ならざる何物をも承認しようとしない。これは確かに現代人の勝れた特性の一つであるには違いないが、しかし、行き過ぎは如何なる場合に於ても過誤である。この特性の反面としての現代人の無信仰は、また明かに現代人の大きな過失の一つであらねばならぬ。加之、信仰は超理的ではあつても、決して背理的ではないのである。私は、こゝで信仰の合理性、創造性にまで說き及ぼす腹案であつたが、時間が切迫して來たために、止むを得ず斷念せねばならないことになつたが、しかし、私は端的に主張する、「我」の自覺は、宗教的自覺を以て完成される。問題の最後の解決は、宗教に求められねばならないと。それ故に、人生問題、社會問題の解決に對して、その最終の鍵を提供し得るものは、正しく宗教的信仰であらねばならぬと、私は確信する。そして、信仰はわたし共に合理性の情緒を成立たしめるに充分であるばかりではなくて、

また多くの場合た於て、信仰は、信仰それ自身の證驗を創造するものであることを附言する。

十一　新時代への暗示

上來の記述によりて、わたしは近代文明に對する大體の批判を終つた。近代文明の眞の病根が何であるか。その根本的禍因が何れに存するかに就いて、大體の說明を與へた。そして、これを要約して見るならば、結局、次ぎの數語を以て盡くされる。

近代文明は「我」の發見に初まつた。この發見されたる「我」の自覺は、個人の解放運動として現はれた。即ち、それは普遍主義に對する個體主義の抗爭を意味するのである。そして、それが教權中心主義と國家專制主義とに對する反抗であるかぎり、この解放運動の根抵をなす思想上の基調として、ヒユーマニズムと自由主義とが要求されねばならなかつたことは、極めて當然の事理であつたのである。即ち、前者は思想上の啓蒙運動を、後者は政治上の革命運動を指導する基調となつた。

併し、如何なる反動にありても、行き過ぎは免かれがたい。行き過ぎは凡ての反動現象を通じて、必ず見出される一つの屬性なのである。そして、反動が强大なるに從つて、その行き過ぎも、それだけ顯著であるべきは、また必然の道理とされねばならぬ。近世の個人解放運動は、人類の運命を一變し、人類の歷史に一新紀元を開いたほどの大反動であつた。この大反動を統導した思想がまた一つの大きな行き過ぎを生じたからとて、そこに、少しの不思議もないはずである。そして、それはまた、進化の必然的過程として、必ずしも呪ふべきことでもないのである。何故なれば、行き過ぎは、更らに反動に對する反動を助長して、常に次ぎに來るべき進化の酵母となるものであるからである。そして、歷史の絕へざる進化の過程は、常にかくのごとくして成立つものであるからである。然らば、近代思潮の行き過ぎは何であつたか。ヒユーマニズムが盲目的主知主義にまで化成し、自由主義が自由放任──laisser-faire──となり、遂に資本主義を醸成するに至つたことが即ちそれであつた。

併し、行き過ぎは常に過誤である。それ故に、必ず弊害の因となる。即ち、その助成したる弊害は、前者にありては、主として、科學萬能思想として現はれ、後者にありては、主として、物質主義として現はれた。そして、その結果は、結局「我」の破產に終つて、現代の道德的危機と社會的混亂とを招來した。近代文明若しくば近代社會に於て發見されるあらゆる缺陷の根本的原因をなして居るものは、要するに、この二つの病的

思想であつたと、私は確信する。

併し、これがために、私は決して近代文明を呪ふものではない。何故なれば、近代文明の基調そのものに、少しの弱點をも見出すことが出來ないからである。そして近代文明を指導するヒユーマニズムは、中世の教權主義に對して、確かに一つの大きな進歩であつたと考へるからである。それ故に、わたし共の努むべきことは、近代文明若しくは近代生活の破壞ではなくて、それの完成でなければならぬ。それの完成のための改造でなければならぬ。それの破壞のための改造であつてはならない。從つて、わたし共は是非とも、近代文明の擁護者を以て、自づから任ずべきものだと、私は考へる。而し、それと同時に、わたし共はまた、徒らに近代文明を謳歌するがごとき無反省と不親切とに墮してはならない。何故なれば、近代文明が、歴史の進化の過程に於て避くべからざる缺陷を、しかも重大なる缺陷を、また等しく醸成するに至つた事實を、如何にしても否定することが出來ないからである。

そこで、私は考へる、わたし共が、來るべき時代と、來るべき社會とのために努むべきことは、單に近代文明の犯した行き過ぎの過失を匡正して、近代文明の基調をなした思想の本來の志向にまで立ち歸らしめるだけに止るべきであると。蓋し、若しそれ以上に出づれば、更らに新たなる反對の禍根を作ることになるからである。

この結論の下に、わたしの取るべき態度としては、專ら理智へ專制に對する情意の抗議であらねばならぬ。そして、私共の進むべき方向は、思想上に於ては、精神主義の復興であり、實踐上に於ては、心靈生活の回復であらねばならぬと、私は思ふ。それ故に、表徴的ではあるが、私は端的にかう言いたい。超自然に對する驚異と畏敬とに目醒めよ。そこに失はれたる創造性は回復されるであらう。敬虔なる信仰の生活に生きよ、そこに失はれたる自由と、連帶の道德とは回復されるであらうと。わたし共は神を幻靈として斥くべきではない。宗教を想像として嗤ふべきではない。現代人は創造に餓えて居る。無熱惰な單なる批判的理智から、果して生きた創造が望まれるだらうか。創造は直觀であり、飛躍である。情熱こそあらゆる創造性を孕む母であらう。藝術は理想に憧憬する情緒にのみ惠まれた神の恩惠ではあるまいか。信仰喪失の生活から眞の藝術は生れて來ないだからである。想像の世界こそあらゆる文化の源泉ではあるまいか。

それ故に、來るべき時代はヒユーマニズムの眞精神を基調とする精神主義によりて統導される時代でなければならない。そ

して、心靈生活の活潑する時代でなければならない。從つて、それは正しく信仰の時代でなければならない。信仰喪失から信仰回復へ、こゝに來るべき時代の標語を見出すべきではあるまいか。

時代は既に目醒めて居る。わたし共は現今の思想界に於て、明かにその徴候を認めることが出來る。十九世紀の極端なる自然主義的、唯物論的思潮の反動として、前世紀の末葉から次第に擡頭して來た新理想主義的傾向は、正しく來るべき時代を支配すべき精神主義の先驅をなすべきものではあるまいか。この思想傾向が最近著しく濃厚になつて來たことに、わたし共はその暗示を見出すのである。これを藝術の方面に求めるならば、表現主義の藝術がまたそれであらねばならぬ。對象を克服して、直ちに大自然の懐に飛び込まふとするその大胆なる跳躍に、宗教的信念に燃ゆる創造人の火のような情熱が見出されるではないか。そこに來るべき時代に期待さるべき再生藝術の契機が暗示されて居る。そして、これを宗教の方面に求めるならば、信仰興隆の氣運は、最近、殊に大戰後に於ける世界的傾向として、これを認めることが出來る。固より、如何なる時代に於ても、全世界を震撼させるような、或る大きな變革が行はれた場合には、特に宗教的要求なり、運動なりが著しく擡頭して來るのが普通ではあるが、而し、今日わたし共の見るこの傾向も、またそれ等と全然同一の現象だとして看過すべきであらうか。私は必ずしもそうは信ぜない。この内的、精神的要求の發生は、その個々の動機が假令何であらうとも、所詮は、前に述べた現代文明の本質的惱みに、その根本的機縁を發するものであることに於て、少しも疑ふの餘地はない。この機運の發生は、遲かれ早かれ、到底避けかたき必然の心理であつたのである。現代人は今や赤裸々なる人生の如實相に怖ろしくも面接して居る。人間生活の深刻なる惱みを、痛ましくも體驗した。そして呪ふべき「自我」の破産の前に戰慄いて居る。この人生苦こそ、即ち宗教の出發點なのである。「光明が闇黑なる素地に落ちて、初めてその自性を發揮し得るがように、神もまた、その反對に對して、初めてその神性を發現し得る」（ボエーメ）。理智の壓迫の下に、久しく生命の奥深く眠つて居た現代人の靈精は、堪へがたき人生苦の惱みの中に、初めて永遠なる生命の前に蘇生つて來たのである。

この傾向は、決して單なる一時的衝動から來た暫行的の現象であるべきではない。無限なる生命の奥底から流れ出た眞の要求の動きであらねばならぬ。そして、それは現代人の生命に巣喰つて居る深い惱みの眞意義を理解して、現代人が新たに信仰

生活を復活しようとする眞摯なる魂の目醒めであらねばならぬ。私は必ずそうあるべきだと信じて居る。そしてまた、假りに皆が皆、それほどの明確なる自覺を伴つて居ないとしても、これを以て、單に消極的な浮薄な一時的衝動として、一概に黜くべきではなく、却てます／＼この機運を助長し、善導することが、眞に同情ある世の先覺者の義務だと、私は思ふ。何故なれば、そこには、同時に、來るべき時代の尊い暗示が見出されるからである。

十二　信仰の成立及び進化の過程

然らば、來るべき時代は、如何にしてその信仰を回復すべきか。それが舊信仰への復歸であるべきでないことは明白である。何故なれば、近代人の信仰喪失が、假令、根本的には、前記のごとき事情に出づるものであつたとはいへ、その直接の原因は、舊信仰の基く教理そのものゝ內部的崩壞に存するからである。蓋し、理智の開明と科學の發達とに伴つて、目醒ましい進化の過程を踏んで來た現代人の生活意識と、依然舊態を改めない成立宗教の教理との間に、段々調和が失はれて、遂には兩者の間の交渉が殆どなくなつてしまつた結果、遂に舊信仰は、事實上、人心の上にその支配力を失ふに至つたものであるかぎり、現代人の宗教的意識が、この古い傳統的信仰に、再び歸り得べきでないことは、極めて明白であらねばならぬ。それ故に、來るべき時代を支配すべき信仰は、どうしても、新たに建設さるべきものでなければならないのである。從つて、新しい信仰の建設は來るべき時代に課せられた最も根本的な問題の一つであると、私は考へる。新時代を支配すべく、如何なる信仰が建設されねばならぬか。それは確かに大きな、そして極めて困難な問題であるに違いない。が、しかし來るべき時代に於て、是非とも、解決されねばならない問題なのである。

この問題に關する檢討は、固より、この論文の範圍に屬せない。たゞこの問題に就きて讀者が或る暗示を見出し得る便宜のために、私は、最後に信仰の成立及び進化に關する社會心理的過程の概要を述べてこの稿を結ぶことにしよう。

人間の生活は、一般に、感情と知見との二つの要素によりて指導されて居る。而るに、感情は、本來、人種的遺産と祖先の遺傳とに由來する先天的性質のものであつて、行動の動機は、主として、これによりて決定されるものであるが、これに反して、知見は、本來、ミリユーと教育との影響に由來する修得的性質のものである。それ故に、專ら物事を理由づけたり、批判したりする役目をつとめるものであつて、これが、直接、行動

のために役立つといふことは、極めて罕なのである。即ち、それが、度々繰返されたる遺傳的習僻によりて、遂に意識の閾下にまで下つて、感情化されてしまふまでは、行動に對しては、殆ど無力なのである。感情と知見とは、本來、かういふ性質のものであるから、如何に知性が開明されたからとて、人間の生活を指導する感情なり、信仰なりを、それの欲するがまゝに變更するといふことは、事實上、わたし共には不可能なことである。例へば、政治問題なり、宗教問題なり、教育問題なりを討論するために、多數の人々が集まつたと假定して、この問題を論議して居るものは、現に口を利いて居る人達ではなくて、實は、既にとつくの昔に死んでしまつて居る亡者達なのである。彼等の祖先の魂が、彼等の口を借りて、喋つて居るのである。そして、そこで聽かされて居るのは、生きて居る人達の心の中にしつくりと喰ひ込んで居る亡者達の、永劫の聲の反響なのである。殊に、個人の無益な興奮なり、熱狂なりの後ろには、何時でも必ず、隔世的の或る力が嚴然として控へて居るのである。

傳統はわたし共の祖先の協同生活を支配した思想の結晶である。文明若しくば社會の進化の過程は、常に、この傳統と新思想との絶へざる鬪爭の形式に於て成立して居るものである。その進行が、常に、遲々として牛歩のごときものであるのは、全くこの隔世的の繋縛が千鈞の重をなして、しつかりと人間の足にからまり着いて居るからである。知見の前には、今にも壞滅しそうに見える古い文明が、なかなかそう容易くは崩れないで、不思議に持ちこたへて行くのは、またこれがためである。

現代人は一般に、信仰を喪失して居ると、私は言つた。しかし、それは、固より、現代人の意識的傾向を言ひ表はしただけのことであつて、彼等の意識の底を流れて居る最も大きな祖先的遺産の一つである古い信仰の繋縛から、彼等が全然脱し切つて居ることを意味するものではない。そんな人間は一人としてあるべき譯のものではないのである。わたし共は傳統の繋縛を絶へず呪つて居る。わたし共の生活理想が進化するに從つて、わたし共は益々傳統に反抗する。しかし、完全にこれから解放されるといふことは、固より不可能なことである。何れの時代に於てでも、この傳統の桎梏を破り得た藝術家、思想家、若しくば哲學者が、果して何人あるであらうか?、勿論、或る程度に於てゞはあるが、その或る程度に於てゞすら、過去の束縛から遁れ得るものは、極めて僅少なのである。所謂自由思想家と言はれるものは、世の中に何萬人でも、何十萬人でもあるであらうが、しかし、眞にこれを值するものは、何れの時代に於て

も、恐らくに違へるほとしかないに違いない。

歷史的影響の重大さを理解せむがためには、文化の最も純粋な要素、例へば、美術の中の繪畫を取つて見ても、直ぐ分ることである。こゝには、傳統と現代的傾向との爭が、最もよく現はれて居るのであるが、しかし、それは、たゞ、より古き表現の形式に歸るか、必要な要素の或物を變更するか（例へば配色の轉換によりて）、若しくば全然偶像に沒入してしまふか、その何れかに過ぎないものであらう。最代の傾向を代表する未來派、立體派の藝術から、表現派のそれに至るまで、決して傳統や薫習の過去の桎梏から脫し切つて居るものが、一つとしてある譯のものではない。彼等が自由だと信じて居る靈感は、矢張り、過去の暗冥の中から流れて來る青白い光でしかないのである。人間は、古い事物に、新しい名稱を與へる不思議な能力を有つて居る。そして、この名稱を取り替へることによりて、それが表はす事物自體を、變改し得たものだと信ずることに於て、人間はまた不思議な能力を有つて居るのである。

傳統と新思想との關係が、既にかくのごときものであるとするならば。假令どれ程人間の思想が進歩し、どれ程人間の知見が開明して居ようとも、またその生活意識に、どれ程根本的な革命が行はれて居ようとも、遺傳と傳統とに最も深い根を下ろして居る古い信仰の羈絆から、全然逃がれ得るはずはないのである。それ故に、また、假令、舊信仰が現在どれ程權威を失つて居ようとも、これに代るべき新しい信仰が、古い信仰を全然振り切つて、全く新らしい基礎の上に建設され得べきものではないのである。人間が歷史を有つに至つてからでも。わたし共は、既に何千年といふ古い過去を有つて居る。この古い過去を有つ人間の社會であつて見れば、假令どんな新しい信仰にせよ、舊信仰と全然交渉なしに、全く新規に構成され得べきはずがない。如何なる民族に於てゞも、全然新たな信仰を有つて居たものは、一つとして見出されない。佛教にせよ、基督教にせよ、回々教にせよ、一般には、全くオリジナルなものゝように思はれては居るが、實際は決してそうではない。悉く、古い信仰の孵化、若しくばその再生でしかなかつたのである。彼等のために取つて代られた古い信仰が、時の經過によつてその支配を失つたときに、彼等は初めて生誕したか。若しくば發達することが出來たのである。例へば。基督教に就いて言ふならば。その傳說の要素は、凡て猶太に取つて居るのであるが、その源流は、實際、ヨーロツパ若しくばアジア諸民族の最も古い宗教の中に存するものだと言はれて居る。「基督教的神話に於けるユダヤ人の資源は。エヂプト人及びペルシヤ人のそれと。殆ど同

一である」と、ルイ・メナールは斷定した。恐らく間違いのない考證であらう。蓋し、宗教が眞理の表現であるかぎり、全然新奇な信仰の成立は、尙更不可能とされねばならぬ。それ故に、古への宗教建設者も、その實、悉く宗教改革者であつたのである。例へば、「無師獨悟」と宣言された釋尊にしても、また同時に、「自分はたゞ過去諸佛の行を行ずるに過ぎない」と言つて居られるのである。

信仰はわたし共の祖先から傳へられた最も本質的遺産の一つとして、人間の情意生活の根柢をなして居るものであるだけに、その進化はまた極めて遅緩である。他の如何なる現象よりも遅緩である。人心の進化に於けるこの遅緩さは、歴史の最も根本的な事實の一つなのである。それ故に、新たに構成さるべき信仰は、多少とも前の信仰と結び付いて居る場合でなしには、決して人心に受れ入れられるものではない。若しくば、尠くとも、それが直ちに人々の行動の動機となり得るまでに、深く人心に滲透し得るがためには、必ず舊信仰と或る程度の接觸を保つことが必要なのである。また、事實上、その接觸なしには、絶對に構成されるはずのものではないのである。それ故に、新たに建設かるべき信仰は、結局、舊信仰と充分結び付いて、しかも、現在の思潮と合致したものでなければならけいのである。

たゞ問題は、舊信仰の崩壊の事實如何である。固より、舊信仰が、今日尙ほ、無意識的に、現代人の性格若しくば情意生活の一部を、多少とも支配して居るものであることは、社會心理上否みがたい。のみならず、現代の制度若しくは道德の基礎としても、尙ほ、それが重要なる役目の一つを演じて居るものであることも、また否定しがたい。しかし、それが、最早現代人に取つて、生活の意識的基礎になつて居ないことは、極めて確かである。現代人の精神生活の上に、最早少しの權威ですらも有つて居ないことは、極めて明白である。現代に於ける道德生活の無政府は、これを立證すべく、何よりも確かな證據なのである。自己欺瞞の迷信が上下を通じて益々繁榮して居ることが、最も有力な裏書きである。舊信仰は明らかに崩壊して居る。尠くとも、完全なる滅落の期に近づいて居る。この事實は如何にしても否定しがたい。それ故に、新しい信仰は必ず生れて來ねばならぬ。餓えたる魂に悶えつゝ、時代は既に新たなる信仰の出現を待ち構へて居るのである。光は何所から來るであらうか?

× × ×

社會の制度は一朝にしても改廢されるであらう。しかし、心

的變革は常に極めて遲緩なる進化の過程に服するものであることを忘れてはならぬ、來るべき時代に於ける新理想の實現は、連帶人の、そして敬虔なる有信者の、不斷の道德的協力に俟つのほかはない。

信仰の花咲く自由と淨福との世界――そこにわたし共の安住すべきあこがれの都がある。

わたし共は、現實の歩みの蹤跡として踏々たることを悼つべきではない、わたし共は精進せねばならぬ。そして、一と度生命の奥底から耿々として目醒めて來た永遠の要求は、再び眠るべきではない。何故なれば、それは再び魂の死を意味するからである。

獨逸賠償金問題を中心としたる國際經濟の變局

法學博士　堀江歸一

償金問題に於ける當初の着眼點

獨逸賠償金問題に就てはヴェルサイユ講和條約の締結以來、世間に種々の議論が行はれたが、賠償金支拂の進行するに隨つて、國際經濟上の局面に生じた幾多の變動に徵すると、賠償金のものたる、之を負擔する獨逸に取つて、大なる苦痛であり、結局獨逸國民經濟の基礎を撼揺せしめざれば已まない一方に、賠償金を領收する聯合諸國の立場から云へば、獨逸を苦しめたと同一程度の利益を享けることは出來ず、獨逸國民經濟に於ける潰滅に依つて、却つて應分の損失を頒たざるを得ない。即ち賠償金問題を從來定められた儘に置き、賠償金支拂の規定を獨逸に向つて勵行して行つたならば、結局關係諸國全體に何等の利益を齎さず、歐洲の經濟社會をして何時までも現在の如き暗憺たる狀態に沈淪せしめざるを得ない。此事はヴェルサイユ講和條約成立の當初から、識者の明に認めた所であつたが、何分にも戰爭に關する記憶の歐洲諸國民の胸裡に殘されて居る

際には、獨逸又は獨逸國民に對する反感は頗る强烈であつて、賠償金の賦課に乘じて、獨逸の經濟をして再起の能力なきに至らしめるまで壓迫し去らう、戰爭中獨逸の産業は東部普魯西の農業區域が一時露國陸軍の侵略に依つて、多少の損害を蒙つたものを除き、殆ど無瑕疵の狀を保つて居つたのであるから、戰後賠償金の賦課に依る經濟的壓迫を通じて、其根柢に打擊を加へ、以つて聯合諸國に對する競爭の危險なきに至らしめようと云ふことは、聯合諸國側の期せずして、一致した意見であつた。即ち聯合諸國が戰時武力を以つて、獨逸に爲すを得なかつた所を戰後經濟力に訴へて、之を爲さうとした一事こそ、賠償金問題に非常なる無理を生ずるに至らしめた一原因であると解される。

聯合諸國が四年十一個月の久しきを通じて、戰爭に從ひ、戰時財政を維持したことは、誠に一方ならぬ苦勞であつたに相違ない。戰爭の終了した際に、各國の財政は如何なる狀態に陷つて居つたかと云へば、軍事公債は山積し、其利拂のみを以つてして、國民に苛重なる負擔を加へざるを得ないし、又戰時斯る公債の發行並に之に對する國民の應募を圓滑ならしめる爲めに、增發された不換紙幣は市場に橫溢し、通貨の價値を低落せしめるに至つた。茲に於てか歐洲諸國に於ては、一時所謂資本徵課金制度なるものを實行し、體よく國民の所有する國債を國家の方に捲き上げて、其債務を脫しようとする說さへ、行はれたのであるが、是れは其性質に於て、彼の露國勞農政府が帝國時代に發行された國債を廢棄した政策と異ならない。私有財産制度を否定する勞農政府ならば兎に角、私有財産權を維持し、尊重することを以つて、經濟組織の一要目とする資本主義國に於ては、資本徵課金制度の如きは、遽に行はれることを許さない。是れが行はれないとすれば、國債整理の財源は勢、賠償金の收入に之を仰がざるを得ざる道理と爲るし、又其收入が金貨の形態に於て、回收された場合には、自ら通貨制度を整理する上に、大なる援助を與へるに至るのである。

獨逸賠償金の分配率の低い國は兎に角、其二割二分を得る英國、其五割二分を得る佛蘭西、其一割を得る伊太利、其八分を得る白耳義等が賠償金の收受に依つて、如上二個の目的を達することに期待を繫いだのは、疑ふ可からざる所に屬する。斯くてヴェルサイユ講和條約に於ては、賠償金額は所謂間接戰費即ち聯合諸國の人民が獨逸海陸並に航空軍の爲めに、其生命並に財産に加へられた損害を賠償すると云ふ原則が定められたに拘はらず、實際賠償委員會の算出決定した賠償金額は意外の數量に上り、之を收受する聯合諸國をして優に經濟の恢復に資する

ものあることを思はしめたのである。即ち

(1)獨逸の支拂ふ可き賠償金は總計千三百二十億金貨馬克とし、之をA、B、Cの三種に分ち、A種百二十億馬克、B種三百八十億馬克、C種八百二十億馬克とする。

(2)右の內、C種に對しては、將來獨逸の支拂能力の恢復するまで、之を猶豫し、AB兩種に對しては、證券を發行し、毎年其額面價格の六分に相當する金額を支拂はせる。而して右の支拂に充當する爲め、二十億金貨馬克と輸出貿易の二割六分に相當する金額を支拂はしめる。

(3)右二十億金貨馬克は毎年一、四、七並に十の各月十五日以つて、五億馬克宛支拂ふものとし、又輸出貿易額の二割六分に相當する金額は毎年二、五、八並に十一の各月十日を以つて、前々期三個月間の輸出貿易額を基礎として、計算し、其支拂を爲すものとする。

聯合諸國が右の如き賠償金支拂計畫を獨逸に指示した際には、之を以つて難きを强ゆるものであるとして、非難の聲の國內に囂しきに至つたのは勿論であるが、若しも獨逸にして右の提案を拒否したならば、忽にして聯合諸國の爲めに、武力の干涉を加へられる虞れがあるので、之を避けることに專念して、承諾の已むを得ざるに至つたものと認められる。即ち獨逸が賠償金支拂計畫に服從したのは、專ら政治上の考へに出でたものであつて、經濟上の方面から、其實行に堪へると云ふ確乎たる信念に基いた結果ではない。否經濟上の道理に徵すれば、獨逸殊に戰敗後の獨逸が右の如き賠償金の支拂に當ると云ふが如きは、何としても事情の許さゞる所であつて、隨つて其支拂を勵行すればするだけ、獨逸の國民經濟が破滅の悲境に導かれ、遂に支拂不能の事實を生ずるに至ることを以つて、必至の勢とするのである。

對外債務決濟の方法

凡そ一國が外國に對して債務を負うて居る以上は、其負うて居るものが賠償金であらうと、他の債務であらうと、其別を問はず、之を決濟する道は國際貸借に於ける有利なる差額に外ならない。然らば一國は如何にして國際貸借に於て、有利なる差額を持つを得るかと云ふに、

第一、對外投資に對する元利金の回收、外國出稼人の內地送還金、海運業の運賃、保險業の保險料取立等に依るか、

第二、輸入に對する輸出貿易の超過に依賴するか、

二途の外に出づることを許されない。第一の方法に依るものは、一國をして國際貸借上に於ける債權國の地位に就かしめる

次第であつて、一國が此地位に就いたならば、爲めに經濟的立國を容易ならしめるに資することと少なしとしない。蓋し此場合に於て、既往に於ける久しい間を通じて、蓄積された資本を或は外國に運用することに依つて、或は船舶の形體に於て利用することに依つて、將た又保險業仲介業等の營業資金に充てることに依つて、若干の有利なる差額を收め、之を以つて外國から輸入された物資の支拂に供するを得るし、尚ほ之を支拂つて、餘れるものありとすれば、更に之を外國に放下して、益々其經濟的實力を增進するを得るからである。隨つて斯る國は其立國に於ける當然の結果として、一個の債權國であつて、債務國の列に居るものではないが、假に此國が或る突發的事情に依つて、外國に債務を負うたとした所で、既に債權收入を持つて居るからには、之を債務の決濟に振替へ得る次第であつて、事の解決極めて容易であるとするを得るのである。獨逸の如き、歐洲戰爭前に於て、一個の債權國であつたことは、疑を容る可からざる事實である。獨逸が海運國としても、殖民國としても、債權國としても、總て立後れの姿と爲つたのは、國內の統一、內政の整頓に忙はしかつた結果であつて、已むを得ざる所であり、又一旦覺醒して、對外的に勢力の發展を謀らうとすれば、到る所に英國既得の權勢があつて、之と競爭しなければならない苦境に立つた。然も獨逸人の堅忍不拔なる、是等の困難と闘つて、二三十年を經ざる間に、海運國たり、殖民國たり、債權國たる地步を築き上げることに成功したのであつて、斯くて戰前に於ては、海運業の運賃、對外放資の利子收益、外國出稼人の內地送還金等に依つて、二十億馬克內外の對外債權を收めて居つたのである。即ち斯る收入あればこそ、獨逸は一方に十數億馬克に上る輸入超過を決濟し、尙ほ其餘れるものを新に外國に資本として、放下することを難しとしなかつた。獨逸としては斯る經濟的狀勢を發展せしめる計に出でたならば、將來に於ける繁榮は充分に之を期待するを得たのであるが、唯之を發展せしめる上に於て、常に眼上の瘤と同樣、海に陸に妨碍を爲すものは、即ち英國既得の勢力に外ならなかつた爲めに、遂に隱忍持久に堪へず、武力に依つて、一擧に此妨碍物を除き去らうとした、即ち是れが歐洲戰爭の發端であつて、其失敗を招いた今日に爲つて見れば、短慮の所業とせざるを得ない。即ち斯る短慮の所業を敢てしたことは、實際に於て如何なる形に於て、現はれたかと云へば、多年の苦心に依つて、獲得した有利なる國際貸借上の差額を喪失した一事に歸着するのである。戰前太西洋に太平洋に、將た又印度洋や地中海に活躍した獨逸の船舶は多く聯合諸國の有に歸し、獨逸としては今後外國貿易を營む

に陷つて、外國に運賃を支拂はさゝる可からさる地位に立つ。獨逸人の海外に於ける放資や、企業も亦戰爭中聯合諸國に依つて、沒收され、管理され、今日に於ては、其收益の削減したことは、之を想像するに難しとしない一方に將來獨逸人の力に依つて、斯く對外放資や、對外企業に生じた缺陷を充足せしめるを得るかと云へば、今日の如き壓迫された國民經濟の狀態を以つてしては、不可能としなければならないのみならず、假に國民に多少の貯蓄が出來たとしても、國家の權勢が對外的に萎縮し、國權を以つて、對外放資や、對外企業に保護を加へることの不可能である場合には、戰前と同一の勢に於て、經濟的實力の外に伸張することは、到底望みを繫ぐを得ない所であらう。獨逸國民の國外移住は是等移住民を收容する外國の事情にして之を許す以上は、今後に於ても依然として行はれるであらう。獨逸國民の內には、今日戰敗や、戰敗に伴ふ償金支拂の負擔に堪へ難くして、自暴自棄の狀態に陷つて居る者もあるが、一方に海外に新天地を開拓して、自己の生活を繁榮ならしめることに意を致しつゝ、ある者もある。寧ろ國內に於て國民生活に加へられる壓迫の甚だしきことは、一部の國民を驅つて、海外に移住を企てしめるものと思はれる。然しながら斯く海外移住民の多いことゝ、移住民の內地送還金の豐かなることゝは、全然別箇の條件として、之を考へなければならない。戰前獨逸に於て、海外移住民の多かつた一方に、是等移住民が海外に收め得た收益金を本國に送還し以つて之を對外債權の一部分に充てたのは、要するに獨逸國內の秩序が政治上に於ても、經濟上に於ても共に整然たる面目を保つて居つたからである。然るに今日是等の點に於ける秩序は全然破壞され、若しも在外の獨逸人にして資金を獨逸に送還し、之をマルク貨幣に引換へたならば、將來マルクの價値低落と共に、幾何の損失を蒙るか、測り知るを得ないばかりでなく、經濟社會混亂の今日、資本運用の方法に就ても、亦大なる危險を冒さなければならない。獨逸人としては、斯る危險多き本國に資金を送還するが如き、愚擧を敢てせず、寧ろ本國に於ける資金を外國に放下しようとして、機會を求めるに熱心であることは、獨逸政府が千九百二十年十二月二十四日資本輸出禁止に關する法制を設け、同日以後之を勵行しつゝあるの一事を以つて、之を知るに難しとしないのである。

獨逸は輸出超過を出現せしむるを得るか

斯の如く論じ來つたならば、獨逸が國際貸借上に於ける債權の收入に依賴して、之を賠償金支拂の用に充てようとするが如

き、到底望む可からざる所である理由が了解されるであらう。然らば何を以つて賠償金支拂の資力を作るかと云へば、其れは既に擧げた輸出超過に待つの外に道はないのであるが、如何にして獨逸が一個の輸出超過國たり得るかと云ふ問題に接すると、其所に幾多の困難を見出さゞるを得ない。元來獨逸は近年輸入超過國たる地位に居つた。此事たる、獨逸が前に述べた通り、年々二十億馬克内外の對外債權收入を内國に回收するを得る結果であると見られる。随つて今日の如く對外債權の收入の消滅した曉には、輸入超過に對して支拂の行はれる資源の存せざる結果、輸入貿易は自然に減少して、輸入超過の生ずることなからしめる道理であるが、是れは一片の理論であつて、實際問題として、之を考ふるに輸入超過國が一變して輸出超過國と爲るのは、甚だ困難であつて、殊に今日の獨逸に於て、其困難の大なることを認めざるを得ない。試に戰前即ち千九百十三年に於ける獨逸の輸出入貿易を見ると、

輸出　九、九一二百萬馬克
輸入　一〇、六九〇

と爲つて居り、輸入超過は七億七千八百萬馬克と數へられた。此輸入超過の狀態を一變して、輸出超過の趨勢にし、其出超額を以つて賠償金支拂の資源に充てることは、獨逸に取つて最も好都合とする所であつて、斯の如くであれば、償金問題の如き、最も容易に解決される次第であるが、右の如き趨勢を現出することは、今日の狀況に以つてしては、殆ど絕望であるとしなければならぬ。左に其理由を述べる。

第一、獨逸にして輸出超過を求めるには、從前の輸入貿易に對して、大なる節減を加へなければならない。然るに獨逸に輸入される物資の多くは食料品と原料品との二者であつて、前者は國民給養の爲めに、後者は工業維持の爲めに、共に必要である以上は、苟も支拂方便の存續する限り、其輸入を謀らなければならず、之を減ずるが如きは、國民經濟に大なる損傷を加へる道理である。

第二、既に輸入貿易の減縮を期することが困難であるとすれば、輸出超過の發現を求めるには、輸出貿易其ものゝ增進に依らなければならない。然も此點に就て獨逸に幾何の成算があるであらうか。戰前獨逸をして巨額の輸出貿易を營むに就て、與つて力あらしめたものは、實に製造工藝品の輸出であつて、今後獨逸をして輸出超過國たらしめようとする以上に、製造工藝品の輸出を增進することを以つて、捷徑とする。然るに獨逸の製造工業は原料品供給の點から云へば、國内自給の狀態に居るものではなくして、諸外國から之を仰ぐのである。即ち棉花生

燐鑛の如きは、獨逸に於て全然產出されないし、羊毛、亞麻、銅、亞鉛、石油の如きは、多少の產出が國內に在つたとしても、其分量だけでは、內國產業の規模を維持するに足らず、不足の分量は常に外國に求め來つたのである。鐵鑛、鹽酸加里の如き、從來內國に於て相當に產出されたと云ふのは、アルサス・ローレンが自國の領土であつた結果であつて、既に同地が佛蘭西に奪還された今日に爲つて見れば、是等の物資に就ても、獨逸は其供給の乏しきを嘆ぜざるを得ないであらう。卽ち從來獨逸の製造工業の盛大に行はれたことに就ては、種々の原因があるが、原料品供給の方面から云へば、第一諸外國が獨逸に原料品を供給するに就て、頗る自由であり、寛大であつたこと、第二獨逸亦是等の供給を受けて、之に對する支拂を爲すに苦しまなかつたことの二條件を擧げなければならない。然るに歐洲戰爭並に戰爭に依つて誘發された變動は右の如き事情を根本的に打破し、獨逸は原料品の代金に對する支拂に窮すると共に、聯合諸國亦其れ〴〵の國の經濟狀態を恢復することを急とし、成る可く自國の工業に對する原料品の供給を豐富ならしめることを專一とし、獨逸に向つて戰前に於けると同樣な自由寛大なる方針の下に、原料品を供給しようとしない。獨逸にして原料品の供給に不自由を感ずる以上は、戰前に於けると同樣の狀態に於て、製造工業の發展の期し得られず、隨つて輸出超過の實現されないことを以つて、當然であるとしなければならない。戰前と戰後とを比較して、獨逸の輸出入貿易に如何なる變動が行はれたであらうか。今、之を物資の噸數に依つて表示すれば、

年	輸出	輸入
一九一三	七三、七一四噸	七三、八三二噸
一九二一	一三、七二一	一七、五五〇
一九二二	二一、五六〇	四五、八七〇

と云ふ有樣であつて、輸入超過は年と共に增加する。更に千九百二十二年に於ける貿易數量を取つて、金馬克に換算すると、

(單位百萬馬克)

輸入	六、二〇〇、四
輸出	三、九七〇、〇

であつて、二十二億三千四十萬馬克の輸入超過に當るのである。輸出入貿易の數量に於て、金額に於て、共に著しく減少したことは、獨逸の國民經濟の疲弊した證據であり、又其疲弊を促す原因としなければならない所であるが、尙ほ其間に於て依然たる輸入超過國であることは、吾人の注目を要する一點である。輸入超過國であつて、償金支拂の義務を負ひ、而して輸入超過額をも、償金額をも決濟するに足りる對外債權收入を持つ

て居らないと云ふことが獨逸の現狀であるとしたならば、獨逸に取つて、償金の支拂が大なる負擔と爲り、苦痛と爲るのは、爭う可からざる事實に屬する。輸入超過額の決濟は輸入の行はれる對手が商人である爲めに、一時の信用に依つて、之を將來に延期することも出來るであらうが、償金の支拂は其對手が共れ〲聯合諸國である結果、斯の如き自由なる處置は之を行ふのを得ないのであつて、必ず聯合諸國をして講和條約に定めた通り、償金支拂過怠に對する保障手段を實行するに至らしめるか、其れとも獨逸の支拂ひ得る程度まで、償金の金額を低減し、而して其支拂はれる方法に就ても、獨逸の利害を參酌するか、二法の孰れか一に依る問題を生ずる。今や歐洲に於て是等の問題は識者の議に上り、其解決を急としつゝあるのである。

償金支拂の經過

然らば獨逸は今日まで如何なる程度まで、償金支拂の義務を履行したであらうか。獨逸の賠償金支拂狀況は其支拂計畫の定まつた千九百二十一年四月末までと、其以後とに區別して、觀察することを便宜とするが、前者の支拂は

現金支拂	一〇六、五八六、〇〇〇馬克
實物引渡	一、二五二、〇三七、〇〇〇
休戰條約に據る引渡額	一、一八三、一二六、〇〇〇
海底電線	四九、〇〇〇、〇〇〇
不動産	二、五〇四、三四二、〇〇〇
合計	五、〇九五、〇九一、〇〇〇

と爲り、後者に就ては、先づ千九百二十一年分の支拂として、十億金馬克並に輸出貿易額の二割六分に相當する金額の支拂を要するのであつて、獨逸は此規定通りの支拂を履行した。次に千九百二十二年中の支拂に就ては、既に前年の支拂の行はれた後を承けて、馬克相場は暴落し、財政益々窮乏し、千九百二十一年十二月十五日に至るや、愈々其支拂の行はれ難きことの明瞭と爲つた結果、獨逸は聯合諸國に向つて、支拂の猶豫を請求し、聯合諸國は千九百二十二年一月のカンヌ會議を經て、賠償委員會に於ける審議と爲り、同委員會に於て、三月二十一日を以つて、通告を發し、五月二十八日獨逸の承諾と爲り、結局償金支拂は目前の處、

第一、千九百二十二年中に七億二千萬金馬克の現金と十四億五千萬金馬克の現物とを支拂ふこと、

第二、右現金支拂の爲めに、既に支拂濟の分を控除した殘額を左の割賦で支拂ふこと、

四月十五日に	一千八百萬金馬克

五月より十月まで毎十五日に	五千萬金馬克
十一月及十二月の各十五日に	六千萬金馬克

と爲つたが、獨逸は其以前から計畫を試みて居つた外債募集が失敗に歸した爲めに、財政の信用に失墜を來し、再び支拂猶豫の問題を生ずるに至つた。獨逸賠償問題に就て、英國側と佛白兩國側との間に於ては、從來から意見の相違はあつたが、其相違たる、單に民間に行はれる議論を通じて、之を見るに過ぎなかつた。然るに此時に至つては、双方の政府側に於ける意見に多大の相違を見ることゝ爲つたのであつて、英國に於ては、賠償金の支拂に就て、長期の猶豫を與へ、獨逸財力の恢復する時期に於て、之を徵收することを可なりとする意見を持つように爲つた一方に、佛白兩國は何處までも獨逸に財政改革を斷行させ、徹底的に償金の徵收を勵行しなければならぬと云ふ意見を懷き、硬軟の差の漸く著しきを示した。此解決を下す可き目的を以つて開催されたものが千九百二十二年八月の倫敦最高會議であつて、英佛白伊日諸國の代表者出席し、支拂猶豫の條件を協定しよっとしたが、議論遂に纒まるを得なかつた。唯此間佛蘭西の代表者が支拂猶豫を許す條件として、第一獨逸輸出許可監督制度の持續、第二占領地の東方境界に沿ふ關稅地帶の再與、第三獨逸の國有財產並に國有に移すを得る財產例へば「ルール」地方に所在する鑛山、森林、ライン左岸の工場等を聯合諸國に引渡さしめることの諸點を擧げた一事は佛蘭西が如何に獨逸に對して、强硬なる態度を持するかを示して、遺憾なきものと認められた。而して此間伊太利は英佛兩國の間を調停する立場に居つたが、白耳義は常に佛蘭西と嚮背を共にしようとしたのであつて、隨つて千九百二十二年中石炭や木材を以つてする償金の實物支拂が遲滯するや、之を口實として佛白兩國が千九百二十三年一月を以つて、ルール地方を占領するの擧に出でたことも、既往の經過に徵して、敢て異とするに足らないのである。

償金問題の根本的解決

然らば、佛白兩國のルール占領は償金の支拂に就て、何等かの光明を與へたかと云へば、毫も之を與へないばかりでなく、却つて此問題の前途を紛更せしめた觀を免かれない。旣に述べた通り、一國が外國に對して、債務を決濟する方法は對外債權の收入を之に振替へるか、輸出超過に對して、受取る可き權利を之に充當するか、二者の一に外ならない次第であり、斯くて國際間に於ける債務が最も自然に決濟されるを得るのであるが、獨逸に於ては今日不幸にして是等の二途が共に閉塞されて

居り、聯合諸國は各自の狹隘なる經濟的利益を保護するに急であつて、斯く閉塞された途を開通することに努力せず、益々閉塞壓迫の狀態を嚴峻ならしめようとする。随つて今日まで獨逸が賠償金を支拂ふに就ては、最も不自然なる方法に出でたのであつて、其弊害の恐る可きものゝあつたことも當然と考へられる。即ち獨逸は帝國銀行の所有する金貨準備を收用し、償金支拂の用に供したけれども、帝國銀行の所有する金貨準備には限りがあつて、之を利用した所で、償金支拂の方便として其大なるを得ることを期しられない。斯くて獨逸は此方便として政府自ら帝國銀行をして馬克銀行券を增發させ、增發された銀行券を以つて、内外市場に於て、金貨を買入れ、償金支拂の用に供するのであつて、斯くて、償金支拂に關する義務の履行されるに随つて、馬克の價値の日に月に低落し、一片の廢紙と擇ぶ所なきに至ることも、亦敢て異とするに足らないのである。而して斯く馬克相場の不安定であることは、國際經濟上に於ける獨逸の地位に危害を及ぼし、馬克相場の相率いて低落することとは、獨逸の財政に重大なる壓迫を加へる。馬克相場の安定を維持するの、必要は一獨逸の問題であるに止まらず、廣く國際經濟に關係を有する問題であると云ふ見地から、馬克相場安定策は昨年來獨逸の招聘した外國學者銀行業者と獨逸政府との間に於ける協同的研究問題と爲つた。而して獨逸が此問題に就て、如何なる意見を懐抱しつゝあるかは、昨年十一月四日同政府から聯合國賠償委員會に提出された第一回馬克安定計畫に於て、明瞭であつて、其要領を摘記すれば、

馬克をして根本的に安定の狀態に居らしめるには、賠償金問題が徹底的に解決されることを必要とする。然しながら此解決を得るまでには、相當の時日を要し、其間貨幣制度は今日以上に破壞され其恢復を期するに就て、一層の困難を加へる虞れなきを得ないから、馬克の價値を維持するに必要たる處置を採用するに就ては、遲滯する所あつてはならない。而して斯る維持策は獨逸一國の獨力を以つてしては、充分なる效果を收め難い道理であるから、帝國銀行と外國銀行との協力に依つて、少なくとも五億金馬克の資金を調達し、之を馬克價値防止の用に充てなければならない。而して此目的を達する爲めに、賠償委員會は速に國際銀行業者を招致し、如何なる條件の下に、馬克の價値を維持するに必要なる資金を獨逸に供給し得るやを研究せしめることを提案する。斯の如き銀行信用に依り、馬克の價値を維持するに就て、獨逸は(一)財政上に於ける收支の均衡を期すること、(二)外國貿易並に國際貸借の關係を經濟政策殊に生産增加の方法に依つて、改

善することと、（三）流動公債の將來に於ける發行を停止すること、（四）内國に於て公債を募集することを必要とすると云ふ諸點に外ならない。右の文中に明かであるが如く、獨逸は馬克價値の安定に就て、一時的方策を工風するが、其根本的安定を得るには、何としても獨逸の支拂能力に相應する程度まで、賠償金額を切下げることを必要とするものである。而して本年二月二十一日に至り、獨逸内國金貨公債發行の件は決定し

發行額二億金馬克。額面五弗乃至百弗。種類利付三年期限の大藏省證劵。拂込、外國爲替手形若しくは外國銀行劵。償還並に利拂は當時の爲替相場に依る馬克を以つてすること。帝國銀行に於て、償還利拂の保證に當る。額面百弗に對し、百二十弗の割合を以つて、期限到來の際に償還し、兩者の差を利子とすること、

の諸條件が公表されたが、其爲めに馬克の價値を騰貴せしめるに、幾何の資するものがあつたかと云へば、殆ど見るに足らなかつた。此事は自ら馬克の價値安定を求めるには、他の方策は兎に角として、賠償金問題の根本的解決を必要とすることを暗示したものと認められる。斯くて獨逸が本年五月佛白伊英等の聯合諸國に向つて提出した覺書は此問題に對して、發された第一聲であつて、其大要は

講和條約に基き、獨逸政府の支拂ふ可き現金並に物品債務を三百億金貨馬克に確定すること、

右三百億金馬克は國際金融市場に公債を發行し、其内の二百億金馬克は千九百二十七年七月一日までに、五十億金馬克は千九百二十九年七月一日までに、殘額五十億金馬克は千九百三十一年七月一日までに調達されること、

に附着する。聯合諸國が直に此提議を容れたならば、獨逸償金の納入を引當てにして、戰後の財政難を緩和しようとする當初の目的に反する、今更ら資本徵課金制度を斷行して、戰時公債の銷却を行はうとするが如き、諸國の至難する所であらう。一方に佛蘭西の如き、今や國論は二分し、獨逸に對する態度の寬大なることの必要を認める者のあると共に、依然たる嚴峻の態度を持しようとする者もあるが、之を全體から見ると、後者が前者に比較して、遙に世間受けが宜しいし、世間受けが宜しいとなれば、衆愚に媚んとする政治家は其本心の如何を問はず、殊更に強硬論を唱へて、多數に迎合し、又多數を指導しようとする。蓋し斯の如き感情の佛蘭西に存するのは、償金輕減に依つて、萬一獨逸の國力の恢復した場合に、直接當面の打撃を蒙るものは即ち佛蘭西であつて、此際に今日の聯合諸國が如何なる狀態の下に、佛國を支持するか、測り知るを得ないと云ふ恐

怖心に襲はれて居ることが與つて力あるのであつて、多少の諒とす可き事情もある。英國が海上國であり、殊に近年經濟上の局面に恢復の曙光の漸く耀き來つた場合には、償金輕減論の唱られることも、自然の勢であらうが、今日の佛蘭西に至つては、未だ斯る時機に達したものとするを得ない。左ればと云つて、此問題に對する英佛兩國の離反が直に多年來聯合國として一致した態度に隙を生ずるものとも想像されず、是れが償金問題の混沌裡に在つて、容易に解決されざる所以である。然らば佛蘭西並に同國に從隨する白耳義の強硬一天張りを事とする政策が償金問題の解決に幾何の資するものありとするを得るであらうか。現にルール占領の如き著しく佛白兩國に對する獨逸の反感を挑發したことは蔽う可からざる事實であつて、獨逸政府が佛白兩國政府の制裁的手段を講ずる度毎に抗議を申込むのは勿論、ルール地方の官吏、郵便、電信、電話、鐵道諸業の從業員並に一般居住民に訓令を與へて、反抗的態度に出づることを煽揚する。斯くて占領區劃に於ては、罷業や、怠業の起る一方に、居住民は事々に佛白兩國政府の企劃する所を妨げて已まず、兩國政府亦之に應じて、刑罰を加へるに忙はしきが如くであるが、結局手間倒れに陷るの狀であつて、今日の勢を以つてしたならば、佛蘭西はルール占領を悔るの時に接することとなしとしないであらう。

對獨經濟政策の刷新を要す

之を要するに聯合諸國が武力の爭を通じて、獨逸を壓倒するを得なかつた代りに、戰後幾年の久しきに亙る經濟的壓迫に依つて、獨逸を出來る限り窮迫した狀態に陷らせ、多年の遺恨を晴らすと共に、將來に於ける復興を妨害しようとするのが、違ひの根元であつて、斯の如くして一方に獨逸を苦しめるを得るとしても、其獨逸を苦しめることは自ら聯合諸國自らの苦む所たらざるを得ない。國際間の經濟生活は一國と他國と相倚り、相親むことに依つて、始めて其完成を得ることは、個人の經濟生活が分業と交換との二つの働きに依つて、進歩するものと、撰ぶ所あるを知らない。今日一方に天然富源を擁することの最も豐富なる露西亞が事實に於て國際經濟に對して、閉鎖された狀態に居り、他の一方に從來歐州諸國に向つて、工藝品殊に化學工藝品を供給する點に於て、經濟上に重要なる地位を占めた獨逸の產業が全然混亂され、其破滅の時に達せんとする有樣であることは、世界經濟の復興に對する妨碍の最も甚だしきものである。私は始めから獨逸に對する聯合諸國の經濟政策の甚だしく無理なるものであることを認めて居つた。何を以つて、然

理なる點とするかと云へば現在獨逸の有する支拂能力を超過する程度の莫大なる償金を課することは共一であり、更に此償金の支拂はれる資源と爲る可き有利なる國際貸借上の差額を作り出すに就て、何等の援助を與へないことは、他の一である。聯合諸國が一旦徵收するに決定した償金に多大なる輕減を加へることを困難とするに就ては、多少の諒とす可き事情が存する。然しながら諸國が一意償金の繰入に依つて、經濟上の恢復を期することに專念し、自力を以つて同一の道程に就かうとする決心の乏しいのを陋とする。英國が最近に至つて、經濟社會に著しく恢復の機運を示し來つたのは、何故であるかと云へば、第一政府が非常の覺悟を以つて、經費に目覺ましき緊縮を加へたこと、第二斯くて生じた收入の剩餘を減稅と減債との二方面に供用したこと、第三政府の經費減縮は物價の低落と金利步合の低減とを促し、前者は國民生活に餘裕を與へて、國民の間に行はれる貯蓄を促し、後者は金融を緩和して、事業振興の機運を誘ひ、第四國內に於ける金利の低落と國民の貯蓄增進とは相重なりて、對外放資を奬勵した等種々の事相の並び行はれるに至つた結果に外ならない。英國が短日月の間に、斯る事功を收めるを得たのは、或は戰前に於ける經濟的權勢の優秀であつた結果とするを得るかも知れないが、斯る結果を齎すに就て、英國官民の苦心し、努力したこととの多大であつた事實は何としても、之を認めざる可からざる所である一方に、歐洲大陸の諸國民中果して英國と同一の努力を拂ひ、苦心を味つたものありとするを得るであらうか。英國に於て今や償金輕減論の起り來れるに對して、佛白兩國に於て、絕へて此事なきを以つて、私は前者に於ける努力苦心の大なりしに反し、後者に於ける努力苦心の足らざりしことを想像するに躊躇しないのである。

歐洲戰時の數年間を通じて、經濟的繁昌を縱にした北米合衆國が戰後何故に同樣の狀態を繼承するを得ず、他の諸國並みに不景氣を告げつゝあるのであるかと云へば、要するに戰時合衆國が歐洲諸國に融通した百億弗を超ゆる貸付金の多くが回收されず、今日の所では殆ど一葉の廢紙に異ならない一事に存する。唯英國に對する債權だけは昨年末英國當時の藏相ボールドウキン氏自ら渡米して、短期のものを長期に借換へた結果、年々確定した利子の拂込まれるのは勿論、償還期限到來の際には、元金も亦拂込まれるであらうが、他の諸國に對する債權に至つては、斯の如く安全であるを得ない。合衆國にして如何に戰時外國に物資を輸出したとした所で、其代金の一部は外國證券の形態で領收し、又官民共に進んで歐洲諸國に資金を貸付け、之に對して、證券を領收した次第であるのに、今是等の證券が

證券として持つ可き效果を持たないとすれば、合衆國に於ては大なる資金の固定を來した道理であり、此事が表面上有利なる可き同國の經濟社會に實質上の利益を齎さない所以と爲るのである。此點に着眼し、合衆國は歐洲に對して、巨額なる債權を把握し、以つて歐洲の經濟社會に不斷の壓迫を加へるよりも、早く債權を廢棄して、歐洲經濟社會の平靜と爲り、又其振興する機會の到來を一日も早くし、振興された歐洲の經濟社會に向つて、合衆國の物資を輸出することを以つて、利益ありとする說が行はれ、更に聊か緩和された說としては、歐洲諸國をして其獨逸から領收した賠償債券を以つて、合衆國に對する債務を償還する用に充てしめる道を開けと云ふ者もある。假に斯る計畫が實行されたならば、或は歐洲の經濟社會を振興する一助と爲るを得るかも知れないが、合衆國にも國の內部に種々の利害關係が錯綜して居り、或る階級に與へる利益は必ずしも他の階級に對する利益とするを得ない。隨つて合衆國として從來自國の對歐債權に觸れる案件を議するような國際會議には一切代表者を派遣することを拒避した次第であり、過日物故した大統領ハーヂキング氏の如き此點に就ては、臆病とも見られる程の保守的態度を持し、輿論亦之を是認したとすれば、合衆國が歐洲經濟の復興を目的として、近き將來に於て、刮目す可き處置に出づるものとは想像されない。

斯くて吾人は勞歐米兩洲に涉る經濟社會の不振は何としても短時日の間に面目を一新するものと認めるを得ない、我國亦國際經濟の一員として、當然其影響を蒙るものと紹論することを正しいとする。英國の經濟社會が聊か恢復の機運に就いたと云ふが如き、一國獨自の事柄に止まるのである。伊太利の政治家であり、又經濟學者であるフランセスコー、ニッチー氏の近著「歐洲の敗頽」は聯合諸國の對獨經濟政策に於ける誤謬を指摘し、其更正を求めた點に於て、今や歐洲の識者階級に大なる感動を及ぼしつゝあるようであるが、其要點を摘記すれば、第一、一の外國軍隊が戰敗國の領土を占領し、又此占領軍が償金委員會とか、管理委員會とか云ふ名に隱れて、橫暴の處置に出る以上は、歐洲に眞の平和の存せざること、第二、戰捷國と戰敗國との間に於ける負債並に償金の一般的廢棄、軍事的占領並に獨逸內政に對する干涉の即時的撤廢を以つてしなければ、今日の局面を一變するを得ざること、第三、斯る紛爭の諸原因を一掃して始めて信用の再生を齎し、生産の復興を誘ひ得ること、第四、債務並に償金の廢棄を以つて、獨逸を有利なる地位に置くものであるとする說は獨逸が其再興を期するに就て、長年月を要するまでに、今日慘憺たる狀況に居る事實を忘れた言であること等に外ならない。即ち曩に英吉利のキーンス氏の公にした議論と略ぼ軌を一にするものであつて、今やキーンス氏を有する英國とニッチー氏を有する伊太利とに於て、償金の負擔を緩和するとに依つて、能く獨逸の復興を助け、又斯く獨逸を助けるとは、擧て歐洲全體の利益とする所であると云ふ說の釀成されつゝある一事は吾人の特に世間に向つて、紹介せんと欲する所である。

警察官の職責と人權蹂躪問題

邏卒よりお廻りさんへ

文學博士 三宅雪嶺

巡査は五十幾年間いろいろ變遷し來つたけれど、戰勝者が戰敗者の反抗を防ぐに努めた跡が今猶ほ殘つて居る。初め總督有栖川宮に從つて參謀西郷隆盛が江戸に向つた時、大いに戰ひ、之を燒き拂ふ意であり、次いで勝安房に會見し、遠く瓦の並んで居るのを指し、之を烟にするのは惜しいものでないかと云はれ、直ぐと諒解し、市中の治安を勝に托し、勝が出來るだけ努めたが、彰義隊の騷ぎが起つたり、兎角穩かならず、剩、都を遷して東京とするので、新政府の軍隊を以て取締り、名をも府兵とし、更らに邏卒と改めた。兵卒の轉じたものながら、邏卒はサーベルを帶びず、棒を持つことにしたのは、外國の例に據つたのであらう。併し棒が長く、且つ初めの程、思ひ思ひに漆を塗つたり、總を垂げたり、之を伊達にした形がある。後に棒を一定したけれど、棒で通さうとした所は、思ひ付きが惡くなかつた。何にしても士族から募るのであつて、祿を離れた士族が、商賣も氣が進まず、邏卒に成らうと云ふ傾向があり、平民は一般に之を憚かつた。

警視廳を設け、大警視を置き、警察官を順序立てること軍隊の如く、巡査も帽子の筋で等級が異つて居つた。政府で巡査を特殊の兵と見たのは、薩摩の戰役で著しく現はれ、大警視自ら巡査を率ゐて鬪つたばかりでなく、兵が足らぬとて臨時に巡査を募り、戰地に送り出した。既に廢刀令の出た後ながら、銘々刀を携へて出よとのことであり、鞘に刀を入れ、肩に掛け、勢揃ひして、各地から出發した。鎭臺兵は百姓兵とて薩兵に切込まれ勝ちであり、巡査は士族兵として頻りに鬪ひ、士族兵なる

近衛兵に次いで手柄を顯はした。政府では一般に安寧秩序を維持するが爲めに警察を整へつゝ、巡査は何處までも政府に服従させるの役目を承つて居るやうに心得て居る。警視廳が薩摩人の勢力範圍に屬し、警察官が薩摩人を模範とし、巡査は薩摩訛を使はねばならぬ有様である。薩摩の士族が手本と云ふので、何でも平民は頭から服從すべきものと定め、己れ自ら理窟を言ひ聽かせ、人の理窟を云ふのを聽かうともせぬ。巡査は人を説得するの役目があると云ふので、叱り付けるやうに言ひ聽かせ、不承知な顔をすれば、貴様分らぬ奴、議論をするつもりかと喚めく。それで蒼くなつて從ふ者もあるけれど、反抗するのもあり、戰場から歸つた兵卒なぞ、巡査に負けるものかとの勢にて、時々大喧嘩を初め、其處で憲兵が設けられることになつた。サーベルとピストルを帶びて居るので、恐しく見える。巡査もサーベルの方が威嚴があり、人も滅多に調戯はぬと云ふ事になつた。初め軍隊に准じつゝ、棒を持たして居つたのが、軍隊より遠ざかつてサーベルを帶び、等しく軍隊化するとし、形を異にして居る。初めは英・米・佛に則つたりしたのに、後に獨逸を主眼にし、政府の權力を増大するを圖り、三島が警視總監として保安條令を執行したが如き、警察權を極度に發揮しようと企てた。若し當時、事の宜しきを得たならば、巡査が更に嚴しくなつたらうが、餘計な事をしたやうにも思はれ、議會に保安條令を廢止したり、内閣が度々更迭し、薩摩の勢力圈なる警視廳も何時しか變化し、前に總監は薩摩に限るとなつて居つたのが、何處から誰が任命されるか知れなくなつた。

前に巡査が士族に限つて居り、後に平民を加へ、いよいよ平民の數を増すの勢であつて、それだけ變化を免かれぬ。變化の重なのは、初めの程、巡査が威張つて人に反感を有たせ代り、廉潔で收賄せぬと云ふのであつた。歐米の巡査は物を頼まれて、いくらか金を貰ふのが普通であり、日本の巡査と違ひ、或は日本の巡査程立派な者はないと評した。惡く云ふ方では之を打消して云ふ、成程歐米の巡査は物を頼まれて金を貰ふが、手數料は略ぼ一定して居り、それで不案内の人がどれ程便利を得るか知れぬ。我國の巡査は、金を渡さうとすれば眞赤になつて怒るに違ひないが、物を訪ねて劍もほろゝの挨拶をするので、どれほど不便であるか知れぬ。廉潔と云ふのみで、餘り褒め立てる譯にも行かぬと。さうかうするうち、何時しか巡査で收賄するのがあり、警視廳の要部にその疑ひあるのが出て來た。手數料と違つて、取れるだけ取らうとしたりする。世界戰役で景氣が立ち、巡査よりも職工の方が割増とて出掛かけて行き、日本の警察も何うなるかと危まれた。然し中に不良巡査もあるにせ

よ、一般に廉潔と云はねばならぬ。

今でも金を手渡して、取るのが滅多になく、知れれば危險にならう。前に較べて容威張りすることが減じ、人に接しても丁寧であり、隨分親切なのもある。而して恰かも葛の煮え損つた如く、固い所もあり、軟い所もあり、一面に前の强持て巡査が、舊の儀威張り散らし、事によつて人を打ち叩くも分らぬ。上役に力自慢なのがあり、圖に乘つたものは毆ぐつてよいとて、毆ぐるのを奬勵したりする。政府部內で毆ぐるといふ事をよい事にする一種の氣風がある。長い間外交官を勤め、外務大臣にも成つた靑木子は、外國婦人を妻にし、ハイカラの標本のやうに思はれたが、却々の力自慢であり、毆ぐつてしまへとか、毆つてやらうと思つたとか云ふ事が度々あつた。警視廳や警察署や、物腰が柔かいのが受けが惡るく、人民に侮られては仕方が無いと云ふのが先きになる。威かしても何でも騷ぎを鎭めさへすれば、腕があると思はれる。一寸理窟を捏ねる奴を引つぱたいて默らせたと云ふやうな事が、手際とせられる。物分りが良く、巡査は治安警察のみに專らなものでないとするのがあるけれど、柔しく人に應待しても手柄にならず、市民の騷ぐのを押へ付ける方が上役のめがねに掛かるといふ事になる。泥棒が入つたとの告げ知らせで早速出掛けて行き、その逃げ路を計つて之を引捉へるのは、主義者の陰謀を嗅ぎ付ける程の手柄にならぬ。泥棒に出逢つては、怪我する恐がある。それよりも露西亞人との關係、猶太人との關係を見出し、いよいよ遣り出したと報告する方、危險が無くて手柄になる。皆が皆さうといふ譯でなく、或る方面で之を苦々しい次第として居るが、それでこれを如何する事も出來ぬ。餘計な事を出せば出世の妨げになる。前には內務大臣の意、警視總監の意が警察官に徹底する勢であり、今は表面に徹底し、裏面に何とも思はぬのがあり、此後人が變れば、また變つて來る。大抵にして措けばよいとする。當らず觸らず日々の事を爲して過ぎる者あるの旁、何か一仕事しようと待ち構へ、少しの事を嗅ぎ出し、誠しやかに云ひ立てるのがある。自分では好で爲すのでなく、信じての事かも知れぬが、枯尾花を幽靈とするやうな事がある。上役の方で物が分つて居れば、大抵にして聞いて置き、周章てぬけれど、上役自ら功を立てたいと考へては、泰山鳴動し鼠一匹と云ふ事となる。時々その例があるので、警察部內でも深く怪します。大した事でないかも知れぬとする。警察官として功を立てたいのも尤もであるが、さういふ事に拘泥らひ、泥棒とか追剝ぎとかに逢つて、取られ損といふに終るのも面白くない。

何分にも上の方がはつきりせず、下の方でてんでんわやわや

に成るの嫌ひがある。今少しく餘計な騒ぎに拘泥らはず、一般に人が警察の効能を知るやうにしたならば、何ういふものか。英國の巡査は何かにつけて標本にせられるのであり、圖拔けて脊が高く、腕力があり、事があれば默つて之を引立てて行く。議論する事も出來まいが、人も之と議論せず、しなくてもよい事になつてゐる。他の事が整つて居るので、それで濟み、日本ではさうは行かず、巡査自ら理窟を云はねばならなくなつて、物は難しいとするが、强て英國で習ふに及ばず、警察官の職務を今一層明かに呑込んだならば、警察官も一般世間も利益があらう。謂はば巡査は今日氣の毒な位置に居る。主義者狩りに使はれ、餘り世間に有難がられず、それで俸給も少く、希望も燃え立せず、割合によく職を守つて居ると云ふ位である。前に巡査が何かにつけて官吏侮辱で人を引張り、今その例が少く、市民がお廻りさんと云ふを以て恐いものとせず、世話燒くものの如く看做すのは、よい傾向と云はねばならぬ。其處へ持つて來て、昔その儘の警察振りを振廻すのは、葛の煮え返らぬ所であらう。恐くよくなるのは望み難いとし、戰勝者が戰敗者に對するの態度を、なるべく早く止めて貰ひたい。既に陸海軍の整つて居る今日、警察官が兵隊の眞似しなくてもよく、警察官は警察官としての役目を果すに努むべきである。兎角舊幕時代より惡い癖が殘り、下役に嚴禁し、上役自ら之を犯すような事がある。今は何うか、夜中に堀の鯉を取つて食ふやうな事はないと云ふか。それ以上の事があるも知れぬと云ふか。巡査を董督する任に膺るものは、影響の及ぶ所を察し、深く警めねばならぬ。

警察官の職責と人權蹂躙

法學博士　堀江歸一

一方には某所の幾人殺しとか、某所の何人斬りとか云ふような戰慄すべき犯罪の下手人が捕縛されるに至らない他の一方に

は、警察官の無辜の良民を或る嫌疑の下に、拘引し來つて、留置訊問した上、證據不充分の故を以つて、放免すると云ふような事件が續出する。兩者何れも我國に於ける警察の不行屆を證明するものであつて、斯る警察の保護下に置かれる世間良民の迷惑は察するに餘りありとしなければならない。

固より人智の進歩と共に、罪惡の行はれる手段は巧妙に爲り、動もすれば警察官の眼を眩惑されることを免がれないようであり、一方に運輸交通機關の發達は犯罪の陰蔽、犯罪人の逃去に多大の便利を供するに至つた次第であるから、警察官が犯罪人を捜索し、之を逮捕するに當つては、極めて敏速なる行動と處斷とを必要とする。玆に於てか多少なりとも犯罪の證跡ありと認められる者は假令ひ其證跡が僅か位のものに止まるとしても、尚ほ之を拘引して、訊問する必要を生ずる、確證の擧げられるまで、自由の地位に置くことは、犯罪の嫌疑者に逃去の餘地を與へ、又證據煙滅の機會を供へると同樣であつて、警察の效果を減却せしめる、故に或る場合に警察の判斷に誤まりがあつて、無辜の民を羅致し、拘留することがあるとしても、是れは犯罪人の檢擧と云ふ大なる目的を達する爲めに、供へられる小なる犧牲であるから、社會公益の點から考へて、犧牲を荷う者に堪へ忍んで貰はなければならぬと云ふことが從來屢々主張されるのである。

然しながら被拘禁者の立場に居つて考へると、右の如き理由に依つて、自ら犧牲を荷うことに甘んずるを得るであらうか。事情の如何に拘はらず、人が一旦警察に拘禁された、而して其理由は破廉恥罪に關する嫌疑であるとすると、假令ひ其嫌疑は無根の事實であつて、晴天白日の下に身を置くことが出來たとしても、世間の人々から一種の色眼鏡を以つて眺められ、本人も環境の面白からぬ結果として、自暴自棄の狀態に陷ると云ふことは、世間に屢々起る所であるやに聞く。殊に時々新聞紙上に現はれる記事に據ると、警察官が一旦見込みを付けて、或る嫌疑者を引致すると、何處までも本人に自白を强ゆる、本人が自白しない場合には、其れが事實無根の爲めであるとは見ず、犯罪を陰蔽するものと認め、拷問同樣の方法を嫌疑者の肉體に加へると云ふことであり、現に最近神樂坂附近の警察署に於て斯る出來事に接したと傳へられる。從來警察署や警視廳で自白した犯罪人が檢事局に廻されてから、豫審廷に於て、事實を否認し去ると云ふが如き奇怪事の生ずるのも、警察官の拷問に堪へずして、之を免がれたいばかりに、不實の自白を敢てする結果であると云はれる。斯の如きは國民の權利を蹂躙し、國民の生活を不安ならしめるの甚だしきものであるとしなければなら

ぬ。

警察官が犯罪人の逮捕を急とし、其確證の擧げられるまで、待つことが出來ない、之を待てば、空しく逮捕の機を誤まり、犯罪人の逃去を促すに至ると云ふことも一理ある。此道理と盛に嫌疑中に陷する疑似犯罪人實は――無辜の民を捕縛して、爲めに其人に損害を加へることの不道理とを如何にして調和するかと云へば、斯る地位に立つた人に國家に對して賠償を求める權利を持たしめることを以つて、最良の方法とする。何を以つて賠償の標準とするか、拘禁された日數間に於ける所得の喪失、拘禁に依つて、生じた名譽毀損に對する慰藉、斯る名譽の毀損に依つて、將來の所得に生ずる減損額等は卽ち賠償金決定の標準と爲るものであつて、斯る請求權が國民に認められたならば、萬一誤まつて不祥の嫌疑の下に拘禁された場合に生ずる損害を輕うするを得る、少なくとも天災に遭ふ位に諦め得る一方に國家亦聊かなりとも賠償金支拂の負擔に縣念して罪跡の搜查を綿密にするに至るであらう。

若し夫れ警察官が嫌疑者に對して、肉體上の苦痛を加へ、依つて以つて自白を强ゆる罪跡の有無を問はず、形式的に自白を行はしめようとするが如き、人權蹂躙も亦甚だしい、斯る悶ツ引根性が今日の警察官に存する間は警察の威信亦之を維持す可からざる道理である。警察官をして斯る根性を脫せしめるには、彼等に依つて斯る横暴なる取扱を蒙つた無辜の良民をして毆打創傷の告訴を警察官に向つて、提起せしめることを必要とする。警察官が人を見れば、直に泥棒と考ふるが如き、平生の職務上から云つて、已むを得ない所であるかも知れないが、是れが凝り固まつて、無辜の民に無實の自白を求める、而して其之を求めるに就て、肉體上の苦痛を人に加へるが如きは、人間として爲す可き所業の埒を踰へたものであつて、斯る警察官をして愼しむ所を知らしめるには、被害者をして毆打傷害に對する告訴を提起せしめることを以つて、最良の手段とす可きである。

此以上に根本に亘つて考へれば、警察官の教育を進め、常識を養ひ、待遇を改善し、人格の向上を計ることも必要であらうが、私は目前の方策として上記の點を論ずるに止める。

豚箱事件と痰壺事件

高島米峰

貞操蹂躙の訴と、人權蹂躙の叫とは、近年に至つて、特に頻發する新現象である。勿論、かうした事實は、今に始まつたことではなく、いつの時代でも、甚だ少くなかつたのであるが、たゞそれが表面に現はれて、『訴』となり『叫』となるといふことは、全く、近代人の、思想の變化に伴ふ結果と言はなければなるまい。

昔は、貞操を蹂躙された女があつても、それを問題にして、男と戰ふべく、餘りに、男の地位が優越で、女の實力が乏しかつたゝめに、殆ど全く、泣き寢入りを餘儀なくせしめられて居たのである。又、昔は、人權を蹂躙された國民が、頗る多かつたにも拘らず、それを擧げて官憲と爭ふべく、餘りに、官憲の强制力が大きくて、『人民』を以て呼ばれた我々は、假令、正當の理由の多くを有して居ても、尙且つ、到底、これと抗爭して、勝つべき見込みが立たないために、無理往生を、餘儀なくせさるを得なかつたのである。從つて、そうした時代に於ては、貞操蹂躙を訴へたり、人權蹂躙を叫んだりすることは、却つて、自己の立場を、より不利なものに陷るゝものとして、强ひて諦めしめられたのである。極言すれば、此の時代に於ては、男子の橫暴の前には、婦人の貞操は否定せられ、官憲の强制の前には、人民の權利は肯定せられなかつたのである。

元來、人權……『人權』といふ言葉が、專門家の間に、小六ケしい議論があるならば、姑く『自由權』と言つても差支ない。……は、身體の自由、所有權の不可侵、言論思想の自由、信敎の自由、各人の社會的平等などに關する權利であつて、これは國家が、國民に對して、飽くまでも保障せむとするところである。しかし、公共の安寧幸福を維持し、且つ、國家及びその機關に及ぼす危害、公共の秩序に對する障害、各個人に對する危害等を、防制するがために、國家の權力は、臣民の自由を制限することが出來るのであつて、警察の目的、警察權の發動等は、實に、そこに基礎を置くのである。

警察と言へば、すぐ巡査を想ふのであるが、日本の現在の巡査は、その待遇の不十分なところから、教養ある人物が、その募集に應じないために、知識的にも、道義的にも、可なり低級なものが、採用されて居るとでもいふのか、往々にして、警察權を濫用して、臣民の自由權を蹂躙するものゝ出て來ることは、實に遺憾千萬である。近く、某校騷擾の際、校長室の床が腐朽して居たゝめに、十數人の學生がその室に入るや、忽ち、その床が落ちて、その物音に激成せられた學生は、前後を忘れて、突發的に暴行を演じたといふことであるが、それは兎も角、此等の學生が、現行犯として、某警察署に檢束せられた時、署の巡査達が、これ等學生に對して加へたる暴行と侮辱とは、間接にこれを聞きたるものにさへ、憤激の情を抑へ難からしめるものがあつたといふことである。十人に近い學生は、拘留所へ叩き込まれるに際し、まづ、平手で、頰と言はず背と言はず、二三十位つゝ擲りつけられ、更に、取調べとなると、麻裏草履で顏を擲られたり、板草履で頭を逆に撫で上げられたり、靴で蹴られたり、腕を捻ぢ上げられたり、甚だしきは、靴を穿いたまゝ、その足を揚げて、靴の裏で顏を押すやうに撫で廻はし、更に、靴の踵を、口の中へ捻ぢ込まれたものさへあつたといふことであるが、昔あつたといふ拷問に似た、かうした取調べ方が、大正の聖代に、猶ほ存して居るといふことは、どうしても、事實としては、考へられない。しかし、先年、京都に、豚箱事件があり、又、昨年、某署で、檢束者に、痰壺の水を飲ませたといふこともあつたといふことから考へると、靴の踵を食はせる位、寧ろ、お安い御用であるかも知れない。そこが、卽ち、巡査の素質に關する問題の存するところであつて、巡査が、眞に、自己の職能が、公共の安寧幸福を維持し、國家及び個人に對する危害を防制するに在ることを知つて居るならば、事の未然に於て、若しくは、事の中途に於て、これを阻止するために、若くは、事後に於て、その證跡を煙滅せさらしめむがために、當事者の自由を制限するはもとより妨げが無いとしても、單なる嫌疑者として檢束したるものに對し、侮辱を加へ、暴行を敢てして、以て、その嫌疑者を、強いて眞の罪人にしやうといふやうな處置は、斷じて許すべからざるところである。豫審判事に對しては、被告人をして、その罪を自白せしめむがために、恐喝又は詐言を用ゐてはならぬといふ、規定があるさうだが、巡査に對しては、まさか、暴行恐喝詐言侮辱勝手たるべしといふ、お布令が出て居る譯ではあるまい。

とは言ふものゝ、巡査の立場に立てば、また多少同情すべき點が無いでもない。一から十まで、上官の命令で進退するので

あつて、自分の意志、自分の判斷といふものは、殆ど、絶對禁止も同樣で、チョイと、演説會の廣告ビラを撒きたいからと、交番へ屆けて出るものがあつても、それを許してよいか惡いかは、必ず、本署へ、伺を立てゝの上でなくてはならないといふ程の不自由さ、そこへ、何か命令が下れば、……例へば、皇族御通過のため、交通整理をせよといふやうな命令が下るとすると、たゞもう、上官の命令に戰々兢々たる巡査は、出來るだけ、有力にその命令を遵奉しやうといふ心から、謂はゆる上官の命令なるものを、極度に誇張擴大して考へ、假りに、御通過五分前に、車馬の往來を禁ぜよとあれば、廿分も三十分も前から、車馬の往來を禁止して、一向、禁止されるものゝ苦衷を諒ともせず、又さやうにまでして、一般國民の生活を脅威することが、皇族の思召でないといふことをもお察し申上げずに、たゞ一圖に、嚴重に取締ることを以て、能事了れりとするところから、そこに却つて、種々なる行違ひを生ずることがあるのである。

民衆運動に對する警官隊の措置が、過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しの憾みの無いことが、一度だつてあつたらうか。今年も、そろ〳〵、政治期に近づいて來て、民衆運動も、ぼつ〳〵始り、殊に、府縣會議員の選擧運動も、激烈になりそうであるから、この際特に『人權蹂躙とは、警察で、巡査が、嫌疑者を擲つたり、侮辱を加へたりすることだけではない。』といふことを、警視總監及び各府縣の警察部長に警告し、且つ、諸君がその部下に對して、『警察官は常に、國民の保護者たることを記憶し、これに對して、丁寧親切を旨とし、しかも、これと相狎眤するが如きことなく、職務上に於て負擔する百般の責務は、最も嚴正忠實にこれを践行すべき』ことを訓諭し、その徹底普及を期せられむことを、冀つて置く。(大正一二、八、九)

○

警官の兩面

水野廣德

斯う云ふ問題に對して滅多なことを書くと後の祟りが恐ろし

い。が併し、不快不滿を腹の中に蒸し込んで、警官と民衆との反目憎惡を醞醸醗酵さすよりも、思ふ處、感ずる處を露骨に言つた方が却つて相互の了解と協和とを増す所以であらうかと思ふ。先づ以て吾人は或種の警官に對しては多大の敬意を拂ひ、深甚の感謝を表すると同時に、或種の警察に對しては言ひ難き不快と嫌忌の念を抱けるものなることを告白する。

警官の職責は更めて呶々する迄もなく、行政警察規則に掲記せる如く「行政警察ノ趣旨タル、人民ノ凶害ヲ豫防シ安寧ヲ保全スル」にある。而して其の職務を大別して、第一人民の妨害を防護すること、第二健康を看護すること、第三放蕩淫态を制止すること、第四國法を犯さんとする者を隱密中に探索警防すること、と規定せられて居る。人民の妨害を防護することゝは、之を現代語を以て言へば人民の自由を保護することである。卽ち人權を擁護することである。之を以て人權擁護は警察職務の第一でなければならぬ。

人智の進むに從ひ社會の事相は益複雜となり、警察の職掌は益繁多となり、從ふて形而上下に於ける警官の負擔も亦自ら増加せざるを得ない。吾人は日本の警察制度や警察官の人格が歐米諸國に比して特に遜色ありとは思はない。殊に日本の警察官が一般に職務に忠實にして利慾に恬淡なるは、歐米の警察官よりも優つて居ると信ずる。素より多數の警察官の中には時に不良分子もあるであらうが、社會の上流に位せる貴族富豪學者政治家軍人等の中に於てすら、人間の風上に置けぬ如き悪分子のあるを見れば、獨り警察官をのみ責むるは酷である。少額の俸給に甘んじて國家社會の爲めに獻身的に奉仕せる警察官と小學教師とに對しては、吾人は常に甚大の敬意と謝意とを拂ふものである。炎熱骨を熔かす如き眞夏の日中に車馬輻湊する十字路頭に立つて交通整理に從事せる警官や、沍寒息を凍らすばかりの冬の眞夜中に靴音忍んで街路を巡廻せる警官やを見る毎に、自ら同情と感謝の念を禁ずることが出來ない、其の他保安に、衞生に、吾人の豫想せざる警察官の配慮と勞苦とを耳にする時、警官に對して大なる信賴と尊敬とを拂ふものである。

〇

上は廟堂の內閣より下は路傍の交番に至る迄、國家凡百の行政機關中、人民の日常生活と最も直接なる關係と、最も緊密なる交渉を有するものは警察機關である。國家の安寧國民の福利と云ふ如き高等政治は別とし、社會の保安、衞生、風紀、交通等の如き吾人の日常生活の諸事象を監督し保護し取締る者は警察である。左れば之が事に當る警官の良否は人民の幸福に直接重大なる關係を有するものである。內閣大臣の適否よりも附近

交番に詰むる警官の良否が、寧ろより多く吾人の日常生活に影響するのである。

斯くの如く人民の日常生活と警察機關とは極めて緊密なる關係を有するが故に、人民と警察官との間は治者被治者と云ふ如き窮屈なる法律的關係でなく、骨肉の如く親友の如く情誼的融和を保つことが必要であらうと信ずる。然るに我が國の現狀に於ては因襲の然らしむる處か、法規の命ずる處かは知らねど、人民と警官との間には渾然たる融和を缺いて居る嫌がある。先入的に、人民は警官を以て威張る者、近づき難き者と爲し、警官は人民を以て我儘な者、度し難き者と見做して居る。近年都會地に於ては警官の民衆化が稱へられ、兩者の關係大に融和せられたる狀あるも、地方に於ては今尙ほ肩癖やかしてコラ〳〵式の査公が少くない樣である。

日本の警官は職務には忠實である。殊に金錢に對しては概して淸廉である。倫敦巡査の如く道を尋ねてサンキューと手を擧げながら、シャスペンスをポッケットしたり、米國巡査の如く五弗掴ませせば捕縛せる犯罪人をさへ逃がしやる樣な警官は恐らく一人も居ないであらうと信ずる。是れ日本警官の誇とするに足る點である。併しながら日本の警官に缺ぐる處は人民に對する親し味の薄きことである、優し味の乏しきことである。同じ國民でありながら日本の巡査に對しては、外國人たる倫敦の巡査に對する程の親し味を感じない。何となく法律と云ふ機械と對話して居る樣なゴツ〳〵とした窮屈さを覺へる。是れ日本の警官は官吏の威嚴を保たんが爲め、あまりに權式振つて其の應對言語等に温か味と丸味とを缺ける故であらう。獨り警官のみならず人民に對し權式振ることに依つて、其の威嚴とかを形式的に保たんとするは官僚的なる日本官吏の特點である。東洋流事大思想の强き我が國民も亦、官吏が意張れば意張る程、之に對してペコ〳〵するのが常である。意張れば敬し、親しめば輕んずるのが一般日本人の氣風である。されば職務執行上或る程度まで威嚴を必要とする警官たるもの、或は意張らさるを得ないかも知れん。罪は寧ろ人民側に在るとも言へる。官吏の意張る程度に依つて其の國民の自治心が測られる。而して國民の自治心は其の國の文野に比例する。故に官吏の威張る國ほど文明の度が低い。

○

警察第一の任務は人權の擁護である。人權とは何ぞや、法律に依つて保障せられたる人民の意思身體の自由であると思ふ。然るに我が國に於ては人權擁護を以て第一の任務とせる警官に對し、人權蹂躙の非難が甚だ高い。東京の新聞を見るも、警官

に依つて行はる人權蹂躪の記事を毎月一件や二件、殆んと見ぬことがない。人權擁護の職責を有せる警官自ら人權蹂躪を敢てせる報道に接するぐらゐ、人民として不快と不安とを感ずることはない。警官に依つて人權蹂躪の最も露骨に、最も大袈裟に行はるゝは、民衆運動並に勞働運動の場合である。是等の運動には檢束拘引が常に付き物である。民衆が粗暴なるに由るか、警官が横暴なるに出るか、新聞報道に依れば多くの場合に於て運動を騷擾化する動機を作るものは警官側に在るが如く思はれる。而して警官は是等の檢束者に對し衆人環視の中に於て、擲ぐる、蹴る、突き倒す、踏みにぢる、髮を摑つて引き摺るなど、恰かも野蠻人が敵の俘虜に對するが如き殘忍と凶暴とを逞しふすると云ふことである。

某新聞記者はメーデーの行列に警官の暴行を見兼ねて注意したが爲め、半殺しの目に逢はされたと云ふ記事もあつた。或青年は解散されたる演說會場の入口で唯一言巡査に口返事したるが爲め、警察に引つ張られて死ぬる目に逢はされたと云ふ記事も見た。最近にはヨッフェ退京の際警官の命に背いたとかで、擲ぐられ、蹴られ、突き倒された某新聞の寫眞班もあつたと云ふことである。其他新聞に現はれたる斯かる事件は殆んど枚擧に遑がない。而して衆人の目撃せる是等の明らかなる事實に對してすらも、被凌辱者が無名の個人である限り、警察當局者は殆んど千篇一律的に事實を否認するのが常である。甚だしきは擲つて負傷せしめながら、當人自ら轉んで傷いたのであるなどゝ賢明過ぎる辯解を爲すことさへもある。而かも是等の暴行が下級警官のみに依つて行はるゝのでなく、相當高き地位に在る警官默認の下に行はるゝ如き疑さへもある。一國の宰相が議會に於て、サーベルで斬つたのではなく、鞘で逐つ拂らつたら切れたのであると洒々乎として辨明せるを聞けば、大概は想像が出來る。

素より警官の立場より言へば相當の理屈もあるであらう。多數の水兵を扱ひたる自分の經驗に照らすも、或點に於て警官の心事を諒とする。殊に粗暴にして無秩序に陷ゐり易き日本の民衆運動を取締る上に於て、警官の苦心は決して容易でないことも察する。併しながら今日見るが如き警官の行爲は、取締の必要を超越したる不法なる暴行である。如何に警官とは云へ、無抵抗の人民に對して斯かる暴虐を行ふことは、日本の法律に於て許されて居ない。此等の不快なる事件を聞く毎に、人民と警官との間には越へ難き深き塹壕が穿たれる。而して警官の人權蹂躪が國家の權力を背景として行はるゝを思ふ時、警官に對する人民の怨恨は國家に對して轉向せらるゝは當然である。衆

怨の重なるところ其の結果は誠に憂ふべく恐るべきものがある。

○

十字路頭に立つて交通を整理し、交番に屯して保安に任ずる善良なる警官が、一たび民衆運動取締の任に就くや、忽ち豹變して惡鬼羅刹の如き殘忍を逞しふするに至るは何故であらう。之が因由は種々あらんも、其の主なるものを擧ぐれば、

(一)威嚇暴壓政策に基づく上司の命令
(二)成るべく多くの犯人を檢擧せんとする陋劣なる自己の功名心
(三)過勞の勤務に對する報復手段
(四)民衆運動に對する思想的反感
(五)熱し易く激し易き國民性

に由るものであらうと思ふ。(一)現狀維持を以て國家の安寧と社會の秩序とを保つ唯一の道と爲せる政府當局が、苟しくも現狀の打破を企つるものは國家の敵と爲し、其の理非の如何を問はず、其の個人たると團體たるとを問はず、之に對して威嚇的暴壓手段を執ることは見易きの道理である。從ふて直接之が取締に從事する警官に與ふる命令訓令の如きも略ぼ察することが出來る。責は當の警官よりも寧ろ高等警察を掌る上司にある。

(二)(三)は人[illegible]である。[illegible]子のみにあらざる[illegible]警官中には斯かる人物の絶無を期することは出來ない。[illegible]の根の拳が民衆の頭に降らぬとも限らない。(四)現在に於ける警官教育の根本精神は國家制度社會組織の現狀維持である。即ち思想的には保守主義である。然るに民衆運動の大多數は無産者の解放を唱ふる現狀打破である。即ち思想的には進歩主義である。教養淺き者の思想は殆んど迷信に近い。其の反對思想を惡むこと異宗教に對するが如きものがある。警官自身も無産者の一人であることなどには想到する暇がない。殊に警視廳巡査には薩摩人が最も多數を占むることを聞かば、其の思想的傾向の一班を伺ふことが出來る。

(五)は最も重き因子であると思ふ。元來日本人の性格は理性の判斷よりも感情の衝激に鋭敏である。所謂熱し易く激し易き國民性である。獨り警官のみならず、民衆も亦然りである。此の熱し易き民衆を抑ゆるに、此の激し易き警官を以てす。一本のマッチが忽ち燎原の火と化するは自然の勢である。卷脚絆に腰紐を掛け、民衆運動取締に出陣する警官の一隊を見れば、其の服裝の物々しきのみならず、其の容貌も亦殺氣を帶びて釣り上りたる眼、怒氣を含んで食ひしめる唇、恰かも突撃前の兵士の如き觀がある。警官の斯くの如き容姿と態度とが先づ民衆の

反感を喚る。民衆の擧ぐる鬨の聲を聞けば、警官の頭は既に熱して民衆を敵視する。斯くて衝突一たび起れば血迷ひたる警官の目には最早や誰れ彼れの區別さへなく、徐かに停留場に電車を待つ老幼婦女に對してすら、不法の壓迫を加へる。冷靜に傍觀すれば殆んど狂人の態度である。

○

交通整理に從事する倫敦と東京との巡査とを比較する。身體長大、容貌柔和なる倫敦の巡査が道路の中央に立つて悠揚迫まらず、僅に隻手の上下に依つて一分間に幾百輛と馳せ違ふ車馬の通行を巧みに整理せるを見る時、先づ巡査の餘裕綽々たる態度に敬服すると同時に、英國民の交通道德の發達に感心せざるを得ない。然るに東京の交通巡査を見るに、兩手を振り廻はし、體を振り動かし、眼を釣り上げ、聲を發し、身も心も寸分の餘裕だになく、恰かもフイルムを惜しみたる活動寫眞の體操の如く、見るからに氣の毒な感がする。素より東京の巡査は經驗の乏しき點もある。東京の交通機關は倫敦よりも複雜なる點もある。夫にしても東京の巡査は餘りに職務に熱中して冷靜を缺ける嫌がある。警官の人權蹂躙の如きも、「擲ぐるは巡査の役德」などゝ云ふ世上の漫語を信ぜずとするも、彼等が職務に熱中するの餘り感情の發露に任せて、斯かる行爲に出づるのではないかと思ふ。

民衆運動に於けるのみならず、或は犯罪嫌疑者に對し拷問手段を以て無實の犯罪を自白せしむる如き、或は主義者に對して無理由なる檢束を加ふる如き、警官の人權蹂躙に對する世間の非難は絕へず耳にする處である。若し事實とせば其の罪素より警官自身にあるは云ふ迄もない。併しながら其と同時に上司の警官が下僚に對して過酷なる責任を課することも亦一の罪である。某警察管内に起りたる重大犯罪に對し、犯人の檢擧が出來ぬからとて、直に其の警察當局者の無能を責めて罷免したり、某警察管内に於ける主義者の取締が緩漫だからとて、忽ち其の警察當局者を左遷する如きことあらば、警察官と雖どもパンを食つて生くる人間である以上、自己擁護の必要上或は無辜の人民を犧牲とし人權蹂躙の擧に出てぬとも限らない。上司が責任逃避の爲め難きを下僚に要求することと、犯罪人製造の多少を以て考課の標準と爲すこととが、人權蹂躙の一因を爲せるものではあるまいかと疑はれる。

○

國際競爭の烈しき今日、無爲にして化すことが果して政治の上善なるものであるや否やは知らない。併しながら人權を蹂躙して迄も犯罪人を製造することは正に亡國の政治である。公平

の見地に立つて見れば人權蹂躪其の事の罪惡たるは言ふ迄もない。とは云へ相當教養ある警官をして人權蹂躪を敢てせしむる責の幾分に人民にもある。吾人は妄りに警官のみを責めて快とするものではない。唯警官に望む處は日本人の如き熱し易き人民を取締まるには、警官自身充分に冷靜であらねばならぬと云ふことである。民衆が熱すれば警官も共に激すると云ふ如き狀態にては、徒に官民感情の衝突あるばかりで合理的なる治安の維持は望まれない。殊に國家權力の名に依つて行はるゝ警官の人權蹂躪は、國民の反國家思想を激成するもので、其の國家社會を毒することと彼の私的暴力團の跳梁よりも逈かに大にして恐るべきものがある。下級警官の非人道的なる自己慰籍や自己擁護の爲めに、人民を捕へて生きた木魚や生きたフートボールと爲すの弊風積習は、一月も速かに矯正することが上司警官の爲すべき急務である。露國のニコラス二世は個人として善良溫厚なる好紳士であつた。而かも彼の任命したる政府の執りたる苛察なる警察政治の爲めに禍されて、遂に悲慘なる最後を遂げたることを忘れてはならぬ。



◇最新式の漢和辭典◇

文學博士 服部宇之吉
文學博士 小柳司氣太先生著

238版

詳解漢和大字典

『改修增補』
定價參圓五拾錢
郵税 貳拾四錢

本書が幾多漢和辭典中の白眉であり、また如何に世の歡迎を受けてゐるかは實に『改修增補二百三十八版』といふ辭書界否出版界にも空前の記録の所有者となりました全國中等學校八百餘校の學生用指定參考辭典となり、發行所冨山房が全力をあげて年中印刷製本に從事しても、尚且その註文に應じ切れないといふ事實が十分之を裏書してゐる。書齋の必備品であつた本書は今や書齋から出で丶あらゆる家庭の必要具にならうとしてゐる。新本二万部出來

文學博士 上田萬年先生著

ローマ字で引く國語辭典

■第三十二版發行■

三五判千百餘頁
定價 貳圓
郵税 拾錢

體裁の優美、引方の簡單なる最新式國語辭典として學生紳士淑女の歡迎措かざるもの要語に英譯を附してゐるから、和文英譯の參考書ともなる。便利至極の辭典。

發行所 東京神田 冨山房 振替東京五〇一番

光雲翁昔ばなし

田村松魚聞書



佐竹の原繁昌のはなし

下谷西町で相變らずコツ／＼と自分の仕事を專念にやつて居る中に、妙なことで計らず少し突飛な思ひ附きで餘計な仕事を遊び半分にしたことがあります。此も私の思ひ出の一つとして記憶にあること故、今日はその事を話しませう。

其頃(明治十八年の頃)下谷に通稱「佐竹原」といふ大きな原がありました。此の原の中へ思ひ付きで大佛を拵へたといふはなし……それは八角形の下臺共に高さが四丈八尺あつた。奈良の大佛よりは一丈程小さいが、鎌倉の大佛より餘程大きなもの、今日では佐竹の原も跡形なく一寸今の人には想像もつかないし、無論その大佛の影も形もあることではない。夢のやうなはなしではありますが、其が却つてはつきりと思ひ出されます。

私の住んで居る西町から佐竹の原へは二丁もない。向側は仲御徒士町で、私の宅からは初めての横町を右に曲り、此れを眞直に行くと生駒屋敷の裏門となる。西町の通りを眞直に淺草の方へ向いて行けば左側が七軒町、右が小島町で今の樂山堂病院のある通りとなる。竹町は佐竹の原が形を變へて市街となつたので、それで竹町といふのであつて、佐竹の屋敷を取拂つた跡が佐竹の原です。東南に堀があつて、南方は佐竹の表門で、其前が三味線堀です。東方の堀が竹町と七軒町の界で此堀が下谷

と淺草の界だと思ひます。七軒町の取ッ附き迄が一丁半位、南北は二丁以上、隨分佐竹屋敷は廣かつたものです。それが取拂はれて原となつてぼう〳〵と雜草が生へ、地面はでこぼこして、東京の眞中に斯んな大きな野原があるかと思ふ位、蛇や蛙やなどの巣で、人通りも稀で、江戸の繁昌が打ち毀された儘で、さうしてまだ明治の新らしい時代が形にならない間の變な時でありました。

すると、誰の思附きであつたか。此の佐竹の原を利用して、今でいふと一つの遊園地のやうなものにしやうといふ考……それ程大仕掛けではないが、一寸した興業地を此所へ拵へやうと出願したものがあつて、原の或場所へいろ〳〵のものが出來たのであつた。先づ御定りの活ッ惚れの小屋が掛る。すると、デロレン祭文が出來る。（此れは浪花節の元です。）いづれも葭簀張りの小屋掛け。それから借馬、打毬場、吹矢、大弓、其他色々な大道商賣位のもので、是と云つて足を止め腰を落附けて見る物はないが、一つの下等な遊戯場のやうな形になつて來ました。それで人がぞろ〳〵と出る。陽氣は春に掛つてゐてぽかぽか暖くなつて來るし、今迄狐狸のゐさうな原の中が急に斯う賑やかになつたのであるから、評判が次第に高くなつて、後には此の原へ通ふ人で西町の往來は目立つやうになつて來ました。斯うなると、それに伴れてまた色々な飲食店が出來て來る。粟餅の曲搗の隣には汁粉屋が出來る。吹矢と並んで煮込おでん、其前に大福餅、稻荷鮓などゝごつた返して、一盛りその景氣は大したものでありました。

と云つて別に此れと云つて、落附いて深く見物しやうなどゝいふものはない。云はゞ緣日の本尊のないやうなもので、何んといふきまりもなく、只、一時の客を呼んでドンチヤンと騷いでゐました。

私は、西町の例の往來の見える仕事場で仕事をしてゐると、ぞろ〳〵前を人が通る。此れが皆佐竹の原へ行くのだといふこと。花時に上野の方へ人出の多いは不思議がないが、昔でも追剝ぎの出さうな佐竹の原へ斯んなに人出があるとは妙な時節になつたものだと思つて仕事をしてゐたことであつた。

佐竹の原へ大佛を拵へたはなし

私の友達に高橋定次郎氏といふ人がありました。此の人は前にも話しました通り高橋鳳雲の息子さんで、其頃は鐵筆で筒を刻つて職業としてゐました。上野廣小路の山崎（油屋）の横を

湯島の男坂の方へ曲つて中程（今は黒門町か）に住んでゐました。此の人が常に私の宅へ遊びに來てゐる。それから、もう一人田中増次郎といふ蒔繪師がありました。此れは男坂寄りの方へ住んでゐる。何處となく顏の容子が狐に似てゐるとかでこんこんさんと綽名をされた人で、變り物でありましたが、此の人も定次郎氏と一緒に朝夕遊びに來てゐました。お互ひに職業は違ひますが、共に仕事には熱心で話もよく合ひました。所で、もう一人、矢張り高橋氏の隣に住んでゐる人で野見長次といふ人がありました。此れは肥後熊本の人で、店は道具商で、菓物の標本を作つてゐました。枇杷、桃、柿などを張子で拵へ、それに實物そつくりの彩色をしたもので一寸盛籠に入れて置物などにもなる。緣日そどに出して相當賣れてゐました。此の野見氏の親父さんといふ人は、元、熊本時代には興業物に手を出して味を知つてゐる人でありましたから、長次氏もさういふことに氣もあつた。此の人も前の兩氏と仲善で一緒に私の宅へ遊びに來て、互に物を拵へる職業でありますから、話も合つて研究爲合ふといふ風でありました。

或日、また、四人が集まつてゐますと、相更らず仕事場の前をぞろ〱人が通る。私達の話は彼の佐竹の原の噂に移つてゐました。

「佐竹の原も評判丈けで、行つて見ると、からつまらないね。何も見るものがないぢやありませんか。」

「さうですよ。あれぢや仕樣がない。何か少し此れといふ見世物が一つ位あつてもよささうですね。何か拵へたら何うでせう。旨くやれば儲りますぜ。」

「儲る儲らんは兎に角、人を呼ぶのに、あんなことでは餘り智慧がない。何か一つアッと云はせるやうなものを拵へて見たいもんだね。」

「高村さん、何か面白い思ひ附きはありませんか。」

といふやうな話になりました。

「左樣さ……此れと云つて面白い思ひ附きもありませんが、何か一つあつてもよささうですね。原の中へ拵へるものとなると、高價なものではいけないが、と云つて小つぽけな見てくれのないものでは尙更いけない……何うでせう。一つ大きな大佛さんでも拵へては……」

笑談半分に私は云ひ出しました。皆が妙な顏をして私の顏を見てゐるのは、一體、大佛を拵へてどうするのかといふ顏附きです。で、私は其大佛の趣向を説明して見ねばなりません。

「大きな大佛を拵へるといふのは、大佛を作つて見物を胎內へ

入れる趣向なんです。どのみち何をやるにしても小屋を拵へなくてはならないが、その小屋を大佛の形で拵へて、大佛を招ぎに使ふといふのが思ひ附きなんです。大佛の姿が屋根にも圍にもなるが、内側では胎内潜りの仕掛けにして、膝の方から登つて行くと、左右の脇の下が瓦燈口になつてゐて此所から一度外に出て、印を結んでゐる佛樣の手の上に人間が出る。其所へ乘つて四方を見張らす。外の見物からは人間が幾人も大佛さまの右の脇の下から出て、手の上を通つて、左の脇の下へ這入つて行くのが見える。それから内部の階段を曲りながら登つて行くと、頭の中になつて廣さが二坪位、此所にはその目の孔、耳の孔、口の孔、並に後頭に窓があつて、其所から人間が顏を出して四方を見張らすと江戸中が一目に見える。四丈八尺位の高さだから大概の處は見える。人間の五六人は頭の中へ這入れるやうにして、先樣お更りに、遠眼鏡などを置いて諸方を見せて、客を追ひ出す。降りて來ると胴體の廣い場所に珍奇な道具などを並べ、それに因緣を附け、何かおもしろい趣向にして見せる。此の前笑覽會といふものがあつて阿波の鳴戸のお弓の涙だなんて壜に水を入れたものを見せるなどは氣が利かない。もつと、面白いことをして見せるのです……」

「……さうして切の舞臺に閻魔さまでも躍らして地獄も此頃はひまだといふ有樣でも見せるかな……成程、此れは面白さうだ。」

「大佛が小屋の代りになる處が第一面白い。それで中身が使へるとは一擧兩得だ。此れは發明だ。」

など高橋氏や田中氏は大變おもしろがつてゐる。ところが、野見氏は默つてゐて何んとも云ひません。考へてゐました。

「野見さん。何うです。高村さんの此の大佛といふ趣向は……名案ぢやありませんか。」

高橋氏が云ひますと、

「左樣ですな。趣向は至極賛成です。だが、愈々やるとなると、問題は金ですね、金錢次第だ。父親に一つ話して見ませう。」

野見氏は無口の人で多くを語りませんが、肚では他の人よりも乘氣になつてゐるらしい。私は、當座の思ひ附きで笑談半分に妙なことを云ひましたが、若し、此れが實行された曉、相當見物を惹いて商賣になればよし、さうでも無つた日には飛んだ迷惑を人にかけることになると心配にもなりました。

野見長次さんは早速父親さんにその話をしました。

野見老人は興業的の仕事の味の分つてゐる人。此れは物になりさうだ。一つやつて見たいといふので、長次さんが老人の考

へを拵つて來て、また四人で相談して、一應、私はその大佛さまの雛形を作つて見るといふことになりました。(實の所は雛形を作つても大工や仕事仕に出來ない。また金錢問題で止めになるに違ひ無いとは思ひましたが、兎に角、自分で云ひ出したことだから雛形に掛りました)

その日は竹屋へ行つて箱根竹を買つて來て、實の自分の仕事を濟ますと、夜なべをやめて、雛形に取り掛りました。見積りの四丈八尺の二十分一即ち二尺四寸の雛形を作り初めたのです。先づ坪を割つて土臺をきめ、しほんと云つて四本の柱をもつて支柱を建て、箱根竹を矯て圓蓋を作り、そのしほんに梯子段を持たせて、いつぞやお話した百觀音の螺線堂のぐる〳〵と廻つて楷段を上る行き方を參考としまして、漸々と下から廻りながら登つて行く仕掛けを拵へて行きました。最初が大佛の膝の處で、次は脇の下、印を結んでゐる手の上に人間が出られるやうになる。それから左から脇を這入つて行くのが外から見え、段々と顏面へ掛り、口、目、耳へ拔けるやうに竹をねぢつて取り附けます。……雛形は出來たが此れは骨ばかり、一寸見ると何んだか薩張り分らない。變なものが出來ましたが、張子紙で上から張つて見ますと、案外、あり〳〵と大佛さまの姿が現はれて來ました。

「おや〳〵何を拵らへてゐるのかと思つてゐたら大佛樣が出來ましたね。」

と家の者は云つて居ります。

「大佛に見えるかね。」

「大佛樣に見えますとも。」

と云つて居ります。大佛が印を結んで安坐してゐる八角の臺の内部が普通の見世物小屋位あるわけになります。出來上つたので、それを例の三人の友達に見せました。

「旨く行つた。此れなら先づ大丈夫勝利だが、今度は是を拵へるに全部で何程金が掛るか是が問題です。其所で、此の事は仕事師に相談するのが早手過しで此の四本の柱をたよりにして、仕事をするものは仕事師の巧者なものより外にない。早速當つて見やう。」

といふことになりました。で、御徒士町にゐた仕事師へ相談をすると、此れは私共の手で組立てが出來ないこともないが、斯ういふ仕事は普通の建物とは違ひ、カヤ方の仕事師といふものがある。それはお城の足場をかけるとか、お祭りの花車小屋、又は興業物の小屋掛けを專門にしてゐる仕事師の仕事で、一種また別のものですから、その方へ相談をしたらよろしからうと云ふのでありました。それでは其の方へ話をしてくれまい

かと頼むと、早速引取けて友達を伴れて來てくれました。

私はそのかや方の仕事師といふ男に逢つて見ました。

私の肚の中では、此の男に逢つて雛形を見せたら、恐らく、此れは物になりません、と云ふだらうと思つて居りました。若し、さう云つてくれたら却つて私には好かつたので、此の話はそれで消えてしまふ譯。若しさうでも無いと、話が段々大きくなつて大佛が出來るとなると、私の責任が重くなる。興業物としての損益は分りませんが、若し損失があつては資本を出す考へでゐる野見さんに迷惑が掛ることになります。どうか、物にならないと云つてくれゝば好いと思つて、其男に逢ひますと、仕事師は暫く雛形を見て居りましたが、

「是はどうも旨いもんだ。素人の仕事ぢやない。此の梯子の取附けなどの趣向は中々面白い。私共にやらされても斯う器用には出來ません。」

と云つて褒めてゐます。それで、此れを四丈八尺の大さに切組むことが出來るかと訊くと、譯はないといふ。此の雛形ならどんなにでも旨く行くといふのです。そして早速人足を廻しませう、と云つて居ります。其男の口裡で見ると、十日位掛れば出來上りさうな話。野見さん初め他の友達も此れで愈々氣乘りがして來ました。

併し、此の仕事はかや方の仕事師ばかりでは出來ません、仕事師の方は骨を組むのでありますが、此仕事は大工と仕事師と一緒でなければ無論出來ません。其所で大工を頼まなければならないので、誰に賴まふといふ段になつたが、高橋氏が、私の兄に大工のあることを知つてゐるので、其人に賴むのが一番だといふ。成程私の兄に大工があるが、併し斯ういふ仕事を巧者にやつてのける腕があるかどうか、それは不安心。けれども、苟くも棟梁と云はれる大工さん、それが出來ないといふ話はない、漆喰の塗り下で小舞貫を切てとん／＼と打つて行けば雑作もなからう。兄さんを引張り出すに限るといふので、私も止むなく兄を賴むことに致しました。

其所で、兄は竹屋から竹を買ひ出して來る。千住の大橋で中眞になる丸太を四本、お祭の幟竿にでもなりさうな素晴しい丸太を一本壹圓三四十錢位で買ふ。其他お好み次第の材料が安く手に這入りました。其所で大工の方で、左官に塗らせる迄の仕事一切を見積つて幾金で出來るかと云ふと、(無論仕事師の手間賃も中に這入つてゐて)百五十圓でやれるといふことです。それで、兄の友達の左官で與三郎といふ人が下谷町にゐるので、

それに漆喰塗りの方を頼んで貰ひました。

黒漆喰で下塗りをして、其上に黒に青味を持つた丁度大佛の青銅の肌のやうな色を出すやうにといふ注文……それが五十圓で出來るといふのでした。すると、先づ二百圓で大佛全體が出來上ることになります。さうして、胎内に一つの古物見立展覧場を作るとして、色々の品物を買ひこむのだが、此の方には趣向を主として實物には重きを置きませんから先づ百圓の見積り……足りない所は各自の所持品を飾つても間に合はせるといふ考です。それで、何から何まで一切合切での總勘定が三百圓で立派に此の仕事は出來るといふのでありました。

「よろしい。三百圓、私が出します。」

と野見さんは云ふのです。何にも經驗、當つても當らなくても、斯うなつちや損得を云つてゐられない。道樂にもやつて見たい。儲かれば重疊……愈々取り掛りませう。といふことになりました。

それが三月の十五日で、梅若さまの日で、私が雛形を作つてから十日も經つか。話は迅く、四月八日釋迦の誕生日には中心になる四本の柱が立つて建前といふ迄に仕事が運んでゐました。最初はまるで串戲のやうに話した話が、三週間目には、もう柱が建つてゐる。實に氣の早いことでありました。

さて、カヤ方の仕事師は人足を使つて雛形をたよりに仕事に取掛つて、大佛の形をやり出したのですが、此の仕事に就いて、私の考へは、先づ雛形を渡して置けば大工と仕事師とで概略出來るであらう。自分は時々見廻り位で濟むことだと思つて居りました。で、膝を組んだ形、印を結んだ形、肩の丸味の附けやう……それから顏となつて來て、顏には大小の輪などを拵へて、外からどん〳〵木を打ちつけて……旨く仕事は運んでゐることだと思つて居りました。

或日、私は、どんなことになるかと心配だから仕事の現場へ行つて見ると、此れはどうも驚いた。まるで滅茶々々なことをやつて居る。此には實に閉口しました。

大工や、仕事師は、どんなことをして居るかといふに丸で、仕事師が役に立たない。先には苦もないやうなことを云つて居つたが、實際に臨んでは滅茶々々です。また、兄貴の大工の方も同樣で丸でなつてゐないのです。例令ば、大佛が膝を曲げて安坐をして居るその膝頭がまるで三角になつて居る。些つとも膝頭だといふ丸味が出來て居りません。印を結んだ手が手だか何んだか、指などは分らない。肩の丸味などは矢張り三角で久

米の平内の行のやう……此れには閉口しました。

「是は不可けない。斯んなことは雛形にない。」

と私がいふと、

「どうも、斯うづう體が大きくては當が附きません、」

仕事師も、大工も、途方に暮れて居るといふ有様……其所で、此儘でやられた日には衣紋竿を突張つたやうな大佛が出來ますから、私は、仕事師、大工の中へ這入つて一緒に仕事をすることに致しました。

「私の云ふやうにやつてくれ。」といふので指圖をした。

膝や肩の丸味は三角の所へ弓をやつて形を作り、印を結んだ手は片面で、四分板を切拔て、細丸太を切つて小口から二つ割にして指の形を作る。鼻の三角も兩方から板でせつて鼻筋を拵へ小鼻は丸太でふくらみをこしらへる……といふ風に、一々佛の形のきまりを大握みに摑んで拵へて行かせるのですが、兄貴の大工さんも、差し金を持つて見込みの仕事をするのなら何んでも出來るが、斯んな突飛な大仕掛けな荒仕事となると一向見當が附きません。仕事師の方も普通の小屋掛けの仕事と違つて、大佛の形に型取つた一つの建物の骨を作るのですから、當つて見ると漠然として手が出ません。此所を斯うと云ひ附けても間に合はないといふ風で、私は大に困りましたが、困つた上句、芝居の道化方の仕事をやつてゐる或る大工を連れて來て、此にやらせて見ますと、中々氣が利いてゐて役に立ちます。私は此の大工を先に立てゝ仕事を急ぎました。

それで、私はよんどころなく毎日仕事場へ行かねばならなくなつた譯であります。が、毎日高い足場へ上つて仕事師大工達の中へ這入つて仕事をして居りますと、中々おもしろい。面白半分が手傳つて本氣で汗水を流して働くやうになりました。今日では思ひも寄らぬことですが、まだ歳も若し、氣も旺んであるから、高い足場へ上つて、指圖をしたり、竹と丸太を色々に用ゐて顱などの丸味や、胸などのふくらみを拵へて居りますと、狹い仕事場で小佛を小刀の先で弄つてゐるとはまた格別の相違……青天井の際限もない廣大な野天の仕事場で、拵へるものは五丈近い大きなもの、陽氣はよし、誰から別段頼まれたといふこともなく、まあ、自分の發意から仲の善い友達同士が道樂半分にやり出した仕事ですから、別に小言の出る心配もなし、晴れた大空へかん／＼と金槌の音をさせて荒つぽく仕事をするので、どうも、甚だ愉快で、元來、罷り間違へば自分も大工になる筈であつたことなど思ひ出して獨りでに笑ひたくなるやうな氣持にもなつたりしたことでありました。

段々と仕事の進むにつれて、大佛の頭部になつて來ましたが、大佛の例の螺髪になると、一寸困りました。俗に金平糖といふポツ／＼の頭髪でありますが、此をどうやつて好いか、丸太を使つた日には重くなつて仕事が榮えず、板では仕樣もない。其處で、考へて、神田の龜井町には竹笊を拵へる家が並んで居りますから、其所へ行つて唐人笊を幾十個か買ひ込みました。が、螺髪の大きい部分はそれが丁度はまりますけれども、額際とか、揉上げのやうなところは金平糖が小さいので、それは別に頃合ひの笊を注文して、頭へ一つ／＼釘で打ち附けて行つたものです。佛さまの頭へ笊を植えるなどは甚だ滑稽でありますが、此れならば漆喰の噛り附きもよく、案としては名案でありました。

「やあ、大佛樣の頭に笊が乘つかつた。」

などと群衆は寄つてたかつて物珍らしくわい／＼云つて居ります。突然に斯んな大きなものが出來出したので、出來上らない前から人々は驚いてゐるといふ有樣でありました。

或日、私は、遠見から此れを見て、一體どんな容子に見えるものだらうと思ひましたので、上野の山へ行つて見ました。丁度、今の西郷さんのある處が山王山で、其所から見渡すと、右へ筋違ひにその大佛が見えました。重り合つた町家の屋根からすつと空へ抜けて胸から以上出て居ります。空へ白い雲が掛つて笊を植へた大きな頭がぬうと聳へて居る形は何んといふて好いか甚だ不思議なもの……併し、立派な大佛の形が悠然と空中へ浮いて居るところは甚だ雄大……此れが上塗りが出來たら更に見直すであらうと、一層仕事を急いで、どうやら、下地は出來ましたので、いよ／＼、左官與三郎が塗り上げましたが、青銅の味を出すやうにといふ注文でありますから、黒ツぽい銅色に塗り上げると、大空の色とよく調和つて、天氣の好い時などは一見銅像のやうで中々立派でありました。(此の大佛に使つた材料は竹と丸太と小舞貫と四分板、それから漆喰丈けです。)

「どうも素晴らしいものが出來ましたね。えらいものを拵へたもんですね。」

など見物人は空を仰いでびつくりして居ります。正味は四丈八尺ですが、吹聽は五丈八尺といふ口上、一丈だけさばを讀んで奈良の大佛と同格にしてしまひました。其所で口上看板を假名垣魯文先生に頼み、立派な枠を附け、花を周圍に飾つて高く揭げました。斯んな興業物的の方は友達の方が受持ちでやつたのでありました。

それから、胎内の方は野見の親父さんの受持で、切組には

閻魔の踊りを見せやうといふ趣向。其所でまた私は閻魔の顔を拵へさせられるなど自分の仕事を其方退けにして多忙しいことで、エンマの顔は張子に拔いでぐる／＼目玉を動すやうな仕掛けにして、中へ野見の老人が這入つて仕草をするといふ騒ぎ…………一方、古物展覽の方も古代な布片とか佛像のやうな何んでも時代が附いて曰く因緣のありさうなものを並べ、鳴戸のお弓の涙などゝ小供だましでなく、大人でも感服しさうな因緣書などを野見の老人がやつて、一切、内外共に出來上りまして、いよいよ蓋を明けましたのが確か五月の六日……五日の節句といふ目論見であつたが、間に合はず、六日になつたやうに記憶して居ります。

此の興業物は「見流しもの」と云つて、ずつと見て通つて、見た客は追ひ出してしまふので、見世物としては大勢を入れるに都合の好いやり方であります。大佛の頭が三疊敷位の廣さで人間が五六人位這入れますが、目、口、耳の窓から外を見ると、先の客は後の客から急かされて出て行くので、入り交り立ち交るといふ手順で、手ッ取早く出來て居ります。蓋が明いた六日の初日には果して大入りでありました。

大佛の末路のあはれなはなし

佐竹の原に途方もない大きな大佛が出來て、切舞臺で閻魔の踊りがあるといふ評判で、見物人が來て見ると、果して眼を突ぐやうな大佛が立つて居る。客は先づ好奇心を唆られてぞろぞろ這入る。――興業主は思ふ壺といふ所です。

大入の笊の中には一杯で五十人の札が這入つて居ります。十杯で五百人になる。それがとん／＼と明いて行くのです。木戸口で木戸番が札を客に渡すと、內裏にちやきりと云つて札を取る人が居ります。此は興業主で、其札によつて正確な入場者の數が分るのであります。初日は何んでも二十杯足らずも笊が明いて、彼是千人の入場者がありまして、先づ大成功でした。

所で、物事はさう旨く行きません。――

初日の景氣が少し續いたかと思ふと、早くも六月に這入り、梅雨期となつて毎日の雨天で人出が無くなりました。何れも盛り場は天氣次第の物ですから。少し曇つても人は來ない。また此の梅雨が長い。漸く梅雨が開けると今度は土用で非常な暑さ、毎日の炎天續き、立木一本も無い野天のことで、たよる蔭もなく、とても見物は佐竹原へ向いて來る勇氣がありません。ことに漆喰塗りの大佛の胎內は一層の蒸し暑さでありますから、わざ／＼さういふ苦しい中へ這入つてうでられる物數寄も

ないといつたやうな風で、客はがらりと減りました。

さういふ間の悪るい日和に出逢はして、初日から半月位の景氣はまるで一時の事、後はお話にもならないやうな不景氣となつて、是れが七月八月と續きました。もつとも、此は大佛ばかりでなく、佐竹原の興業物飲食店一般のことで、どうも何んとも仕様がありませんでした。

私は、此の容子を見ると、自分の暇潰しに云ひ出した當人で仕方もないが、どうも、野見さん父子に對して氣の毒で、何んとも申譯の無いやうな次第でありましたが、さりとて、今更取返しもつかぬ。併し、野見さん父子は藤張りしたもので、此れが興業ものには有り勝ちのことで、一向悔むには當りません。いづれ、秋口になつて、そろ〳〵涼風の吹く時分一景氣附けませう。と云つて氣には止めませんが、私はじめ、高橋、田中兩氏も何んとか景氣を輓回したいものと考へて居る中に、殘暑が來て佐竹の原は燒け附く暑さで、見世物どころの騒ぎではなくなりました。

「もつと早く、花の咲いた時分、此れが出來上つてゐたら、それこそ一月で元手ぐらゐは取れたんだが、少し考へが遲蒔だつた。惜しいことをした。」

など私達は愚痴交りに話してゐますが、野見さんの方は、秋口といふもう一つの季節を樂しみにして、此所で踏ん張らうといふ肚もあるのですから、愚痴などは一つも云はず、涼風の吹いて來るのを俟つて居りました。

樂しみにしてゐた秋口に時候は掛つて來ました。

此所等を口切りに再び大佛で一花返り花を咲かさうといふ時は、もう九月になつて居り、中の五日となりました。

此の日は本所では牛の御前の祭禮、神田日本橋の目貫の場所は神田明神の祭禮でありました。(其頃は山王と明神とは年番でありました。多分、其年は神田明神の方の番であつたと思ひます。)それで、私は家のものを伴れてお祭を見に日本橋の方へ行つて居りました。

午後三時頃、空模様が少しをかしくなつて來たので、降らない中にと家に歸りますと、ぽつり〳〵やつて來ました。好い時に歸つて來た。降つて來たよと云つてる中に、風が交つて雨は小砂利を打つつけるやうに恐ろしい勢で降つて來ました。四辺は眞暗になつた儘で、日は暮れてしまつて、夜になると、雨と風とが一緒になつて、實に恐ろしい暴風雨となりました。其晩一晩荒れに荒れて翌日になつて漸つと納まりましたが、市中の損害は中々で近年稀な大あらしでありました。何處の屋根瓦も

吹き飛ばされる。塀が倒れ、寺や神社の大樹が折れなどして大あらしの後の市中は散々の光景で、私宅なども手酷しくやられました。が、先づ何より心配なは佐竹の原の大佛のこと、昨夜の大あらしにどうなつたことかと、私は起きぬけに佐竹の原へ行つて見ますと、驚いたことには大佛の骨はびくともせず立派にしやんとして立つて居ります。併し無殘にも漆喰は殘らず落ちて、衣物はすつかり剝がれて居りました。私は暫らく立つて見てゐましたが、どうも如何とも仕難い。只、骨丈けが斯う頑丈にびくともせずに殘つた丈けでも感心。左右前後から丸太が突張り合つて自然にテコでも動かぬやうな丈夫なものになつたと見えます。それに漆喰が剝れて、凡て丸身をもつた形で、風の辷りがよく、當りが強くなかつた爲でもありませうが、此の大佛が出來てから間もなく、直ぐ向ふの通りに竹葉館といふ興業ものゝ常設館が建つて、中々立派に見えましたが、それが、一たまりもなく押し潰され、吹き飛ばされてゐるのから見ますと、大佛は骨丈でもシヤンとしてゐた所は案外だと思つて歸つたことであります。

此の大嵐は佐竹の原の中の凡てのものを散々な目に逢はせました。葭簀張りの小屋など影も形も無くなりました。それが爲に佐竹の原は忽にまた衰微れてしまつて、此れから一賑ひといふ出鼻を敲かれて二度と起ち上ること出來ないやうな有様になり、春頃のどんちやん賑やかだつた景氣も一と盛り、此の大嵐が元で自滅するより外なくなつたのであります。

大佛は、もう一度塗り上げて、再び蓋を明けて見ましたが、それも骨折り損でありました。二度と起てないやうに押し潰された佐竹の原は、もう火の消えたやうになつて、佐竹の原ともいふ人が無くなつたのでありました。

併し、此の爲に、佐竹の原は却つて別の發達をしたことになつたのであります。

といふのは、興業物が消えて無くなると、今度は本當の人家がぼつ／＼と建つて來たのであります。一軒、二軒と思つてゐる中に、何時の間にか軒が並んで、馬肉屋の店などが皮切りで、色々な下等な飲食店などの店が出來、それから段々開けて來てとう／＼竹町といふ市街が出來て、「佐竹ッ原」と云つた處も原ではなく、繁昌な町並みとなり、今日では佐竹の原と云つても、どんな處であつたか分らぬやうになりました。

若い時は、突飛な考へを起して人樣にも迷惑を掛け、また自分も骨折り損。今から考へると夢のやうです。

學校へ奉職した前後のはなし

是れから話の順序が學校へ奉職つた時分のことに丁度なつて參ります。今日はそのはなしを致しませう。……ところが隨分迂濶なことでありますが、私は自分の拜命する學校を知らなかつたといふやうなわけであつた。

明治二十二年の二月十一日は憲法發布式の當日でありましたので、東京市中は一般のお祝で大した賑ひでありました。市中はいろ〳〵な催しもの、行列などがあり、諸學校でも教員が生徒を伴れて宮城外の指定の場所へ參列でもするのか、畏きあたりのお通りを拜するのであるか、兎に角大した賑ひであるといふ評判。私はさういふものを見物に出掛けもしなかつたが、家内には子供を伴れさせて見物に出しました。(光太郎が丁度六七歲の時と思ひます。母につれられて行きました。)廣小路でいろいろな催物行列などを見てから間もなく歸つて參つた家内のはなしに、「上野の方は大層な人出で、いろ〳〵な催しがありましたが、その中に、何時か家へお出でになつた竹内さんが行列の中に這入つてお出でした。その行列は朝鮮人か支那人かといふやうな風をして頭に冠をかぶり、金襴の旗を立てゝ大勢が續つて行きましたが、此の行列が一番變つてゐました。」

といふこと。私はその話を聞いて、あの竹内さんは數寄者で變つたことが好きだから、町内の催しで變つた風をして行列の中に交つたのであらう。元祿風俗を研究したりしてゐなすつたから、屹度其時代の故實を引張り出して面白い打扮をやつたのであらう。など私は話したことでありました。

其日憲法發布の式場へ參列のため大禮服をつけて官舍を出るところを玄關前で文部大臣の森有禮氏が刺客の爲に刺されたのであつた。お目出度いことのあつた後の不祥事で人々は驚いてゐました。

それから、ずつと後になつて、私が美術學校へ奉職するやうになり、憲法發布式の當日に家内が上野で竹内先生が不思議な風をして行列の中に交つてゐたと云ふ話しの譯が分りました。それは竹内先生は其時美術學校の教官であつたので、學校の正服を着けて、學生を率ひて式場附近へ參列する途中であつたといふことが分つたのでした。私は實は早合點をして竹内さんの好みで古代の服裝でも眞似て町内の行列へ這入つたのだと

思つたことで、竹内さんが學校の教師になつてゐられることなどは少しも知りませんのでした。

憲法發布式のあつたは二月のこと、三月にはいつて間もなく、或日竹内久一氏が私宅を訪問されました。

「高村さん、今日は私は個人の用向きで來たのではありません。今日は岡倉覺三氏の使者で來たのです。」

といふ前置きで、その用件を話されるのを聞くと、私に美術學校へはいつて働いて貰ひたいといふ岡倉氏の意を受けてお願ひに來たのだといふことであつた。私は寢耳に水で、竹内さんの云つてることが一寸要領を得ないので、

「一體、今、お話しの美術學校といふのは何んですか。またその學校は何處です。」

と聞くと、竹内さんも一寸意外な顔をしてゐましたが、

「美術學校は上野にあります。現に私はその美術學校の教師を勤めてゐるのです。濱尾新氏が校長で、岡倉さんは幹事です。此の美術學校といふのは日本畫と彫刻とで立つてゐるので、岡倉さんがあなたに來て貰ひたいといふ主意はその木彫の方の教師になつて貰ひたいといふのです。岡倉さんもいろ／＼此事に就いては考へたが、どうも他に適當の人がない。それで是非あなたに這入つて貰つて一つ働いて頂かうといふことになつたのだから、此は一つ否が應でも引受けて頂かねばなりません。」といふ話であつた。

此れで一通り事情は分つたが、さて、私に取つては困つたことであつた。

「さうですか、私は些つともさういふ學校の出來てゐることを知らなかつた。今のお話でよく譯は分りましたが、どうも私はさういふ學校といふやうな所へ出て教師の役をつとめるなど〻いふことは私には不向きだと思ひます。つまり、私はその術に當る人でないと思ひます。家にゐて仕事をして傍ら弟子を教へることなら教へますが、學校といふやうなことになると私には見當が附きません。御承知の通り、私は、さういふ生立でありませんから……なまじつか、柄にないことに手を出して見た處で、自分も困るし、他も迷惑と思ひます。此はお斷りしたいものです。」

とお答へをした。

「君にさういふことを云はれた日には甚だ困る。君はひどく謙遜して、自分は器でないと云はれるが、現に此の私がその美術學校の教師をやつてゐる。あなたも私も生立ちは同じやうなも

のぢやありませんか。」

竹内さんは斯う云つて居られる。

「いや、さうは思ひません。あなたはいろ〳〵古いことなども能く穿鑿して知つてお出でゞ、中々學もある方だから、あなたは適して居ります。自分はさうは思ひません。」

「それは、あなたの勘違ひといふものだが、それを今此處で議論して見たところで初まらない。兎に角、私は岡倉さんの使者でお願ひに來たのですが、君が、承知されないとなると、私も使者に立つた役目が仕終せられないので岡倉さんに對しても面目ないが……それでは、兎に角、右の返辭は君から直接岡倉さんへしてくれることにして下さい。今日一つ岡倉さんの家へ行つて、逢つた上のことにして下さい。」

「では、さうしませう。岡倉さんの家は何處ですか。」

「池の端茅町で、山高さんの手前の所です。馬見場（以前不忍池の周圍が競馬場であつた頃、今の勸業協會の處にあつた建物）から向ふへ廻ると二三軒目で冠木門の家がそれです。承知不承知は兎に角、岡倉さんに逢つてよく同氏の話を聞いて下さい。私は今日は都合があつて、御同席は出來ませんが、萬事よろしく……」

と云つて竹内氏は歸られました。

それから、午後四時頃私は出掛けて行つた。岡倉氏に面會すると、同氏は私の來訪を待つてゐた所だと云つて、今日、竹内氏をもつて御願ひした件は何ういふことになりましたか。といふ。私は竹内氏に答へたことゝ同じ意味のことを答へますと、

「高村さん、それは、あなたは考へ違ひをしてゐられる。學校をさうむづかしく考へることはいりません。あなたは字もやらない、學問もやらないから學校は不適任とお云ひですが、今日、あなたに此の事をお願ひする迄には私の方でも充分あなたのことに就いては認めた上のことですから、さういふことは萬事御心配のないやうに願ひたい。あなたに出來ることをやつて頂かうといふので、あなたの不得手なことをやつて頂かうといふのではありません。多くの生徒に就くことなどが鬱陶しいなら、生徒に接しなくとも好いのです。」といふやうに岡倉氏は說いてゐられる。岡倉氏の說明するところは中々上手いので、私に嫌と云はさないやうに話しを運んでゐられる。氏は更に言葉を繼ぎ、

「それで、あなたがお宅の仕事場でやつてゐられることを學校へ來てやつて下さい。學校を一つの仕事場と思つて每日通つて、お宅の仕事場を學校へ移したといふ風に考へて下すつて好

いので、それであなたの仕事を生徒が見學すれば好いのです。一々生徒に教へる必要はないので、生徒はあなたの仕事の運びを見てゐれば好いわけで、それが取りも直さず、あなたが生徒を教へることになるのです。」

といふ風に話されるので、自分のことを私が云はうと思へば先を越して云つてしまつてどうにも辭退の言葉がないやうな有樣になりました。

「お話はよく分りました。さういふことなら私にも必ずしも出來ないこととは思ひませんが、私には、現在、いろ／＼他から引受けてやつてゐる仕事がありますので、假りに學校の方でお世話になるとしても、二三ケ月後のことでないと困ります。」

斯う云ひますと、岡倉氏はまたすかさず、

「それは何ういふ譯でせう。」

と突込みますから、

「それは、今日迄の仕事を方附けてしまつてから、お世話になるものなら改めてお世話になることに致しませう。」

と答へると、

「いや、それは、まだ、あなたは能く私の申條を會得して下すつて居らん。それでは、學校のことゝ、内のことゝを別にしてゐられることになる。お宅の仕事場でなさることを學校でして下されば結構と申したのは即ち其所で、只、仕事部屋が、お宅から學校へ移つたといふ丈けのことで……さう考へて頂けば現在お引受けになつてゐる仕事を學校の部屋へ持つて來てやつて下されば結構なので、つまり、生徒の學ぶのは、あなたの仕事を實地に見學することが何よりなので、私のあなたに學校へ來て頂かうといふ主意も實に此所にあることです。仕事部屋も早速拵へませう。で、仕事を其方へ持つて來て下さい。また今後とても、他からの依頼は何んなりとお引受け下すつて、それを學校で拵へて下さい。それが却つて結構で、學校の方では至極好都合なのです。現在、學校にも木彫科の方は一切教科書と同樣の木彫の手本がありません。竹内さんともいろ／＼相談をして、何ういふ風にしたらといふことを研究中でありますが、先づ、何より、差し當つてあなたに學校へ來て頂いて、仕事をしてお貰ひすれば、それこそ、それが生きた教科書であるから、此れに越した授業の方法は他にあるまいと、實は竹内氏もあなたを推薦されてゐるわけなので、私達は、あなたにこがれてゐるので、どうか學校の爲に一つ御盡力を願ひたい。」

斯ういふ譯で、一々拔き差しの出來ないやうに岡倉氏は說かれるので、私にも能く了解が出來、中々斷るにも斷ることが出來なくなりました。實際、岡倉氏の云ふ如き方法ならば、私の

立場として見て、さう仕事の上に差し閊へることもないやうに思はれ、惜しむところもなくなつて來ました。

其所で、岡倉氏は、明日からでも學校へ出て貰ひたいと、短兵急なことで、私も兎に角、お受けを致したわけであつた。

それから、酒が出たりしました。岡倉氏は酒は強い方。私も其頃は多少いける方であつた。酒間にいろ〲寛けて話し合ひました。岡倉氏は、話が纏つて悅ばしい。濱尾校長も嘸ぞよろこぶことであらうと云つて滿足の體であつたが、氏は一寸と話頭を更へ「高村さん、いよ〲話が極まつたら、一つ早速實行てお貰ひしたいものがある……」さう云つて女中を呼んで持つて來させたものがあつた。

「それは美術學校の正服です。一つ此を着て下さい。」

と云つて、岡倉氏は自分でその服をひろげ、强ひて私を起たして背後から着せてくれましたが、袖を通すと、どうも妙なもので私は驚きました。私は心の中で、憲法發布式の當日に竹内さんが着て行列の中に混つてゐたといふのは此れだなと思つたことでした。此れは岡倉氏の意匠で學校の正服に採用された闕腋といふものださうで、氏は私に着せてから、

「それを明日から着て學校へ出て下さい。今日も其儘でお宅へ歸つて下さい。」

など云はれるので、私は此れには大に閉口しました。

「いづれ學校へ出るときまりましてから着て行くことにしませう。」

と云つて其場は濟んだが、それから、それを着て出るのが苦勞になりまして、どうしても、それを着ては何んだか身に添はないやうな氣がして、戶外に出られないので、一度着たものをまた脫いで、羽織袴で二三度も出掛けたことがありました。

私は愈々學校へ出ることになりました。

併し、その時はまだ本官ではなかつた。お雇ひといふのであつたが、東京美術學校雇を命ずといふ辭令を受けたのが明治二十二年三月十二日で、月俸三十五圓給すといふことでありました。生れて初めて辭令を手にした私にはよく分らない。學校へ雇はれるのだからお雇ひといふので、皆ながお雇ひなのか、自分丈けが雇ひなのか、そんなことすら一向譯が分らなかつた。學校は二月十一日の憲法發布式當日に開校したので、私が這入る前に加納鐵哉氏が這入つて居られたらしいが、どういふ譯であつたか、氏は暫らくの間で出てしまはれたので、そのあとへ、私を岡倉氏や竹内氏が引張り出したのでありました。

約束通りに私は學校の仕事場へ行つて仕事をすることになつた。それで毎日學校へ行くのに、例の服を着て出なければならないのに、變てこで困りましたが、しまひには馴れて着て出ました。

其頃の美術學校は上野公園の現在の場所とは模様が違つて居つた。其頃、屛風坂を上がつて眞直に行くと動物園の方から來る通りで突當りになる、其處に教育博物館といふのがあつて、僅かな入場料を取つて公衆に見せてゐた。その博物館の後の方に空いた室があつて、それを美術學校で使つてゐたので、學校は博物館に同居してゐたのです。博物館の裏口に美術學校の看板が掛つてゐました。それで、彫刻の教場はどうかといふと、バラック様のもので、まだ一つの教場といふ形を爲して居らなかつた。

教育博物館の方は中々整頓してゐて、植物などはいろ〳〵な珍らしいものが蒐めてあつたが、或方面は草茫々として、樹木が繁り、蚊の多いことは無類で、全く、まだ美術學校も開校草々といふ有様でありましたが、その中段々と生徒も殖えて、學校の範圍が廣くなつたものですから、博物館は引越して全部その跡を學校が貰ふことになり、年と共に旺になつたのであるが、明治四十四年の一月二十五日の零時二十分に出火して大半を燒失してから、更に新築して現在のやうな形になつたのであります。

私の學校へ這入つた時分は、今の樞密院副議長濱尾男爵が校長で、故岡倉覺三先生が幹事、有名なフエノロサ氏が教頭と云ふ格で生徒が凡て〻四十人位であつたと思ひます。科は日本畫と木彫との二科であつた。此れは日本の在來の美術を保存しまた奬勵するといふ趣旨の下に此の學校が出來たもの〻やうに見えました。日本畫も木彫も古來から傳統的に日本の美術として立派に在存して來たものであるから、それを今日に於て、日本國民に普及させ、在來のものを一層發達させやうといふ主意であつたものと見えます。當時は普通科が二年と、專修科が三年、合せて五年で卒業といふのであつた。普通科は繪畫と木彫と兩方をやつた。さうして二年目になつて、生徒は、繪畫なり、木彫なり、自分の志望の科を選んで專修することになつてゐたので、普通科の二年間に生徒は充分自分の適當と思ふ道を撰むことも出來たので、今から思ふと、此の法は大變よかつたやうに思はれます。今日でも、當時、普通科をやつた人達が、よく此の普通科を修めた爲に、繪をやる方の人でも一寸小刀が使へ、木彫をやる人の方でも、繪のことが分るといふわけで、概

當の間が足りるので都合が好いと云つて居りますが、全くさういふ便利があつて、此れは重寶で好いと思ふことであります。

第一期の普通科には、大村西崖、横山大觀、下村觀山、白井雨山、關保之助、岡本勝元、溝口禎次郎、島田佳矣、本多佑輔、高屋徳太郎諸氏でありました。專修科になつて、繪の方と木彫の方とへ此の生徒は別れて行つたのであります。教師には狩野芳崖(芳崖先生は私が這入つた時には、既に故人となつて居りました。氏は、美術學校の前身が小石川の植物園にあつて、まだ美術取調所と云つた時分から這入つてゐられたので、其時代は彼のフェノロサ氏が日本美術を鼓吹された時代であります。)橋本雅邦、川端玉章、狩野友信、結城正明などいふ先生方が繪畫の方を受持たれ、木彫は竹内久一先生、それから私が這入つて其方をやつて居つた。私は二十二年の五月に本官の辭令を貰ひまして教授といふことになり、奏任官五等を拜命して、年俸五百圓を給されました。

奈良見物に行つたことのはなし

三月十二日にお雇を拜命すると、間も無く、岡倉幹事は私に奈良見物をして來てくれといふことでした。岡倉氏といふ人はいろ／＼深く考へてゐた人であつて、私がまだ今日まで奈良を見たことが無いといふことを知つてゐたので、私にその方の見學をさせる爲であつたことゝ思はれます。此れは氏の行屆いた所であります。

私と、結城正明氏とが一緒に行くことになりました。(結城氏といふ人は狩野派の畫家でありました。)兩人共に往復十日間の暇を貰ひまして、旅費は百六十幾圓かを給されました。まだ東海道の汽車が全通しない頃でありましたから、私達は横濱へ出て、船問屋の西村から汽船で神戸へ着き、逆戻りをして奈良へ參り、奈良と京都の二ヶ所に就いて古美術を視察見學したのでありました。私は、生れてから江戸の土地を離れたことがないので、今度斯うして長旅をすることになつたので、いろ／＼旅といふことについてをかしい話もありますが、それは略するとして、兎に角、今度の旅行は、美術學校の教官として實地見學に出向くのでありますから、學校の正服を着けて參らねばならない。これが始末が惡るいので閉口しました。

それから、今日思ひ出しても、當時の物の安かつたことが分りますが、奈良では對山樓と云へば一流の旅館ですが、其所に泊つて一泊の宿料が四十五錢であつた。(夜食と朝食附き)また

京都では麩屋町の俵屋に泊つた。此れは澤文の本家見たいな家で、是も一流の宿屋ですが、その宿料が五拾錢であつた。一寸人力車に乘つても、三錢とか五錢とかいふ位で、十錢といふのは餘程遠道であつた。萬事が斯んな風でありましたから、十日間に百六拾餘圓を使ふのは骨が折れましたが、私は旅費として官から給されたものは全部使つてしまはねばならないものだと思つて氣ぜはしないことであつた。同行の結城氏は物馴れてゐて、斯ういふ時に旅費は殘すものだと話された。

私の今度の奈良京都見物は、生れて初めての事で、かねてから見たい希望もあつたことで、大變爲になり、また熱心に見たことでありました。其後古社寺保存會の用件で、私は幾度奈良京都に出張したか知れませんが、此の初旅の時が一番正直に見て來て居ります。いろ〳〵其時にスケツチなどしたものが今日も殘つて居つて、それを見ると、中々熱心に見たといふことが分りますが、凡て物は一番初手に見たことが一番深く頭に殘つて居るものと思はれます。

當時の古美術に對しての印象などに就いては他日一纒めとして話して置きたいと思ひますが、先づ、在來、人が評判して居つたいろ〳〵なものに就いては私の考へも略ぼ同じことでありますが、奈良では、餘り當時人が彼是云はなかつたあの法隆寺の仁王さんは私は一見して結構だと思ひました。此は和銅年間に出來たもので、立派なものであります。法隆寺の仁王は、あれは化物だなど云つて人がくさしたけれども、私は、さうは思はず感心しました。南大門の仁王は鎌倉時代のもので、此の方が世間の評判が高いが、法隆寺の仁王の方も實に立派であると、歸つて來てから岡倉氏へ報告をしたことであつたが、氏も意を得たやうに云つて居られました。

他のものは大概批評の標準が立つてゐて、特に私が見出す迄もないことで、奈良の新藥師寺の藥師如來など木彫として結構なものゝ中でも特に優れてゐると思つて見たことであつた。僅か十日間の見物でありましたが、彫刻家としての私には得る所が多大でありました。

明治二十七年、第一回の美術學校卒業生は、いづれも今日美術界の重鎭となつて居り、又、二回、三回と續いて優技者の續出した事は美術學校の誇りであると思ひます。

帝室技藝員の事

美術學校の教授を拜命したのが三月十二日、奈良京都への出張が同月十九日。拜命早々僅か四日ばかりで旅に出まして、旅

から歸ると學校の人となり、私の今日までの私生涯が此所で一轉化することになつたのでありますが、それは其れとして、今日は其翌年の明治二十三年の十月十一日に帝室技藝員を拜命した話をしまして、それから楠公の像を製作した話へ移りませう。

此の技藝員を拜命したといふことは、當時の官制にいろ〳〵新らしい制度が出來て、その新らしいことに吾々が打つ附かつたのであつて、新らしい制度がどういふ風に出來たかといふことは一向知りません。私のみならず、他の同時に技藝員を拜命した人々も皆不意であつたのでありました。

十月の十一日に宮内省から御用有之に付き出頭すべしといふ差紙が參りました。自分には何んの御用であるか一向當りが附かないが、わるいことではあるまいと思つて居りました。併し、何んのことか更に分らんのでありました。翌日學校へ出ると、石川光明氏もお差紙が參つたといふことで、

「高村さん、あれは何んでせう。何ういふ御用なのでせう。」といふ話です。私は石川氏に聞いて見やうと思つてゐたところへ、斯う先から云はれたので、矢張り石川さんも何んのことだか知らないと見える。氏は我々よりも先へ世の中へ出て交際の範圍も廣く、世間的智識も廣いのに、今の話で見ると、此の事の當りが附かないものと見えるなと思つてゐると、橋本雅邦先生も食堂へ見えて、

「あなた方のところへもお呼出しがあつたのですか。私の許へもありました。あれはなんでせう。」

と矢張り同じことを云つてゐる。

三人は一緒になつて、さて何んのことだらうなど話し合ひましたが、結局、宮内省で繪畫並に彫刻でもお買上げになるので、我々にその鑑定をしろと仰せ附けられるのであらう。といふやうな推測に一致しまして、とう〳〵「それに違ひありますまい。」と決めてしまひました。

斯ういふわけであつたから、出頭の當日まで實際何んのことであるか、更に容子が分らないのであつた。

さて宮内省へ出頭すると、お呼出しに預つた人々が出頭致して居つた。……併し、それは少數で、橋本雅邦先生より、もつと、ずつと年を老つた狩野永德先生と云ふ老大家。此人は此頃根岸に住つてゐて、八十以上の高齢であつたから、出頭するに不自由であつたか、代理の人が出てゐた。それから、加納夏雄先生、此の方も私などから見れば遙かな年長者。それに石川光明氏。私といふやうな顏觸れであつた。（京都の方で鑄金家の秦

藏六氏も當日お呼出しになる筈であつたのであるが、丁度數日前に物故されて此日出頭が出來なかつたのであるといふことを後に到つて承はりました。其他の方々は一寸忘れました。）私達は宮内省の控室へ集つてゐたのでした。

すると、加納夏雄先生が、

「今日の御呼出しは何んでせうなア。」と私達に聞いてゐられましたが、誰も何んの御用かと云ふことを答へるものもありませんので、一同妙に氣掛りなやうな心持で腰掛けてゐたやうなわけで、其席に臨んでゐても、まだ何んのことか見當が附かなかつたやうなわけであつた。

それに、私としては、それよりも、もう一つ變に思つたことは、今日お呼出しを受けて出頭した人々の顔觸れを見ると、孰れも七十以上の高齢者であつて、若い方でも六十以下の人はない。それにも拘らず、石川氏と自分とはまだ四十歳其所々々といふ若い者……今日ではもはや私もおぢいさんでありますが……此の兩人の若い者が、此等の老大家の中へ這入つて居るといふことは何ういふ譯だらう。妙なことだと思ひました。

彼是する中に一人一人宛呼び出されました。一番初めには狩野老人の代理。次が確か橋本先生。それから夏雄先生といふやうな順序であつたと思ふ。……一同が元の席に就くと、皆が帝室技藝員といふものを拜命した辭令を持つて居りました。さうして手當として年金百圓を給すといふもう一枚の書附と二枚……此れで一同は帝室技藝員といふ役を拜命したのだといふことは分りましたが、さて、その役目がどんなことをするのか、誰にも分りませんので、誰云ひ出すとなく評定が初まりました。

「一體、此の帝室技藝員といふのは何んでせう。月に一度とか二度とか宮内省の方へ勤めるのでせうか。何も勤めをせずにお手當を頂くといふことはないでせう。」

「無論、さうでせうとも、何か御役目があるのでせう。」

など誰も云ひましたが、さて何をするのか、とう／＼分らず仕舞ひで一同引取つて來たやうな次第であつた。

それから、段々、宮内省の方へ關係のある人達――例へば博物館長の九鬼隆一氏。佐野常民氏。學校の方では岡倉先生――さういふ方達に右の帝室技藝員といふ役目に就いて譯を聞きますと、「それは別段勤めるといふことはない。此の帝室技藝員と申すは、さういふ名稱を作つて、美術御奬勵の爲にといふ上の厚いお思召しであるので、年金を給したのは謂はゞ慰勞金と云つたやうなもので、多年我邦の美術界の爲に盡した功勞をお賞めになつたお思召であらうと推察される。さういふ御主意であ

らうと思ふからして別段何んの役目をするといふことは無いのである。併しまた追々何か御用もあるかも知れないが、今日の處では此といふ御用は無いやうである。其所で實は我々の考へであるが、御參考までに申述べて置くが、この帝室技藝員といふものは、日本に於ては、美術家としては洵に尊い名義を下し置かれたもので、既に此の名稱丈けを得られた丈けでも光榮至極の義であるが、其上に尚此御手當として年金を給されたといふことは、聖上の思召し洵に何んとも有難い次第である。それで此の高大な優渥な思召に對しては充分に技藝員たるものは氣を附けねばならぬことゝ思ふ。卽ち美術及美術工藝のことには一層忠實でなくてはならないこと、同時にまた後進子弟に對しては親切懇篤の心をもつて指導することは申す迄もなし、既に帝室技藝員といふ名稱の下に身を置くものは一層身の行ひを正し、誠實を旨として、各自に、行ひのみだらでないやう、此名稱に耻ぢないやう、天恩の有難いことを思ふて身を愼み行を勵まなくてはならない……」といふ意味のことを話されたのでありました。私達技藝員は洵に御尤のことであると存じたわけであつた。

此の帝室技藝員のことは此れでおしまひでありますが、それにつけて、當時、私と石川光明氏とは互に申合はしたことには、實に今度の事は不思議なことであつた。他の老功の諸先生方が此の恩典に預つたことは有り得べきことゝ思はれるが、吾々はまだ老人と云ふわけでもなく、また、今日まで多少美術のことに力を盡して來たとはいふものゝ、まだ歲月も淺し、經驗も淺く、功績といふ程のことを殘したと思ふほどのこともない。それにも拘らず、他の老功の人々と同じやうに、吾々兩人が特に此の恩典に浴したことは、實に有難いことで、此を思ふても、今後は更に一層勉强しなければならないと話し合つたことでありました。

そして、また我一己として考へて見ますに、私は難儀な世の中に生れ、彫刻などいふことは地に墜ちて殆んど社會から見返られなかつたにも拘らず、今日、ゆくりなくも斯うした光榮を得たことを思ふと、自分の過去が不幸であつたに反して甚だ幸運であると存じました。此れといふのも、當時、年の若いものの中には、石川光明氏とか自分とかをおいては他に相當の人物が見當らなかつた爲に此の人數の中へ加へられたのであらうが、今日にして此の事のあるといふことは全く時の力であつて、洵に不思議とも思はれ、何んと申して好いか、過去のことを振り返ると、感慨無量とも申すべき心持でありました。それで、

今日でも思ふことでありますが、人間の事は洵に測り知り難く、不仕合せな時もあり、また時が過ればその不仕合はせが却つて幸福ともなる。まことに妙なものであると思ふことであります。

それから、今日に於ても別に何んのお役に立つたこともありませんが、今日も引續き帝室技藝員として恩典にあづかつて居るのでありますが、心ばかりは、何かと斯道の爲に盡したいものであると思ひ居る次第であります。序ながら今日の帝室技藝員で在京の人々の顔觸れを云つて置きませう。明治二十三年に初めて此の名稱が出來て以來、缺員があると入り代り立ち代りいろ〳〵の人が撰拔されまして、今日では確か十五名あると思ひます。東京に十名。京都に五名と思ひますが、東京の十名は、日本畫では、河合玉堂、小堀鞆音、下村觀山、西洋畫では黑田淸輝、彫刻では私と新海竹太郎、刄劍では宮本包則、蒔繪では白山松哉、寫眞では小川一眞、建築では佐々木岩次郎の諸氏であります。

それから明治二十二年十二月に第三回內國勸業博覽會の審査員を命ぜられました、此も序ながら申添置きます。

楠公銅像の事

宮城前なる馬場先門の楠公銅像に就いてお話をしませう。

此の銅像のことに就いては世間でまち〳〵の噂があります。此の楠公像は高村光雲が作つたのだと云ひ、また岡崎雪聲氏が作つたのだとも專ら云はれゐる。時が過ぎ去りますと、いろ〳〵斯ういふことには間違ひが出て分らなくなりますから、今日は詳しく此事に就いて云ひ置かうと思ひます。

大阪の住友家の依賴で、明治二十三年四月に楠公像の製作は美術學校が引受けてやり出したのであります。さうして右製作の主任は私でありました。

此は住友家の所有である別子銅山の二百年祭の祝賀の爲に、別子銅山より採掘したところの銅を用ひて何か紀念品を製作し、それを宮內省へ献納したいといふところから初まつたのでありました、そして右製作のことを美術學校に持ち込んで來たのであつた。

それで、何ういふものを製作するかといふことに就いては私は與り知りませんでしたが、いろ〳〵撰定の結果楠公の像を作るといふことに決定しました、楠氏は申す迄もなく我邦有史以

來の忠臣……宮内省へ獻納する製作の主題としては洵に當を得たものでありませう。所で忠臣楠氏の銅像といふことに決つたが、何ういふ形にして好いか、只、立つてゐるとか、坐つてゐるとかでは見たてがないので、楠公馬上の圖といふことに決りました。それで、此の馬上の圖をば、一個人の考案でなく、學校内の教員生徒を通じて廣く人々の圖案を募集することになりましたので、其募りに應じた圖案が餘り澤山ではなかつたが可なり集まりました。其中で當選したのが岡倉秋水氏の圖案であつた。(秋水氏は第一期優等の卒業生)先づ此の當選の圖案を基として楠公像を作るといふことになつたのでありますが、右圖案は、楠公馬上の側面圖でありますから、此れが全身丸で彫刻製作されるとなると、原圖案とはまた異つたものとなることであるが、概ね此の原圖によつたものでありました。

それで、其圖案を參酌して製作に掛つた楠公像の形は一體何ういふ形であるかと云ひますと、元弘三年四月、足利尊氏が赤松の兵を合せて大に六波羅を破つたので、後醍醐天皇は隱岐國から山陽道に出でたまひ、斯くて兵庫へ還御ならせられました。其砌、楠公は金剛山の重圍を破つて出で、天皇を兵庫の御道筋まで御迎へ申し上げた其時の有樣を形にしたもので、畏れ多くも鳳輦の方に向ひ、右手の手綱を叩へて、勢切つた駒の足搔を留めつゝ、稍々頭を下げて拜せんとするところで御座います。此時こそ、楠公一代に於て最も重き使命を負ひ、且また、最も快心の時であり、奉公至誠の志天を貫くばかりの意氣でありましたから、此の圖を採つたわけでありますが、此等の事は岡倉校長初め、諸先生の只管頭を悩まされた結果でありました。

さて、愈々彫刻に取掛るといふ迄には、中々時日を要し、また多人數の考案を經て來たものであつて、決して一人や二人の考から決つたものでは無いのであります。即ち大勢の先生方がそれ〴〵受持を分けて研究調査されたのであつた。

先づ歷史家として有名な黑川眞頼先生が楠正成といふ歷史上の人物に就いて考證された。(今泉雄作先生も加はつて居ました。)それから服裝のことは歷史畫家で故實に詳しい川崎千虎先生が調べました。先生は此の調査の爲にわざ〴〵河內國へ出張し、觀心寺及び信貴山、金剛寺其他楠公に關係ある所へ行つて甲冑を調べたのです。また加納夏雄先生と今村長賀先生とは太刀のことを調べました。

河崎千虎先生は河內へ行つていろ〴〵と楠公の遺物に就いて調べましたが、その結果はどうもハッキリ分らないといふことであつた。何故、楠公の遺品などが世に存在してゐないかと申

すと、楠氏滅亡の後は子孫に至る迄世を憚る場合が多かつたので、楠氏傳來の品などは隱蔽したといふやうな譯で、それではつきり分らないといふことでありました。併し兜は信貴山の寶物になつてゐる兜が何うしても楠公の兜と定めて置かなければ、それ以上其他に頼るものがないといふので、それを基として採つたのであります。けれども此の兜には前立がないのです。柄が殘つてゐるので、前立は何んであるかと詮索をして見ると、これは獨鈷であるといふことです。が、よく調べると、獨鈷では無くて、劍の柄であらうといふ河崎先生の鑑定でありました。それから、また一方に同氏の調べた中に大塔宮護良親王の兜の前立が楠公の兜の前立と同様なものであらうといふ考證が付いたのです。丁度時代も同時、親王と楠公との緣故も深し、前立のない處に柄が殘つて居る所を見ると、劍の柄と相當するから、楠公の前立は劍であらう、といふことに極りました。

それから、鎧ですが、此は漠として殆んど據所がありません。大和河内地方へ行けば、何處にも楠公の遺物と稱するものはいくらもあるけれども、一つも確證のあるものはない。皆後世人の附會したものばかりです。それで常明山といふ所に楠公の腹卷といふものが一つあつたさうで、これは正しく當時のものであるし、何に様、楠公の遺物ではないかと河崎氏は更に調査を進めまして、皮を剝がして見ると、中から正平六年六月といふ年號が出て來ました。さうして見ると、楠公が沒した後の製作だといふことが分つたので、河崎氏も失望したと同氏が當時私に話されたことを記憶して居ますが、萬事、斯ういふやうな譯で、是は正しく楠公着用の鎧だと決定するに足る鎧は遂に見つかりませんのでした。併し先づ此の腹卷は近いものに相違なからうと其所等を參酌したのでありますが、併しまた馬上であつて腹卷はをかしいといふ説を出す人もあつて、それもまた道理といふことで、結局、鎧は大袖といふことに決定しましたのですから、實際は、此に據るといふよりどころはなかつたのであります。此は參考とすべきものがなかつたから致方ありません。但、楠公沒後のものは仕様がないが、それ以前、鎌倉時代より元弘年間に亘つたものなら參考にして差支へなからうといふので、楠公の服装は其邊のものを材料にして決めたやうなことでありました。馬具なども同様で、厚總を掛けた方が好からうといふ説を出した人がありましたけれども、どうも戰亂の世の中に厚總も感心しないだらうといふので、此説は取りませんでした。河崎千虎先生が中心になつて、此の邊のことは實に熱心に研究されたのでありました。

太刀は、加納、今村兩先生の調べで割合正確なものになり、客

したけれども、それも楠公佩用の太刀が分つたのではありませんでした。太刀物の具がはつきりしない許りでなく、第一、楠正成といふ人は大兵であつたか、小兵だつたか、それすら分りません。少くも記錄に據所がなく、顏などは面長であつたか、丸顏か、また肥えてゐたか、痩せてゐたか、さういふことが一切分らんのでした。併し、楠公は古今の武將の中でも智略に勝れてゐた人であつたことは爭はれぬ歷史上の事實でありますから、智の方面に傑出した相貌の顏に作りました。總じて智謀勝れたる軍略家は神經の働きの強く銳どい人で無くては出來ないことで、多くさういふ側の人は肥え太つてゐるといふよりも、痩ぎすの人が多いものですから、何方かと云へば痩せ方の顏で、先づ中肉……隨つて身長なども中背……身體全身能く緊張した體格に致したことで、大體に於て楠公は智者の心持を現はすやう心掛けたのでありました。

それから、またもう一つ問題となるのは楠公乘用の馬であります。楠公は何ういふ馬に乘つてゐたか、その馬が分らぬ。木曾駒か、奥州駒か、或は九州の產のものか、どうも見當が附かない。其所で主馬寮の藤波先生、馬術家の山嶋氏などのお說を聞くと、其頃の乘馬として各產地の長所を取つて造つたら何うかといふ說、此も調べる丈け調べた上句、此の說を採ることにしました。兎に角、楠公の姿勢、服裝、乘馬等が斯の如く忠實な研究によつて決つたのであつた。

馬專門の彫刻家のこと

其所で、彫刻製作となるのですが、岡倉校長は、主任は高村光雲に命ずと、いふことであり、それから山田鬼齋先生を擔任とすることになつた。すると、此所で一つ主任としての私に問題が起つて來たのであります。

それは、何かと申すと、楠公は馬上であるが、馬の產地も分らぬといふこと……出來上る大きさはといふと、馬上で惣丈三尺、楠公丈で立つて九尺、馬の鼻から尾の先までが一丈八尺といふ此の大きな馬を先づ自分が手掛けてやるとして何うであるか、此れは中々容易なことではないと申さねばならぬ……其所で當然思ひ出すのは後藤貞行氏のことです（後藤氏のことは前に狆の話のところで一寸話して置きました。）後藤氏は、馬の後藤といふ位馬專門の人である。それ故、愈々手を附けるとなれば、是非とも後藤氏に相談して其助力を借りなければならない。「私は今楠公の馬をやり初めた。どうか御助力をたのみます。」と云へば氏は喜んで相談に乘つてくれませう。また頼みます

とも、先方から話を聞けば乘り出して來ても手傳ひませう。若しさうなるとすると、私は、自分で不安心なものを、人に手傳はせ、その助力を借りて製作するといふことになる。さうして、それが假りに上手に出來たとして手柄は誰のものになるかといふことを考へると、後藤氏の骨折りは全く陰のものになつてしまふ。どうで、後藤氏の骨折りを借りなければならぬものとすれば、私の考として、どうも後藤氏の骨折りを殺すといふことは情に於て忍び得られぬところである……と斯う私は考へたのであつた。

で、此れは後藤氏をハッキリと公のものにして表面へ立たせたいといふ考が私の肚に決つたのでありました。此れは當人の後藤氏の思惑は分らないが、私の良心としては斯う切に思はれる。此の事が單に私用的の仕事で、馬を彫るといふことならば兎に角、宮内省献納品で、主題は楠公、馬の大きさは前申した通りの大作、此れ程のものを作るのであるから、私は、日頃から後藤氏の口癖にも云つてる言葉を思ひ出してさへも、此れは打つ棄つて置くべきことでないと思つたのであります。氏は「自分は、多少の餘財を作つて等身大の馬を製へて、招魂社にでも納めたい。」といふのが平素の願望で、一生に一度は等身大以上の大作をやりたいといふ希望は氏が常に私に話されてゐたのであります。斯う云ふ志を持つて居る人を陰に使つて、其出來榮がよかつたとして、後藤氏の立場は何うなるか……斯う思ふと、もう私は矢も楯もたまらなくなつて、此事は是非とも解決しなければならないと心を決し、其晩、急に岡倉覺三先生方へ出掛けて行つたのでありました。

其頃の岡倉先生宅は根岸であつた。夜分の來訪、何事かと岡倉さんは思つてお出でのやうな面持で私を迎へました。

「今夜は一つお願ひがあつて參りました。」

さういふ私の意氣組が平生と違つてゐたと見え、

「さうですか。何かむづかしいことですか。」と氏はほゝ笑んでゐられた。

「實は、楠公像製作の件で是非御願ひのことがあつて出ました。此は充分聽いて頂きたい……私は今度、主任の役をお受けしたのでありますが、馬上の楠公といふので、差し當つて馬の製作に取り掛らねばなりません。就いては、馬のことは、私は專門的に深く研究して居りません。普通の仕事であれば、また製作の仕樣もありますが、御承知の通り今度の馬は容易でありません。私一個の腕として此の大物を立派にやり上げるといふことはお恥しいが不安心であります……と云つて私の片腕とな

つて立派に此の馬をやりこなせる人物は差當り學校には見當りません……」

「成程、御もつともな話で……それは困りましたね。此は容易なことではありますまい。」

「……學校には、馬の專門知識をもつた人は見當りませんが、此所に私の親友に後藤貞行といふ人があります。此の人は馬專門の彫刻家であります。……」

といふところから、私は、後藤貞行氏の人爲と馬に就いて研究苦心された概畧を岡倉校長へ紹介しました。

後藤貞行氏は、元は和歌山縣の士族で、軍馬局へ勤めてゐる。馬の調査の爲奥州地方へ長らく出張して軍馬の種馬に就いて研究し、馬のことゝ云へば其熱心は驚くばかりで、目をねむつてゐて只觸つた丈けでも馬の良否が分るといふ程に馬のことには詳しい。さういふ馬熱心の爲に馬の繪を描きたいと思ひ立つて日本畫の稽古をしたが、どうも日本畫では思ふやうに行かない處から、油畫の稽古を初めました。此れは日本畫では肉の高低、蔭日向などが思ふやうに行かないので、更に洋畫をやり出したのですが、洋畫でも繪は平面のもので、そつくり丸寫しに實物を寫すには工合が惡るいので、今度は彫刻をやり出しました。此は彫刻なら立體的に物の形が現はれて都合が好いと考へたからであります。それで、牛込邊の鑄物師の工場で、蠟作りを習つて、蠟を捻つて馬をこしらへました。

まだ、未熟ではあるが、馬には通曉した人ですから、急所々々の間違ひはないものを作つた。後藤氏は彫刻といふことよりも、馬其物を作るのが本意で、馬の標本になるやうなものを作らうといふのが、目的で、自分の考へ通り一匹の馬を作り上げ、それを鑄物にして貰ふ段になつたのですが、不幸にしてふき損なつて蠟を流してしまつたので、折角苦心してこしらへた馬の形は跡形もなくなつてしまつた。此れには後藤氏も實に驚いた。斯んな迂遠なことでは便にならん、どうしても、木で彫るより仕方がないといふので、東京中の佛師屋を歩き廻つて木彫の稽古をつけてくれる師匠を探して見たが、何處でも「あなたのやうな年輩の方が今から彫刻を初めると云つてもそれは大變、子供の時から年季を入れて稽古をしても、先づ物になるは十年も掛かる……どうも此れは思ひ切りなすつたがよからう。」などゝ相手になつてくれませんので、後藤氏も大に弱つたが不圖私のことを思ひ出した。

といふのは、私が大嶋如雲氏の宅に原型の手傳ひをしてゐた時代（この事は前に話しました。）此の後藤氏が如雲氏の工場へ

見學に來られて、私が其所で木彫をやつてゐるのを見て、自分にも心があるから、つい、私と近づきになつてゐた。其事を思ひ出したので、西町に住つてゐる私をわざ／＼尋ねて來られた次第であつた。

或日、私が仕事をしてゐると、がちや／＼サアベルの音をさせて人が這入つて來たから私は戸籍調べが來たのかと思つて見ると、其人は顏馴染のある後藤貞行さんであつた。

「突然にやつて來ましたわけは、今日は立ち入つて御願ひしたいことがありますので。」との話。理由を聞くと、木彫の手ほどきをして頂きたいとの事で、今日までいろ／＼馬のことに苦心し、馬の姿を造形的に現はしたいので、日本畫、洋畫、蠟作りまで試みたが、どれも物にならぬので、人からは移り氣だの飽ッぽいのといろ／＼非難されますが、それは自分の目的を突留める所へ參らんので、段々に變更して來たわけでありますが、今度こそ木彫ならば自分の初念がこれで達せられることが分つたので、木彫をやりたいと切望していろ／＼師匠を求めたけれども、相手になつて呉れる人が無く、困じ果てた結果、あなたのことを思ひ出して、今日參上したわけで、どうか一つ折入つての御ひですが、彫刻を教へて下い。しかし、私のやうな年輩でも一生懸命になれば物の形が彫れるものでありませうか、或はまた到底手をつけることも出來ないものでありませうか。……と後藤氏は心の誠を籠めてのお話。その話を聞いてゐる私はお氣の毒とも感心とも思ひ、

「それは後藤さん、餘人なら知らぬこと、あなたには出來ますよ。あなたは馬丈け彫らうといふのですから。此れは出來ます。あなたには馬が頭にある。木を彫ることさへ出來れば自然馬は彫れるわけです。お望み通り教へて上げませう。」

斯う云ひますと、後藤氏は大喜び。翌日から辨當持ちで通つて來られたので、私は木取を教へて上げた。

暫らく稽古をしてゐる中に、後藤さんの馬が出來ました。これは規則的の、馬としては非難のない馬が出來た。後藤氏は、お蔭で馬が出來ましたと云つて、さも滿足さうに禮を云はれ、それから一層氣乘りがして來て勉强されて、いろ／＼馬を彫られた處、その事が軍馬局に分り、主馬寮に分り、宮内省に分りして、後藤は馬を彫ることは上手だといふ評判が立つて、後には馬專門の彫刻家となりましたので、今上天皇が未だ御六歲の時、東宮樣と仰せられる頃御乘用の木馬迄も此の人が作られたといふやうな次第でありました。

併し、まだ此れといふ大作はしない。それで、一生の仕事と

して、等身大の馬を製作し、招魂社にでも納めたいといふのが日頃の願望……此れ程、馬といふことには熱心な人であつたのであります。

斯ういふ一條の逸話を、私は岡倉校長へ後藤氏の名を紹介する爲にお話したのであつた。其所でまた言葉を改め、

「後藤貞行といふ人は右の如き人物。此度私が楠公の馬を彫刻するとなれば、從前の關係上、必ず、助力をして吳れることでありますが、併し、その助力を蔭のものにして、私が表面に立つて、美事に馬が出來たとして、後藤氏の力がそれに多分に加はつて居るにも拘らず、後藤氏は全く緣の下の力持になつてしまふわけであります。其事を私は考へますと、どうしても後藤氏の手柄を殺すことは忍び兼ねますので、どうか後藤氏を公に使ふやうなことに、貴下の御幹旋を願ひます。此は私の折入つての御願ひであります……」

といふ意味を私は岡倉先生へ申述べました。

「如何にも御尤です。」

と岡倉さんは云はれ、

「では、早速、その後藤といふ人を傭ひませう。」と快よく承諾されたのでありました。私は此の言葉を聞いた時は、まことに踊々する程嬉しく思ひました。

岡倉覺三先生といふ方は、實に物解りの好い方であつて、斯ういふ場合、物事の是非の判斷が迅く、そして心持ちよく人の言葉を容れられる所は大人の風がありました。なほ、岡倉先生は後藤氏への給料のことなど尋ねられたので、目下、軍馬局で、三拾圓程取つてお出でだから、三拾五圓位も出せば如何でせうと云ひますと、それ位のことなら必ず都合が附きます。早速雇ひませう。と、案じたよりは容易に話が決まりましたので、私は早速此の旨を後藤氏へ通じると、後藤さんは飛びかへる程嬉しがりました。

其所で、後藤氏は馬の方の擔任といふことで雇れて、私が主任でやることになつて、後藤氏は毎日學校へ通つて來ました。

所が、先申す通り、楠公の馬の出所が分りません。木付、奥州、薩摩などは日本の名馬の産地であるが何處の産地の馬とも分らんので、日本の馬の長所々々を取つてやらうといふことに一決しました。

併し、馬ばかりでなく、楠公といふ本尊があることで、前申す通り大勢が關係をしてゐる。彫刻になつてからは石川光明氏も手傳はれる。新海竹太郎氏は當時後藤氏の宅に寓してゐたの

で、後藤さんが作れて來る。私の方からも弟子達を引張つて行くといふ風で、中々大仕事であつた。

其頃は、まだ、美術學校には塑像はありません時代で、原型は木彫です。山田鬼齋氏は楠公の胴を彫りました。(山田氏は福井縣の人でまだ年は若かつたが、中々腕が勝れ、仕事の激しい人でありました。明治二十三年の博覽會に大塔宮を作つて出品し好評であつた。惜哉故人となられました。)それから私は顏を彫りました。後藤氏は馬をやりました。私は楠公の顏をやつて甲を冠せた。石川さんも手傳ひました。竹内久一先生は何うであつたか、少しは手傳はれたかも知れません。兎に角、學校總出でやつた仕事で、主任は私、擔任が鬼齋氏及び後藤氏で、それから、鑄物の主任が岡崎雪聲氏でありますが、岡崎氏は原型には關係がありません。鑄造丈けです。

以上が、楠公製作に就いての事實であります。

木彫の楠公を　天覽に供へたはなし

原型の楠公像は凡て檜材を用ひ、原型全部出來ましたので、明治二十六年三月十六日に學校庭内に組み立て、時の文部大臣並に學校に關係ある諸氏の一覽に供したのであるが、住友家から學校へ製作を依囑したのが明治二十三年。着手したのが翌年の四月ですから、木彫原型が全部出來上つた二十六年の三月迄には約四ヶ年間を要したのであります。大勢の人と長い時日を要した丈けあつて原型は中々大きなものでありました。今日では帝國美術院の展覽會でも、また個人の製作にしても、隨分大作が出來るけれども、まだ明治二十五六年頃には此の楠公像の木彫のやうな大作は稀であつたから世間で珍らしく評判をしたものらしい。美術學校は前申した通り我邦固有の美術工藝を保存し、また奬勵する主旨によつて開かれたものでありますから、さうした思召が一入お深いと洩れ承はります　先帝（明治天皇の御事）には、時々侍從をお使として學校へお遣はしになつて、生徒の作品のやうなものをもお持歸りで、お慰みに御覽に入れたこともありまして、何かと宮内省とは緣故がありましたから、今度の楠公の馬に就いては主馬寮の藤波樣にも種々お尋ねした關係もあり、木型の出來上つたことも、侍從局から叡聞に達したのでありませう。

それで、右の木彫を宮城へ持つて來て御覽に供せよとの御沙汰が岡倉校長に降つたのでありました。其事に就いて、三月十七日、齋藤侍從が學校へお出でになつて校長と打合せの上、上覽に供へる時日は來る廿一日午前十時と定められました。

學校は名誉なことにて早速お受けを致して、關係者一同協議をしましたが、何しろ可也大作であるから、御指定の場所にそれを運搬して組立てる迄の手順、何時間手間が掛るか、途中故障などが生ずるやうなことはないか、其邊のことを充分研究する必要がありますので、先づその練習をすることゝになりました。行り方は、三本の丸太をもつて足場の替りにして、滑車で引揚げると、旨く組み立てが出來ました。此の練習をやつて先づ一時間あれば組立が出來るといふことが分りました。

それで、岡倉校長、私などが宮城へ場所撰定に參りまして、掛りの人と相談を致しましたが、位置は、陛下が御玄關へ出御あつて御覽の出來る所、即ち正門内より外あるまいといふことになつた。其地位は、二重橋を這入つた正面の御玄關。東だまりの御玄關からぐるりと廻つて南面したところの御玄關先といふことに決まりました。

明治二十六年三月二十一日が其當日でありました。

東の空が白む頃關係者は學校へ出揃ひ、木型を車に積んで運び出しましたが、上野から宮城迄に彼是二時間位掛り、御門を這入つて、それから三本の足場を立て、滑車で木寄せの各部分を引揚げては組合はせるのに、熟練はしてゐても一時間半位を費し、都合四時間程の時間が掛りました。中々大騒ぎで、大八車が三臺、細引だの滑車だの手落ちのないやう萬事氣を附け、岡倉校長を先導に、主任の私、山田、後藤、石川、竹内、其他の助手、人足など大勢が繰込みましたことで、仕事は滯り無く豫定の時刻の九時頃に終りました。御玄關に向つた正面へ飾り附け、足場を拂つて綺麗に掃除を致し、幔幕を張つて背景を作ると、御玄關先は西から南を向いて石垣になつてゐて餘り廣くはありませんから、其所へ楠公馬上の像が立つと中々大きなものでありました。

それに材は檜で、只今、出來た計りのことで、木地が白く旭日に輝き、美事でありました。

是で好いとなりましたのが午前十一時。

聖上には正十二時御出御といふ觸れ。一同謹んで整列をして差控へて居りますと、やがて、フロックコオトの御姿で侍從長徳大寺公をお伴れになつてお出ましで御座いました。

陛下には靴をお召しで、階段の上にお立ちになつてお出で御座いましたが、軈て、階段をば一段二段とお下りになつて玄關先に御步を止め御覽になつてお出でゝ御座いました。岡倉美術學校々長は徳大寺侍從長のお取次ぎで御説明を申上げて居りま

した。すると、
聖上には、何時か、御玄關先から地上へお降り遊ばされ、楠公像の正面にお立ちであつたが、また、馬の周圍を御廻りになつて、仔細に御覽になつてお出でゞ御座いました。
そして、陛下には、いろ〳〵此の彫刻の急所々々を御下問になるので、岡倉校長は、一々お答へを申上げたが、實に御下問の條々が理に叶つて尋常のお尋ねではないので、岡倉校長は恐懼致されたと、後に承はつたことで御座いました。私達も馬の直ぐ近くに整列致して居りますので、お尋ねの御言葉は能く聞き取れました。此の楠公馬上の像は楠公がどうして居る所の圖かとのお尋ねがあつた時、岡倉校長は、是は楠公の生涯に於て最も時を得ました折のことにて、金剛山の重圍を破つて兵庫に出で、隱岐より還御あらせられたる　天皇を御道筋にて御迎へ申し上げて居る所で御座いますと奉答をされたやうに承はりました。尚、聖上には、此の像は、木の材を纏めて製作したものか、學校の教員達が力を協せて作つたものか、などいろ〳〵立ち入つて御下問があつたとの事で、御答を申すにも、實にゆるかせでなく恐れ入つたといふことを是又校長から後に承はりました。
聖上御覽の間は、私は責任が重いものでありすから非常に心配をしました。御覽濟みとなつて御入御になつた時はほつとしました。今日でも骨身に滲みるやうに其時心配をした事を記憶して居りますが、實は、聖上御覽の間に、楠公の甲の鍬形と鍬形との間にある前立ての劍が、風の爲に搖れて、ゆら〳〵と動いてゐるのには實に胸がどき〳〵致しました。此は組立ての時に、何うしたことか、楔をはめることを忘れたので、根が締まつてゐないので風で動いたので、楔一本の爲、どれ位心配をしたことか。若し劍が風の爲に飛んだりなどしては大變な不調法となることであつたが、落度も無くて胸を撫で卸ろした次第でありました。
陛下御覽濟みになりますと、引續いて、午後一時に皇后陛下が御出御で、是も中々御念入りで三十分程も御覽で御座いましたが、此時も落度なく役目を終つたことで御座いました。元通り取崩して丁度午後二時半頃一同は引退りました。宮中にて一同午餐を頂戴しまして、目出度く學校へ歸つたのが午後四時頃でありました。
當日は洵に萬事が滯り無く都合よく運んだのは私共の幸運で御座いましたが、斯んな大事な場合は、能く〳〵落附いて考へなければならないことは、今も申したやうな一寸した手拔りがあつて、生命を縮めるやうな心配を致さねばなりませんから、

心すべきことであると存じます。

其他のことなど

さて、楠公像は、此の原型を同じ美術學校の鑄金科教授岡崎雪聲氏が鑄造致して住友家へ引渡したことでありました。木型は其後大阪の博覽場といふのに飾つてありましたが、今日は何處にあることか。確か、白い木地は銅色に色をつけてあつたと記憶します。

また其後に至つて、右の木型の形を縮めて、床置位な少さい鑄物が四つか五つ出來ました。（住友家の依賴であつた。）是は山田鬼齋氏が大作に依つて小型を彫りましたのです。その小型が今日美術學校の文庫に保存されてあります。此を元の原型と間違へてゐる人もあるから、此も序に間違はないやうに斷つて置きます。事實を確かにして置きませんと、現にまだその製作主任をした私が生きてゐる間に、早くも其作者の名さへも間違ふやうなわけでありますから、確實なことを記錄に止めて置くは必要の事と思ひます。

楠公像の馬場先門外に建つたのは、ずつと後のことで、其建設の場所なども、最初は學校の方で撰定することになつて居つて、二重橋寄りで、直ぐ門に接した處にしたいといふ考であつたが、それは宮內省の方で、練兵の都合などあつて御許が無く、現在の位置に立つことゝなりましたが、却つて今日では此の方がよろしかつたかと思はれます。

また臺石の方は多分宮內省の方で作つたことゝ思ひます。此の臺石製作の任に當つた人は、研究調査の爲洋行をしたとか聞きました。

何しろ、其當時のことで、銅像は東京市中に珍らしく、九段の大村さんの銅像以來のことで、世の注目を惹きました。

總領の娘を亡くした頃のはなし

學校奉職時代の前に少し遡り、話し殘したことを補充して置きたいと思ひます。

學校へ入りましたのは仲御徒士町一丁目に住つてゐた時のとで、毎日通勤するやうになつてから、住居は成るべく學校へ近い方が便利だと思ひました。それに此の御徒士町附近一帶は軒並み續きで、雜沓するので、年寄りや子供には適した處でない。衛生の方から云つても低地で濕氣が多く、水が非常に惡るいので、とうから引越したいと思つてはゐましたが、さういふ

譯に中々參りませんので、よんどころ無く其儘になつて居りました。然るに今度學校へ出るやうになつて、學校へ近い方が便利といふ必要から、何處か格好な家が無いかと氣を附けるやうになりました。

斯ういふ時には私の父は、前にも申した通り、至つて忠實(まめ)な人であるから、隱居仕事に學校最寄りの方面を方々と探して歩きました。

それでも中々格好な家が見當らないと見えて幾日か過ぎましたが、或日、父は、「今日こそ好い家を見附けた。」と云つて其模樣を話されるところを聞くと、其家は學校へ三丁位、土地が高燥で、至つて閑靜で、第一水が良い。如何にも彫刻家の住居(すまゐ)らしい所といふ、それは何處ですと聞くと。谷中天王寺の手前の谷中谷中町三十七といふ所で、五重塔の方へ行かうとする通りに大きな石屋があるが、その横丁を曲つて、石屋の地尻で、門構への家。玄關を這入ると二疊で、六疊の客間があり、居間が六疊、それに四疊半の小部屋が附いてゐる上に、不思議なことには直ぐ部屋續きに八疊敷位の仕事場とも思はれる部屋がある。その部屋は南向きで日當りがよく、お隣りは實珠院といふお寺の庭に接してゐるから、充分ゆとりもあり、庭はまだお寺の地所十四五坪を取入れて中々廣く、お稻荷さんの祠などあつて中々異(おつ)だといふことです。それで家賃はといふと、四圓……別にお寺へ納める庭の十四五坪の地代が五十錢、都合四圓五十錢、といふことです。老人は大變氣に入つてゐられる。

それで、私も此は好いと思ひ、早速行つて見ますと、成程、此は格好、往來に向いて出格子の窓などがあり、茶屋町の裏町になつた横丁だが四方(あたり)も物靜かで、父の申す如く彫刻家が住むには如何にも誂え向きといふ家ですから早速話を決めました。

其頃のことで、別に敷金を取るでもなく、大屋(おほや)さんへ一寸手(て)土產(みやげ)をする位で何んの面倒もなく引移りました。

さて、段々と住んでゐると、どうも普通の素人の住つた家とは趣が異ふ。行きなり、客間があつたり仕事部屋があつたりする處は妙だと、近所の人に聞いて見ると、此處は牙彫師の鶴澤(つるさわ)柳月(りうげつ)といふ人が住んでゐたのだといふことでした。

此の人は先に彫工會の成立ちの處で話しました谷中派の方の親方株の牙彫師で、弟子の三四人も置いて中々盛んにやつて居た人である。庭のお稻荷さんもその人がこしらへたものといふこと……それで、妙だと思つた仕事場のことなども分りました。

(此家の持主は御徒士町の料理店伊豫紋であつた)家で仕事をす

るにも都合がよく、學校へ通ふには尙更、晝食に一走り家へ歸つたとしても授業時間には間に合ふ位近いので、まことに氣安くて都合がよかつたのでした。老人が、どうして斯んな工合の好い家を見附けたものか、谷中の奥で、而かも通りからは橫へ這入つた人の氣の附きさうもない處を、よく探し出したものと、何時も乍ら老人の眼の屆くのを感心して家のものにも話したことでありました。此の引越しは二十三年であつたと思ひます。

此の谷中時代に總領娘咲子を亡くしました。亡くなつた日は明治二十五年の九月九日でした。まことに殘念で、今日でも此れ計りは何うも致方も無いことではあるが、殘り惜しく思はれます。娘は十六歳でありました。凡て子供は皆同じで、孰れに愛情のかはりは御座いませんけれども、此の總領娘は私が困苦してゐた盛りに手鹽にかけた丈けに、餘計に最愛しまれるやうに思はれます。

斯ういふ苦しい時代であつた爲に藝事も多分に仕込むことも出來ませんでしたが、初めは三味線をやらせました。所が、どうも此れはその娘の器でないかのやうに私には思はれました。家内が長唄を少しやるので、それで、家でも母がチョイ〳〵稽古をつけたりしましたのを私が聞いてゐて、どうもさう感じられました。當人も三味線を取る時はどうも氣が進まないやうにも見えました。それで、手習ひとか、本を讀む方のことをさせて見ると、よろこんで筆を取り書物に向ひまして、普通には出來るやうであります。それで、此の娘は三味線のやうな遊藝は止めさせた方が好からうと三味線を止めさせました。此れはまだ西町時代のことで本人は七才位の時です。それから娘が筆を持つことが好きといふ處から、其頃竹町の生駒樣の屋敷内にゐた狩野壽信といふ繪師のお宅へ稽古に上げました。此の先生は探幽の流れを酌んで、正しい狩野派の繪をよく描かれた人で、弟子にも嚴格な親切な人でありました。娘は今度は自分から進んで稽古を勵み、まだ手ほどきをして貰つてから間もないが、先の三味線の方とは違つて、どうも性に合つてゐるやうに思はれました。親の慾目かも知れませんが、師匠のお手本によつて描いたものを見ましても、能くまあ斯んなに描けるものだと思つたこともありまして、子供の前では云へないことだが、家内とも「今度はどうも本人に合つたやうだ。今から此れ位に行けば末賴母しい。」など話してまことに可愛ゆく、出來得る限りは此の娘の天性を發揮させてやらうと存じたことでありました。

併し、師匠の壽信といふ人は、中々其道に手堅く、稽古をおろそかにしませんところから、その稽古に中々金錢が掛りまし

た。……といふのは別のことではなく、繪を描く材料に金錢が掛るのであつて、先づ何よりも繪具が入るのです。例へば、金、銀、群青、緑青など岩物を平常使ふので、それも品を吟味して最初から上等品を用ゐさせました。此れは稽古の際でも粟な繪具で稽古するやうではいざといふ段になつて本當の仕事が出來ないから、平生の稽古にも本式で掛らせるといふ師匠の教授法なのです。で、朱にしても、生臙脂にしても、墨一挺、面相一本でも中々金錢が掛ります。併し金錢が掛ると云つて、師匠の趣意は如何にも道理のことですから、出來得る限りは用品も撰んでやるといふ工合で、其頃のことでさう大した入費といふでもないけれども、困難な盛りの時分であつたから、一分の金。一匁の群青を買ふにしても私には可なりこたへました。

谷中へ越した時は、もはや娘は十四五歳で、師匠は、まだ肩上げも取れぬけれども、繪の技倆は技倆だからと云つて許を與れました。當人は好きな道故、雨が降つても雪の日でも決して休まず、谷中へ轉宅して可なり遠い道を通學致し、晝夜繪筆を離さぬといふ勉强で、餘り凝つては身體の毒と心配もしましたが、勉强するは上達の基で、强つて止めもせず好きに任かせて居りましたが、師匠に素月といふ名を頂いて美術協會の展覽會にも二度程出品をしました。すると、此娘の繪に何か見處があつたか、物數寄の人がその繪を買つて下すつたり、またその繪が入賞したりしました。それから或時はまた御前揮毫を致したこともあり、次第に人の注目を惹くやうになつて、親の身としては喜ばしく思つて居りました。

それが、二十五年の九月九日にぽこりとやられました。今日では、もつと治療の方法もあつたことかと思ひますが、盡せる丈けは手を盡したけれども、とう／＼奪られてしまつたのは、如何にも殘念で、私は一時落膽して、何をするにも手が附かぬやうなことでありました。西町で母を亡くしまして、私の成功の緒に就く處までは是非存命でゐて貰ひたいと思つた甲斐もなく、困難中に逝かれたことゝ、今度また折角苦しい中から、此れ迄育て上げた娘をほんの假初の病で手もなく奪られましたことは、私に取つては二つの不幸でありました。私は幼少の時から苦勞の中に生れてゐる身だから、自分の運不運はさして氣にも止めはしませんが、此の二つの事は身にこたへました。其前下谷西町で明治十六年に次女うめ子を五歳で驚風のために亡くしましたが、是は間も無く長男の光太郎が生れましたので幾分かまぎれました。

栃の木で老猿を彫つた話

総領娘を亡くしたことは如何にも残念であつたが、くよ〳〵してゐる場合でもなく、一方には學校といふ勤めがあるので取りまぎれてゐました。

すこし話が前後へ轉じますが、其年の春、農商務省で米國市俄古博覽會に出品のことに就いて各技術家に製作を依囑してゐました。私にも木彫としての製作を一つ頼むといふことであつた。

此の出品に就いては、政府が奬勵をしました。併し政府出品ではなく、出品は個人出品ですが、奬勵策として、個人の製作費を補助したのであります。假令ば私が八百圓のものをこしらへて出すとすると、その價格の半額を政府で補助し、若しそれが賣約になれば其代金も補助費も凡て作家の方へ與れるので、其上出品は作家の名でするのでありますから、作家側に取つては大變に都合の好いことでありました。當時はまだ政府當局が此れ位の程度に補助してゐたものであつた。(然し此時限り補助と云ふ事は止みました) 右のやうな都合で私も何か製作しなければならない。何を作らうかと考へましたが、其以前から栃の木を使つて何かこしらへて見たいといふ考を持つて居ました。此の栃の木といふ材は、材質が眞白で、木理に銀光りがチラチラあつて純色の肌が頗る美しいので、曾て此の材を用ゐて鸚鵡を作り、宮内省の御用品になつたことがある。それで今度も栃の木の良材を探し、純色で銀色の光りのある斑を利用して年老つた白猿をこしらへて見やうと思ひました。

其頃は私は専ら動物に凝つてゐた時代で、いろ〳〵動物研究をやつてゐた結果斯う作を考へたのであつた。

其所で、丸太河岸の材木屋へ尋ねて見ると、栃の木の良材はあるにはあるが、何分にも出し場が悪いので、買ひ入れを躊躇してゐるのですが、材木は頗る立派で、直徑六尺から七尺位のものがある。只、困るのは運賃が掛るのと、日數がかゝることで、商賣になりませんから手を出さずにゐますといふ話で、其場所をも敎へてくれました。

それで私は此の事を後藤貞行君に話すと、それは一つ直接當つて見やうではありませんか、あなたがお出でになるなら、私もお手傳ひかた〴〵同行しませう、といふので、私は栃の木の買ひ出しに其地へ參ることになりました。

其所は栃木縣下の發光路といふ處です。鹿沼から三四里奥へ這入り込んだ處で、段々と爪先上りになつた一つの山村であります。私と後藤氏とは上野發の汽車で出掛けたが、汽車を乘り違へた爲、宇都宮に一泊し、翌早朝鹿沼で下車し、それから發光路へ向ひました。

時は三月で、まだ餘寒が酷しく、ぶる〳〵震へながら鹿沼在を出かけましたが、村端れに人力車屋が四五人焚火をして客待ちをして居ります。私達は、彼等の前を通れば、必ず向ふから聲をかけて乘車をすゝめることゝ思つてゐたのに、くるま屋は何とも云はず、通り過ぎても默つてゐますので、少し當がはづれ、此方から立ち戻つて言葉を掛け、發光路まで幾許で行くねと聞きますと、發光路つて何處だいと一人の車夫は云つてるのには驚きました。も一人の車夫は發光路つて此れから四五里もある山奥だ、道が惡るくてとても大變だよと云つてゐる。そんな處はおれは御免蒙りだと云つたり、道が遠くて骨が折れるからまあよさうなどゝ、とても話になりさうでなく、強て乘らうと云へば足元を見られるに決つてゐるので、後藤君は軍人丈けに健脚で「何も車に乘る程のことはありません。發光路まで歩きませう。」と歩きかけますので、私は少々困つたが、まだ若い時のこと、「では歩きませう。」と二人でてく〳〵歩きはじめました。

山にはまだ雪が白く谿間などには殘つて居り、朝風は刺すやうに寒く、車夫の云つた通り道もわるい。もう餘程歩いたから、發光路も近だらうと、道程を聞いて見ると、丁度半途だといふので、それからまた勇氣を附けて歩きましたが、歩いても、歩いても發光路へは着かない。段々爪先上りの急になつて道は險しく、左手に谿間があつて、それが絶壁になつて居り、水の落ちる音がザア〳〵と聞える。

「どうもゑらい處ですね。……併し繪師などには描けさうな處だ。」

など話し乍ら、足は疲れても、四方の風景の佳いのに氣も代つて、漸々發光路に着いたのが其日の午後三時過ぎでありました。

家屋と云つても家屋らしい家はなく、唯つた一軒飯屋兼帯の泊り宿があつて、その二階に私達は一先づ落附きました。それから湯に這入り、食事をしましたが、食べるものは何もない。何かあるかといふと牛があるといふので、此の山奥に牛肉は珍らしい。それを買つて來てくれと云つて煮て貰つて箸をつけたが、とても歯も立たないので驚きました。

さて、それから、材木屋に掛合ふことになつて、其男が來ました。名は確か長谷川榮次郎とか云つたと覺えてゐますが、立派に姓名はあつても、逢つて見るとまるで山猿同然のやうな六十四五の爺さん。……材木屋と云つても、杣半分の樵夫で、物の云ひ樣も知らないと云つた鹽梅ですから、斯ういふものを相手にして掛合つて、話が結局旨く運ぶか何うか。甚だ危ぶまれましたが、もう此處まで出掛けて來てゐるので、話を進めるより道なく、段々右の男に當つて見ると、栃の木の佳いのはいくらもある、其等は大概崖に生へてゐるのだが、小判形で直徑七尺以上のものがあるといふ。それで、直段は何程かと聞くと、三圓だといふので、その安いのにはまた驚きました。

直徑七尺有餘もある栃の木と云へば、その高さも大凡察せられませう。枝が五間十間と張り擴がつて、山の半腹を掩はんばかり、仰いでは空も見えない程でありませう。さういふ大木で而かも材質が上等で彫刻の材料にならうといふのが一本只の三圓とは、まるで僞のやうなことですが、それでも、宿屋の主婦に相場を聞いて見ると、少し高いといふ話。あの老爺さんは確か二圓五十錢で買つた筈、五十錢儲けるとはひどい、もつと負けさせなさいなど云つてゐます。併し、三圓なら値ぎりやうもありません。木の當りも此で附いたので、其日は其所に泊り、翌朝實地に木を見ることにしました。

此の土地では栃の木は切り倒して焚いて居ります。……栃木縣といふのは栃の木が多いから附けられた名か、それは知りませんが、何んでも此の附近一帶の山には栃の木は非常に澤山あります。而も喬木が多いのですが、その代り田地は無い處。畠はあるが、畠には一面に麻を植えてあります。鹿沼は麻の名産地と云はれる位の處で、垣根も屋根の下葺も凡て麻柄を使つてあつて、畠は麻に占められてゐるから、五穀類は出來ません。それで住民は何を食物にしてゐるかといふと、栃の實を食べてゐる。栃の實を取つて一種の製法で水に晒らして灰汁を拔き餅に作つて食用にしてゐる。それで、栃の木の所有は田地の所有と同じ格で、嫁入聟取などに、栃の木何本を持つて行くとか云つて、數の多いのが有福の證となつた位、栃の木はつまり食ひ料でありますから、此の近在に栃の木の多いのも道理のことであります。

併し、今は栃餅のはなしも無くなりました。其後、足尾銅山が開けて交通が便利になつて以來、栃餅を食ふことは止みました。銅山の仕事で、土地にも金錢が落ちる。銅を積み出した荷の歸りは米を積んで來ますから、五穀はふんだんに這入つて來

るので、餘り旨くもない栃餅を食べるものはなくなつた次第です。斯うなると、栃は厄介なものになつてしまひ、場ふさげで、値も無くなつたから、切り倒して焚いてしまつて、後へ杉苗とか桐苗を植えるやうな始末で、栃の木は貰ひ手があれば只でも呉れたい位なものになつて居るのですから、東京から、只でもいらないものを金出して買ひに來るとは、物數奇な人もあつたものといふやうな顔を宿屋の主婦がしてゐたのも道理、一本三圓でも高いと云つた言葉も本當のことでありました。

さて、翌日實地檢分に出掛けました。

山猿のやうな例の老爺が先に立つて私と後藤君とは山道に掛りましたが、左の方は斷崖絶壁……下を覗いて見ると、幾十丈とも分らぬ谷底の水が紺青色をして流れてゐる。それを見ると、もう一足も先に出ないやうな氣がします。といふのはその斷崖の山の半腹から道がその絶壁の谷へと流れてゐて、それを我々は辿つてゐるのですから、ひよつと踏みはづせば、千尋の谷底へ身體は落ちて粉微塵となるわけです。併し山猿のやうな人間には、何んでもないこと、木の枝岩角などに縋つて、私達の手を引張り上げてくれなどして、漸々木のある場所まで登りましたが、さあ、今度は降りるのに大變……少し降りかけた處に一本の栃の木が天を摩して生へてゐる。

「此れだ。お前さんに賣らうといふ木は……」

と老爺は指しました。

成程、話の如く、それは實に立派な栃の木で、幾千年をも經たかと思はれる。

「どうも素晴らしい樹ですな。」

と後藤氏も幾抱へもあらうといふその幹を見て居ります

老爺が寸法を取ると、廻りが貳丈餘、差渡し七尺幾寸かある。

「どうだね。七尺からある。三圓は安いもんだ。」と老爺は獨語のやうに云つて居ります。全く其通りで私は三圓に其樹を買ひ取りました。

さて、木は買ひましたが、此れを東京へ運ぶのが大仕事……何ういふことにするかといふと、今は三月ですから、五月迄には淺草の花川戸の河岸まで着けるといふ。其運賃はと聞くと、三十圓位で出せるといふ。先づそれ位。多少相違はあつても大したことはないといふこと。それから立木を切倒し、六尺宛二つに切つて、是を中通しをして四ツにする。その木挽の代が十圓程。木代、木挽代、運賃引ツ括めてずつと高く積つて先づ四十五圓位のものであらうと私は見ました。先方で金額の半金

を入れて貰はなければ仕事に取り掛れないと云ひますから、二十圓の手金を打つて、五月までには屹度間違ひなく花川戸の河岸へ着けてくれるやうに約束しました。

併し、此の約束はどうも當てにも何にもならぬと思ひました。前金の受取りを取つても相手は山猿同様……まるで治外法權のやうな山村のことで、當の相手が人別にもないやうな男である。其他のものでも、此の近在に住んでゐるものは杣で、半分ばくち打ち見たやうな人間ばかり……斯ういふ人を相手に約束をして、五月といふ日限をした處で、當てにするものが無理だといふ位のものですから、私達は如何にも便なく思ひましたが、もう仕掛けた仕事ですから、今更手の引きやうも無く、五月迄は待つて見る氣で此の山を降りて東京へ歸つて來ました。

案の條、五月が來ても何んの音沙汰もない。

「高村さん、發光路の一件はどうなりましたね。」

後藤君は五月の中頃になつて私に聞きました。

「何んの音沙汰もありません。相手があれですから、當てにはなりませんよ。」

私は答へました。

「では、私が一遍發光路へ行つて見て來ませう。」

「まあ、も少し待つて見てゐませう。五月一杯丈けは……」

さう云つて、もう音信は無いものと思ひ乍らも約束は約束だから待つてゐますと、先方も滿更打ちやつて置いたのではなく、五月の末になつて、長谷川榮次郎からたよりがありました。それで、今度は後藤君に出掛けて貰ふことにして、氏は二度目に發光路へ參りました。

さうすると、いろ〳〵難儀なことが出來て、實に閉口したと歸つて來てから後藤君が話された處によると、木挽は木を四ツにしたのです。直徑六七尺のものを長さ六尺づゝ二つに切り、それを縦に二つに割つたのです。此れは持ち運びの爲に重量を減す積りで、切り倒した其場でやつた仕事だが、此れが却つて仕事の邪魔になつて大變面倒だつたのです。といふのは二つ割にした爲に木の形が蒲鉾型になつたから、崖から下へ轉がり落せなくなつたのです。丸太の儘で置けば、兩手で押してもごろ〳〵と下まで落とせたものを、蒲鉾型になつたので、どう仕樣もない。二人や三人では動かすことも出來なくなつた。仕樣がないから人足を頼んで、いろ〳〵仕掛をして、する〳〵と下へ辷り卸ろしたといふことですが、斯ういふことには經驗のありさうな筈の山の人間でも智慧が働らかなかつたか二つに割つてしま

つた。また吾々にも斯ういふことに經驗があつたら、前に注意をして置けばよかつたのに、經驗のない爲、飛んだ無駄骨を折ることになりました。

さて、山から瀞までは、どうやら辷り落したが、其所から往來まで持ち出すのがまた大變……山際には百姓家の畠があつて、四五月から物を植へ附けてある。その畠を通さねば往來へ木は出ません。

「損害は賠償するから、どうか、畠を通して下さい。」

後藤君は畠の持主に頼んだが、どの持主も不承知。此には後藤君もハタと當惑しました。

「どうも面倒なことが出來て困りました。」

と云つて後藤君は歸つて來ました。

譯は、百姓が畠を荒らされるので、木を通さないといふこと。いろ／＼相談しました結果、今度發光路へ行く時は學校用品を買つて持つて行かうといふことにしました。それは斯うした山村で學校用品も乏しく、東京の品は珍らしいので、此を小學校の生徒へお土産にすれば、生徒は無論、父兄や、教員達は乾度よろこぶであらう。其所で校長から父兄に譯を云つて頼んで貰つたら、此方の好意もあることとて、何處までも意地を張りもしなくなるであらうといふ思ひ附き。此れは兩方で都合も好いことで、甚だ名案だといふので、後藤君は學校用品を仕入れて三度目に發光路へ出張したのであつた。

さうして、目論見通りをやつたところ、豫期通りそれが旨く行つて、文句無しに畠を通してくれました。此所まで漕ぎ附けるには容易なことではなかつたので、後藤君がいろ／＼骨を折つてくれましたが、確か此の三度目の時に後藤君と一緒に新海竹太郎君も同行されていろ／＼面倒なことをやつて下すつたと記憶して居ります。

木は往來まで出すには出しましたが、是から船に積むので牛車に附け、人足が大勢掛つて川岸まで二里程ある道を運ばなければならないのです。それに、川まで行く間に小川が二つあつて、田舍のことで粗末な橋が架つてゐるのだから、非常な重量な牛車は通れません。先づ橋の手入れとして、豫備杭などをやつて大丈夫といふ所で、牛車を通したやうな譯で、手間の掛ること夥多しく、其爲運賃は以前約束した四拾圓どころでなく、その六七倍となりました。それから糟尾川を船に積んで、それから道中長々と花川戸まで出すことにして、後藤君等は歸つて來ましたが、花川戸の河岸まで來るのがまた容易でなく、隨分

日數を重ねまして、總領娘が亡くなる少し前、八月の半過ぎに漸つと河岸へ着いたといふ報せを受けました。

それから、木を谷中の家へ引取りましたが、庭に抛り出して置く外に仕様もなく、大きな四ツの蒲鉾なりの木が轉つた儘で雨被ひを冠つて居りました。

併し此の材木は後で中々皆さんの重寶にはなりました。政府から四百圓の補助を私は受けたけれども、此の材木の爲に半額の二百圓程をとられました。木代は三圓ですが、面倒の交渉に使つた旅費、學校用品代、橋の修繕費、運賃などで二百圓以上を掛けたのは、先の四十圓の豫算とは大變な番狂はせでありました。

右の材の一つ分は、竹内先生が使ひ、も一つは山田鬼齋氏にお讓りし、も一つは二三の先生が分けられたやうに記憶してゐます。それを思ふと、二百圓も高いものではなかつたのです。

私は、いよ／＼猿を彫らうと目論んでゐる處へ、八月の末に娘が加減が惡るくなり、看護に心を盡した甲斐もなく、九月九日に亡くなつてしまひましたので、私の悲しみは前にも申したやうな次第で、一時は何をする氣も起りませんでしたが、斯ういふ時に心弱くてはと氣を取り直し、心の憂さを散らすよすがともならうかと、九月十一日娘の葬送を濟ますと直ぐに取り掛つたことでした。

もはや、明治二十五年も九月の半ば、農商務省からの日限は其年の十二月のさし入れに製作を納めなければならんといふ注文。今日から手を附けても、隨分時期は遲れて居ります。木は庭に雨掩ひをこしらへて、寢かせた儘で、動かすことも出來ません。何しろ、一片が九十貫もあるのですから。……

其所で、いよ／＼鑿を入れて見ましたが、栃は木地の純白なものと思つてゐたのは案外。此の材の色は赤黒く、まるで櫻のやうに茶褐色でありますので、最初の白猿を彫らうといふ豫期を裏切られました。併し、材質は中々よろしく、彫刻には適當でありました。栃の木の木地の純白なのは若木のことで、此の木のやうに年を經ては茶褐色を呈して來るものかと思ひました。

白猿の當てははづれたが仕方なく、考へを變へて野育ちの老猿を彫ることにしました。とても仕事場へ運んで屋根の下で仕事をすることは出來ませんので、庭の野天で、殘暑の中に汗みづくとなり、先づ小口からこなし初めました。何しろ、此の樣な大きなものだから、弟子を使つてやりました。其頃米原雲海氏も

私の宅に來てゐたので手傳ひ、また俵光石氏も手傳ひました。娘のことで、ほとんど意氣消沈して居りましたのが、此の仕事で大に勇氣附けられ、また紛れました。

それから、モデルは其頃、淺草奥山に猿茶屋があつて、猿を飼つてゐたので、その猿を借りて來ました。此の猿は實におとなしい猿で、能くいふことを聞いてくれまして、約束通りの參考にはなりました、物置に縛いで置いたが、どんなに繩をむづかしく堅くしばつて置いても、猿といふものは不思議なもので必ずそれを解いて逃げ出しました。一度は一軒置いてお隣りの多寶院の納所へ這入り坊さんのお夕飯に食べる初茸の煮たのを摘んでゐるところを捕まへました。一度は天王寺の境内へ逃げ込み、樹から樹を渡つて歩いて大騒ぎをしたことがありますが、根がおとなしい猿のことで捕まへました。

私の猿の彫刻は殆んど原型が無く（ほんの小さなものを一寸こしらへたが）いきなり、カマボコなりの八九十貫ある木をつかまへて、どし／＼小口からこなして行つたのでした。栃の木は檜や櫻などゝ違つて、また一種のもので一寸彫りにくいところのあるものです。農商務省との約束は十二月のさし入といふのですが、其年一杯にはとても仕上らず、翌年へ掛つたのでした。

初めて家持ちとなつたはなし

此所でまた話が八重になりますが、……其頃馬喰町の小町水の本舗の主人に平尾贊平氏といふ人がありました。

今日の平尾家は、其頃よりも一層盛大で、今の當主は二代であるが、先代の贊平氏時代も相當な資産家で化粧品をやつてゐました。此の平尾氏が、どういふ心持であつたか、私のことを大變心配をしてくれてゐるといふことであつた。私の方では薩張りさういふことは知りませんでしたが、私とは関係の淺からぬ後藤貞行君を通じて右の趣を承知したのであつた。

後藤君のいふには、

「平尾さんが、あなたのことを大變氣に掛けてゐられる。娘を亡くして氣を落したりした上句、殘暑の酷しい中の野天で、強い仕事をしたりして暮らしてゐては嘸ぞ大變なことだらう。それに、もう、あの人も相當年輩、世間的の地位も立派にあるのに、今日と雖も、まだ微々たる借家住居をしてゐるやうでは氣の毒だ。あの分では、何時迄たつても自分の家持ちになることは出來まい。どうか、先づ家持にして上げたい。何事も居所が確かり定つてのことだから……と斯う云つてあたたのことを心

配してゐられます。平尾さんの氣では一日も早くあなたに一軒の家を持たせたいといふ望みなのですよ。あなたは何う思ひますか。一つ、考へて見て下さい。」

といふこと。併し、まだ其頃は私も平尾氏の噂こそは後藤君から些つとは聞いてゐるやうなものゝ、まだ一面識もないことで、先方が何ういふ氣でさういふことを謂つて居られるのか見當も附かず……多分、私が永年の間に多少とも貯蓄などをしてゐて、いくらか土臺が出來てゐるだらうから、その上へ幾分のたし前でもして補助して、さうして一軒の家持にでもして上げたいといふやうな心持か。御好意は忝けないが、今日まで何事も自力一方でやつて來た自分、まあ、自分は自分の力をたよりにするにしくはないと、別に乘る氣もなし其儘になつてゐました。

するとまた後藤君が見え、

「高村さん。平尾さんの、あなたに對する力の入れ方は本當に眞劍の話です。串戲では無いのですよ。此間もあなたに話した家持にしたいといふ一件……あれを是非實行したいと云はれるのです。無論あなたは學校の勤務もあり、家では差し迫つた仕事のある身で御多忙なのは平尾さんも萬々承知。ですからあなたに面倒は少しも掛けず、何事も平尾さんの手でやつて仕舞ふといふのです。どうですか。折角此れまでに話してくれるのですから、あなたも承知なすつたら、如何でせう。今日は私は平尾さんの意を受けてあなたの御返辭を確り承はりに來ました。」

斯ういふ話。私は斯うなると、何事も打ち明け話をしなければ理が分らぬと思ひましたから、

「平尾さんのお志は感謝しますが、實は、私も貧乏の中で娘を亡くし、いろ／＼物入りもして、今日の處少しの貯へもありません。假りに家をこしらへてくれる人があつたとして、引越しをする金もありません。……と云つたやうな有樣ですから、一寸お話しに乘る氣もしませんが、今の御話によると、凡ての事を平尾さんが一切引受けて下さるといふお積りのやうだが、そんなことまでも引受けてやつて下さるのでせうか。」

「そんな細々したことまで、私は平尾さんから聞きませんでしたが、一切、高村さんには面倒をかけず、萬事を自分の方でする。高村さんは只、身體丈けを新らしい家へ持ち運べば好いのだと云ふのですから、無論何もかも一切背負ふ氣でお出でせう。それは承知の上のことでせう。」

「さうですか。さういふことならお世話になつても好い氣がします。」

「では御承知下さいますね。平尾さんも嘸ぞ張合ひがあるでせ

う。」
　と云つて後藤君は歸りました。
　併し、私は平尾氏の思想に就いてもまだ半信半疑でゐました。世間によく人の世話をするといふ人があつても、今のやうな世話の仕方は殆んど例の無いことのやうに思はれますから。
　所が、平尾さんの方では早速家を探し初めた。
　私には手間を掛けないといふので、店の人達、後藤君などに頼んで私の住居として格好な家を探し始めたのです。無論平尾さんの主意は家と地所と一緒で、地所が自分のものでないと、いふことは落附きのないことで、地所ぐるみの家作でなければいけないといふのでした。で、いろ〳〵探して四ヶ所候補地を見附けたのでした。
　平尾さんの方から人が來て、いよ〳〵家が四ヶ所見當りました。御多忙中ですが、明朝、主人もその家を見に參りますから、あなたも御一緒にお出でを願つて決定て頂きたいと主人からのお報らせです。といふこと。私は、その翌朝、打ち合せて置いた團子坂下のやぶ蕎麥で平尾さんに落ち合ひ、此所で初めて平尾氏に面會したのであつた。
「家が四軒見當りました。何れでも一ヶ所を見立てゝ下さい。後々のことも決しておひまはつぶさせません。登記萬端のことなど店のものに云ひ附けますから。」
　と云ふやうな至極自由な話。私もこれならば氣安いと思ひました。
　その家といふのは、一軒は本郷駒込です。藥種の取引關係から平尾家へ出入りをしてゐた藤井といふ醫師があつたが、その人の兄の藤井諸照といふ人の持家……此が一つ。それから、もう一ヶ所は、谷中で、團子坂を降りると石橋がある。その側に地面四百坪に家作の附いたところ。も一つは、善光寺坂の上で、大河内の邸の上、一方が藪であつた。此所も四百坪程の地面と表通りに貸長屋が數軒附いてゐた。もう一つは本郷千駄木町であつた。
　其所で、私は平尾さんと一緒に出掛け、先づ善光寺坂の家を見ました。平尾さんは、此の家が氣に入つて、「どうです。此所にしたら。地所も相當廣し、家も出入れをすれば住へる。此所に決めたら好いでせう。」と云ひましたが、私はどうも此所は氣に入りませんでした。附いてゐる貸長屋があつて、月々家賃を取るのだといふのが、第一嫌でした。家持になるのは好いが、貸家をして家賃など取り立てるのはそれこそ大變と思ひましたので、此れはお斷りしました。

それから千駄木町と團子坂とを見ましたが、孰れも氣に入りません。

最後の駒込林町を見やうといふので、團子阪を登つて右に折れて、林町の裏通りの細い道を這入りまして、一丁目程行くと右側に茅葺屋根の門がある。はてな。此の家は、去年の春、盆栽の陳列會があつて、石川光明氏と一緒に見物に來た時會場になつた家で、茅葺屋根の田舍造りで何んだか氣に入つた家であつたがと思つてると、不思議なことには其かやぶき屋根の家へ平尾さんが先に立つて這入りました。

はてな。此の家がさうなのかしらと思つて妙な氣がしました。

かやぶき家根の門を這入ると、右手は梅林、左手が孟宗藪。折から秋のことで庭は紅葉し、落葉が飛石などを埋めてゐる。その中に茅葺屋根が小さく見え、如何にも山の中に隱士でも棲んでゐさうな處です。上へあがつてからも、石川さんと來たことがあるので、見覺えがあり、間取りなども惡るくなく、甚だ氣に入りました。

「此の家なら私は氣に入りました。」

私は平尾さんに斯う云ひますと、

「妙な家が好きですね。隨分引込み過ぎて不便なことぢやありませんか。……併し、なるほど、あなたの氣に入りさうな家ですね。それに此所なら私の家へ出入をしてゐる醫師の兄の藤井といふ人の持家だから、取引にも面倒がなくて結構、では此所に決めませう。」といふことで早速話が決まりました。

地所が貳百六十坪程、家ぐるみ、七百拾五圓で登記が濟みました。

此の家は藤井といふ人が伜同樣にしてゐる人の爲に住宅として買つて置いた家であつたが、その人が洋行をしてゐるので、一時不用になり賣つても好いといふのであつた。もつと高かつたのを平尾さんとの知合ひの爲に負けて七百十五圓としたといふことでした。

いよ／＼家の登記は濟みましたが、手入れをしたり、また七疊の隱居所のやうな坐敷があるが、此れは私の仕事部屋に使ふことにして、地所内に別に父の這入る隱居所を建てました。それが百五十圓。母家(おもや)の方は九疊の坐敷に八疊の中の間、六疊の居間、外に二疊と三疊と寢所、それに今の隱居所でした。

父も這入る前に一度見に來まして大變氣に入りました。當時住つてゐた谷中町の家も氣に入つてはゐたが、今度は自分達の持家となることで、一層閑靜なことや、水の好いことや、茅葺(かやぶき)

の風流なことや、庭が廣く寂びてゐることなど、好いとなると一々氣に入りました。隱居所も出來たことで、愈々十一月の幾日であつたか谷中を引越し此へ移りました。藤井といふ人も中々風流なんで、私が移る日に床の間に一行物を掛け、香を焚いて花までさしてありました。此れは今でも忘れません。よい心持でした。其後も藤井氏は此邊へお出での時はお寄りになります。

彫りかけの猿は此時一緒に引越しました。モデルの猿は用が濟んで飼主に返しました。仕事の方は荒彫りが濟んだ處で、此れから仕上げに掛らうといふところでした。初めよりも目方も減つてゐたこと故、離れの七疊の方へ擔ぎ込み、仕上げを初めました。ところが、重味で眞中の根太が凹んで、困りましたが、それなりでとう／＼翌年の二月に仕上げ、農商務省へ納めました。漸つと市俄古の博覽會出品に間に合つたことであつた。

米國市俄古の博覽會には、日本から鹽田眞氏などが渡米されました。私の老猿の彫刻は日本の出品で可也大きい木彫であるから歐米人の注目を惹いたが、丁度陳列の場所で露西亞と向い合つてゐたので、あの、老猿が鷲の毛を掴んで一方を眺めてゐる圖を、何か諷刺的の意味でもあるやうに取つて一層評判されたといふことでありました。それから、入場者が老猿の前を通ると、猿の膝頭を撫でゝ通るので膝の頭が黑くなつたなどいふことでした。是は鹽田眞氏が歸朝してお話であります。今日、その作は、帝室博物館にあるさうです。

此時、私や竹内先生などが栃の木を使つたので、其頃栃の材を彫刻に使ふことが流行りましたが、今日では餘り使はれてゐないやうです。美術學校でも例の發光路で立木の儘で二三本栃の木を買つてあつた筈でありますが、如何なりましたか。學校でも忘れてゐるかも知れません。若し、その木が其儘あれば、其頃より更に大きくなつてゐることでありませう。

不動の像が縁になつたはなし

其所でまた話がいろ／＼轉々しますが、平尾賛平氏が、何うして斯うも私の爲に厚い同情を注いで下すつたかといふことに就いては、今迄お話をした計りでは少し曖に落ちかねませうが、此れには一寸因縁のあることで、それを序に話します。どういふ譯か知らないが、私の一生には一つの仕事をするにもいろ／＼曰く因ねんが附いて廻るのは不思議で、只、其事は其事と一口に話せないやうな仕儀であります。それは本當に妙です。

或晩、私は上野廣小路を通りました。元は岡野今の風月の前のところへ來ると、古道具屋の夜店が並んで出てゐます。ひよいと見ると、小さな厨子に這入つてゐる不動様が出てゐる。夜の十時頃で、もう店の仕舞ひ際でしたが、カンテラの灯の明りでも、普通のものでない氣がしましたので、手に取つて見ると、果してそれは好いこなしで、斯んな所に轉つてゐるものではありません。片方の足が折れてゐましたが、値を聞くと、拾錢と云ひました。妙なもので、壹圓でも素通りは出來ないのに、八錢に負けろと云つたら、負けましたから、二錢つりを取つて袂に入れて歸りました。

其後、私は右の不動を出して見ると、中々凡作でない。折れた足を繼ぎ、無疵にして、私の守り本尊の這入つてゐる觀音の祠(此れは前におはなした觀音です。)の中へ入れて飾つて置きました。此は西町時代のことであります。

丁度其頃、彼の後藤貞行氏は馬の彫刻のことで私の宅へ稽古に來てゐた時分、親しみも一層深くなつてゐた時ですから、或日、私の本尊の觀音様の祠を開けて見ると、中に小さな不動様の厨子があるので、それを見ると、非常に慾しくなつたらしいのです。

初めの中は後藤氏も、あの不動さまは實に好いと褒めてゐた位でしたが、如何にも心が惹かれたと見えて、

「高村さん、どうか、私に、あの不動さまを讓つてくれませんか。私は一目あれを見てから、どうも慾しくて仕樣がありません。」

と云ふ言葉つき。如何にも餘念なく見えましたが、

「あれは私の彫刻の參考ですからお讓りするわけに行きません。」

私は一應お斷りしました。

すると、後藤君は押し返して、

「さうですか。私は實は酉年で不動さまを信仰して居ります。私の守本尊にしたいと思ひますから、是非どうかお讓り下さい。」

と、たつての頼み。

「さうですか。あなたが、あの不動さまを拜むといふのならあなたに差上げませう。實をいふと、あれは廣小路の夜店で八錢で買つたのです、値は八錢であつても、作は凡作でない。どんな大きな不動を作るにも立派に參考になると思つて私は買つたのですが、あなたがそんなに御執心なら差上ます。しかし、無

くなさないやうにして下さい。私が參考にしたい時はまた借して下さい。」

斯ういふことで、右の不動樣を後藤君に進呈しました。後藤君は大によろこび、それを自分の守本尊として持つてゐたのでした。をかしいことには、餘程後藤君もあの不動が慾しかつたか、一寸、私へたのむのに細工をしたことが後で分つて笑ひましたが、實は後藤君は酉年ではなくて、戌年であつたのでした。

さて、其後、平尾贊平氏が、後藤さんの大切にしてゐる右の不動さまを見たのでありました。(平尾氏と後藤氏とは、何ういふ緣故か知りませんが、ずつと前から親しい間柄であつたのです。)すると、平尾さんが大變惚れ込み、どうか、此れを讓つてくれと云ひました。併し、後藤君は、實は此の不動むけはお讓り出來ない。その譯は斯々と私と後藤君との間の約束のことを平尾氏に打ち開けました。

すると、平尾さんは、

「成程、もつともの話だが、高村さんが君に無くなさないやうにと云つた意味は、行處が分らなくなることを恐れた爲だらう。君のところにあるも、私のところにあるも、在り所がわかつて居れば、同じことではないか。君が師匠同樣の人の言葉を背くのが氣が濟まないなら、一つ高村さんから君が許しを受けてくれたまへ。さうして是非僕に讓つてくれたまへ。」といふので、後藤君も詮方無く、私に右の趣を話して「どうしたものでせう。」との話でした。

「それは遣りなさい。行處が分つてゐれば好いぢやないか。それに、平尾さんの處へ行けば不動さまも仕合せ。命日々々には私の所や君の處よりも、平尾さんの處の方が御馳走もあらう。只、我々が借り度い時は借りる條件をつけて置けば好いでせう。」

で、後藤君は、快よく不動さまを平尾氏に讓つたのでした。

此の時に私の事が平尾さんの話頭に上り、高村といふ人物に就いて後藤君からも聞き、また他からも聽いたことであつたと思ひます。此れが緣で……と云つてまだ逢つたこともないが、後藤君を通して、平尾氏から大黑と蛭子の面を彫つてくれと賴まれて、こしらへてあげたことなどがあり、それ以來、近しいともなく近しく思つて私のことを心配してくれられてゐたものと見えます。私の方では一向他の氣は分りませんから、知らずにゐたが、其後、後藤さんを通して、私の爲に家を持たしてやらうと考へる迄に平尾氏の好意が進んで來たのは、平尾氏の技術家を尊重する心持も手傳つたことでありませうが、私の爲へ

では夜具布團迄一私が氏に對してした仕打を恩義的に感じてゐて、私のことを平尾氏に特に推奬したやうな心持もあつたのではないかと推察もされるのであります。

それは兎に角、また、平尾氏の奥さんといふ人も中々よく出來た人で、平尾氏が人の爲に盡すことに關しては、良人の善事を内で助けて行つた質の人でありました。私は今日でも、平尾氏の好意は特に恩に思つてゐる次第であります。

それから、家持になれといふので、平尾氏から立代へて頂いた金錢は、技藝員のお手當の金や、いろ〳〵の其他の收入のあつた都度、二年間ばかり平尾氏の方へ運びました。二年目の終りの頃に平尾氏は、

「もう餘程、金が來過ぎてゐる。」

といふことで、

「では、お序の時に調べて置いて下さい。」

と云つて置きましたが、調べた結果、大分餘つてゐました。平尾氏は、

「私は商人のことだから、銀行へ預けて置く丈けの利子は貰ひますよ。」

と云つて一旦利子をお取りになつて勘定を濟ませ、やがて口を更へて改まつて利子の分五十圓許を持つて來て、此れはお老人が何かの樂しみになさるやうに云つて差上げて下さいと、老人に下されたので、年寄も非常な喜びでありました。

丁度二ケ年間に七百十五圓の地所と家作代、それから百五十圓の隱居建築費、合せて八百六十五圓をお返しゝましたが、都合の好い時に自借に運んだので、私には、さう骨の折れたことではありませんでした。けれども、妙なもので、一時に纏つたものを出して強ひても私を家持にさせて下すつた平尾氏の御親切が無ければ、私は其後幾年經つても借家住居でゐたかも知れません。家持になつてから今日迄三十年にもなりますか。その間私の家は段々古くなつて建て直しをする必要も感じましたが、更に新築をする自力もないことではあるけれども、それよりも成る可く、三十年前の家持ちになつた當時の家の儘を存して置きたいと思ひ、破損のひどい所丈けは餘儀なく修繕をして、出來得る限り昔日の俤を殘して置いて居ります。

只今斯うしてお話をしてゐる此の九疊の座敷も、その時其儘で、初めて石川光明氏と打ちつれ盆栽會を見物に來た時も、此の部屋や縁側に盆栽が澤山並んでゐました。

今日から思へば三十年は可なり古く、また私としても、それ以來いろ〳〵な境涯を經來つたことであります。

滿鮮一周

田山花袋

一

海を越して釜山に上陸した最初の印象は、内地とは丸で變つてゐて、朝鮮人のあの白い着物といひ、茸のやうなあの民家といひ、荒涼寂寞としたあたりの光景といひ、すべて私に眼新しいものでないものは無かつたが、しかも支那を經、蒙古を經、滿洲を經て、安東から鴨綠江をわたつて朝鮮にもどつて來ると、早く既に内地に歸つて來たやうな一種のなつかしさを感ぜずにはゐられなかつた。朝鮮には、内地の人達の經營努力のあとがはつきりと眼に立つた。

それに比べると、ハルビンあたりに行つた時の心持は何んなであつたであらうか。それはさびしいものではなかつたか。何うして日本人は此處まで出て置かなかつたか。あんな長春見たいなところでまごまごしてゐなければならなかつたか。尠くともその一角だけでもつかむことをしなかつたか。それは其處に行つたものは、私ばかりでない、誰でもさう思はずにはゐられないに相違なかつた。私は其處ではロシアが極度に支那に押されつゝあるのを見た。最早今日では、ロシアのハルビンではなくて支那の濱江になりつゝあるのを見た。尠くとも今から十年後には、支那人は今のハルビンの市街に對抗した立派な都會をその松花江の對岸につくり出すに相違なかつた。

『えらい力を持つてるね、支那人は！』あの勞働に、商業に、勤勉な支那人の群を見たものは、誰でも初めはさう言はずにはゐられなかつた。『ふむ、成ほどね！ 朝鮮人とは丸で違ふね。鮮人は何うしても亡國の民といふ氣がするけれども、支那人は勤勉だね。とても日本人などは大刀打が出來ないやうな氣がするね！』現に私なども初めの中は、さう言つて眼を睜つた一人であつたけれども、次第にそれは、通り一遍の旅客の眼に映つた淺薄な觀察であるといふことが飲み込めて來た。後には私達は支那人を見ると、いつも嘔吐を感ずるやうになつて行つ

た。『えらい民族だね！　支那人つていふ奴は、一體、何のくらゐゐるんだね！　何處に行つても支那人がゐるじやないか。汚ない國民だな。何しろ徹底的に物質主義なんだからね。そいつがやりきれんよ。金さへ握ぎれば好いんだからな。國のことなんか少しも考へないんだからな。第一、感情といふものがないね！』

『本當だね……』かう私の相棒の洋畫家のM君は言つた。『何しろ、支那人といふ奴は、人の拵へた公園なんかに大きな顏をして入つて來て、自分ででも拵へたやうな顏をしてゐる民族だからね。自分では決して金をかけて、公園なんかつくりはしないからな。第一、あの道路を見給へ。自分の道路は放つて置いて、人のつくつた道路に平氣で馬車や自働車を走らせてゐるから……。それに、あの馬車を見たまへ。あれは皆なロシア人が日露戰爭の時に置いて行つた馬車だぜ。あれを奴等何處からか探し出して、あゝして自分の馬をつけて、金儲けをやつてゐるんだからな。まだ一寸だつて、あの馬車を自分で造つたことはないさうだぜ！』

『さうかね？　でも、壞れればあとは自分で拵へるだらう？』

『いや、それなら好いんだけども、さういふ國民ぢやないんだよ。壞れればそのまゝさ。あとは拵へはしないさ。あとで拵へる氣があれば、今からでも拵へるからね……？』

『それはさうだね』

それから私達は、歸りに朝鮮の東萊溫泉に來た時に、またその問題に觸れて行つた。それは他でもない、そこに、私達の泊つた旅舍に朝鮮人が家族を伴れて一月以上も滯在してゐるといふ話から始まつた。『矢張、さういふ點になると、朝鮮人の方が日本人に似てるよ。支那人では、とても溫泉に來て、のんきに一月も滯在してゐるやうなものなどはありはしないからね！　現に、あの滿洲の湯崗子などでも、ちやんと支那人のために別館まで拵へてやつてあるのに、誰もやつて來はしないからね。張作霖の娘がやつて來たくらゐなもんださうだからね。そこに行くと、朝鮮人はかうやつてやつて來てるからね！』

『矢張、物價が高い故もあるんだらうね？』

『それもさうだが、全體にさういふ風らしいね。無智で無教育だから、さうなので、いづれは支那民族も覺醒すると言つてゐる人もあるけれども、何うもさうばかりでもないやうだね。國民性らしいね？』

しかしかういふ形はあつた。日本でも、明治の初年には、支那の町に似たやうな町が東京の到るところにあつた。日本橋の袂、兩國橋の橋の袂、そこらの雜遝は全く支那の町の今の

光景に似てゐた。あの北京城外の雜遝なども、私に明治十七年頃の東京を思はせた。しかし支那は果して覺醒するだらうか。日本のやうに三四十年の中に長足の進歩をするだらうか。大きな謎だ。

二

しかし日本が支那と朝鮮とに負ふところの多いのを、私は今度の旅行ではつきりと見た。今まで本國から一歩も外に踏み出したことのない私は、本などではさういふことは知つてゐたけれども、實際にはさういふことは少しも知つてゐなかつた。日本がさういふ風に、支那と朝鮮とから文化を受けて發達したといふことは、私にいろいろなことを考へさせるに十分であつた。

私は最初に朝鮮を素通りする時に、既にその鮮人の生活に、日本の藤原時代の生活の殘つてゐるのを暗示させられたが、北京に行つて、あの清朝の宮殿の内部を見るに及んで、一層はつきりとそこに日本の古代を發見したのである。尠くとも奈良朝乃至平安朝時代を發見したのである。私はそこに上達部が歩いてゐたり、雜掌が佇立んでゐたり、冠をつけ笏を持つた人達が朝勤して行つたりしてゐるのを見るやうな氣がした。しかも日本の京都の皇居では、もはやさうした感じを完全に味ふことは全く不可能になつてゐた。

それに、北京の都としての布置が私達に、奈良乃至京都の古都の布置を思はせた。羅城門、朱雀大路、大極殿、それに市街を碁の目のやうに劃つた形は、すべてその北京の城内に指すことが出來た。皇居に近いところに高位顯官の人達が住み、それから段々檢非違使だの武人だのが住んで、門外に商賈が軒を並べ市場をつくつてゐるさまもそのまゝであつた。「はゝあ、さうかな！　すべて皆な此方から來たのかなア！、尠くとも、日本は皆なこの眞似をやつたんだな！」こんな風に私は思はずにはゐられなかつた。

北京もさうだが、朝鮮に來ると、一層さうした感じが深かつた。あの景福宮からその奥にある宮殿、それにつゞいた秘苑、あそこいらは、何うしても藤原時代の末期そのまゝといふ氣がした。そこらに清少納言や紫式部がゐさうなやうな氣がした。道隆や道長が威權を弄してゐさうなやうな氣がした。

それから私達は最後に慶州に來て、その新羅の古の都の地と、そこに殘つてゐる佛像と鐘とを見た。そして私は始めていろいろなことがわかつたやうな氣がした。支那の文明が新羅だの百濟だのを通つて日本に入つて來たさまが始めてそれとはつきり

領かれた。『さうですね。ぢかに支那から入つて來たんぢやないんですね。支那の南北朝あたりの文化が朝鮮を透してそして入つて來たんですね。さういふことを考へると、朝鮮も日本に取つては、大切な國だつたんですね』から言つて私達は武烈王陵の龜趺石に對した。そこには夕日が靜かにさしわたつてゐた。

日本は平安朝の末期から、その生活や風俗がすつかり上代と變つて行つて了つたが、朝鮮ではそれが變らずにそのまゝ長く續いて來てゐるといふことについて私達は一致した『何しろ、あの平壤の妓生學校で見た妓生の舞踊は、すつかり日本上代の舞踊ですからね。劍を持つて踊る奴なんか、何うしたつて、今でも日本の大きな神社などでやつてゐる劍の舞といふのにそつくりですからね！たしかにさうです、たしかに藤原時代がずつとつゞいて來てゐるんです！』からM君が言つた。

それに、平壤や京城あたりで見る瓦葺の軒の低い家屋――三角に組み合せたその瓦の屋根は、何うしても倭畫の畫卷などにある家屋のつくりに酷肖であつた。

それにしても、何うして日本ではその生活樣式が變つたか？何うして朝鮮のやうにそのまゝにつゞいて來なかつたか。暫くした後で私は言つた。

『それは、日本が韓半島からすつかり手を引いて了つたためではないでせうかね？日本も始めの中は、新羅や百濟や任那に絶えず兵を出したり、もう少し後になつては、朝鮮を經過して來る支那の文化にあきたらずに、ぢかに遣唐使を隋唐にやつたりしてゐるが、海外政策が旨く行かなかつたために、段々それから手を引くやうになつたために、終には全く孤島の中に引込んで了ふやうな形になつたために、そのために、生活樣式が變つて行つたんぢやないでせうか？』

『成ほどね！』

『屹度さうですよ。そして鎌倉時代になつて、一層變つて行つたんですよ』

『さうですかね？』

私達は夕日を浴びながら、路傍に待つてゐる自動車の方へと歩いて來た。

三

滿洲ではいろいろなものが目を驚かしたけれども、その中でもことに際立つて私の心を惹いたのは、撫順の炭鑛と北滿洲から産出されて來る大豆の運搬とこの二つであつた。實際撫順のあの炭鑛といふものは大したものだつた。第一、あの露天掘の

規模の大きいのを見給へ。何のことはない、大きな眞黒な擂鉢ではないか。あそこから何千噸とかいふ巨額の石炭が毎日掘られて出るといふではないか。しかも内地でやつてゐるやうなさうした大した設備も入らずにぢかにドシドシ掘つて行かれるではないか。そしてそれは殆ど無限にあると言つても好いくらゐに澤山に澤山あるではないか。普通内地の炭山では、深さ十二尺もあれば、大したものに言はれてゐるのに、平均した深さが四百尺もあると言ふではないか。今の市街の下もすべて石炭で滿たされてゐると言ふではないか。

撫順の市街は、從つて活氣に富んでゐる。支那街なども中々賑かである。女なども澤山にゐる。しかし、鑛夫には概して支那人がつかつてあるので、賃金に不滿がないと見えて、勞働問題なども、將來は知らぬが、今では大して面倒ではないといふことであつた。私は例の問題になつた塔連炭坑の方までも行つて見た。

撫順と奉天との間に、たしか營城子と言つたと記憶してゐるが、小さな停車場がある。そこで下りて、向うに見えてゐる松山を目當に眞直に行くと、渾河を渉つて向うに奉天の東陵があつた。北陵には誰でも行くが、そこには滅多に出かけて行くものはなかつた。

北陵と比べて大して違つたところもなかつたけれども、松林の斜坂の上から、下に遙かに渾河の流域を見渡したあたりは、ちよつと他に類のない眺めであつた。私は奉天の小東邊門から、例の支那の蒲鉾馬車に乘つて、ひどい道を、まごまごすればひつくり返されさうになる道を半日揺られて、やつとそこに行つたことを思ひ起した。

奉天の北陵では、あの前景を成してゐる草叢の中に、山梨の花の白く咲いてゐるのが何とも言はれず私の心を惹いた。それに、その時は丁度夕暮で、いくらか濃かになつてゐた空氣が一層それを鮮かにした。『だから、僕は國が戀しくなると、いつも此處にやつて來るんですよ。何とも言はれない氣がしますよ。何しろ、何處に行たつて、かうした草叢と林とはありません、からね』かうM君が言つたが、それと同じことを北京の青年會内者のH君が矢張大城の林の中で言つたことを思ひ出した。『その時分には、まだ馴染んだ人は少なかつたし、支那語は出來ないし、爲方がないから、休みと言ふと、よく此の林の中に來たもんですよ。それや本當に日本人くらゐ綠葉や林の好きな國民はありませんからね。半日そこの林の中で、國のことを考へて泣いてゐたことがありますよ』こんなことをそのH君が言つたことを私は思ひ起した。

四

『神經衰弱を治すには、滿洲が一等だね』私は歸つて來てから何遍となく人に話した。それは初めは餘り好いところとも思はなかつたけれど、寧ろその眺望の單調なのと、風のヒドいのと、埃の立つたのと、綠の色の少ないのと、地面のいやに赤ちやけてゐるのとに厭氣がさしたくらゐであつたけれども、少し落附いて行くにつれて、滿洲といふところもあまりわるい土地ではないといふことが次第に飮み込めて來た。第一、空氣の乾燥してゐるのが好かつた。次に、內地のやうにいやにあたりがコセコセしてゐないのが好かつた。つまらない噂話などのないのが好かつた。何處に行つても大きく呼吸がつかれるやうな氣持のするのが好かつた。汽車に乘るにしても、內地のやうにわるくコセコセしてゐずに、大連から奉天に行くにも、隣りにでも行くやうな心持で出かけて行けるのが好かつた。それに、殖民地だけに、內地人同士の間にも內地では見られないやうな一種の情味があつて、同國人といふ感情が、湧くやうにその間に漲りわたつてゐるのを私達は見た。

　それに、朝鮮では最早さうした形はなくなつて了つてゐるけれども、內地と同じやうにてんでに獨立して仕事をやつて行かなければならないやうになつてゐるけれども、滿洲ではまだ多分に滿鐵が同胞を保護するといふやうな方針を圖つてゐるやうなところがあつた。それは一面から言へば、さういふ形は、滿鐵が暴威を振つてゐるやうに取られるかも知れなかつたけれども、しかも滿鐵は決して殘酷な資本主でも、わかりのわるい債權者でも、または自由を束縛する主人でもなかつた。私の見たところでは、沿線の旅舍などで滿鐵のお蔭を蒙つてゐない家は一軒もないやうに思はれた。

「滿鐵が踏張(ふんば)つてゐるんで、それで內地人がかうしてゐられるんだね？』

　かう何遍となく私はM君やG君に言つた。

『それはさうですとも！』

『つまり、滿鐵は露天(ろてん)掘や大豆の運搬で儲けたやつを、ドシドシ種々の設備に使つてゐる形だね。金がなくつては、滿鐵の眞似は出來ないね』

『それは、さうですとも……』

「教育の方面の話などをきいて見ても、中々先き先きのことまで考へてゐるんだからね！　何しろ、我々は內地で生れたものだから、いざと言へば內地に歸りたいのは當り前だ。だから所謂我々にはあまり重きを置いてゐない。それよりも此處で生れ

た子供達に重きを置いてゐる。そしてその方に向いて教育の方針を立ててゐると言つてゐるからね！』
『何しろ國家事業を代行してゐるんだからな！』
『それはさうだね。所謂イギリスの東印度會社と同じやうな形を持つてゐるんだからね。何したつて責任は重いよ』
『本當とも……』
『僕は大連でいろいろな施設を見せられたが、あの中央試驗所といひ、地質調査所といひ、工業學校といひ、窯業試驗所といひ、埠頭といひ、大したもんだよ。内地でもあれだけのものは容易に求められないね！』
　私は埠頭事務所のあの上に立つて大連港を一目の下に見わたした時のことを思ひ起した。またサイベリアから北滿洲の物資がすべて一度汽車で此處に集積されて、それからまた汽船に積まれて世界に出て行くさまを想像したことを思ひ起した。今では日本の大連、アメリカの天津、イギリスの上海と、さういふ風に世界の三大國が支那大陸に喰ひ附いてゐるさまを想像したことを思ひ起した。
『それにしても、天津を失ひつゝあるのは殘念だと思つたね……』
　私は思はずかう言つた。
『さうかね、あすこは、もうそんなにアメリカの勢力になつてゐるかね？』
『それは意想外だよ、僕はあれほどとは思はなかつた。あんなにアメリカの勢力になつてゐるとは思はなかつた。日本なんか駐屯軍はゐるにはゐるけれども、何處にゐるかつて言ふくらゐだからね。僕のやうなものでも殘念なやうな氣がしたよ』
『さうかね』
『天津はあれで、地形から言つても、何から言つても、支那では、一番樞要な場所だからね。いざとなれば、上海以上かも知れないからね！』
『本當だ』
　ハルビンといひ、天津といひ、更に青島といひ、浦鹽といひ、餘りと言へば、消極に過ぎるやうに私達門外漢にも思はれた。
『これで旅大まで囘收されては。それこそ日本は立つ瀬はないよ』こんなことを私達は言つた。

五

　私は天津から北京に行き、北京から山海關を經て奉天に出て、それから北してハルビンに行つた。そして歸りは四平街から四洮線で伯音太拉の方まで入つて見た。
　つまりこの領域は、歴史上から見てもかなり面白いところで

あつた。古代支那と夷狄との交錯、唐時代に於ける高句麗の出沒、契丹の勃興、金の發祥地がハルビンの東一里のところに殘つてゐるかと思ふと、長白山の麓から奉天遼陽に出て行つた清朝の跡があつたりして、仔細に點檢して來ると、思ひもかけぬ面白味がそこからも此處からも湧き出して來るのであつた。漢人が北から來る勢力を恐れて、例の萬里の長城を築いたことなども、成ほど道理であると點頭かれた。

唐大宗が高句麗を攻めた時のことなども、割合にはつきりとその跡をたどることが出來た。その時分には、遼河の三角洲はずつと深く中まで入つてゐて、田庄臺、牛莊あたりはまだ全く海であつたらしかつた。唐の太宗は山海關から錦州を經て遼陽に先づ足溜りを拵え、千山に巡幸したりしてさて連山關方面から安東の山の中に攻め入つたらしかつた。遼河のデルタを渉る時には、人が盾と共に沒したなどといふことが唐書の中にもはつきりと書かれてあつた。否、そればかりではなかつた、その時の舟師は、旅順から大和尚山の控えてゐる灣内を通つて鴨緑江の河口、即ち今の大東溝の方へと出て行つたらしく、今日の大連灣は、尠くとも當時の舟師の碇泊した樞要な地點であつたといふことであつた。

しかし、今日、汽車で通つて行つたところでは、あの荒涼落寞とした曠野か、赤ちやけた岩山か何ものをも見ることの出來ない土地か、さういふ歴史を持つてゐやうとは何うしても思はれたかつた。中世に何等かの變遷があつて、さうしてあゝいふ風に荒涼としたものとなつて了つたとしか思へなかつた。

滿洲にはまだそれでもいくらか歴史を持つてゐたと點頭かれるあとが殘つてゐるけれども、蒙古に行つては、何うしてかういふところが支那の脅威になつたり、元の發祥地になつたり、また例のモンゴル帝國の基盤地になつたかと思はれるくらゐであつた。いかにも荒涼落寞としてゐた。行つても行つても平砂の盡きないひろがりを眼にするばかりで、また、例の牧畜の群を眼にするばかりで、原始狀態以外には何物をも見出すことが出來なかつた。「何うも不思議だね……？　蒙古は昔もあんな風だつたとは何うしても思へないね？　何等かの厄災があつて、天然か、人爲かそれは何方とも言ふことは出來ないけれども、昔の繁華がすつかり址になつて了つたのではないかね？　たとへて見れば、沙漠の悲劇とか何とか言ふやうなものがあつて、人間が都會と共に全滅して了つたことではないかね？　何でも興安嶺から外の方に行くと、都會や市街がそのまゝ砂の中に埋れてゐるところが深山にあるといふではないか。現に、それをわざわざ探り出しに行つてゐる人もあるツて言ふぢやないか？」

こんなことを私は言はずにはゐられなかつた。

内蒙古でも、赤峰あたりは、それでも人家が澤山あつて、町をなしてゐて、日本からも領事などが行つてゐるけれども――現にそこに領事として赴任するH氏夫妻と一緒になつたりしたけれども、巴林あたりに行くと、もはや全く曠野の中で、町といふほどの部落をあたりに見出すことは出來ないといふことであつた。伯胥太拉からモリ廟まで二日行程、それから巴林までまた十日以上も沙漠の中を旅行しなければならないことを考へると、容易にそこまで入つて行くことは出來なかつた。さうした旅をするには、私達は長い間の糧食を携へて、二十日ぐらゐは何うにでもなるやうな準備をして、蒲鉾馬車の一二臺を家とも旅舍とも避難所ともして、そして毎日沙漠の中に明けては暮れ暮れては明けして旅行を續けなければならないのであつた。支那にはわるいの何のと言つてもまだ路があるが、そこにはもはや全く路はなかつた。沙漠の盡きないひろがりの中を、晝は磁石に頼つて見當をつけ、夜は星に頼つて何處までも何處までも行かなければならないのであつた。

六

ある日は私は萬里の長城を見に出かけた。私は案内者のH君と車で北京の西直門に行き、それから汽車で北へと向つた。

支那人の經營してゐる汽車は、概して綺麗と言ふことは出來なかつたが、この線はことに不潔であつた。二等は内地の三等よりもわるく、三等は腰を掛けるところすら碌にないといふ風であつた。支那人達は大きな寢具を携へて乘つた。

次第に汽車は北京の北に連亙してゐる大興山脈へと近寄つて行つたが、南口に來ると、もはやその山の襞も明かに深く入り込んでゐる溪谷もそれとはつきり指すことが出來るやうになつて行つた。やがて私達は右に左に谷の穿たれてあるのを見、人家の溪に架してゐるのを見、驛路の谷合を屈曲して縫つてゐるのを見、關帝廟の山際にぽつねんと立つてゐるのを見、更に居庸關を持つた昔の山驛のさびしく眼下に展げられて來るのを見た。私はいろいろなことを考へずにはゐられなかつた。何の時代にもこゝが破られると、北京が守れなくなるのが例であつたが、中にも明末の李自成に亡された明の毅宗のことが、脈々として一種の哀愁を私に誘つて來た。毅宗は居庸が陷ちたときいて、景山に登つて、黑烟の野を蔽ふのを見つゝ、嬪妃と倶にそこに縊れて死んだのであつた。「溪流處々似レ鳴レ環、塞外靑繞萬疊山、千古帝王無レ限恨、官兵不レ守蟠龍關」かうした詩がひとり手に私の胸に上つて來た。

それは丁度内地の碓氷か箱根のやうな氣のするところで、トンネルを出て行く度に、溪山が次第に趣を變へて行くさまは、旅客の心を慰めるに十分であつた。三四十分ほどで汽車は青龍站驛へと入つて行つた。

こゝで私達は下車した。私は轎車にH君は驢馬に乘つた。私達は暫しレールに添つてあともどりをしたが、そこから居庸外鎭の銘のある土壁の門に達するのは、さう大して遠くはなかつた。私達は山の峯から峯へと長く連つてゐる萬里の長城を見た。

土壁の下では、支那人が頻りに物を賣つてゐたりした。古い瓦の缺片だの、古錢だのを紐に吊してそれを遊覽客に勸めてゐるものなどもあつた。私達は土壁の門の傍から次第に上へのぼつて行つた。土壁の幅はかなりに厚く、少くとも二間くらゐの路が立派にそこに出來てゐるのを見た。破れた塼石の傍に、紫の草菖蒲が咲いてゐるのなどは、いかにも廢址らしい感じを旅客に誘つた。

上つて行くにつれて、萬里の長城といふものの形が次第にはつきりと私の眼中に落ちて來た。成ほどこれは大變だ！と私は思つた。これで七百里もつゞいつゐるんでは！　それも平地ならばまだしも、山の脈から脈へとつゞいて行つてゐるのでは！　私は上を仰ぐと同時に、くるりと大廻りに廻つて、私達の立つてゐるところへと下りて來て、それからずつと峯つたひに、終には連山の翠微の中に沒して行くその長い塼壁をじつと見詰めた。悠々とした「時」の羽風が私の耳を掠めて行くやうな氣がした。

塼壁は十町おきくらゐにところどころに、四角な城樓のやうなものをつくつてゐるが、勘くともそれは戍卒の據つて以て敵を防いだところで、そこから矢なり石なりを飛ばしたものであるといふことがわかつた。私達はそこに行つて、大きな石の陰の涼しいところで、持つて行つた晝飯の包を開いた。

何うせ、土壁は明代に修繕したものであるには相違なかつたけれども、しかもその地位だけは元のまゝであるといふことが深く私の心を惹いた。私の心は遠い遠い昔に行つた。戰國時代から秦の時代へと飛んで行つた。青年時代に讀んだ秦の將軍蒙恬のことなどがはつきりと私の胸に浮んで來た。

そればかりではなかつた。兎に角、この長城で拒かうとした外夷――しかもそれを完全に拒ぐことは出來ずに、終にはそのために中原を蹂躙された外夷の廣さを、また强さを思はずにはゐられなかつた。私は滿洲から蒙古にかけての民族の勃興を頭に描かずにはゐられなかつた。つゞいて星移り物換つて、今の

時代に到達したさまを頭に描かずにはゐられなかつた。今は支那は何を以つてこれを拒がうとするであらうか。何を以て世界の勢力の入つて來るのを拒がうとするであらうか。私は防禦的位置に常にその身を置いてゐる支那民族を氣の毒に思はずにはゐられなかつた。

七

『さうですね。大同府にある石佛は大したものださうですね。ある人の話ですが、慶州の石佛庵の石佛を世界一だと思つてゐたら、大同のは、もつとそれよりも立派ださうですね？　惜しいしことをましたよ。二日かける氣なら樂に行つて見て來ることが出來たんですからね。』かう私は何遍となく人に言つた。否、慶州の石佛を見てから、更に一層行つて見なかつたことを悔ゐた。

私は曾てある友達から、北京の面白いといふことを高調してきかされた。世界では、あそこが一番面白いでせう！　ロオマ以上でせう！　掘れば掘るほどいろいろなものが出て來る……！　盡きずに出て來る！　かうその友達は言つた。しかし、何うしてか、私にそれを見出す眼がなかつたのか、素養がなかつたのか、北京はさう大して面白いところとは私には思へなかつた。

『何うしてです？』

『だつて、何にも見るに足るやうなものはありはせんもの！……』

『だつて、いろいろな藝術品があるつていふぢやありませんか？』

『何ういふ？』

『喇嘛の、そら、何と言ひましたつけね、歡喜天さ。それから、清朝の御物や何か、大したものがあるつていふぢやありませんか？』

『あんなもの何でもないよ。あのラマの歡喜天なんか、わざわざ行つて見る價値すらないくらゐなものだ。まア、あれはこけおどしだね！　低級の遊覽者が見て感心しさうなものだよ。それから、例の宮殿の中の御物だつて、あんなものだとは思はなかつたね。何にもありやしないよ。それは陶器なんかには、ちつとはめづらしいものもあるかも知れないけれども……。』

『さうかしら？』

『少くとも、僕はさう思つた。それはね、贅澤品とか骨董品とかなら、それは澤山あるさ。しかし、贅澤品と藝術品とは違ふからね。いくら珠玉(たま)、寶石を鏤(ちりば)めたからつて、それが藝術品に

なりはしないからね。それに、古いものと言つても、北京には明代以前のものはありはしないからね！』

『さうかな？　何でも、その御物の中には殷だの周だののものもあるつていふぢやないか？』

『ある……それは主として鐵器だよ。ちよつとめづらしいといふべきものもあるにはある。しかし、あゝいふものは、藝術品ではないからね。土器や石器の類だからね。何方かと言へば、人類學者の領分に屬すべきものですよ』

『さうですかね？』

『北京よりは、朝鮮の方が餘程面白い。慶州でも京城でも、開城でも、いろいろものが殘つてゐるよ』

『では、北京の宮殿は？』

『あれだツて、規模が雄大だツていふだけぢやないかね。一つ一つ細かに見ると、柱なんかにも碌なものは使つてないよ。概して色で塗つてあるからね。色で塗つてあるといふことは既にごまかしだからね。欅の一枚板とか、樟の丸柱とか言つたやうなものはないらしいね。それから、あの屋根の一角に、小さな陶器の獅子などが連つて乘つてゐる、あれなんかも奉天あたりで壞して持つて來たものもあるけれども、あんなもの大したもんぢやないよ。唯、めづらしいといふだけだよ……。それから思ふと、奈良や京都には好いものがあると思ふね……。それから北京の正門外に天壇だの、先農壇だのといふ大きなものがあるが、あれだツて、建築材料はお粗末だね。大きいツていふだけだね。決して細かいといふところはないね。矢張、さういふ國民性なのかも知れないね。飽くまでも東洋式なんだね。ヨオロッパの藝術のやうに細微なところがないんだね。さう言へば、支那の古來の文學だつて、さうぢやないか。個性的のところはないぢやないか。詩にも戲曲にもはつきりした性格といふものがないぢやないか』

それに、私の行つた時は、例の凄しい、日輪も光を失ふといふ蒙古風が吹き荒んで、眼も明けては通れないといふやうな日が幾日も幾日もつゞいた。それに、あの蒸暑さと言つたら！　五月の初めに八十度近い暑さが絶えず室内の寒暖計に襲つて來てゐるのであるから……！　私に取つては、北京は決して居心の好い都とは言はれなかつた。

それに、前にも言つたと思ふが、町には電車はなし、車と馬車と自動車ばかりで、埃は立つし、市街は雜遝してゐるし、露店を出してゐる店は汚ないし、臭いし、何うしても明治十五六年あたりの東京といふ感じしかしなかつた。車も馬車も廉くて既に夥しく廉いと思はれた大連や奉天などよりも更に更に低廉

であるなども明治の初年を思はせるに十分であつた。二十錢もやると、大抵のところは喜んで驅けて行つた。

北京を思ふと、玻璃廠の狹斜に行つた一夜のことなども思ひ出された。それは滿鐵のU君が御馳走に伴れて行つて呉れたのだが――憲政會の代議士のM氏やI氏も一緒だつたが、あの狹い通りを、あの灯の明るい雜遝してゐる通りを、日本で言つて見れば新橋の細い通りと言つたやうなところを無理無理自動車で押分けて入つて行つた光景は今でもはつきりと眼の前にあらはれて來るやうな氣がした。

概して支那の狹斜は單純だといふ氣がした。その癖、例の排日宣傳から日本人と寢るのは恥辱のやうに言つてゐるが、その點は明治初年に日本の遊女が外國人を振つたのと似てゐるが、全體から言ふと、その設備は寢ることの方に專門になつてゐはしないかと思はれた。室などのつくりも至極簡單で、大抵奧に寢室を持つてゐるやうに出來てゐた。私は今でもはつきりとU君がいかにも大盡らしく、日本の紙幣を彼方の太洋に替へて、數十枚重ねた銀貨をその家の妓にわたして、他の妓の入つて來て歌をうたふ毎に、それについて來て胡弓やら笛やら吹いた師匠に一人に銀貨一枚づゝわたさせてやつたさまを眼の前に浮べることが出來た。すると、お客樣達が皆な啞で、折角妓がチヤホヤして來ても、內地なら、ホア此方は好いたらしいお方ねえとか何とか言つて近寄つて來ても、それを何ぅすることも出來ず、終には禿頭を撫でられたり、髯を引張られたり、思ひ設けぬところに手を入れられたりしても、いやに默つてにやにやしてゐたことを思ひ出すことが出來た。否、內地ならば、唄のひとつも唄ひ、戲談のひとつも言つて、私のやうな無粹なものでも姐さん、面白い話でも聞かせ給へなどと言つて、少しはうかれ出すところなのを、啞の情けなさには、U君が頻りに面白さうに、何か深い仲でもありさうに、笑つたりはつちやけたりしてゐるのを默つて指をくはえて見てゐなければならなかつたことを思ひ浮べることが出來た。否、更に一歩を進めて、誰れかが『何うも矢張言葉が出來なければ駄目だね！』からいかにも失望したやうに言つたのに對して『何アに、さうでもないよ。これで結局寢る段になれば、啞でも何でも大丈夫だよ。そこは所謂靈犀一點の通ずるありだからね』と言つて、は、はと誰かが大きく笑つたことをはつきり私は思ひ浮べることが出來た。

私は別に深くその情緒に浸つたといふわけでも何でもないから、はつきりとは言ふことは出來なかつたけれども、支那の狹斜では、その歡――一人々々入つて來て、師匠の胡弓や笛につ

れて、例のセンチメンタルな節で、聲張り上げて歌ふ調子に、一種言ふに言はれない情緒のあるのを私は感じた。否、独斜ばかりではなかつた。例の芝居の梅蘭芳の歌曲などにも、矢張さういふ歌と聲に重きを置いてゐるのであつた。『あの歌だけですね。あのセンチメンタルな節だけですよ。他には別に大したものはありませんね。』あとで私はこんなことを私の相手のM君に言つた。

大連でも私はさうした人達に逢つたが、無論それは北京とは比べものにならないほど品の下つたものであつたが、それでも私はそこにゐた十三くらゐの張菊子といふ女の兒が、梛子といふものを鳴して、節を合せて歌つたその歌を今でも忘れることが出來なかつた。それに支那の妓は概して小つくりにつくられてあつた。こんな小さな、子供見たいなものが何うなるものかと思はれるやうなものが却つて支那の人達には喜ばれるといふことであつた。つまり自分の愛したものを殘虐に取扱ふといふところに一種言ふに言はれない歡樂と愛情とを感ずるらしかつた。その情緒が卽ちあのセンチメンタルな歌曲を生んだ所以ではないか。そこに支那人の持つた一種の變態性慾があるのではなかつたか。劇などを見ても、さういふ情緒と殘虐と性慾とが一緒になつてゐはしなかつたか。否、支那の國民性の中にも、何處かさうしたところがありはしなかつたか。

八

これに比べると、ハルビンで見たロシアの踊妓は、驚くべく大きな肥つた體格をしてゐた。支那の妓とは、その形から言つても、その趣味から言つても、またその歌から言つても、すべて正反對と思はれるくらゐにそのくらゐに違つてゐた。あんな大きな女には、とても日本人は手も出せさうにも思へなかつた。

ハルビンの北滿ホテルで見たロシア女のはだか踊と、北京の玻璃廠で味つた一夜の感じとは東西の好い對照を成してゐると言ふべきものであつた。北滿ホテルでは、私は夜の一時過ぎに起された。私は目を摩り摩り下りて行つた。『まア、そんなことを仰しやるもんではありませんよ。折角、お出でになつたんぢやありませんか。北滿のはだか踊を見ていらつしい。あとで後悔しますよ』からホテルのマネイチヤアに言はれて、爲方なしに、私は下のレストランへと下りて行つたのであつた。そこにはまださう大勢客が集つてゐなかつた。何でも三時頃にならなければ本當には客は集つて來ないといふことであつた。

私はそこに夜の明方近くまでゐた。それにしても何といふ退

屈な一夜であつたらうか？　私が眞面目なツバアな顔をして默つて坐つてゐる前で、踊妓は客と手を取つて踊り、それにつれてピアノが鳴り、時には正面の舞臺の幕が明いて、茶番とも一幕物とも諷刺劇ともつかないやうなものが演ぜられ、接吻と握手との歡樂が到るところで交換せられたばかりでなく、私の前に席を占めた――否むしろ私のためにマネイジヤアが親切に引寄せて呉れた肥つた三十過ぎの英語でもフランス語でもドイツ語でも何でも出來るといふ女が、勝手に高價な鱶い子を取寄せたり、シヤンペンを拔かせたり、友達の踊妓をそこに伴れて來ていろいろなものを飲み食ひさせたり　饒舌つたり、歌つたり、騷いだりしてゐたではないか。そしてそれが矢張北京の玻璃廠でのシインと同じやうに、向うはさうしてはしやいでゐるのに拘らずこつちは默つて唯それを見詰めてゐるだけではなかつたか。そしてあのはだか踊などいふ愚劣極まるものを見なければならなかつたではないか。

私はあとでM君に言つた。

『不思議だね？　日本とは正反對だね。日本では、姐さんがお座敷で物を食つたり何かすることは、むしろ恥としてゐるが、それもお馴染か何かで、あとで御馳走をしてやらうとか何とか言ふのなら別だけれども、初めて出たお座敷で物をむしやむしや食ふなんていふさういふ無作法は田舍の藝者でもなくつてはやりはしないからね。それを、ロシアの踊妓は、平氣でやつてゐるからね。食ふのが稼業と言つたやうな形で少しでも食つたり飲んだりしなければ損だといふ風だね。僕はあまり盛んなので、あつけに取られて、じつと見てゐたくらゐだつたよ。ハルピンあたりの場末の踊妓だから、それであゝなのかしら？』

『いや、本場に行つたつて、矢張あゝでせう』

かうM君は言つて『何うも、ロシアの女よりは、支那の女の方が、まだいくらか日本人の氣質には合ふさうだね。ロシアの女は、とても相手にも何にもならないさうだよ』

『ぢや、日本の妓に對して、支那人やロシア人は何う思ふだらう？』

『矢張、駄目らしいですね……。何しろ、日本のは馬鹿に高いですからね。ちよつと料理屋にあがつて酒を飲むだり女を聘んだりするとして、料理がポツポツと三四品あるだけで、女がちよつと來て、ペコペコやつて、それで、支那の狭斜町の三倍は取られるんですからね！』

『成程、さう言へば、さうだらうな。そして矢張、言葉はまるでわからないと來てゐるんだから……』

『矢張、何處の國でも、深く浸れば面白いんですよ。唯、通り

一週に、好奇に上つ面を撫でたんでは、本當の味は出て來ませんからね！』こんなことを言つてM君は笑つた。

『矢張、日本人には日本の女が好い』私達はこんなことを言つて、それから以後は支那の女やロシヤの女には成るたけ近寄らないやうにした。

では、內地から滿洲に行つてゐる妓達は何うかと言ふのに、大連あたりには流石に、お妻だの、おせんだの、若いのでは玉枝だのといふ好い姐さんがゐるけれども、またハルビンあたりには、陸軍の將軍連を相手にした、辣腕な妓達もゐるらしかつたけれども、概して荒んだ感じのする、靜かな情緖などを味ふことの出來るやうな妓達が多いのを私達は見た。それに、氣障なのは、わるく氣取つて、お座附はつけず、踊はをどらず、客が三味線を彈かせたりすることを不粹とし、唯お酌をしさへすればそれで好いといふ顏をしてすましてゐることであつた。これは半はお客の方にもその責任はあるであらうけれども無論妓達がわるいばかりではないであらうけれども、もう少し好い唄でもきかせて貰へたり、好い踊でも見せて貰へたり面白い話談のひとつもきかせて貰つたりするやうな妓達が欲しいと私達は思つた。

九

『では、支那料理は何うです？』

かうある人が訊いた。

『さアね……』

私はかう言つたきりだつた。

『あつちのは、大變好いつていふぢやありませんか。あつちの料理を食ふと、矢張、支那料理は世界一だつていふ氣がするつていふぢやありませんか――？』

『さうかね……』かう言つたが、私は思ひ出したといふやうにして、『さう言へば、かう言ふ話があるんだよ。あつちに初めて着いた時にね、滿鐵で支那料理を御馳走して呉れたんだよ。その時、そこに招待されて來てゐる新聞社の重立つた人達がね、矢張、君達の言ふやうなことを言つてたよ。料理としては、西洋料理も好いが、支那料理の旨い奴にはかなはない、何と言つても、支那料理は世界一だ。それから思ふと、日本料理が一番貧弱だ。お恥しいとおもふくらゐだ……こんことを言つてゐたよ　その時、僕は馬鹿なことを言ふ奴があるもんだな！と思つた。かういふことを言ふものがあるんだから浮ばれないとも思つた。しかしね、折角、御馳走してゐてくれたのに、そのわる

口を言ふでもあるまいと思つて、その時はひかへてゐたよ。默つてゐたよ。それから、僕は海をわたつて天津から北京に行つたが、何處も彼處も、御馳走と言へば支那料理で實は閉口頓首して了つた。それにね、ホテルでは、朝に夕に西洋料理を食はせられるんだからね。玻璃廠あたりに行つた時にはもう料理に手を出す氣もなかつたくらゐだつたよ。で、奉天に來て、ヤマトホテルの二階にゐると新聞社の記者がやつて來て、それも小生意氣な奴がやつて來て、また支那料理の旨いことを說くぢやないか。たまりにたまつた不平が勃發したといふわけかね。そこで、僕はめちやくちやに支那料理のわる口を言つたよ。するとね、それが、あくる日の新聞に出てね。閉口したよ』

『それぢや、貴方は支那料理に感心しない方なでんすか？』

『當り前さ……。日本人の舌には、あんなものは食へないよ。それも、甘たるい料理が好きだつたり、舌がまだ十分にデシプリンを經てゐない人達は別だが、少し料理のとのわかるものは、あんなものなんか珍重しやしないよ。考へて見給へ。日本の料理は、ことに江戸前の料理は、匂ひとかかをりとかいふものを極度に重んじてゐるぜ！　それで食はせるやうに出來てるぜ！　從つて野菜でも、魚類でも新鮮といふとを極度に重じてゐるからね。刺身だとかあらひとかいふものはすべてそれだよ。非常にデリケイトに舌に訴へるやうに出來てゐるんだよ。日本の料理――江戸前の料理は、味ではないからね、匂ひだからね。そこを買つて貰はなくつてはこまるよ。いくら味が好くつたつて匂ひがなくつては、京美人がごてごてとおしろいをつけたやうなもんだからね。ちつとも感じを惹かないからね。それは支那料理は、味は好いかも知れないが、とても匂ひといふやうなデリケイトな感じはないからね。第一、支那料理は新鮮の魚などいふことをあまり多く問題にしてゐないよ。魚類は多く干物を使ふよ。だから、北京の市場あたりを通つて見ても、あの五月の溫氣の中に、もうくさくなつた鯛なんかが平氣で賣買されて行つてゐるからね。あつちでは、煮さへすれば、少しくらゐわるくなつてゐても構はないらしいんだからな。さういふ料理を食つてゐるものに向つて、江戸料理がわかるわけがないぢやないか？』

『ふむ、さうかな。それも一說ですな。大抵の人は、向ふに行くと、皆な支那料理をほめますがな？』

『皆な雷同だね。人が言ふから、自分も言ふツていふ奴だよ。內心では避易してゐるものが多いんだよ。支那料理なんか三日も四日もつゞけて食はせられて見給へ、それこそたまつたもんぢやないからね！』

『さうですかね？』

『日本料理で言つて見ると、上方料理と江戸前の料理と違ふ點もそこにあるんだよ。上方の料理はより多く支那料理に近いよ。匂ひよりも味を重んじてゐるよ。現に大阪の鮨と東京の鮨とを比べて見給へ。大阪のは旨いけれども、匂ひがないから。從つて、東京の鮨は、日本橋の橋の袂にでも行つて、握つたのをすぐ食はなければ本當の旨さはわからないといふ形があるけれども、大阪の鮨は、味本位だから、三日も四日も置いても差支ないやうに出來てゐるよ。つまり、支那料理はそれだね。むやみに人工ばかりが加へられてあつて、天衣無縫といふやうな三昧境にはまだ達してゐないつていふわけだね！』

『成ほどね！』

『それに、支那料理は酒を本にして作つたものではないよ。その反對に、日本の本當の料理は、酒が對照だからね。一體、支那人は李白一斗詩百篇などと大きなことを言つてゐるけれども、餘り酒を飲むとは思へないね。支那人には酒よりも阿片だね。阿片の買へない奴が、きつい安ショウチウでも飲むくらゐなもので、あとは大抵あのビイルよりも醉ふ程度の少い甘しつつこい焦茶色をした紹興酒を飲むくらゐなもんだからね。あんな酒なら、いくら飲んだつて、あとか　あとへとさめて行つて了ふよ。何しろ、支那人は酒の中に氷砂糖を入れて飲んだりしてゐるんだからね。あれを見た時には、やり切れない氣がしたよ』

『さうですかね。では、西洋料理は？』

『西洋料理だつて、うんざりさ……。それはね、支那料理よりも、匂ひを重んずるやうな點はいくらかあるにはあるけれど、矢張、衞生だの、性欲だのを考へに考へ拔いてつくられてあるやうな料理だからね。そのかはり、西洋料理でも支那料理でも體にはよく合ふやうに出來てはゐるね。少しくらゐ餘計に食つても、翌日それが體に障るやうなことはないね。そこに行くと、日本料理は何も考へてはゐないからな。飽まで第一義的だからな。旨いものなら、體に少しくらゐ障つてもかまはないといふところがあるからな……或はそれはあまりに自慢にはならないかも知れないけれど、第一義的だといふ證據にはなるよ』

『ロシア料理は？』

『大戰の後の物價の關係もあるかも知れないけれども、ロシア料理は馬鹿に安かつたよ。ハルピンあたりでは、一皿五十錢も出せば立派な料理が食へるんだからね　それも第一流のレストランで……！　第二流　三流のところに行けば、一皿、八十錢　六十錢といふ風に安く食へるんだよ。そして食ふものは同

じなんだ……。何うしてかといふと、第一流のレストランの殘つた奴を第二流のレストランが買つて來て使ひ、第二流のレストランの殘つた奴を第三流のレストランが買つて來て使ふといふ風になつてゐるんださうだ。そしてそれだけづつ安くなつて行くつて言ふんださうだ……』

『へえ、それは本當かね。それは面白いね！』

『何でもさうだといふことだ。それに、ロシア料理は、汁(スウプ)が大きな鍋に入れて始めに出されるね。日本のおつけのやうな氣がするね。そしてそれはある中は何杯も盛つて食ふやうになつてゐるからね。ちよつと感じが違つてゐるよ。それに、出す品數が、少ないから、何うしてもパンを餘計に食ふやうになるね！』

『西洋料理や支那料理に比べて何うです？』

『いくらかさつぱりしてゐるやうな氣がするけれども、矢張日本人には駄目だと思ふね。しかし鱶の子なんかはちよつと旨かつた――』

更に私は言葉をついで『しかし、支那料理にしても、あゝした飯店(レストラン)で食ふものよりも、他に、家庭に食ふ料理に、本當の旨いものがあるんぢやないかと思ふね。單純な簡易なたとへて見れば、アヒルのつけ燒のやうな、羊の肉を燒いて食ふやうな、さういふ、料理に本當の旨いものがあるんぢやないかと思ふね！』

十

私の見た川の中では、何と言つても、松花江と鴨綠江とが、大きくもあり立派でもあり且つ見事でもあつた。それを思ひ出すと、はつきりと眼の前に浮び上つて見えた。

何方かと言へば、松花江の方が幅が廣いかと思はれるくらゐであるのに、しかもまた上流の若さを失はず、帆船の上つて來る數も少ないのに比して、ジャンクや筏で半ば埋められてゐるやうになつてゐる鴨綠江の流も私の心を惹かずには置かなかつた。下流と上流との區別を私はそこでもはつきりと味ふことが出來た。

松花江で特色とするに足りるのは、いかにも曠野の中を流れてゐる潤々とした大河といふ感じであつた。川の流の上空に白いまたは灰色の雲の浮んでゐるさまも北滿洲の荒涼とした野を思はせるに十分であつた。私はじつと立盡して徐かに大きく動いて行くその雲を見詰めたことを繰返した。

少くとも隅田川の六倍七倍はあるだらうと私には思はれた。それはハルビンの一番賑やかな大道を西に突當つたところが

その河岸でその下流七八町のところに大きな鐵橋が虹のやうに懸り、河に添つた路には、ロシヤ人と支那人とが織るやうに歩き、その堤防の下には、川に出る客の來るのを待つて、小さい大きいボートが何隻となくたぶたぶと水に漂つてゐたのを私達は見た。それにしてもロシアの女達はいかに快活で且つ元氣であつたか。かれ等はそこに下りて行つたと思ふ間もなく、巧にあの小さなベカを操つて、川の中流遠く漕ぎ出して行くではないか。赤い、青い、または水色の帽子が靜かに初夏の日影に照つて、何とも言へない快さをあたりに示してゐるではないか。

　その岸には、この川を下流遠く、場合に由つては、ニコライウスクあたりまで下つて行くといふ支那の汽船が碇泊してゐた。何でも、つい昨年までは、日本でも滿鐵でその下航を定期でやつてゐて、現にその汽船が向うに繋がれてあるのであつたが、撤兵後は、土地の勢力が全く支那に歸して、今ではこの川を上下する航路の權利をすら失つたといふことであつた。『ではこの支那の汽船では下れないかね？　この川を下るのは面白いと思ふがな！』から私が言ふと、M君は飛んでもないといふ顏をして『とても、とても……どんな眼に逢ふかわかりやしないよ。支那人といふ奴は、陰險だからね。金を持つてゐるのを見せたが最後、殺されることを覺悟しなければならないからね！奴等は殺してから金を取るのが例だからね。この汽船になんか乘れば、どんな眼に逢ふかわかりやしないよ』

『さうかね』私はじつとそこに繋がれてある汽船を見詰めた。支那人のボウイらしい奴が濡れた縟で頻りに甲板を洗つてゐるのを私は見た。

　ハルピンではそのやうに大きいけれども、それからずつと溯つて、尠くとも二三十里溯つて、吉林に行くと、その川の感じが全く趣を異にしてゐた。そこは、內地で言つて見れば、利根川の栗橋あたり、信濃川の長岡三丈あたりにそつくりであつた。そこではもはやさう大して大きな川といふ感じはしなかつた。帆船なども極めてたまにしかのぼつて來なかつた。吉林のあの古い支那街を丁度帶のやうに取卷いて流れてゐるさまは、ハルピンのあの河岸の眺めと全く趣を異にしてゐた。同じ川とは思はれぬほどそれほど狹く小さくなつてゐた。

　鴨綠江では、あの濁つた色が、あのたぶたぶと深く濶く湛えられてゐる水のさまが、ジャンクや筏が半ば水を埋めるほど行つたり來たりしてゐるさまが、何とも言ふに言はれない感じを私に誘つた。私は長い單調な西朝鮮の平野を通つて來て、そこで始めてほつと呼吸がつかれたやうな氣がした。私は長い鐵橋をわたる間、汽車の窓から顏を離さうとはしなかつた。

そこは始めは唯素通しただけであつたつたけれども、國境といふ感じが深く私の旅情を動かした。それに、安東で時計を一時間後れさせるといふことと、税關吏が汽車の中まで入つて來て旅客の荷物を一々取調べるといふこととが、長い旅行の中の一章を終つて更に他の一章に入らうとする時のやうな感じを起させた。否、そればかりではなかつた。旅客はそこに來て全く異つてゐる人間と村落と停車場とを見た。朝鮮人の白い服裝はもはやこゝでは目にすることは出來なかつた。停車場もあの土壁の汚いのではなしに、小ぢんまりした煉瓦の感じの好い建物が續いた

私が二度目にそこに行つた時には、私は滿鐵の事務所の人達に頼んで、ジャンクを一隻雇つて貰つて、その濁つた水量の多い鴨綠江を支那人の港のあるあたりまで溯らせて、そして歸りは水の流に任せて下つた。それは何とも言はれない愉快な心持だつた。『實際、君、好いところだね。あの鴨綠江節の發祥地たるに相應しいね。何うしたつて、かういふ大河に日夕面してゐると、あゝした歌の節がひとり手に出て來るよ。自然に出て來るよ』こんなことを私は相棒のM君に言つた。

私は遙かにその上流を思つた。一週間も二週間もかゝつて猶ほ達することが出來ないといふやうなその河港を。猶ほそれから遠く遠く、筏にして流して來る木材の伐り出されて來るあたりのその森林を。更に遠く遠く高い山の頂に白く雪の積つてゐるその大きな山脈を。私はじつとそこに立盡した。

私はその夜、所謂その鴨綠江節なるものをあるところに行つてきいた。それは思つたよりも粗野で、單純で、節と言つたつて別に大したものもないものであつた。東京あたりで唄つてゐるものは、すつかり美化されて了つてゐるものであつた。『成ほどね、かういふ素撲なところに却つて價値があるんだね。面白いね……。』こんなことを私達は言つた。

何でもその唄は、筏を搦げに來た材木屋さん達が流行らせたので、その替歌の文句は軍人がその半分以上を作り出したといふことであつた。『軍人さんにも中々さういふ方がありましてね！』土地の姐さんらしい妓はかう言つてそれに關する話を種々としてきかせた。

この二つの大きな河の他には　大沽から天津へと溯つて行く間の白河が私を樂ませた。あそこは最早滿洲でも支那でもなく遠くオランダあたりにでもやつて來たやうな心持を誘はれるところであつた。そこには凄じく濁つた水が幾重ともなく折れ曲つて、時には土地が低いために逆流して、何方が上流だか下流だかわからないやうな光景をあたりに展げた。風車などもそこ

こゝに見かけた。それに、兩岸にある楊の新緑が何とも言へず美しかつた。何でも花の季節には、わざわざそこまで見物に出かけて行くものもあるさうだが、荒川堤の櫻などよりももつと綺麗であるといふことであるが、私の溯航して行つた時にも、まだいくらか花が殘つてゐて——面影ばかり殘つてゐて、薄く粧つた美女を簾越しに見るといふやうな一種のなつかしさを私に　つた。

甲板の上に立つてゐた私は訊いた。

『さつきからさう思つて見てゐるんですけれど、あの網舟は何を獲つてゐるんです？』

『あれですか？　あれは白魚を獲つてゐるんです……』

から船の事務長は答へた。

『白魚？　へえ？　この濁流の中で、白魚が？』

私は不思議な氣がして、じつとそつちを見詰めた。蘆荻の青く生えてゐる岸から十間ほど離れたところには、二三隻の小舟が凄しい濁流に抵抗しながら、否、時には五間も六間も押流されながら、頻りに網の綱を引張つてゐるのを目にした。不意にジヤンクのわるく暗い色をした帆が私達の立つてゐる甲板を大きく近く掠めて行つた。

十一

『おい、見給へ、皆なあゝして徒渉して行くんだね！』

汽車は今大凌河の鐵橋へとかゝりつゝある。見ると、それは半ば砂原で、水と言つてもさう大して深くは溜つてゐなかつたけれども、道もあるとは思はれない砂の上を通つて來た一輛の荷車は、別に危險とも何とも思はないといふやうにして、平氣で、その河の中へ入つて徒渉して行くのであつた。

『ほ、えらいことをするね！　ほゝ、車がすつかり水の中に沒つちやつたぢやないか？　や、奴等、すつかり濡れ鼠だ……えらい眞似をするた！　それでも何うやらかうやら徒渉して行くぜ！　それ見給へ、もう深いところから餘程出た……』

じつとそれに視線をそゝいでゐた私達はこんなことを言つた。いかにも原始時代の生活——河に橋もなくて遠廻りして徒渉して行く原始時代の生活がはつきりと私達の眼の前に浮んで來た。

その邊、そこは錦州に近く、北狄が中原を犯して行く時にいつでも戰爭があつたり何かしたやうなところであつた。遼や金や宋の時代にも、そこは度々防禦軍の據點になつたのであつた。

この大凌河に限らず、滿洲の川は大抵さういふ風な、車でも

人間でも徒渉して行くやうな川が多かつた。渾河、遼河あたりでも、その上流は皆な徒渉が出來た。そんなことは平氣だといふやうにして、長い鞭を日に光らせながら、支那人はその趁つて來たアタアタ車を河水の中に入れた。

それでも遼河はかなりに大きく、その流域も頗る長かつた。私はある日、鐵嶺から馬車を驅つて、そこから一里近くを隔てゐるその河港の一つである馬溝蜂へと出かけて行つたことを思ひ起すことが出來た。それにしても何といふ惡路だつたらう。また何といふ埃塵の多い日であつたらう。二三町も行くと、もはや馬車の中はすつかり塵埃で一杯になつた。トンビの袖は拂つても拂つても白くなつた。『えらい塵埃だね！』かう私達は何遍眉をひそめて言つたか知れなかつた。

それでも馬溝蜂はちよつと面白いところであつた。維新前には、日本にも、かうした河港が、渡頭が、利根川や信濃川にもあつたに相違ないと私には思はれた。川は滔々として流れてゐる！ 何の樹もなく、林もなく、荒涼寂寞としてゐる中を日に光りつゝ、小やかな渦を卷きつゝ、靜かに緩やかに流れてゐる！ 此方の岸には、渡船小屋があつて、そこに多數に集つて來てゐる荷馬車を順々に扁平たい船に乘せるために、曳々聲を出して努力してゐる。その手前に、湯氣の騰つてゐる出來立らしい黄い饅頭を一面に並べ立てて、頻りに客を呼んでゐる屋臺店があるかと思ふと、此方には、大きな傘を張つて、その下に凉しい飲料などを準備してゐる肥つた爺などがゐる。そこから遠くからM君が寫生してゐると、その周圍に大勢支那人がやつて來て、始めは何をしてゐるのかといふ風で見てゐたが、やがてそれがわかると、あの肥つた爺を寫生してゐるのだとわかると急に面白がり出して、わざわざ御苦勞にもその爺のところに走つて知らせに行くものさへあるといふ始末で、いかにもロオカルな感じに富んでゐるのを私達は見逃さなかつた。

帆が一つ大きなスワンのやうに緩かに上流から下つて來た。

『何うしても、かうなると、日本の風景に似てますね？』

私はかう言つて、じつとそれを見詰めたが、『それで此處から營口まで幾日くらゐかゝるんでせう？』

『わけはないんでせう！ 一日一夜もあれば行けるんでせう、何でも、昔はこの川の舟運といふものは大したもんだつたさうですよ。大豆は皆なこの川によつて牛莊なり營口なりに出したんださうですからね。季節には、この川が帆で埋められるくらゐだつたさうですよ』

『矢張、何處も同じですね。汽車が出來たために、さういふシインも段々亡くなつて了ふんですね。内地でも、利根川あたり

は、ことにさういふ感じが深いですね！　昔、榮えた河港がすつかりさびれて原始時代にでも歸つたやうになつて淋しく流れてゐますからね！』

『この滿鐵が出來たために、この川もこの河口にある營口も、すつかりさびれて了つたんですからね！』

『これで飛行機の時代になると、またぐつと世界は變りますね、汽車も汽船も無用の長物となつて了ひますからね！　海なんかでも昔の原始時代の狀態になつて、魚族が棲息するだけになつて了ふでせうからね！』

『本當ですね。何うなつて行くかわからないやうなものですね！　この世界は！』

私はこゝの河港から定期和船の出た時のことだの、旅客が大勢水路を求めて此處に集つて來た時のことだのを想像して長い間じつとそこに立盡した。物賣の大きな傘には初夏の日影が美しい線をつくつて流れた。

十二

眺望の地點としては、普通には、吉林にある北山公園と鐵嶺にある龍首山公園とに指を屈しなければならなかつた。龍首山に行つた時には、丁度娘々廟の祭禮の季節だつたので、鐵嶺の城內には美しく着飾つた娘達やいやにハイカラに作つた若者達などで丸で咽せ返るやうな人出であつた。街の通りには、物賣店が到るところに並んでゐて、藥物の賣れること、饅頭の賣れることと言つたら、私はちつと遠く明治の初年に身を戻したやうな心持にならずにはゐられなかつた。

それは私達が曾て見て來た、また曾て樂んで來た祭禮の賑はひそのまゝではなかつたか。そしてそれは今は見たいにも見られなくなつた初夏の祭禮そのまゝではなかつたか。私は山車や踊屋臺や、花見や、御輿や、さういふものの雜遝の中に再び自分を發見したやうななつかしさを感じた。

龍首山のあの古塔のあるあたりは、いかにも眺望に富んでゐた。北に東に連亘してゐる山巒の波濤も美しく繪のやうであつた。それに對して大きな料理屋などがつくられてあるも不思議な氣がした。何でもそれは日支合辦であるといふことであつた。

支那では、男子よりも女の方が却つて早く覺醒して來たと言はれてゐるが——現に、北京で聞いた話では、高等女子師範の生徒などに、今までには見ることの出來ないやうな活潑さと怜悧さとをあらはして來たものが澤山にあるといふことだが、さういふ風に覺醒して來れば、支那も捨てたものではない、今に

は日本のやうに開けて行くと思はれるやうな氣分が十分に出て來てゐるさうだが、成ほどさう言はれて見ると、龍首山公園あたりに散歩に出て來てゐる女學生らしい女の群にも、いくらか『若い支那』といふことを考へさせられるやうなところがないではなかつた。かれ等は平氣で三々伍々唱歌らしい歌を口にしつゝ歩いて行つた。今までの支那の女とは違つて、自由に、大膽に、自然の空氣の中に浸るといふやうにして歩いて行つた。

M君は言つた。『本當ですよ、女學生には、えらいのがありますよ。支那の女は決して絶望ではないと思ひますよ。男子よりもたしかに怜悧だ……。それに、かういふことが言へる。支那は男尊女卑の國と言はれてゐるが、實際は女の勢力の方が大きいんですよ。支那では、家庭では、女が主人公ですからな！』

『さうでせうね。卑められてゐるだけそれだけ却つて實力を持つてゐるつて言ふわけですね。だから、女性開放などといふことも變なもんですね。開放されると、却つて女は實力を維持してゐられなくなるかも知れない――』

『さうかも知れない』

こんな話をしながらそこを歩いたことを私は思起した。

吉林の北山公園に行つた時には、長春にゐるI君も一緒に行つた。I君は故伊藤公の子で、顏がよく似てゐて、話をしてゐると、博文公がそこにゐるかと思はれるくらゐであつた。靜かな、感じの好い人だつた。私達は長春會議にロシアのヨッヘエ・君がゐたなどといふヤマトホテルの一室で、旨い蕨の味噌汁を食つたことなどを思ひ起した。

何でも龍潭山に登れば、もつと視野がひろびろとしてゐて、とてもその比ではないさうであつたけれども、しかも私は北山公園だけで滿足しなければならなかつた。私達は滿鐵の馬車で――ロシアの避難民で曾てはセミョノフのコザック騎兵大尉であつたといふ大きな四十男の鞭を取つてゐる馬車で、混雜した路の泥濘な、汚ない街やら市場やら門外やらを通つて行つたが、私達の間には絶えずその避難民の話が盡きずに出るほどそれほど襤褸を着たり大きな包を持つたりしたロシア人がそのあたりを歩いてゐた。ある軍衙らしいところには、露國避難民救濟所などといふ大きな表札がかゝつてゐたりなどした。何でもさういふ人達は、冬期松花江の結氷してゐる上をずつと此方まで歩いてのぼつて來たものが多いといふことであつた。北山に登つてからも、私達は東北に連亙する山脈を仰いで、渾春から寧古塔を經て段々と此方へ出て來たロシヤの避難民のことを思はずにはゐられなかつた。

吉林の滿鐵事務所には、若い、元氣な、何でも新婚して夫人

を伴れて來たばかりだといふの若がゐたが、私達のために、松花江を漕ぎ廻るための細長い、何のことはない、キスといふ魚のやうな舟を一隻世話して呉れた。お蔭で私達はその靜かな大きな河をわたることが出來た。またその家々の弓形に水に臨んでゐる吉林の町を見ることが出來た。否、それればかりではなかつた、私達は對岸に行つて、そこに裸になつて洗濯などをしてゐる、楊の枝に洗つたシヤツなどを干してゐるロシアの避難民と相語ることが出來た。

十三

女中といふものも、旅ではなつかしいもののひとつだ。五六日もそこに滯在して、いろいろ世話にもなり、洗濯物なども頼み、時には綻でも縫つて貰つたりすると、一種のなつかしさが出て來て、何となく細君のやうな氣がするものだ。中には離れがたい羈絆をぢき拵へて了ふ人達もあるが、それも尤だといふ氣がしないでもなかつた。

大連の遼東ホテルのお繁さんだの、お琴さんだのといふ人達もよく世話をして呉れたつけ……。かう思つただけでも、私の眼の前をいろいろな女の人達が掠めて通つて行つた。湯崗子では、菊代さんといふ人がゐた。熊岳城では、何と言つたか名を忘れたが、眼の大きい髮の濃いチヤアミングな人がゐたことをはつきり私は覺えてゐる。名で覺えてゐる人と、顏で覺えてゐる人と、態度で覺えてゐる人との區別などをも私は考へずにはゐられなかつた。

鐵嶺の松花ホテルで見た近江の琵琶湖の東岸で生れた人も私にははつきりと頭に殘つてゐた。それはつい五六日前、内地で結婚して旦那さんと一緒に此方にやつて來たばかりだといふことで、滿洲のことについてはまだ何にも知らないらしかつた。何でもその旅舍の主婦がその伯母に當つてゐるといふことであつた。例の京都にして京都でないあの大津附近のやさしい言葉が、私に一種の情緒を誘つた。伊賀から近江にかけての女のやさしさなどが繰返された。

安東ホテルの若い主婦はハイカラで、少しは雜誌なども讀んでゐるといふ風だつたが、そこにゐる女中もすべて綺麗で、中でもお玉さんといふのが、怜悧な美しい、綺麗な眼の持主であつた。

しかし滿洲では、京都以東の女を見るのは容易でなかつた。大抵は西の方の生れのものが多かつた。長崎、熊本のものが一番多く、次ぎには廣島、下の關あたりの人達が多かつた。成ほどそれもその筈だ。下の關や長崎あたりならば、汽船に乘りさ

いすれば、一日か二日で梁に行つたり來たりすることが出來るのであるから……、

しかし、誰でも天草の女と言はれることを非常に深く嫌つてゐるらしかつた。『さうよ、何うせ、天草よ！』こんなことを言つて女中はよくツンケンして客に當り散らした。

關東生れといふ女には殆んど邂逅さなかつた。たゞひとり京城の天眞樓に埼玉の松山のものだといふ女中がゐたが、これもちよつと美しい感じの好い人だつたが、幼ないころから京城に來て了つたので、何にも故郷のことは知らないといふことであつた。それでは關東でも關東といふことは出來なかつた。藝者達にも、名古屋のものは、それでも二三あつたけれども、純粹な東京生れには遂に私は出會さなかつた。

人に由つては、湯崗子や熊岳城の女中の訓練の仕方について不滿を抱いてゐるものもないではなかつたけれども――現に私なども、そのあまりにキチンとしすぎ、あまりに切口上になり過ぎ、溫泉場の女中といふよりも、何處か貴族か何かの小間遣でもあるやうな感じのするのを不思議に思つた一人であつたが、しかも次第にそれもわるくはないといふことはわかつて來た。ことに、朝鮮の東華溫泉あたりに行くに及んで、一層そのわるくないことがわかつて來た。

私はあの東華溫泉の野卑と不純とに比べて、湯崗子、熊岳城がいかに純で、靜かで、且つキチンとしてゐたかを思はずにはゐられなかつた一人であつた。

十四

『君、君、これが所謂柞といふ木だね？』

『さうです――』

『それぢや、もうこゝに柞蠶が飼つてあるんだね？』

『さうです』

私は一面に、眼の前に、若い、こんもりとした、いかにも嫩らかさうな綠葉が、さう大して高くない程度で、ぢつと山に凭つて綺麗につゞいてゐるのを目にした。ふとそれは一箇所や二箇所でなく、谷合のやうなところを山から山へとずつとつゞいて連つてゐるのを目にした。

『成ほどこれは面白いね。一番自然だね。これから思うと、日本の養蠶なんていふものは厄介なもんだね……』

『本當ですね』

『これといふのも、此方には雨がないから、それだからやつて置けるんでせうね？』

『それに、氣候が平らですから……日本のやうに六月になつて

爭が起いたりするやうなことはないですからね!』

『さうですかね。たしかにこれは面白いね。これなら手も何にもかゝらんし、蠶の食ふ葉だつて新いし、非常にかしこいやり方ですね……』

『本當ですよ。柞蠶はいろいろ日本人もやつてゐますけれど、とても支那人と競爭は出來ないさうですからね……』

『でも　鳥か何かにやられるよ、それがあるだらうね?』

『だから、番人がついてゐます——』かうM君が言つた時、山の谷合の上のところでボン、ボンと銃でも放つたやうな音がした。それが即ち鳥を追ふための空鐵砲だといふことであつた。

それは丁度千山に入つて行かうとする谷合の路で、これから岫巖、連山關にかけては、さうした柞蠶の設備が山から山、谷から谷へと一面に連つて續いてゐるといふことであつた。その產額も巨萬の額に上つてゐた。

十五

山では、千山がちよつと變つてゐた。他は大抵赤禿であるのに、そこだけには、松が一杯に繁つてゐて、避暑には持つて來いといふやうなところだ。湯崗子から歩いて行つても、さう大して骨の折れるところではなかつた。

これで水があれば——少しでも好いから水があれば、それこそ價値がぐつとあがつて來るのであらうけれども、惜しいことには谷がすべて全く乾いてゐた。僅かに五佛頂から下りて來るところに、手で掬ぶに足るほどの、それも五六杯もコップで汲めば無くなつて了ふであらうと思はれるほどの水が微かに潺々として湧き出してゐるばかりであつた。

それに、千山は眞中の谷、つまり龍泉寺や無量觀や中會寺などのある谷だけを歩いて行つたのでは——東の仙人岩か、西の五佛頂かに登つて、連山の波濤の起伏したのを眺めなければ、決して完全に千山の勝を持つたとは言ふことは出來なかつた。

五佛頂は裏から、青雲觀の方から入つて行くやうになつてゐるが、その青雲觀のあるところが既にかなりに山の中で、海岸平野からは、二重も三重も山を隔てゝゐる形になつてゐた。青雲觀から馬の脊のところにのぼつて行く間は、丸で板でも竪てたやうな險しい急な勾配であつた。私は喘ぎ喘ぎ辛うじて登つて行つた。五佛頂の頂上に行つた時には、やつと此處まで來たといふ氣がした。

しかし千山は滿洲に遊ぶ旅客達のちよつと入つて行くのに億劫にするところであつた。行つて見やうと思つて湯崗子までは行つたが、何うも都合がわるくつて入つて行くことは出來なか

つたといふ話を私は到るところで耳にした。それといふのも、其處は第一に、少しでも雨が降つたら入つて行くことが出來ないのと春先と高粱の繁茂してゐる時節とには、馬賊に襲はれる危險があるので容易に入つて行くことが出來ないためであつた。その癖内地人が危難に遭つたといふことも聞いたことはないのであるけれども、何うも無氣味で、案内者などをつれて行つても、その案内者が馬賊の片われで、とんでもないところに自分を伴れて行くのではないかと疑はれて、不安でしやうがないといふことであつた。從つてそこに行くには、五月から六月ころの晴れた日を選んで、大勢で出かけて行くのを一番好いとしてゐた。

　安奉線の通つてゐる山の中、そこも仔細に探れば、二三の隠れた勝地がないではなかつた。そこは全くの山の中で――松の木すらも生えてゐない、赤く禿げた、または鼠色の岩石の嵯峨として聳えてゐる山の中で、トンネルなども澤山に澤山にあつたが、橋頭驛附近には、滿洲耶馬溪と言はれる釣魚臺の勝があり、鳳凰城附近には、鳳凰山一帶の奇勝があつたりして、旅客の心を慰めずには置かないといふやうな地方であつた。五龍山の背後にある五龍背の溫泉なども是非とも一夜泊つて見なければならないところであつた。

十六

金剛山は今度の旅行では最も多く期待して訪ねて行つた山であつたが――それは山としては無論すぐれてはゐるし、山水としても更に何あれほどの奇勝を一まとめにしたといふところは容易に他に求むることの出來ないものであつたに相違なかつたけれども、しかしそれほど大騷ぎするほどのものでないといふことを私はつくづく思つた。

　私は曾て日光の霧降の瀑底に、「韓客賞玩」と刻つた大きな石のあるのを見たことがあるが、何でもそれは德川幕府時代に、韓人が朝貢して、日光廟に參拜し、その次手にそこに行つて、その瀑と瀑底の岩石とを見て、そこが一番氣に入つて、それでその紀念としてその字を石に刻つたのであるといふことを聞いてゐたが、成ほどそれはさうだらう！　その朝鮮人は曾て金剛山を見たことがあつたのだらう！　そしてその霧降の瀑底の金剛山の溪山に似てゐるのを見て、それで一層氣にも入れば故郷をも思つたのであらう！　否、更に一歩を進めて、あゝした山と溪としか持つてゐない朝鮮人は、あの日光の山よりも溜水よりもあゝした溪谷の方により多い理解と共鳴とを感じたのであらう！　尠くとも金剛山の溪山は、あの霧降の瀑底を二三十倍

に大きくしたものと思へば、間違がなかつた。

しかし全體の規模から言つて見ると、金剛山一帶の山容よりも、日光の方が雄大でもあり、變化にも富んで居ることはたしかであつた。第一、日光の持つたやうなあゝした荒山の氣分がそこにはなかつた。日光では、嵐も雨も雲も霧も端睨することが出來ないといふやうに押寄せて來るが、そこにはさうした變化がなかつた。それに、山群の蟠踞してゐる形から言つても、日光の容易に見透かされない幽深なところのあるのに比して、そこはぢき看破されて了ひさうなところがあつた。『さうですね。もう少し山が深くつても好いですね。深山といふ氣は何うしてもしませんね！』から私達は囁き合はずにはゐられなかつた。

それに、樹木は多いと言つても、あの日光の裏山に見る、たとへば湯西川から土呂部に下りて來るところにあるやうなあゝした深い密林は何處にも見出すことが出來なかつた。

唯、しかしから言ふことは出來た。あの外山の玉流溪や內山の萬瀑洞あたりの奇は、內地でも容易に見ることの出來ないものであるといふことは出來た。また岩山といふ意味から言つてあれほど大きいものは內地にはないといふことは出來た。また底が全く石であるために、水量が多くないために、却つて潭が到るところに出來て、その美しさはとても內地では見ることの出來ないものであるといふことも出來た。玉流溪の玉流洞あたりに行つた時には、私も流石に聲を擧げて讃嘆せずにはゐられなかつた。

內山と外山とを比較すれば、各々その特色は持つてゐたけれども、私の好みでは、何と言つても、玉流溪を第一に推さなければならないと思つた。金剛洞から一歩々々溪に添つて溯つて行くあたりは、丸で繪卷の中にでも身を置いたやうな心持がした。連珠潭あたりも人の目を駭かすに足るものがあつた。

瀑では私は新金剛の十二瀑は見ないから知らないけれども、その他では、九龍淵の九龍瀑を第一に推さなければならなかつた。勿論、それは華嚴には及ばない。あゝした雄大さは持つてゐない。何方かと言へば、岩に傳はつて落ちて來る、內地の那智瀑に似てゐる瀑だが、周圍があれよりも幽邃であるために、またその懸つて落ちてゐる岩壁が偉大であるために、あれよりもぐつとすぐれてゐるのを私は感じた。瀑では、華嚴に次いでは、先づあの瀑を推さなければならないと思つた。

萬物相は霧のためにその全景を見ることが出來なかつたから何とも言ふことは出來ないけれども、あの三仙岩あたりの感じから押せば、さう大して心を惹くに足りるか何うかは疑問であ

つた。それに、そこには溪流の美がなかつた。その横に大きく穿たれてゐる寒霧溪なども大したものと言ふことは出來なかつた。

十七

しかし溫井里は好い處だつた。あのホテルなら一月くらゐは飽きずにゐられさうな氣がした。それは何處か高原性の感じのするところで、あたりに草花なども多く、雲霧の忽ちに懸つて來る具合などにも何となく捨て難いところがあつた。手拭を持つて町の溫泉に入りに行くのも、決してわるい感じではなかつた。

それに海が近いので、潮を雜ぜた空氣が何處からともなく押し寄せて來た。長箭港までは僅かに二里しか隔つてゐないのであつた。其處では、鱸だの、鰈だのが安くて買へた。

ある日は私達はそこから自動車で海金剛へと行つた。途中で私達は國道から左に草路を分けて入つて、三日浦といふ潟湖に行つて見た。それは好いところであつた。別莊などを拵へるには持つて來いといふところであつた。高城といふ朝鮮町からは、一直線に海岸へと向つて走つた。やがて地平線を劃して波濤の響がきこえ出して來た。

私達は赤壁江の一支流である後川の岸まで來て自動車を捨てゝ、その河口の淺いところを徒渉した。海は凄じく荒れてゐた。波が高く岸壁に當つて碎けた。

凪ぎなれば、その向うの立石里から舟を出して、奇石や岩礁や岩崖を一つ一つ探つて行くことが出來るのであつたけれども、實はさうしなければ本當に海金剛を見たとは言へないのであるけれども、いかにしても波が高いので——とても船など出せさうにも思はれないので、爲方なしに、私達は陸からそれを見ることにして出かけた。

それは徙崖から徙崖へと傳つて行くやうなところで、草路の中にはギスなぞが頻りに鳴いてゐた。そしてその崖の到るところから、海が見え、海の中に散點してゐる島嶼が見え、岸に岩に打寄せて白く碎けてゐる波濤が見え、更に遠く蒼海を航行して行く二本マストの汽船が見えた。「大分搖れてるね？　かういふ時に、舟に乘つてゐては樂ぢやないな！」こんなことを言ひながら私達は步いた。

一度濱に下りて、砂の上を通つて、更に向うの丘陵の上へと登つて行つた私達の眼には、やがて岩と島と怒濤との犬牙錯綜した美しい一場のシインが映つた。私達は急いで丘を越して行つた。

向うに小さな城塞の見えるあたりまで行つて、私達は立留つた。それは成程壯觀であつた。岩は岩と重り、島は島とつゞき、怒濤は怒濤と爭つた。ある大きな絶壁の上に登つてそこから下を覗いた時には、凄じく怒濤の打寄せて來る光景に殆ど膽を奪はれるやうな心の衝動を感じた。

しかし、海の眺めとしては、これくらゐのところは内地に澤山あつた。男鹿半島の滿雀窟を知つてゐるM君は、あそこに比べたら、こんなところは敢て奇とするに足りないと言つた。伊豆の石廊岬の絶端もこれよりはすぐれてゐると私も思つた。成ほどこれは陸から見るシインぢやないかも知れないよ。舟から見なければ、本當のことはわかるまいね』かう言つて私はじつと立盡した。

十八

溫井里から元山へと行く二十六里は、平康から長安寺へと來る三十六里に比して、道路は非常にわるかつたけれども、こんな路でよく自動車が通れると思はれるくらゐであつたけれども、しかも海に添つて絶えずその波濤を眼にして行く形は何とも言はれない感じを私に誘つた。

平康から入つて來る路は、概して川舍で、山の中で、それもあまり特色のあるとは言はれない山の中で、化川あたりまで來る間は退屈し切つて了ふやうなところであつたが、斷髮嶺に來て始めてほつとするくらゐなものであつたが、元山の方へと行く路は、長箭港にかゝるあたりから、海山の眺めが既に全く世の常とは違つてゐるのを私達は見た。

私達は長箭から三里ほど來たところで、滿洲や朝鮮でもこんなドシヤ降りがあるかと思はれるやうな風雨に出會した。私達は折角の海山の眺めを他所に、全く幌で車を包まなければならぬやうな形になつた。時の間に路は深い泥濘に化して了つた。

それにも拘らず、私達は絶えず幌を揚げて海を眺めた。『好いな、何うだ、あの怒濤は？　あの暗い海は？　あの凄じい光景は？』かう私達は指し合つた。

『それにしても、何うだらう？　この雨では？　叢石亭へ行けるかしら？』

『さうだね？』

『なアに、構はんぢやないか。ずぶ濡れになつても行かうぢやないか』

『さうだね？』

その叢石亭と言ふのは、丁度長箭と元山の中間に位置してゐて、通川の先きの庫底里といふところから右に入つて行くので

あつた。それは世界にもめづらしい玄武岩で、城の崎の玄武洞や越前の三國の東尋塔などは、とてもその足元にも追ひつかないといふことであつた。

でも厙底里に來た時には、幸ひに一時雨は小降になつて、これならばすぶ濡れにならなくても好いといふ風になつた。私達はそこで傘を二本借りて行つた。

自動車は殆ど岩の見え始めるあたりまで行つて留つたが、私達は車を下りて、海岸の徙崖の間を傳つて、雨は小降りだけれども風の凄じく吹く、まごまごすれば海の中に吹落されはしないかと思はれるくらゐに吹く烈風の中を縫つて、辛うじてその亭の立つてゐるところまで行つた。實際それは壯觀であつた。何と形容して好いかわからないくらゐ立派でそして見事であつた。そんな大きな玄武岩の柱石の林立してゐるのを私はその他に何處に見ることが出來たであらうか。私は長い間その亭の上に立盡した。

それを見て、厙底里に戻つて來た頃から、雨はまた凄じく降り出した。

十九

金剛山も叢石亭も面白かつたけれども、それよりも一層深く私の心に染みたのは、それは何と言つても慶州の新羅の古都であつた。

朝鮮に對する私の考へが一變したばかりではなく、日本の上古史に對する私の觀察がすつかり變つた。今までは、日本民族の起源といふことに對して、全く茫とした考しか持つてゐなかつた私も、眼の前にさういふものを見せられては、深く考へて見ずにはゐられないやうな形になつた。

私の胸の底に深く埋れてゐたものが、次第にそこに引出されて來た。私は朝鮮と日本との上古の交通を頭に描かずにはゐられなかつた。また朝鮮と日本とがその時代に於て全く混り合つてゐたことを思はずにはゐられなかつた。私はそこに奈良朝時代の先祖を發見したやうな氣がした。

つまり日本ではさうしたものは全く亡びてなくなつて了つてゐるのに、その時代の匂ひをすら嗅ぐことが出來なくなつて了つてゐるのに、唯僅かに殘つた跡に由つてその面影を偲ぶより他に何うすることも出來なくなつてゐるのに、そこにはそれが依然として完全に殘つてゐて、生活すらも殘つてゐて、はつきりと、それを私達の眼前に展開して來たではなかつたか。それにしても何といふ古雅な慶州の町だつたらう！ また何といふ古風な慶州の市場だつたらう！ 私はそこに奈良朝と平安朝を

まざまざと再現して見たやうな氣がした。

『たしかにさうだね！　かうだつたに違ひないね』

『本當だ……たしかにさうだ――』

こんなことを言ひながら、私達は六月の暑い日の光のキラキラする町の通りを歩いて行つた。

それにしても、日本のあの風俗はいつから變つたらう？　いつからあゝいふ風俗はなくなつて行つたらう？　此方にはかうして殘つてゐるのに、それを模倣した日本はいつから變つて行つたらう？　さうだ……たしかにさうだ。鎌倉時代から變つて行つたんだ。つまり韓半島から日本が手を引いた時代、即ち一時百濟のために兵を出したり何かしたけれども、新羅と唐の聯合軍に打勝つことが出來ずに、たうとう消極的に手を引いて了つた時代、その時代から段々變つて行つて、鎌倉時代になつて一層根本的に變つて行つて了つたのだ！　……こんなことを私は深く考へた。

『此處に來て、始めていろいろなことがわかつたやうな氣がしますよ。支那の文化がぢかに日本に入つて行つたのではなくつて、朝鮮――ことに新羅や百濟を通つてそして入つて行つたのであるといふことがはつきりわかりますよ。そら、あの京城の李王家の博物館にある半伽の如意輪觀音像などを見ても日本に入つて來た奈良あたりの佛像の系統がすつかりわかるぢやありませんか？』

『本當だね。あれなんか、たしかに京都の廣隆寺の半伽の如意輪觀音の先祖だといふことはたしかにわかるからね』

『これはたしかに好いところだ。たしかに奈良以上だ！』

から深く感じたといふやうにしてM君は言つた。

二十

慶州の考古館にゐるW君が私達に話した。『それはありますとも、歴代の王の墓を發いたら、それこそ何んなに立派なものが出て來るかわかりやしませんよ。いや、王の墓でなくても、普通の墓でもいろいろな古いものがありますよ。三十何世の中本當にわからないのが七つか八つあるけれども、あとは完全にわかつてゐるんですからね。そして大抵、この界隈にかたまつてあるんですからね。さう言へば、一二三年前ですけども、S博士が來て、面白いことがありましたよ……。いや、他ぢやないですけれども、向うにある墓をS博士が掘つたんですよ。それは歴代のはつきりとわかつてゐる墓ならば、とてもやかましくつて掘れないんですけども、その墓は王の陵墓ではあるが、誰王の陵墓だかはつきり分らないので、それであれなら大丈夫

だらうと言つて掘り出したんです。それはＳ博士なんか、さういふことにかけては熱心なもんですからな……さういふことになると、あの人達は夢中になつて、何も彼も忘れて了ひますからな……實は私なんかは險呑だと思つたんです。あんなことをして好いのかしら？　何か鮮人の方から苦情が出やしないかと危んでゐたんです……。でも幸ひに、初めの日は何でもなかつたので、これなら大丈夫だと言つて、博士達は益々意氣込んで今度こそ大きな獲物があるに違ひない……と思つて、あくる日もそのあくる日も掘りつゞけた。さうですね……大分深く掘りましたよ、本物が出るにはまだそれでも間があつたでせうが、兎に角深く掘りましたよ。それは今でもそのまゝになつてゐるから、行つて見ればすぐわかるですけどもね……。ところが、それはたしか三日目か四日目だと思ひますよ。鮮人が二三百人以上もその周圍を取卷いて、その中の代表者がやつて來て、嚴とした態度で「貴様は一體何をしてゐる！」と上段からきめつけられたんです。Ｓ博士達は學術的にかうして掘つてゐるとか何とか頻りに言つたさうですけれども、何うしても頑として動かない。それが總督府の命令なら命令で、此方にも考へがある！と言ふので、終には博士達も蒼くなつて了ひましてね！やれ、此處の署長が行くとか、郡司が來るとか、それはえらい騒ぎになつて了ひましたよ。何でも總督府の命令だと言ひ切つたら皆な決死のつもりだつたさうですからな……貴様達だつて、祖先の王様の陵墓を他人に掘られて、默つて見てゐるかと言はれて、Ｓ博士達も一言も出なかつたさうですからな！　それで騒ぎが大きくならうとしたのを、署長が怜悧だつたもんですから、まァ好い加減になだめて歸すやうにしたですけども、そのために折角のＳ博士の努力もオジャンといふわけでしてね。それは騒ぎでしたよ。實際、此處にはいろんなものが殘つてゐますからな。え、さうですとも、奈良あたりも明治以前はいろいろなものが殘つてゐたでせうけれど、今はすつかり整理されて了つたでせうからな。それから比べれば、まだ此處は殘つてゐますよ。何しろ、そつとして置かれたところですから……。でも長い間には、支那人なんかが隨分いろんなものを盜んで持つて行つたんですね。あの西岳の武烈王陵の上の石碑なんかいつか持つて行かれて了つたんですからね。さうですな、本當に研究的に見やうとするには、一日や二日では駄目ですな。隨分いろんなものがありますから……」

私は大邱から午前十時頃にそこに來て、考古館に行つて例の大きな釣鐘を見て、歸つて旅舍で晝飯をすまして、自動車で一わたり見て廻つたばかりであるから、さう大して深くは知つて

ゐなかつたけれども、それでも千百年前の廢都の空氣が染々と私の魂に染み込んで來るのを感ぜすにはゐられなかつた。

私はそこにいろいろな寺の跡を見た。田畦の間にところどころに殘つてゐる大きな寺の礎を見た。內地にあるのとは全く形を異にしてゐる塔が、草の生えたまゝそこに殘つて立つてゐるのを見た。私達はそれからそれへと見て行つた。麥の黃熟して既に刈り取らなければならなくなつてゐる向ふに一二軒さびしく民家の連つて立つてゐるのを見た時には、古人ではなかつたけれども、私の胸に麥秀の歌のひとり手に上つて來るのを禁めることは出來なかつた。

雁鴨池——それは昔の宮庭の泉水であつたといふではないか。そこには曾て帝王が妃嬪を集めて宴を張つたといふではないか。否、それからずつと向うに行たところには、その當時宮殿であつた半月城の地が歴々として手にも取られるやうに指點せられたではないか。そしてそれはまだ昨日ででもあつたやうに、千餘年の月日がその間に經つたなどとは夢にも思はれないやうに鮮かに且つ新たらしく指點せられたではないか。否、あの氷を藏したといふ穴の前に立つた時には、私は平安朝時代の日本の宮中のさまをはつきりと頭に描出さずには居られなかつた。日本の古い歴史の中にも、現に氷を藏した穴藏のことがはつきりと記されてありはしなかつたか。

氷の穴藏を出てから、私達は鷄林といふ名のそこから始つたといふ土地の趾だの、脫解王を祀つた廟だの、路傍に大きく立つてゐる瞻星臺だのを見て、橋を渡つて、松林の中の許王の陵墓を傍に見つゝ、遠く鮑石亭のある方まで行つた。

『曲觴流水宴未レ終、鼙鼓忽聽動二遙空一、興亡勝敗何須レ說、末路可レ憐疽背翁』これはそこで口吟した惡詩だが、何でもそれは新羅の末世の帝王が、流水曲觴の宴をそこで張つてゐた時、新百濟の甄萱が忽に大兵を帥ゐて押し寄せて來て、王を始め妃嬪を擒にし、つゞいて新羅を亡したといふ古事があるので、何でもその新百濟の甄萱も、晩年には、その末子を愛したために國が亂れて、これもそこにゐることが出來ず、遂には疽が背に發して死んだといふことであつた。その鮑石亭の趾は國道から一町ほど入つて行たところにあつた。

西岳の武烈王陵にある龜趺を下にして蟠首寶珠を捧げた六龍が蟠結した彫刻を輪廓にしたもので、頗る精巧な見事なものであつた。昔の繪本などには、さういふ繪の書いてあるのを見たことがあつたが、眼のあたりそれを見たのは今が始めてであつた。日本にも昔はさういふものがあつたかも知れぬが、今では何處にもそれを見出すことは出來なかつた。奈良にも京都に

もそれのあるといふことを私は聞いたことはなかつた。

私は三時すぎの汽車で佛國寺に行き、そこのホテル――こんなに好い旅舍は今度の旅行中何處にもなかつたと思はれるほどそれほどすぐれてゐる旅舍に一夜を過し、あくる朝早く二十七八町の山路をのぼつて、その奥の石窟庵に東洋屈指の石佛を見ることが出來た

私はそこに何とも言はれない感動を受けた。藝術の力と言つて好いか、それとも人間の魂と言つて好いか、それは何方だかわからなかつたけれども、兎に角さういふ山の中にかうした彫刻を殘してゐるといふことは、何といふ不思議なことであらうと私は思つた。また私がかうして千百年後にそこに來て、容易に立去ることが出來ないほどの感動を受けたといふことも何ういふ不思議な因緣だらうと私は思つた。私はそこには、奈良の藥師寺のあの三尊にも增して、立派な藝術と宗教との雜り合つた魂が深く籠められてあるやうな氣がした。

私は今度の旅行も遂に此處まで到着したことを思つて、默然としてそこに立盡した。何も彼も最後はそこに落ちて來るのではないか。何んな歡樂も、何んな爭ひも、また何んな不平も、皆なそこにやつて來るのではないか。私はそんなことを思ひながら、脫解王や神功皇后のことを頭に浮べた。前の日本海からは光芒のない赤い日輪が毬でも投り上げたかのやうに躍り上つた。

その日、私は蔚山まで汽車で行き、そこから自動車で東萊溫泉へ行つて泊つた。

勞農ロシヤの藝術

尼瀨敬止

一

アナトール・フランスがいつたやうに、かつて自己の文化をほこつたヨーロッパは今日瀕死の狀態におちいつてゐる。この文化的病者ヨーロッパをまへに、ロシヤではほんたうに世界を

揺りうごかすやうな革命がおこつた。そして、ある者はロシヤをオリンプの森に祀るものといひ、ある者はロシヤをゴルゴフ丘上の磔刑に處するものといつた。いづれにしても、この革命は偉大ではあるが悲劇的であつた。と同時に根元的なものでもあつた。かうして、いまだ見なかつた騒擾がかもされいまだ見なかつた鮮血がながされる。また、古い生活と古い組織とはすてられ、新しい生活と新しい組織とはむかへられる。さらに、きのふまで貴いとされたことがけふは卑しくおもはれ、けふ卑しいとされたことがあすは貴く考へられる。つまり、創造と破壊と――なほ一つ價値の轉換といふことが行はれた。かゝる時代の生活と思想との表現者は、すなはち藝術であらねばならぬ。

いま、これを文學について見るならば、在來の藝術家と現代の藝術家とは思想上においても著しい變化を示してきた。前者においては神とか愛とか個性とかをおもに創作の對象とした。そして、かれらはあるひは書齋にあるひは僻地にあつてひとり靜かに瞑想することを好んだ。しかし、後者においては世界とか勞働とか協同とかをおもに創作の對象とした。そして、かれらはあるひは工場にあるひは街頭にあつてにぎ〳〵しく思索することを愛する。これを實際的例證によつて説明するならば、在來の藝術家はその主義とか思想とかゞ容れられなくなつたので多くは海外に去つた。そして祖國にのこるものは田園にかへつた。この當然の結果として、かれらは精神的にも物質的にもひじように窮迫してゐる。たとへば、レーミゾフは部屋のさむさに裏毛外套をはなすことが出來なかつたし、ローザノフはネウスキー大通りの莨の吸殻をひろつて歩き、ソログーブ夫人は時局を悲觀してネワ河へ投身したといはれる。しかし國外に出たものも決して幸福ではなかつた。バリモントはフランスの北海岸にからうじて妻子をやしなつた、ラザレーウスキーは旅費にこまつて黒海かどこかの船員となり、アンドレーエフが書くに紙なく刷るに印刷機なく、とう〳〵フィンランドで餓死したとつたへられるのは有名な話である。これに引きかへ、現代の藝術家は在來の藝術家より精神的にも物質的にも幸福である。かれらは祖國の土にしたしんでゐる上にあらゆる勞働を厭はない。街頭で演説することも『宣傳車』にのつてほう〳〵を飛び廻ることも平氣である。しかし、その多くは出版業者に關係してゐる。一例をあげるとモスクワの大きな書店にはきつと文學者が雇はれてゐる。かれらの内には小説家もあれば詩人もありまた哲學者もある。たとへば『クニージノエ・イヅダーチェリストヴォ・ピサーチェレイ』にはウェレサーエフやテレシ・フが

關係し『ラフカ・ピサーチェレイ』にはザィツェフがおの〳〵關係してゐるやうに。かれらは編輯室におさまつたり店先きに立つたりしてゐる。そして、その選ばれた人々には『パヨーク』と稱する特別給養手當がある。また、在來の作家の出版物はほとんど顧みられない上に著作權などが大分あやしい。反對に、現代の作家の出版物は一般社會からむかへられ、かれらにたいするいろ〳〵な懸賞募集などもある。

かうして、ロシヤ文壇は作家のうへにも作品のうへにも非常な淨化作用がおこなはれた。同時に價値の轉換もはじまつた。だから、革命後の文學は二つの立場にあるものと見られる。すなはち、一つはサウェート・ロシヤを中心とし他は海外を中心としたものに。しかしそれは便宜上の觀察で兩者のあひだに分裂などのあらう筈がない。これらを一貫したものこそ偉大なロシヤの偉大な文學と言へるであらう。

二

今もいつたやうに、革命ロシヤの文壇はほとんど根本的に改められてしまつた。作家のうへにも作品のうへにも。そして、在來のすべてが根こそぎにされた地上にあたらしい藝術は生れやうとしてゐる。しかし、そのあたらしい藝術とはいかなる形式といかなる內容とを有つたものであらう。これを知るまへ是非說明しておかねばならぬのは文壇の背景である。

第一は自由の拘束といふことである。つまり作家の行動と作品の內容とはつねに監視されてゐる。そして政府を裏切つたやうなものはすべて壓迫される。このことは、一九二二年六月に發表の『文藝及び出版事務局』の規則によつて窺はれる。該局は國民敎育委員會に屬し原稿乃至印刷物等の檢閱をする。」ところで、その第三條第一項には「サウェート政權に反對する宣傳內容をもつたもの」は禁ぜられると書いてある。かと思ふと、おなじ國民敎育委員會內の『文學局』には政府のための「藝術宣傳部」が設けられてゐる。だからこんな話をきいてゐる。ある時、同委員會を支配するルナチヤールスキーはホルタツにゐるコロレンコをたづねた。といふのは、かれを政府のために働かせやうと思つたからで、その前ゴーリキーがコロレンコに逢つてうまく話をつけておいた。そして、いよ〳〵ルナチャールスキーの訪問となつた譯で、かれは例の『イヅウェスチヤ』新聞に何か書いてほしいと言つた。その時、コロレンコは「公開狀の形式なら」と主張したのにたいし、ルナチャールスキーは「政府の利益を擁護したものを」と答へた。そこで相談がまとまり、コロレンコからルナチャールスキーへ問題の原稿を送りと

ぜけた。しかし、いつまで經つても新聞に掲げられないので友人たちがいら〳〵仕出す。はてはルナチャールスキーに喰つてかゝつたが結局無駄であつた。といふのは、それが、ボリシェヰキーの非政を鳴らしたものであつたから。第二は生活難といふことである。このことは前にも述べたからくはしくは言ふまい。しかし、メレヂュコーウスキーはある感想記の中でこんなことを書いてゐる。それはかれがロシヤを脱出した時のものである。「案んじたよりも空腹に慣れるのはたやすかつた。」けれども「飢えるといふ恐れは飢えることよりも恐ろしい」。かと思ふと、ウェールスにあてた公開狀の中で次ぎのやうにも書いてゐる。これは、薄倖なインテリゲンチャ（智識階級）の救濟につとめてゐるゴーリキーに應酬したものである。かれの所謂「救濟」の意味を體驗した時わたしは祖國を逃げ出してしまつた。そんな恩惠をうけるより召しとられて銃殺された方がいゝ。」

ロシヤ文壇の背景であるこれらの事情――すなはち、自由の拘束と生活難といふこととはその後多少ゆるめられたか知れない。しかし、これらの渦卷の中におちたものはほんたうに手も足も出なかつたであらう。かれらは翼をとられた小鳥のやうにもがき苦しんだ。そして、ある者は巷にいである者は田園にかへつたことを忘れてはならぬ。

三

若しさうとすれば、しんにサウェート・ロシヤではいかなる藝術が求められるのだらう。それは多少なりブルヂョア要素を加味したものか。それとも全然プロレタリア的なものか。これを研究することははなはだ興味があるが、まづ在來の藝術と現代の藝術とを比較したいと思ふ。

サウェート文化をかたる者はひとしくルナチャールスキーの名を思ひだすであらう。ルナチャールスキーは國民教育委員會の首班であるとともに、批評家として戯曲家としてまた詩人としても有名である。だから、その國の文壇がかれに感化を受けないとは言へないであらう。かれに從へば――「在來の藝術は平凡で醜惡でブルヂョア的なものである。かういふブルヂョア的藝術は飽滿した晝食または夕食後の神經をくすぐる役にしか立たない。かれらはつねに自己の接觸と庇護とによつて藝術を賣つた。それは藝術から生れるほんたうの革命をおそれたからでこの結果藝術のための藝術といふ救助策を案出した」――と言つてゐる。それを他の批評家の言葉で補ふたらば、今日までの藝術は一ブルヂョア的文化の腐敗した生活や、資本家の暴逆な味覺にこびる奴隷のやうなコカイン注入者や、花柳病者の破

倫な文章や、病みついた、閨房的詩歌など」である。しかるに、さういふ藝術は「平凡で醜惡でブルジョア的なもの」であるから、「時代にめざめたプロレタリアートは科學や文學やその他の藝術を知らうとして血眼に」なつてゐる。しかも、「勞働者階級のある強いショックは、かれらよりももつと悧巧でもつと惠まれた智識階級をどうしても動かさずには止まい」ことになつた。だから、ルナチャールスキーの指摘したやうに、時代はブルヂョア藝術でなくプロレタリ藝術——すなはち『未來の藝術』を要求してゐるといふのである。

しかし、謂ふところの『未來の藝術』とはどんなものであらう。それは他の藝術とはまつたく獨自なものか。哲學が絕對であり科學が絕對であるやうに。若しくは他の藝術に多少とも似通つたものなのか。これに對してワレーリアン・ポリャンスキーは答へてゐる。「プロレタリア文學はソシアリズム的革命のほのほの中にうまれ、その社會建設のなかに勞働階級の愛と憤りと壓迫と鬪爭と熱情と衝動とを反映し、世界にたいし、生活にたいし、プロレタリアートの動力と最後の勝利にたいしての自己の特殊な凝視をもつて凡てに近づく」。要するに、プロレタリア文學とはブルヂョア文學にたいする反抗の藝術である。同時に戰鬪の藝術である。だから、その仇敵であるブルヂョア作家がいかに窮迫しやうとかまはない。いな、かれらが生活にくるしみ、自由を拘束されることがもつと〳〵烈しくなるのを却つて喜んでゐるのである。

四

サウェート・ロシヤではプロレタリア文學が歡迎されてゐる。しかし美術とか音樂とか演劇とかいふ方面はどうであらう。これらの藝術もやはりプロレタリア的であることを要求してゐるのか。いま、それをも一應研究しておきたいと思ふ。

オ・ブリークトといふ人は、雜誌『イゾブラジーチェリノエ・イスクーストウォ』に次ぎのやうな論文を發表した。それは美術に關したものである「ブルヂョア藝術を滅ぼさなければならぬ。たんに創作しまた美に奉仕するやうな藝術を滅ぼさなければならぬ。他に藝術家がある——かれらにサウェート國の未來は委ねられる。これらの人々は大きな何物かをつくり出すことが出來る。かれらこそ藝術的勞作を完成するであらう。それらの人々はプロレタリアの國家に必要なものを描く。今日の繪畫は——場合によつてあすはプラカットや芝居の番附の表看板となる。かゝる藝術家こそコムミューンに必要である。かれらは正しく社會奉仕の事業に就く。さういふ勞作のみコムミューンの他

の倒壞、たとへば靴工や木工や縫工とともに起つ勝利を藝術家にあたへる」。また、ペトログラードの一劇團はかういふ決議をした。「ソシアリズム的劇場は、その主義貫徹の道にそふてゆく個人と民衆との戰鬪美をみづからに反映し□□的な火と感激とをもつて觀客を××するものでなければならぬ。ソシアリズム的劇場の上演目錄は、人間のよき未來にたいする疲れざる戰鬪の渴望と敢勇と、生活のよろこばしい攝取と創造的エナージーとを民衆のなかに鼓吹するものでなければならぬ。また、崇高な英雄的氣質と創造的な智識と勞働とのなかの競走心を民衆に呼びおこさしめるとともに、ソシアリズムの勝利のためにたゝかふ尊貴と美と、かゝる戰ひが――個性のすぐれた自己完成への唯一の道であることを示すものでなければならぬ」。

これを綜合するに、サウェート・ロシヤでは文學も美術も演劇もおなじ目的をもつてゐる。音樂とて變りがないであらう。その目的のためには、個人主義的な〈我〉が斥けられて集合主義的な〈我等〉が迎へられ、おたがひが握手して勇敢に戰ふことを努めてゐる。しかしブルジョア藝術を葬るだけではいけない。まづブルジョア社會を倒壞する。そして、プロレタリア社會を解放することが最後の勝利だ――と考へられてゐるのである。

五

サウェート・ロシヤの藝術は戰鬪的である。だから武器を強くすることも宣傳を盛んにすることも必要になる。時として宣傳は武器以上に功を奏しないとはいへぬ。これがために、五月一日の勞働祭にも、第三インタナショナルの紀念碑設計にも、また各藝術品の懸賞募集にも宣傳を忘れなかつた。いま、先年催されたロシヤ二大都市における勞働祭の光景を思ひ出してみやう。

この日を「ヨリよくするため」に大勢の委員がえらばれた。すなはち、ペトログラードではメイエルホリドとゴロデッキーとエヴレイノフ、またモスクワではカーメンスキーとタッリンとエセイニンなどで、かれらは思ひ〳〵の仕事にしたがつた。ところで、メイエルホリドとエヴレイノフは演劇家として、タツリンは美術家として、ゴロデツキーとカーメンスキー（ワシーリー）とエセイニンとは詩人として、いづれも藝術界の代表的人物であつたことは注目すべきである。ルナチャールスキーは「全國民の發憤を表示するために」ある命令を下した。そして方々で集會がひらかれ、「エヂポス王」が上演され、衛戍軍の閲兵式があつた。また、「大氣の力によつて國民を洗禮するため」

の大型飛行機が頭のうへを飛び廻つた。かと思ふと詩人グーミリョフは次ぎのやうな一文を新聞紙上で發表した。それは、この勞働祭が偶然にもパスハ祭（キリスト復活祭）とかち會つたことに因んだものである。」この日神を信仰する人々はパスハ祭を祝ふであらう。つまり、それは農民にたいする僧侶の力はまだ侮ることが出來ぬし、農民のあひだの宗教心がまだ弱められぬことを意味してゐる。けれども、歴史はかれらが何處に住み、また何人とともに在るべきかを數へるであらう」さらに政府の宣傳部ではかういふ詩を各新聞紙上に掲げた。ソシアリズムが宗教や僧侶やを排してゐることはいふまでもない。

聖鐘の反響のなかにも
僧侶の聖歌讃唱のなかにも
パスハの歡びのなかにも
むかしの力ある光はきえた。

しかし、ここに興味あるのは幼少年の讀物にまで宣傳を怠らないことである。かれらもいつか成長して國事にあづかる日が來るであらう。それを見越して次ぎのやうな少年物語の懸賞募集をした。それは「歴史ものでも傳記ものでも乃至學術的またはは幻想的なものでもいゝ」と指摘し、下のごとくこまぐと規定されてゐる。「（一）、幻想的のものといつても神秘や宗教による世界教化の要素はさけられねばならぬ。すなはち惡魔、林鬼、妖女、一寸法師、天使、神などは必要がない。それを描くことは眞の教化といふ意味で憎むべき偏見とされる。（二）、工業上の發明とか學術上の開發とかに結びつけられた未來生活こそ——眞の物語である。（三）、王子、親王、王その他のものは避けられねばならぬ。それらを描く場合には壓制者の代表のやうに見られる」。

六

ロシヤの文壇が動いてきたやうに、そこの生活や組織やがほとんど變つたことは爭はれない。同時に、その新世界にすむ人々の思想が變つてきたことも事實である。たとへば、生活保證が個人の社會的位置とか財產の缺陷とかでなしに自己の勞力を賴るやうになつたごとき、また、對社會態度が今迄のやうに個人主義的でなしに社會全體を目標とするやうになつたごときが夫れである。さらに、國家統治者は革命前のやうに世襲的人物ではなしに人民の歡迎するものを推すごとき、また、國民を善導することなしに却つてかれらを邪路におとしいれる僧職者を葬つ

たごときが、いづれも夫れであつた。そして、國民は一方において破綻とか騷擾とか流血とかの苦しみを味はひながら、他方において、來るべき日の翹望や、祖國にたいする愛や、世界にむかつての大きな期待やに眩惑された。かうした劃時代的精神はやがて美術に表現されずにはゐない。そして、うら若い詩人たちは先づそゝり立ち、今日は花やかな『詩の高潮時代』を現出してゐるといはれる。この過渡的詩壇において、アレクサンドル・ブロックは自己のおどろくべき魅力をもつて革命とその源流とをうたつた。またアンドレー・ベールイは、革命の因由をしめして物質文明のどん底におちたヨーロッパを覺醒した。さらに、ゲラシーモフは工場を中心としエセイニンは農村を中心として、ロシヤに『第三の救世主』があらはれることを期待するやうになつた。

あたらしいロシヤ詩壇には十二の詩派があるが、革命當初はなんといつてもフューチュリズムの天下であつた。なぜなら、この詩派は他に見られない特異の作風と勇氣に滿ちたわか〳〵しいトーンとを有つてゐた。そして、新しい生活を創造してよき未來を得ることを使命としたから、革命時代の藝術としては誂向きのものであつた。

**

廣場に反抗の足音をうて！
誇れる頭腦の地層をたかめよ！
われらは第二の洪水をそゝぎ
世界の市をきよめやう。

……………

われらの神は——疾走だ。
心臟は——われらの太鼓だ。

……………

よろこびよ、燃えよ！　うたへ！
春は樹液の中にそゝぐ。
たゝかひよ、打て
われらの胸は鐃鈸のからかねだ。

**

おたがひに微笑をもつて愉快にむかへよ、
心の底から花のかむり着せよ、
子供ごゝろに樂しく空想せよ、
そこに薔薇色のリボンにつゝまれた十字架が照る。

……………

太陽のやうに、光の詩をうたひ、
たのしい日の鐘をならし、

天眞な子供のやうに戯れ、
あたらしい家の主人となれよ。
もし心がゆるみ
不思議な打撃にうたれ、
□□を讃えることがなかつたら
山々はきつと驚くだらう。

これはフューチュリズム派の代表者の詩の拔萃である。すなはち、前者はペトログラードの同派を支配するといはれたマヤコーウスキー（ウラヂーミル）の作であり、後者はモスクワの同派を支配するといはれたカーメンスキー（ワシーリー）の作である。これらの詩を誦する者は、そこにひらめく火のやうな感情とわか〳〵しくて何者をも恐れないやうな心を思はずにはゐない。同時に、新生活にたいする力强いショックをも忘れることは出來ない。しかし、

お前の子宮から、
お前の地獄から、
血をもつて
醉へる世界に取りださう
あたらしい處女を
あたらしいイブを……
…………
まもなく
お前の乳房に眠るであらう、
兄弟のやうに、
各國民の
あたらしい人の群は…………

（マリエンゴッフ）

など、歌はれてからは、かれらは美の破壊者であるとか自家廣告的で不謙遜であるとかと非難された。かうして、現在では以前のやうな勢力を失つてしまつた。しかし、一時は他の藝術をも驚かせずにはゐなかつたほどの信用を有つてゐたのである。

七

思ふに、マヤコーウスキーやカーメンスキーなどのフューチュリズムはロシヤ革命詩壇の序曲を勤めたものであつた。それが序曲である以上、もつと新しい内容と新しい形式とをもつた何かゞ創造されずにはゐなかつた。なぜなら、この革命はさら

に大きくさらに深く根ざしたものであつた。と言つたとて、さういふ偉大な藝術がすでに生れたといふのではない。詩壇はいまだに混沌としてゐる。だから、かれら詩人にはなほも經驗や試練が必要であらう。しかし、その詩壇の一般的特質や傾向やを窺ふことはあながち困難ではあるまい。そこでは詩が「ラッパ」であると見られ、詩人は「單なる勞働者で言葉の使用人」であるとも思はれてゐる。かと思ふと、「われ〳〵の詩のもつともよき愛好者は賣笑婦と惡漢だ」と告白した詩人もある。これらのことは、先きに紹介したワシーリー・カーメンスキーの詩の一齣によつても充分窺はれる。

詩人——さあ畫刷毛(ブラッシ)をとれ
芝居の番附をも——詩を書いた紙ぎれをも
階段から往來まで
眞實を——生活を貼りつけよ——
眞實のまへでは花嫁のごとくあれ——
その報告者のまへでは。

かかる新しい傾向を眞書きするものはイマヂニストの宣言書である。「言葉は詩の唯一の材料ではあるがその内容とか音樂とかには興味がない。同時に、思想を傳へるものが言葉であるとも思はない」。その代りに明るさとか、單純さとか、勇氣とかを目ざし、また最大限度の（學術的術語）の的確さをも求めてゐる。

今日の詩壇に重きをなすものはイマヂニズム派とプロレタリア派とであらう。ともに變つた色彩を有つてゐるのは勿論で、この二つの詩派についてフ・ードル・イワーノフはかういふ意味のことを言つてゐる。『イマヂニズム派は死にゆくデカダン藝術のあきらかな花であり破壞と無信仰との詩である。また、プロレタリア派は最近における廢頹文學にたいする反抗である。そして、そのコレクチビズム（集合主義）はロシヤ文學の曠野に花咲いたインジビジュアリズム（個人主義）にたいする反抗である』。要するに、イマヂニズム派は在來のデカダン藝術を繼承してはゐるが夫れよりももつと〳〵爛熟且つ腐亂した果實である。しかし、プロレタリア派はそれらのいはゆる（朦朧とした）——たとへばシムボリズムやデカダンに反抗し、大きな人類愛のもとに勞働と歡喜とをたゝへる力の藝術である。

『イマヂニズム派』のなかでもつとも知られてゐるのはセルゲー・エセイニンであらう。かれは百姓の子であるやうに、その詩の姿にもその詩にたいする態度にもどこか土臭いところが

ある。そして雲をうたひ山をうたひ野をうたつてゐる。

歌はう、歌はう、歌はう
兎も羊も辱しめない。
もし何かをかなしむなら
その者を笑ますことも出來る。

……………

東雪の庭にたつた一つの徑がある。
十月の風は林をなめらかにし、
何物をもとらず、すべてを知るために
詩人はこの平和の方へきた。

けれども、その愛する自然――つまり「畑はあらされ、林はまばら」になつてゐるのを見ると、かれは、あたらしい種蒔き」が「あたらしい粒」を蒔くことの必要を感ずる。

あたらしい種蒔きは
畑をさまよひ、
あたらしい粒を
畦へとなげる。

しかし、どんなに「詩の鉄」を深めても「歡喜の林檎」を得ることが出來ないと、かれはつひに『聖物汚辱』の護りを受けるであらう。

醉ひどれのハーモニカにつれて
死人をも踊らせやう。

しかも、その『聖物汚辱』の護りはもつと／＼慕つてゆくであらう。かれが自然を愛すれば愛するほど、また、かれが農民を愛すれば愛するほど。

雲がほえる。
金歯をした谷がわめく……
わたしは歌つたり祈つたり
天帝よ、柩をうめ!

――――

わたしの時がきた、
鞭のうなりは怖くない、
屍を、キリストの屍を
口の中から吐きいだす。

わたしは救ひを求めはしない
その苦しみと十字架とから。
わたしはほかの教義を會得した……

八

『プロレタリア派』のなかでもつとも知られてゐるのはミハイル・ゲラシーモフであらう。かれの詩『われら』はこの詩派の典型的作品としてよく引合に出される。その詩を讀んだ者は作者がいかに新しい勞働生活を愛してゐるかを思ふ。同時に、いかに大きな世界觀を抱いてゐるかをも感じずにはゐられない。

われらはすべてを執り、われらはすべてを知らう。
底のそこまで究めずにはゐまい。
黄金花咲く五月のやうに
たのしい心は醉つてゐる……
おごれる勇氣にかぎりはない、
われらは――ワグネル、ザンチ、チチアンだ。
われらはあたらしい博物館に
閣屋根をきづかう、モムブランのやうな……
………………
われらはパルフェノンの基石をつんだ
巨大なピラミッドの基石をも、
そしてあらゆる殿堂と、スフィンクスと、パンテオンのために
高鳴る御影石をきざんだ……

また、カ・ポレターエフの詩にもゲラシーモフの詩におけるとひとしい生活と勞働との讃美を味ふ。

あらゆるものは注ぎ、ほとばしり、
うち消しがたい火のやうに燃え
そして凡てはうたひ、すべては語り、
すべてはうす青い日に充ちる。
………………
青春の火のほとぼりで
ひかりは肉體を透しもしやう
高い空のやうに、いかに私をめぐる生活
いかに私の生活は青みかゝつたことよ……!

しかし、それがアレクサンドローウスキーの詩になると餘程破壞的で且つ鬪爭的なものになつて來る。もつとも勞働生活を愛することに變りはない。

われらは行かう、われらは行かう、われらは行かう、
大砲の殷々たるひびきの方へ、
日輪の雨のごとく
冬に凍つた魂へそゝぐやうに……

兩肩には千年の重荷、
心のかはりに――血のかたまり
われらの背後では數百萬の婦人服(ブルーズ)が
あすは火のいかりで燒かれやう。
…………
太古の空虚にむかつて
憎惡の河がながれる、
夏をむかへた土地が
わが火のやうな□□歌をうたはふと。

以上は『イマヂニズム派』と『プロレタリア派』との詩の傾向を述べたものである。すなはち、前者は主として農村を生命としてゐるが非農民的で非保守的で且つ非宗教的である。誰かゞかれら詩人を『ラスプーチン』といつたのは中傷だが決してまとをはずれてはゐないと思ふ。そこでは思想のゆたかさをもリズムをも否定される。これとは反對に、後者では主として農村ではなく工場が中心とされてゐる。けれども、そこには前者に見られないやうな積極的乃至鬪爭的な分子がある。かれら詩人は自分の勞働と自分の工場とを愛する。そして、あたらしくて健康で幸福な生活を勇敢に祈禱することによつてその文化史を飾らうとしてゐる。かゝるプロレタリア精神こそ、現代ロシヤ詩壇におけるもつと大きな特色であらねばならぬ。

九

しかし、現代ロシヤ詩壇におけるもつとも大きな他の特色はメシヤの思想に富んでゐることである。といふのは、今日かの國ではボリシェキーズムと哲學とを結びつけやうとされたやうに、またボリシェキーズムと宗教とをも結びつけやうとされてゐる。そのことは、この宗教的豫覺をうたつたブロックの『十

二』とベールイの『キリストは蘇りたまへり』とが、革命當初にいかに謳歌されたかを思つても充分である。たゞし、謂ふところの宗教感念は、現代ロシヤ文學の根本精神となつてゐるやうに思はれる。だから後にさらに說くところがあるだらう。

アレクサンドル・ブロックの『十二』は、その形式から『十二人』といはれその內容から『十二使徒』ともいはれる。かなり長い詩であるが、要するに十二人の巡邏兵がペトログラードの市中を練つてゆくことを書いたものである。ある吹雪の夜、かれら巡邏兵は隊伍整々として街路をすゝむ。その途中では赤い痣のある女を殺すやうな罪もおかす。しかし「餓えた犬」と呼ばれるブルヂョアの姿をみると急にかたくなる。「薄汚い奴、あつちへ行け」とかれらは叫ぶ。そして、銃劍いかめしく進む彼方に――それは何處だかわからないが――キリストの足音を聽くといつたものである。最後の一齣はとくに含蓄あるものとされてゐる。

かくして確かなあゆみで行く――
うしろには餓えた犬、
まへには――血ぞめの旗、
雪嵐に眼もみへぬ、
銃丸もあたらぬ、
やはらかな足並で、
眞珠のやうな雪をまく、
薔薇をかざした白い冠の――
先驅者は――イエス・キリスト。

ブロックの『十二』とよく似てゐるのはアンドレー・ベールイの『キリストは蘇りたまへり』である。ブロックには罪惡と淫蕩とがあるがベールイには纖細な神經とヒステリー性のたましひとがあると言はれる。しかし、ともにメシヤの思想に貫かれてゐることはいふ迄もない。

ロシヤよ
おん身は、いま
花嫁である……
春の
おとづれを
受けよ……
地は
花をもて

くれなゐなれ。
また白樺をもて
みどりに化せよ。
そこに——
復活が……
われらと共に
救ひが……
大きな薔薇をかざして
高くそだつた十字架がゆく。

ところで、かういふメシヤの思想はその後の詩壇にさらに著しくなつた。つまり、ブロックの『十二』とベールイの『キリストは蘇りたまへり』とが發表されてからうら若い詩人たちを起たしめたのである。たとへば、セルゲー・エセイニンは「ギリシヤの聖像」といふ詩集のなかでロシヤを「永久にわかくして眠れる谷」と呼んでゐる。そして、かれは「あたらしい救世主がロシヤの野に生れることを信ずる」といつて、

おゝ私は信じてゐる、
おん身は、おん身がしのゝめの容を生みだすだらうと。

歌つてゐる。また、ニコライ・クリューエフは、その詩集『太陽をもたらす者の歌』のなかで「太陽は父、ロシヤは母」と歌つてゐる。さういつてから、一批評家スローニムは次ぎのやうに指摘してゐる。「うら若い詩人の神の祝福へむかふ全的傾向と、アンドレー・ベールイならびにイワーノフ・ラヅームニックの指導のもとに、かれらはひとしくボリシエヰーズムの宗教的豫覺と、コムミユニズム的瞑想の中にあたらしい信仰、あたらしく神を求める心、またそれを排する心とを感じてゐる」。

一〇

革命ロシヤの文壇が『詩の高潮時代』を現出してゐることは前に述べた。その詩の花やかな反映のためか、または詩よりもヨリ多く創作上の困難があるためか、總じて散文方面は不振の狀態にある。この間にあつて、比較的に活躍してゐるのは『セラピオン兄弟』といふ一團體である。

『セラピオン兄弟』はゴーリキーの創設した『藝術宮』の中から生れたものであると言はれる。しかし、いづれも文壇の新人によつてかためられた團體であることはいふまでもない。かれ

ら作家は（作家）といふよりは（話し手）と言つたところがある。そして、讀者のまへに生活の一片とか挿話とか、もしくは未だ試みられなかつた寓話の大ものとかを提供してゐる。もう一つ目新しいことは、かれらの作風が革命前のそれとは組織的といひたいほど違つてゐることである。かういふ風に見て、ニコライ・アシューキンは次のやうに說いてゐる。「革命前のロシヤ文學は數學的であり非寓話的であつた。そして心理的解剖と哲學的理性との蓄積したものであつた。しかし、革命後のロシヤ文學は動學的で寓話的で且つ心理的解剖などいふものはない。さういふ藝術的傾向をもつた團體が『セラピオン兄弟』である」。また、イリヤ・エーレンブルグは次のやうに說いてゐる。「裝飾的藝術と組織的藝術といふ二つの方則の爭ひはずいぶん久しいものである。そのいづれが勝利を占めるかは勿論作家の偉大さによるのではなく、その時代に結合するか否かによつて決定される。そして、西ヨーロッパにおける戰後の分裂はエクスプレッショニズムをうみ、その分裂を征服して社會を建設しやうとする希望は組織的藝術と密接な關係をもつた。かうして、いはゆる組織的藝術は裝飾的藝術のうへに勝利を博し、ロシヤの散文をすべての現代藝術の方則に結びつけやうとした最初の團體が『セラピオン兄弟』である」。しかし、この新團體が將來におけるロシヤ文壇の中堅になるものと思つてはならない。そこではもつと／＼多くの經驗が積まれるであらう。またもつと／＼多くの試練が經られるであらう。そして始めて偉大な文學が生れなければならぬ。

しかしその將來を斷ずるものは恐らくあるまい。だから、ここでは革命當初から今日までの文壇を回想するといふよりは、重立つた作家ひとり／＼の勞作を擧げることである。たゞし、これはア・ヤーシチェンコの源論『最近五年間の文學』に據つたものであることを斷つておく。ヤーシチェンコは、「何よりもさきに藝術的散文、主として文學がわれ／＼の注目をひく」といつて下のごとく述べてゐる。――はなはだ遺憾であるがロシヤ散文作家中の大きな損失を認めなければならぬ。といふのは、過去數年間にレオニード・アンドレーエフをはじめ、ボボルイキンやコロレンコ其他の人々が死んだからである。けれどもかれらに代る第一流の散文作家があらはれた。それはエーレンブルグとムーラトフとの二人である。イリヤー・エーレンブルグは、今日まで第一流ではないが善良な詩人として聞えてゐた。そして、一九二二年にベルリンで諷刺的なローマンス『フリヲ・フレニト事件』を發表した時かれの散文作家としての第一歩は踏みだされた。エーレンブルグの藝術ならびに生活にたいする

見識は認めるがからいふことも忘れてはならない。それは、かれのローマンスが邪悪でおひやらかし的な――鋭智としばく鉦しきれぬ皮肉との奴隷であることを。しかし、その作風も調子も「かれ自身」がつくつたもので、『本當らしくない歴史』、と『十三の管(ツルーブカ)』との二著はかれ獨特の何人にも追隨しないものである。パウエル・ムーラトフを現代の作家といふことは出來ない。かれの興味や味ひはむしろ過去にある。てふどエーレンブルグと好一對で、かれは今日はじめてローマンスの世界に自分の力を試めすやうになつた。最近ベルリンで出版されたばかりの『エゲリヤ』は、過去五年間にロシヤ文學が生んだもつとも傑れた作品の一つでなければならぬ。それは、おだやかで誘惑に充ちたものではあるが聰明で、讀後にもあるひじような快感をあたへるローマンスである。

二

ヤーシチェンコは次ぎに新作家を紹介してゐる。革命のなかに生れた、もしくは革命によつて作られた作家のなかではより多くの注目がボリース・ピリニャークにむけられる。かれの凡てはエル・エス・エフ・エス・エル――すなはちサウェート共和國の精神と騷亂とに貫かれてゐるが、まだ自分の進路を確めないと言つたところがある。かれの創作集『雜草』、『裸の一年』『イワン卽マリヤ』はいづれもあたらしい現實生活と苛酷で反駁的でしばく畸形的な實在を描いてゐる。そのかれには可なりの創作的貯蓄があり、これから伸びやうとする著しい藝術力もあるから、今後りつぱな作家になるかもしれない。しかしそれは未來が審判する。フセウォロード・イワーノフは、不意にシベリアの密林から、もしくは同胞戰の血の悲劇の中からぬけ出した作家である。しかも『パルチザン』、『花さく風』。『空色の砂原』などの大作をかいて成功してゐる。ゴーリキー型の(自然主義的)作家であるが、その作の内容からいふと現代作家中もつとも殘忍好きの作家といへやう。全作品のテーマは革命と同胞戰との悲劇其他である。これら二作家のほか、ゆはゆる(希望を屬する)新作家は少くないがまだ決定的なことはいへない。その内の二三を拔くならば、エム・ゾシチェンコはひじようなユーモリストとしてすぐれ、カ・フェヂンは將來かならずアカデミズムにかへる人と認められ、イ・ソコロフ・ミキートフは作家となりながら夫れに打ちこめない特色を、またア・ドロヅドフはアンドレーフのながれを汲むといふ特色を有つてゐる。

わかくて(新しい)作家とともに(古い)作家も書くことを止

めない。これらの作家のなかで相變らず成功してゐるのはアレクセイ・トルストイである。かれの書いたものの内でもつとも傑れてゐるのは『ニキータの少年時代』といふ小說だが、おなじくローマンスの『苦しみの中をゆく』も侮ることは出來ない。これは革命前後のことを題材としてゐるがかれには强い信念がないために讀者をとかく外らしてしまふ。また、アンドレイ・ベールイには最近二十年間の文壇生活を紹介した『ブロックの思ひで』を見るべく、マクシム・ゴーリキーにはトルストイ、アンドレーエフ、それにコロレンコの『思ひ出』を擧ぐべきである。この外にメレヂュコーウスキー、クープリン、ブーリン等があることはいふ迄もない。なほ、散文にたいする詩の方面はなか〳〵盛んであるが、新しい詩人を一々擧げることは困難である。しかし在來のすべての詩人も餘作に餘念がない。最後にブロックとグーミリョフとを失つたことを述べておく。

二

作家と作品とを紹介した序でに他の藝術界をも紹介しておかねばならぬ。すなはち美術方面を述べるならば、そこでは「アカデミズムに反抗せよ！」といふやうな叫びが擧げられた。そして、アカデミーによつて生活した老人たちは追放されてあたらしい青年畫家が代つた。かれらは熱病的といはれるほどの緊張さをもつて自由開拓の時代を經驗した。その中にはリアリスト派やイムプレッショニストもまぢつてゐたが、フューチュリストとキュービストとがもつとも多かつた。中でも勢力のあつたのはフューチュリズムのタツリンやシュテインベルグなどであつた。これは理由のあることで、かれらはロシヤ畫壇における(極左黨)だつたのである。しかしこの輝やかしい時代はやがてさらずにはゐない。なぜなら、フューチュリズムやキュービズム乃至イマヂニズムは(顏を歪めた藝術)として排斥される時代がきた。このことは勞農政府のある大官の演說によつても察しられる。「これら凡ての顏を歪めた藝術家は——プロレタリアの俳優でもなければその藝術はわれ〳〵のものでもない。れからは——ブルヂョア的偏見とブルヂョア的腐敗との種族である。われ〳〵には勞働者と農民とに理解さるゝほんたうのプロレタリア藝術がなければならぬ」。そして、かれらプロレタリアに近しくて貴い藝術の創造がはじまつた。同時に、ルナチャールスキーのいつたやうに「藝術におけるインチビジュアリズムを葬れ、コレクチビズム萬歲！」といつたやうなことが叫ばれた。この理想にあてはまつたものがいはゆる『組織的藝術』で、それは藝術と機械と繪畫と彫刻の四原素を綜合したものである。

そして、謂ふところの藝術〈もつともマテリアリズムの眞髓に徹したものとして一般から尊敬されてゐる。

　また美術界から演劇界へ眼をはなつならば、そこでもあたらしい試みがされてゐることを看取しなければならない。バレー界についていへば、ロシヤ舞踊の創始者ペチパは外國臭味の多かつたものをロシヤ化したかもしれない。またヂャギーレフはそのロシヤ化したものを世界化したかもしれない。けれども、これらの舞踊はあまりにも技巧にはしつた結果非藝術的になつたものもある。だから、さういふバレー界の危機を見越して例のダンカンをはる〴〵アメリカから呼んだのも今日のロシヤである。しかし此れだけではまだ充分でない。かの女の舞踊についてなほ少しく說明しなければならぬ。ダンカンにしたがへば舞踊はギリシヤの塑像を見るやうなものであるを要する。すなはち、人間の美しさはその覆物をすつかり取つた時にあらはれる。かうして、かの女はまづ衣裳方面から改めて、肉體を型どつたトリコも胸を締めつけるコルセットも、また先きのとがつた危險な靴をもすてた。つまり、勞農政府はかの女の舞踊が單純であるといふことを愛したのであらう。そして、この單純さといふことがかれらの今日求めてゐる精神とどこかに一致してゐる。バレー界がさうなら劇場はどういふ風に變化したであらう。この說明にいる前、俳優ともつかず音樂家ともつかぬシャリャーピンの現狀を紹介しておきたい。言ふまでもなく、かれはベースの名手として世界的に知られてゐるとともに舞臺上でも特殊の技倆を有つてゐる。かれは革命におどろいた他の藝術家のやうに祖國をすてるに忍びなかつた。なぜなら、その革命はたんなるロシヤの不幸ではなくある大きな犧牲の結晶であると思つた。だから、この一大事變によつて新しくされた祖國を何等かに意味づけやうとした。それは、國民的なオペラを創造することであつた。そして、ある時は座骨神經痛やなにかで危篤まで傳へられたが、いまだに『國民オペラ部』の首班として活動してゐる。しかしその國民的なオペラは創造されたであらうか。さういふ事があるなしに拘らずかれは『國民の俳優』てふ尊稱を受けてゐるのである。

　尊稱といへば、今日のロシヤではかれら藝術家にたいする特別給養制度が設けられてゐる。これは『アカデミーチェスコエ・ベスペーチュニエ』といはれるもので、その給養をうける者を五階級に分つてゐる。ところで、この最高位はシャリャーピンやエルモーロワのやうな俳優ばかりで占められてゐるではないか。これを見ても勞農政府がいかに演劇にたいして熱心であるかゞわかる。思ふに同政府は演劇をもつて國民を敎化する

ことが有效であると思つてゐるのであらう。そこではいかなるものが上演されるか。また俳優の技巧や劇場の構造はどうか。これらのことを茲で一々説明することは出來ない。しかし、單にかの『モスクワ藝術座』だけを見てもその一般が知られやう。同座が革命の影響をうけてスタニスラスキーとカチャーロフの二派に分れたことには大した意味がないかもしれない。しかし、その海外巡業中にかれらが子飼ひにした『スツヂオ』(藝術座の試演場見たようなもの)のなかにも分裂を來たしたことを見遁すことは出來ぬ。といふのは、先きにいつたスタニスラウスキーの一派は結局『右黨』に、また第一と第三の『スツヂオ』は『左黨』となるやうな精神的破綻があつたのである。これに、あたらしく出來た『第四スツヂオ』を加へるならば、革命前まで世界的の榮養をもつてゐた『藝術座』もつゐに(劇壇の革命)を蒙つた譯である。しかるに、從來この『藝術座』は劇壇の革命兒をもつて任じてゐたのであるから他の劇場は推して知るべきであらう。そのもつともいゝ例はモスクワにある『カーメルヌイ・テアートル』である。それは、革命前からあつた一劇場の分離したものであるが、今日ではもつとも(新しい)劇場と呼ばれてゐる。そこでは、有りふれた戯曲を排して各劇の雰圍氣を創造しやうとし、また道具の配列によつて韻律的階調を排出しやうとしてゐる。同劇場の俳優たちはこれを「演劇の劇化」と稱してその理想にむかつて進み、今日ひさしく求めてゐた大きな報酬に有りつかうとしてゐる。しかし、その功績の大半は同劇場の支配者たるアレクサンドル・タイーロフに分けられねばならぬ。これをイリヤ・エーレンブルグにいはせるならば、「ロシヤ革命は、タツリンの『紀念碑』(かれの組織的藝術を應用して非常に評判なもの)とタイロフの劇場とベールイの『叙事詩』とともに——ロシヤ現代詩をあたへた」のである。けれども、ロシヤ演劇を稱讃するためには、只今海外で發展するバリーエフの『蝙蝠座』やピトエーフの一座をも加へなければならぬ。かうして、ロシヤ演劇は他の美術や音樂とともに一種の驚異として世界を風靡してゐるのである。

一三

ロシヤはひさしく暗いさびしい時代を經驗してゐた。それはある永い夜がいつまでも〳〵續くやうに見へた。だから、その夜明の光をはやく仰ぎたいものとみんな待つた。中にはその夜をみづから勇敢に貫かうとする者もあつた。けれども深い闇は依然として晴れなかつたので國民はひとしく悲嘆し慷慨し絶望してしまつた。しかし、ロシヤの偉大な藝術家はいつか光明の

くることを信じてゐた。そしてそれは遂にきた。この光明とは先頃の革命であつたらう。

しかし、この革命はあまりにも悩みの多いものであつた。そこには苦しみがあつた。涙があつた。また血もあつた。だから革命のどん底にある祖國をすくう前に、その寒さと餓えからロシヤは滅びてしまひはしないかと疑はれた。けれども「それは自らを火と血と貧しさのなかに陥れたのであつた。さうすることはロシヤを滅ぼすためではなく世界を抱擁しやうとする大きな希望からである」――とアンドレー・ベールイは考へてゐる。かれに從へば「革命は物質にたいする精神のたゝかひ」である。夫れあるがために、歴史的なヨーロッパ大戰の勝利をも顧みずに、ロシヤは「自己の權威を岩の上から投げすてた」のである。そしてかれは歌つてゐる。

私たちは死人のなきがらの上に
神のあたへた灰をふり撒かう、
そして懊惱を消してしまうだらう。
過ぎた日の深淵(ふち)には
懐疑があつた。
私たちにはまだ判らない
今日、いな、只今何事がほんとうに爲されつゝあるかを、
けれども世界の神秘がどこかに殘されてゐる……

ロシヤ革命は偉大ではあるが悲劇的であつた。同時にまた根元的なものであつた。しかし、さしもに激しかつた國民戰爭もおさまり、やうやくサウェート共和國は統一されやうとしてゐる。そして今日あたらしい文化生活に入らうとしてゐるのである。この國の美術を――アシューキンは「動學的」なものといひ、エーレンブルグは「組織的」なものと言つてゐる。それを綜合してルナチャールスキーは『未來の藝術』とも呼んでゐる。そして、そこには主としてプロレタリア的傾向があり、メシヤの思想にも育んでゐることは今更らくり返へすまでもない。だから、近い將來はこの新しい一つの傾向とこの高遠な一つの思想のもとに、あたらしい藝術は日に〱生ひたつて行くであらう。すなはち、文學はそれ自身の方法により、音樂はそれ自身の方法により、美術はそれ自身の方法により、さらに演劇もそれ自身の方法によつて。この場合、「サウェート・ロシヤ」と「海外」との間に思想的分裂などがあつてはならない。これらを一貫して生れたものこそ偉大なロシヤの偉大な藝術であらねばな

らぬ、

しかし、先きにいつたロシヤ新藝術の二特色中——メシヤの思想はもつとも重要な分子であらう。なぜなら、ロシヤの現實はプロレタリアを中心に世界を救はうとしてゐるやうに見へるからである。ベールイはまた歌つてゐる。

　ロシヤよ、ロシヤよ、ロシヤよ、
　未來の救世主！

そんて、このゆはゆる『メシヤの思想』を體驗するものは『スキーフ人』である。スキーフ人とはロシヤ先住民族の名で、かれらは「精神上のマクシマリズム」とされてゐる。また、そのスキーフ人のすむ國を『イノーニヤ』と呼ばれてゐる。イワーノフ・ラヅームニックにしたがへば　イノーニヤとは「人間の懺悔しない魂」で地上に築かうとするユートピアである。そして「地理的のものでなく精神的または人類的なものでもある。さらに、カーメンスキー（ワシーリー）にしたがへば、このイノーニヤを支配するものは『農民キリスト』でなければならぬ。そして、エセイニンは預言者のやうな口吻をもつて歌つてゐる。

　牡馬にのつた新救世主は世界へゆく。
　われらの信仰は——力のなかに
　われらの眞理は——われらの中に！

ヨーロッパとロシヤ、東方と西方——この問題はかの國の藝術をつねに惱ましてゐた。そして今日までの間にどれだけの犠牲が拂はれたか。またどれだけの體驗がつまれたか。しかも未だ解決されずに殘つてゐるところの大きな謎なのである。

——完

江南の風物と趣味

村松梢風

風景の印象

支那の青年文士田漢君は湖南省の出生だが、故郷の洞庭湖や瀟湘八景の話をした時恁う言つた。

「洞庭湖の大きさはどれ位あるかと言つてよく日本にゐた時分に訊かれたが其の答へには困りました。何故かと云ふと洞庭湖の大きさは決して一定してゐない。大きくもなれば小さくもなる湖なのです。それは一寸聞くとおかしいやうだが、詰まり洞庭附近の土地は一帯に低地であつて、雨が降ると其處へ水が溜る。それが何百里となく廣々とつながつて其處に大きな湖が出現するのです。が、大氣が乾燥して雨が降らなくなると、其の水は何時となく消えてしまつて其の地方は只一面の荒蕪地になる。渺渺たりし湖は掻き消す如く失くなつてしまふのです。無論中心湖はあるけれども、さういふ風だから、湖の大きさだの形狀などを說明することは容易でない。だから洞庭湖の景色を恁んな風だと云つて簡單に描寫して見せるといふことも猶更困難な話です。瀟湘八景も其の通りです。人を伴れてつて、此處が八景だと云つて見せるわけにはいかない。大體の場所は極まつてゐるが、それは或大きな地方をさして云ふことで、夜雨でも暮雪でも晩鐘でも、それは其の地方の何處で見ても聞いてもいいのです。近江八景のやうに、三井寺の鐘でなければいけなかつたり、粟津の晴嵐に限つたりするやうな局部的のものではありません。だから、時期や場所に依つて瀟湘八景と云つても全く變つた氣分の物になります。詩人が詩を作るにしても、畫家が繪に畫くにしても、題材から異つたものが出來ます。早く云ふと藝術家は、各々自分の瀟湘八景を其處へ創造（クリエート）することになるのです。」

けれども私は矢張り田漢君の說明を得て初めて洞庭湖や其の地方の趣きを髣髴することが出來たやうな氣持がした。日本の畫家は古來誰れでも粉本から得た觀念に依つて瀟湘八景を畫い

てゐるが、洞庭湖迄旅行して一ケ年位其處で暮して見て、何んにも無い瀟湘八景を自分の感覺に依つて作り出して畫いて見たならば、眞個の新し味のある瀟湘八景が出來るであらう。それは僅かに一例であるが、支那の風景はすべてがさういふ趣きをもつてゐる。大陸的で大まかなのである。日本の名勝地のやうに誰れが見ても直ぐにわかつて感嘆するやうな景色は尠い。沒趣味な人間だつたら、折角名所に足を入れ乍ら知らずに通つてしまふであらう。其の代り見る人の趣味眼が高く、思想が深かつたら、其處に無限の味と變化とを見いだすのである。

私は、支那へ行つたとは云ひ乍ら、徹頭徹尾上海でばかり暮してゐて、其の間にたつた一度南京と西湖へ旅行したばかりで、支那の支那たる奥深い內地の景色は一向知らない。が、南京へ行く途中や、西湖へ行く途々汽車の窓から見た田舍の景色には未だに眼に殘つてゐるものが澤山ある。上海を夜行列車で立つて、南京の少し手前で夜が明けた時、寢苦しい夢から醒めて窓の外を見遣ると、日本を發つて以來一ケ月餘り見たことのなかつた山が、鐵道線路から半丁或ひは一丁位距てゝ、餘り高くなくうねうねと連なつてゐた。雜木山や草山が多かつた。山の麓に一筋の街道が延びてゐる。道の際に時々石の彫刻をした立派な鳥居のやうな物が建つてゐる。それは墓道の門であつた。ゆうべ夜半頃から降り出した雨が今朝はあがつてゐたが、空はまだ晴れ切らずに、重たい朝霧がそこはかとなく流れてゐる。其の霧の中に百戸位の村落が靜かに廣つてゐたりする。村には川があり、橋があり、楊柳の茂みがある。いづれの國でも田舍の人は早起きと見え、冠をかぶつて長い着物を着てゐる農夫が畠の耕作をしてゐたり、淺葱のだぶだぶの服を着た年取つた女が川べりへ出て野菜を洗つてゐたりする。それらの總ての物を、まだ睡さうな朝の光線の中に私は見るのであつた。それは至極平凡な景色であつた。だが其の平凡な景色は、何かしら深い意味を有つてゐるやうに見る人の胸には感じられてくるのである。滬杭鐵道の沿道の風景も私は好きだつた。其處はたゞ何處迄も際涯なく續く平野だつた。麥は悉く刈り取られ、其の跡には一面に蓮華草が咲いてゐた。水邊には楊柳が枝垂れ、黑い牛が臥してゐる。舊家らしい門構への農家がある。森がある、祠夏の眞晝の太陽があらゆる物の上で燃えてゐる。地勢が段々下降すると見えて、行くに從つて水郷が多くなる。一直線に、地平線の彼方まで貫いてゐる運河、城壁の外を流れてゐる河。遠く白帆が點々として浮び、眼のあたりには帆柱がごちやごちやと立つてゐる。河岸に立ち並ぶ町。町の背後に蜒蜒と走つてゐる城壁。眼に見る物は悉く詩であり、繪になつてゐる。

大陸的の支那國內では、西湖は唯一の人工的風景の典型であつた。周圍七里餘りの其の小さな湖の周圍や、湖中の幾つもの島や、其處は數千年來の歷史、文明、趣味の結晶であつた。それは人工的努力といふものがどの程度迄自然を凌駕し、さうして自然の爲し能はぬ藝術的感激を人に與へることが出來るものだかといふことを十分に示してゐた。西湖の美觀は八分通り建築の美觀であつた。湖と、周圍の山とは、いつさいの建築物を一層美しく見せる爲の背景であるに過ぎなかつた。西湖に遊んで私は初めて支那といふ國が建築の國であることを知つた。

支那の建築は、西湖以外の土地で見た他の美術的建築の場合に於ても常にさうであつたが、用材が極めて粗惡で、裝飾もまことに大まかである。だから家の內部へ立入つて細かに眺めると殆んど價値を失つてしまふ場合が多い。支那の建築は、外部から眺めるべき建築である。それも相當の距離を置いて觀賞すべき建築である。外から離れて眺める爲の建築としては、支那程優れた建築は世界に無い。我が國の建築物は、用材が非常に上質で、そして部分的の意匠と裝飾とが精巧を極めてゐる點に於て世界に冠たるものがある。が、外觀上の美觀では到底支那とは競へない。日本の建築が內容を重んじるのに對して、支那の建築は形式に全力を注いでゐる。日光の陽明門、芝山內の靈廟、或ひは安藝の宮島と云つて見た處で、其の外觀上の美と藝術的感興の豐富なることに於ては遂に西湖畔の一茶館にだも如かないのである。

西湖に遊ぶ人は、湖を距てゝ南北の山の上に相對峙してゐるところの二つの古塔を見るであらう。南の塔は雷峰塔であり、北の塔は保叔塔である。どちらも古代の煉瓦で築かれた塔だが、近寄つて見ると處々破損して、外部や頂上には雜草だの名も知れぬ灌木だのが生へてゐる。雷峰塔は太く短くて鐘を伏せたやうで、保叔塔は細くて高く杵を立てたやうに鋭い。兩々相對して對照の妙を極めてゐる。此の二つの塔があるが爲に、西湖の景色は俄かに夢幻的空想力を增して來るのである。千年二千年の古き歷史と傳統を思はせ、敬虔な神秘的印象を旅人の胸に植え付けてゐる。

湖畔を離れて、山路へ分け入ると、山にはうすく雜木が立つて、其の下草に蕨が三尺位に伸びて一面に生ひ茂つてゐた。餘り高くない此の山を向う側へだら〳〵と下り切つた處に、清漣禪寺といふ寺があつた。「玉泉古迹五色巨魚」と書いた石の碑が門前の涼しい流れの側に建つてゐる。其の寺には、長方形の大きな泉水があつて、玻璃のやうに透明な水の中に三四尺位もある鯉が無數に泳いでゐた。泉水の三方を圍んで屋根の續いた平屋

の建築が取り卷いてゐる。正面の欄間に「魚樂國」と書いた木彫りの大額があがつてゐる。其のせいの低い建築は三方から各自の古雅な姿を碧い水の底にうつし合つてゐる。何んたる調和、何んたる寂びであらう。其處に佇んでゐると、此の身は全く塵外に脱したやうな氣持になる。

　雲林寺といふ寺は巨刹だつた。廣い〳〵境内に幾棟かの樓門堂塔が甍を傾け結構壯麗の觀を競つてゐた。が、其の裏山の稻光といふ寺の庭から脚下を見下した景色に勝るものはない。其處は幾つもの山が、峯を連ね、谷を合して、僅かに南面だけが開けてゐる。稻光へ登る路の兩側には竹林が打ち續いてゐる。見渡す限りの山々は鬱蒼たる老樹をもつて被はれてゐる。靈舫の舳よりも更に反りを打つてゐる樓門や堂の屋根が、山の間や樹間から現はれてゐる。邊りを微かな雲烟が飛んでゐる。南畫の所謂山景樓閣圖は茲から創つたものかと思はれる。

　併し、西湖の建築の粹は何んと云つても湖畔の建物の中に一番多く現はされてゐた。水と建物との調和、建物と庭園との調和。湖畔に立ち並ぶ多くの茶館、酒樓、別莊。それはあらゆる技巧を盡して輪奐の美を競つてゐる。就中其の代表的建築を私は西湖の西畔にある劉莊といふ古い邸宅に見た。其處には湖に對つて一つの樓門が建てられてゐた。其の樓門の樣式は複雜で珍らしい程精巧であつた。それが靜かに水に映じてゐる光景は實に何んとも云へなかつた。私は船頭に命じて舟をつけさせて邸内を見物した。門の處に番人がゐて、駄菓子だの砂糖黍だの黑慈姑などを賣つてゐた。それは空き家であつたから誰でも自由に見物することが出來るのだつた。大きな部屋と廊下が迂餘曲折して限りもなく續いてゐた。庭は荒れ果てゝゐるけれども水石の妙を極めてゐた。途中に小門があつて其處から先へは行かれぬやうになつてゐたが、一緒に隨いて來た船頭の伜の小僧に番人を呼んで來させて廿錢遣ると番人は門の戶を鍵で明けて其の奥へ私を案内して呉れた。其處には立派な殿堂があつて神を祀つてあつた。湖上から最初に見られる樓門は其のお宮の前に建てられてゐるのだつた。門は風雨に曝されて可成り劇しく破損してゐたが、修繕も加へずに捨てゝある。其の奥にも家が幾棟もあつて、數限りない部屋が廊下でつながれてゐた。近頃まで人が住んでゐたらしく、小さい部屋には帷の掛つた寢臺が据えてあつたり、女の部屋らしい飾り付けがまだ其の儘になつてゐたりする。私は調べて見ないから、此の邸宅が何人の住んだ跡だかといふことを知るよしもない。が、其の豪奢に至つてはまさしく一代を壓するものだつたに違ひない。恁うした思ひ切つた事をした昔の支那人の生活を私は想像して見た。

其の附近には素園だの高莊だのといふ有名な別莊風の邸宅があつた。建築以外に、私は此處へ來て初めて支那の庭園の妙を知ることが出來た。どの家の庭園も水に楊柳と竹に石をもつて造られてゐた。建物と建物との間を水が流れてゐる。流れの奥には竹林がある。廊下が橋になつて架つてゐる。石の上を流れて來る水際には柳が枝を垂れてゐる。さうして其の水は湖に注いでゐる。それは劉莊の庭の一部の光景であつた。竹林の妙は高莊に於て極まつてゐた。全體江南一帶は竹の產地である。到る處に竹藪がある。竹の美しいことは無類である。南畫に竹を多く畫くことは當然であつた。併し、同じ竹と云つても日本の竹とは感じが違ふ。日本で竹の產地は京都附近である。宇治、山科、嵯峨、京都の近郊には美事な竹林がある。けれども其の京都の竹と雖も到底美しさに於て支那の竹とは比較にならない。支那の竹は、繪に畫く爲の竹である。が、京都の竹は、樋にし、籠を作り、或ひは筍を堀る爲の竹林である。竹に心は無くも、兩者の間に格段の品位の高低がある。崩れ掛けた土塀がある。塀の前にも後にも竹林がある。其の竹の茂みの向うに六角の樓が見える。樓の上では竹林の七賢らしい人物が茶を飲み乍ら語つてゐる。それは高莊の庭の一隅の光景であつた。

支那の庭園を見物して私が些か發見をした點を云へば、それは建築物の美觀を助ける爲の庭園であるといふ事であつた。だから、支那の庭園は外部から見るべき庭園であつた。こゝが日本の庭園とは趣きの違ふ處である。日本の庭園は、家の内部から、座敷に座つてゐて見るべき庭で、どんな名園でもさう設計されてゐる。私は今年の冬京都へ行つた時銀閣寺を見物した。東山時代の代表的庭園の美觀が今も猶眼前に彷彿してゐる。其の時私は庭下駄を借りてあの泉水の邊りをそゞろ歩きして見た。さうして庭の內を眺めて見た時には、其の前に東求閣の座敷から眺めた時の何分の一の感興しか起らなかつたことを覺えてゐる。山谷の八百善の庭は、餘りに規模が狹小で名園とはいへないだらうが、文化文政の市井の趣味を代表してゐるものとして遊い庭だと私は思つてゐる。是れも一度物好きに庭へ下りて歩いて見たところが、木の枝が袖に觸つたりして、飛石の上も歩きづらく、何んとなく窮屈で鬱陶しいやうた感じがして格別な興味も引かれなかつた。日本の庭園は、何處迄も座敷に座つてゐて見るべき庭園である。だから其の多くが大きな自然の形象を模してある。泉水は池に擬へ、池ならば湖水に擬へてある。築山は峨峨たる峻嶺であらねばならぬ。芝生は野原であり、寄せ植ゑは林であり森である。樋の水の流れは激流奔滔する谷川を偲ばせてゐるのである。さうしてそれらの總ての景物を一

定の視野の下に統一して眺める處に、初めて日本の庭園の目的があり意味があるのである。かやうに庭園其の物を見る事が目的の庭園としは、日本程庭園術の進歩してゐる國は無い。が、一長一短は免かれ難い。反對の側から見て、建物と庭との調和、樹木の陰影、それ等の點に至ると日本の庭は落第である。大概建築物がむき出しになつてゐる。銀閣寺の如きでも、さすがに銀閣は庭園の點景建築として建てられてあるだけに樹木や泉水との調和が巧みに取つてあるが、銀閣の方から母家であるところの東求閣を眺めて見ると、家と庭とが別物になつてゐる。白山御殿の庭園でも、大隈侯の庭園でも、庭園其の物としては立派であるが、肝心の建物は野天に裸で立つてゐる。其處へ行くと支那の庭園は、何處迄も建築の附屬物としての役目を忠實に果してゐる。樹木で家を隠し、泉水に建物の影を寫し、外部から眺めて一幅の繪にならしめるの用意が甚だ周到である。それでゐて屋内から見ても決して雅趣を失つてゐない。日本の庭園の如く廣大なる形象を取り入れてないといふだけで、閑寂の趣は却つて此の方が多分にある。日本の庭と支那の庭とを折衷した處に、兩者の目的に適ふやうな理想的の庭園が生れはしないか、我が國の庭造專門家に向つて一考を望み度いものである。

日本の畫家で筆硯を載せて江南に遊ぶ者が近年著しく增加したさうである。交通が便利になつたからでもあらうが、一つは畫家の研究心が旺盛になつて在來の粉本のみに依つて甘んじてゐられなくなつた例證として大いに結構な事である。殊に南畫を畫く人は支那へ行つて十分に支那の自然を研究して來る必要がある。山川の形狀、田野の光景は云ふまでもなく、一幹の松の樹でも、一むらの竹林でも、日本で想像したのとでは感じが違ふ。一木一石悉く支那である。地質が異り、空氣の乾濕の度も非常な相違があるのだから其の筈である。況んや人物を畫く段になれば、其の國へ行つて生きた人物に就いて研究をして來なければ嘘である。で、畫家が支那へ遊ぶことの流行はどの樣な意味に於ても善い風潮であるには相違ない。私が今春二ケ月間上海に滯在した間にも、上海の日本人新聞の船客往來欄を見てゐると、畫家の來る者歸る者の名前が每日のやうに報道されてゐた。曰く有名な大家某畫伯、曰く新進氣鋭の某畫伯、曰く無名の畫家某々氏、或ひは老畫伯、或ひは青年畫家、と應接に遑が無いくらゐである。處で、是れ等の多くの畫家が、上海へ着いて偖何處へ出掛けるのかと見てゐると、十人が十人蘇州へ行つてしまふのである。彼等は、船から降りるが否や、上海の宿屋で一と晩泊る暇さへ惜しいと云ふ風に、行李を

提げてあわてふためいて蘇州を差して走つて行くのである。それ程蘇州は日本人間に有名であり殊に畫家仲間では畫題の仕入れ場になつてゐる。確かに蘇州はそれだけの場所であらう。畫家が眼の色を變へて飛んで行くのも一面に於て無理はない。けれども、江南の天地は頗る廣い。あながち蘇州へ行かなくたつて絶好の畫題は他に幾らでもある。石ころが轉がつてゐる程度に於て幾らでもある。それだのに、田舍者が買ひ物と云へば三越でなければならないやうに、畫伯諸君が猫も杓子も一樣にあの蘇州へ驅け付けるのを見てゐると、私は失笑を禁じ得なかつた。それほど日本人の頭にこびり附いてゐる蘇州といふ既成觀念に囚はれ乍ら、其の土地で製作をした處で何程の繪が出來るかと私は疑はれる。全然人の知らない土地へ行つて、恐らく支那人でさへも畫いたことが無からうと思はれるやうな新らしい畫題に向つてなぜ力作をしようとはしないのであるか。さうしてこそ初めて支那に遊んだ甲斐があるといふものだ。新らしく支那に遊ばふとしてゐる畫家に對しては私は切に其の點を慫慂したいと思ふのである。

上海の市中にも變つた面白い景色が澤山あつた。蘇州河がやがて黄浦江に合しようとしてゐる其の河口間近に公園橋（ガーデンブリッヂ）といふ橋がある。其の橋に立つて見廻した四邊の景色でも、或ひは河口の三角州の小さな公園から橋の方を眺めた景色でも、それは確かに上海獨特の景色であつた。蘇州河の河口を挾んで、片側は公園になつてゐて、片側には煉瓦造りの各國の領事館が立ち並んでゐる。岸へ寄つて無數のジヤンク船が舫つてゐる。本流には軍艦だの汽船だのが碇泊してゐる。公園は、樹木よりも芝生と花壇とが大部分を占めてゐて、ベンチが澤山置いてある。いつ行つても其のベンチは夫婦作れや子供作れでふさがつてゐる。鳥打帽をぞんざいに冠つたり、荒い辨慶縞の服を着て赤つぽいネキタイなどをした浮浪人（マドロス）らしい組が芝生の上で腹這ひになつて何か話し合つてゐる。樹木の間から市街の複雜な建物が重なり合つて見える——。

老靶子路との交叉點から北四川路を更に北へ二丁位行つたあたりの、町幅が狹くなつて道がうね／＼と曲つてゐる處の其の邊の街の光景、妙な形をした屋根の線、壁の色。それは油繪に畫いて見たら面白いだらうと思つた。

靜安寺路の端れにある靜安寺といふ寺は古い土塀で圍はれてゐて、其の塀外の往來には榎の大木が二三本立つてゐた。それを、少し離れて、榎と、塀と、寺の建物とを一緒に取り入れて眺めると、非常に綺麗な繪になつてゐた。

私が住んでた老靶子路（ローボーツロー）から餘り離れてゐない昆山路（コンサンロー）といふ處

の町なかに極く小さな公園があつた。昆山花園といふのだが、花壇も何もなく、少しばかり樹木が植はつてゐるだけで、此處は全然小供の遊び場になつてゐる。で、普通ベビーガーデンで通つてゐる。午後から夕方なぞに通ると、澤山の子供が其處で鞠投げなぞをして遊んでゐる。が、子供の遊び場だから、夜になると全く人がゐなくなる。瓦斯燈が青い光を地上に投げてゐる。夜更けて其の公園を通り拔けたことが度び〳〵あつた。或る晩も一時過ぎに友人のS君といふ人と一緒に其處を通つた。

何やらの木が枝を擴げてゐると、其の手前にある瓦斯燈が木の方を向いて、樹木の葉の上に氣味惡いほど青白い光を投げてゐる。

と、S君が、其の瓦斯燈の火を見上げながら言つた。

「芥川龍之介といふ人は妙な事を言ふ人ですね。あの人が來た時、矢つ張り夜更けに此處を一緒に通つたことがありました、其の時芥川君があの瓦斯燈を見ながら突然僕に恁う云ふんでした。（ねえ君、あの瓦斯燈が獨りでぐるツと此方を向いたら怖いだらうね――）僕は何んだか知らないがヒヤリとしましたよ。今ふツと其の事を思ひ出したんです」

私は其の話を聞いて、芥川君が異常な感能を有つてゐることに感心した。

それは宵だつたが、雨あがりで霧のかゝつてゐる晩、其の公園の横を通つて北四川路の方へ歩いたことがある。其處らは殘らず煉瓦造りの建物で、三階から五階位の大きな住宅ばかりが並んでゐる。と左側に、斜めに入り込んでゐる奥深い露地があつた。露地の口に立つて見ると奥は眞つ暗だつた。兩側の建物と、一番奥の突き當りの建物との屋根が、どんよりとした白つぽい空の中間に複雜な高低をもつた輪廓を付けてゐる。たつた一つ奥の家の高い窓に明りがついてゐる。それは、其處の暗がり全體の一つの眼であるやうに見える。輕いヴェールのやうな霧は、露地の中にまで流れてゐた。

それは非常にロマンテイツクな景色だつたが、其の後はいつ通つて見ても平凡だつた。

上海の近郊では、桃の名所の龍華の景色が矢張り忘れ難いものになつてゐる。龍華へは、桃の花盛りに、朱君といふ支那人に誘はれて、S君と私と、それからフランスタウンで秘密の商賣をしてゐる王銀寶に王潤寶といふ二人の可愛らしい娘と、其の母親と、都合六人で一臺の自動車に乘つて行つたのだつた。

龍華といふ村は、何んとも云へぬ柔かな氣分に滿ちた豐かな田園であつた。落葉樹の林、菜種の花、綠のそら豆、瓦ぶきの平べつたい農家の建物――さういふ物のある廣々とした田園に

は、何處へ行つても桃が植えられてゐて、紅白の花を付けてゐた。私達は自動車から下りて、畠の間を通つてゐる路をあつちへ行つたりこつちへ來たりして遊び暮らした。

川のやうに見える長い／＼貯水池があつた。其處にも、水際まで桃の木が澤山植えてあつた。白や紅の花が薄濁りの水の上に靜かに咲いてゐる。桃の植えてある兩側の畠は、茶種とそら豆とで、綠と黃との縞に染められてゐる。遠くに橋が架かつてゐて其の邊に人家がかたまつてゐる。楊柳が水に枝を垂れてゐる。落葉樹の林がある。家鴨と山羊が道ばたで仲よく遊んでゐる。

それはまつたく桃源といふ言葉を思はせるやうな靜かな、美しい村だつた。私はたつた獨りみんなから離れて村の方へと近付いて行つた。貧しくなさゝうな農家の横へ出た。すると、其の裏口から、色の白い眼鼻立のとゝのつた十七八の美しい娘が野菜を入れた籠を手に提げながらひよつこりと出て來た。何故だか大變綺麗な服を着てゐた。

娘は、出て來ることは出て來たが、其處に見慣れぬ旅人が立つてゐて、じつと自分の方を見てゐることに氣が付くと、眞つ紅な顏をして急いで引つ返して家のなかへ隱れてしまつた。

「恁ういふ處で足を停めて此の土地の人になつて生活をして見たら――」

私は、今見た娘の姿を眼に浮かべ乍ら、さうした小說的の空想を腦裡に描いて見た。其の空想は私を非常な幸福な氣持に引き入れた。私は自分が日本人であることも、さうして日本の國には妻子や母や妹やの家族が待つてゐることも、仕事のことも何も彼も忘れてゐた。そして何處から來たかも分らない旅人である私自身が、此の村の人になり、今の娘の夫となつて、この村で一生を暮らしてしまふことを考へて見た。

支那の食物

支那の人が二三人集まつて茶を飲んでゐる處を見ると、テーブルの上には必ず例の西瓜の種が置いてある。それを一粒宛抓んで、前齒でパチリ、パチリとやり乍ら、うすい皮だけ食べて皮は床の上へばら／＼と散らしてゐる。茶を飲むには普通は湯呑を使つてゐるが、料理屋だの茶館へ行くと日本の飯茶碗と同じ形の茶碗で多く飲ませる。それは綠茶を一と抓み茶碗へ入れ、それに熱湯を一杯注いで、蓋をきせて持つて來るのである。飲む時には蓋を少しそらせて、茶碗の向う側へ手を當てゝ手前へ傾けながら、葉が流れ出ぬやうにして飲むのである。さうして、時々一口づゝ啜つては、其の他はのべつ幕無しに西瓜の種を嚙み碎き乍ら、悠々閑々として談話に耽つてゐる。支那

の悠長な一面を言ふならば、支那人が集まつて茶を飲んでゐる時くらゐ悠長な感じを現はしてゐるものはないのである。支那人は非常に茶好きな國民である。恐らく世界中何處へ行つたつて支那人のやうにのべつに茶を飲んでゐる國民は無いであらう。汽車に乘ると、茶の係のボーイがゐて直ぐ樣大きな急須と茶碗を持つて來て、大藥罐から湯を注いで置いて行く。日本のやうに汽車の窓から首を出して呶鳴る必要はない。處で、茶碗と急須をテーブルの上に置いて緩りと茶を飲むのだ。支那の汽車のいゝ事は各等ともにテーブルのある事だ。テーブルは細長い形で　乘客はそれを隔てゝ對き合つて腰を掛けるやうになつてゐる。大變便利だ。茶を飲むにも、物を食べるにも、讀書をするにも、伴れがあればトランプでもして遊ぶといふのでも、テーブルがあるお蔭でどれ程便利だか分らない。日本の汽車みたいに後ろへ凭り掛るばかりでは第一體が疲れて遣り切れない。テーブルの上へ腕を投げ出したり、頬杖を突いたり、突つ伏して睡つたり、實に體が樂だ。日本でも何故早くあの式に改良しないのだらう。日本の汽車の二等や一等へ乘つたが混んでて横になれないと來た日には、初めて行つた家の應接間へ通されたやうな恰好で朝から晩迄畏まつてゐなければならない。幾ら我慢のいゝ人間でもあれでは堪らない。行儀見習のために汽車へ乘るわけぢやあるまいし、早く何んとかして貰ひ度いものだ。緒茶の話だつたが、一時間隔き位にボーイが湯をさし替へに來る。それで終日乘つても下車する時茶代は十錢拂へばいゝ。

都會でも田舍でも何處へ行つても茶館がある。茶館は大規模なもので、いづれも大きな家で、階下でも階上でもテーブルが、何十何百と置いてある。朝から其處へ客がはいつてゐる。茶代は何處でも一人前十錢である。上海あたりの大きな茶館になると數千の人を容れる程の廣さがあるが、さういふ處は大概夜間は賣春婦の出稼場と化してしまふ。落付いて茶など飲んではゐられない。

上海で最も上品な茶館として有名な家に、廣東路の角店で同芳居といふ茶館がある。此の家は、階下では食料品、主に果物の砂糖漬などを賣つてゐるが、突き當りの幅の廣い階段を昇つて行くと二階にはテーブルが澤山あつて客が茶を飲んでゐる。日本で云ふと本郷の青木堂と云つた家だ。但し青木堂よりも家や道具は遙かに立派で茶も上等のを飲ませる。こゝの砂糖漬は上海でも他に及ぶ物が無い。殊に蓮の實と棗の砂糖漬は非常に上等なので私は折り〳〵其處迄買ひに行つた。

二階の部屋の仕切りの壁がまん圓く大きく切り取つてあつて、其處が出入り口になつてゐる。こちらの部屋で茶を飲み乍

ら見てゐると、向ふの部屋で一つのテーブルを圍んで頻りに閑談をやつてゐる四五人の組が、てうど圓窓のやうな出入口の框の中へうまくおさまつてゐる。其の向ふに桃の花を挿した花瓶が見えてゐる。いかにも支那趣味だ。

其處にゐると書家が詩を書いた半折を十枚位持つて來て買はないかと云ふ。試しに「幾許？」ときいて見ると、五枚で一弗二十錢だと答へた。其の書家は五十恰好のうすい髯を生やしてゐる痩せた男で、小粒な眼で愛嬌よくにこ〳〵笑つてゐた。

支那人が西瓜の種を食べるのは一つは長い間の習慣でもあるが、西瓜の種といふ物は脂肪の毒を消すもので、支那人のやうに脂肪分の食物を多分に攝取する人間は生理的にも是非西瓜の種を食べる必要があるのださうである。宜なる哉實によく食べる。何處へ行つても茶を出す以上は是れは附き物だ。藝者屋でも鷄(チー)（賣娼婦）の家でも、客が行くと直ぐ様茶と西瓜の種とを出す。西瓜の種を皿に盛つて持つて來たやつから、手で一摑み宛摑んでテーブルの上へザラリとあけて呉れる。併し、西瓜の種は慣れないとなか〳〵砕き方が六ケ敷い。西瓜の種を上手に噛み砕き得るやうになつたら先づ〳〵支那も一人前だと言ふ。

西瓜の種に比べると、南瓜の種は皮が薄く實も柔かで大變食べいゝ。味も西瓜以上にいゝやうに思はれる。私は最初はそれを知らなかつたが、西湖を舟で周遊した時、島の茶店で南瓜の種を初めて買つて、舟の中で茶受けにやつて見たところが大變いゝので味を覺え、上海へ歸ると早速同芳居へ行つて上等の品を買ひ込んで來て、それからは暇な隙がな南瓜の種をパチリ〳〵とやつてゐた。そして支那茶を飲んでゐると何んとなし支那氣分になつた。

支那は、料理は複雜で進歩してゐるけれど、菓子は殆んどなつてない國である。果物の砂糖漬は上等だが、其のほかには饅頭やカステラを油で揚げたのとか、おこしのやうな物とか、そんな物ぐらゐで到底日本菓子や西洋菓子のやうな上質で美味の菓子はない。だから支那人は餘り菓子を食はない。日本程菓子屋の多い國もあるまいが、支那ではそれが殊に少ない。それでは支那人に日本の餡入りの菓子を食べさせて見たらどうかといふと、矢張りうまいと云ふさうだが、精々一つ位しか食べない。恁んな物を澤山食べたら腹が冷えるといふさうである。餡けを食べて腹が冷えるといふのはどういふわけだか私には理屈は分らない。

上海には支那料理は各種類がある。北京料理、廣東料理、四川料理、湖南料理、南京料理、と云つた具合に各地方の料理屋が

あつて、各々看板にそれを書き入れて自家の特色で客を呼んでゐる。居ながらにして全國の料理を味はふことの出來る土地は支那でも上海だけに限られてゐるさうである。同じ支那料理と云つても廣東料理と北京料理と比べて見たらコロリと趣きが異ふ。各々南北の特色をもつてゐる。北京と廣東では、氣候や風土の大差は無論のこと人種言語風俗悉く違つてゐる。廣東人は上海へ來てさへ言語が通じない。北京へ行けば啞も同樣だ。青森縣人と鹿兒縣人と會はせたよりも、交通が不便で一切の交涉が乏しいだけに一層懸隔が甚だしい。由來支那の南北統一などといふことは、政治上の權力を一箇所に集中するといふ事だけに於ては多少意味があるが、國民の生活狀態を標準にして考へると根本的に不自然なはなしであるから、實現され難いのは當然である。そんな風だから、料理も自然違つて來るのである。四川と云つても湖南と云つても詰まり同じ道理である。支那の如き大國では、地方々々によつてローカルカラーが極めて强く現はれてゐると思はなければいけないのである。だから、支那料理の全體に通じようと思ふならば、各地方の料理を別々に味はつて見ないことには眞個に研究したとは云へないのである。

私は上海にゐる間に相當に各地方の料理を味はつて見る機會はあつた。が、一通宛位食べて見たゞけではなか〳〵比較研究をして見る處までは達しない。一品の料理に就いて云つても、支那の料理は味付けが非常に複雜であるから、それがどういふ味であるかといふ事すら食べてゐる當人の舌に容易に鑑別が出來ない物が幾らもある。又慣れない者には到底食べられないやうな物も澤山ある。さういふ物がどちらかといふと支那料理の特色なので、短期の旅行者などでは單に自身の味覺と趣味性とを標準にして旨かつた不旨かつたといふだけに止どまり、其の料理の本質を極めた批評などはしがたい。が、大體として云ふと支那の料理は誰れでもが云ふが如く一般に旨いと私は思つた。一切れ挾んで舌の上にのつけた時、複雜な濃厚な味が溶けて浸み込んで來て、感覺的陶醉狀態に陷らしめる點に於て、支那料理ほど魔術的の效能を多分に含有してゐる食物は他に無いであらう。支那料理は徹頭徹尾舌一方で味はふべき料理である。西洋料理や日本料理の如く眼や鼻の感覺は要しない。だから、缺點として云ふと趣味的でないといふ事になる。が是れは外國人が自分の氣分を標準にして云ふことなので、食物といふ物はたゞ舌に訴へて飽く迄もうまいことを以て最上としてゐる支那料理の本領には影響しない言葉である。支那料理は謂はゞ實質主義である。それが支那の國民性でもある。

料理其の物が非趣味的であるやうに、料理屋の設備でも調度

でも非常に殺風景だ。上海、南京、杭州などといふ大都會の而も一流の料理店と云はれてゐるのが紅がらやペンキ塗りの羽目や柱で、煙草會社のポスターの石版刷りの美人繪が裝飾然として掛つてゐるといつた有様だ。食器なども非常に粗惡な品を使つてゐる。其の殺風景な部屋で大テーブルを圍んで大勢一度に一つの鉢の物や皿の物をつゝき合つたり匙で掬つたりして食べるのだが、本式の料理となると一とテーブルといふ式で、普通八人から十人位の人が集まつて食事をする場合の献立てである。一つの料理が運ばれると一同が同時に箸を附けるのが禮儀になつてゐる。一つの器の物をつゝき合つて食べるといふ事は料理の性質から云つてもあれをめいめいの小さな器に分けて出したのでは味が消えてしまふからに違ひないが、一説に依ると支那といふ國は古來秘密に富んだ國で個人々々の交際にも容易に互ひの心を許さない。油斷すると毒殺される恐れがある。其處で食事を共にする場合に一つの器の物をつゝき合つて食べるといふことが惡意と危險の無い事を證明してゐるわけで、それが客を呼ぶ人呼ばれる人同士の禮儀であり何時しか習慣になつたのだとも云ふ。眞僞は保し難い說だが、支那へ行つて考へて見ると、此の國に於てこそさういふ事も首肯けるやうな氣持になる。とにかく今はそれが習慣になつてゐるから、一つの鉢の汁をめいめいが匙で掬つては啜るといふことを更に意に介してゐない。心の合つた友人同士で食事を共にする場合などには食卓の親みが一層强くなつて愉快である。が、若し其の中に病菌を持つてゐる者があつたとしたならば可成り危險が伴ふわけだ。けれども支那人は一向平氣でやつてゐる。むしろ、自分の食べかけの物を人に與へるといふ事は最上の好感と親睦とを意味する事柄としてゐるやうである。私の出遇つた一例を擧げると、上海の虹口（ホンキュー）といふ日本人が多く住んでゐる方面の密勒路（ミヤロー）といふ街に「合珍」といふ下等な飯屋がある。夜になると苦力などが一杯に這入り込んで飲食をする家だから、其の不潔さ加減は言語に絶してゐる。到底いゝ着物なぞを着ては行けない家である。處が、不思議な事には其の家でこしらへる燒賣といふ物が非常に旨い。燒賣は何處でも出來るがどんな一流の料理屋でこしらへた燒賣でも到底此家のには及ばない。それで、日本人間にも支那人間にも有名になつてゐる。私も一度食べたら忘れられなくなつてしまつて、三日に一度位は電話を掛けて取り寄せたり態々行つて食べたりした。行つて食べる方がさめてないだけ味も佳し、それに其の汚ない處で苦力だの小商人だのと一緒になつて食べて見ることにも一種の面白さがあるので時々行つた。料理を持ち運ぶ男は是れも苦力と大差はない身なり

で、手だの青筋のあたりに眞つ黒く垢を溜めてゐて、其の汚ない手の親指を器の内側へ突つ込み乍ら持つて來る。飯には小指の跡が凹んでついてゐる。茶飲み茶碗には黒々とした指紋が殘つてゐる。さういふボーイが此の家に二三人働いてゐたが、中の一人と私は馴染になつた。少し宛ティップを遣るので大變私を厚遇して與れる。其の男はもう五十近くて頭の禿げ掛けた反つ歯の男だつた。或日も行つて燒麥齋を食べたが、其の後で飯を少し食べたくなつたので例のボーイを呼んでお菜になる物を二品ばかりと白い飯を誂へた。すると彼は私に向つて「お前家の燒き飯を食べて見ないか、大變旨しいから」と支那語と日本語をちやんぽんに混ぜて言つた。併し私は燒き飯は食べたくなかつたから「燒き飯は不要白い飯を持つて來い」と言ふとボーイは今度は「オーライ〳〵」と生意氣な事を言つて立ち去つたがやがて注文の物を持つて來た。私は一寸した別席みたいた處で食べてゐたが、食事をした後で煙草をすひ乍ら向うを見遣ると、遠くの方で其の禿頭のボーイが大きな丼を抱え込んで立ち乍ら飯を食べてゐたが、向うでも私を見て白い歯を現はして＝タリと笑つて、それから彼は何んと思つたか飯丼を持つた儘私の側へやつて來て「是れが燒き飯だよ、大變旨いから少し食べて見ないか」といふやうなことを云ひ乍ら、自分の食べかけの燒き飯を自分の匙で掬つて私の口の處へ差し付けるのだつた。私は弱つてしまつた。「俺はもう腹が一杯だ」と言つてお辭をばん〳〵叩いて見せたがボーイはきかない、何んでも旨いから食べて見ろと云ふ。仕方がないから口をあいてそれを食べた。ボーイは私の顔を見て「どうだ、旨いだらう」と言つた。旨い事は事實だつた。「うん、旨いよ」するとボーイは喜んで又大盛りに匙で掬つて「さあ〳〵もつと食べろよ」

花柳界の家で泊つた朝、そこの阿母が藕と蓮の實の砂糖煮をこしらへて私に御馳走して呉れる側で自分も食べてゐた。是れは精力を補ふために食べる物ださうだ。が、其の時はさうとも知らず、一寸お汁粉のやうで旨かつたので「大變旨い」と言つて一ぜん食べてしまふと、阿母はまだ半分位茶碗に殘つてゐたのを私に一と口食べさせた後で自分が一と口食べ、又其の後で私に一と口食べさせた。だが、是れは例の王潤寶王銀寶姉妹の母親で、まだ姥櫻の色香がたつぷり殘つてゐたから其の實私も滿更惡い氣持はしなかつた。

とにかくそんな風だ。親みを表はしてゐると云へば體裁がいゝが、根本は支那人の衛生思想の缺乏から起つてゐるのだ。だがそれは、非衛生と云つたやうな言葉では其の説明は出來てゐないかも知れない。もつと根本的に云ふと、支那人は不潔とい

ふ事を更に意に介してゐないのだ。否、むしろ不潔を好む國民かとも思はれる。だからすべてが汚たらしい。

日本人が支那人の下婢(アマ)を置いて一番困る事がそれである。廁の掃除をする雜巾と座敷を拭く雜巾とを彼女等は區別しない。無論それを洗ふにも飮用水をいれるバケツで平氣で洗つてゐる。支那人の家には便所の設備は無い。階段の下の暗ぼつたい處に桶が置いてあるだけだ。其の桶の掃除をする苦力が家毎に毎朝廻つて來る。小用のはふは外の雨だれへやれば申し分ないが夜分なぞには大きな唊壺のやうな物が部屋々々に置いてあるからそれへやるとも、或ひはバケツでも桶でも何んでも目に附いた物へやつたら間違ひはない。間違つた處で大した事はない。或藝者家へ伴れて行かれた時、急に小便を催したので「何處へしたらいゝのか」と伴れの支那人にこつそり訊ねると「あれへおやんなさい」と、向うに二つ並べて置いてあるバケツのうちの一つを指して其の人が教へて吳れた。側へ行つて見ると一つのバケツには飮用水がはいつてゐる。其の側には湯を沸す臺がある。飮用水のバケツとぴつたりくつつけて置いてあるもう一つのバケツには濁つた水がはいつてゐて、茶殼だの唊だのが浮いてゐる。まだ行つたばかりの頃だつたので私は弱つた。「是れへしてもいゝんですか？」と私は後ろを向いて念を押した。

「えゝいゝんです」

其處で度胸を出してしかけた處が、汚い方のバケツが既に八分方滿ちてゐたのでパチヤ／＼と撥ね返つて飮用水の方へ飛び込んだ。

「是れは大變だ！」私は慌てゝ中止してしまつた。

「どうしたんです？」

「いけませんや、是れは。撥ね返つてこつちへ飛び込むんだから」

「何、撥ね返つたつて構ひませんよ」

構はないかも知らないけれども、考へて見ると私自身もそれを飮まなければならない水ではないか。私は其の汚いバケツを三尺許り脇の方へ持つてつて漸う用を足した。

すると其の家の女主人であるところの若い美しい藝者が、反り身になつて氣取つた手つきをして卷煙草をふかしながら私の顏を見て、何か云つて笑つたから「何を笑ふんだ」と伴れの男に訊いて見たら、

「此の女がね、日本人は馬鹿だよ、熱湯にすればちつとも不潔でないことを知らないのかつて云つてるんですよ」と伴れの男は答へた。

きたないきたなくないの問題は別としても、日本人の習慣として部屋の内で而も集へ稠座の席で小便をする事はどうも不體裁でかなはない。が、支那人は一向平氣である。女でも、一度相許した仲になるとちつとも遠慮しない。

或る時私は矢張りさういふ家へ伴れられて行つて泊つた。私の相手の女は齡頃十八九で、女學生風のいで立ちだが風姿楚々として中々の美人だつた。其の名を杭州阿媛と云つた。「杭州阿媛は小說的でいゝ名だ」と私は喜んでゐた。偖其の翌朝のことである。杭州阿媛は一と足私より先きに起きて着物を着てしまつた。私も其の後から起きて寢床に腰を掛けながら洋服を着始めた。すると其の時杭州阿媛は一度着てしまつた上衣を又脫ぎ始めるから、どうしたのかと思つてゐると、彼女は廊下へ出て蓋の附いてゐる桶を提げて戻つて來たが、今度はヅボンを脫いで眞つ白なお尻を其の桶の上に載せて、私の方を正面に向ながら平氣で大便を垂れ始めた。大便までして見せる仲だよといふ積りかも知れないが、私は自分の顏が紅くなるやうでとても見てゐられないので、ネキタイを結び掛けの儘で上着を引つ抱えて室外に飛び出した。

日本人は、食事中に來客でもあると慌てゝ取り片付けるのが習慣になつてゐる。客の方でも、茶の間へずつと通る程の親しい仲であり乍ら「是れは飛んだ處へ來た」といふやうな顏をして成る可く食卓の方を見ないやうにしてゐる。物を食ふ處を見る方も見せる方も双方無禮だと極めてゐる。處が、支那ではそれが正反對である。飯を食つてゐる處を人に見せることは失禮でもなければ又無論恥辱でもない。反對に、飯を食ふ事は大いに誇るべき事となつてゐる。だから成るべく人に見せるやうにしながら飯を食つてゐる。上海の租界邊はさうでもないが、地方の都會なぞへ行くと、商人は皆店先きへ出て店番をしながら飯を食べてゐる。しもた家だと、門先きへ出て往來の方を向いて腰を掛け乍ら食べてゐる。それが男だと茶碗と箸を持つて、往來をのそり〳〵とそゝり歩き乍ら見せびらかして食べてゐる。無論下層社會の話だが、飯を食べるといふ事は、人に見せずにはゐられない程の歡びであり名譽になつてゐる。以て古來支那の大多數の國民がいかに飢えと鬪つて來てゐるかといふことが想像される。

飯屋へはいつても、日本人だと成る可く奥の方へ席を取るが支那では反對に成る可く往來から見える處見える處と陣取つて行く。だからいつも奥の方が空いてゐる。眉目秀麗の貴公子然とした若者だの、白髮長髯のお爺さんだのが、テーブルの上の飯を山盛りにした丼程の大茶碗を顏の側へ引き寄せて、往來をジ

ロリ／＼と眺め乍ら、紅く染めた長い／＼角箸を使つて悠然として食べてゐる。其の茶碗は藍の染付の茶碗で、古く日本へ渡來した物は日本の茶人が喜んで菓子器として使つてゐる。支那にはあゝいふ陶器の菓子器は無い。

南京城外の雨花臺へ登つた時、一人の婆さんの乞食が手に持つてゐる呉須の飯茶碗が非常にいゝ時代だつたから、五錢か十錢で買ひ取つて日本へ持ち還り、雨花臺上非人傳來之茶碗と銘をうつて大いに誇る積りで一寸見せろと云つて手に取つて眺めたら、三つに割れたのを燒つぎした物だつたので折角の名趣向も中止してしまつた。乞食の婆さんが變な顏をしてゐるので、一錢遣つて負けて貰つた。（完）

新聞記者懺悔錄

—此の一篇を林田春潮兄の靈にさゝぐ—

松崎天民

いろんな遭逢があつた、いろんな轉々があつた。それでも私には、今、悔といふものが無い。何も彼もが、その時々の成行であつたと云ふ淡い諦めに、自ら僅に慰めようとするのみである。けれども何處やらに、一脈の寂しさは流れて居るのである。

一、大正五年

大正五年六月十六日より、大正九年二月二十八日まで、都新聞、足掛け五年、滿三年八ケ月半—

大正九年十一月十六日より、大正十一年四月三十日まで、二六新報、足掛け三年、滿一年五ケ月半—

大正九年五月一日より、同七月十五日まで、大阪新報、東京勤務、僅に二ケ月半—

私の備忘錄には、こんな風に書いてあつた。二十二三歲の頃

僅に三四年間、日記を書いたのみで、その後は、年代記風にして こんなことを書き付けて居た。

毎夕新聞の空氣や氣分やは、自分に調和せず。それに木村政次郎といふ社長の面を、何となく虫が好かぬなり。小野瀬不二人氏は好人にて、永代靜雄君は稀に見る名編輯記者なり。仕事は愉快なれども、何時まで勤めて居ても、前途に見込の無い社なり。それに、東に登る「朝日」から、西に入る「毎夕」と云ふことが、自分自身の沒落を意味して居るやうで、不愉快なり。……

こんな一節があるかと思ふと、次には

青山南町五丁目五十一番地で、大正五年の元旦を迎ふ。妻、子供三人、女中はる、家賃二十圓。毎夕との關係三四ケ月にて辭退後、兒玉箕南の雜誌「新聞の新聞」に關係、月五十圓づゝ受取る。同時に、淺草根岸興行部の小泉丑治氏より、興行物の廣告文案起草を依托され、月々三十圓づゝ受取る。この合計八十圓にて、家賃と米代だけは拂へる。

長男青山學院、二男、三男、青南小學校。……

などゝ記した一節もある。その兒玉箕南氏の所へは、支那通の小山田劍南氏や、朝鮮から歸つた松本武道氏なども出入して居て、既に浪人的の氣焰をあげて居た。

「日刊新聞を出さうぢやないか」

と云ふやうな話も、兒玉、小山田氏などの間に、持上つて居た時であつた。

二、田川さん

その頃は、雜誌「ニコ〳〵」の松永敏太郎氏と共に、何かと云へば飲み歩いて居た。十圓か十五圓の原稿料しか呉れなかつたけれど、私は其の「ニコ〳〵」へ、毎月のやうに執筆して居た。「都新聞へ入つては何うか」と云ふことは、その松永氏が發議者なのであつた。

松永敏太郎氏は酒食の友なり。共に仕事をする人ではなくて、一緒に遊び廻る飲友の一人なり。「君には都新聞が適いだらう」と云ひしは、この松永氏なり。「田川君に逢つて見給へ、僕からも話して置くから……」と、この飲み友達は、案外に親切者なり。何だか斯う疲れて居るやうなれど、一定の不安で無い收入が無くては、一家六人の口を糊して行くことが出來ず。それに、新聞社の空氣から離れて居ると、現實の世態から除外されて居るやうで、一種の頼り無い心細さを感ず。

余は新聞社の月給を食むに非ずんば、遂に生く能はざる者か。……

こんな事を冒頭にして、大正五年の記錄は、割合に詳しく書いてあつた。今、これを書き改めるよりも、その節々を拔いて、そのまゝ書いた方が、反つて當年の氣持を、率直に傳へることが出來るやうに思はれる。

司法省の勅任參事官室にて田川大吉郎氏に對面す。苦澁そのものゝ表情の如く、何となく暗い感のする人なれど、氏とても決して笑ふことを忘れて居る人に非ず。新聞社を退いて居ると心淋しくて堪らぬことを述べると、「あなたの其のお氣持は、私にも判ります」とて、言葉少なに「都で働いて頂けますか」と云はる。副參事官の關氏や、その他にも二三の人が出入して居る間に、田川氏は「楠本男爵閣下」と記せし一通の手紙を渡さる。その手紙を持て、都新聞社に赴けば、入社の事は滯りなく運ばれて居る樣子に見えたり。……

さうして、私が都新聞に入社したのは、大正五年六月十五日のことなのであつた。

三、都新聞社

社會部長は原成吉氏で、土佐訛のある背の高い紳士であつた。その下には、寺澤琴風、倉富砂郎、中村長作の三君が編輯係で、外交の方には平山蘆江、長谷川芊作、伊藤みはる、小杉善太郎、高橋鐵之助、信田葛葉、中島信忠などの諸君が居た何だか所も知らぬ國へ旅したやうな、今までとは懸け隔つた世界へつ入たやうな、淡い氣持がして居た。

男爵楠本正敏閣下に、新聞經營上の經綸が有るか何うか、それは疑問なり。「大に勉强してくれ給へ、ね」と云ひしのみにて、その人物は不明なり。月給六十圓、追ては夜の編輯係にと云ふ話なるが、「果して巧く行くかな」と云ふ不安が、入社した其の日より、余の頭には浮かび居しなり。普通の新聞とは違ひて、特色の强い新聞だけに、社中の空氣も他とは異りて、何となく安定して居て、分に安んじて居て、消極的に見えた。社中には大谷誠夫氏を首頭として、伊原靑々園、遲塚麗水、林田春潮の諸家あり。皆一流一家の先達にして、大谷氏は言論に、伊原氏は劇評に、遲塚氏は紀行文に、林田氏は美術批評に各一家の風格を具へて見ゆ。他に山本信博氏を初め、二三の記者らしき記者の存在を見るも、名實ともにこれを知らず。たゞ原氏は理想家風の人にて、新聞紙を以て、社會民心敎化の一道具とする種類の人物らしし。すべてに軟い感じのする都新聞には、不可思議なる存在と云ふべく、その新聞製作上の方針に、果して合致し得るや否やが、余の疑問とする所なり。……

今ならば、家賃六七十圓もしさうな、住み好い青山南町五丁目の家を出て、麹町區内幸町一丁目五番地の社宅に移つたのは、その年の十二月に入つてからであつた。入社當時は、二三の續き物を書いたり、晝の編輯の手傳いなどして居たが、何うも他の社と違つて、自我の強い素人ばかりの中に入つたやうで、仕事の氣合と云ふものが、私には少しも乘らぬのであつた。

四、夜の編輯

その社宅と云ふのは、古いガタ／＼する家であつたが、社の隣ではあるし、昔は黒岩涙香氏なども、住で居たことがあると云ふし、私はそんな事に依つて、僅に慰められて居た。家賃が入らぬと云ふことは、何よりも妻にとつての喜びであつたらしく、生活上には割合に、苦勞と云ふものが少なかつた。

けれども、夜の編輯と云ふ勤務は、氣苦勞の多い割合に、少しも其の成績を認められぬものであつた、それも東京朝日のやうに、通信機關が整備して居る上に、人員も多く、費用もあつて、集つた多くの材料を、如何にして捨るかと云ふことに、苦心するのであつたら、精根を紙面作成の一方にのみ集注して、大に技巧を揮ふ樂しみと云ふものがあつた。けれども、十時を過ぎると、給仕も居なくなるやうな、工場の文選や植字も、三四人に減るやうな、編輯一人に外交一人と云ふやうな、自動車一臺雇ふことも出來ぬやうな、そんな設備や、組織や、方法などで、他新聞に劣ぬやうな新聞は神業で無い限り、私には斷じて出來ぬのであつた。

他新聞の早刷紙、それも朝日か、國民か、日々か、時事からいろ／＼の材料を無斷で失敬して、やつと市內版を一杯にしたやうなことが、一週間に一度や二度は必らずあつた。それ火事だと判つて居ても、何うにも手の下しやうが無くて、やつとノドに入れて、「落ちなかつた」と云ふ申譯にしたことも、二度や三度では無かつた。兩國の國技館が燒けた時など、私は休みで外出して居たが、代勤の寺澤琴風君は、「しかたが無いよ」と苦笑して居た程であつた。「松崎が來たから、夜の編輯は大に良くなるだらうと、社の所謂幹部連中に期待されたとしても、それは糊と鋏の神業しか知らぬ私の力では、何うにも手足が出ぬことなのであつた。

「こんな事では、誰が夜の編輯を遣つても駄目だ」と私はツク／＼組織と設備を無視した新聞社の勤務が厭になつたのであつた。それでも、その日／＼を、不愉快に過すより他に、私は何うすることも出來ぬやうな心持がして居た。

五、記者先生

原氏はクリスチャンにて、理想家なれども、社會部長と云ふ柄の手腕家に非ず。社中にて社會部長職を求むれば、山本信博氏を第一に推すべく、その補助者には長谷川芋作君を當つべきなり。

伊原氏も、遲塚氏も、その所を得たり。劇評の靑々園は、兎にも角にも獨得の擅場を步めり。麗水の紀行は一種の名文にして一面編輯の趣味方面に、適材適所の觀あり。林田春潮は、も少し熱が有つても宜さゝうに思はるれど、常に本流を避くるやうな態度にて、傍流に安住せる觀あり。その他の記者にては、大谷誠夫氏に定評ありて、一家の論調筆路に、準國士の風格を偲ぶべし。

倉富砂邱は有爲の少壯記者なれども、仕事の上に何か感違ひでもして居るやうな所あり。編輯の手腕はゼロなれども、文品に捨難き風趣を有す。寺澤琴風は神經家風の男にて、何處かに奇才らしき點あり。前途ある未成品なれども、一人よがりの癖を脫せば、佳き編輯記者となるを得べし。伊藤みはるは利巧者にして、器用一つにて彼の艶種を書きこなす手腕は、小なる驚異の一つなり。平山蘆江は氣分の好い男にて、氣が乘りさへすれば、骨身を惜しまず働き、文章にも一家の風味を有す。都新聞の記者として、この平山蘆江ほど、都式に出來て居る感の人は、他に一人も無し。

長谷川芋作は、達筆堪能の人にて、將來、社會部長職の椅子は、必らず此の人に與へらるべし。仕事もキビ／＼と出來るし、種々の世態事情にも通じて居るし、思ひ遣りもあり、腰の強い所もあり。この人、何故に悠閑として、用ゐられざるにや、不思議の一つなり。

私の手記には、こんな一節もあつた。林田君も伊藤君も、今は故人となつてしまつたが、長谷川、平山の兩君はいよ／＼脂が乘つて來て、今は都の中心的働き人になつて居ると云ふ。私はそれが愉快に思はれたりした。

六、秋風の歌

四十だ、四十だ、
これからだとは思へども、何だか哀し、
秋の風吹く――

石川啄木の亞流であるところのこんな歌を書いたのは、四十歲になつた大正六年の秋であつた。原氏は社會部長職を解かれて、一面の趣味欄編輯に廻り、代つて一面から遲塚麗水翁が社

合部長職に就いたのは、その秋のことであつた。

私は其の頃から「夜の編輯」に疲勞すると共に、こんな樣の下の力持ちみたいな仕事をして居ては、健康を損ねるばかりだと、心配して居た。組織も設備も無くて、負擔と義務のみを强られ、何の權利も與へられぬやうな夜の編輯長に、これぞと云ふ仕事が出來ないのは、當然のことであつた。新聞製作の仕事と云ふものは、人間の力と數も大切であるが、金の力と數も肝要であることを、私は切實に感じて居た。社宅に住で、その日〳〵のお茶を濁して、ノホーンで暮して居れば、それでも構はないやうな、そんな張合の無いことが、私には不滿なのであつた。

理想主義の原氏から、無理想主義の遲塚氏へ移つても、紙面の上には大した變動を見ることは出來なかつた。所謂軟派の遲塚、伊原、硬派の大谷、山本、一面の原、林田の上に田川氏が隱然と控へて居て、すべての空氣が安らかに流れて居るのみであつた。それに營業の方には、吉川克巳氏が王者の如くに構へて居て、そこに都新聞的と云つて宜いやうな、强い個性が醸されて居た。働く者は汗を流して働くし、ブラ〳〵して居る者は、呑氣さうにブラ〳〵して居るし、實に長閑なものであつた。

他社に比しては、月給は驚くばかり安かつたし、仕事も驚くばかり呑氣であつたが、それも微温的な都式の特色なのであらう。「老後を樂しむに適い社だな」と思はれるほどに、すべてが悠久なものであつた。

私の生活も平凡極まるものであつた。

七、降り坂へ

「あなたが都の夜の編輯で、男盛りに氣を腐らして居た間にも世間には樣々の事件が起りましたね」

「例の米騷動が勃發したし、大阪北區の大火があつたし、大杉榮君が斬られたし、島村抱月氏が死だし、松井須磨子が後追心中をしたし、世相も樣々に流れましたよ」

「都のやうな微温的な、何となく鼠色をした新聞に、あなたは不適だと思つて居ましたよ。報知か、萬朝か、讀賣か、そんな社の方が、あなたの舞臺では無かつたでせうか」

「いろ〳〵に云はれますがね、要するに東京朝日を退いたことが、私の大きな取返しの付かぬ失敗でしたよ。それも今から思ふと、しかたのない成行でしたが、私の新聞記者生活は、それからが降り坂で、一度も花を咲かしたことが無いと云ふ譯です」

「大きな宜い社には、常習的に暗鬪の渦が卷いて居るし、小さ

な社は割合に靜穩でも、平々凡々ですし、思へば新聞記者生活も、不安と不愉快とに終始するのですね」

「新聞社ばかりでは無い。何んな方面でも共同生活には、大小輕重の差別こそあれ、不安は附いて廻つて居るのです。たゞ愉快に働けるか、働くか、働き得ぬか、働かぬかの心持の問題では無いでせうか！」

「さうですね、あなたの場合なども、境遇や環境の如何にも關係して居ますが、一つには性格が主な動因になつて居ると思はれますね。あなたの氣分、氣質など……」

「さうです。人の一生涯を支配する大きな力は、その人の性格ですね。運不運だとか、宿命だとか云つて、片附けてしまひたがりますけれど、榮枯浮沈の因て來る所、喜劇と悲劇との出發點は、自分で何うにもする事の出來ない性格に原因して居るのですね」

「あなたも隨分、今まで働いて來たから、こゝらで一休息するが宜いですよ」

「何時までも何時までも、休息ですからね、ははは」

八、神經衰弱

筆禍を蒙つて、田川氏が入獄したのは、私が在社中のことであつた。「相談の相談」には、白井俊一氏が居たし、小說の方には中里介山氏が居て、「大菩薩峠」を書いて居た。

大正七、八年と送る間に、私は休暇を利用しては、方々の溫泉場へ旅して居た。箱根、修善寺、伊東、吉原、長岡から、湯河原、伊豆山、熱海と步いたり、伊香保、鹽原、那須、飯坂、東山、鳴子、五色、赤湯を見物したり、或は小川、和倉、山代、山中、粟津、片山津から、澁、安代、淺間、諏訪といふ風に、步き廻つたりした「溫泉巡禮記」と言ふ小さい本を書いたり、「歡樂の底より」とか、「運命の影に」とか、「醉ざめの悲哀」とか言ふ本を著したのも、その頃のことであつた。

K君、都の夜の編輯で、君もいよ／＼落着いたね、と、羨ましさうに君は云ふが、僕は少しも樂んでは居ない。僕には平凡と單調に飽きる性癖があつて、近頃はつく／＼現狀に倦み果て居る。何か斯う强い激しい刺戟でも受けて、生活を根柢から引くり返すやうな、現狀打破を空想して居る。男四十、四十一の働き盛りを、片輪同樣の設備しか無い夜の編輯で、精根を疲勞してしまふのは、僕自身が可愛想である。それに長い間、夜を晝にして働いて居るので、僕は燈火の巷が戀しくて堪らない、新聞記者として働くことには、何の苦痛も悔も無いが、夜の編輯など云ふ仕事は、こんな社では受持つも

のでは無いと、しみ〳〵考へて居る。平山君などは、君は餘りに一所懸命になり過ぎて、心にゆとりが無いと云つて笑ふが、何の何の、氣も心も打込でしまふやうな仕事は、遣つても居ないし、遣らうとも思はない。愚なる僕の現狀を、君はこれでも羨ましいと思ふか、幸福だと思つて居るか――

こんな手紙を、親しい友達に送つたのも、大正六七年のことであつた。私は何時の間にか、輕い神經衰弱症にまで罹つて居た。

九、三十萬圓

尾崎行雄氏と一緒に、田川大吉郎氏が洋行して居た間に、都新聞社には大きな變動が迫つて居た。硬派の記者で、常にブラ〳〵して居た松岡俊三と云ふ男が、仲に立つて奔走した結果、都新聞社は男爵楠本正敏閣下の有から足利か桐生かの織物屋で福田英助と云ふ人の有に移つたのであつた。

その賣買價格は、三十萬圓とか三十五萬圓とか云ふ額であつたが、社員達にとつては、寢耳に水の大變革なのであつた。親讓りの新聞を、そのまゝ繼承したのみで、經營上に一家見をも有しなかつたらしい楠本男は、好い加減に見切を付けたのであらう。この噂が傳へられてから、社內の空氣は俄に流動して、喜ぶ者もあれば、悲しむ者もあると云つた風に見えた。都の家風は、これで愈々破壞されてしまふと思つた者もあつたし、素人の町人の手に歸してからの經營發展上に、多大の期待を抱いて居る人もあつたらしかつた。

「僕が若し大正日々の社會部長に就くとなれば、是非君にも入社して貰ひたいが、君の都合は何うだらう」

と、その前から大庭柯公氏に勸められて居た私は、まんざら心が動かぬでも無かつた。その話が何う間違へられたのか、藤村義郎とか云ふ人が、楠本男にその事を傳へたとかで、山本信博氏に訊かれたこともあつた。何うせ長く居るべき社でも無いし、居らるべき社でも無いと、タカを括つて居たところへ、社に對する氣持は、次第に淡くなつて行くのみであつた。

舊社長の別れの言葉や、新社長の乘込み挨拶や、社員總代の答詞や、大正八年十一月末日の編輯局は、一寸緊張した場面を見せた。社員は一人も異動無しと云ふ觸れ込みであつたが、それを眞に受けるやうな呑氣者も少らずあつたやうに見受けられた。

「いよ〳〵此の社とお別れだな……」

私はさう思ひながら、それでも仕事だけは、氣が乘らぬなりに遣つて居た。

一〇、九死一生

「四十二の厄年がね、無事に濟んで宜かつたと思つて居ると、大正八年の師走二十七日から、例の流感に見舞はれてね。大正九年の元旦は、發熱三十九度、四十度といふ、死ぬるか生きるかの大病人さ」

「その年でしたね、都を退いたのは！」

「二月十九日のことさ、山本信博氏と遲塚麗水氏とが、一寸來てくれと云ふから、ははア、いよ〳〵來たなと思ひながら、社の應接室へ出かけたものさ。すると、二人とも興奮した表情をして居てね、それでも山本氏は笑ひながら、辭表を出してくれと云ふのさ。遲塚氏は、實にお氣の毒ですが、僕等の力では何うすることも出來ぬから……と、能くある寸法通りの內交涉さ……」

「で、あなたは何う答へました」

「私も實は近々の間に自分から、御免を蒙らうと思つて居ました。では直ぐ辭表を書きませう……と云つて、話は僅に三分間さ。他にも二三人あつたやうだが、僕は僕だけの心持で、不平も不滿もありやう筈は無いさ」

「でも、社の方では、いろんな噂が立ちましたよ。楠本さんが福田に讓り渡す時、松崎は大正日々へ行くかも知れんから、そんな心持の男は、免職しても宜からうと、申傳へたと云ふことですよ」

「その他にも、まだ奇怪な噂があつたらう」

「え、ありました。あなたが遲塚麗水翁を追出して、社會部長の椅子を奪ふ陰謀を遣つてるなどと、眞しやかに言觸らした者もありましたよ。それから松岡といふ人がね　何となくあなたを好かないしいろ〳〵と誤解して居てね、江戸の仇を長崎で討つたのだとも、言つてゐる人がありましたよ」

「さうだらう。何も彼も時日が經つと、自然に判つてしまうことだが……、僕のやうな腹の無いお人好しも、惡人の部に見られることがあるから、世の中は面白いものさ。それに遲塚翁の椅子を云々なんかは、心外千萬の事だけれど、それもこれも、私の不德の致す所で御座いますと諦めるんだね、ははは」

一一、浪人生活

さうして、その年の二月限りで、都を退いてからも、適當な貸家が無いために、私は三月一杯を社宅で暮して居た。大阪、奈良、伊勢、名古屋と旅をして、「死處を探ねて」の一文を、中央

公論に公にしたのは、旅から歸つてからのことであつた。

國民新聞に「借家難」の記事を五六回書いた爲めに、中澁谷の代々木練兵場寄りに、大きな貸家があることを知らせてくれる人があつて、そこへ轉居したのは、四月五六日のことであつた。新聞社を罷めて、浪人した味を覺えてからは、一種の浪人癖が出來たものか、私はそれを「休養」と稱して、樂しむやうな氣持になつたりした。新聞社で働いて居る自分自身の姿と云ふものは、新聞社中の空氣から、全然隔離してしまはなければ、正面から眺めることも、内省することも出來なかつた。

それにしても、「都」に居たのは、僅の月日ではあつたが、私は同僚達に對して、それ〴〵に友情を感じて居た。大谷誠夫氏は、私を日比谷の松本樓に引張つて行つて、「田川君は、君を社會部長にする積で居るらしいが、大に勉強し給へ……」などゝ云つてくれたりした。平山蘆江君にしても、長谷川伸君にしても、中村長作君にしても、伊藤みはる君にしても、私のためには、思ひ遣りある同僚でもあり、益友でもあつた。殊に林田春潮君は、折々夜遲くまで編輯局に居て、仕事の暇々には能く飲で、いろ〳〵と私を慰めてくれて居た。自分は仕事の表面に立つことを、避けて居るやうな人であつたが、何かにつけても憤慨もすれば、不平を言ふこともあつて、準幹部格の人としては是非の批判も正しい方であつた。

「一所懸命になれば、君、腹が立つからね、宜い加減に要領好く遣るんだよ。君は案外、横着者でないので、僕は驚いて居るんだよ。それに、神經質だからね！」

などゝ云つては、餘り大きな聲も出さずに、能くいろ〳〵の事を語り合つたものであつた。

一二、北海道へ

淺草の根岸吉之助氏や、立花寬一氏や、武田氏などゝ共に、北海道へ旅したのは、その年の夏七月のことであつた。函館や湯の川温泉で遊んだ後、大沼公園の停車場で、一行と別れてからは、孤影飄然と云つた形で、私は長い一人旅をつゞけた。

小樽から札幌、定山溪温泉、旭川、狩勝國境、釧路、空知川の岸邊、登別温泉、室蘭といふ風に、北海道の旅は心淋しかつたけれど、朝夕は秋のやうに涼しかつた。私は其の旅で、國木田獨歩を懷ひ、石川啄木を想ひ、岩野泡鳴を思ひ、長田幹彥や有島武郎の足跡を、想像したりした。東京へ歸つても、私を待受けて居るものは、生活の桎梏ばかりであると思ふと、このまゝ北海道の天地を放浪して、名も無い野原で死でしまいたいやうな、そんな哀しい淋しい心持さへした。

「北海道へ行つて、鹽鮭を買うて戻ると、儲かるけえなア、市や。お父さんはこれから北海道へ行て來るけえな、待つて居れえよ」

から云つて、美作の山の中から、遙々と北海道へ旅して行つた少年の頃の父の面影が、色濃く浮び出たりした。一攫千金の夢ばかりを描いて、「今にわしが金を儲けたら、お前に金縁の眼鏡を買つて遣るけえな」と、口癖のやうに云つて居た父の姿を、苫小牧の旅宿の二階に偲んだ時には、盃を含みながら、胸が迫つて落淚したりした。昔から今日まで、如何に多くの人達が、或は惱み苦しみながら、或は失望の心を抱いて、或は希望に燃えながら、北海道の天地をさまよひ歩いたことであらう。私の父も亦た、その數多い中の果敢い一人であつたかと思ふと、私は私自身の姿が、當年の父ではないかと云ふやうな氣持がして、淚ぐましく沈み入つたりした。

肥後の海岸町に殘して居る亡夫の子供を尋ねて、妻が遙々と九州へ旅して行つたのは、私が北海道から歸つた十日後のことであつた。浪人して居ると、身體は自由であつたけれど、心の生活には、惱み煩ふことのみが多かつた。

一三、野澤枕城

何人の葬儀であつたか、確と思ひ起されぬけれど青山齋場の儀式に參列した折、久し振に逢つたのは、舊知の堀内良平氏であつた。山梨縣會議員から、報知新聞の經濟記者となり、更に市街自動車會社の專務になつて居た堀内氏は、深切な紳士の一人であつた。

「や、暫く……。近頃は何うです……」

「え、此の頃は浪人して居ますよ……」

かうした話をして居るところへ、笑ひながら近寄つて來たのは、これも舊知の野澤枕城氏であつた。足尾銅山の暴動事件の折、二六新報記者として出張した野澤氏は、今その社の編輯局長として重きを成して居るのであつた。私は其のまゝ立歸つたけれど、それから堀内氏と野澤氏との間に、何んなことが話し交されたのか、四五日經つと堀内氏から私に一通の手紙が來たのであつた。

「あれから野澤君と共に、自動車で歸つた途中で、あなたが目下遊んで居るといふ話が出て、遊んで居るのなら、二六に入つては何うかと云ふ、野澤君の話でした。私にあなたの內意を訊いてくれとのことですから、この手紙を差上げますが、あなたに若し其の心持があるなら、一度、野澤君に逢つては何うですか……」

と、候文ではあつたが、意味は此の通りの同情ある事柄であつた。物事に感じ易い私は舊知を忘れぬ野澤氏の温情に對して、何よりも先づホロリとなつたのであつた。二六と云ふ社は、物質的に云つても、社格から云つても、信用とか勢力とか云ふ點から見ても、一流の大新聞ではないが、然し其の社に私を入れて、多少でも用ゐて遣らうと云ふ野澤氏の同情は、私を感奮させずには措かぬのであつた。

いろ〳〵有難う御座います。死馬の骨に等しい今の私を、少しでも思つて下さる御同情に對して、私はたゞ感謝するのみです。……

それから野澤氏に逢つたり、社長の秋田清氏に引合されたりして私は神田の二六新報社へ、入社することになつたのであつた。

一四、二六新報

清水港の常盤ホテルに滯在して居た村松梢風君を訪ねて、久能山や清見寺へ行つたり、亦、大阪へ松茸食べに行つたりして、秋の十月を遊び暮した後、私は十一月十六日から、二六新報へ出社したのであつた。

同郷出身の先輩秋山定輔翁の創立で、曾ては尾崎紅葉、川上眉山、江見水蔭、長田秋濤、與謝野寛、鈴木天眠、齋藤緑雨、宮崎滔天、佃信夫、小野瀬不二人の諸家を有して居て、日本の新聞史上に逸することの出來ぬほどに、古い光輝ある二六新報なのであつた。福田和五郎氏や、中村弥牛氏や、中村樂天氏や、更に兒玉箕南の時代なども閲して、遂に秋田清氏の時代と云ふ當然に到り着くべき時代に、安定して居る二六新報社なのであつた。

社には野澤氏の他に、山田旭南氏や、矢野道横氏や、本吉筑山氏や、江澤春霞氏や、多くの知友が机を列べて居た。朝日などに比べると、その人數も少く、編輯局も淋しかつたけれど、小さく固まつて、組織や設備や金の力でなくて、人の勤勞の力に依て、その日〳〵の新聞を製作して居るのが、私には快かつた。午前九時から午後二時三時頃まで、四頁の夕刊を製作するに、さう澤山の人員は要せぬやうに見受けられた。何となく尾羽打ち枯らした浪人のやうで、昔の榮華を偲ぶには、餘りに悲慘なと云つたやうな、貧乏臭い感じのする社ではあつたが、然しそこに、一脈の悲壯味が漂ふて居るのが、私には直ぐ印象づけられたのであつた。

編輯の手傳ひをしたり、折々はくだらぬ續き物を書いたり、仕事には何だか氣乘がしなかつたけれど、社は空氣の解放自由

で、すべてに親しさが覆つて居た。方々の社を歩いたけれど、こんなに心持の好い社は、一つも無かつたと、私は感動したりした。

「新聞社の生活は、何と云つても愉快だよ」。

と、私は友人に向つて、喜んだものであつた。

一五、浮氣の蟲

「二六と云ふ社は、豪傑ぞろひだと云ひますね。梁山泊だなどゝも云つたものですが、一種の士魂が、昔から殘つてゐるのですね」

「私も新聞社を轉々したけれど、最も愉快な月日が過せたのは二六新報の他には無かつたね。月給は安いけれど、勤務時間は短い方だし、すべてが投げ遣りな程に、空氣や氣分は自由だし、厭な暗鬪や勢力爭ひは無いし、ほんとに氣持の好い社だつたよ」

「そんな社を何うして退いたのです」

「澁川玄耳翁がね、大阪新報を引受けたもんだから、その方の手傳いに行つた譯さ。秋田氏や野澤氏やの好意に背くやうで、私はそれが一番心苦しかつたけれど、それもこれも、今から思へば一場の夢とあきらめてしまうのだね……」

「あなたの浮氣の虫が、また暴れ初めたと思つて、ヒヤ〱して居ましたよ」

「人間は一度グレ出すとこれでもか〱と云ふ風に、止め度もなくグレてしまうのだね。大阪新報の方が巧く行かなかつたにつけても、何だか二六の人達に笑はれて居るやうで、極りが悪くてしかたが無いよ」

「何うして、野澤さんにしても、本吉君にしても、守田君にしても、その他の人々にしても、あなたの事は心配して居ると云ふ話ですよ。私は初から、あなたが二六を出ることには、贊成しませんでしたよ」

「何一つこれぞと云ふ仕事もせずに、月給ばかり貰つて居て、ほんとに申譯無いと思つて居る。殊に野澤氏など、松崎もむゝ浮かれ歩いては駄目だと、思はれて居るやうで、極りが惡くてしやうが無いのさ」

「あなたも、これで浪人を續けるより他、もう手も足も出なくなりましたね。あなたの志業は、三人の子供達の中の誰かに繼承させて、あなたは新聞界を斷念するのですね」

「こちらから斷念しなくても、月日に捨られてしまうのだよ。これでも今の若い人達に、斷じて敗はせぬけれど、もう私達は引込でも宜い時分だと、つく〲感じて居る譯さ」

一六、大阪通ひ

大正十年秋の大演習に、陪観記者として行つたのが、たゞ一つの仕事なのであつた。大正十一年春の議會に、雜觀記者として出入したのが、たゞ一つの仕事なのであつた。二六新報記者として、その他に私はこれぞと云ふ、何の勤務もして居ぬのであつた。

二六を罷めることは、心苦しかつたけれど、青島に雌伏すること十年の澁川玄耳氏が、再び新聞界に打つて出る門出に、私はジツとして居られぬやうな、氣持がしたのであつた。朝日時代からの縁故に依つて、相許すこと深い澁川氏と一緒に、思ふやうな新聞紙を製作して見たいと云ふことが、何よりも私の心に動いたのであつた。長い新聞記者生活の間、たゞの一日も「自分の思ふやうな新聞」を作つたことの無い私は、澁川氏の新城に據つて、自分の力量を極度に試して見たいと、さうした希望も抱いて居たのであつた。

二六では月給や手當を合して百二十圓を得て居たが、大阪新報では本給百五十圓に、手當五十圓と云ふ話であつた。それに一ケ月の内一週間を、大阪の本社に勤めるのみで、他は東京に居て、一種の社會通信を送れば宜いと云ふことも、私の心を動かしたのであつた。殊に大阪新報社は、私の記者生活に於ける地盤の家なので、さうした點にも、私は或る懐しさを感じて、澁川氏の許に赴くことになつたのであつた。

けれども其の事は、餘りに呆氣なく、餘りに果敢く、餘りに短命にして、泡沫のやうに過ぎたのであつた。大阪へ行くこと二度、新大阪の印象記や、惰話物を書いて居た間に、社の方には大きな動搖が起つたのであつた。或る別途の目論見か何かで大阪新報の新經營者になつて居た宮崎敬介と云ふ人は、何時の間にか社を投げ出して、逃げ出さうと策謀して居るのであつた。

私は、狐に憑かれたやうな、心持がした。

一七、廻り双六

山田敬徳、横井時雄、原敬、高橋某、加藤恒忠と云ふ風に、政友會の人々に依つて、北濱銀行の金を食つたり、高利貸の金を食つて居た新報は横田千之助、村野常右衛門、松本源右衛門など云ふ同じ流れの人達に依て、その殘壘を支へて居るのであつた。

宮崎老人が投げ出すと云へば、これを收拾する役目は、何うと云つても横田一派の人々の他には無かつた。紀志嘉實と云ふ人

やその他にもいろんな人物が關係して、様々に苦勞したやうであつたが、何人も新聞經營に就いては、門外漢と云ふに過ぎなかつた。同じ素人の門外漢にしても、都新聞の新經營者となつた福田と云ふ男には、衰へた事業を盛り立てる上に、一種の怪腕があると傳へられて居た。そこで新大阪新報の經營に就いて横田等が此の福田に着目したのは、當然の成行なのであつた。

十年目で漸く新聞生活に復つた磯川氏は、その理想や手腕の十分の一も揮ひ得ぬ間に、一味徒黨の者と共に、社を退かねばならぬやうに變つたのであつた。東京から行つた渡邊利喜松君や上野一也君なども、苦い經驗を嘗めたことを、せめてもの思ひ出にして、潔く社を退いたのであつた。その時、「福田の親分の松岡俊三と云ふ男は、松崎天民の事を惡し様に罵り、飛でも無い量見違ひのことを云つた」さうであるが、私の親友であるところの渡邊利喜松君は、餘りの愚かさに、たゞ笑ふ他は無かつたと云ふ話であつた。

「また、都新聞が祟つたんだね」

と、私は厭な可笑しい氣持がした。何も彼も大きな成行の前には、たゞ苦笑するのみであるが、それにしても、大阪新報を「振り出し」にした私の記者生活の双六が、同じ大阪新報を「上り」にしたやうな結果になつたことは、不思議な廻り合せと云つて宜いことであつた。

斯うして私は、大正十一年七月十五日を限りとして、新聞界を去つたのであつた。

一八、淪落の男

永代靜雄君の遣つて居る雜誌「新聞及新聞記者」の全國記者名簿を見ると、大阪新報の項に總務局企畫部長として、私の名が載せられて居た。その果敢い活字を最後の思ひ出として、新聞界を去つてしまつたかと思ふと、今更のやうに名殘が惜まれるのであつた。

「淪落の女を書いた私は自分で自分の性格悲劇を書いて、やがて淪落の男になつて行くのでは無いか知らん……」

と、さうした氣持のする時もあつた。同じ社に十年、二十年、三十年の長きを辛抱して、生活の甘さにのみ微笑むで居る人達が、最初の間は馬鹿者に見えたり、横着者に見えたり、利巧者に見えたりして居たが、果はそれが貴いことのやうな、無事安全であるやうな、羨ましいやうな氣持で、眺められるやうに變つていつたりした。何も彼も、物の道理は心得て居ながら、若氣やら血氣やら、自惚れやら増長やら、慢心やら一人よがりやら、

不滿やら不平やらで、遂には自分で自分の一生を、次々に破壞して行く男の實例を、私は私自身の上に體驗して、一種の戰慄を覺えるやうなこともあつた。

けれども其の一面には、又慰められるやうな考へも、自然に起きることがあつた。大抵の社は自分から退いてしまつたが、今から思ふと、それほどの事情は一つも無かつたのに、何時も自分から退社して居たが。あのまゝで辛棒して居たところで、何うせ退社せねばならぬやうに、仕向けられて居たかも知れぬと思ふと、あの時、罷めて宜かつたと云ふやうな氣持が、私を慰めてくれるのであつた。

「何も彼も過ぎ去つてしまつた事なんだ。悔も無いし恨も無い。その時々の流れに面して、要するに私は弱かつたのだ……」

と斯うも片付けてしまひたいやうな氣持が、一方では又頭を擡げるのであつた。

「何んな事があつても、淪落の男にだけは、なりたくないものだ……」

と云ふ感じで、胸が一杯になるのであつた。

一九、新聞大道

「で、最初から幾年になるのです」

「足掛け二十三年さ」

「大阪新報から大阪朝日、それから國民、東京朝日を經て、毎夕、都、二六と云ふ順になり、最後が又大阪新報なんですね」

「さうさ、二十三歳の夏から、四十五歳の夏まで、轉々二十三年さ。その間に、私は私と云ふものを、育てもし育てられもして來たが……、要するに長い〳〵一筋道を、汗ダク〳〵で駄馬のやうに、喘いで來た譯なのだ」

「隨分道草も食つたやうですね」

「新聞界と云ふ大道からは、少しも傍徑に外れなかつたけれど、その大きな一筋道の中には、美しい酒色の誘惑もあつたし、忌はしい金錢の穽もあつたよ。それに嫉視、反目、競爭など云ふ厭ふべき泥溝や怖しい丘や谷やがあつて、並大抵の苦勞では、俗輩の上に拔けて出ることは出來なかつた……」

「でも、あなたは社會記者の水平線以上に出て、松崎天民の存在と云ふことを、根強く私達の頭に印象づけましたよ。一つには時代が祝福したのでせうが、何と云つてもあなたには、強い個性と云ふものがありますから……」

「いや、今の私と云ふものは、自分で自分を鞭打つて、それを何よりの滿足とし、慰めとせねばならないのだ。文章の一種

の調子で讀者の心をつかむで居るとか、感傷的の實感が流れて居るので、それで讀者をチヤームするのだとか、いろ〳〵に評判してくれる人もあるが、そんな事は何うでも宜いのだ……」

「兎にも角にも、二十餘年の間を能く戰つて來ましたねっ　さ、疲れて居るだらう、こゝらで一服やり給へと云つて、心から慰めてあげたいのですが……そんな事を思ふと、あなたの歩いて來た道も、淋しかつたやうですね」

「賑かな明るい道中でもあつたが、考へように依つては淋しい暗い山坂道ばかりであつたやうな氣持もする。たゞ大きな手傷を負はなかつた事を、せめてもの慰めにして置くのさ」

二〇、小說家に

長い記者生活の間には、様々の思ひ出やら邂逅やらが、私の感傷を波立せて居た。

鄕里の美作山中に居た頃、小學校の校長先生が、片手間に遣つて居た貸本屋に雇はれて、小說や講談本などを入れた四角な木箱を、天秤棒で擔ぎながら、三里四方の近在を步いて居た少年の私を、三十年の昔に思ひ浮べることもあつた。

ちぬの浦浪六の三日月、奴の小萬、破れ太皷など云ふ小說に隣して、饗庭篁村のむら竹や、幸田露伴の五重の塔、對髑髏など云ふ小說本が、雜然として入つて居た。極彩色厚表紙の粗末な本ではあつたが、黑岩淚香の探偵物で、非小說とか、鐵假面とか云ふやうな本も、一方の箱に入つて居た。幼い頃から小說ばかりを讀で居た私は、貸本の行商に出ても、冬は村外れの茶店の爐邊で、一日を「三日月」の「さんぴん待つた禮を云ふ」に過したりした。夏は鎭守の森の樹蔭に入つて、淚香の探偵物に讀み耽りながら、一錢も儲けずに戾つて居た。

「小說家になりたいな……」

岡山の藥問屋の小僧から歸つたばかりの十四歳の私は、浪六の三日月の冒頭などは、三四ページも暗誦して居た程であつた。自分も行末は小說家になつて、面白い文章を書くやうになりたいものだと、明治二十四年の私は、心からさう思ひ立つたものであつた。

貸本屋を廢めて、鹽鯖や鹽鰮や、洋燈のホヤや、芯や燐寸などの行商人になつてからも、私の心は「小說家に爲りたい」ので、一杯になつて居た。朝の五時から晩の七時頃まで、近鄕近在を四五里歩いても、僅に米一升の價、四錢五六厘しか儲からない仕事を、私は何んなに馬鹿〳〵しく思つたことであらう。疲れた足を引ずつて、夜遲く家に歸ると、そこには嚴格な母が

待つて居て、

「市か、えらかつたなア、何も人間になる稽古ぢや……。二錢でも三錢でも、自分で儲けた金は貰いけえ。大事にして置くのぞな……」

と、涙を浮かめて云つたりした。

二一、新聞學問

十五の秋に、その母が死でから、私は直ぐ行商人を廢めて、父と妹と三人で、耶蘇教の會堂になつて居た私の家で何もせずに暮して居た。米が一升五錢餘の時代でも、親子三人遊んで居ては、三度の飯を二度に減らさねばならぬやうな事が、三日も五日も續いたりした。

隣村の瀬田川村役場に雇はれて、月給一圓五十錢の使丁となつたのは、母が死でから間も無い時であつた。何も彼も質盡して、これだけはと云つて居た桐の簞笥や、郡内の夜具などを、私は夜になると背負つて、ソツと出て行く父の背後姿を見ると、私は子供心にも堪らなくなつて、忍び音に泣き入つたものであつた。九歳の妹は、何も知らずに遊び戯れて居たけれど、私は飯を二杯餘計に食つたと云つては、ホロ〳〵涙をこぼしながら、私を叱つた父の顔を、思へば幾度、見たことであらう……。

村役場の淋しい當直室で、五分芯のランプの下で、私は山陽新報や岡山日報や、大阪の朝日新聞などを、毎夜のやうに讀み耽つて居た。西村天囚の怪男子と云ふ小說や、江見水蔭の女の親切と云ふ續き物や、岡野半牧、宮崎三昧、奥山霜猿、新田静湍など云ふ名が、私には懐しかつた。東京からは日本と云ふ假名の付かぬ新聞や、國民新聞などが來て居て、私が初めて徳富蘇峰と云ふ名を知つたいも、その村役場時代のことであつた。

「新聞記者になりたいな。山陽新報記者になつて、月給を十五圓ほど取りたいな」

と、私は心からさう思つたのであつた。田山花袋氏に手紙を送つて、弟子にして下さいと頼んだのも、その頃のことであつた。私の祖父の甥であるところの箕作麟祥、菊池大麓、箕作佳吉、箕作元八兄弟や、坪井正五郎氏の夫人直子さんなどに手紙を送つて、「東京に出て勉强したいから書生に置いて下さい」と頼んだのも、村役場の當直室で起ふしてゐる時分のことなのであつた。

二二、父母の愛

それから後、菊池一家や箕作家からは、反つて不心得を諭さ

れたりして、私の月日には、少しも明るさと云ふものが見られなかつた。岡山の藥店へ行つたり、京都の親戚の玄關番や、寫眞屋の食客や私は食ふて生きて居ると云ふ他に、何の豫定も無い少年であつた。

さうした少年の惨苦時代を過ぎてからも私は東京で人力車夫や、新聞配達や、民友社の小使などをして、生きて行かねばならなかつた。大阪に歸つてからも、村井兄弟商會の工場や、硝子工場などで、勞役者として汗を流さねば、食ふて行くことの出來ぬ私なのであつた。その工場の一勞働者から、初めて大阪新報記者となつた時私は何んなに喜び勇んだものであらう。

酒を飲むことや、女を買ふことを覺えて居た私ではあつたけれど、暗いジメジメした世の中のみを見せ付けられて來た私ではあつたけれど、まだ何處やらに初心な純眞さだけは忘れずに有つて居る私なのであつた。八九歳の昔母の膝に抱かれて、宣教師ベテートさんから、父と子と聖靈の御名に依り、バプテスマを施された私の意識が常に墮落しやうとして居た私の心の一隅にあつて、私を育み育てゝくれたことを、私は心から感ぜずには居られぬのであつた。賢明で涙脆かつた母の慈愛と、好人で正直者であつた父の慈愛とが、遠く流離の旅路に泣く私の心にあつて、私に初一念を透さしてくれたのであつた。

「この子は性來、眼が惡いから、學問はさせられません。丁稚小僧の鹽踏奉公をさせて、商人に仕立る他は御座いません」

と云つて居た母は、私を子供の儘にして、先立つてしまつたけれど、父だけは大阪朝日時代に迎へて、たとへ四年の短時日にもせよ、その死水を取ることが出來たのは、せめてもの慰めと云はねばならぬのであつた。

「東京へ行つて、箕作や菊池を訪ねやう」

と云つて居た父は、その東京へ私が來た年の夏六十五歳で病沒したのであつた。……

二三、過去の人

そこには又樣々の女性の姿が、私の思ひ出に浮かんだり、或は老いたる、或は若き記者達の姿が次々に私の思念の前を、走馬燈のやうに過ぎるのであつた。

中にも既に故人となつた人々の面影は、一層色濃く強く、思ひ起されるのであつた。大阪新報に居た富樫柳水の鼻、加藤眠蝉の眼、田中稲月の顋と云つた風に、私の記憶を呼起す記者達が多かつた。大阪朝日の稲野年恒畫伯や、山内愚仙畫伯や、小川定明老人などは、酒食の方面に於いて私には忘れ難い人々で

あつた。岡新吾翁や、牧放浪兒や、須藤南翠翁などは、頭に社中の先輩のみでなく私達の前を行つた人々であつた。上野理一翁の肥つた好人らしい態度や、秋山の東君の髭をピンとした姿や加藤信次郎老人の苦い顔や、それ等も「過去帳の人」になつてしまつたのであつた。

大阪每日に居た平尾不孤や山下雨花なども、死ぬるにしては餘りに若い齡を病沒したのであつた。東京に來てからも、私は此の十八年間に、多くの記者達を失つて居ることに、暗い心地になる時があつた。國民新聞の栗原老人や、吉野左衛門兒やさては洋畫家の渡邊亮輔君や、山田桂華君や、何れも惜い人達であつた。東京朝日の池邊三山氏、佐藤眞一氏、小池正美君なども淋しく淋しく死で行つた人々なのであつた。都の伊藤みはる君にしても、林田春潮君にしても、まだ〳〵春秋に富で居たものを、何を遠慮して早世したのであらう。

黑岩涙香、小林天龍、圓城寺天山など云ふ人々の名も、新聞界の後輩に取つては、忘れてならぬものであつた。東海道筋で自殺して果た時事新報の多和田菱仙君や、大井の一隅で窮死した郡司重次郎君や、肺を病んで斃れた報知の鹿島櫻巷君や、此の人達の上にも、私の思ひ出は盡きぬのであつた。

二四、探訪隨一

「數へて見ると、ほんとに多くの人々が、死で居るのですね。大阪の小川定明と云ふ奇人の生涯も、面白かつたさうですが、郡司重次郎と云ふ男も、最後まで殘つた探訪者の一人として、忘れられない人ですね」

「あの時代からの人で、今も健康で働いて居るのは、東京朝日の河野玄隆翁ぐらゐなものだらう。昔の三面の探訪と、今の社會面の外交とは、まるで世の中が變つて居るからね。この意味から云つても、河野君の健在に對しては、同業者的に祝福しても宜い位に私は思つて居るのだ」

「小川といふ人は、何んな風でした」

「さうさね、飲んだり食つたりして、遊んで居る間に材料を取る類の人で、何と云つても名探訪記者の隨一人だつたよ。今の若い外交記者達には小川老人の爪の垢でも飲まして遣りたいと思ふのだが、世の中は變つたし、新聞の取材方法も異つたからね、もうあんな奇才は出現しないよ」

「郡司と云ふ人は、何んな樣子でしたか」

「學問も素養も無い男だつたが、材料取りには特殊の手腕があつてね、殊に警察方面の事件にかけては、水際立つた手腕を

見せて居たよ。ヨタ助の間に合せ者で、何んな處でも平氣な顏をして、眞しやかに報告する手腕は、奇想天外の觀がつだね」

「昔は何んな事件でも、探訪者が各方面を探つた事實を報告して、それを綜合して書いたさうですが、今は編輯本位になつて、表面に現れた事實の他は、關係者自身に語らせて居るのですね。右に就き何氏は語る……と云つた調子で、探訪も容易ですな」

「探訪では訪問さ。今の新聞は文章も衰へたし、探訪も淺薄になつたし、たゞ見た目本位になつた風の氣持がするね」

「それも、時代の影響なのでせう」

「進歩か、退歩か、拙速主義か知らないが、兎にも角にも、時代の影響と云ふのだらう」

二五、筆硯勞働

――以上、私は思ひ出るまゝを、何の技巧も加へずに、率直に、平明に、二十三年間の所々を拾つて來た新聞記者として、無學な私であり、乏しい私であつても、私には私だけの汗もあつた、涙もあつた、自ら慰めやうために、そして私の生涯の上に、或る一轉機を劃さうために、此の痴態を敢てしたことを人々は嘲けるであらう、罵しるであらう、笑ふであらう。けれども私に於いては、何うすることも出來ぬ衝動に驅られて、此の痴態を敢てしたことを心ある人々は、同情の眼を以て、見てくれたことであらう。

「何も彼もさらけ出してしまふのだ」

と、この記事に取かゝる前までは、男々しく決心して居たのであつた。けれども私は今日まで、果して何を語り、何を告白し何を懺悔したことやら、實に他愛も無い自家身上の吹聽に終つたやうな結果になつたことを、心恥かしく思ふのみである。私はたゞ、以上の覺え書を土臺として、他日更に、新しい私の記者懺悔一卷を大成したいと、心構へて居ることを、讀者に約束して置きたいと思ふ。そして斯ふした平凡人の平凡な半生記錄であつても、同じ道を後から歩いて來る人々のために、何かの道しるべともなり、何かの參考ともなれば、この上の滿足は無いのである。

不十分にもせよ、泥を吐いてしまつた私は、これから後の半生を、何んな風にして辿つて行つたら宜いのであらう。自分では無住所新聞記者の積で居て、現に地方の新聞二三へは「東京通信」を書いて、生活費の一部を得て居るが、それが、私の到り着くべき大團圓であるとは、思ひ度くも無いし、思はれたく

もない。

「何うにかなるさ、クヨ／＼思ふなよ」

と、其の日／＼を送つて行くことの呑氣さ、氣楽さ、自由さ、心細さを、私はそれから一年の間、何うやら此うやら適つて來たのである。

それもこれも、皆様のお蔭であると思ふ毎に、私の弱い心は何時も涙ぐましくなるのである。

（東京の巻、後期、完）

美酒「花雕」記

田中貢太郎

一、上海の酒家

昔、禹が飲んで甘しとして、これによつて將來國を誤る者があらうと云つた酒は、どんな種類の酒であつたのか、それは知ることができないが、今、支那で日本人にまで老酒として知られてゐる紹興酒は、近世の美酒の一つであらう。

本年の四月十六日、支那遊行の途次、先づ上海へと行つた私は、翌翌日二三の酒徒と共に、その紹興酒と云ふのを飲みに南京路の王寶和と云ふ酒桟へと行つた。酒桟とは酒屋で、卸と小賣を兼ね、それで居酒屋式に酒も飲ますやうになつてゐる所である。杜甫の飲中八仙歌にある長安市上酒家に眠るの酒家がこれである。

「きたない居酒屋へ案内しませうか。」

王寶和行きを最初に云ひだしたのは島津四十起氏であつた。島津氏は詩人で上海に二十年も住んでゐる酒徒であつた。一行の中には私の友人の久竹次氏もゐた。

それは二階建になつた木造の古い古い傾きかけた家であつた。降つてはゐなかつたが煙雨の暗澹とした空のせいもあらうが、眞黒に汚れてどろどろとして見える店頭には、燒鴨や白鶏を釣してあつて、六七人の店の者が薄暗い所に垢染みた顔を見

せてのそりのそりとやつてゐた。その内の一人は店頭の臺の上で表の方をぎよろりとした眼で見い見い肉を刻んでゐた。私達は右の方から土間へ入つて、すぐ其所にあつた梯子段をあがつた。土間の向ふは廊下のやうに狹くなつて、その行詰の細長い室には午食に來てゐるらしい勞働者ふうの汚い男が數人酒を飮んでゐた。一方に長い箸を持ち一方に大きな茶碗を持つて、悠悠と飯を喫つてゐるのがそれに交つて見えた。

二階の取付の室には五六個の桌子（テーブル）を置いてあつたが、その一つには二人の客が向きあつてゐた。梯子のあがり口に近い桌には、酒保の若い男がゐて私達のあがつて行くのを待つてゐた。其所には海瓜子（ヘーカツ）と云ふ西瓜の種のやうな櫻貝の湯をかけたのや蝦の煮たのや、燻魚（シュンユー）などを盛つた皿鉢を置いてあつた。私達はその傍を通つて狹い三尺の入口を潜り、次の室の奥の窓下へと行つて腰をかけた。

『汚い所ですよ、しかし、酒は好いんですからね、』

島津氏は蒼白い長い顏を正面に見せて、無邪氣な子供子供した眼を細めて笑つた。私は島津氏に會釋しながらまはりに注意した。汚れてねちやねちやと脂びかりのする黑檀の桌、小砂の塵と痰唾と魚の骨などがごつちやになつて喰附いてゐる地板、歪んだ窓のガラス戸などが薄氣味わるく見えたが、私はべつに不思議にも思はなかつた。私は上海に著いた晩、一品香（イッピンシャン）と云ふ上海第一の支那旅館に一泊して、薄汚い室を知つてゐたからであつた。

『さあ、これが紹興酒の内の花雕と云ふ酒ですよ、これを飮んでください、此所の酒は本物ですからね、』

島津氏はそれを私に勸めるのが非常に嬉しいと云ふやうな聲で云つて、酒保が持つて來てそれぞれ前へと置いて行つた銚子の一つを手にした。それは鶴の首のやうに長い口と耳の輪格のやうな取手の附いたスズの器であつた。

『さうですか、……ホーチョー、』

それは黄金色をした香膩のとろとろとした酒であつた。

『なるほど、ね、日本酒とビールとを一緒にしたやうな酒ですね、桂月先生が、僕に、老酒はアルチウにならないから、幾等飮んでも好いさうだと云つたが、なるほど、これぢや大丈夫ですね、』

『さうです、この酒は、幾等飮んでも、ぐでぐでにはなりませんからね、何時までも淘然として、好い氣持でゐられるのですからね、』

島津氏は私に二杯目の酒を注いでくれた。私達の前には三皿四皿の肴が來てゐて、それを銘銘で自分の前の小皿に挾み取る

やうになつてゐた。それは酒保の桌にあつた殻付の海瓜子と、馬刀の煮たのと、白魚のやうな小魚の油で揚げたのと、野菜の葉らしい小さく切つた生のままの物とであつた。馬刀の煮たのは拌蟶子と云つた。白魚のやうなのは燻鯽子魚と云つた。野菜の葉らしいのは香烏筍と云つて、それは蘆の芽であると一行の中にゐた骨董店の主人が云つた。骨董店の主人は復た支那では蘆を旧に作つてその根も食用にすると云つた。

『此所で、料理にも飽き、茶屋酒にも飽いた者が、本當に酒を飲みに來る所ですよ、此所では、何時でも走りの肴を喫はすんですからね、』

島津氏はそれからさうした酒店で出す肴の話をして、洋澄河の蟹のことや、松江の鱸のこと、時魚のことなどを話した。馬刀の蟶子、小さい赤貝の海子、小杜蠣の蠣蝗、小蝦の槍蝦、海瓜子などは寧波から來るとも云つた。鴨の卵を鹽漬にした醃蛋、鴨の卵を泥漬にした皮蛋、燻蛋、燻魚、海月の海蜇皮、豚の腸詰の香腸。脂つこい口をなほすには、生で喫ふ搶筍と云ふ小さな筍、莧の莖の綠筍、胡瓜の黃瓜、甜瓜の香瓜、荸薺の地栗などがあると云つた。私はその後島津氏と二人で度度其所へ出かけて來たが、島津氏の云つたやうに何時も走りの肴があつた。私は其所で若い蠶豆の實の茹たのも喫つた。

『他にもこんな家がありますか、』

私は島津氏に酌をしながら聞いた。

『あります、漢口路に馬上侯、福州路に源茂吉と云ふ家がありますが、他にもまだ澤山ありますが、此所にかなひません、此所が第一ですからね、』

島津氏はそれから南京路には、王寶和の他に老東明、漢口路には、馬上侯の他に朱恒裕、福州路には、源茂吉の他に同寶泰、震豐泰、豫豐泰、德泰昌、高長興、德順源、陳賢良などの酒家があると云つた。源茂吉へは、その後一度島津氏と一緒に出かけたことがあつたが、幾等か室が綺麗で茶館化してゐると云ふだけで、酒がまづかつたので二度と行かなかつた。

『その花雕の上に、大花雕と云ふのがあります、取つてみませうか、すこし甘口ですが、』

私は甘口の酒は口にしたくないので取らさなかつた。島津氏は花雕のことに就いて話しだした。花雕の名は女兒酒から來たもので、それは富豪の家に女の兒が生れると、その子供が嫁入する時に一緒に持たしてやるために數壜の酒を醸造するのであるが、さうした場合の酒であるから、酒壜には紅や青の絵具で人物花鳥の絵を畫いてある。花雕と云ふ名はそれから起つたものである。

『裏の方に酒を置いてありますから、行つてみませう、』

私は島津氏と一緒におりて行つて、土間の見詰の室の方へ行かうとする廊下のやうな所から內庭へ出た。じめじめして汚いその庭の向ふ、ちやうど勞働者ふうの者が酒を飲んでゐた室の隣と思はれる所に穴倉の口があつて、內から積み重ねた酒甕の一部が見えてゐた。島津氏はずんずんその內へ入つて行くので私も後から隨いて行つた。それは夜のやうに暗い室であつた。

『これですよ。この繪のある奴でないといけないですよ、』

島津氏は右の壁に倚せかけて積んだ甕の一つに手を觸れた。それは綠青と朱の色の眼立つ胡粉のやうな物を盛りあげて描いた幼稚な模樣のやうな繪であつた。

『この酒は古いだけ好いんです、五年よりは十年、十年よりは二十年、』

『さうでせう、ね、女の子が嫁入する時に持たしてやると云ふなら、幾等早くても十四五年はかかりますね、なるほど老酒ですね、』

『さうですよ、古い酒はなんでも老酒ですが、他の酒は老酒とは云ひませんからね、』

私は二階へあがる時、島津氏に教へられて軒下の雨垂の溝穴のやうなサナのある所へ小便をした。其所から一足內に入ると酒を置き肴の材料が置いてあるので、氣になつたが、その後支那の料理屋へ行つて、料理場の流槽の隣が別に支切もなしに便所になつてゐるのを見せられるに及んで、この方がよほど清潔であつたと思つた。

『魚の骨でもなんでも、勝手にテーブルの上へ置くが好いのですよ、支那では御馳走の時、客がテーブルを汚してくれると、悦びますからね、下へ落すと犬が來るので、自然とテーブルの上へ置くやうになつたと言ふのです、』

島津氏はさう云つて海瓜子の殼を卓の上へ置き置きした。私と久氏とは土佐の故鄉の話をはじめた。久氏は長江の水先案內であつた。久氏は童顏の赭く陽に燒けた顏に何時も白い齒を見せてゐた。

『土佐の酒はきついぞノウシ、一つちんちんせう、』

久氏が杯を持つので私も杯を持つた。

『この酒ならすこしは飲めますね、李白一斗詩百篇、これなら一斗位は飲めさうですね、』

酒に飽いて來ると西瓜の種を喫ひはじめた。堅に嚙んでぽちりと割り、その中から出る肉を舌に乘せると共に、皮を取つて桌の上に置くのであるが、慣れないので思ふやうには割れなかつた。

『も、すこし、歩きたいな、何所か行く所はないのですか、』

私は好い醉心地をそのまゝにするのが惜かつた。

『ちや、そのあたりを歩きませうか、』

島津氏は私達を伴れて戸外へと出た。室を出る時氣を著けてみると、私達のゐる室にも二組、次の室にも三組ばかりの客が來て盛に飲んでゐた。

私達はその夜、廣東路の先の西棋盤街の某家で、のんびりした氣持になつて、青い服を著た少女の歌に合はして彈く果琴の音を聞いてゐた。チユ、チユ、チユ、ユー、ユー、ユー、シエー、シエー、シエー、ツオー、ツオー、ツオー……。

その夜遲く歸つて來た私の衣兜の中には、片側の眞赤な所に『龍寓』とした名刺が入つてゐた。

その日をはじめにして私には淘然たる酒の日が續いた。その私の酒の傍には、いろいろの人がゐた。その內でも島津氏の影はすこしも傍を離れなかつた。多感な島津氏は酒に厭いてくると所構はずに据り込んで詩を作つた。同文書院の淸水董三氏と三人で食桌を共にする時には、きつと箋書を買つて來さして、淸水氏が漫畫を畫き、私と島津氏とが句を書いて、廣東にゐる友人や內地にゐる友人の許へと送つた。

島津氏の家へは、毎週一つづつ南京路の酒家から新らしい花雕の罎が屆いた。

ある雨の日、天津路の古道具屋をあさつての歸りに、浙江路から南京路の方へ行きかけたところで、一緒にゐた若い友人達が菓子屋に入らうと云ひだした。仕方なしに隨いて行つて二階へあがつてみると、やはり酒があると云ふので一杯飲んだが、その酒を盛つて來たスズの銚子がびしやびしやに潰れてゐて、みやうに俳味を帶びてゐるところから、大洋一枚出してそれを貰つて來た。

夜もなく晝もなく、酒に醉うてふらふらと歩いてゐて、厭いて來ると街頭に蠅のやうに群がつてゐる黄包車に乘つて友人の許へと歸つて行つた。

南京路街李白氣取りで吾れ行けば黄包車も避けて行くなり

二、舟中の詩趣

暮春の陰天に映る菜種の花の黄金色、蘿蔔の花の白色、蠶豆の花の紫色、麥の穗、竹藪。楊柳の花は鳥の肌毛のやうに微風の中に飛んでゐた。私は王寶和に一緒に行つたことのある骨董店の主人に案內してもらつて、先づ鎭江を經て揚州へと行つたが、火車が常州を通る時、蘭陵美酒鬱金香、玉椀盛來琥珀光の句をふと思ひ浮べて微笑した。常州は古の蘭陵の地である。

揚州へは鎮江から河蒸汽に乘つて、揚子江を横切り、隋の煬帝の掘つたといふ運河を遡つて行つたが、旅館へ著くや否、茶房に案内してもらつて一軒の茶館へ食事にと行つた。支那の旅舍は室だけ貸すことになつてゐるので、客は自分の好むやうに食事を取ればいい。室代は一晝夜が一二圓、茶房に一割のチツプさへやれば、他に一錢も要らない。旅館の料理で食事をすれば、一回五六十錢で十分である。

その茶館では旨い豚のだしの料理を出さずに、鷄のだしの料理を出して來た。

『しまつた、回回教の家だ、』

骨董店の主人がいまいましさうに云つた。回回教の家では豚を忌んで用ゐなかつた。私達は歸つて來て旅館の一室で再び盃を持つた。その夜は遲くなつてから强い雨が降つた。私達の室から漏れる奥琴の音は、その雨の中に心持ち好く響いた。

私達はその揚州に二泊して、南京に行くことになつてゐたが骨董店の主人がすすまないので、仕方なしに豫定を變更して蘇州へと引返した。

蘇州では閶門外の馬路に沿うた旅館に入つてゐた。蘇州は古の姑蘇の地で、吳王夫差や、伍子胥、西施などで有名な所である。其處には私の先輩山岡蒭雲先生が三元坊の江蘇師範學堂の教師として二年間もゐたことがあるので、生面の土地でありながら舊知の感があつた。

私はその蘇州に一週間ばかりゐて、畫舫で天平山へ行き、虎丘に行き、うつらうつらとした夢のやうな日を送つてゐたが、飽いて來たので民船で杭州に行くことにして、舟を買ひ、旅館を引拂つて出かけて行つたが、午食をしてゐないので、途中馬路の角の茶館へとあがつた。

私達は三人であつた。その一人は骨董店の主人が何所からか作れて來た若い女であつた。その女は右の小鬢に小さな禿が見えてゐた。この頃の支那の女學生のやうに引詰めにした束髮の前髮を油を附けずにもしやもしやとさし、それに短い上衣を著て、右の手首に黃金の腕時計をはめ、これも短い褌子を穿いて膝まで來るやうな靴足袋を著けてゐた。

馬路には署い白い陽が輝いてゐた。もう二時頃であつた。私達は二階の見附の室へ入つて晝飯の料理を注文した。それは皆支那語に明い骨董店の主人の役目であつた。私は旅館で喫つた餠の旨かつたことを思ひだして、

『チン、チン、』

と云つてつけたした。給仕の若い男はちよつと考へるやうにして骨董店の主人の顏を見た。

『紅燒鮒魚』

給仕は骨董店の主人の詞でやつと判つたと見えておりて行つたが、やがて一二品の肴と酒を持つて來た。肴の中には黄鱔片と云つて黄な斑紋のある泥鰌のやうな魚の煮たのもあつた。紅燒豚肉も青菜炒肉絲も、私の注文した大きな鮒の煮た紅燒鮒魚も來た。

食事が終つて菜館を出た私達は、すぐ傍の東洋堂と云ふ日本人の經營してゐる雜貨店へ行つて、旅館から持つて來て頼んであつた荷物を受け取つて苦力に持たせ、ついでにビールやサイダーなどを買つて、それは東洋堂の小僧に持つてもらひ、閶門橋下の三才塲へと行つた。

その舟は日本の屋根舟のやうにした客船で、內を三室に支切つて、眞中の室には艫に寄つた方にふた布の敷蒲團が敷かれる位の座席を取り、その前に黑い小さな桌を置いて、一方を左舷の窓の下に喰附け、三方に置いた牀几に三人の者が腰を掛けられやうにしてあつた。舳の室は眞中を通られるやうにして、左右に人一人が寢ころべる位の棚をしてあつたが、其所にも左右に小さな窓があつた。艫の室は船頭夫婦の寢床で亦炊事場でもあつた。私達は船頭に云ひつけて舟の中で飲む酒を買つて來さした。酒を買つて來るついでに藁のスリツパを買つて來さそうとしたが、スリツパは買つて來ずに日本の煙草を買つて來たので、ちよと興が醒めた。

五時頃になつて舟を出した。船頭はこつこつした正直さうな老人で、女房の方は幾等か年下の世事にたけた、それで何處かしらくへない所のあるやうな老婆であつた。その舟には二十二三位と十七八位の二人の壯佼がゐたので、その倅か甥あたりであらうと思つたが、後で聞くと雇人であつた。

その舟の傍には同じやうな民船がたくさんゐて、それが舟の中を洗つたり、火を焚いたりしてごたごたとやつてゐたが、私達の舟が出はじめると、皆私達の舟の方へ顏を持つて來て、船頭夫婦に何か云ひかけ、後で云ひ合せたやうに口々に、

『順風、順風』

と云つた。老船頭の小さな顏に陽が當つて、赤い鼻が一層赤くなつて見えた。

舟は汚れて赤どろんだ運河の水の上を滑つて行つた。新らしくできた橋がすぐ來た。割竹の笘を二枚も三枚も並べて葺いた小舟が眼に著いた。それは杭州方面から來た舟で宋舟と云ふのだと骨董店の主人が云つた。

左岸の方は運河に臨んだ人家が無くなつて來て、蘇州城市の城壁が見え、その城壁を背景にして、蠶豆、桑の芽、柳の葉が

見えて來た。城壁には蔦葛がからみついてそれが赤黒く見えた。右岸にはまだ人家が續いてゐる。空を見ると濃い藍色を見せてゐた。ふと左岸の城壁の上に眼をやると、黄な一團の雲のかかつてゐる所があつた。剖葦(よしきり)の聲が耳に注く。

蒼舫のやうな大きな客船がたくさんの男や女の姿を船窓から覗かせてやつて來た。立夏(リカー)の十日前から立夏の日まで佛寺に行つて燒香することになつてゐる善男善女達が、石湖あたりへ行つての歸りらしいと骨董店の主人が云つた。私は茶の代にビールを飲んでゐた。

舟はもう胥門橋(シーメンチヨ)の下へ行つてゐた。橋を越すと左岸はすぐ城壁になつて古い石垣に廢殘の色をからませてゐた。帆をあげた舟も見えた。竹の筲を二枚葺いた小舟があつて、老婆が艫の右側で小櫂を押し、七つか八つの小女が舳の左側で小櫂を動かしてゐたが、それは湖北船であるらしい。その舟の艫の端に萬年青の赤い實のなつた鉢を二つ置いてあるのが見えた。苫の中からは煙が漏れてゐた。

舟は左に城壁に沿うて折れ曲つた。盤門の外の吳門橋(ウーモンチヨ)が來た。右岸は洋館の二三軒飛飛にある靑地で、其所は日本の專管居留地であつた。その建物の一軒から日章旗らしい旗のだらりと垂れてゐるのが見られた。運河を往來する河蒸汽位しかない艫に一つ胴部の兩側に一つづつの機關銃らしい物を据えた船がその日本租界の岸に近い所にかかつてゐた。それは『隆役』と云ふ太湖の海賊を討伐する支那の軍艦であつた。日本租界の下にも一艘の小汽艇が繋いであつた。それは靑靜丸と云ふ領事館の汽艇であつた。

剖葦が爭ひ鳴いた。前方へ一直線になつて見える城壁に沿うて黄な大きな帆を張つた荷物船が行つてゐたが、それは三人の舟子が陸にあがつて曳いてゐるのであつた。その黄な大きな帆には城壁に近く落ちかけた夕陽の光がかかつてゐた。舟の前を飛んで行く燕の白い腹にも夕陽の光。

大きな民船が曳かれて前方から來て、その曳子と荷船の舟子とが芦の生えた水際で擦れ違つた。日本租界は小渠で終つて共同租界が來た。其所には古の吳越街道があつた。前方の空には紫黃色をした靄がかかつてゐた。小汽艇に曳かれた嘉興通ひの客船が客をいつぱい積んでやつて來たが、その客船の後にも紫黄色の靄を曳いてゐた。

『今晩は陰曆の十五日ぢや、月がいいなア、どつか好い所へ船を着けたいもんですね、』

私は民船が夜になると動かないことを聞かされてゐるので、どうせ停めるなら月を見るに好い所へ停めてもらひたいと思つ

た。

『いいでせう、何所かもう舟を停めるでせうから、月の好い所にしませう、あすこの城壁の下はどうです、』

骨董店の主人は城壁の下の方へ指をさした。其所は私が考へても好い所であつた。

『いい、あすこならいいのですね、』

骨董店の主人は船頭の老人と交渉をはじめたが、老人の方で何か云つてすぐは云ふことを聞かないやうであつた。

『海賊が恐いと云つてるのでよ、海賊の方で吾れ吾れを恐がりますさア、ね、でもいいのです、やつと停めることになつたのですから、』

前方に白堊の大きな建物のあるのが見えた。それは絹糸紡績であるらしい。その建物の前で運河の水が右に岐れて、すぐその端が模糊となつて消えたやうになつてゐる所に小さな塔があつて、その上空に漂うてゐる彼の業黄色の靄の中が一所金茶色に見えるので、注意して見るとそれは月が出てゐるのであつた。西の方をふりかへると陽の入つたあたりの空にも業黄色の靄がかかつてゐる。

舟はもう城壁の下の蘆を植えた田の水際に著いてゐた。私と骨董店の主人とは陸へあがつて城壁の眞下へと行つた。城壁の黒く古びた石の間にはイタビなどの灌木が生え、それに蔦の類がまつはつてゐた。私はその城壁の石の破片を一つ拾ひあげて掌に載せて見た。

『此所へ席を敷いて、一杯やらうぢやありませんか、』

骨董店の主人が舟へ向つて何か云ふと、席が來、アルミの器に入れた酒が來た。それと一緒に女は燒肉の切つたのを皿に入れ、それに醤油を入れた壺を添えて持つて來た。城壁の上の方には蝙蝠が點點として飛んでゐた。

私は一二杯の酒を飲んだところで、ふと白樂天のことが浮んで來た。樂天が杭州の刺史となり復た蘇州の刺史にもなつて、詩酒風流の遊びを縱ままにしたことから、杭州へ往來した道筋のことを考へてゐるうちに、二人の間に時間と場所の隔たりが無くなつたやうな氣になつた。

『白樂天も、やつぱり、此所でやつてるのですよ、』

『ハクラクテン、なんです、ハクラクテンつて、』

骨董店の主人にはそれは通じなかつた。

『詩人の白樂天ですよ、此所の蘇州の刺史にも、杭州の刺史にもなつてゐるのですから、やつぱりこの運河を往來して、酒を飲んでるのですよ、』

『さうですか、』

樂天が杭州にゐた時には、二人の若い女がゐて詩酒の宴に侍してゐたが、開成四年、彼が六十八の時、官を罷め疾に罹り、從つて家道が傾いて來ると、その一人の樊素と云ふのが、愛馬と共に他人の有となつたので、不能忘情吟と云ふ抒情長詩が出來た。

『蘇東坡と云ふ男も、さうなのですよ。』

蘇東坡は王安石と議論が合はなかつたので、外任を請ふて杭州の通判となり、牧民慈惠の治績をあげると共に、一方詩酒の逸樂に思ひをやつてゐたが、後十六年して再び杭州に知となつた。その東坡にも朝雲と云ふ愛妾があつたが、それは東坡が瓊州に貶謫せられた時、隨從して南に行つて惠州で沒くなつた。

『ソトーバ、さうですか。』

骨董店の主人にはその話も映らなかつた。月の光が明るみを增してゐた。

『月を撮つてみませうか。』

骨董店の主人は肩にかけてゐた寫眞器をおろして、席の傍の草の無い所にそれを置いた。まはりの草の葉に風があつてそれが微にちらちらと動くのが面白く感ぜられた。城壁の石の間からじいじいと鳴く蟲の聲が耳にこびりつくやうに聞えて來た。

帆を張つた大きな船がその帆を月の下に黑く見せながらやつて來た。絹糸紡績の裏手の城壁に向つた方の岸に爆竹の音が起つて、赤い火がとろとろと燃えた。それは舟の著いた祝ひであつた。もう夜はぴつちりと暮れてしまつて、月の光が四邊に匂ひわたつてゐた。城壁にも月の光。私達は舟へ歸つて桌に倚つて新らしく飲みはじめた。その酒を沸かすのも、肴をこしらへるのも、飯をたくのも皆船頭の女房の老婆であつた。

私達はそのあたりの景色に飽いて來た。さうなると强いて其所へ舟を還かす必要もなかつた。骨董店の主人は艫の方へ向いて何か云つて聲をかけた。と、舟は動きだした。

『いい、いい氣持ちだ。』

私は盃を乾した。私の左横で窓の方に向いて坐つてゐた女が酌をしてくれた。そして女は骨董店の主人の方を見て何か云つて笑つた。

『酒鬼、酒の鬼だと云つてまつせ。』

骨董店の主人は濁つた聲を出して笑つた。

舟は右に岐れた運河の渠に入つて、大きな眼鏡の太鼓橋になつた石橋の下を潛り、その左岸へと行つて船がかりした。月を見ると黄な紗のやうな雲がその面にかかつてゐた。

翌日は四時頃になつて出發した。私は艙の室の右側の棚の上に寢てゐた。風の都合がいいのか舟には帆を張つてあつた。使

所に出た時に見ると、鴨の群が蝙蝠の行をひろげたやうに舟の左の方の尖つた空にかかつてゐた。

縦横に通じた運河の水。太鼓の胴のやうな石の眼鏡橋。青蘆洲。太湖に續く湖の水。村落。運河の右岸に姿をあらはして來る呉越街道。桑畑。菜の花畑。雲雀の聲。鳥。水牛。杭州の早舟はマラソンの如く三四人の者で網を曳いて走つた。

平望と云ふ市が來た。其所は運河の水の集まつた所で。上海へ行く舟は、其所から水の筋を變へなければならなかつた。その市はちやうど半島のやうになつた所で、岸には四方から集まつて來た舟が群がつてゐた。私達の舟は市場の河岸のやうな所へ著いて、船頭と骨董店の主人とが午食の肴を買ひにとあがつて行つた。市の前の水の中には楊柳のある小さな島があつて、堂のやうな物が見えてゐた。

午食の時の酒の醉ひで舳の棚の上でうつらうつらとしてゐた。と、これも中の室で午睡してゐた骨董店の主人が起きて、平望で買つて來てあつた茸の莢を刻んで醤油につけ、それを肴にして冷酒を飲みだした。私もそれに誘はれて起きあがつた。暫く生の野菜を口にすることの出來なかつた私は、それが非常に旨かつた。

『旨い。』

侍では女が笑つてゐた。夕陽が窓から射してゐたが、それが秋のやうに寂しかつた。

薄暗くなつて舟は三つになつた眼鏡橋の下を抜けて、その左岸の柳の茂つた岸へとかかつた。其所はスーフージョと云ふ村落で、橋を中心にして兩岸に人家の屋根がひつそりとして立つてゐた。その中で橋の右の袂に一軒灯の明るい家があつて、兵士のやうな男の出入してゐるのが見られた。それは江蘇省の税關で、例の釐金税を取る所であつた。

私は醉つた體を動かして陸へとあがつて行つた。私は其所の高い高い石橋の上から十六日の月を見るためであつた。陸にはすぐ人家の軒があつて人の聲がしてゐたが灯は見えない。と、二聲三聲犬の聲がするかと思ふと、もう一疋の犬が眼の前に來て吠えだした。手に何も持つてゐない私は、困つて躊躇してゐると、骨董店の主人が來た。

『なに、大丈夫ですよ、そんな犬、喰付きやしませんよ。』

骨董店の主人はさう云つてから、犬の方を向いて、

『こらッ、』

と、大きな吼へるやうな聲を立てると犬は恐れて遠くの方へ逃げて行つて吠へた。私は安心して骨董店の主人の後から隨いて行つた。

二人は石段をあがつて石橋の上へと行つた。橋の上は風が吹いて浴衣一枚では寒かつた。私はすぐ自分のあがつて來た方の橋の向ふを見た。その橋の向ふには枝葉の黑黑と した木立があつて、既にあがつてゐる月は、その木の陰になつて光つてゐた。

『寒い、寒い、著物を著て來る、』

骨董店の主人はさう云つておりて行つた。私はそのまま立つてゐた。中天は晴れて星が光つてゐるが、地平線に近づくに從うて雲が深くなつてゐた。私はさうして月の高くなるのを待つてゐた。

右岸から一人の男があがつて來て、橋を向ふへおりて行つたが、皆までおりずに引返して來て歸つて行つた。と、左岸からまた一人背の高い男があがつて來たが、それはのつそりと橋の頂上へ腰をかけた。

その內に月は木立の上に出たが、煙のやうな雲にぼかされて朧になつて見えた。その煙のやうな雲は南の方へ徐徐に走つてゐた。私はあの雲が除けばあの雲が除けばと、雲の除くのを待つてゐたが、雲は後から後からとかゝつて晴れなかつた。私は諦めて舟へ歸つて寢たが、その夜遲く夢うつつの境に、骨董店の主人が良い月だと云ふ聲を聞いた。

舟は平望から流れを遡るやうになつてゐた。翌日の午頃になつて、舟は烏鎭（ウーチン）と云ふ所へ著いた。其所では糠のやうな雨が降つてゐた。骨董店の主人と雇人の舟夫の一人は陸へあがつて行つたが、やがて一尾の鱖魚と二尾の鮒とを持つて歸つて來た。午後になつて骨董店の主人は、その鮒を膾にすると云つて、舳に出て石甃の上でその頭を切り放したところで、そのむくろは折柄の微雨の中でぴくぴくと動いた。

運河縱橫。塔の丘。黃な壁の道觀。森。墓畔の樟樹。平地の上に置いて土を著せかけた棺。柳。桑畑。梁。鳶の輪。雉子の聲。桑摘の歌。燕。朝鮮鳥。鵲。舟はさうして高屋の水際に軒を並べた新市鎭（シンチチン）へと著いた。

夕暮の向ふ岸には鍛冶屋のやうな者がゐて、其所から青白いピチピチした火花が飛ぶと共に、鎚で鐵片を叩くやうな大きな音が響いて來た。舟の著いた所は運河の河岸に軒を差しだした商家のごてごてと並んだ端で、左には材木屋の竹や木材が河の中へまで出して積んであつた。その木材と商家の間は街の內へ入つて行くやうに小路が通じてゐた。

商家の端の家は桶屋であつた。端の手前の家は回船問屋らしい家であつた。陸へあがつて河岸から河岸を歩いて歸つて來て夕飯をすました私達は、舳へ出て風に吹かれてゐた。骨董店の

てゐた。

桶屋はもう戸を締めてしまつて門口に暗い夜を置いてゐたが、回船問屋らしい家は門口に電燈が點つて三四人の者がその下へ來て話してゐた。その中には水煙草の煙管を持つた者もあれば、ステッキのやうな長い煙管を持つた者もあつた。皆船頭の様な風體をした者で、それが次第に聲を大きくして話しだした。

『皆、船頭ですよ、若い時のことを云つてるのですよ、』

骨董店の主人が云つた。笑聲もその中に交つて聞えた。

翌日の一時頃、舟は追手に帆を張つてゐた。運河の行詰になつて見える黒い森の上に、西湖の山が夢のやうに浮んでゐた。老婆は舳に立つて笛を吹いてゐた。私は盃を持つてその趣をあぢはつてゐた。艫の間に午睡をしてゐる老人の鼾も聞えて來た。

三、紹興酒の本場

私達の舟は杭州城外の日本の居留地のある洪宸橋（コンシンショ）と云ふ橋の下へ著いた。私達はそれから黄包車で西湖へと行つて、葛嶺の麓の旅館へ入つた。其所は西湖の水が窓際を浸してゐるやうに見える家で、眼の下に孤山と白堤、それを越して前岸の山麓の

てゐた。

私達は西湖に三泊した。その西湖附近には昔から美酒があつて、百花酒、虎跑泉酒、珍珠泉酒などの名があり、蘇東坡の乞開西湖狀にも、天下官酒之盛、未だ杭の如きは有らず、歳課二十餘萬緡、水泉の用は仰いで湖より給すと云ふやうなことを云つてゐるので、白堤の菜館に午食した時、其所の酒保をつかまへて聞いてみたが判らなかつた。

私達はかへりに錢塘江の岸へ出て、其所の義渡と云ふのを見た。義渡とは賃銀を取らない渡船のことで、その渡船は小汽艇に曳かれて江の兩岸を往復してゐた。前岸へ渡つて、其所の西興と云ふ所から運河を船で行くと、五六時間で紹興酒の本場の紹興へ行かれるのであつた。

私達はそれから杭州の車站に引返して、其所から火車で上海へ歸つた。上海では島津氏はじめ皆が待つてゐてくれた。島津氏の家には谷丹矢と云ふ京都の若い畫家が來てゐた。私達は三人で福州路の青蓮閣（チンレンコ）に行き、王寶和に行き、ガーデンブリッヂに近いカフエーに行き、佛蘭西租界の俗に八仙橋（パアセンチョ）と云ふ所へも行つた。島津氏と二人で清水董三氏を東亞同文書院に訪うた日は、清水氏の友人の勝浦氏と四人で九江路と漢口路との間にな

つた大新街の悅賓樓と云ふ菜館へ行つて、北京料理を口にした。鷄絲拌粉皮と云ふのは、海月と鷄肉とを煮たものであつた。彩蛋と云ふのは、卵を石灰化したものであつた。凍鷄。それから魚翅は鱶のひれ。西湖魚は西湖特產のやまめ。黃魚はぐちの煮たもの。鴨腰はあひるの腎臟。料理の後ではじやが芋を飴であげた拔絲山藥と云ふのが出たが、それは水に浸さなければ飴の糸が切れなかつた。內地へ歸る時、私は島津淸水の兩氏と福州路で飲んで「所謂竹蓀と云ふのを喫つた。それは車麩を煮たやうなぐびぐびしたものであつた。島津氏はそれを說明して、竹蓀は筍に附著してできる菌であると云ひ、淸水氏は筍の中にできるものだと云つたが、二人とも斷定はくださなかつた。四川料理も喫つた。廣東へ行つては本當の廣東料理も喫つてみたが、皆不老長壽を當て込んだ多くは惡趣味のものであつた。

五月の十二日になつて、私は畫家の谷君を伴れて南京へと行つた。靜な廢殘の陰の深い金陵の城市。その定相王廟對面蔡家花園には、栗林醫院と云ふ日本人のやつてゐる病院があつて、其所の二階の病室に井上紅梅氏がゐた。井上氏は支那文學の研究者で『支那風俗』と云ふ三卷になつた大部の著書はじめ他にも二三の著書がある。日本人で本當に支那文學に精通してゐる者では氏を措いて他に無いと云つてもいい。私はその未見の知己に栗林病院の二階で逢つた。病院にゐる程であるから餘程惡い所があるだらうと思つて行つてみると起きてゐて迎へてくれた。すこし健康はすぐれないが藥も飲んだこともなければ、一回も診察してもらつたことはないと云つて笑つた。壁に倚つた桌の上には、その一卷を出して後を書いてゐる金瓶梅の原本と原稿紙とが置いてあつた。

私はその井上氏に案內してもらつた城市の內外を見物した。獅子山、北極閣、鷄鳴寺、臺城の趾、明故宮、謝公墩、明孝陵、貢院の趾、夫子廟、雨花臺、淸涼山、莫愁湖。有名な秦淮の川には畫舫を浮べた。桃葉渡の趾も見た。汚い下水のやうな秦淮の流れに畫舫を航べて悅んだ私は、廣東の珠江に於ける妓市を見、其所ではフラーボートと云つてゐる二階になつた大畫舫を見るに及んで、自分で自分の眼光の小なるを嗤つた。

私は南京に三泊して井上氏と一緒にゐる內に支那の酒に關する智識を豐富にすることができた。支那の酒を大別すると、水からそのまゝ釀造した水酒と、燒酒のやうな一度上溜した氣酒との二種類になるが、氣酒は元以後のもので、それは元人の阿剌古酒から學んだものである。それには山西の汾酒、直隸の梁各莊酒、奉天の牛莊酒など云ふものがあつて、皆高粱を原料に

してゐる。玫瑰酒、五茄皮酒、楊梅酒、茉莉酒、菊花酒、木瓜

酒、桂花酒などは、その燒酒にそれぞれの香料を入れて滲透したものである。水酒は黄にうるみを持つたので、黄酒とも云ふ。紹興酒、滄州酒、常州蘭陵酒、湖州南潯酒、蘇州陳三白酒、德州盧酒、金檀于酒、四川郫筒酒、溧陽烏飯酒、金華酒、京口百花酒などが、この水酒の黄酒である。蘭陵の美酒は鬱金の香料を入れたものであらう。

支那では時代によつて美酒の出る場所が違つてゐる。唐時代には、常州の蘭陵からは所謂蘭陵の美酒が出た。その時代は陝西省が酒の本場であつた。宋時作には湖南から美酒が出たが、今は浙江の紹興から紹興酒が出てゐる。その紹興酒は滄州城の滄州酒が親酒であるが、その名は子酒の紹興酒によつて壓倒せられ、今では紹興酒が支那第一の美酒と云ふことになつてゐる。

日本の酒の本場の灘の酒にも、白鶴、菊正宗、澤之鶴などの區別があるやうに、紹興酒にも太號、大號、大花雕、小花雕、京莊、竹葉青、本色、陳陳、元紅などの區別があるが、私が飲んで旨いと思つて何時も飲んでゐたのは、小花雕である。紹興酒の品質のいいのは、溫めて盃に入れると蟹の泡のやうな小氣泡が立つて消える。罎の內にある酒の良否を知るには、罎の一端を敲いてみるが好い。音の澄んでゐるのは良質で濁つてゐる

のは植物か腐敗物である。

私は南京から上海に歸ると、廣東行の準備に着手したが、紹興酒の本場の紹興が見たいので、畫家の谷氏を伴れて、その二十三日、汽船で出發しようとすると、佛蘭西租界の碼頭まで島津氏が見送りに來てくれて、

『紹興へ行くと、路のふちに、日本のおでん屋式に、酒を溫めて賣つてますよ、うんと飲んでゐらつしやい、』

と、これまで數回私に云つたやうなことを云つて笑つた。

私達はその船で翌日寧波へ着き、其所に五六日滯在してから紹興へと行つた。紹興は古の越の地で、越王勾踐で有名である。會稽山の山陰にある城市で、會稽の山麓には禹陵があり、城市の西南十五支里には蘭亭があつた。私達は紹興に着いた翌日その蘭亭へと行つた。

微雨の中に蛙が朗に啼く、
老鶯
溪川の澄んだ流れの音
犬
水牛ののんびりした聲
水田に稻の苗

人家は竹の圍みの內
石橋ところどころ
驢に乘る人
鵞鳥の群は川緣の草の上
蘭亭は屏風のやうな山の間
康熙帝御筆の扁額の句
鵞池の濁水に菱の葉浮ぶ
丘の竹林
雀
流觴亭前の池の水草
太原の孫綽
陳留の謝安
晉の風流士四十一人
觴を流して詩作せりと云ふ
蘭亭亭邊の眞菰のそよぎ
右軍祠の墨池亭
杜鵑が何所かで啼く

蛙の聲
右軍の神牌に對して茶を啜るかな
流觴亭後の蘭亭序文の大石碑
內壁に落書の點々斑々
支那の本土人日本人
吾等は貴なる鉛筆もて
さて書きつくるは畫家谷丹矢、田中貢太郎の二人の名

紹興へ著たた日は、何を置いてもとすぐ旅館の前の茶館にあがつて、鯽魚を煮てもらつて花雕を飲んだ。そしていい氣持ちになると端書を取り寄せて戲句を書いた。

支那の銘酒の紹興酒
しんとろとろと旨い酒
飲むにつけても思ひだす
〇〇町の〇〇亭
ほんに〇〇ちやんは佳い女

「情死」の研究

小林隆之助

此の世の名殘、夜も名殘、死にゝ行く身を譬ふれば、仇しが原の道の霜、一足づゝに消えて行く、夢の夢こそ哀れなれ、あれ數ふれば曉の、七つの鐘が六つ鳴りて、殘る一つが今生の、鐘の響きの聞き納め、寂滅爲樂と響くなり。鐘ばかりかは草も木も、空も名殘と見上ぐれば、雲心なき水の面、北斗は冴えて影映る、星の妹脊の銀河、梅田の橋を鵲の、橋と契りて何時までも、我と其方は女夫星、必ず添ふと縋り寄り、二人が中に降る涙、川の水嵩も增さる可し。

（曾根崎心中道行の一句）

× × × ×

× × × ×

青春の血に燃ゆる若い男女の二人が、華かな而して蜜のやうな甘い戀に陶醉し盡して、其の歡樂の夢から我に返つた時、偶々其處に餘儀ない還境の義理攻めといふ網が張られてあつて、二人の行手が遮られ、其の最後の遁げ道を、此の世で添えねば未來でなりともと、戀の春の夢を描き乍ら、互に抱擁の死によつて永遠に二人の間を結付けようとする不倫な情死者――。

其の情死の最も盛んに行はれたのは謂ふ迄もなく江戸時代であつた。わけて元祿、寛永、正德の頃にかけては、一種の流行として見るべきものがあつた程、多くの戀の落伍者?を出したのであつた。其の後この嘆かはしき悲慘事は、全く社會のルーズになつたかの觀があつたにも拘はらず、近來又ぞろ其の現象が再發し、如何なる日でも二三の情死事件を新聞紙によつて散見しない事はないぐらゐに、到る處に頻々として行はれるに至つたといふことは眞に痛嘆に堪へない次第である。況して社會に相當地位と名譽とを有する所謂上流階級の人達の間に、又は學識德望の二つながら備はれる人格者の間に、兎もすれば此の悲慘事が行はれるといふが如き、傾向さへ生ずるに至つたといふ事は、正に大正聖代の痛恨事である。

□

斯る社會異常の一顯象たる情死が、他國にもあつたかといふに、西洋諸國に於ては殆と其譚さへ乏しいのであつて、强いて其の類型だけでも見出さうとするならば、彼のロメオ、ジユリエツトの譚ぐらゐに過ぎないし、亦た國風わが國に相等しといふ隣邦支那に於てさへも、古今を通じて多くの貞女烈婦なるものが輩出し、夫を望んで石に化し、或は許嫁自ら縊れて辱を免るゝ擧に出でたものもあつたが、男女相擁して共に情死の手段をとつたものなどはなかつたのである。要するに、情死は我國の特產と爲す所のものであつて、他國に於ては假令情死の事實があつたにもせよ、其の名がないものと見て差閊がないのである。從つて情死の譚は、獨り我國の歷史を彩る特異の色彩でなくてはならぬ。而して、其の情死の變遷は如何なる道を辿つて今日に及むだか。今、假りに我國の文明史を三時代に大別して觀れば、第一期の王朝時代に於ては、情死の記錄なるものが殆と見當らないのである。或は當時の史述家が、事實の記錄を逸したのかも知れぬが、何れにもせよ餘り多くなかつたらしい。强いて情死に類すべきものを擧ぐれば、大和物語に乙女塚傳說として記しある一つの譚に過ぎぬ。それに據ると、或る二人の男が一人の乙女に戀したのであつた。戀された當の乙女は何れにも就く事が出來ないから思案の末に一計を案じて言ふやう、二人の中能く水鳥を射た者に從はふと約した、二人は直に競射を試みると一人は水鳥の羽を射、他の一人は足を射たので乙女は其の去就に迷ひ、遂に投身し果てゝ了つたのである。之れを目擊した一人の男は其の跡を追ふて投身し、又他の男も同樣之れに從ひ、三人諸共に相果てたのであつたが、程經て他人が其の屍體を引上げて觀ると、一人の男は乙女の手を、又他の一人は足を共に把捉してゐた憐らしい有樣を見たといふ。

□

右は、何うやら古說の訛傳のやうであるが、假りに之れを當時の事實譚として觀るも、情死として見做すべき類ゐのものであるか何うか頗る疑問であつて、寧ろ殉死と稱する方が穩當であらうと思ふのである。

然らば何が故に、王朝時代に情死がなかつたらうか。謂ふ迄もなく此の時代に於ける戀愛は比較的自由であつたからである。婚姻の制度の上にこそ女子の淑德を認めたけれども、再婚などの場合に於ては、彼の封建時代の如く、社會から賤惡視せらるるやうな事がなかつたから、未婚の女と、男とが戀し合ふとがあつても其處に男子の既婚とか乃至は未婚とかは問ふ必要もなかつた。又、既婚の女子であつても、若し或る男子に戀せらるゝが如き場合があれば、彼の凛乎たる婦德を死守するとい

ふ気骨を有した封建時代の女子の如くでなくて、寧ろ其の服従子の求めに應じない事が、却つて女子としての男子に對する無情な仕打であるとして自ら恥ぢたといふ。

　斯る時代にあつては、無論環境の壓迫といふやうな、戀愛に附きものである餘儀ない桎梏があらう筈がないから、情死の存じなかつたのも敢へて不可思議なことではなかつたと思ふのである。

□

　降つて封建時代の世となり、一度び鎌倉武士の天下となつてからは、王朝時代の社會制度も、朴訥儉素な尙武の氣風に一蹴されて了つたかの觀があつた。而してそれに代るべく生れ出でたのが、男尊女卑の家族制度てふ社會道德であつて、之れが亦た年を經るに從ひ、彌やが上にも嚴肅主義に傾いた結果は、其處に男子の婦人觀に大なる變化を及ぼすに至つたのである。かるが故に、此の風潮に育まれた普通の男の眼からは、女を觀ると恰も男の隷屬物か、乃至は玩弄物の如くにしか思惟されなかつたに相違なく、從つて、苟くも一個の男が女風情と互ひに戀し合ふといふやうな事柄は、男として大なる恥辱であるかのやうに考へられてゐたのであつた。否、或は女から燃ゆるやうな戀を寄せられても、それに應酬すべき準備が缺けて居た爲めか

も甚しない。[illegible]つの特異なる一情死事件があつた。これは[illegible]記されてゐるものであるが、里村玄親といふ者の若黨と、同じ内侍の女童とが身を托するに由なくして、一世を契りて共に刃に伏したる譚である。之れ慥に、我國に於ける情死の嚆矢として特筆大書すべきものでなければならぬ。

□

　封建時代の第三期たる江戶時代に及むで、平和の時勢と文化の發達とは、物質の豐富を促すと共に、世は擧げて文弱の風に流れ、奢侈の風は彌やが上にも其の頂上に達したかの觀があつた。と、同時に此の影響は、遂に性的方面にも亦大なる變化を與へ久しい間屈從に屈從を重ね、終始壓伏され勝であつた戀愛問題は、爰に新しき芽を生ずるに至つたのであつた。けれども其の新しき芽生は眞直に且つ素直に育まれなかつた。それは、其の間に何うする事も能ない勢ひを以つて進展し發達を遂げた家族制度なるものが、自由であり平等であるべき筈の芽生をば無殘にも芟除して了つたからである。言葉を換へて謂へば、當時に於ける社會道德の固定は、性的現象なる情と社會道德なる意とを、全然相反した位地にあらしめたからであつた。だから一度び義理と人情とが相衝突し、それが曲りなりにも解決し得

ない曉には、期せずして多くの男女をば情死なる道を辿るに餘儀なからしめたのである。風潮の然らしむる處洵に止むを得ないと謂はゞそれまでゝあるが、惟へば同情に堪えぬ事どもであつた。

□

要之、我國に於ける所謂情死史なるものは、恰も歴史が繰返さるゝ如く、情死の盛衰期なるものも亦同樣、輾轉繰返して止まない事が想像されるのである。古代は左も右く、王朝以後の各時代を通じて觀るならば、戰國時代に少なくて太平の世に多く行はれてゐるのを發見せらるゝが、此の現象は別に說明する程のことでもなく、卽ち戰時氣分の間にあつては、兎角社會道德が等閑に附せられ勝ちになるからである。故に個々の男女間に係はる戀愛問題の如きも、勢ひ輕々視せらるゝが爲め、たとへ其の間情死の結末を生むべかりし危險性を有するものがあつても、それはドサクサ紛れの間に葬去られたのであつた。鎌倉時代、德川の初期、明治維新及び日淸日露の兩役の比、情死の極めて少なかつたのも、實は右の因由に據つたが爲めであつた。

斯く其の變遷の情態を觀れば、近頃至る處に於て情死事件の發生さるゝに至つた事も大概想像し得らるゝと思ふのである。

卽ち古今未曾有の世界動亂に踵ぐ日獨戰爭の勃發は、當時に於ける情死事件の數をして少からしめたのであつたが、一度び平和克復の噂となるに及んで、又復た其の頭を擡げ出したからである。而して此の趨勢は、平和期間の長さに正比例し、平和期間が長ければ長いだけ、それだけ情死事件の數も共に增加して來ることが念はれるのである。依つて筆者は此の秋に當り、恰も自然科學者が宇宙に起るもろ〳〵の現象を探究して、自然の本體を意得せんとする其の手段と方法とに則り、最近約六ケ年を通じて、東京市內外に行はれた情死事件の眞相を實地に調査し、又は確認せらるる情報を採用して、取りあへず合計百組の統計を作成して見た。其の結果は次に揭ぐるが如きものを得たのであるが、其の件數僅に百組ばかりの、全體から見ては殆どもの數にもならぬ少數であるから、之れを以つて一般を推す譯には行かないけれども、心ある者の參考資料として强ち徒爾ではなからうと思ふ。

□

さて、最近我國に於ける自殺者數は幾何あるかといふに、之れを自然死に對照すれば

類別／年別	大正四年	五年	六年	七年	八年
自然死	一、〇九三、七八九	一、一八七、八三二	一、一九九、六六九	一、四九三、一六二	一、三〇四、〇三六

	大正四年	五年	六年	七年	八年
自殺	一三、五六四	一二、七九七	一二、二八〇	一三、六二八	一三、四三一
割合	、一二五	、九〇八	、九四〇	、八四五	、九五五

即ち五ケ年間に於ける自然死に對する自殺者の一ケ年平均數は、自然死千人に對し七人五分二厘に當つてゐる。其のうち更に情死並に情死に類すべきもの丶含まれてゐる原因別を擧ぐれば

年別＼原因	病苦	生活難	痴情嫉妬	後悔慚愧	家庭親族不和	將來ノ苦慮	上長ノ懲戒譴責	離緣	私通姙娠	結婚ヲ忌ミ	失戀	憂鬱	淫逸放蕩	厭世	迷信
大正四年	二、六七三	九四六	一九九	一四五	三九〇	二三九	一〇九	八〇	五八	三〇	八一	一六七	一八七	一、六六二	九
五年	二、八〇〇	七五九	一七〇	一七〇	三九一	二四五	八〇	七六	六一	三〇	八八	一六三	一四三	一、四九一	七
六年	二、七三九	五七六	一六九	一四九	三六二	二六八	六九	七五	五二	三三	一〇一	一三六	一六九	一、四九三	一三
七年	三、一九三	六二六	一四四	一七六	四一四	二三九	七九	七二	五九	三九	九三	一三九	一四三	一、七二一	六
八年	二、九二四	五三	一三〇	一七一	三八一	二〇一	九七	七五	七一	二三	一	八二	[illegible]	二四四	一、七七[illegible]

	大正四年	五年	六年	七年	八年
情死	二七八	二七六	二四[illegible]	二六[illegible]	二九一
其他	一三、二〇[illegible]	一二、八六七	一二、[illegible]六七	一三、三八五	一三、一九[illegible]
計	一三、五六四	一二、七九七	一二、二八	一三、六四[illegible]	一三、四三一

情死の數は全體から觀ると、極めて少數であつて、殆と問題視すべきことにも思へぬが、若し之れを實際に徴して個々の原因を調査するならば、必ず其處には右の數字以上の情死者を出だすこと丶信じて疑はないのである。何故かなれば、從來之れが事實に徴して觀るも、往々情死者間には、死後に於ける社會の批難を怖れて、自己及び自己の相手方の意思とは全然反對な遺書などを書くものがあつたり、若くば親族知己等の證言なるものにも社會の體面に關する上から、殊更他の事情に虚託けるなどの例に乏しくなかつたりして、間々明確を缺くものがあるからである。其他當局の調査なるものにも、形式を重んずるが爲め、其の原因を深く究めないで他の項目に組入れる場合などがあつて、遂に信を措くことの能ないものがあるから、實際は、必ず右の數より遙に多い事が首肯されるのであつて、日常新聞紙上で我々が散見するだけでも日々一二件を超ゆるのを見ても頷かれるのである。

次に、一般自殺と情死との割合を揭ぐれば、

種別＼年別	大正四年	五年	六年	七年	八年
一般自殺	一二、二八六	一二、五二二	一一、〇四〇	一一、四〇八	一二、一四
情死	二七八	二七六	二四〇	二二六	[illegible]
割合	二二、六	[illegible]	二一、六	[illegible]	[illegible]

其の五ケ年平均割合は自殺千人に對し廿一人八分に當つてゐる。而して凡そ其の情死は如何なる季節に行はれるか。

□

『春浮氣、夏は陽氣に秋騒ぎ、冬は陰氣に暮はまごつき』。情死問題に就ても、復た季節が人間に與へる影響を明様に物語つてゐるのを見ることが能る。即ち一般自殺者と同樣、其の最高率を示してゐるのは、矢張り五六七の三ケ月であつて、それに次ぐは一二三の三ケ月といふ順序になつてゐる。が、いま其の季節と密接の關係を有する手段別とを組合せて觀ると

月別＼手段別	毒藥	投水	鐵道又ハ電車	短刀	出刃庖丁	小刀	獵銃	絞殺	刺刀	短銃	縊死	爆彈	計
1	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
2	二	一	一	二	｜	一	｜	一	一	｜	｜	｜	九
3	五	｜	一	三	｜	一	｜	｜	二	一	｜	｜	一三
4	｜	一	一	三	一	｜	｜	｜	｜	一	｜		七
5	一	一	四	二	一	一	｜	｜	一	｜	｜	｜	一一
6	七	二	二	三	｜	｜	一	｜	｜	一	一	一	一八
7	四	一〇	｜	四	｜	二	｜	四		｜	｜	｜	二四
8	一	四	二	｜	｜	｜	｜	｜	｜		｜	｜	七
9	一	二	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	三
10	一	二	一	二	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	六
11	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
12	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	一
計	二四	二三	一二	一六	二	五	一	五	四	三	一	一	一〇〇

其の最高は七月の廿四組であつて、それに次ぐは六月の十八組、三月の十三組、五月の十一組といふ割合を示してゐる。而して七月に行はれた情死の手段別は、投水が十組、毒藥、短刀絞殺が各々四組であつて、之れを觀ても如何に季節なるものが人心と密接なる關係を有するかが想像されるのである。或者は好きで自分が死んで行く其の斷末魔に當つて、殊更七月の季節に投水手段を採るが如きは聊か妙な話であると嗤ふものがあるけれどもそれは決して不思議とすべき事ではない。

彼の、二百餘ケ村の窮民を救ふべく、時の徳川將軍に直訴を爲したる、義民佐倉宗吾郎の一族が、共に刑場の露と消え行く其の矢先、宗吾郎四男源之介（九才）が、刑を執行する役人に向ひ『私の右の頸はお腫が出來てゐるから、どうぞ左の方から斬つて下さい。』と、哀願したといふ譚のある一事を見ても、決して怪しむに足らないのである。

さを要するに季節の上から見れば、情死は晩春と夏季との間に最も多く行はれ、盛夏の候に及むで漸く減少の傾向を示してゐるのである。

□

時刻の關係に就ては謂ふ迄もなく時は季節の小區分したものであるから無關係なる筈がなく、否却つて其の變化の急を告ぐるだけ、季節との關係以上に離るゝ事の能ない因緣を有つてゐるのである。

よく昔から云ひ傳へられてゐる『草木も眠る丑滿刻』といふ現代の午前二時前後の時刻にあつては、世上のあらゆるものが沈止と靜寂との深い眠りに落ちることは、軈て人心の上にも亦た相應の影響を與へ、漫ろ哀愁の感を誘發せしめねば歇まない。況して己が薄幸の身を卿ち果てた人々に取つては、ひとしほの哀れを感ずるに相違ないのである。從つて、情死も復た此の時刻に多かるべく誰しも想像する所であるが、事實は全く正反對であつて、左表に就て見るも

時刻	午前	午後	計
1	五	―	五
2	二	二	四
3	一一	二	一三
4	一二	一	一三
5	八	二	一〇
6	五	一	六
7	五	一	六
8	三	二	五
9	一	三	四
10	―	五	五
11	一	五	六
12	―	四	四
計	七二	二八	一〇〇

午前二時は僅かに[illegible]のである。これは古今を通じて大差なきが如く、[illegible]心中なるものゝ大半も、同樣拂曉であつたやうである。

□

時刻に次ぐに場所との關係であるが、媾妓は之れを別として大概屋外に於て行はるゝものが多い。心中大鑑に就て觀るも矢張り屋外に多い事が記されてゐる。たゞ茲に特記すべき事は、情死のみに限らず凡ての自殺者に取りて、最も死に易き場所があるかのやうに思惟せらる點である。これ或る場所には、死の暗示を與ふる何ものかがある爲めではなからうか。

□

次は年齡別であるが、謂ふ迄もなく男女ともに血氣盛りの者に多く、即ち男は十八才から卅才までの間、女は十六才から廿五才までの間が、最も危險性を帶びてゐるのである。稀れには人間の分別盛りと稱せらるゝ四十才以上の年齡に達した身にあり乍ら、自ら陷つた戀の穽から逃れ去る事が出來ずに、其の解決手段を情死によつた者もないではないが、多くは馬車馬的の戀の虜となつて、儚ない運命に呵される若い男女の獨占物なのである。今その統計を觀れば

年齢	男	女	計
15	｜	二	二
16	一	三	四
17	一	四	五
18	四	五	九
19	三	一〇	一三
20	四	七	一一
21	七	一二	一九
22	四	一二	一六
23	一一	九	二〇
24	六	一〇	一六
25	七	五	一二
26	一四	六	二〇
27	七	一	八
28	九	三	一二
29	四	一	五
30	三	一	四
31	一	｜	一
32	｜	｜	｜
33	二	｜	二
34	｜	一	一
35	一	一	二
36	四	｜	四
37	一	｜	一
38	｜	一	一
39	｜	一	一
40	一	一	二
41	｜	一	一
44	一	｜	一
57	一	｜	一
58	一	｜	一
計	一〇〇	一〇一	二〇一

即ち男の最高は廿六歳が十四人、廿三歳が十一人、廿八歳が九人といふ順序で、女は廿一、二歳が十二人、十九、廿四歳が十人、廿三歳が九人の順になつてゐるが、之れは別に説明の要もないことである。而して次に男女間の年齢の差は何うかといふに

年齢差	男年上	女年上
同	｜	｜
1	六	九
2	六	四
3	四	六
4	一三	｜
5	一〇	二
6	八	｜
7	七	二
8	二	｜
9	二	一
10	一	｜
11	四	｜
12	｜	｜
13	一	｜
14	｜	｜
15	｜	｜
16	三	｜
計	七六	二四

男年齢上七十六組に對し、女年齢上は約其の三分の一にも達しないのであつて、男年齢上では四歳差の十三組が最高であり、女同にあつては一才差の九組が最高になつてゐる。而して男年齢上にあつては同年より七才差までが相平均してゐるに反し、女同に於ては一才差から三才差までの間に限られてゐるかの觀があるのである。□

男女の職業別に就ては、之れを以つて全般に及ぼす譯には行かないが

商人	一五	教員	二	犯人	一
職工	一五	牛乳配達	二	集配人	一
番頭	八	日雇業	二	子爵	一
中學生	五	下男	二	驛夫	一
官吏	四	寺ノ小僧	一	船頭	一
農業	四	小使	一	車夫	一
養蚕家作	四	工學士	一	火夫	一
陸軍人	三	坑夫	一	電車運轉手	一
海軍人	二	病院書記	一	理髪業	一
巡査	二	左官	一	不明	一二
會社員	二	畫工	一		

女の部にあつては

娼妓	三七	酌婦	九	工女	四
藝妓	一七	下女	五	他人の妻	三
娘	九	前妻	四	内縁の妻	二

小間使	二	奉公女	一
情婦	二	女事務員	一
女教員	一	看護婦	一
不明	一		

右の表中男の部に於て商人及び職工階級が比較的多數を示してゐるのは、女のそれに對して觀るならば、容易に首肯し得らるゝのである。即ち女の部の中ば以上は藝娼妓だからである。更に此の類別を經緯にして觀んか、

	商人	職工	番頭	學生	資産作	官吏	農	陸軍人	海軍人	巡査	會社員	教員
娼妓	七	二	二	—	—	一	一	一	二	一	—	—
藝妓	二	—	五	—	二	—	—	一	—	一	—	一
下女	—	二	—	—	—	一	—	—	—	—	—	—
娘	—	一	—	二	一	一	一	—	—	—	—	—
女工	—	四	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
妻	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
他人妻	一	—	—	—	—	—	一	—	—	—	—	—
小間使	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
女教員	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一
奉公女	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
女事務員	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	—
看護婦	—	—	—	一	—	—	—	—	—	—	—	—
情婦	一	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
女學生	—	—	—	一	—	—	—	—	—	—	—	—
酌婦	一	二	—	—	—	一	一	—	—	—	—	—
前妻	二	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	—
計	一五	一五	八	五	四	四	四	三	一	二	三	二

	下男	牛乳配達	日雇	寺の小僧	小使	工學士	坑夫	病院書記	左官	畳工	犯人	集配人	子僧	驛夫	船頭	車夫	火夫	電車運轉手	理髪	不明	計
娼妓	一	一	一	—	—	一	—	一	一	—	一	一	—	一	一	一	一	—	一	五	三七
藝妓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	四	一七
下女	—	—	—	—	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	五
娘	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	—	一	九
女工	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	四
妻	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	二
他人妻	—	—	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	三
小間使	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	—	—	—	—	—	—	—	二
女教員	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一
奉公女	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一
女事務員	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一
看護婦	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一
情婦	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	二
女學生	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一
酌婦	—	一	—	一	—	—	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	九
前妻	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	四
不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一
計	二	二	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一二	一〇〇

斯くの如く僅か百組の情死中、その三分の一を娼妓によつて滿たさしめてゐるといふ事は、聊か奇怪の感があるけれども、現在行はれつゝある情死の大半は多く遊廓乃至は花柳の巷に於

ける出來事であつて、新聞紙の報道する處を觀るも容易に想像し得らるゝのである。

□

原因は之を大別して戀愛と道德と經濟の三つに歸する事が出來る。だから一概に其の決行原因を、晴れて夫婦になれぬが爲めの戀愛と道德との二つから起るものとのみ斷案する事は出來ないのである。試にその原因別を擧ぐれば、

借金の爲めに	五五
夫婦になれぬとて	一四
生計困難の爲めに	三
女から死んで吳れと賴まれて	二
情交後男の有妻なるを知りて	二
事業の失敗より	二
姙娠を儚みて	一
男が穢多なるを知りて	一
戀愛關係を他人に笑はれて	一
妻になる事を拒絕されて	一
情を通じたのを主人に發見されて	一
前の男の面當てに	一
多情なる爲めに	一
老年の情交に世間體を兼ね	二
世界體の惡きため	一
男より情死を迫りて	一
離婚せよと父兄に迫られて	一
他に女が嫁付きたる爲め	一
强姦して訴へらるゝと思ひ	一
情死した方が世間體のよき爲め	一
双方ともに配偶者のあるため	一
後妻を取られて癪に障り先妻に話合つて	一
情交を他人に發見されて	一
女に騙されて	一
離婚を申込まれて	一
不明	一

斯く經濟上から其の因を爲したものは借金の爲めに五十五組、生計困難の三組、事業の失敗の二組、合計六十組であつて、殘餘の四十組が愛戀と道德との二つから來てゐるのである。

却說その結末は何うかといふに、

	死亡	取止	自首	拘引	抱止メラレテ
男	七七	二〇	二	一	一
女	八三	一五	一	一	一

即ち男廿三人、女十七人合計四十人は未遂に終つたのであつた。尤も決行後數日若くば長日時の間に、劇毒藥を嚥下したものは心臟痲痺を起して死に到つたり、刄物類に依つて自傷した者の中には、出血多量の爲めに遂に仆れたものなどがあつて、實際の死亡者はこれ以上に達して居るのである。

□

斯く列擧し來つた統計の上に現はれた大體の假說は、

第一、情死は多く春夏の候に行はれ、殊に晩春より夏季に涉りて著しく、盛夏に及むで減少するの傾向を示してゐる。又、時刻は夜間、特に拂曉に多きを觀る。

第二、場所は娼妓に係はる以外のものは殆ど屋外に行はれ、殊に死容を盛んにせんとする上からか、又は死後の世評を思ふが爲めによるのか、比較的大山名川等或は其他常に人口に膾炙せる土地を選ぶの風がある。

第三、年齡は、其の殆ど全部が青年期に屬するものと見做しても過ちはない。

第四、職業は、男にあつては商工に次ぐに商店員學生等、殊に獨立の生計者に非ざる者が多い。從つて其の相手方たる女の部に於ても、娼妓と藝妓とが最も多數を示してゐる。これ現代に行はるゝ情死の多くは經濟問題が主因となつて居るからである。

第五、男女の體質は、共に薄弱にして、氣質も又神經質のものに多い。尤も女には往々にして意氣を負ひ、且つ多少の思慮ある者もあるが、それは極めて稀れである。

第六、發意者は多く女である。

第七、手段は、季節に密接の關係を有し、春夏は他力に據り、秋冬は自力によつてゐる。

第八、結果は不成功少く成功が多い。

依つて玆に情死なる現象の定義を得る。即ち『情死とは相愛する異性間の合意による自殺なり』といふことであるが、此の特殊なる社會現象は、古今を通じて殆ど同一轍にある事が想像されるのである。依つて今少しく其の主因に就き探めようと思ふ。

□

情死なる社會現象の最大由因なるものは、第一、家族制度の缺陷に據るものがある事は前にも述べた通りであるが、尙ほその現象を一層助成したるものを擧ぐれば、第二に彼の死を鴻毛よりも輕じた武士道の影響を擧げなければならぬ。

武士道の遠因は殉死にあつた事は、今更謂ふ迄もない事であるが、殉死が人皇十一代垂仁天皇の御代に之れを禁止されるに

及むで、鎌倉時代の武士氣質の上に切腹といふ形ちに依つて現はれ、其の風が又江戸時代になつて所謂町人の間に情死なる形の上に變遷再現するに至つたのである。然るに其の彼の『親子は一世、夫婦は二世』なる佛教思想の彌漫に依つて、一層助成せられたのであつた。『此の世で添えねば未來で添える。』てふ觀念は、慥に武士道氣質と共に情死氣分を煽つた事が首肯されるのである。

第三の助成原因は、卽ち江戸時代の花とも謳はれた彼の軟文學の勃興であつた。若しあれ程までに情死氣分を持囃さなかつたならば、或はあのやうに多くの情死者を出ださずともすむだのではからうか。當時軟文學の泰斗であつた、彼の近松巣林子の世話物を繙くも、隨所に情死氣分を唆るやうな字句のあるのを發見することが能きるのである。

卷頭に掲げた名文は左も右く、同じくその曾根崎心中の終りに『貴賤群集の回向の種　未來成佛疑ひなき戀の手本となりにけり』、とあるが如きは、眞向から大膽に情死氣分を挑發してゐるものと觀ることが能るし、又天の網島にも『成佛得脫の誓の網島心中と、目ごとに淚をかけにけり』とあり、心中宵庚申にも『死んだ〳〵と呼ばるゝ聲、吹傳へたる濱松風、枝をならさぬ君が代に、比ひ稀れなる死姿、語りて感ずる計りなり』など數へ上ぐれば際限がないが、近松以外のものにも矢張り同じやうな字句が見られるといふ事は、如何に當時の軟文學者なるものが未來の天地を想像して、之れを強いて美化せしめたかが窺はれるのである

□

殊に最も太甚しいのは、事實を其の根本から覆へして、情死に非ざるものを殊更に情死の型に嵌めることに力めた事であつた。例へば、彼のお半長右衞門の如き、彼等はもともと情死する意思で斷落ちしたのではなかつた。然るに運惡く其の途中強盜の爲めに財物を奪はれ、且つ其の上慘殺せられて共に河中に投込まれたのであつた。又、お染久松の如きも、小僧の久松がお染を守してゐる際、過つて其の子を河中に落し遂に死に至らしめたのを、主人に對して申譯がないと、自分も其場で投水自殺したのが事實に近いにも拘はらず、之れを虛構し粉飾を施して、當時の思潮に迎合せんとしたるが如きは、看過する事の出來ない軟文學の餘弊であつた。而して斯る弊は今も尙ほ幾多の方面に殘存されてゐることは、我々の日常見聞しつゝある所である。

□

第四の助成原因は遊廓そのものであつた。階級制度の殘存してゐた江戸時代に於て、すべての來客を平等に取扱つたのは、

謂ふ迄もなく此の遊廓であつた。從つて常に『素町人』なる言葉に依つて呵され勝ちな人達に取つては、遊廓はせめてもの階級意識の反感を慰むべき唯一の慰安所であるが爲め、遂に此の風潮は、階級制度の確立と共に益々瀰漫し、遊蕩氣分を漲らしめたかの觀があつた。而して其の當然の結果は、不義理の爲めに身動ならぬ多くの遊冶郎を出したのであつた。而して偶々其情に引かされた娼妓が、當時の所謂意氣と伊達なるものに依つて助成さるゝが如きことあると、其處には『お前許りは死なしやしない』といふ事情の下に、多くの情死者を出だしたのも敢へて不思議ではなかつたのである。

然るに當時の爲政者は、その根元を究める事なくして、徒らに苛酷なる制裁手段を採つたが爲め、却つて毒皿主義の自暴自棄の遊冶郎が頻出するに至り、惡政たる譏りを免かるゝ事が能ない失敗の結果を觀たのであつた。依つて手を代え品を替して遂には、當時旺に唄はれた豐後節の如きものですら、淫猥の所業を助成し且つ情死の種を撒くものとして、之を元文四年の十月に至り絶對に其の放歌を禁じたり、其他新内節又は投節の如きにまで、その禁止の範圍を擴張して當時の趨勢を堰止めようとしたけれども、結果は矢張り何うする事も能なかつたの一言に了つた。依つて寛保に至り『男女申合せ相果候者の事』といふ一箇條を御定書に加へ、不義にて相對死したものには葬式を出させないことにした。相對死といふ文字は聊か變だといふ議論も當時あつたさうであるが、心中といふ言葉を不義者に用ひることは餘りに立派過ぎるといふ意味から、殊更相對死といふ文字を使つたといふ事であるが、又一面未遂者に對しても

情死未遂者は捕縛ノマヽ日本橋ニ三日間晒シテ身分ヲ穢多ニ落シ、乞食頭ノ二太夫ニ、ソノ顛末ヲ讀ミ賣リニ歌ニ作ラセ江戸市中ヲ賣リ歩カセ。云々

といふが如き苛酷な防止策を採つたけれども、矢張り此の現象をして社會から全く葬去ることが出來なかつたのであつた。これ何を物語つてゐるか。謂ふ迄もなく、當時に於ける爲政者の間に家族制度の男女問題に及ぼす影響を等閑に附したからであつたと思ふ。

若し逸早く此點に着眼し、間接に家族制度の上に現はるゝ幾多の現象中、情死を醸すべきものがある場合は之れを改善するに力める一面、直接に情死の防止策を講じたならば、必ずあれ程に多くの犠牲者を出ださずにすむだに相違なかつたと信じて疑はないのである。

□

要するに情死は、戀と金と義理との葛藤から生れる一つの悲劇であつて、その三つのものが共に其の步調を揃へる時は、其處には情死なる現象を生むべき何ものもないのである。從つて戀は曲物でもなければ又魔物でもなく、たゞそれに絆はる經濟事

情と社會道德とが、その戀をして圓滿に完結せしめない爲に外ならないのに、社會は戀愛を極度に危險視し、一種の罪惡視して其の間の事情に就て念ふ所がないのは洵に遺憾に堪へない事なのである。殊に家族制度の至上主義である所の、所謂家柄なるものが、如何に情死の誘因となつてるかゞ判る。彼の歐米各國の如き非家族制度の社會からは情死の生れやう筈がないのも即ちそれが爲めである。故に此の現象を社會から消滅せしむるには、第一家族制度の改善、青年男女の戀愛に就ては、本人の意思を第一として之を處置する事に努むる事、第二、男女の交際機關を設けること、第三、風紀を嚴肅ならしむるが爲めに、遊蕩氣分を誘發若くは助成せしむる場所及びその業者を改善せしむる事など數ふれば枚擧に遑ないけれども、左の情死未遂者の述懷は以つて本文の結論となす事が能ると思ふのである。

人間ですもの死なずにすむ事なら、誰がすき好んで情死などをするものですか。それといふのも、みんな私達の遣方が惡かつた爲めには相違ありませんが、又一面、周圍の人達の態度にも少からず彼うした手段を採るに餘儀なからしめた點があつたのです。斯ういふと大變自己辯護に聞えますが、實際、當時の周圍の人達の私達に對した態度が、若し決行後のやうなものであつたら、僅に私達は彼うした物笑ひの種を撒くやうなことはせなかつたのである。人心といふものは妙なもので、私達が情死をしたからこそ初めて驚き慄いて周章しそれ程までならば何故さう曰はなかつたか。きつとお前の考へ通りにしてやつたものを、隨分早まつたことをしたものだとさも寛大ぶつた分疏を云ふものゝ、其の實それ以前にあつては、どう頼んでも願つても、一も二もなく頭から否定して了ひ、命を懸けての願ひをも更に取合はなかつたのに。

けれども、さうした經緯から情死して未遂となり、斯うして命が助かつて見ると、何故あんな馬鹿氣た事をしたものかと、今更自分の淺墓な考へが悔ゆられて仕方がないのです。尤も當時の心持は暑いから涼む、眠いから眠るといふ時の氣分と少しも變りがなく、全く死ぬといふことを怖れなかつたからでした。それ所か、何うせ一度は死ぬ身だから、生き長へて將來相手方の心持ちが他の者に傾いたり、又は他の者に奪はれたりするやうな事があつてはといふ切ない情に引されて、遂ボーとなつて了つたのであつた。

さうして、斯うなつて見るとどうでせう一緒になれぬ位ならと迄に思ひを集中した當の相手には、もう少しも未練がないのですから變なものです。尤も死際のあの醜い態が、未に目にちらつくためもありませうが、ドン底まで突きつめて了つたその戀の情緒が再び湧出すべく餘りに其の力が亦た薄弱なためかとも思つて居ります。それもその際私の方から死なふといふ程であつたら、幾分其の間の成行きの上にも多少違つた所もあつたでせうが、女から死にませうと云はれての上からでは、却つて一種の腹立しい考へが起つて來るのです。」と。

（一一、八、一三）

社會不安・生活苦を反映する自殺・家出其他

革命期の必然的現象

小川未明

生活に對する信條を失つた時には、恐らく死より、選ぶ途はなからうと思はれます。ある人々にとつては、經濟的の不如意から、直に死に行く者があり、また、ある人々にとつては、思想上の幻滅から、同じく死に趣く者があるのは事實です。

貧乏に慣れた者には、どんな窮地に立入つても、尚ほ、生を樂しむことを得る者があるけれど、貧乏な生活に慣れず、曾てかゝる貧しい境遇を想像だもしなかつた者が、若しもかうした運命に支配された時は、絶望の餘り死を選ぶことも不思議とされないのであります。

人間の生活を半ば、虚榮に依つて支へられてゐるといつてもいゝ。乞食をしても、尚ほ生きてゐたいといふ人は、即ち其の考へに徹底した人でなければ、能くしないことで、大抵の人は、明日の生活に對して全く暗黑を感じた時、先づ念頭を去來するものは、死の影であらうと思はれます。

死といふことを考へない人といふものは少ない。中には、每日、必ず一度は、何かにつけて死といふ觀念を抱く者があらうと想像されます。しかも、自殺によつて、苦痛を脫れるといふことは、恐らく人間のみに授けられた避難術ではなからうか。

人間が、最後に、死を自から選ぶといふことは、ある時は、この利器を有功に使用したものと解釋されるのであります。

いつの時代にあつても、家出や、情死や、自殺はあつたにちがひない。しかし、今日のやうに多くはなかつたことは事實として承認され得る。

實に、現在は、道德末期であり、一面から見れば、生活の轉

換期である。當然、滅びなければならぬ階級は、經濟的に、思想的に、この悲劇に遭遇することを何うすることもできない。

若い男と、もしくは、若い美しい女といつしよに家出をして、何もかも鼻に付く、單調な無味な生活から解放されようと希ふ者の心理は、想像するに難くはないのです。しかし何處に、行つたら、そんな清新な、自由な愛欲の世界があらうか。人間の棲むところには、等しく倦怠と憂鬱とが瀰蔓してゐる。

無智な者は、ただ場處を換へ、品を換へてもう一度それを繰返すに過ぎない。聰明な者は、自から造つた歡樂の全く醒め切らない裡に、自己を陶醉して死に至ることをはかる相違があるばかりです。

私は、最近、思想家を以て目された人々が、再三情死を遂げたのを、必ずしもニヒリストたる其の人達が、死の恐怖を戀愛の形によつて、まぎらさんとしたとばかり解されないものがあると思ひます。

其の理想に對して眞實なればなる程、また主義に對して、殉ぜんとする志が深かければ深い程、當然、其人には、禁欲が伴ふことを察せなければならない。私は、必ずしもこの事を虛僞の生活とばかりは考へない。身自ら高しとする念があつてこそ理想家でありまた主義を有する人といふことができる。さらばその人達は、先頭に立つに當つて、普通人の如く、欲情を恣まにし、また本能の趣くまゝに生活することの許されないものがあると考へられます。

かうした人達が若しその理想に對して、もしくは主義に對して、或は、弛緩し、或は、幻滅した場合には、反動的に今迄、禁じてゐた欲望を一時に滿たさうとするにちがひない。その時は、自己犧牲の精神をも失つた時です。そして、反對に、本能生活を讃美した時です。デカダンの心理といへば、言へるかも知れない。

しかし、この歡樂は、決して健全なものではない。死の前の華かな舞踏たるに過ぎない。これを社會に對する反抗とも、自身に對する反抗とも、見れば見られるのであります。

革命は、生活の位置を轉倒するものです。まさに滅びんとする階級が、絕望の豫覺から刹那の快樂に生命を擲つのをも怪しまない。既成の道德、信仰、生活、そして、一切の虛僞の破壞は、新社會の建設の第一步であるからであります。

由來、人生の門出は戀愛からはじまる。これによつて、生活を歡喜し、働くことに勇氣付けられる。男子も女子も戀を得ることによつて、戰ふ精神に燃えるのを常とします。

しかるに、現時は、往々逆行する戀を得て死の旅に趣くから

です。戀は、同じ薄明の裡になされても、一は黄昏の薄明であり、他は黎明の光りの中です。

新社會建設の任を負ふ年若い人達は、議論は別として、やはり彼等の健全な、幸福な戀によつて勇氣付けられるでせう。そして、彼等は戰ひ、耕やし、生産し、其の疲れを限りなき歡喜の抱擁によつて慰められるでありませう。

健全なる戀も、生活も、たゞ力強く、疑はずに歩るく者のみによつてなされるのです。人生に疲勞し、懷疑し、頓挫した人々の戀は、また同じく、これを健全と見做すことができない。まさに、死の毒盃に等しいからです。

生起するも、死滅するも、人間は、兩性の關係によつて、慌しく、其の行程を急ぐのは不思議と言なはければならない。誰でも、生活に對する信條を失つた時には、前に言つた如く、恐らく、死を選ぶより他に途はなからうと思はれます。かうして、ブルジョア、及びブルジョア意識に生きる人々は、轉換期の必然的な嵐に吹き捲くられて、理想の幻滅から、自から崩落に向つて馳りつゝあるのです。

この後に、やがて來るべき健全な階級の足音がすでに聞えるやうな氣がします。彼等は決して目的について見誤らないだらう。そして疑はずに確固たる信念と光輝ある希望とを抱いて進むだらう。

自殺、家出、情死、かうしたブルジョア末期の現象は、益々色濃くならんとする社會生活不安の裡から、秋夜に飛散する流星の如く續出すると思はれのであります。――二三、八――

虛榮心も亦自殺の原因

高島米峰

『自ら、その生命を奪ふは、人間に附與せられたる、人道を破壞するものである。人は、その最後まで、毅然として自己を維持し、あらゆる場合に、生命を保有すべし。』と。これは、カントの言葉だ。カントの言葉なるが故に、權威があると思つては

いけない。僕が言つたつて、矢つ張りかういふ結論に到着するより外に、仕方がないのだ。

天候の工合で、人を殺したくなることさへあるさうだから、氣が狂つたり、自殺したりするのも、天氣模樣に關係があるといふことは、敢て珍らしい發見でもあるまい。統計によると、自殺率は、一月から六月まで次第に高く、七月から十二月まで次第に低いといふのだが、今年なんぞは どうも、さうでないらしいやうな氣もする。そこに、天候以外、社會苦とか人間苦とかいふものを、加算する必要があるのかも知れない。

自殺の原因として、普通に數へられるのは、精神異狀、生活難、痴情、病苦、厭世、位なものらしいが、これ等を引つくるめて、社會苦、人間苦の二つに撰するなどは、流石に、聰明なやり方だ。一體、自殺の原因に、精神異狀や厭世を、痴情や病苦と同格に取扱はうといふのからして、どうもチト頭が惡い。此の世を厭離したいからこそ、自殺もしやうし、此の世を欣求して居る程のものが、何で自殺といふのやうな、馬鹿氣たことなんかを仕出かさうや。即ち、厭世は、自殺者の總てに共通の原因と見ることが出來るし、又、苟も、自殺でもしやうといふもの、その平常、如何に立派な人格者であつたとしても、如何に不動の精神の持主であつたとても、自殺の決心は、即ちその刹那に於ける、精神異狀の結果と言はなければならない。從つて、精神異狀といふことも、亦、總ての自殺者に、共通の原因と言ふことが出來るではないか、しかし、實際、精神病者として、病院に收容せられて居たものが、自殺したことも少くなく、又、哲學なんどの生嚙りから、人世不可解などゝ、獨りできめて、自殺したわからずやもあつたのだから、月並みの觀方も、あながち、理由の無い譯ではない。

生活難のために、自殺するものがあるとすれば、これは一番同情してやりたい。貧乏世帶に子澤山、かてゝ加へて、病人の絶間が無いなどゝ來ては、全く以てやりきれない。それも、社會全體が、大體、さういふ傾向を取つて進んでゝも居るといふならば格別、先祖が、人殺しをした勳功に基く恩賞とか、親爺・が、不正なことをして儲けた遺産とか、いふものゝ中に産れて、モヤシのやうに育てられた遊食人種が、有るに任せての贅澤三昧、食ふにも着るにも住むにも飽いて、妻君の外の女に子を産ませたり、女優や藝者の尻を追ひ廻はしたりするやうなことを見せつけられては、今日此頃の炎天下、百度に近い暑熱と戰ひつゝ、汗と油とで、身も心もゲツソリする程働いて、それで一家の糊口さへ六ケしい境遇の人々が、彼と此との對照上、癪にも觸らうし、厭にもならう。だが、しかし、そこだ。そこに一

つの道を見出すのが、人間に生れて來た所詮ではないか。癪に觸るからと言つては死に、厭になつたからと言つては死んで居たのでは、命が幾つあつても足りない譯だ。一人苦惱を脱せむがために、多くの家族を、より以上の悲境に陷るよりは、一人飽くまで惡鬪して、將來の運命を開拓するのが、遙に、意義ある生き方といふものではなからうか。

失戀に死ぬものがある。それも、あんまり氣が早過ぎる。戀を失つたら、何か他のものを拾つてはどうだ。スペンサーは、ジョウジ、エリオットとの戀を失つて、綜合哲學を穫た。世界は廣い、藝術の世界、學問の世界、宗教の世界、政治の世界、何處へ住むのも我等の勝手だ。戀愛の世界以外に、世界なしと考へるのは、日本以外に、國が無いと思ふの愚で、その人生觀世界觀の、淺薄にして狹隘なる、到底、度すべからざる徒輩だ。又、未來の一蓮託生を憧憬して、心中するものもあるが、どうせ未來で、夫婦となれるにきまつて居るものなら、せいぜい五十年か六十年位の短い浮世を、敢て急いで逃げ出すにも及ぶまい。働けるだけ働いてから、ゆつくり出かけてはどんなものだ。

自分で死ぬといふことは、勿論馬鹿げたことだ。しかし、又、相當に、勇氣を要することだ。それだけの勇氣を、他の方面に轉換したら、何とかならないものだらうか。自分の生命が、自分の手で作られるものならば、勝手に死んでも差支はあるまい。しかし、自分の力で、自分の生命を作り得ない間は、自分勝手に、自分の生命を奪ふといふことは、僭越であり、冒瀆である。由來、日本人は、昔から自殺を讃美する癖がある。もとより、死屍を鞭打つの殘忍を敢てするにも及ばないが、しかし、どうせ讃美しやうといふのなら、死ぬにも死なれずに、苦しく生きて居るものを、讃美してやつてはどうだ。と言ふのは、生は人生の總てゞあつて、吾等は、眞理を求めるがためにも、善徳を植ゑるがためにも、佛の教誡を奉行するがためにも、生きられるだけは、生きなければならないからである。

死に依つて、責任を廻避しやうといふのも愚だ、哲學を以て自分の死を裝飾しやうといふのも愚だ、心にもない虛僞の遺書を書いて、自分の死を美しいものにしやうとするのも愚だ、自分の履歷書から寫眞までを添へて、それを新聞の夕刊に間に合ふやうに投函して、投身するなどに至つては、縱令、その女は助かつても、見物人の方が助からない。日露戰爭の時『中隊長殿、新聞に出して下さい』と叫んで、死んだ兵卒があつたといふ。かうなると、人間の虛榮心といふものは、實に、徹底したものだといふことを看取し得て、これなども、亦、自殺の原因の

一つに加へることを、忘れてはなるまい。

畢竟、僕のかうした主張には、カントも、無論、異存は無い筈。（大正、一二、八。一〇）

世界苦的自殺其他

―覺え書き―

本間久雄

○

現代の社會不安や生活苦が、どこから生じたかといふ問題は、愼重に考究さるべき社會問題ですから、自ら別な機會にゆづらなければなりません。たゞ社會不安や生活苦が、いかに現代のすべての階級を蔽ふてゐる時代病であるかといふことは、何等の說明なしに誰人にも是認さるべき現象でありませう。

私は現代の日本は、丁度所謂ファン・ド・シエクルの時代だと思ひます。無論年代的に云ふと、ファン・ド・シエクルは十九世紀末の社會相ですから、二十世紀の初期には當嵌まらないやうですが、思想的に感情的には日本はたしかにヨオロッパの十九世紀末のそれに似てゐると思ひます。

そのわけは？と申しますと、舊信仰、舊道德、舊文化、舊習慣、その他舊い權威の一切が凋落し、乃至凋落しかけてゐるにかゝはらず、新しい權威がまだ明確に樹立されないために、すべてに心の目標を失ひ、歸趨を失つて、よろめいてゐる有樣が、丁度ヨオロッパのファシ・ド・シエクルといふ世紀末の狀態に似てゐるからであります。

かう云つたならば、そんなことはない、日本でも夙にさういふ世紀末の時代を通り越してゐるといふ人があるかも知れません。しかし私はさうは思ひません。

○

ファン・ド・シエクルの最も大きな特徵は生活倦怠、卽ちアン

ニュイの氣分です。生活の目標を失つて歸趨するところを知らなくなつた人の、どうともしようのない、一身を持て餘した氣分です。かの古鐘の鳴りひびく音を聞いて、何年經つても、少しも變らないその忠實な音と比べて、自分の心が憂欝に閉されて、哀れなひびきを立てるといふことを悲んだボードレールはいふまでもなく、ロセテにしてもベルレーヌにしても、近代の詩文人で恐らくこのアンニュイの氣分を味はなかつた人はありますまい。又さういふ氣分の持主を主人公とした近代の小說や戲曲にも、私たちは數多く出あひます。生活倦怠の氣分の充溢――そこにたしかに世紀末の世相の一つの特色があります。

○

この世紀末の生活倦怠の氣分を、文明史家は「世界苦」と名づけてゐます。ツルゲーネフの小說などによく出て來るロシヤ語のトスカといふ言葉が、この世界苦といふ言葉の起源だといふことです。

イギリスのデイロンといふ人は、この世界苦の心境を說いて、「一度この心境に入ると、全く暗い索漠たる心持ちになり、氣が腐れ、幻が消え、およそ實際生活に對する潑剌たる感覺は一切跡を絕つ。その結果が發狂に終るか、深い〳〵絕望の底に沈むか、何れにしてもこの二つの外には出ない」と云つてゐますが、世界苦的氣分は、かういふ恐怖すべき氣分です。吾々の周圍にはこの恐るべき世界苦的氣分が充ちてゐます。知識階級者の自殺の多くは實にこの氣分の結果に外ならないであります。

○

例へば有島武郎氏の自殺です。世間では單なる戀愛死と解釋してゐますが、形式こそ戀愛死でも、その實はやはり、幻滅主義者として、生活倦怠の氣分を強く感じてゐた現代人としての氏の通らざるを得なかつた一種の自殺だと私は思つてゐます。

有島氏が始め、相手の婦人から、死を迫られたときに、人間には未練がないが大自然には未練がある、秋の自然を見てから死にたいと云つたといふことですが、さういふところに氏の心境は最もよく現れてゐるではありませんか。恐らくその場合、不用意に發せられたであらうところの人間に未練がないといふ言葉ほど、氏の死が何を意味するかを雄辯に語つてゐるものはありますまい。

ですから、有島氏の死を、單なる情死として、既成道德の立場から、とかくの批評を下すのは、餘りに、人間といふものに對して同情がなく、洞察のないやり方です。氏の死は、決して單なる情死ではありません。それはむしろ世界苦的な悼ましい一種の自殺です。

○世界苦的自殺は、どちらかと云へば知識階級者や、時としてはブルジョア階級者によく見受ける自殺です。無產階級者の自殺には、――無論、世界苦的自殺もありませうが――さういふ思想上氣分上の原因といふよりも、直接の生活問題や性的の問題が大部分の原因となつて居りませう。生活上、性欲上、不自然な不合理な壓迫の結果、又不自然に、不合理に、吾れと吾が身を殺すといふことになるのでありませう。これも亦、前の世界苦自殺と同じく悼ましい人生の事實であります。

○

しかし、生活肯定(アファメーション・オブ・ライフ)の新しい宗教なり、道德なりから云ふと、自殺は要するに人生の消極的一面であつて、そこにいかやうな哲學的又は詩的な意味を附するにしても、つひに拒否すべきものであること云ふまでもありません。

殊に生活苦の生むもろ〲の自殺は、その原因となる生活苦を取除くことによつて幾分緩和されるわけですから、新しい社會改造家は、このために或ひは經濟的に、或ひは思想的に、それ〲の分野において、それ〲の力を致して居ります。

思想的にこれらの改造運動を試みてゐる人たちには生活美化を說いてゐるウイリアム・モリスや、勞働の快樂化を說いてゐるカアペンタアや、再新力としての快樂の生活化を說いてゐるエレン・ケイなどがあります。これらの人々の思想が、わが國の社會苦、生活苦――もつとひろく云つて世紀末的世界苦の現狀に取つて、どういふ意味を持つてゐるか。

さういふ問題は、いづれ稿を改めて書いて見たいと思ひます。

社會が個人を壓迫し過ぎる

上司小劍

人類の生活が、あまりに偏して進歩して來た爲めに、國家とか社會とかの利益のためと言へば、個人の幸福なんか、一も二も

なく揉み潰し、踏み砕いてしまふ。こゝに『偏して』といふ言葉をつかつたのは、なほ當らないが、適當の文字がないから、姑らく『偏して』としておく。偖それがどう偏したか。つまり社會的共同的に遍したのである。人類の現在の社會的生活組識は、どう贔負目に見たとて、蟻や蜂のそれには及ばない。彼等は個性を揉み潰し踏み砕くことなくして、社會的共同生活を樂んでゐる。ところが、人類のそれは多くの個人を犧牲にしてなほ足らず、醜い紛爭を繼續して、纔かに公安とかいふものを維持してゐる。

この犧牲に供せらるゝ個人なるものは災難で、或る者は『鷄犬の聲相聞ゆれども民老死に至るまで相往來せず』の原始的理想郷を慕ひ、或る者はまた反抗せんが爲めに反抗して、多數を相手の惡戰苦鬪に、一生の半分を牢獄に送る。この二つの消極的或は積極的の生活法を心得ないものは、自ら生存を拒絶して、元素に復歸してしまふ。自殺或は自殺を目標としての家出人は、つまりそれである。

物質文明の方面を眺めても、それが皆社會的に遍して發達してゐるのを見落すことは出來ない。汽車に乘つても、電車に乘つても、社會が個人を壓迫する――多數が少數を蹂躙する――縮圖の見られないことはない。自分は早く動きたいと思つても、多數人の爲めに設けた時刻が來なければ、一寸一尺も前進することは出來ない。自分が幾ら前進を急いでも、多數人の爲めに、自分には必要のないところへ屢々停車する。何んと不自由なものではないか。

二十世紀の文明は、幾らかこの點に、無意識ながら氣がついたものと見え、社會的に遍した交通機關の不自由を補ふために、自動車や飛行機の發達となつたが、前者は費用を要することの多きため、徒らに階級的反感を挑發するの具となり、後者はまた交通機關としての役目を十分に果たすまでの進歩を見せてゐない。しかし私は將來に於いてこれ等の個人的交通機關が、汽車電車の如き社會的交通機關を壓倒して、こゝに社會から個人を幾分でも解放することゝ思ふ。それに科學の發達が若し今日の如く人間或は乘物を動かさずに、道路――大地――を動かすやうになるならば、動く必要のある時人間は、大地のエスカレーター（今日三越呉服店に見るが如きものを土の上に、地球の陸地全面に渉つて縱橫に設く）に足をかければ、個人個人が目的のところへ、多數人の便利と何等の相衝突することなく、自由に行かれるやうになり、これに飛行機の發達が加はつて、今日の如く發車を待つ爲めに個人が時間を空費し或は他人の乘降の爲めに、必要なき停車を忍ばなければならぬ社會的

乗り物――社會が個人の便利と自由とを採み潰し蹈み碎いた――鐵道列車の如きものは全廢さるゝであらう。

以上は專ら交通機關に就いて、現在の科學の發達を基礎として想像しただけの話で、この外にまたどんな大きな意外な發明が、人類の生活を根本的にひつくりかへすかも知れない。それは丁度今から百年前に、今日の自動車や飛行機のことを想像して、將來の交通を云々したものがあつたとすれば、必ずや世の中から、痴人の夢と哂はれたであらうと思はるゝと同樣、私は今から百年の後科學の進步が今の人の到底想像だもすることの出來ないものを生むと確信して、多くの人に哂はるゝのを厭はない。

兎に角交通機關が、社會的に適した汽車電車から、個人的に發達した自動車飛行機に進むやうに、物質的に或は精神的に、他の總べてのものも、矢張り社會的から個人的に進んで、個人を社會の壓迫から救ひ出さなければならないと思ふ。さうしてそれまでの間には、まだ〳〵多くの個人が社會の壓迫に苦まなければならないと思ふ。家出、自殺は年々に增加するであらう。

道德と言ひ、宗教と言ひ、それが崇拜者信仰者から幾ら神聖的に宣傳されたとても、要するに、多數人が都合よく生活しようとする其の時々の方便に過ぎない。(法律に就いては姑らく沈默する)詰まり鐵道規則のやうなもので、それを守らなければ乘せないといふのだから仕方がない。飛び下りて逃げるか死ぬか或は多數の壓迫を忍んで、じつと乘車してゐるか。個人的交通機關が空中にも陸上にも十分の發達を遂げるまでは、どうもならないのである。

今日の家出、自殺といふが如き、非常なる人間の行動は、いづれも多數の壓迫に堪へかねた少數人或は個人の逃避である。戰つても戰つても戰ひ切れないで逃げ出すか、或は戰はないで走るか、この二つである。先づ家庭の束縛を脫し、次いでは社會の壓迫から遁れようとするのである。これを稱して、舊道德の犧牲といふが、別段改まつて、『舊』の字を附けるにも及ばない。道德といふものは大抵保守的な多數人によつて守らるゝもので、新らしい人から觀れば、いつの時代にも舊いものである。新人の運動は必ず因襲道德にブツカルものと見ていゝ。

善惡とは畢竟利害の別名である。多數人の利益にして少數人の不利益となるものが善で、少數人或は個人の利益にして、多數人の不利益となるものが惡である。(少數人の利益をば多數人の利益の如くゴマカシて、それが善となり、多數人の利益が少數人の利益の如くゴマカされて、それが惡となる場合もある)。

人類の生活が餘りに社會的に偏した爲め、個人の行動が社會に影響し過ぎる。こゝに於てか、それ〳〵型の異つた個人をば、一律一樣の鑄型に押し込んで、萬人共通の道德や法律をもつて、これに當て篏めなければならなくなつた。多くの人をば一つの車に載せて運ばなければならなくなつたのと同樣だ。九文半の足にも十一文甲高の足にも或は十文三分の足にも、一樣に十文の靴を穿かして、歩ませなければならなくなつた。少し歩いてゐるうちに、足の痛みを忍びかね、靴を脱いで投げ付けるものが、叛逆者であつて、靴を脱ぐべく、跛足曳き〳〵逃げ出すものが逃避者である。家出人である。自殺者である。

人類の生活は、要するに、「利益」の一點に歸着する。さう言つてしまつては、實も蓋もないから、いろ〳〵の言葉で粉飾するが、性慾食慾名譽慾……いづれにしても皆利益だ。昔し孟子は戰國の王に向つて、『王何んぞ必ずしも利を言はん、たゞ仁義あるのみ』と言つて威張つたけれど、煎じ詰めると、仁義もまた利益の別名だから可笑しい。自分の利益でなければ他人の利益、他人の利益でなければ、社會國家の利益、それを離れて何ものもない。

個人の利益が社會の利益と、いかなる場合にも衝突しないやうな、世の中を造ること、それより外かに、家出人や自殺者をなくする方法はない。それにはどうしても社會的に偏した文明を、個人的に引き戻すにある。天は同じ大きさの身體を人に與へてゐない。然るに地上の權威は、萬人を一樣に律しやうとする。萬人を一樣に律しやうとするために、權威なるものが生じたのかも知れぬ。天體の星の一つ〳〵が、各々自由な行動を續けながら、天體といふ社會の平和をよく保つて行く。人類の社會もまたあんな風の正しい自由なものにならなければならぬ。しかし、考へてみると、それには個人をヨリよくすることよりほかに途がないかも知れない。道德や法律の必要な間は、個人〳〵に一つ宛別々な法律や道德を作つて與へるといふことも出來まいから。……(八月十二日、日光山中にて)

時論

政治階級の遊戯としての貴族院改造

長谷川如是閑

此の頃貴族院の一部の間に貴族院改造説が唱へられてゐる。尤もそれは政局が生み出した問題ではなく、貴族院自らの中にある知識階級的分子の思ひ着きなので、實際問題としては各方面にさう強い反響を與へてゐるとも思はれない。然しもともと日本の議院制度はイギリスの樣に自然の發達の結果ではなく、外國の例を模倣したに過ぎないから、その組織に必ずしも傳統的の力はなく、何時でも變改の可能性を有つ。そしてその改造の要求も政局の實際に因るよりは、知識階級的作爲に因る方が多い。元來日本の法制は皆、たとへそれが日本の生活に要求されて出來たものでも、制度組織としては外國の模倣なので、生活の上の傳統からそれを固執するやうなことはない。民法の如きでさへ、ナポレオン法典の模倣から忽ちドイツ法の模倣へと轉じるに少しも差支へなかつた。さうしてそれは全く外國の大勢に倣つたに過ぎないのであつた。議會制度もドイツ制度を採つたのは、當時の支配階級の要求であつただけで、人民の生活が産んだ、動かすべからざる形式ではなかつた。從つて今日でも恐らくそれは支配階級の氣紛れによつて何うにでも變化し得ること、民法のそれと同じであらう。

元來制度組織が右のやうな模倣的性質を有つて居る間は、その變更といふことは決して大した問題ではない。イギリスのやうに、凡ての制度組織が生活の傳統そのものの所産である場合には、鳥渡でもそれを變へることを殆ど革命的と考へる。生活が變らない以上は、制度組織も變らないといふのがイギリスの保守主義である、又制度組織は元來そんな風に保守的である筈のものだが、日本のやうに、制度組織が古代から外國文化の借物である國に於いては、その變化は日常のことであつて、法律制度は所謂朝令暮改も珍しくない。議院の組織の如きは、本來

政治生活の傳統と離るべからざるものであるから、何處の國でもその變更を極めて嚴重に制限してゐるのであつて、日本もそれをまねて、法令の上では容易に變更を許さないことにしてゐるが、元來日本の制度は生活と沒交涉な起原を有つてゐるので實際は何う變つても差支へはない。これが即ち生活又は政局の實際に關係せずに、法律制度のいろいろな改造が、知識階級的氣紛れによつて唱へられ、行はれてゐる所以である。

貴族院の改造論も決して珍らしい問題ではない。殆ど慢性的に早くから唱へられてゐたのである。そして何時もそれは貴族院內の知識階級によつて唱へられたのである。制度そのものを合理的に檢討すればいろいろな不合理がある。生活の傳統が產んだ制度ほどさうである。日本の制度は外國の例などを理知的に纏めたもので、比較的論理は合つてゐる筈であるが、然し理論として扱へばいくらでも缺陷が出て來る。つまりこの知識階級的理論の爲めに、日本の貴族院改造說が屢々起つたのである。

而かも知識階級的理論ほど、理論が完全してゐて實現の力の乏しいものはない。殊に常に保守的に又傳統的に傾く制度は、知識階級の氣紛れによつて動かされることは滅多にない。從つて理論上よりよき案が決して實現されない。今度の改革案も恐らくその一例に止まるであらう。

このことは知識階級的理想家に取つては極めて不滿な事實である。けれども元來制度といふものは、その良否に拘らず、容易に形を改めないところに制度としての意義がある。夏は着物を着るよりも裸體の方が便利であるが、一旦衣服が制度となると、如何に暑くとも裸にならないことが即ち制度としての特徵である。これは制度がよりよき進化を排斥することのやうであるが、實際はさうではないのであつて、理論的な考察がよりよいと考へたことも、實は生活に取つては何うでもよい場合が多いのである。「あばらぼね」を「肋骨」と稱ぶ方が理論的にいいやうであるが、現實の生活に於ては、實はそんなことはどつちでもよいのである。知識階級的理想は動もすると「あばらぼね」を「肋骨」と稱ぶことによつてよくなつたと考へるのである。現に醫者はさう考へて骸骨をさかさにして骨骸と稱んで、よりよきことを爲てゐると考へてゐるのである。議院制度でも、今日のそれに不合理があることは云ふまでもない。然し、知識階級的氣紛れでそれを屢々變へるよりも、惡い制度のまま續ける方がいい。何となれば知的氣紛れが缺陷を有することは、多年行つてゐる制度が缺陷を有すると同じであるのだから、同じものならば今のままで差支へないのである。社會が制度に於いて知的氣紛れによる變更に對し常に保守的に傾くのは、この意味

に於いては正しいのである。

然らば日本の貴族院は政局の實際に當つて變化を蒙る以外には、改革の實現は難しいかと云ふに、それは分らない。フランス法からドイツ法に一躍すると同じ心理で　どんな風に變化するか分らぬ。けれども如何に變つても、この意味の貴族院の變化は、決して重大な意味の變化ではないのである。今度の主唱者であるとかいふ中川男が主張してゐる改造意見として傳へられるところの．

一、議員の年齡及び選擧權被選擧權の改正

二、有爵議員の減少

三　勅選議員の終身制廢止

四　農工商の資本家團體及び教育家新聞記者等より議員を出すこと。

五　多額議員廢止

といふやうなことも何等重大な意義はない。さうしてかやうな新理想を貴族院の一部に抱かしめるに至つたのは、畢竟貴族院自らの自存の要求によつてゐるのである。これをよりよくすることによつて、次第に無力即ち無益になりつつある貴族院の存在を、辛じて價値づけようとするのである。英國の上院が一九一一年のアスキス政府の改革によつて强制的に權限を縮小された結果、その後は上院自ら何とかして自存の方法を講ずべく、種々なる改革案を案出してゐるのと同じである。

日本の貴族院は立憲主義の最も專制的な組織を繼承したものであつて、二院制度は元來舊政治の防護であるといふ特質を最も多く保存しようと努めたものである。貴族と官僚と地主の一團に、人民の代表を專制せしむる外に何の目的もない。米國の上院が、下院の人民代表に對し州國家を代表するといふやうな國家的意味のあるのでもない。それかと云つてイギリスのやうに政治上の傳統が産んだ自然的な出鱈目な制度の殘物でもない。たゞ舊政治の實質を保存すべき現在の要求がそれを産んだのである。故にその理論的根據と云つても、教科書にあるやうな理論は、日本の貴族院の實際の存在理由ではない。二院制度の理論といふやうなものは、要するに借物である。如何にして舊政治の實質をより多く保存すべきかといふことの外に、日本の貴族院の存在理由はない。教科書にあるやうな、國家的判斷の構成の爲めに民衆の判斷を矯正する、より教養ある對等の機關を要するといふことは、階級政治の口實とする常套語であつて、政治の現實とは決して一致する事實ではない。如何に二院制度を完成せしめても、互ひ互ひを矯正するといふことは、比較的些細な法律案の場合の外、實際に働くものではない。上院

と下院とは政治の實際的權力がその孰れに存するかによつて權限が定まるのであつて、英國のやうに商人と勞働者が政治的權力の中樞にをれば、あれほど强い傳統を有する上院も、直ちに下院に壓迫される。故に人民の力の强いところでは、一院制度に嚮ふ傾向を有ち、然らざる國では、上院專制の結果となる。日本の貴族院は法令の上では衆議院と對等であるが、今まで貴族と官僚と大地主とに政治上の實權があつた爲めに事實の上では貴族院が何時も政局を破壞し、復た建て直す實權を握つてゐた。何時もさうであるが、やや政黨が有力になつて、その力が衆議院に移り掛けた今日でも、現在の加藤內閣の成立は、卽ち貴族院の破壞的勢力によつたのである。

それほど貴族院が力强い現狀にありながら、自ら改革を唱へるに至つては、頗る珍であり又滑稽である。自存の爲めならばもつと景氣の惡い上院がそれを思ひ立たなければならないわけであるが、日本のやうに景氣の良い貴族院がそれを唱ふるに至つては、全く珍である。從つて一向實現しないわけである。

何故にこれほど有力らしい貴族院に於いて、屢々改造說が持ち上がるかと云へば、それが卽ち前に云つた如く知識階級的氣紛れなのである。實際現在は右のやうに有力であるが、然し知識階級的見地から檢討すれば、この有力さは明かにもはや末期的である。その末期的たる所以を彼等自身兩面から見出すことが出來るのである。一つは貴族院の政黨化であり、他の一つは貴族院に於ける官僚の凋落である。この兩者は互ひに關連して働いてゐるのであつて、貴族院に於ける舊政治的要素、卽ち藩閥と官僚との領域が狹まれば、自ら其處に新政治的要素が食ひ込む。卽ち政黨化が起る。貴族院が衆議院よりも有力な政治上の實際的地位を占めてゐたのは、日本の政治が所謂新政治の常態にまで進化する途中の過程であつて、貴族院はこの過渡的地位を占めることによつてその實權を得てゐたのである。故に官僚の凋落と政黨化とは、貴族院の前途をして次第に衆議院に地歩を讓らなければならないに至らしめる徑路であることが、誰の眼にも認められる。貴族院內の知識階級がこの現象を認めて、今やその針路を決定すべき岐路に立つてゐることを感じたのが、卽ち屢々現はれる改革案の動機である。

そこで貴族院の取るべき道は二つある。一つは舊權力維持の組織を固執することによつて現狀を維持すること、他の一つは現在の大勢に或る程度まで順應して、そこに何程でもその價値を維持しようとするのである。而かも右の前者は舊權力の基礎が政治的に崩壞する場合には不可能であり、又民衆の力が政治上に增大する形勢の下に於いては不可能である。たとへさうい

ふ態度を取つても、イギリスの上院が一九一一年に受けたやうな痛い經驗を繰返さなければならない。殊に改造が知識階級的動機によつた時には、到底さういふ、官僚か初めて議會を造る時のやうな氣分を固執することは出來ない。そこで順應が常に改革案の基調となる。この順應にも二た通りある。一つは二院制度の傳統的理論を何處までも尊重する態度のものであり、他の一つは成るべく二院制度的特徴を減少せしめようとする態度のそれである。前者は飽くまで貴族院が國民的判斷に於いて衆議院よりも優秀であるといふ信仰を有つものであつて、無論舊政治の階級思想の系統を引くものである。只現在の貴族院は、その優秀を作り出すには餘りに無意義な組織である。例へば終身議員であるとか、或る爵位を有つものが當然終身議員になるとか同族團體であるとか、選擧團體であるとか、出身身分等による團體であるとか、何處から考へてもそれが優秀な國民的判斷を生み出す組織とは考へられないやうな組織を有つてゐるので、それを改めることによつて優秀を維持しようとするのである。イギリスの上院の改造案も何時も其處から唱へられる。

　これに反して二院制度の特徴を減少せしめやうとする運動即ち貴族院を政黨化しようといふ運動は、改革案としては有力であり得ない。これは政黨政治家が事實上の努力に於いてそれをするのであつて、實際の大勢はさうなりつつあるにしても、それを以つて貴族院自體が自己改造の標的とすることは出來ない。なぜならば、それは事實上二院制度を無効にするのであつて、貴族院をして衆議院に從たる組織、從たる機關としてしまふことだからである。

　ところが貴族院改革を唱ふるものは、何時も貴族院をもつと民衆化せしめなければならぬといふやうなことを唱へる。然し一方に民衆よりも優秀な判斷者たらしめんとしながら、他方でそれを民衆化しようといふのは、自家撞着である。二院制度の教科書的理論から云へば、貴族院は民衆から離れるほどいいのである。商工業者の代表を入れるにしても、少數特權者しか出られない組織とするのが、多くの改革案の主張である。謂はゞ改革案は貴族階級の優秀者、知識階級の優秀者、資本家階級の優秀者、これを要するに特權階級の中の殊に優秀なるもののみから成立せしめようといふのである。然らばそれを何うして民衆に接近せしむることが出來よう。要するに改革の理論は後から付けたものであつて、貴族院内の知識階級の改革案でも、要するに何とか時代に應じた形に改めて、原とのままの階級的特權を維持しようとするに外ならないのである。

　果して然らば貴族院の改革問題の如きは、舊政治の殘骸の中

に行はれる遊戲である。舊政治が實質上或る程度に於いて殘存する日本のやうな國では、その間貴族院はその舊政治維持の機關として殘る外はない。如何なる改造もその範圍に於いてのみ行はれる。

而かも政治の實際が貴族院を事實の上で改造して行く過程は恐らく人民の政治と特權階級の政治との撞着が、これを決定する外はない。その場合に人民の勢力が強ければ、事實上の一院制度にまで貴族院を改造するであらう。その反對に舊政治的特權者の實力が強ければ、依然として今日の貴族院のやうに、何時も政局の破壞と建設との動機を爲すやうな機關として殘るであらう。時々起る貴族院改造説の如きは、その間の政治階級の知的遊戲である。

時代錯誤の神祇院

反動思想が宗教的傾向を以て現はれるのは、各國に共通の事實である。戰後の國家的並びに社會的不安に對して起つた反動傾向は、いづれも宗教的傾向を帶びざるはない。社會的に宗教心の勃興があると同時に、それが國家行政や實際運動やに表はれてゐるのである。ファシスチの運動は何處の政綱に於いても、敬神を最も根柢的な箇條として擧げてゐる。その他いづれの國に於いても、生活の不安に對する安定の要求として、宗教的傾向が少くとも心理的傾向として現はれてゐないものはない。それは社會的に宗教が發生する動因の一つとして算へられてゐる生活不安が、現代の一つの特徴をなしてゐるところから起つた當然の現象であるが、この現象が一般社會の間に心理的傾向として働いてゐるばかりでなく、それが一つの運動となつて現はれるに至つて、果してその心理が現代生活の意識として、現代人の行動を目的づけるに適當したものであるや否やを考へなければならないことになる。例へばヨーロッパの上流階級及び知識階級の間に、戰爭の爲めに普通人の間に惹き起される迷信が傳染して、或ひは死後の靈とか、死者との交通とか、靈魂の復活とか、種々なる精神病的妄想が眞面目に信ぜられ、殆ど世界的流行となるに至つた。かやうな心理現象が社會的動亂に際して起り得ることは、當然考へられることであるが、この病的心理が狂熱的實際運動となり、支配階級に利用され、國家社會の組織構成の上に働き出すに至つては、其處にその病理に對する社會的自覺を必要とせざるを得ない。

宗教的狂熱は、例へば十字軍のやうに、如何ともすべからざ

る實行力で、一般人心を支配し、その行動を導き出すのであつて、その力強さは、凡ての合理的な人間行動の上にある。それは全く盲目的な群集運動である。さうして原始的本能の復活である故に、凡ゆる後天的審知を無視し、その保守的な先天性を發揮する。從つてその傾向は何時も復古的である。社會進化に對するその態度は、頑强に反感的であり、敵對的である。

宗教的反動思想が、右のやうな性質である爲めに、現狀維持を生命とする凡ての特權階級は、動機に於いてはともかくも、結果に於いてはこの宗教思想と一致する。十九世紀の科學に育てられたブルジョアは、當然その理知的生活に於いて迷信を排斥し、或ひは凡ての信仰的態度を輕蔑するやうな生活傾向を取り來つたのであるが、今日の社會的不安に對し、現狀を維持しなければならないといふ立場に於いて、今日の反動的宗教思想と一致する。而かも今日の社會不安の爲めに最も生活を脅かされてゐるのは、そのブルジョア級の人々であるから、丁度戰爭の恐怖が兵卒の間に迷信を生んだと同じ理由で、社會不安はブルジョアの間に宗教的傾向を起さしむる働きをさへ有つのである。これが日本で此の頃屢々敬神思想の唱へらるゝ理由である。さうして結局、その心理に基いて、それが貴族院の建議案となり、神社調査會なるものが設けられ、最近に神社行政に關する特別官衙の設置が議決されたわけである。

維新の改革の際にも、復古的敬神思想が勃興し、維新後の實際政策の上にそれが現はれて、猛烈な佛教排斥運動となり、盛んに寺院を破壞した。然しこの現象は今日の反動的宗教思想の勃興とは、その社會的動機に於いて同一のものではない。維新當時の敬神思想は、封建制度の崩壞に伴ふ國家勃興の過程に於ける一つの意識であつて、封建君主(大名)の主權分割による國民生活の分離が生活を行き詰まらせたに對し、この分割的小國家を否定し、統一的民族生活を恢復しようとする社會的動機によつたものである。ヨーロッパに於ける所謂國家主義の勃興と同樣の歷史上の現象である。日本の民族的信仰がヨーロッパのそれよりも原始的な形で保存されてゐた爲めに、この國民運動に當つて、それと結び着いて、民族祖先の觀念が働き出したのである。從つてこの時代の敬神思想には、寧ろ或る改革的要求が結び着いてゐたのである。さうして又實際さういふ傾向に働いたのである。

これに反して今日の宗教思想は、ヨーロッパのそれも、日本のそれも、同じやうに社會進化に對する傳統維持の保守的心理として働いてゐる原始的傾向に外ならない。それは流動的進化に對する恐怖が生んだ一つの心理である。生活の傳統的形式が生

み出した生活意識を裏付けようとする獨斷的觀念である。現狀維持が靈魂に對する奉仕の自然的態度であると考ふる如きは、實は靈魂がそれを彼等に命じてゐるのではなく、彼等の生活の傳統が彼等をしてそんな靈魂を生ましめてゐるのである。神が現狀を希望してゐるわけではなく、彼等自身が現狀を希望するが故にさういふ神を生み出したのである。されば日本の今日の敬神思想は、維新時代に於ける敬神思想の地位を占めるものではなく、丁度その時代に德川氏の宋學が占めてゐた地位を、今の敬神思想が占めてゐるのである。この場合の神は、現在の階級的生活觀念的の所產に外ならない。

維新時代に佛教を排斥したのは、或る意味に於いてソヰエツトロシアが耶蘇教を排斥してゐるのと似通つてゐる。それは寺院が道德的又經濟的に傳統的支配と結び着いて人民を欺瞞し、搾取したに對する復讐である。維新後の新たな支配を開始する爲めにはそのくらゐ亂暴な勇氣も必要だつたのである。維新當時の神はこの革新的勇氣の後援者であつたのである。故にこの敬神家は同時に大和魂（日本刀）廢止の法令を發し、丁髷を切去ることを命じたのである。

革新的宗教心と反動的宗教心とは、同じ原始的心理ではあるが、その作用に於いて右のやうに異ることは、頗る注意すべき現象である。何故に同一の原始的心理がそんな風に全く反對に動くのであるか。それは元來宗教心は生活が生むところの一つの意識であつて、生活的動機のない宗教心といふものはない。而かもその生活的動機は、或る場合、或る時に於いては階級的であり、他の場合、他の時に於いては社會的である。階級的生活意識は階級生活の傳統に卽した宗教心を產み、社會的生活意識は、社會的生活の恢復を求める宗教的傾向を產み出すのである。今日生活の傳統に固着する階級、及びその階級の教化を受けた人々の間に起つた宗教心は、その前者に屬するものであり維新當時の敬神思想、又はヨーロツパの宗教改革當時の人心を支配した宗教心は、その後者卽ち社會的生活の恢復を要求する觀念的傾向であつたのである。

その意味に於いて、今日階級的支配の目的の爲めに唱へられてゐる敬神思想は、社會的には甚だ意義に乏しいことを知るに足るのである。今日神祇院なるものを興すといふのであるが、その形こそ維新當時に興された神祇省と似てはゐるが、二つの社會的意義は右に述べた如く全然異るものである。維新當時のそれは生活の動態を要求する原始的心理に基き、今日のそれは生活の靜態を需める原始的心理である。――原始的心理であるならばまだよいが、原始的心理の利用である。從つてその利用

者には強ちに熾烈な宗教心などはないのである。寧ろ無神者の宗教利用である。

かくて誰もが今日階級的支配者の主張する敬神的施設を格別重大視してはゐない。元來敬神は民衆的心理である。故に民衆それ自らの神が最もよく民族的に崇敬される。平生吝嗇な市民や村民が、祭事に方つて濫費を惜まない心理、又平生嚴格な道徳家が祭事の際の一時的解放を許す心理、さういふ心理は、民衆が民衆自身の神に對する時に最も眞劍に働くのである。江戸兒が山王祭や神田祭と云へば、娘を賣つてそれに奉仕するといふやうなことも、宗教の原始的性質を攷究すれば明かに理解される事柄である。原始社會に於ける祭事の際の一時的解放は、凡ゆる社會的禁制の唯一の例外を爲す場合であつて、この例外によつて平生の社會的禁制が保たれたとさへ解釋されるのである。神は民衆にあつては、その社會的な組織的生活の伴侶なのである。言ひ換れば、民衆が如何に生活を目的づけるかによつて神の性質は變化するのである。平生道徳者である神が、祭事の時だけ亂行を許し、平生平和の守護者である神は、或る場合に於いて（維新當時の場合のやうに）動亂の煽動者となる。かやうに民衆の生活に即して働く神が、初めて民衆に取つて直接の神であり、先天的に崇敬される神である。この意味を有たない神を民衆の上に置かうとしても、神も民衆も倶に背中合せで不關焉でゐるであらう。

神が民衆のものであるならば、民衆に委して置くがいい。その社殿が頽廢すれば、民衆が修理する。民衆が修理をしない社の殿神は、社殿を修復することによつて神の信用を恢復することは出來ない。神祇調査會が神社の設備を完成せしむることによつて、信仰を維持させなければならないと決議してゐるのは顚倒的である。

この時代錯誤も、反動期の一つの紀念物である。然し三宅坂の銅像と同じく、極めて人心を離れた紀念物である。

婦人運動頓挫の意義

一時は雨後の筍のやうに簇生したいろいろの婦人團體も、最近に至つて殆と悉く影を潛めて、常にその名を唄はれてゐた人々も、社會的には消息不明の狀態にあるのが多い。矯風會とか各種の宗教婦人會の類ひは別として、社會運動の色彩を有する婦人の團體は、全く頓挫の狀態にある。やや存在を認められてゐるのは、新しく出來た職業婦人協盟くらゐなものである。

この傾向は婦人運動が經過すべき歴史的經路の上からは寧ろ當然であると見なければならない。婦人運動には二つの時期が劃せられる。前期は婦人の文化（政治をも含む）運動の時代であり、後期は即ち社會運動の時代である。前者は男子の文化運動と關連して起つた啓蒙期の運動であり、その範圍は上流社會と知識階級の間に殆ど全く限定されてゐる。それは或は婦人の敎育問題となつて現はれ、（高等敎育機關に婦人を排斥する習慣を除き、又女子大學の類ひを設けることなど）又或は女子の言論結社の自由、選擧權被選擧權の擴張といふやうな政治運動となつて現はれ、又或は男子專用の種々なる機關に女子の侵入することを主張する要求となつて現はれるが、要するに女子の人格的價値とか、權利とかいふ個人的自由主義の立場に於ける運動である。それは男子の方面で十九世紀の個人主義自由主義を完成せしめたと同じ意味のものが女子の方面に於いて作用を起したのである。これに反して後期の運動は、近代資本主義の結果家長の多くが賃銀奴隸となり、その經濟上の獨立を失ひ、家長としての保護能力を缺乏するに至つて、在來の家長專權の家族制度が崩れ、女子の生活を男子に隸屬せしむる傳統的の組織が成立たなくなり、女子も亦男子と同じやうな社會的生活の單位を占めることによつて、自己の生存を計らなければならなくなつたところから起つた運動である。

日本の婦人運動に於ては、此前期が大體に於いて四期に分れてゐる。第一期はキリスト敎の婦人運動に刺戟されて起つた宗敎的傾向のもので、耶蘇敎・佛敎・神道各派の間に今日も尙ほ續けられてゐるそれである。第二期はさういふ宗敎的敎化と並行して行はれた一般の敎化が女子を維新後の猛烈な男子の政治運動と結び着け、女子の間に政治的な運動を勃興せしめるのである。政治的の女傑なるものが輩出した時代はそれである。それから漸く一般社會の運動が文化的傾向を取るに至り、學術技藝、風俗習慣等に於ける革新運動が男子の間に盛んなるに及んで女子も亦同じ傾向を取り學術の要求が起り、藝術的要求が起り、要するに人格的自由の名に於いて、在來の家族奴隸であるところの女子を文化的婦人として社會に送り出したそれが第三期である。女子大學が出來女優が出で、女文士が輩出したのはこの時代からである。而して第四期は即ち婦人のこの文化的傾向が次第に經濟的傾向を帶びるやうになり、種々なる文化運動的團體がいつのまにか凋落するに至つた現在である。即ち經濟的傾向を帶びた生活改善とか世帶の會とかいふのが、文化團體に代つて起つて來たのである。以上の四期を通じて考へると、漸く現在に至つて、婦人の運動の二つの時期の前期が結末に近づきつ

つあるのである。而してこれが婦人運動の目下の頓挫の理由である。

男子の運動も亦全くそれと並行してゐるのであるが、啓蒙運動から社會運動へ轉じるといふことは、男子の方面では全くもう過渡期を乘越してしまつたと云つていい。無論啓蒙期は今尙ほ經過したわけではない。しかしその以上に社會運動の時代に入り、啓蒙運動はただそれと共同する意味に於いて、意義を有つてゐるのである。女子の運動がまだ漸くこの過渡期に這入らうとしてゐるのは、比較から云へば寧ろ進歩の早いことを認めざるを得ない。

それ故に婦人運動の今後の傾向は、文化運動としては最早社會的に有力であるわけに行かない。今の文化婦人の間に案外にかういふ意識が早く發生して、彼等自ら勇氣沮喪の有樣に陷つてゐるのは、つまり他方に於いて日本の社會的變化の最近に至つて急劇に進行しつつあることを思はせるのである。實際近頃の女性の傾向は、その點が著しく目立つて見える。無論今日も尙ほ教養のある婦人の多くは、自ら經濟上にも豐かである爲めに容易に右のやうな大勢を自覺することが出來ずに、今尙ほ文化的享樂の追求が婦人の最も眞劍な人間的要求であると考へてゐる初期的の婦人が多い。そして往々頽廢的な享樂意識が、これ等の婦人の行動を支配し、上流階級知識階級の間に、個人的享樂の爲めに滅びて行く婦人の消息が日々の新聞紙を賑はしてゐるのである。然しながらこれ等の婦人はその新聞紙上や社交界に於いて立女形である如く、社會的にも亦主要人物であるわけではない。要するにその人々は享樂の世界を賑はしてゐる芝居者に過ぎない。現實の社會生活に於いて婦人はもつと生活的な力戰苦鬪の時代に這入つてゐる。因襲の結果、そこでも尙ほ文化的享樂氣分を失つてゐない婦人も澤山あるが、生活そのものゝ戰鬪的狀態が自らさういふ婦人をも覺醒させて、享樂的頽廢兒と奮鬪的女性との間に急劇な淘汰が行はれつゝある。前者は近隣を賑はしながら滅びて行き、後者だけは現代に於ける女性の社會を建設するための鬪士として殘る。

文化的婦人運動が頓挫したのは、この意味に於いて悲觀すべき事柄ではない。而して次ぎに起るべき婦人運動の根柢は、全く別な生活的根據の上に築き上げられ、文化的華かさを持たずに、生活的摯實さを持つて堅固に地味に成長するであらう。而して徒らに名高いヒロインは今後の實際的指導者としては排斥され、名も知れない犧牲的事務家が實際運動を形造り、目的づけて行くであらう。それは男子の運動に於いて次第にさういふ風に進みつつある經路を、女子も追つて行くのである。(完)



準造とその兄弟

野上彌生子

横井はすべてを知つてゐた。お加代の腹にあるほどのことは、恐らく平生は彼女自身さへ忘れてゐるであらう細い感情まで見遁してゐなかつた。これは彼の賢さや鋭さのためではなかつた。如何なる賢さも鋭さも必ず曇らされないではすまない斯う云ふ場合での感情の弱點――女性に對する己惚を、彼は全然持たなかつたからであつた。小學三年生の丈ほどもない、それで脊中に怖ろしい瘤を脊負つた佝僂が、どんな女の愛を純粋に勝ち得よう。――この苦い眞理は分かり過ぎるほど分かつてゐた。同時にまた美しくない女は、彼の目には女ではなかつた。自分が醜い身體をしてゐるだけそれだけ、女の美しさに對して彼は無上の價値を置いてゐた。彼が最初の有利な妻――その父親の社會的地位が彼の將來に大きな影響を與へたに相違ない相手を、半年もたたないうちに大膽に放り出して、金で買つた女に見代へた、と云ふやうなことをしたのも、妻がひどく我儘で、分らずやで、幾らか馬鹿でさへあつたと云ふ理由はあつた

にしても、根本の原因は、彼女がちつとも綺麗でなかつたと云ふ點に隱れてゐたのである。若し妻がお加代位に美しかつたならば、どんな理由があつたとしても、決して手放しはしなかつたであらう。どの女からでも、到底人並みに愛され得ないことが明白である以上は、せめて美しい妻でだけでもなければならない。これは彼の痛ましい信念であつた。美しくさへあれば、我儘で、分らずやで、馬鹿であるにしても、またそれ以上の惡者で、彼を虐げ、苦しめたにしても、美しくもない女から同じ目に逢されるよりは諦らめがつく。醜い片輪の身で美しい妻を持つと云ふ特權のために、すべてを忍ぶであらう。——それ故彼はお加代に對しては人の妻が要求されるやうな束縛や道徳を決して強ひはしなかつた。仕度い三昧にさしておいた。自分の手許から逃げて行きさへしなければ、我儘も、無智も、一と月に一遍はきまつて起すヒステリーも、また幾らかの浮氣も、結局彼女の魅力を強めるに外ならなかつた。

　けれども斯んな虚無的な、自卑に過ぎた考へ方は、たゞ一つの例外——異性に關する點にのみ限られることで、その他では彼は別人の如く行動した。身體の不具は彼の自尊心を萎縮させなかつたばかりでなく、却つてそれを鼓舞し、激勵して、何物にも屈しまいとする嚴しい精神を植ゑつけたかの如く見えた。實際、幼時に彼が自分の身體の異常に氣がついた時の心の痛みは、それに對する他人の輕蔑や嘲笑を嗅ぎつける度に、怖ろしい怒と敵對の念に成長して行つた。ひどく肝癪持で、勝氣で、一徹な點が、少年時代からの性質の特長となつた。單に身の丈が普通でないとか、脊中に餘分な突起が一つあるとか云ふだけのことが、人間としての價値にどれだけの相違があるのだ、と云ふ風な論理的の疑問が感じられる頃には、失望は光明に、悲しみは傲慢にさへ變りかけた。

『身體の大きいのが自慢にはならないぞ。頭は空つぽでふら〳〵してゐるのぢやないか。勝負なら學問で來い。智慧で來い。才能で來い。——決して負けるものか。』

これはすべての健康な、強い身體の人間に對して、彼の心が絶えず叫んでゐた挑戰であつた。同時に彼ははつきり知つてゐた。愚圖々々してゐると、自分は醜い一匹の寄生蟲として社會の最も悲慘な一隅を這ひずり廻つた末に、最後には強い人間たちの足の下に踏み潰されるであらう。それから救ひ出してくれるただ一つの方法――蟲に蝶の翼を與へて、彼等の頭上に輝がしく舞ひ上らせる力を有するものは、知識のみだと云ふことを。

九州の小さい町の商家に生れて、七つになるまで立つことさへ出來なかつたばかりか、生きても十五六までの生命だと醫者たちから宣告されてゐた彼が、病的な熱心を以つて學問に志したのも、その高貴な力に依つて生きるより外に、自分の生き方はないのだ、と信じ込んだ一念の發露であつた。また年取つた父親や二人の大きい兄たちが、商人の家ではその當時まだ非常に例外であつた學問を容易に彼に許したのも、死の寢床にゐる病人の無理な希望を納れる看病人の心持からであつた。

彼は立志傳の中の人のやうに勉强した。實際、普通の子供のやうに、飛んだり跳ねたりする自由を奪はれてゐた彼の少年時代は、書物は空氣と同じ位大切なのであつた。同時に精神の肥料は生理的にも不思議な作用を及ぼすかのやうに見えた。彼は次第に健康になつた。死ぬだらうと云はれた年頃に死ななかつたばかりか、それを過ぎると、尙一層元氣になつた。而して知識に對するます〳〵激しい渴きと共に、一種の漠然たる野心に燃えてゐた。

併し、極端に變つた彼の外形は、學校に入る青年の體格に八釜しい制限のなかつたその時代でも、矢張り故障にならないではすまなかつた。上の學校へ行くほど、彼は正しい生徒としては受取られなかつた。不規則な課程から課程を綴けてやつと大學の豫備門を出ると、本科へ入れて貰ふ望みを捨てて外國へ行つた。彼は亞米利加に七年間ゐた。八年目に歸つて來た時には、一つの學位を持つてゐた。專攻の課目は經濟學であつた。

珍しい佝僂の學者を迎へた故郷の町は、何事に對しても二つに分かれるやうに彼に就いても二樣の見方で見た。町での知識階級――昔から士族であることを誇にしてゐる人々や、裁判所、役所、病院、學校に勤めてゐる官吏、醫者、教師と云ふ風な人々から出來てゐて如何なる種類の成功者に對しても、それが土地の人間であればあるだけ、容易に驚きや信頼を示さないことが、自分たちの威嚴を保つ上に必要だと信じてゐる人たち――は、亞米利加の大學から學位を貰つて來るのは、町の港口の洲濱で貝を掘るよりも譯のないことだと云つた。彼等は準造の瘤を笑ふと同じ調子でその肩書をも笑つた。いや、その瘤のために、一層肩書を滑稽化して嘲笑した。反對に彼の味方をする人達は――それは重に準造の生れた家を中心とした商人たち、または小さい時の彼をおんぶしたとか、抱いたとか云ふお爺さんやお婆さんたちであつたが――彼の瘤のためにその名譽も價値も數倍高くされてよいと考へた。且つ彼の實力は、少年時代からの勉强ぶりを知つてゐる者には疑ふ餘地のないものであるが、何よりの證明として一つの手紙を引いてもよい、と彼等は云つた。それは大學の學長で教授であつた老人が、東洋の不具な學生に深い興味と同情を寄せて、個人的にも色々世話をしてくれると云ふことを知つた兄たちが、謝意を表するつもりで數口の日本刀と珍しい鍔類を贈つたに答へて、老學長から寄越された手紙のことであつた。その中には準造の異常な勉强と優れた學才が心から賞讚されてあつた。

準造は賞められても、惡く云はれても、平氣で昂然としてゐた。

『何んとでも云へ。斯んなちつぽけな町がおれの舞臺ではないのだから。』

併し東京へ出て、彼が希望してゐた本舞臺に足を蹈み入れた時にも、準造は故郷の町で受けたやうな二樣の見方から遁れることは出來なかつた。この批評は行き着く先に彼を待ち受けてゐた。相手は誰でも準造の自信に充ちた頭と共に、若しくば頭以上に彼の瘤を問題にした。この事は今となつては非常に自尊心を傷づけられることであつたに拘はらず、準

造は或る場合それに德もした。

最初彼を手引して社會的登場をさしたのは、明治維新の元勳の一人で仲間での唯一の財政通で、政治上にも財界にも根强い勢力を持つてゐると共に、怖ろしい雄辯家で、それでまた世話好きだと知られてゐたN伯であつた。伯爵の甥に當る青年が亞米利加で準造と同じ大學にゐた。その紹介狀が彼を伯爵の應接室に通す通行劵となつたのであつた。

『X(伯爵は甥の名前を云つた)と同じ學校にゐたさうだな。經濟をやつたのか。——ふむ。法律なぞ噛ぢつて來るよりや氣が利いてゐる。今の日本では、六かしい小理窟を云ふよりは、どうして國家をこの貧乏から救ふかを考へ出すのが急務だからな。』

『仰しやる通りです。併し日本の富を今後順當に膨脹させるか、また現在の儘貧乏で永久に損な貿易や取引を續けるかと云ふことは、政府の決心次第だと信じます。僕に云はせれば、大藏大臣はたつた一つの改革を斷行しさへすればよろしいのです。我が國の經濟的光明は、その解決を待つて初めて現はれ得るのです。』

これは當時重大な議論となりかけてゐた金貨本位制を意味したのであつた。歸朝早々準造が自分の前に見出したこの問題は、專門的に非常に興味のある研究であるばかりでなく、彼の深い蘊蓄を示し得る點でも理想的な機會であつた。彼は熱心な贊成論者として既に多くの論文を新聞や雜誌で發表してゐたし、同じ目的のために書いた一册の著書も頓て發行されようとしてゐた。彼はその中で述べた意見を此處でも熱心に說いた。殊に或る一部の人々から唱道されて、有らゆる新制度に對して杞憂を捨て得ない保守派の間に强い勢力を持たうとしてゐた兩貨本位制の不徹底と矛盾を手ひどく攻擊した。

『その癖あの連中でブライアンの議論の眞意を咀嚼してゐる者が果して幾人あるか、問題です。彼等はただ金と銀と兩

方ながら使ふと云ふこと、一方に偏しないと云ふこと、それが氣に入つてゐるのです、否、その言葉が氣に入つてゐるのです。』

彼の斯んな調子には、この應接室の一般の客からは決して見られない卒直と、自信と、子供のやうな大膽が溢れてゐた。

『書物はいつ出るのだ。』

生徒の前の試驗官のやうな態度で默つて彼の言葉のきれるのを待つてゐた末に、伯爵は靜かに尋ねた。

『五六日ぢうには出來るつもりです。讀んで頂ければ光榮です。』

伯爵は讀むとも讀まないとも返事をしなかつた。矢張り默つたままでゐた。けれどもそれは對座の終に目上の者が表はす露骨な冷淡とは違つて見えた。反對に、彼の鋭い鷹に似た目は、隱しきれない好奇心を示して、今一度目の前の異樣な男を檢査しようとするかのやうに、またその男の奇妙な身體と、その口から出る大きな言葉との不思議な連絡を探し出さうとするかのやうに、ぢつと準造の上に注がれてゐた。彼が驚いてゐることは疑ひもなかつた。この驚は、初めて逢ひさへすれば、準造が普通に誰にでも與へる驚ではあつたに拘はらず、相手が相手であつたために、この場合重大な意味が附隨した。――學校を出たばかりの若者が、最初の會見でN伯を驚かした、と云ふことは、それがどんな種類のものであつたにせよ、有り得べからざることであつたから。

その晩、N伯爵は彼の親友で當時の首相であつたA侯爵に或る會合で出逢ふと、話の序でに早速準造のことを云ひ出した。

『一寸法師だよ。』

『一寸法師？』

話す方も聞く方もそれを一番に問題にした。そのために、普通の滿足な身體をした男であつたならば、何等の注意も引かれなかつたに相違ない、一人の青二才のことが、異樣な、面白い話題になるらしく見えた。

『我輩の胸程もない小さい奴なのさ。それで身體に似合はぬ大きな話をする男でね。年か。まだ若い。二十九だと云ふが、今云ふ通りの片輪だから一寸見たのでは、子供だか年寄だか分らないよ。勉强は可なり眞面目にやつて來たらしい。兎に角變な奴だ。暇な時に一度逢つてやつてくれないか。役に立つやうだつたら一つ世話をしてやらうかと思ふ。』

彼はもうすつかり保護者らしい話方で話した。斯んな順序で準造は容易にA侯爵にも近づくことが出來た。N伯に比較すると一層抱擁力が强くつて、何に限らず――女には殊に――珍らし物好きであつた彼は、N伯に劣らぬ好奇心を以つて準造を受け取つた。而して種々な機會に示した彼の打ち解けた態度には（一二の例を擧げると、何かの場合で大勢の人が侯爵を圍んで寫眞を取つたことがあつた。すると彼は後で人の陰に隱されてゐた準造を、わざ〱自分の隣へ呼んで腰かけさした。『君は別格だ。』彼はさう云つて獨りで愉快さうに笑つた。また上方邊へ旅行をした時、準造の前こゞみになり勝ちな腰をまつ直にさせるのだ、と云つて、ひどく廣い、中幅ほどもある博多帶を買つて來てやつて面白がつたりした。）中世期の歐洲の君主が自分の宮廷の侏儒に示したと相通ずるものが幾分あつたに拘はらず、準造自身は決して侏儒扱ひにされてはゐなかつた。不具な身體に培はれた病的に强い彼の精神に取つては、それは何よりの侮辱であつた。瘤や低い背丈のためでなしに、自分をば正しい實力で認めさせなければならない。まだ非常に新しくもあり、丁度時期にも適してゐる專門の研究は、十分それを要求し得る筈であつた。而して侯爵の幕下の多くの俊才たち――勿論片輪でない、大きな、滿足な體格をした男たち――と些かの差別もない待遇を受くべきだ、と堅く信じてゐた。この意識

から準造はそれ等の仲間に決して下らなかつたばかりか、侯爵に對してさへも怖れない自由な行動を取つてゐた。他の者なら憚つて彼の前では云はないやうなことでも、準造は平氣で云つた。それがまた侯爵を一層面白がらせて、奇妙な片輪に對する興味を増させるかのやうに見えた。數ケ月の後には、彼はN伯と相談して、××銀行の調査課の重要な椅子を準造のために見つけてやつた。初めて總裁に紹介した時には、――それが彼とは道樂仲間で、丁度他に用事もあつたのではあるが、わざ〳〵自分の馬車で一緒に連れて行つてまでやつた。

併し準造はその地位を一年半とは守らなかつた。侯爵に似た寬濶な氣象で、また同じやうに彼に好意を示してゐた總裁が間もなく亡くなると、それを轉機として、彼は政治界に入る決心をした。このことは先輩たちからは餘り贊成されなかつた。彼はやつと三十になつたばかりだ。――それにそんな身體だ。(言葉にこそ出さないが、人々がこの事を考慮に入れたことは確かであつた。)――もう少し銀行で强固な足場と、今一つ、金を拵へた上にしても遲くはない。彼等の意見は同時にN伯やA侯の意見でもあつた。併し、準造の不思議な激しい血には、それ等の忠言を肯じ得ない性急さがあつた。且つ、一時その言葉に從つたとしても、自分は決して新しい總裁とは調和して行けないことを知つてゐた。――彼は準造に對して最も殘酷な見方をする世間の代表者であつたから。相手の學問も、才能も、精神も見ないで、ただ脊中の瘤だけを見る一人であつたから。

『一寸法師の癖に、大きな、不遜な口をきいて、何んと云ふ化物だ。』

新しい總裁の灰色した大きな飛び出した目は、任に就くと間もなく斯う云ふかのやうにぢつと準造の上に見据えられてゐた。彼はその目を怒り、憎んだ。頓て行はれた總選擧に於て、準造は或る金持の友人の故鄕から、その後援で候補者に立つて、運よく成功した。けれども代議士の椅子は、前の銀行の椅子の長さほども彼を落付けなかつた。彼を迎へ

た議會は、冬にはもう解散した。二度目に同じ選擧區で爭つた時には、土地出身の新しい候補者から負けた。

赤ん坊の澄子が甲州の山奥の百姓家に預けられたのは丁度この期間であつた。而して彼女が無報酬で里親の愛と食料を奪つてゐた頃から、今日までの間に起つた父親の運命の變化は、娘の早い生涯に續いた多様な變化に劣りはしなかつた。彼女が山と湖水の世界から不意に目まぐるしい東京に移されて、今までとはまるで違つた生活や、人の手の間に渡されたと同じく、彼は色々な地位と仕事の中を轉々した。二流どころの新聞の主筆、學校の教師、會社の重役、雜誌の主幹――あらゆることが試みられたに拘はらず、彼は何事にも根を下ろすことは出來なかつた。大抵誰かと、それも極まつて上の地位の者と衝突して職を投げ出した。初め銀行の椅子を捨てたとすつかり同じ具合で。併し何度そんな目に逢つても悄げ込みはしなかつた。彼の心にある一種の飢に似た不滿は、それ等の職業のどれをも、決して自分の本統の仕事だとは信じさせなかつたのだから。彼はどうしても政治的野心を捨てることが出來なかつたのであつた。同時に斯う云ふ風な運命の星の廻轉は、單にそれ自身の軸があわただしく廻つてゐるばかりではなしに、それと共に、彼が最初に運よく入り込むことの出來た輝かしい星座から段々に遠ざかりつゝあることを感じないではゐられなかつた。今では彼はN伯爵にも昔の眷顧を求める譯には行かなかつた。伯爵が何度目かの大藏大臣になつた時、丁度新聞の主筆をしてゐて、伯爵の經濟政策に對しては全然反對意見を持つてゐた準造は、辛辣な批評をそれに加へて、事毎に無遠慮に攻擊した。結果として、再びその傍へは近づけないほど彼の病的な癇癖をあふつてゐた。代議士をやめる頃に起つた不幸な離婚沙汰は、同時に妻の實家、並びに仲人の背後にあつた社會的勢力との絶緣であつた。且つ斯んな場合に寬大な助けを貸してくれたかも知れないA侯爵は、最近に生じた維新後の日本にとつて二度目の對外戰爭に依つて、新たに併合さ

れた國の總督として赴任して、内地にはゐなかつた。また彼の周圍に附隨してゐた衛星で、以前には確かに準造の仲間であつた人々も、十年の間にそれ〴〵立派な地位と權勢を固め上げて、何かで出逢ふやうな機會があつても、彼等は丸で別世界の人間でも見るやうな表情で準造を見た。

『何んだ。あの傴僂がまだ生きてゐたのか。』

斯ういふ冷淡な彼等の視線に對して彼は答へた。

『若しそれを忘れてゐたのなら、今に見ろ。もう一度はつきり思ひ出させてやる。』

同時に彼は、その日を作り出す手段として、最初に何が一番必要かと云ふことを知つてゐた。――

或る七月下旬、一日前に河口を出帆した大阪商船會社の日向通ひの××丸が、美しい瀬戸内海の島々の間を通り拔けて、九州の東海岸に沿うて走る頃には、旅客も積荷も大部分途中の寄港地で減つてしまつて、汽船の中は何處にもがらんとした隙間が出來、甲板を散歩したり、手欄に寄つたりしてゐる人影も目に見えて少くなつた。けれども、最初船が神戸を離れる時、借切りの小さい家族室に乘り込んだ風變りな三人の客は、殘りの船客と共にまだ船に留まつてゐた。而して彼等が連れ立つて甲板に現はれる度に、人々が不思議な見物でも見るやうな視線をその方へ投げることは、今も彼等を初めて見出した時と變らなかつた。小さい傴僂の紳士と十三四の痩せた青白い娘と、今一人はまたずば拔けて脊も高ければ、恰幅も申分のない大男からなり立つてゐた――横井準造と澄子と新吉の一行は、馴れない人の目には實際異樣に見えたに相違なかつた。準造は白い縮みの單物の胸を廣く張つて、同じ色合のハンチングをかぶり、いつも離したことのない葉卷を、少し右寄の脣で嚙みしめるやうに銜へながら、左手には、彼の身體相應に短いが、併し太いがつちりした

杖を必ず握つてゐた。この杖は、普通の紳士の場合には大抵さうであるやうな、裝飾品でもなければ、用事のない、ぶらつとした手を胡魔化すためのおもちやでもなかつた。彼に取つては、それは幾らまつ直ぐにしようとしても自然にこごみ勝ちになる身體に對して、大事な支柱の役目をするものなので、從つて、その上に集まる重量のために、杖は一歩々々こつ〳〵した強い音を甲板の上に響かせた。その音はまた彼の方をふり向かないではゐられない退屈な旅客たちに、横井が近づいたことを逸早く知らせる合圖にもなつた。

斯うして彼は全船の人々の好奇心の中を、平氣に悠々として、涼しい潮風を樂しみながら、右舷から左舷へ、また前甲板から後甲板へと歩いて行つた。周圍の視線や囁きには氣もつかないやうに見えた。それ等は、彼が平生餘りに見過ぎてゐたものであるし、殊に持前の驕慢から、今では如何なる嘲笑も輕蔑も、自分と同等以上の者から示される場合でない限り、彼は容易にそれを無視し得るのであつた。併しこれは彼だけの心の境地で、彼と一緒にゐる者までが同じ氣持になりきることは出來なかつた。少くとも澄子は決して平氣になれなかつた。殆んどない事であつたが、それでもどうかした場合で父親と共に人中に立つた時に感ずる一種の漠然とした恥かしさは、この船中でも彼女につき纏つた。殊に其處は通り過ぎてしまへばそれですむ人込みとは違つてゐた。一層悪いことには、誰も暑い船室に引込んでゐる者はなく、すべての船客が朝から晩まで甲板に集まつてゐたので彼等は至るところでそれ等の群に待ち受けられ、一日に何遍となく同じ視線、同じ囁き、同じ忍び笑ひに出逢はなければならないのであつた。また父親の異常な身體は、今のやうにくつろいだ單衣姿では、洋服の時に見るよりも尚ひどく醜く奇怪なことも事實であつた。一人前の立派な發育をした上半身に對して、小さい子供のやうな下半身、手の割に非常に短い足、大きな頭部――全身のあらゆる部分の不釣合が少しも隱されなかつた。殊に後の突起が、蔽はれたただ一枚の薄いきれを、高いピラミツド形の頂で突つ張るやうに

しながら、脊中一杯に盛り上つてゐる下から、茶色のしごきの短い房がぶらりと垂れ下つてゐる恰好は、彼の後姿をこの上もなく滑稽なものにしてゐた。澄子は人々が一番それを笑つてゐるのを知つてゐた。而して彼等の露骨な態度を憎むと共に、最初の子供らしい恥かしさはあとを消して、不思議な、自分でも氣のつかなかつた、父親に對する強い愛が燃え上つた。

『お父様のことを笑つて、何んと云ふ惡い人たちだらう。』

彼女は一心にさう思つた。而して彼が半生の間にどんな目に逢つて來ただらう、と云ふやうな、曾つて想像にも上らなかつたことがぼんやりながら悲しく思ひ廻されると共に、今まではただ冷淡な、氣心の知れない、怖い人のやうにしか考へられなかつた父親が、丸で別な感じになつて、彼女の小さい胸を一杯にした。澄子はその瞬間ほど父親を自分の最も近い者、最も親身な、なつかしい者に感じたことはなかつた。その不具であることが可哀想でたまらなかつた。彼の味方をして、笑つたり、嘲つたりする人たちを懲らしめてやり度い激しい敵愾心に捉へられた。で、自分も父親に負けない位平氣に、落付拂つて彼等の前を通らなければならぬと考へた。彼女はその通りにした。恐ろしく濟まし込んで、威張つて父親の後から歩いて行つた。而して直ぐ横に續く新吉が、同じく高ぶつた昂々しさうな表情で、時々周圍を睨め廻はしながらついて來るのを見ると、新吉も屹度自分のやうなことを考へてゐるのだと思つて嬉しかつた。殊に彼の偉大な身體は、父親の不具を痛感した際であるだけに、澄子には常よりも一層賴もしく、また一層大きく見えるやうな氣持がした。

三日目の朝、船がその海岸での有名な温泉町の港に着くと、今まで殘つてゐた旅客の三分の二はまた其處で下りた。併しその港から新しく乘り込んだ人々は、それを償ふて餘りあるほど大勢であつた上に、誰も彼もまだ遊び場所の氣分か

ら隱しきれない陽氣さで、至るところにおしやべりと笑ひ聲を蒔き散らしてゐるので、船は再び出帆當時の賑やかさに返つて見えた。その他油蟲にたかつて來る蟻の群のやうに、汽船を目がけて漕ぎ寄せて來る夥しい名物賣の小舟、賣子たちの一本調子な間延びのした呼び聲、荷船と荷船との仲士同士の喧騷――この内海の航海ではもう見馴れ過ぎた筈のそれ等の光景も、涼しく明け放れた空や、既に南國らしく強い青で輝き出した海と共に、その朝の港は、今までのどの寄港地よりも珍しい特長と快活な騷ぎに充ちてゐるやうに見えた。

毎朝の例に依つて、甲板の上を父親の後に續いてゐた澄子は、少女の鋭敏な注意力でそれを感じた。同時に周圍の浮はついた陽氣な空氣は、自分たちのために一層そのさわめきを高めることを見逃さなかつた。而してまたそのさわめきには今までの周圍が示したとは別な或物があつた。新しい乘客の中にはたしかに彼女の父親を知つてゐる人が少くないらしかつた。彼等は單なる驚きや批評以外に、彼の商人的な噂話をひそ〳〵してゐた。横井が今歸りつゝある故郷のA――町は、溫泉地からは二つ目の寄港地に過ぎなかつたので、そんな人のゐるのも不自然ではなかつた。終にその代表者が現はれた。三人が甲板を一周して右舷の船室へ再び入らうとしてゐた時、丁度荷物の整理と着換へをすまして部屋から出て來たところだと云ふ風な、痩せた、脊の高い、四十恰好の男に出逢つた。彼は三人の先頭にいつもの如く強い杖の音を響かせて歩いてゐる横井の姿に氣がつくと、突然な、普通の人がその姿について示す驚きとは確かに別な、狼狽に近い色を顏に表はした。併し、直ぐ愛措のよい笑ひ方で前の表情を取り消しながら、

『やあ。』

と馴れ〳〵しい呼びかけをして横井の方へ近づいて來た。

『横井先生、暫くでした。――今度はいよ〳〵御郷里から御出馬ださうで、誠に結構なことで。――やあ、これはお孃

様ですか。』

横井は立ち留まつて、持前の氣むづかしい顔つきをしたまゝ、その男をぢつと見詰めた。誰であるかを思ひ出せないのであつた。しかし相手は頓着なしに調子の高い早口で續けた。

『お歸りになつたら早速是非お訪ねいたさうと思つてゐたところでしたが、意外にも御同船の榮を得て斯んな愉快なことはありません。今度の選擧には僕はうんと一つ先生のために働く決心をしてゐますよ。今日はこれからS――町まで訟訴用で出掛けますが、明日は歸ります、何時でも御用事の節は――』

其處まで云ひかけて、彼は何か急に思ひついたやうに、その儘身をかはして、とん〳〵と下の船室の方へ下りて行つた。

『なんだ、彼奴は。』

横井は呆つ氣に取られてゐた。すると却つて新吉の方がその男を記憶してゐた。

『旦那、あれは何んとか云ひましたつけ、Mさんのお家に暫くゐたことのある書生さんですよ。何んでも辯護士試驗を六遍とか受けて、それでまだ及第しないで、方々の先生方の書生部屋をうろつき廻つてゐるのだつて、あすこの安公が話してゐましたから、私は覺えてゐるのです。鬚なんか生やして紳士ぶつてゐますが、あの額の禿げ上つた具合から、衣紋竹見たいな肩の恰好は紛れつこありませんや。屹度、あの男です。』

横井は彼の知人の一人で、東洋風の志士を以つて任じてゐるMの、本郷の奥にある大きな住み荒らした家を思ひ出した。彼は犬好きがどんな犬でも無闇と引つ張つて來て飼つておくやうに、いつも五六人より少なくない書生を家に置いてゐた。而かも無責任な犬の飼ひ方と丁度同じ位、無責任な養ひ方、選び方で。彼等は何處の者とも知らず、又何處の學校へ行くとも極まつてない者さへあつた。兎に角其處へごろ〳〵してゐれば食べるだけのことは心配がなかつたの

で、色んな人間が集まつて、絶えず入れ代つてゐた。それ故失意な地位に落ちかけてからは、不平家のMと可なり親しくして、その家に行くことの多かつた彼も、新吉が記憶してゐるやうにその中の一人を特別に覺えてはゐなかつた。併しその男は斯う云ふ場合に自分の存在を相手にはつきり飲み込ませる方法を――押しつけがましさを怖れさへしたければ、殊に何より容易な、効果ある手段を忘れはしなかつた。二三分の後、その男が再び甲板に現はれた時には、右手に葉書の半分位もある大きな名刺を持つてゐた。彼は滿足らしい微笑でそれを横井に差し出した。左の下部に細かい住所書きがついて、中央には辯護士田崎嘉雄と印刷してあつた。その活字は、主人から五六尺も離れた横に立つてゐる清吉にも十分讀める程大きかつたので、清吉は、この人は乾度八度目位に合格したのだらうと思つた。

『いつから開業したのです。』

横井も同じ聯想を捨てきれなかつたと見えて聞いた。

『この夏で四年になります。實はS――町が僕の故郷でして、最初はそちらでやつて見たのですが、斯う云ふ商賣はどうも生れた土地では旨く行きませんよ。豫言者は故郷に容れられずと云ふ具合でしてね。』

彼は斯う云つて、この諺を上手に使ひこなせたのがひどく嬉しいかのやうに、一人で愉快さうに高笑ひをしたが、不圖、横井が何の用事で今故郷に急いでゐるか、と云ふことに氣がつくと、彼は周章てて言葉を續けた。

『尤もこれは僕等の話で、先生位の地位になればそんな下らない障碍は消滅して、却つて何をしても有利な條件を故郷の方から提供することは勿論です。併し先生、僕の直言を許して下されば、候補者に取つてはこの縣下の地盤位厭な地盤はないと思ひますね。百姓までが選擧ずれがしてゐて、それで徹底的實利主義者と來てゐるのですから、金が要ること夥しい。全くですよ、先生。此地方の有權者に取つては、初めから候補者は政見なんかが問題ぢやありません。それ

よりか軍資金はどちらが多いか、彼等はそれのみを知りたがつてゐるのです。』

『どこの選擧區だつて大體そんなものぢやないかね。』

『いや、この地方だけは別です。前の選擧の時の如きは、場所に依つては一票の價が一晝夜の間に十倍にも競り上つたと云ふ始末ですからね。斯う云ふ連中にかかつちやかなひませんよ。選擧を堂島の米相場と同じに考へてゐるのです。釣り上げられるだけ釣り上げて見てさてどちらでもいい、一錢でも高い方に手を打たうと云ふ量見なのです。併し先生はあゝ云ふ有力な御兄弟を二人まで控えて、水の手の方は幾らでもお構ひなしと云ふ譯だから實に羨むべきですな。』

羨むと云ふ言葉に殊に力を籠めて云つた時、田崎の尖つた小さい黑眼は、狡猾らしく瞬いてぢつと横井の顔に注がれてゐた。

『此奴はおれの兄弟のことまで嗅ぎ出してゐるのか。』

準造はさう思つてじろりと咎めるやうにその目を見据えたが、併し田崎はそんなことでへこみはしなかつた。

『兎に角、先生の學問と雄辯を以つてして、その方が潤澤と來てりや鬼に金棒ですからな。一つ大にやりませう。演説會には必ず僕が前坐を勤めますよ。あんなことは景氣物ですから、誰でも引つ張つて來て威勢よくやらないといけません。喋べることなら僕は商賣ですから自信があります。M先生にお世話になつてゐた頃でも、その方にかけてはあの連中で誰も及ばなかつたものです。』

それが滿更嘘でもないらしいことは、今までの雄辯が保證した。しかし彼はまだ饒舌り足りないかのやうに、横井の傍を離れないでぺら／＼と話し續けた。彼が足を留めてゐた舷側から動き出すと、彼も話しながら一緒について動いた。斯うして今までの三人はその不思議な仲間を加へて、四人の一層奇妙な行列になつて甲板を歩いた。澄子は父親

と並んで自分と新吉の前を歩いて行く田崎の高い、默つた脊中を眺めてゐると、絶えずしやべつたり、笑つたりしてゐる彼の黄色い長い顔をまともに見てゐるよりも變な氣味惡さを感じた。

『あの人は善い人か知ら、それとも惡い人か知ら。』

彼女はぼんやりそんなことを考へてゐた。彼女の年頃の小さい娘は、誰に對しても簡單な分類法しか持たなかつた。――善い人か、惡い人か。又は好きな人か、嫌ひな人か、である。そのどちらかに極めるまでは落ちつけなかつた。今の田崎の場合は、前の二つは不明であるにしても嫌ひな人の範疇に入れるべきことだけは確かであつた。それ故温泉地からA―町まで、その汽船の速力では、ほんの一と走りに過ぎない距離を、澄子が今までの全一晝夜半の航海よりも長い氣がしたのは、父親の故郷の土地を一と目でも早く見ようとする子供らしい性急さ――誰でも最後の目的地に近づくに從つて起さないではゐられない旅客の一般心理のみではなかつた。彼女にははつきり分つてはゐなかつたけれども、それは同時にその變な飛び入の同伴者から遁れる時の待ち遠しさであつた。午前六時過、汽船は終にA―町の港に着いた。

位置から云へば下町の最も賑やかな通りに面してゐる、準造の長兄の昔風な大きな家は、重々しく暗くて、且つ強い酒の匂に充ちてゐた、澄子が船まで出迎へた人々に伴はれて、父親と共に商家らしい、廣い、開けつ放しな門口を入つた時、その匂は彼女を驚かした。直ぐその下から故郷の家が代々酒家であることを思ひ出したのだけれども。門口から奥へ通り抜けるやうになつた廣い土間の前部は賣場であつた。而して正面の帳場を中心にして、左の壁際には大きな酒甕が三つ四つ高い臺の上に並んで居り、反對の一方には、大小さま〲の酒樽が厚い、がつしりした天井につかへさう

なほど高く、山形に積まれてあつた。小僧が四五人その前で何か忙しさうに動き廻つてゐた。若い手代の一人は甕の一つから樽詰にするために酒を出してゐた。黄金色の高價な液體は、甕の下部についたのみ口から、若者の支えた受桶の中に勢よく走り込んでゐた。その傍を通り過ぎる時一層芳烈な匂ひがした。

澄子はその特殊な家の匂に暫く馴れることが出來なかつたと同じやうに、彼等の着いたのを見て忽ちその周りを取り圍んだ人々をも、大部分は誰が誰だか急には見分けがつかなかつた。少くとも其處には十人以上の男女ががや〳〵してゐて、手んでに念入りな田舍言葉で久しぶりの挨拶を浴せかけた。

『準造さん。ようお歸り、誠にお久し振りで。』

『これがあんたのお娘御でござんすな。まあそれは〳〵。』

『立派なお孃さんぢや。』

『お父樣によう似てお出でるな。』

女達は殊に澄子にちやほやして、この旅行のために新しくお加代が作つて着せた明石の荒い矢絣の袖を引張つて、京風な良い好みを褒め立てたりした。けれども正しく分けると、その人々は、何か機會のあり次第いつでも直ぐその位は寄り集まつて來る親類や出入りの者が重で、家族としては本家の方が主人の小兵衛夫婦と今一組の若夫婦——息子とその妻——と、その中にある二人のまだ小さい男の子、分家を立ててゐる次兄の七郎の方は夫婦きりで一人の子供さへない地方のその程度の家としては珍しく小人數な家族であつた。その中で本家の人たちだけには澄子は顏馴染があつた。皆んな一遍づゝは東京見物に出掛けてゐたから。取り分け小兵衛は關係してゐる銀行や會社の用事もあつて、一番多く上京してゐるだけに、東京の家には誰よりも親しい人であつた。澄子に取つては、その度に色々な物を買つて呉れ

る一番親切な伯父さんであり、新吉にはまた、氣前のよい、幾ら大事にしても損の行かない、彼の所謂お國の大旦那であつた。日本橋に生れたのを何よりの誇りにして、東京以外の人間は悉く百姓扱ひにしてゐるお加代でさへ、彼だけは來てゐる間も粗略にしなかつたし、歸つた後でも惡口を云はなかつた。田舍者のやうではない、と云ふ彼女の最上の褒め言葉で噂する位であつた。彼が土産代りに包んでやる金高に比べれば、その言葉も決して安くはないことが、分るものには分つてゐたけれども。準造と澄子が彼等のためにたててあつた朝風呂から上つて來るのを待つて、而して、いつもの茶の間の代りに庭に向いた奥の座敷で、お待ち設けのにぎやかな朝飯がはじまつた。

『まあ一つこの刺身を食べて見てくれ。お前たちに食べさせようと思つて、これはおれが特別に料理させたんぢや。刺身もな、斯う云ふ風にからつと作らぬと水臭うて本當の味はなうなる。』

氣輕く、斯んな調子で箸を動かす老主人の、太つた血色のよい顏は、久しぶりに肉親を迎へた家長らしい悦びで晴れ〳〵してゐた。心盡しの刺身は、食卓のまん中の大皿に盛花のやうにうづ高く並んでゐた。うす紅色をした、薔薇の花片のやうなのは鯛であつた。まつ白く、透き通つて、水晶の如く輝いてゐるのは烏賊であつた。丁度しゆんである鱸の青白い上品な身も洩れてはゐなかつた。而して一ときれ〳〵がまだ生きてゐるやうにちり〳〵してゐた。波の穩やかな、廣い内海を控へたその町は、何よりも水產物に富んで、魚は特に美味であつた。土地の人々は、どの地方の者でも必ず何かしら持たなければ承知しない無邪氣なお國自慢の一つとして、その魚を、他の二つの自慢——生活が樂だ、景色が美しい、——と云ふことゝ共に擧げてゐた。それだけ彼等は口が肥えて、一體に美食家で、食べて飲む事が生活の重な樂しみになつてゐた。

『準造さん、如何でござんす。久しぶりで國の鯛の味は。あんたは西洋料理は本場を上つて來た人ぢやし、東京でも旨

い物はなんでも食べてゐなさろうが、この新しいところを藏の生一本でやる味は格別でござんせうが。』

下の方に坐つてゐた佐賀屋と云ふ屋號で呼ばれてゐる、古い出入の大きな禿頭の男は、その生一本が利いたらしい眞つ赤な上機嫌な顔で話しかけた。

『魚だけだ。佐賀屋。他には何んにも取り得はない町だ。』

『あゝまたあれだ。』

佐賀屋は準造の卒氣ない返事を聞くと、顔をしかめて笑つた。

『相變らずの調子ぢや。あんたと云ふ方は、これつぽちの坊ちやんの時からその調子で誰でもやつつけて來た方ぢや。

が、佐賀屋はそれで一層愉快になつたやうに能辯に續けた。

『だが準造さん、佐賀屋が惡いことは云ひやんせん。今度だけはあんたのその調子もちつとばかりしまつて置いて貰はんと困りやんせうな。この町を地盤にしようと云ふ候補者が、自分の口からその惡口をずば／＼云ふやうぢや、具合が惡いて。――だからあんたがいよ／＼立つとなりや私は二つの注文がある。決して皮肉を云はんこと。肝癪を起さんこと。如何です。あんたには大分こりや痛いお灸ぢやろ。』

皆んな笑ひ出した。準造自身も面白さうに笑つた。めつたに見せない彼の笑顔は、こんな場合には、平常の冷淡な表情に反して意外に無邪氣な子供つぽいものになつた。而してそれは彼の小さい身體と共に、一座の人人の中では、取り分け床の前に一緒に並んでゐる、長兄の太つた立派な體格の前では、十二三の息子かなぞのやうに見えた。實際また兵衛の深い友愛の情から云へば、準造がいつまでも小さい可哀想な片輪の子供であることは、彼の學問を信じ、非凡な性格に賴みをかけ、また今日までに彼が勝ち得た社會的地位に兄らしい誇りを感じてゐる現在とても、七つ八つ頃の立

つことも出來なかつた痛々しい彼を見てゐた時と變りはないのであつた。似たやうな氣持は其處に並んでゐる肉親や、古い懇意な人たちにも皆幾らかづつあつた。その憫みは同時に準造に對する彼等の變らない愛であり、またどんなに偉くなつても矢張り我々の準さんだ、と云ふ風な打ち解けた親しみでもあつた。佐賀屋が久しぶりの彼の前で憚らない口の利き方をするのも、醉うても居り、また不斷から誰に對しても卒直な言葉を使ふのを自慢にしてゐる町奴風なさつぱりした氣性が手傳つてゐるにしても、大部分はその感情から發する言葉であつた。それを面白い餘興のやうに聞いてゐる人達にも、そのことはよく分つてゐた。同時にまた彼等は知つてゐた。何んとか云ひながらも、準造が土地から候補者に立ち、そのために一と働きすることに、一番はづみきつてゐるのは彼であると云ふことを。

『新さん、一つあげやんせう。』

　佐賀屋は、今朝だけはまだ遠くから來た客の一人として、末席に着かされてゐた新吉に盃をさした。船まで出迎へたので、彼はもう車夫と懇意になつてゐた。

『私の云ふことが違ひやんすかな。どうです、新さん。出るにも入るにも君は着き切つてる人ぢやから、誰よりも旦那の氣性は知つてる筈ぢやが、珍らしい人でせう。失禮だが、あんな身體で、なか〳〵あれだけの强い性根が持てるもんぢやない。それがあればこそ並の人間でも出來んほどの事が出來る。そりや誰にでも分つてをりやんす。だが、其處が一つものは工夫ぢや。魚は旨いが、町は詰らん。頭からこの調子はもうそろ〳〵引つ込めて貰はんと出來る出世も出來やんせんて。――準造さん、よう聞いて下さい。』

佐賀屋はいつの間にか新吉をばおつ抛り出して本人に向つてゐた。

『分つた。分つた。』

準造は矢張り子供らしい機嫌のよい笑顏を古馴染の生醉ひに見せてゐた。

『いや、まだ分かりやんせんわい。――早い話がこの選擧ぢや、これは誰が投票するのぢやと思ひやんすか。あんたの學問や政治上の意見がよく分かるやうな、さういふ偉い人たちばかりが札を入れる譯ぢやござんせんで。多くはこの佐賀屋のやうな者か、それ以下の商人、百姓、漁師と思へば間違ひない。それなら斯う云ふ手合が何を當てに投票しやんせう。そりや金で買はれる者も多からうが、さうばかりも行かんところが人間の心の面白いところぢやて。私なら學問や身分は二の次にしても、心からこの土地を可愛がつて呉れる者にこそ一番に入れやんすからな。それが一番の資格ぢやと思ふ。だからあんたも魚は元より、この土地は日本國ぢうのどの土地よりも可愛いと云ふ腹から見せて呉れんちうと第一、この佐賀屋の一票からして取り逃がしてしまひやんすで。』

『佐賀屋の意見は大いに良いぞ。』

小兵衛が上座からにこ〳〵しながら言葉を添へた。

『さあ、大將も贊成ぢや。』

佐賀屋ははしやいで、笑つて、象のやうな大きな柔和な顏を滿足さうに輝かした。彼が酒の間で斯んな風に話す時に、どんな話でも面白がつて一緒に笑ふのが癖であつた人々は、その瞬間も聲を揃へて笑つた。が、ただ一人準造だけは今度は笑はなかつた。その無教育な年寄りの商人が醉と共に發した言葉の中には、彼の不用意な心の一角を突いた或物があつたのである。彼の顏つきは急に嚴しくなつた。而していつもの、周圍の存在を忘れ果てたやうな冷やかな表情で默り込んだ。其處へ、

『佐賀屋がやつてるな。』

と云ふ言葉と共に、分家を嗣いでゐる次兄の七郎が入つて來た。

『どうした。餘りゆつくりぢやから先に初めたところぢや。』

長兄は彼の顏を見ると懐しくさう云つて、自分と準造との間にあけてあつた古風な革の更紗布團に彼を坐らせた。七郎は人々と汽船まで弟を出迎へて一緒に本家へは來ないで、途中自分の家に寄つてゐたのであつた。まだ五十になつたばかりの、長兄に劣らぬ立派な體格をした男で、顏もよく似てゐたが、全體の纒まつた感じは非常に違つたものになつてゐた。廣い額、ぎよろつとした黒目、少し大きすぎる鼻と、同様に厚すぎるが、併し食ひしめたやうに緊く締まつてゐるへの字なりの口、これ等は長兄の場合ではもう半分白くなつた頭や、おつとりした表情と共に、よい調和を得てゐるのに反して、彼の顏ではすべてが強い線となり、近づくものを壓迫しないではおかないやうな嚴つさになつてゐた。この感じの點では、彼は兄よりも弟の方に共通のものを持つてゐた。さうやつて、其處に三人で並んでゐると、兄弟の間の類似と相違は一層著しく目立つた。

『取引先の者が同じ船で來たもんで。——嫂さん、私ならもう何んにも要りやんせん。家でお相伴をやつて來やんしたから。』

彼は自分のために食べ物を揃へようとしてゐる小兵衛の妻のお綱や嫁のお島の方へ手を振つて、注がれた盃もほんの祝ひ心に一と口つけただけで下に置いた。兄弟は小兵衛や準造もさうであつたが、彼も土地の一般の好みに似合はお酒は多く飲めなかつた。殊にその氣性から云へば、遠く歸つた人の歡迎の意味であるにしても、朝から本氣に飲むと云ふ仕方は好きでなかつた。で、樂しさうに赤い顏をして、まだ盃を離さないでゐる一座の男たちの方へは餘り注意も拂はないで、腰から煙草入を拔いて、大きな銀煙草で一服吸ひつけながら左隣の弟へ話しかけた。

『準造、どうぢや、選擧もよからうが、そんな金があるなら一つおれの方へ廻して呉れんか。どうもその方がよささうぢやないか。利子なら幾らでも高く出してやるぞ。――おれの資本に出すのなら決して失くする氣遣ひはないが、選擧に使ふ金は、うちの醸造場の大井戸に投げ込むやうなもんぢやからの。初めから十呂盤が取れんて。』

『兄さんの十呂盤が取れなくたつて、僕の十呂盤は立派に取れるのだからいいさ。』

準造は仲兄の決して本氣ではないが、またすつかり冗談でもない態度に、丁度順應した答へぶりをした。

『お前の十呂盤が當になるもんか。――兎に角このせち辛い時節に千だ萬だと云ふ金を惜氣もなく、而かも見ず知らずの他人の懐の中に捨てるなんちうことは、おれに云はせりやまあ氣狂ひ沙汰ぢやな。』

今度は準造が知らぬ顔をして、返事もしないですましてゐたので、七郎はにや〳〵して、向の方の佐賀屋を呼びかけた。

『どうぢや、佐賀屋、お前はどう思ふ。』

佐賀屋は赤い顔で笑つて、直ぐ應じた。

『私に云はせりやどちみち、大した損の行く十呂盤ぢやございませんな。準造さんが蒔いただけのものは、つまりは本家の酒代にならうし、でない分はあんたのお店の呉服太物の賣場になつて歸つて來るちう譯ぢやから。』

『ふん。自分の腹の痛まん金ぢやと思うて、うんと振り蒔いて歩くのを樂しんで居るんぢやろ。』

『はつ、はつ、はつ、はつ。違ひなし。――いづれあんたの方も千兩箱の五六本は空になると思うてゐて貰ひやんせうか。』

『眞つ平ぢや。準造にもはつきり云つて置く。選擧にばら蒔く金なんぞはおれたちには一文だつて持ち合はせないんぢやからな。それだけは忘れんでくれ。』

『こりや手酷しい。あんたのところなんぞは斯んな時にでも使はなけりや外に使ふ時はない金やに、餘り溜め込むばかりぢや札に青苔が生えやんせうで。――なあ、東京のお孃さん、さうぢやござんせんか。』

醉つ拂ひの常で、佐賀屋は突然連絡もなく、床脇に從弟に當る若主人の貞一と並んで坐らされてゐた澄子の方へ話しかけたので、彼女は喫驚して目を圓くした。一座はそれを興がつた。而して少し重苦しくなりかけた二人の會話もすべての笑のうちに消えた。澄子はその時自分のことを笑はれたやうで少し恥かしかつたけれども、不快ではなかつた。また今までの彼女の生活から云ふと、ひどく奇怪で珍らしかつた筈のその場の光景さへ、ちつとも異樣には感じられなかつた。何を云つても笑つても、決して蟠のない一座の共通な强い親しみは、彼女の小さい心をも容易に同じ感情に結びつけたのであつた。殊に强く彼女を悦ばしたのは、人々が準造に示す打ち解けた尊敬と愛であつた。

『皆んなお父樣を大事にしてゐるんだわ。』

澄子はさう思つた。船で彼のために辛い思ひを味つた後であるだけに、それが何より彼女の胸を打つた。

『何んて善い人たちだらう。』

彼女は思ひつづけた。本家の人たちのことは知つてゐたけれども、知らなかつた人たちだつて皆んな親切なんだもの。分家の伯父さんは――いゝえ、あの伯父さんがちよつと怖いやうな氣がするのは顔のせいだわ。だつて船で初めて逢つた時には、澄子か、よう來た〳〵つてあんなに優しくしてくれたのだもの。でも分家の伯父さんは何故一遍も東京へはいらつしやらなかつたのだらう。伯母さんだつて――』

でも彼女の今の明るい心は、長くそんな疑問にこだわつてはゐなかつた。彼女はただ來てよかつたと思つた。またよく來られたと思つた。今度の歸國について澄子を伴ふのを勸めたのはちよつとそんなことを云ひ出しさうもないお加代

であつた。

『丁度夏休だしさ。斯んなよい折つて滅多にありはしませんわ。連れてつておやんなさいよ。新吉がついて行くんだから、あなたの荷厄介になる譯でもないぢやありませんか。澄ちやんだつて、一度はお父樣のお國も見て置き度いわねえ。』

斯んな風で父親に說いた時のお加代の熱心な美しい顔を、澄子は忘れなかつた。

間もなく横井準造はS――黨から出てゐた前代議士B――氏に對抗して、J――黨に近い中立派の候補者として名乘りをあげた。A――町は、十數年前外國から歸つて來た時の彼を迎へたと丁度同じ態度でそれを迎へた。町はまた二つに分れた。士族、官吏の組と商人の一團と。その上B――氏は土地の人ではなかつたけれども、隣藩の、昔は家老格の家の當主だといふ地位から、その資格はA――町の舊士族の人々の趣味に逢つてゐたし、事實今までもその後援に依つてゐたので、爭ひは單なる選擧騒ぎのみには止まらなかつた。田舍の城下町にはその頃までは何處にでも幾分殘つてゐた現象であつたが、A――町には殊にまだ著しかつた二つの根強い階級的確執――武士と町人との睨合ひにまでそれは延長した。明治維新の改革は彼等の間にあつた杙を完全に徹した筈であるに拘はらず、A――町の士族は自分たちが代々持つてゐた優越感を忘れきれなかつたし、町人は町人で、中身のなくなつた彼等の誇を、その家の長押の槍と同樣に輕蔑すると共に、昔彼等から受けてゐた不當な待遇に對する復讐心を捨てることが出來なかつた。併しその反目は、町の不斷の平靜な生活の上には滅多に姿を現はさなかつた。たゞ何か事件が起きた時、熱せられた大理石が容易にcoとcaoに分解されるやうに。それは二つに分かれた。これまでの例では智識的な事では士族の方が勝ち、經濟上のことでは商人

が勝つた。それ故今二つの條件を具備してゐると見られる準造の立候補は、（彼等は準造の財布と兄たちの家や藏をさり放しては考へられなかつたから）、前者に取つては生意氣な侵入であり、後者から云へば新しい領土の擴張であつた。

『選りも選つて一寸法師を代議士に昇き上げるとは、醉狂にも程がある。』

敵は嘲笑した。

『それなら自分の土地の祭禮に、よその町の神輿を昇ぎ廻つて悦んでゐるお前たちは醉狂ではないのか。』

味方は酬いた。この悪口が最も露骨に公然と交換されるのは演說會であつた。彼等がどちらの演說會でも、樂しみにして、大勢で押しかけるのは、たゞその目的に外ならなかつた。實際彼等にはS―黨だとか、J―黨だとか、中立派だとか云つても、その政見にどれほどの相違があるのか、またどちらが正しいのか、そんなことを本統に判斷し得る者は一人もありはしなかつた。B――氏方に取つては横井の話すことであれば悉く反對すべきであり、同樣に横井方はB――氏の說を徹頭徹尾下らない饒舌だと信じさへすればよいのであつた。それ故B――氏の頓て五十になる人とはどうしても思へないやうな、殊に演壇に立つと遠見で一層若々しくなる、立派な貴族的な風采、それを十分自覺した人の氣取つた重々しい態度、せりふじみた身振の交じる話しぶり、さうして可なりな雄辯、これ等に對して味方が滿足な拍手を送る時、反對派は騷がしく野次り立てた。

『よう、有平糖の人形――』

『南京鼠、しつかり――』

『一文芝居の殿樣――』

B——氏の風采と、好んで着てゐた和裝のぞろりとした紋服姿は、背景になつたへらへらの金紙の大唐紙と共に(會場が大柢町の劇場で、殿中の大廣間と云ふ風な舞臺面をその儘使つたから)、これ等の批評にしつくり嵌まつて見えたので、場内はいつも大笑と敵の悅びの叫で混亂した。

同じ場合に於ける準造は、B——氏のやうな體格や押し出しがなかつただけ、外觀上の見すぼらしさは云ひ樣もなかつた。また彼の雄辯は相手の比でなかつたに拘はらず、ひどく早口で、抑揚がなく、ただ無數の言葉の集積が、一と束になつて、ポンプの水のやうにその口から迸り出ると云ふ感じであつた。その上彼の選んだ演題では、專門の見地から政府の經濟政策を批判し、攻擊する場合が多かつたので、勢ひ數字の夥しい羅列が加はり、變に六かしい理論が交つて、演說を一層前受のしないものにした。併し味方の者は分らないでも熱心に傾聽した。兎に角えらいものだと思つた。それは決して他の人ではない、自分たちの準さんであつたから。——取り分け彼等を驚かしたのは、何萬、何億と云ふ複雜な歲出入や貿易額の數字を擧げるのに、一片のノートもなしに、自分の年齡でも云ふやうな正確さで、淀みもなく並べ立てることであつた。彼等はそれに一番感心した。而して自分だちの候補者の明敏な頭腦に對する最上の保證として威張つて構へている耳許に、冷酷な嘲罵が降り注いだ。

『一寸法師が何を云ふか——』

『何億の阿呆陀羅敎——』

『酒屋の樽拾ひ——』

『獄門首——』

最後の警句は演壇のテーブルの横衣と、その上に突き出た丸い頭から引き起された聯想であつた。準造の小さい身體

は演説の時には成るたけ低いテーブルを選んでゐたに拘はらず、胸の上部しかその上には現はれなかつたから。この様子のよくない皮肉が準造方の年寄や女たちを本氣に厭がらしてゐることを知つた時、敵は一層意地惡くそれを浴びせかけた。

併し家族の者で準造の演説會に出掛けるのは若主人の貞一のみで、兄弟は小兵衞も七郎も行かうとはしなかつた。古風な、矛盾の多い考へ方が彼等の自然な欲望を押へつけた。可なり違つた性情を持ち、選擧のことについても決して同じ意見ばかりではなかつた二人も、その點では全く一致してゐた。

『どうも身内の者がやるのは上手でも下手でもいかんものでなあ。』

長兄はよく嘆息するやうに云つた。

『萬事がこの行き方ぢやで此方の運動ぶりは地味になり過ぎていけやんせん。お二人が先へ立つて、正面で手でも叩いてくれるやうぢやと、氣勢が倍も引き立つのだがなあ。』

佐賀屋などが持前の斯んな調子で一度引つ張り出さうとしても成功しなかつた。

『お前ぢやあるまいし、誰がそんな馬鹿々々しい眞似が出來るか。』

七郎は傍から腹立たしさうに拒絶した。

その癖二人の兄が弟の演説をどんなに聞きたがつてゐるか、またその事がどんなに彼等の心持を強く支配してゐるかと云ふことは、周圍には分かり過ぎるほど分つてゐた。取りわけ、本家の主人の態度は、演説會が町の中で開かれる場合によく知られた。その日になると彼は屹度特別の注意を番頭に與へた。——選擧騷は騷として、その爲めに商賣の方までお留守になつては一大事だ。今夜は演説會もあると云へば、店の若い者たちが無暗に飛び出さないやうに氣をつけ

てくれ。――併し番頭は、これは店さへ空にしなければ交る〴〵聞きに行かせてもよい。少しでも多く喝采させろ、準造さんの話ぶり、身ぶりから、ハンケチで何遍額の汗を拭いたか、コップの水をどんな手つきで何杯飲んだかまで、覺えさせて來いと云ふことなのだと知つてゐた。

小兵衞はこの秘密な心持を周圍の者に見せまいとしてゐたばかりでなく、同じ興味に捉へられてゐることの明白な七郎にさへ變に打ち明け兼ねてゐた。七郎自身にしても、正直な欲望を兄に洩らしはしなかつた。

或る晩、町はづれの大きな寺で、近所では三度目位の演説會が開かれたことがあつた。町家の遅い晩食の後、奥の庭に向いた緣先で、たつた一人で靜かに煙草を吹かしてゐた小兵衞は、急に妻のお綱を呼んで羽織を出せと云つた。

「古い方でよいのぢや。」

お綱は後から着せかけながら、まだ衰へきらない、象牙色に黄ばんだ滑らかなその顔の上に、ちらと意味のある微笑を見せたが、口に出しては何んにも聞かなかつた。小兵衞もまた默つてゐることでその微笑に答へておいて、その儘店の方へ歩いて行つた。帳場には、もう殆んど四十年から其處に坐り續けてゐて、而して食べることと眠ること以外には、どんな大事件でも其場所から引き離すことの出來ない番頭の伊助が、小筆を耳に挾みながら、厚い帳面を前にして、十呂盤を彈いてゐた。その横から土間に鍵形に突き出た一つのだだつ廣い部屋では（これは晝間は近在の村方から酒買に出て來る百姓たちが、ちよつと一杯のめる樂しい休み場所であり、夜は雇人の一部の寢室であつた）小さい小僧が二人、レツテルの紅繪の猩々を、細長く截つた日本紙に、手摺で遊び仕事に摺つてゐた。その他には誰も人氣がなかつた。酒の香の籠もつた空氣が隅々までひつそりと靜まり返つて、帳場の天井から吊るされた古風な大ランプの光が、太い大黒柱のまつ黒な木肌にあか〴〵と照り映えてゐるのまで、廣い店先を變にシインとさせてゐた。不斷ならば居る

べき筈の店員の衣が一人缺けてゐても、目敏く糺さないではおかない小兵衛が、今宵はその空つぽの光景をちつと見渡したきりで、別に何とも云はないで、手にしてゐた團扇をおうやうに動かしながら、ぶらりと門口から出て行つた。長い習慣で、正面の入口を出入する者に對しては、番犬のやうな注意力を持つてゐる伊助は、帳面に注いだ目を動かしもしなかつたし、玉を彈く手を一瞬間も滯らせはしなかつたけれども、誰が今出たか、門口からどちらへ向いて行つたか、はつきり知つてゐた。恐らくそれ以上のことをも。

軒並に白い浴衣で涼んでゐる人目を避ける爲めに、小兵衛は暗い裏通から裏通を廻り道して歩いて行つた。或狹い小路を拔ける時、右側の小さい暗い家の中から時計の打つ音が高く聞えた。小兵衛は立ち留つてそれが九時であつたのをたしかめると、先よりは少し歩調を早めた。今宵の演說は縣會に出てゐる男が一人と、今一人は田舍町によくある政治狂で、リツプ・ヴアン・ヴインクルの腰かけた村の居酒屋の連中と同じ部類に屬する男が、熱心な希望で前を務める筈になつてゐたので、準造自身は九時過ぎになる豫定であつた。町外れに近づくに從ひ、まばらになつた家並の間々に黑い木立や、菜園や、草の生へた空地などが交り、その中にたまに灯のあかるくついた氷店が現はれたりした。暗いところは山の中のやうに暗く、明るいところはまたぱあつとして一層明るく見えた。その晩の會場なる寺はその通りの中程を右に折れたところに、小高い岡を負うて立つてゐた。三十五度位の稍急な勾配で疊みあげた、一間幅の立派な石段の下から見あげると、老い茂つた境內の木立の間には賑やかな火影が洩れ、その火影をゆすぶつて驅け下りる冷や〱した夏の夜風は、其處で行はれてゐる晴れがましい、熱狂的な場合を暗示するどよめきと拍手の音をかすかに運んで來た。小兵衛は二分間同じ場所に佇んだまゝ、一種の昂奮と滿足な感じでそれ等に耳傾けた。それから決心して石段に進まうとしてかけた時、今一人、浴衣の着流しに帽子を深くかぶつた男が往來から寺の石磴の方へ曲つて來た。而してその人

が自分の一間半ほど前に佇んでゐる太つた人の黒い後姿にはつとしたやうに足を留めたのと、それが振り向いたのとは同時であつた。兄弟は星明りの中で顔を見合せた。

『――どんな風かと思つて近所まで様子見に來たところぢや。――』

『中々やつてるらしいな。』

二人は悪戯を見つけられた子供のやうな狼狽と變な氣恥かしさで顚誤ついてゐた。で勿論、何しに其處まで來たかはお互ひによく知つてをりながら、これから一緒に明るい會場の中に入つて行かうと云ふやうなことを云ひ出せはしなかつた。彼等はただ默つて並んで、石段の上の光と響の方へ全身の注意力を集注させたまゝ、其處に立ち盡した。

併し戰爭が激しくなり、双方の敵對心が眞劍になつて行くに從つて、彼等は演說會で惡口を云ひ合つてゐる位なまどろかしい事では濟まなくなつた。丁度鯨波を響かし、突喊の叫びをあげて戰場に駈け出した兵士たちが、その後は夢中になつて劍で刺し合ひ、鐵砲で打ち合ふと同じ心理狀態が彼等の上にも今生じてゐた。昨日まで彼等の行動を支配してゐた常識や道德はもう其處にはなかつた。彼等はたゞ相手を倒すこと、それに打ち勝つ事より外何んにも考へはしなかつた。その爲にはまたどんな危險な手段をも醜惡な行爲をも遮けなかつた。勇敢に犯し得る者ほど手腕のある運動員であつた。彼等は兵士が敵の輸送計畫を妨ぐる時に、列車を攻撃したり、線路を破壞したり、橋を墜落させたりすると同じ意味で、人力車、自轉車、荷馬車を一臺でも多く味方に狩り集めようとした。或る村では實際一つの橋が壞されたB――氏の運動員は、それは豪雨の後の山水で洗ひ流されたのだと云ひ觸らしたが、横井方では信じなかつた。その村が有權者の四五十も集まつた內福な土地で、それが一筋の深い川で袋のやうに限られて居り、交通はただ一筋の橋に依るほかなかつた事情から、且つ村の重立つた者がB――氏方である理由から、敵の切り崩しに備へるために取つた非常

手段だと考へた。事實選擧がすむまでは假橋さへ架からなかつた。渡舟に使はれたたつた一艘の河舟にはいつも船頭がゐなかつた。彼等はまた軍隊が砲兵陣地の奪ひ合ひをするやうに、事務所を奪ひ合ひ、休憩所を奪ひ合ひ、演說會場を奪ひ合つた。而して親子兄弟が敵味方で戰うた昔の戰物語と同じく、親類同士で反對派に分かれたり、友達が仲違ひになつたり、軒を並べてゐて顏を背け合ふ家が出來たりした。けれども正しく分類すると、これは双方の重な援助者や運動員の間に釀された感情で、一般の有權者の心持はまるで違つたものであつた。彼等の中には冷淡な傍觀者と、選擧を角力と同じにただ面白がつてゐる彌次と、今一つ狡猾な日和見があつて、最後の者が六割を占めてゐた。この連中を敵か味方かに極めるのはB――氏の方でも横井の方でも非常に六つかしい事であつた。恐らく彼等自身だつて分つてゐないのであつた。それはカメレオンに自分の身體の色を考へさせるやうなものであつたから。彼等はそれ位當にならかなつた。絕えず變つた。――約束の金額次第で。

準造の選擧事務の本部と見なされてゐる長兄の店先は、その最も惡い代表者である百姓たちの群で每日一杯になつた。彼等は別に用事があるのでもなければ、畑の仕事も暇であるといふのでもないのに、悅んで其處に押しかけて行くには共通の理由があつた。

『今日は、番頭さん、相變らず暑いことで。――さて選擧の景氣はどうでござんす。私の村はもうこなたに極めてあることぢやが、味方となればどうも勝つたと聞くまでは氣がかりなもんでなあ。』

その爲めに暑い中をわざ〳〵樣子見に出掛けて來たのだ、と云ふ風で彼等は話した。伊助はまた、お前たちは明日はその通りのことを先方の事務所へ行つて云ふのだらう、と云ふやうな顏色をば夢にも見せないで、物馴れた愛想よい調子であしらつた。

『お蔭でよい都合ぢやさうで。――まあ一つ休んで行きなさい。おい、吉どん。×村の――さんに一本つけてあげんか。』

『いや〳〵、ちつと急ぎぢやから今日は措いて貰ひやんせう。』

『まあ、そんなことを云はんと、ほんの番茶代りぢやと思うて。』

やがてその番茶代りが大きな盃と共に盆に載せられて現はれさへすれば、彼等の目的は達せられるのであつた。財布の中を一文でも減らす譯ではない酒の味は、平常よりも一層おいしい筈であるのに、殊にそれが何の手數もかからない彼等の所謂『選擧話』の一言で今は容易に出來るのだから斯んな旨い話はなかつた。

この種類のお客さんが日と共に恐ろしい勢で増加するのを見て誰よりも忌々しがるのは、藏の頑固爺で通つた、番頭よりはまた古參の杜氏であつた。

『彼奴等、この醪につけ込んで親桶の一本も飲み倒す氣でゐるんぢや。極道もんが。――番頭どんにも、ちつと目を利かせいと云へ。何處のどん百姓とも知れん者までいゝ氣で喰ひ醉うてるちうぢやねえか。ふん、極寒のしはすに夜の目も寢らんで作つた酒をなあ、勿體ねえ。そげん奴からがぶ〳〵飲み減されて堪まつた話か。――思うち見りや東京の旦那もえれえ事を始めたもんぢや。――ちえつ、これで今日はもう三杯目ぞ。』

店の方から新たに酒の藏出しを云つて來る度に、杜氏は不機嫌に怒つて、使の小僧や藏男たちを相手に當り散らした。

『助え、また二斗ほど出してやれ。――こつちの桶ぢやねえか。何を誤つていちよるんぢや、馬鹿奴。うんと劑を入れてやれよ。もつと、もつと。よし。――彼奴等にやそれで澤山ぢや。』

併し飲む方では直ぐ味ひ別けた。

『ほう――金の取れん酒ぢやと思うち、藏の親爺さんが、こりやまた大分水神樣を利かしてあるわい。何んぼ飲んでも醉はんのが妙ぢやで。』

『おい小僧、お代りぢや。選擧に勝ち度いと思ふなら、もちつと酒らしいものを持つて來いよ。』

『おれの方でも先刻から待つてるんぢやぞ。』

最後には彼等は、斯う云ふ調子で、大趺坐で、威張り散らすほど、厚かましく、露骨になつて來た。それでも店先ですむ者はまだよい方であつた。一層狡い連中になると、一つぱし村々の世話役らしい顏つきで上り込んで、どんなに忙しくしてゐても三人の兄弟の中の誰かに逢ふまでは動かなかつたし、それがすむと、今度は重な運動員たちの耳から耳にさも重大さうなひそ〳〵話をして廻つた。結句それは自分たちの手柄話(それも決して當にならない)か、でなければ、B――氏方で恐ろしく金を蒔き出したと云ふこと、從つて此方もその積りになつて貰はねば困ると云ふ買收費の探りであつたのだが、それでも厚く禮を云つた上に、十分な飲み食ひをさせて歸さなければならなかつた。殊に町で演說會でもある日には、斯う云ふ飲み客や食ひ客が、一層大びらに、恩きせがましい顏をさへして集まつて來た。

兵站部の臺所は、お綱の行き屆いた支配の下で、どんなに多くの供給に對しても決して間誤つかないだけの用意が初めから整つてゐた。不斷でも二三十人の食事は三度〳〵缺かさず賄つてゐるし、また祝儀不祝儀に限らず何かありさへすればすぐ百人以上の客は持ち馴れてゐる田舍の大きな家の主婦に取つては、他で想像するほどそれは困難なことではなかつた。彼女は、さう云ふ場合にはいつでも呼び寄せることになつてゐる古い出入の料理人とその助手連――結婚した前の女中たちとか、出入のかみさんとか、または親類の女たち姪從妹とか、まだ元氣な女鰥(やもめ)とか、出戻りの中年女

とか、斯う云ふ人たちを招集しさへすればよいのであつた。彼等は働蜂が自分の持ち場を知つてゐるやうに、めいめい〳〵その部署を心得てゐて、誰が何んと云はなくとも仕事を運んで行つた。この膳椀が何十人前揃つてゐるか、それに附屬する皿小鉢はどれであるか、道具藏のどの壁の何番目の棚にそれ等は仕舞つてあるか——斯んなことから、どれ〳〵の物をどれだけ切つて、どの鍋でどれから先に煮ると云ふことまで知り盡してゐた。

『どうか賴みやんす。——見計らひでよい具合にしておいてくだんし。——あゝ、それで結構ぢや。』

お綱が云ふべきことはただそれだけであつて、それ以上の命令や差圖は、却つて仕事の手順を狂はす分でも進行を助けはしなかつた。その點では、彼等は權威を持つて働いてゐたので、仲間同士では時々奇妙な衝突が起つた。

『お花さん、この藍手の中皿が足らんで。』

『その中皿ならもうそれだけぢやつたが。』

『そんな筈はないろう。もう三枚はたしかにあつた。』

『そりやあんたの思ひ違ひぢや。この前の御法事の時に二枚こわして、あとの一枚は送膳をした先で、どこやらで失くされて、それつきりになつてるのぢやないな。』

『いゝえ、そりや今一つの方の皿のことぢや。』

『いゝえ、違ひませう。——』

斯んな調子であつた。併しそれだつて決して本氣な膨れ面や默り込みになりはしなかつた。誰かがちよいと入れるひようきんな一言で、當人同士が吹き出せば、はたからも一緒に笑ひ出す共通なはしやいだ氣分に皆んなが支配されてゐた。實際斯う云ふ女たちに取つては、料理事や接待事はそのためにどんなに苦い思ひや忙しい思ひをしても、大がかり

でこたくするほどが樂しいのであつた。――一つは自分たちの最も得意な力を發揮される滿足から、今一つは、これが朝夕馴れすぎたうちの臺所でなく、よその家で、大勢のおしやべりの仲間があると云ふ一種の社交的な悦びから。殊に今の場合は選擧の噂だけでも話の種は無盡藏にあつた。併し彼等一流の興味から云ふと、どちらが果して勝つであらうか、と云ふやうなそんな氣懸りな當にならぬ問題よりは、もつと手近な面白い話――準造の殘して來た非常に美しいと云ふ玄人上りの女のことや、その女の生んだ娘ではない澄子の曖昧な身の上などの方が、多く呼やかれたのは事實であつた。

このことに氣がついた時、澄子の平和は破られた。父親の瘤がその脊中から隱されないと同じ運命で、自分の悲しい秘密は何處に行つても、見逝されはしないのだと思ふ嘆きは、周圍が誰でも皆んな親切な善い人のやうに考へられてゐた場合であるだけに、彼女の心を一層暗くした。同時に今まではただ無邪氣に悦ばれてゐた家の人々の行き屆いた優しい心使ひ――例へば本家の伯母が、菓子とか果物とか、その他子供の嬉しがりさうな食べ物を矢鱈に食べさせたがるとか、分家の伯母のおみきが着物ばかり（浴衣の安物だけれども）作つてくれるとかお鳥がそれを評して、

『お母樣はあなたの口が動いてゐないと、もう退屈して東京に歸りたがつてるのぢやと思ふて心配なさるので。』

とか。

『いつそ作つてくれるならもつとよい着物にしてくれたらよかろ、何んぼでもお店にあるものをなあ。でも、分家は伯父さんも伯母さんも揃つてしわん坊ぢやから、そんなことは云ふだけが損ぢや。』

とか、斯んな惡口をづかく云つてのけて、ちつとも毒氣がなく、却つて皆んなを笑はせながら、誰よりも手まめにその着物を縫つたり、食べ物を拵へてくれたりする、彼女の快活な親しみ。これ等さへ澄子には段々辛らい重荷になるや

うに感じられた。何故なれば彼等の特別な優しさや親切は、取りも直さず

『あんたの美しい繼母樣は、私たちのやうにあんたを可愛がりはしますまい。』

と云つてゐるのであり、または

『可哀想に、この娘は生みの母親の顏さへ知らないのだ。』

と憫んでゐるのであり、その二つのことが絶えず彼等の胸に横はつてゐることは、お饒舌の手傳ひ女たちと何んにも違ひはなかつたからであつた。その點に於て澄子が何等の壓迫をも感ぜず、平氣な自然な親しみで接觸出來るのは此處でも矢張り淸吉だけであつた。

誰も構ひつけてのなかつた彼女に對して持つてゐたその車夫の不思義な役廻りは、今有り餘る肉親の親切な手の中でも、決して必要を減じはしなかつた。澄子の心は彼の傍にゐる時だけ初めて脊伸びをし、せい〳〵した輕い息をついた。丁度東京の家の裏庭でしたやうに。――同じ意味から澄子はその家の汚ない四疊半の女中部屋を時々懷かしく思ひ出さないではゐられなかつた。

『ねえ、新吉、およねはどうしてゐるか知ら。私が手紙をやつたのに何んとも云つて來ないわ。』

『彼奴はいろはも碌に書けないんですから、返事を出すのが極まりが惡いのですよ。』

『お前の所へも來ない？』

『私は何處へ行つたつて彼奴に手紙をやつたことなざありませんね。』

新吉がおよねのことだと云ふと、わざと素ケ氣ない話ぶりをする癖は知つてゐたけれども、今の場合その冷淡は澄子の心持に合はなかつた。

『新吉はこちらで皆んなにやいく云はて、御馳走を食べて、好きなお酒が幾らでも飲まれるものだから、およねのことなんか思ひ出しても見ないのだわ、屹度。』

澄子はさう思はうとした。而して彼を憎むことに依つて自分をいよく一人ぼつちにし、誇張された悲しみで不幸な運命を一層不幸にして見て、その中に一種ロマンテイクな滿足を見出さうとした。けれどもこの氣持は、新吉が日に燒けた顔に並びのよい、しつかりした白い齒を見せながら、にこくして、大きな身體でのつそり近づいて來るのを見る瞬間に、いつでも消滅した。澄子は斯んな時にはおよねのことではないが、何か他のもつと面白い話を彼が自分に持つて來てくれたことを知つてゐた。――彼はこちらでも東京と同じく車を曳いてゐた。而して準造の行くところへは何處へでも附いて行つて行つたので、澄子が非常に興味を持つてゐて、他の人からは委しく聞くことの出來なかつた話――演說會の模樣や、その他家の外での選擧騷に就いても――ただ一人の話手であり、且またそれを自分でもひどく樂しみにしてゐたのであつた。

『お嬢樣、昨日は飛んだ奴が飛び込んで來ましたぜ。』

或る日、町から八里ほど離れた北部のK――と呼ぶ小さい町の演說會に泊りがけで主人を曳いて行つた新吉は、歸ると行きなり話し出した。

『一體誰だと思ひます。』

『誰だか私に分かりはしないわ。新吉の話はいつでもさうだから厭や。さつさと云へばよいぢやないか。』

彼の變に興奮した調子でその土産話が尋常でないことを知ると共に、澄子は熱心な、半分甘へた氣短かさで叫んだ。

『お嬢樣だつて聞けばちよつと吃驚なさいますよ。彼奴が來たんですから。ほら、一所に船に乘り合せた川崎の野郎

が――』

『辯護士とか云つた――』

或る豫覺が澄子を打つた。併し口に出た言葉はそれとは別なものであつた。

『あの人なら來るつて云つてたぢやないの。――來てお父樣のために働くつて。』

『ふん。』

新吉は獸のやうに鼻を鳴らした。『それでやつて來たんだなぞとお孃樣が思つてゐらつしやるなら大違ひでさ。奴あそんな殊勝なんぢやないんです あの時云つたことなんざ皆んな出鱈目の茶雜つぽこだつたのです。探りを入れて見ただけなんです。』

澄子は大人のやうな目つきで新吉の顏を嚴く見詰めてゐた。彼女は、大事な話ほど筋を後廻しにして感想から云はうとする新吉の話ぶりにぢり／＼しながら、自分が今一度催促の叫びを入れるのは一層話の順序を混亂させることを知つてぢつと辛抱してゐるのであつた。

『それで今時分あんな處をうろつき廻つて、何をしてるのかと思へば非道い奴ぢやありませんか。彼奴は大やまを企らんでるのです。――先生をすけに來るどころぢやない、自分で候補者に立たうと云ふのです。』

『あの人が代議士に出るつて。』

澄子はとうとう口を入れた。其時笑ひ出さなかつたのは、新吉がそれを滑稽なことだと感ずる餘裕を與へない位、激した調子で話し續けたからであつた。

『それも本氣でやる仕事なら構ひませんよ。資格さへありや、誰が出てよいの惡いのと云ふこたあないのださうですか

らね。でも彼奴のはさうぢやない。初めからやま師なんでさ。一と芝居打つてそれでぼろい儲けをしやうと云ふのですから詐僞師ですよ。』

北部の、丁度準造が昨日行つた町の近傍に以前は縣會議長までしてゐたが、政治運動で金を使ひ盡し、その上或疑獄事件のために今までの地位をも失くして引つ込んでゐると云ふ、地方の政治道樂の典型的零落者があつた。田崎はその男を自分の親友だと呼び、まだ〳〵その男は根强い力を握つてゐるから、若し自分がその地盤から立つならば、準造とB――氏に對抗して、優に三分の勢力を保つことが出來ると公言してゐるのださうであつた。

『それがね、旦那の方で何んとかして呉れりや、自分で出ることは斷念してもよいと云ふのださうですよ。その一と言で腹の底は見え透いてるぢやありませんか。代議士にたつて出ようと云ふんぢやない、そりやほんの道具なんですからね。つまり昨日は奴さん、その賣り込に來た譯なんです。演說會がすむと宿屋にやつて來ましたよ。例の顏のおつかぶさるやうな名刺を出しやがつて、洒々したもんでさ、私は後で話を聞いて、その時橫つ面の一つも張り飛ばしてやらなかつたのが殘念でたまりませんでしたよ。――だがお孃樣、分かりますか、賣り込てえことが。――金を出せ、さうすりや――』

『分つてよ。分つてよ。――そんな事位。』

澄子は皆までも云はせないで叫んだ。彼女は無暗と腹立たしかつた。船の上でその男に對して抱いた疑問が思ひ出された。彼女は最初から自分だけは、彼が決して信用出來ない人間であることを確信してゐたやうな氣がした。

『新吉は、そんな惡い人だとはあの時思はなかつた？』

『そりやあの時だつて、變にいけ圖々しい奴だ位は思ひましたが、眞逆、これほどの惡(わる)だとは知りませんでしたから

ね。相棒てえのがどうしてしたたか者ださうですから、初めから二人で企らんだ仕事に相違ないつて、佐賀屋さんなんかも云つてゐました。そつちで買はなきや向ふへ持つて行くぞ、と直ぐ斯う出るのは分かつてゐるのですから。何しろ厄介でさあね。』

『新吉、新吉。』

その時向ふの方で若主人の呼ぶ聲がした。二人は準造の滯在中の居間になつてゐる離れで、澄子は男の子のやうな痩せた足をぶら／＼させながら縁側に腰かけて居り、新吉はまた歸つたまゝのなりで、足袋さへ脫がないで、裏庭に通ずる柴戸口に突つ立つて饒舌り込んでゐたのであつた。で、

『はーい』

と高い返事だけはしたけれども、彼はすぐその方へ上つて行くわけには行かなかつた。すると廊下に氣忙しさうな足音を響かせて貞一が入つて來た。

『そんな處にゐたのか。――何んぼ探したか知れんぞ。』

二人を見て、行きなりさう云つた若主人の言葉には、父親似の柔和な平常の調子にも似ず、露骨な叱責が現はれてゐた。併しそれは新吉が其處にゐたのを咎めたのでもなければ、探して見つからなかつたのを怒つてゐるのでもなく、今まで彼が澄子に話してゐたらしく想像されたことに對する明らかな非難――子供に餘計なお饒舌をして心配させると云ふことがあるか、と斯う云つてゐるのであつた。人の善い新吉は、これで間誤ついた。けれども澄子の方はひるまなかつた。

『お父樣のことで、何を聞いたつて心配したつて惡い譯はない。――私は娘だもの。』

この間の澄子はすべてを斯う云ふ風に考へた。これは東京にゐる間は決して知らなかつた感情で、今度の旅行の間に、不意に新しく生じた父親への愛情と共に起つた變化であつた。で貞一が、

『澄ちやんはあちらで伯母さんたちが呼んでゐるぞ。旨い山桃がどつさりあるのぢや、食べてお出で。』

と云つてその場を去らせようとした時には口惜しく不平であつた。彼女は、その山桃がどんなに旨しさうであらうとも、決して一粒だつて食べてはやらない、と決心しながら、眞面目な、恨めしさうな顔つきをして部屋を出て行つた。

『外でもないがの、新吉。』

彼女が行つてしまふと、貞一はすぐ用事を話し出した。田崎が今夜K——町から訪ねて來ることになつてゐる。夕方には途中の或る地點まで着く筈だから迎へに行つて貰ひ度い。併しこの家に案内するのではない。山の別莊（それは町から半道足らずの郊外にある）の方へ連れて行つくれと云ふのであつた。新吉はぢつと聞いてゐた。而して言葉がきれると躊躇なく答へた。

『若旦那、それだけは御免を蒙ります。』

『それはまたどうしてぢや、新吉。』

貞一の女のやうな華奢な頬が赤くなつて、ぴく／＼した。餘りにきつぱりした新吉の斷り方が彼を驚かしたのであつた。

『何故つて若旦那、私は車こそ曳いてゐますが、そこいらの朦朧や渡り者の曳子と一緒には自分だけはしてない積りなんで。——旦那の車を曳いてゐりやつまり旦那の家來だと思つてゐるんですから、あんな碌でもない野郎の、而かも此方に仇をしようつて奴を自分の車に載つけて來る氣には到底なれません。』

『さう云へばこの氣持はおれにも分かる。併し、他には先方を見分ける者がないし、殊に知つての通りの秘密な事情で、滅多な者はやれないのでお前に廻つた役ぢやから、其處を一つ思ひ直して貰はんと困るな。』

新吉は前の通りに栞戸口に突つ立つたまゝ默り込んだ。平常は極く人が善くて、幾らか愚鬧である彼が、どうかすると變に依估地になつて我を張つた。殊に今は自分の考は何處までも正しいものだと信じて、その拒絶に一種子供らしい誇をさへ感じてゐるのだから、一層强情になり得るのであつた。

『さ、それと極まれば一二時間晝寢でもして置け。夕陰になつて出掛けりやいいのぢやから。』

新吉は矢張り默つたまま立ち續けた。おれは行くと云つた覺えはないのだ――彼は大きな、のつそりした身體ぢうでさう答へてゐるやうに見えた。貞一の頬はまたぴく〳〵した。其處へ準造と佐賀屋が、何か二人だけの相談があるらしい風で入つて來た。貞一は緣側を離れて其方へ行つた。

『今夜のことは旨くやつてくれやんしたらうか。』

佐賀屋は庭に立つてゐる新吉にはまだ氣がつかないで、貞一にその事を聞いた。貞一は苦笑して、頸で後の庭の方をしやくつて見せながら、手短かに新吉の拒絶を話した。

『そいつあ――』

佐賀屋は顔をしかめた。それにはただ困つたと云ふ表情以前に、或る感動が表はれてゐた。彼の氣性や趣味から云へば、新吉の態度はよく理解もされ愉快なことでもあるのであつた。併し、準造はすべてを冷然と聞き流した。而してつか〳〵と緣先に近づいたと思ふと行きなり怒鳴りつけた。

『新吉、何を生息氣云ふんだ。貴樣が理窟を云ふことはない。行けと云つたら何處へでも行け。』

默つて主人の方へ向けた新吉の顔の上には、無理な豪當を强ひられた獸が、その獸使ひを見上げて訴ふるやうな哀願と、憤りの交つた絶望が浮んでゐた。

『それがいやなら東京へ歸れ。おれの命令に從はない者が此處について來てゐる必要はない。――歸れ。』

『旦那、そりや――』

『いけない。――田崎がなんだ。』

準造は相手の顏つきに目もくれなければ、口も開かせないで續けた。『石つころを載つけて來る氣になつて見ろ。誰を曳かうが平氣な筈ぢやないか。それを何んとか思ふのは、思ふ奴の方が負けたのだ。――それとも貴樣には田崎が石つころ以上に見えるのか。』

びしやりと打ち下ろす鞭がすねた獸を勇氣づかせると等しく、最後の一言は新吉の心を跳り上らせた。彼はすぐにも駈け出して、引つ張つて來て見せたいほど口惜しかつた。相手を拒んだことがそれを人間並に高めたことになると云ふ、飛んでもない論法に對して、併しさう聞けばまたさうでないとは思はれなかつたので、彼は膨れたまゝ終に叫んだ。・・

『分かりました。』

準造はさう云ふ彼を睨めるやうに見据えてゐた。

『行つて連れて來ます。』

『馬鹿。』

新吉は罵られて初めてほつとしたやうににこ〳〵し出した。その馬鹿が、いつも主人と彼との仲直りの合言葉だと云

ふことは、二人だけが知つてゐた。同時に奇妙なことには、準造の氣短かなかん〳〵した怒り方は、主人の威儀の立派な示し方として、また厳しい男らしい態度として、新吉には本統は氣に入つてゐるのであつた。どうかしておよねを叱りつける場合に、彼自身まで知らず〳〵その調子を眞似した程に。――で佐賀屋が、

『まあ、よろしく頼みやんす。新さん。旦那はこの通りの性分ぢやで――何んにも氣にかけんやうに。』

と取りなし顔に言葉を入れた時には、彼は餘計なことだと云つた風な、いつにない無愛想な顔つきで、碌に返事もしいなで桒戸から出て仕舞つた。いよ〳〵さうと極まれば、無駄口をきいてゐるより、五分でも多く寢ておく方が得であつた。

その晩、臺所の女たちは極まつた食事以外に、別荘の方にまで四五人前の食物を送らなければならなかつたので轉手古舞をした。殊に板前が奥から命じられた料理は、運動員たちに出す普通の食膳よりはずつと復雑のものであつたから、食器もそれに順じた物を新たに藏から出して來るとかなんとかで、一層ごた〳〵したにも拘はらず、例に依つて彼等はそれを五月蠅がるよりは、この騒の中に斯んな手厚い接待を受けるのは一體どう云ふお客様だらう、と云ふことに强い好奇心を持つてゐた。併し内證事には特別に鋭敏な彼等の嗅覺にも、後から送つた一組の客用の寢具で、重なお客様は一人で、その人は泊まつたのだと云ふこと以外には、何んにも嗅ぎ出すことが出來なかつたほど、すべてが巧妙に隠されてあつた。

同じ晩、離れの準造の部屋には三人の兄弟が重要な協議のために集まつてゐた。六疊と茶室造の四疊半から出來てゐて、前にはそれに相當した茶がかつた小庭を控え、後は樹木の多い中庭を隔てて鍵なりの廊下で座敷に繋がつてゐる孤立した位置から、その部屋は不斷でも何か大事な相談事がある場合には、屹度會合所に選ばれるのであつた。兄弟は上

手の六疊の方に、一枚の地圖を擴げた四角な大きい卓を圍んで坐つてゐた。灯は古風な置ランプが一つついてゐるきりであつた。從つて四疊半とのしきりの襖戸まで取り拂つて、夏座敷らしく廣々となつてゐる部屋は可なり薄暗かつたけれども、卓の周圍だけはランプが三人の座り殘した一面に直ぐくつつけて据えてあるために、何處よりも明るかつた。乳色の丸い蓋から浸み出す光は、兄弟のそれ〲に特長のある、併し一樣に共通な或る問題に關して考へ込んだ眞面目な表情と、その思惟の目標となつてゐる卓上の地圖をはつきり照らし出してゐた。

それは選擧區の地圖であつた。而してその上には丁度陣中の參謀官の地圖に見られる軍略の記號のやうなしるしと數字が、赤と青の鉛筆で精密に書き込まれてあつた。青は味方の勢力範圍と、得票の豫想を示し、赤はその反對であつた。尙別に墨で×形の記號があつたが、それは混戰地帶を意味するもので、田崎の一味が餌として見せびらかしてゐる北部の町がその中心地であつた。今までの形勢から云へば立派に勝味を持つてゐる味方が、彼等の陋劣な提議を憎みながら、また彼等が讓ると云ふ得票數に十分な疑を持ちながら、きつぱり反ねつけることの出來ない理由はそれであつた。

『ふん、此處で百纏まるの、彼處で二百は大丈夫だのつて云つたところで、結句投票なんて開けて見た上でなけりや分つた話ぢやないのに、それで商賣をしようと云ふ彼奴等は、泡で酒の錢を取るやうなもんぢや。誰が正氣で相手になれるか。』

この交渉に對して初めから敢然と反對してゐる七郎は、忌々しさうに煙管をはたきながら云つた。

『開けて見なけりや分らん――實際さうだ。併しそれだからこそ彼奴等の提議が問題になるのぢやないな。』

準造はくはへてゐた葉捲を煙草盆の緣に置いて熱心に兄に向つた。故鄕に歸つて以來、殊に兄たちとの話になると、

彼は國言葉を出した。

『豫想の上では、今では僅かに此方が勝だと云ふことにはなつてはゐる。だが誰がそれを證明し得るのです。兄さんの言葉の通り、開けて見るまでは誰にも分かりはしない。同じ理由で彼等が賣らうとしてる投票だつて、何處までが泡で何處までが酒だか斷言は出來ない。ただ分つてゐるのは、幾分でも本統の酒が交つてゐるとすれば取り返しちやならない。彼等の行爲を憎む餘りに、それが酒だと云ふことまで忘れちやならないと云ふことだ。』

『よし、それなら買へ。――ぢやが、金は何處から持つて來る積りなんじや。お前にそんな餘分な金があるのか。』

準造はさつと顏色を變へた。何か云はうとしたが七郎はその隙を與へなかつた。

『最初からはつきり云つてある通り、うちには選擧なんてものに捨てる金は一文だつてありはせんからのう。それだけは忘れないで貰はう。本統を云ふと、世間萬人をお客様にせにやならん商人の家で、どつちが敵ぢやの味方ぢやのと云ふ騷をするのからしておれは不贊成ぢやつたのぢや。』

強く斯う云ひ放つた時、彼は、目の前の弟たちの險しい言葉には氣もつかないかのやうに、ゆつたりと團扇使ひで坐つてゐる長兄の顏を、責め詰るやうに見据えた。

實際、七郎の深い決心を翻さした責任は小兵衛にあつた。前の選擧の時には他人でさへ面倒を見てくれたのだ。準造がどうしても土地から出ると云ふ以上兄弟の我々が見殺しには出來ない。不幸な弟の世話のしおさめと思つて一と骨折つてやるのが道ではないか。――彼は斯う信じ、さう說いた。而してやつと七郎を贊成させたのであるが、ただ運動費の問題について、長兄は次兄を胡麻化したことになつた。と云ふよりは―準造が最初手紙で知らせて來たほど多くは金を持つて來なかつた。その點に、兄弟の氣まづい感情が醸されてゐた。殊に、先祖から受けついだ財産を守ることは、

巫子が神殿の火を守ることとであつた七郎に取つては、日と共に増して行く夥しい入費、熱砂に吸はれる水のやうに、何處にどうなるとも分らずに消えて行く金を、恐怖なしに考へることは出來なかつた。且つ家だけは分れてゐても、資本の流用の點では一つの家と變らない組織になつてゐる關係から、少し纏まつた金の出入や貸借はどちらの主人も昔から獨斷では出來なかつたし、兄弟も堅くそれは守つて來たに拘はらず、七郎は、小兵衛が内證の金を弟に出してやつてゐることを感づいてゐた。彼は兄のその心持が分らないほど冷酷一方ではなかつた。自分自身にしても、口では幾ら强く出てゐても、最後には纏まつた金を投げ出してやらなければならぬ位の覺悟はしてゐたのであるが、ただ斯んな馬鹿騷のために自分に取つては殆んど神聖な家の規則を譯なく破られ、商賣の邪魔はされ、取引上の嚴しい秩序や、堅い信用まで踏みにじられると云ふことが、他の人間らしい感情のすべてを忘れさせるほど彼を苦しめた。而してこの恐怖と苦痛は、田崎一味の無法な提議のために、激しい怒に變じてゐた。

『お前がつまらん事を始めたばかりに、何もかも滅茶苦茶ぢや。まあ、この頃の家の中のていたらくを見よ。何んの様ぢや。百姓は太平樂でただ酒を飲み散らす。何處の馬の骨とも知れぬ者が、やれ、有志者ぢや、運動員ぢや、壯士ぢやと、たかつて來て、座敷のまん中で大趺座で威張り臭つてゐる。みんな二言目には金の話ぢや、とどのつまりが五十あるか百あるか分りもせぬ投票に、五千圓出せなんて吹つかけて來る先生たちまで出て來た。こりや一體誰のお蔭なんぢや、――おれは時々、あんな醉たん坊やかたり共を片つ端から叩き出してやつたら、さぞせい〳〵するぢやろと思ふが、さてお前の大賭博がすむまでは何んぼ腹が立つても辛抱せにやならん。それどころか、兄貴でもおれでも商賣より外に下げたことのないこの頭を、彼奴等の前に下げるのぢやぞ――。飲ませて、食はせて、金まで取られた上にする仕事がそれぢや、斯んな馬鹿々々しいことが世界ぢう何處を探せばあつた話か。』

雷樣と云はれて、みんなを震ひ上らせる彼の怖ろしい怒が爆發したのであつた。彼はまつ青になつて、裂けたやうな血走つた目で弟を、併し兄をも決して見遁さないと云ふ風に、等分に、睨みつけてゐた。若し相手が妻か、召使であつたならば、疾くに抛りつけられてゐたに相違ない重い銀煙管は、筋張つた太い拳でしつかり握られて、その拳と共に膝の上でぶる〳〵震えてゐた。

性格の激しいこの一面は、決して七郎のみのものではなく、どの兄弟の身體にも共通に流れ合つてゐる家の血だと云つてもよかつた。或る意味に於ては、最も激しい、最も根強い心の所有者である長兄が、誰よりも穩和にゆつたり見えるのは、彼の極端な忍耐と克己のせゐであつた。斯う云ふ場合にはその力が殊に有効に利用された。彼は七郎をこれ以上苛立たせないためには、また論爭の範圍を擴がらせないためには、自分としては何處までも今までの沈默を守ることが必要だと信じた。彼は頑固にそれを押し通した。併し準造には長兄の眞似は出來なかつた。彼は七郎に負けない位怒つてゐた。

『それでどうしろと云ふのです。これ以上飲まれたり、食はれたり、金を取られたりしないために、運動を中止しろとでも云ふのですか。』

彼は叩きつけられたものを、叩き返すやうな勢で始めた。『この選擧が僕に取つてどれ程重大な意義を持つてゐるか、少しでも考へてくれたら、今更見つともない愚痴を云へた筈はない。――いや、あんたはこんなことは考へようともしないのだ。あんたの知つてるのはただ金の價ばかりだ。僕が勝つか負けるかよりは、そのためにどれだけの金が失くなるか、その方が氣がかりなのだ。』

餘計な心配はして貰ふまい。僕の金で僕がすることだ。――準造は斯う云つてやりたくつて堪らなかつた。それが云

ひきれないので、一層腹が立つた。七郎はそれを見拔いてゐるので怒は意地の惡い嘲りを帶びて鋭くなつた。

『さうぢや。お前の云ふ通りおれは金の方が餘つ程氣がかりなんぢや。代議士なんてものはおれに用事はないが、金がなくなつては、誰もさうぢやが、殊に商人は手足をもがれた蟹も同じぢやからの。惜しいよ。實際惜しうてたまらん。いや、惜しいと云へば選擧に捨てる金どころぢやない。お前の身體に今日までかけた金がおれは恐く惜しい。――』

『それが本音だ。十呂盤に乘らないものは、兄弟の愛情も義務もあんたの世界には存在しないのだ。』

『いや、寢言は云はさんぞ。生れ落ちるとからお前の身體が食うて來た金額を考へて見よ。五體から金色の後光の射さんのが不思議な位ぢやに。ふん、馬鹿々々しい。十呂盤づくで誰がそんな金を捨てられるか。』

お前のやうな片輪者のために。――怒に我を忘れた七郎にも、尙ほこれだけは云ひ得なかつた運命の一言を、準造は、兄のへの字なりの皮肉な口許と、敵意の燃えた凝視の中にはつきり感じた。全身の神經がぴりつとした。心臟ぢうの血は顏に突き上つた。と、大きな、苦しい何かの塊まりが、咽喉を壓しつけて言葉を遮ぎつた。準造は十秒以上間をおいて、やつとこれだけを云ふことが出來た。――

『今日まで僕の身體にかけた金は、僕が片輪者で可哀想だと云ふためであつたのなら、この際今一度十呂盤に載らん金を使つてくれてよい筈だ。僕は現在だつて片輪なんだから。――子供の時分と何んにも變らない、この通りの佝僂の一寸法師だ。』

きつぱりと、が今までの尖々しさもなければ、また感傷的な何物もなく、ただ正直に裸身でぶつつかつた彼の調子は、却つて兄の心を刺した。七郎は顏をしかめて默まり込んだ。準造の方は云ふだけのことを云つてしまつて、落ちついた冷靜を取り戻した後までも、彼は苦しさうな表情を變へなかつた。

『貞一か、佐賀屋がもう歸つて來さうなものぢやな。』

小兵衛がその時靜かに口を開いた。彼は自分の沈默を破る時機と態度を心得てゐた。今までのことは見もしなければ聞きもしなかつた人のやうな風で、田崎と會見のために――云ひ値をどの程度まで負ける意志があるか、その豫備交渉をするために、別莊に出向いてゐる二人のことから云ひ出した。

『かれこれ十一時になりやせんか。――準造、何時ぢや。』

準造は卓の上の地圖の端に、抑えの代りに置いてあつた自分の懷中時計を取上げて、開けて見て、ぱちりと閉ぢた。

『二十分前だ。』

『中々手間がかゝるな。』

明かにそれは自分に話しかけたのだと知りながら、七郎は相手にならなかつた。

『ふん、彼奴飲み助ぢやと云ふから、二人を良い相伴にして、前祝の氣で飲みくさつてるんぢや。』

彼は腹の底で憎々しくその光景を思ひやつた。が、常の如く直ぐその感情を口から迸らせることは出來なかつた程、心の一部が準造の言葉で痺らされてゐた。彼は矢鱈に煙管を詰め代へては、灰吹の音を高く響かした。

『ところで先刻の話ぢやがのう。七郎。』

小兵衛は終に、濃い煙越しに、默つた彼の顏を見やりながら、呼びかけた。

『おれは先方がせめて半分位で手を打たうと云ふなら、一と奮發してもよいと思ふが、お前の意見はどうぢや。――斯んなことは運ぢやから、それで勝負が極まる譯ぢや勿論ない。併し乘りかかつた船で、するだけのことはせにやならん。殊に兄弟として、應分の義務を果しておけば、どちらになつても、後々心殘りがなからうとおれは思ふ。早い話が、

親類を二三本腐らした積りにならうと云ふのぢや。ただこれだけは準造にも云つて置く、彼奴等が何處までも慾の皮を張らして、五千圓が一文缺けても賣らんと云ふ態度に出れば、當然この話は打ち切と思うて貰はう。お前の立身の道が何んぼ大事でも、横井家の安全には代へられん。それだけは、先祖に對して、わしが何處までも守らにやならん義務ぢや。——のう、七郎、さうぢやないか。」

準造に云ひ聞かせてゐるやうに見せて、急に自分の方に贊成を求めた小兵衛の仕方を、七郎は、兄貴のいつもの狡い手だ、と考へて聞いた。それに贊成させることは、結句、家の安全を脅かさない程度に於いては、(今の例で云へば、向が云ひ値の五千圓を二三千圓までに負けさへすれば)買ふことに異議を云はせない方法であつたから。この流儀で、家政上のすべてのこと、殊に金錢上の問題では、七郎が幾ら頑張つても、また小兵衛が決してそれに反對しないで、十分に彼の意志を尊重するやうに見えてゐても、最後に極まつたところでは、矢張り兄の思わく通りになつてゐるのが常であつた。そのやり方が自然で巧妙であればあるだけ、七郎にはこれ程忌々しいことはなかつた。併し何んと思つてもその點では兄には叶はなかつた。今度も立派に負かされるのだと思ふと、返事をする氣にもならなかつたので、彼は前よりも一層澁い顔つきをして、默つて、煙管の音ばかり厳しく響かせてゐた。併し小兵衛から見れば、彼のその態度がすでに返事であつた。それ以上同意を強ひたり、相談めいたことを云つたりする必要はなかつた。で、その儘静かに口をつぐんだ。

準造は二人の兄たちの重い沈默を前にして、或る考に思ひ耽つてゐた。家、財産、その相續——これは長兄の言葉が彼に暗示した問題であつた。併しその時同じ問題を胸中に往來させてゐた兄たちが、めいめいの視野から見方に幾分の相違はあつたにしても、それの神聖を信じ、またその上に加へられた法律上の約束に對して何等の疑惑をも抱かない點で

は全然一致してゐたに比ぶれば、準造の思想は非常にかけ離れたものであつた。彼には、家の財産を守ることを祖先に對する第一の義務と感じてゐる兄たちの考へ方からして無意味に見えた。またその主權が長兄にあつて何故次兄にないか。あれだけ利かぬ氣の七郎が、小兵衛の三分の一にも足らぬ分前で何故滿足してゐなければならぬのか。——殊に、三男の自分には財産らしいものは一文も貰へなかつたのだ。お前には學問をさせてやつた。洋行をさせてやつた。それがお前の分前だ。三男坊の分際としては過分な取扱と思へ。それもお前の身體が普通でないから特別に與へられた恩惠なのだ。——彼等はさう云ふ氣であらう。それならば何んと云ふけちな恩惠だ。學資まで計算に入れるのは、生れ落ちるとから家であてがつた乳や米の代まで數へあげるのと變りはない。殊に洋行までと云へば立派に聞えるが、四五年目からは皿洗をしてやつと償つたほど、僅かな金しか呉れはしなかつたではないか。そのために自分の要求權が消滅したと云ふのなら不當も甚だしい。假りに一歩を讓つて、それで我慢したとしても、次兄やその他近い親類が、本家の富を利用するやうに自分がそれを利用することが何故出來ないのだ。彼等が新しく工場を建てたり、支店を置いたり、商品を仕入れたりする場合に容易に動かされる金が、自分に取つては何より必要な社會的の足場を築かうとしてゐる今、何故拒まれるのだ。たつた五六千圓がどうしてそれほど問題にされるのだ。志を得さへすればそれ位の金は何倍にしても返してやれるではないか。實際、兄たちの持つてゐるだけのものを自分に利用させるなら、もつと氣の利いた仕事がやれるのだ。資本の運用から云つても、斯んな田舍の片隅で遊び事のやうな古風な商賣をするよりは、その方がずつと正しい方法なのだ。——併し彼は二人の兄に取つてこれ等の意見がどれ程怖ろしいものか知つてゐた。口に上せる勇氣はなかつた。——と云ふよりは、その考へ方は違つた意味で、彼自身に取つても同樣に怖ろしかつたのであつた。考へ、そのものよりは、さう云ふ考へ方が強い魅力を以つて迫つて來る自分の憐むべき無力な位置が。——金のないことが。——

掏摸が田舎者の懐中を覗ふと同じ態度で兄弟の金に（それも從來の彼には、何んだ、あれつぽつちの目腐れ金が、としか考へられなかつた金に）目をつけたことが。――同時にまた彼にさう云ふさもしい氣を起させた直接原因である現在の仕事――選擧に於ける明白な不合理と不道德、詐僞、瞞着、陰謀、奸策のすべてが、その場合どう思つても避け得られない陷穽であつただけそれだけ、何もかも忌々しく、醜惡で、腹立たしかつた。彼は顏を引き歪めて、やけに卷煙をかみしめてゐた。

十二時近くになつてやつと貞一が別莊から歸つて來た。田崎は三千圓までの減額なら承知するらしい。但し、仲間にも相談の必要があるから、一應引き取つて改めて返事を持つて來ると云ふことになつた。佐賀屋は居殘つて、朝早く彼を見送つてやる筈だ。――報告は斯うであつた。

ところが明る日の夕方、主人の使で郵便局まで行つた新吉が、反對派の本部で田崎を見たと云ふ意外な知らせを持つて來た。郵便局はB――氏の本陣になつた旅館から遠くなかつた。新吉はどんな景氣か見てやれと云ふ氣で、餘計な横町を一つ通り拔けてその方へ廻つて行つた。而してS――黨公認、衆議院議員候補者B――氏選擧事務所本部と書き出した立看板の大きな文字を、強い敵愾心を持つて尻目にかけて通り過ぎようとした時、丁度その立看板の後から出て來た田崎と出逢ひ頭に顏を見合せた。あつと思ふと、向では一層あわてて家の中に逃げ込んだと云ふのであつた。

『二た道かけたな。』

準造は田崎と出逢つた時、彼が選擧區民の陋劣を罵つて、どちらでも構はない、一文でも多い方に投票を賣りつけようとのみしてゐるのだと云つた言葉を、苦々しく皮肉に思ひ浮べた。

『ふん、自分で證明して見せりや間違ひはない。』

『おれは相談のために一應引き取ると云つた言葉が、どうも曲者ぢやと思つてゐた。』

小兵衛だけはいつもの態度で別に驚いた風もなかつた。七郎は更に當然の報知として受け取つた。

『彼奴等のやり方はみんなその傳ぢや。嘘と懸引でないものは一つとしてありはせんのに、眞に受けて乘る馬鹿があるから、世間は廣いつて。昨夜でも彼奴は初めからその氣でかかつてゐたのが貞一や佐賀屋には分らざつたのだ。旨く閉め込んだ積りが、見事に裏をかかれた。――どれもこれも阿呆の揃ひぢや。今に見よ。どんな目に逢はされるか知れたもんぢやないから。』

寧ろ、その結果を氣味よがつてゐるやうな七郎の冷罵は、當事者よりは兄と弟に對して昨夜の餘憤を洩らしたものであつた。併し直接の責任者として、その報導に人一倍の驚と怒を抱いてゐた貞一は、伯父の侮辱をもただ身一つに感じた。抗辯の餘地がなかつた。彼はかつとしたまゝ目を見据えて、唇を噛んでゐた。

けれども、今朝夜明け前に三里からの道を彼と共に歩いて、東の山の下まで見送つて來たばかりの佐賀屋は、その報知を聞かされてもちよつとは信じきれなかつた。彼は頭を振りながら、新吉を部屋の片隅に引つ張つて行つた。

『そりや本統の話か、新さん。他人の空似で、世間には似た顔は多いもんぢやぞ。丁度一の暮でまだ灯もつかざつたと云へば、誰かと間違へたんぢやないかな。え。』

『幾ら空似にしろ、あんな狐見たいな面がさう〳〵何處へでも轉がつてゐられますかつて。尤も尻つぽだけはありませんでしたがね。大丈夫彼奴です。』

新吉は別莊での交渉の顛末をまだ知つてゐる筈はなかつた。併し、それがどうであつたにせよ、田崎をあの看板の後で見たことは、昨日自分に課せられた腹立たしい仕事が、明かに無駄骨折になつた證據であつたから、佐賀屋の頼みで

その場の委しい話を繰返して聞かせながらも彼は不機嫌に膨れてゐた。今一度引つ張つて來いたつて、誰が曳いて來るもんか。——と云つてゐるかのやうに。

『あの狐奴、それぢやおれと別れると、涼しい麓の茶店で一と寝入して、昨夜の寝不足を取り戻す。それからおれが十分に歸りついたと思ふ頃を見計つて、のこ〳〵起き上つて引つ返して來たと云ふ段取りぢやな。』

『乾度そんなことでせうよ。』

『何んと云ふ惡黨ぢや、そんな眞似をさせまいと思へばこそ、暑い道を汗水垂らして送つてまでやつたのに。それぢやまるでおれの影法師を踏みながら後からついて來たと一つぢやないか。太々しいのにも程がある。』

佐賀屋は生れて五十三になる今日まで斯んな口惜しい目に逢つたことはないと云つた。彼は氣狂のやうに怒つてしまつた。

『うぬ。どうして呉れるか。』

併し人々の激しい怒は、一二日もすると他の意外な出來事をきつかけに對象を轉じなければならなくなつた。或る村で味方の運動員が數名の巡査に包圍されて、三人の男が警察署へ引かれて行つた。同じことが同時に違つた場所にも起つた。これを發端として、その後は殆んど毎日のやうにこの拘引沙汰が繰り返されたが、それが恐く準造の味方のみで、S——黨の候補者たるB——氏の運動員には決して及ばなかつた。と云ふよりは、彼等はその保護で仕事をした。多くの巡査が他の郡から送られて來た。明治の政治史に大きな汚點をつけた××内閣の有名な選擧干渉が始まつたのであつた。

『此方は金のかの字をほのめかしても直ぐ引つ張られるのに、S——黨の奴等は巡査に張り番をさせて札びらを切つて

る。——斯んな片手落な仕打があつてたまるか。』

彼等はその筋の不公平な壓迫を憤り、敵の卑怯を罵ると共に、また何をされたつて負けるものか、と云ふ強い敵愾心に燃え立つた。丁度、砲彈の下に曝された兵士たちが、その位置の不利を知つて死物狂ひの勇氣を振ひ起すと同じく。けれどもその決心を以つて突進しようとした時、人々は一層強い困難にぶつつかつた。それは有權者、取り分け百姓たちが、干渉に怖ぢ氣づいたことであつた。實際、彼等の單純な判斷からすれば、幾ら金を取つても心配のない相手が一方にあるのに、巡査から睨まれたり拘引されたりまでして他の一方と取引をする必要はなかつたので、彼等は横井方を避け出した。でない者はその犧牲を楯に法外もない金を貪らうとした。それがすぐ嗅ぎ出される。巡査が飛び込んで行く。忽ち一と群の選擧違反者が出來上がる。——決戰期として一番大事な最後の一週間、選擧區の到るところに頻々として湧き起つたこの騷は、双方の位置を顚倒させるかのやうに見えた。準造の地圖に於て、赤鉛筆に對して確かに四割は多かつた青鉛筆の記號が、今や明瞭にその分布を狹め、尙どの程度まで減ずるか、現に減じつゝあるか、見當がつかなかつた。嚴密に調査する手段さへ失くした。動かぬ味方と賴んでゐる村々は絕えず巡査から監視されてゐたし、それを使さうとする者は片つ端から捕へられたから。斯うして彼等は勝とも負とも想象されない泥濘たる狀態のまゝ選擧期日を待たなければならなかつた。

この頃の毎晩の例で、伯母たちから叱かるやうに云はれて、やつと小さい從兄たちの眠つてゐる二階座敷の寢床に入つた澄子は、しつきりなしに駈け出たり駈け込んだりしてゐる車の音、土地にはまだ珍らしい自轉車のけたたましい響。人々の足音、呼ぶ聲。怒鳴る聲。もう幾日か徹夜狀態の續いてゐる家の中の異常な物音、重大な運命の推移を暗示

してゐるすべての擾亂に對してぢつと耳傾けてゐた。彼女は今夜がどう云ふ夜であるか知つてゐた。決して眠られはしないと考へた。

でも澄子は矢張り少し眠つてしまつた。而して眠りながら或る一つの聲に注意を呼ばれてゐた。それは目を閉ぢる前まで彼女を引きつけてゐた騷がしい音響とは別種類の、ものに壓しつけられたやうな、哀れつぽい、不思議な聲であつた。

『何んだらう。』

さう思ひながら、まだうと〳〵してゐた。聲が高まつた。途端に彼女ははつきり目が覺めて、それが女の泣聲であること、而かも自分の寢床のすぐ裾から聞こえてゐることに氣がついた。身を起して見ると、其處にうつ伏して咽びあげてゐる女の白い浴衣の姿が、部屋が暗いのでよく分らないけれども、正太郎の小さい時の守で、その後ずつと子供達の世話をしてゐるのだと云ふ女中の梅のやうな氣がした。蚊帳から出て見ると矢張りさうであつた。

『どうしたの、何を泣いてるの。梅やん。』

澄子は國風の呼び名でその名を呼んで尋ねながら、或る不幸な豫感に胸をつかれてゐた。斯んな泣き方で臺所の隅で激しく泣いた女たちを彼女はこの頃三四人以上も見てゐた。何處かで拘引沙汰があつた度にそれは起つた。女たちは、少くも男たちのやうに、その罪の種類や原因を考へる餘裕はなかつた。警察署に引つ張られたと云へば、それでもう彼等の夫若しくば親兄弟は、泥棒や掏摸と同じ境遇に落されたのであつた。彼等はこの怖ろしい悲しみに堪へることは出來なかつた。で、その不運な知らせが耳に入ると共に、懇意な女たちは氣狂ひのやうに飛び込んで來て、女同士の心安だてから、お綱やお鳥を相手に泣いたり、訴へたりした。——澄子は梅の家は父親も兄も揃つて熱心な運動員であること

を知つてゐた。

『何か間違ひでもあつたの。え？』

梅は一層しやくりあげて泣き出した。それが返事であつた。

『お父さん？兄さん？』

『父親でござりやんす。お嬢様、あの年寄が牢屋に入るぢやんて……いゝえ、年寄ばかりぢやござりやんせん。今夜はこつちの者は一人殘らず捕へられると云ひやんすから、兄だつて乾度今に引つ張られるに極まつてをりやんす。斯んな情けないことがござんしやうか。——』

涙と泣聲の間からきれぎれにやつとこれだけを云つた梅の言葉を聞いた時、澄子は彼女がその父親や兄のために悩れて泣いてゐる今夜が、自分の父親の運命に取つてもまたどんなに重大な夜であるか、新たに告げ知らされた氣がした。

『起きて下に行つて見よう。』

彼女はさう考へた。伯母たちから幾ら何んと云はれても、その儘續けて小さい從弟たちと呑氣らしく其處に寢てゐることは出來なかつた。斯う云ふ場合にまでその小さい二人並に取り扱はれることからして口惜しかつた。で、意地でも起きる氣で、床の間の方のランプに近づいて寢卷を宵の浴衣に着換へてゐると、

『姉さん、起きるの。ぢや僕も起きる。』

と叫びながら、左隣の床に寢てゐた十一の正太郎が蚊帳をめくつて飛び出して來た。

『あら正ちやんは寢てなきやいけませんよ。お母さんに叱られてよ。』

澄子が喫驚して留めようとする手をすり抜けて、彼は軽卒のまゝとんとんとんと階段を駈け下りてしまつた。父親似の優しい顔をしてゐる癖にひどく癇性なその子供は、周圍の騒動に刺戟されてまだよく寝ついてゐなかつたのであつた。同時に彼は今夜のことを彼の見方で見てゐた。階下に下りさへすれば、お祭とお盆が一緒になつてゐるほど、賑やかで、明るくて、面白いのだと云ふことを知つてゐた。

『仕様のない正ちやん。』

澄子は彼を見送つて顔をしかめた。またその小さい従弟と同じ行動を取るやうになつたのが、彼女の大人ぶつた心を傷づけた。で、彼の起きたのと自分の起きたのとは何も關係はないのだと云ふことを云ひ譯するために（誰に向つてか分らないが）澄子はわざとゆつくり帯をしめて、また階段の上で蚊に足を食はれながら長い間立つて（その癖本統は二分も立つてはゐなかつたが）それからすまして下りて行つた。

階下はどの部屋も晝のやうに明るかつた。どの部屋にも人が一杯詰まつてゐた。それが悉く男ばかりで、年寄も若い者も大きな男も小さな男も、みんな日に燒けてまつ黒になつた顔に、或る共通な表情を浮べながら、遽しく出たり入つたり、また一つの部屋から他の部屋に誰かを探し廻つたりしてゐた。或る部屋には五六人の者が秘密な評議にふけつてゐた。彼等は殆んど呟き聲で、普通の言葉も使はないで、暗號と數字と手眞似と身振で話した。そのうちの一人は十呂盤を抱へてゐて仲間のあげる數字を計算した。彼等程でなくとも、すべての人々は話をしても決して大きな馬鹿聲やはしやいだ調子で話しはしなかつた。何かゞそれを憚らせてゐた。同じ原因が、それだけ大勢集まつてゐる人間にも、目まぐるしいその出入りにも、またそれ等を照らしてかん〳〵してゐる部屋々々のランプの明るい光にも其處を決して陽氣にしないで、たゞ徒らにいら〳〵した空騒ぎと、氣狂ひじみた雑音で掻き亂してゐるやうに見えた。

『一體もう幾時なのか知ら。』

これ等の部屋々々の前を廊下傳ひに通りながら、斯う時間のことを考へた澄子は、伯母たちのゐる茶の間へ歩いてゐた足を、左手の中廊下の方へ向け變へた。家で時計の間と呼ばれてゐる(まだH本に時計が澤山なかつた頃、長崎の蘭人の店で買つたのだと云ふ八角形の奇妙な古時計がかかつてゐるために)部屋を覗いて見ようとしたのであつた。けれども行つて見ると、その六疊の部屋にはいつもと違つて灯がついてゐなかつた。人も珍らしく誰もゐなかつた。而して平生だと外の廊下からでもはつきり分かる正面の時計は、ひつそりと小暗い壁の上に、上手から射す明りを受けて、僅かにその盤面を薄白く浮かしてゐるに過ぎなかつた。澄子は壁の下まで歩いて行つて、それでも目をすがめてやつと二つの針の位置を確かめた。十二時十五分過であつた。けれども本統を云ふと、その時には澄子は時計よりはその上に明りを貸してゐる隣座敷の事あり氣なもの〳〵しい光景の方に目を引かれてゐた。他の部屋は暑いので何處でも壁以外のしきりは開けつ放してあるか、取り外づされてゐる中に、その一と部屋のみは閉め切つてあつた。それも簾戸でなしに昔間はなかつた白い障子が四枚ながらぴつたりはまつてゐた。而して出たり入つたりしてゐる人たちまで、妙に用心深く開けたてしてゐる有様が、其處に何か大事な物でも隱してあつて、人から見られるのを怖れてゐるかの如く感じられた。

『何をしてゐるのか知ら――彼處には誰がゐるのか知ら――』

隣りの時計の間に人影がないのも、決して偶然ではなかつたのだと思ふと、彼女はそれほど隱されてあるものが何であるかを知りたかつた。而してその子供らしい好奇心は一枚の障子の腰から二尺ばかりのところに、わざとのやうに開いてゐる小さい破れを見出した時、他のすべてのことを忘れさせた。澄子は我と身をかがめて、吸ひ寄せられるやうに

穴に目を當てた。正面に明るい空氣ランプの光を禿げた頭の上に受けて伯父の小兵衛が坐つてゐた。その左に父の準造がゐた。その外は分家の伯父と貞一と佐賀屋が見えないだけで、重な幹部の人々が四五人揃つて、向き〳〵の場所に陣取つてゐて、めい〳〵何か紙の束のやうなものを左手に持つて、右の手先ですばしこくそれをめくつてゐた。父や伯父まで同じことをしてゐた。而してめくり終つた紙は更に幾つかの薄い束や厚い束に區別されて、細い紙で無造作に中央を結ばれて二人の前に投げ出された。其處には既にその束が小高く積まれてゐた。

人々の手つきと、その動作と、めくられてゐるものの恰好から、一目見てそれが何であるかを知つた時には、澄子はたゞはつとした。見てはならないもの、怖ろしいものを見たといふ意識が彼女を震えさせた。にも拘はらずその穴から目を離すことは出來なかつた。それ程それは人の心を引きつける變に重苦しい見物であつた。――彼女はまだそんなに夥しい紙幣の束を見たことはなかつた。

『何を見てるのな。そんなところで。』

不意に後で呼びかけた甲高い子供の聲に吃驚してふり返ると、いつの間に來たか正太郎が立つてゐた。

『何んでもないのよ。さああつちへ行きませう。』

澄子は周章てて障子から離れたが、併しその目敏い子供は彼女のしてゐたことを見逃さなかつたので、自分も覗いて見ないでは承知しなかつた。

『ぢやちよつとよ。靜かにしないと分つてよ。』

大きな聲を立てられさうなのが一番怖かつたので、澄子は仕方なしにさう囁いておいて人差指でそつと秘密の破れ目を教へてやつた。隠れん坊の時の合圖のやうに。正太郎も丁度その仲間のうなづくやうなうなづき方で答へた。而して

いたづらつ兒らしい笑顔で、そつとその穴に顏をさしつけたかと思ふと、彼は突然吹き出して、きやつ〳〵とカウンタ・テノルの笑聲を響かせながら駈け出したので、澄子は不意を打たれて、吃驚して自分まで一緒に駈け出した。廊下をばた〳〵云はせながら。

『いやな正ちやん。靜かになさいつてば、わざとあんなに笑つて。知らないわ。』

澄子は走りながら腹が立つてたまらなかつた。で、後から怒りつけると、正太郎はぴたりと足をとめて、ふり返つた。

『ぢや澄ちやんはあの體操見らざつた？生野のおぢさんのあの耳の體操。今夜はうんと上手に動いてたぢやないか。ほらな。』

彼は兩手で自分の左右の耳の上端を引つ張つて、丁度蠅を追ふ時の馬がするやうに、激しくぴく〳〵とやつて見せながら、

『どんなもんぢや。』

と云ふ風に、また面白くてたまらないやうにきやつ〳〵と笑つた。脊中にゴム鞠で大きな瘤を拵つて、それでおかしな風に腰をかがめて東京の伯父さんの後を平氣に歩いて見せたりする茶目な彼は人の眞似が上手であつた。而して今の耳の一件は伯父の小兵衛の右手に坐つてゐた親類の一人で、特別に大形な突つ張つた耳が、獸の耳と同樣に動くことのために、いつも子供たちの好奇心と笑の種になつてゐる年寄の眞似だと知つてゐる澄子は、實際自分が覗いた時にも、その奇妙なきのこのやうな耳が、赤い禿頭の兩側で見事に體操をしてゐたのを思ひ浮べた。（何かものに興奮してゐる時、その耳は一層盛んに動くので。）

『蕗だつて、さう云へばあのおぢさんはどこか馬見たいだもの。』

さう思つて、尚びく／＼やつて見せる正太郎のとぼけた顔を眺めた時、澄子はたまらなくなつて吹き出した。と、後から／＼變におかしいものの塊りが胸から、脊中から、頸筋から、身體のあらゆる部分からこみ上げて來て、笑ひやめようとしても止めることが出來なかつた。大きな聲を出すまいとすればするほど、その塊は膨れ上り、無限にその數を增して彼女を壓倒した。澄子は涙を流して、身悶えしながら駈け出した。その得體の知れぬ彈力性の怪物から逃げ出さうとするかのやうに。而してそのすぐ後から一層無遠慮に笑つてゐる小さい仲間を從へたまゝ、呆つ氣に取られた伯母たち（彼等は手傳ひの女たちと共に夜食のお結びを握るのに忙しかつた）の間に夢中に飛び込んで、茶の間の隅に突つ伏した時には、彼女は今夜の嚴肅な意味や、梅の泣き聲に呼び起こされた不安や、父親の運命に對する怖れや、またはあの明るい瓦斯ランプの下に見た胸苦しい、異常な光景や、あらゆる不自然な大人臭い覊絆から脱して、同時にまた常はあれほど輕蔑してゐる小さい正太郎と同類になつてふざけてゐると云ふ不面目をも忘れて、眞に十四の小娘らしい笑の洪水に溺れてゐた。

併し十分の後には、澄子は年よりは落ちついたいつもの彼女で、再び茶の間から出て來た。呆つ氣に取られた伯母たちは最初の驚を取り返すと共に（それも笑つて駈け込んだのに喫驚したよりは、寢てゐた筈の彼等が寢てゐなかつたのに驚いたので）今一度彼等を二階に歸らせなければ承知しなかつた。澄子はまた笑つた後の前とは丸で違つたせい／＼した氣持から、素直に伯母たちの言葉に從はうとした。で、逃げ廻つてゐる正太郎をば打つちやつておいて、一人でずん／＼奥二階の方へ急いでゐると、階段下と離室へ出る廊下との食ひ違ひになつた廣縁の角で新吉に出逢つた。

『おや、お孃様まだ起きてゐらしたのですか。ぢや、先刻の一幕を御覽になりましたね。いい氣味ぢやありませんか。

あれで私はやつと胸が透きましたよ。實は心祝ひの積りで今藏へ行つて杜氏さんに冷たい奴を一杯貰つて來たところなんですが、全くの話がお嬢様、新吉は久しぶりに酒を飲んだ氣がしましたね。これまでは――』

不斷はむつちりしてゐる癖に、何か怒るとか、また反對に滿足なことがあるとかすると、急にお饒舌になつて一人飲み込みでべら〳〵まくし立てる新吉は、その時も行きなりその調子で、而かも少し醉つて嬉しさうに話し出して澄子を喫驚させた。

『何を云つてるの新吉は、私は何かあつたことなんて知りはしなくてよ。寢てゐて先刻起きたばかりだもの。』

『へえ、そいつあ惜しいことをしましたな。お嬢樣にあれだけは見せてあげたかつた。』

『また初まつた。何を私に見せたかつたと云ふのよ。』

『え、なあに、彼奴がまた來やがつたんでさ、あの狐野郎が。』

澄子にはやつと六つかしい話の糸口が遁れ出した。

『臆面もなく此處へやつて來たんですぜ、お嬢樣、それでね、この前の威勢はてんでないんです。もう幾らでも構はない。百でも二百でもいいからどうか買つて與れつて、まるで乞食の物貰見たいだから呆れるぢやありませんか。それで若旦那や佐賀屋さんから滿座の中でうんと油を絞られた上、百圓は愚か一文半錢だつて御免だと突つ放されて、先生落膽してとぼ〳〵出て行つた風つきつてありませんでしたぜ。』

『ぢや向の人が買つたと云ふのは嘘だつたの。』

『なあに、ペテンにかけられたんでさ。そんなことにかけちや向は黒人揃ひださうですからね。千でも萬でもうんよしよしと云ふ調子で今日までは旨く釣つて置いて、もう大丈夫と見たから見事にしよんべんと來たんでさ。』

「何んだつて。」

『はつはつは、もう御用はないから一昨日來いと云ふことなんです。お嬢様、分かりましたか。私はその時の奴の面喰つた有様が見てやり度うござんしたね。』

尋ねた言葉の意味だけはそれで分つた。けれども尙一つ分らないこと、併しその方は容易に口に出しては尋ねることが出來なかつた程怖ろしい或る疑問を澄子は新吉の言葉の中に――先方はもう大丈夫と見たからと云ふ一句の中に感知してゐた。田崎をやつつけた滿足で子供らしく夢中になつてゐた新吉には、自分のお饒舌が相手にどんな重大な暗示を與へたか、最初は氣もつかなかつた、が、それつきり默り込んで、父親似のきつい表情でぢつと彼を凝視した澄子の危惧に充ちた目にふとぶつつかつた時、彼はどきんとした。

『ぢやお父樣は負けるの。』

口では問ひ得なかつたことを、彼女の目は露骨に鋭く詰問してゐた。新吉はまつ青になつて狼狽した。斯んな場合にこの娘が決して誤魔化されないことは、彼にはよくわかつてゐたから。

丁度その時主人の聲で彼を呼ぶのが向の廊下で聞こえた。

『新吉、新吉。』

『はー―い。只今。――お嬢樣、御心配なさらないでもうお休みなさい。大丈夫です。新吉が受け合ひます。何あに、あんた奴等に負けてたまるもんですか。勝ちますよ。屹度勝つて見せます。』

彼は威勢よく、併し田崎に就いて話した時とは明かに違つた調子で保證しながら、

『は――い。』

と、續いて呼び立てる聲に答へながら。うす暗い廊下をその方へ駈け出した。

取り殘されて一人ぢつと其處に立つてゐた澄子は、急に熱い潮のやうなものが胸の底から湧き立つて、それが顎から鼻腔へかけて突き上つて來るのを感じた。と、大きな重い涙が止め度なしに流れ出た。彼女は滅茶苦茶に悲しかつた。口惜しかつた。腹立たしかつた。絶望した。何と云ふはつきりした對象なしに、否、あらゆるものに對して、十數時間後には乾度明白になるに相違ない父親の不幸な運命が、それを知つて皆んなが知らぬ顏をしてゐることが。一分の暇もないやうに駈け廻つたり、仔細らしく囁き合つたりしてゐる癖に、時分時になれば爭つて食べたり飮んだり出來ることが、その供給のために伯母たちや女たちが平氣でいつもの無駄口を聞きながら結飯なぞ握つてゐたことが。新吉のだらしない饒舌り方が、殊にこの場合に醉つて浮かれてゐたことが。さう云へば、彼よりも一層惡く自分が正太郎とふざけて笑ひこけゐたことが。――彼女は誰にも見られないで一人で泣いて泣いて泣き通したかつた。其處は人の通り道であつた。と云つて梅のゐる二階へ歸つて行く氣にはなれなかつた。澄子はいつか凭れてゐた壁から身を離すと、まつ直に階段を上る代りに、廣緣を左に折れて鍵手の廊下を離室の方へ行つた。父や伯父たちが向にゐる以上は離室は明いてゐる筈であつたので。

けれどもその前まで行つて見ると奧の間の方から幽かな火影が射して人の話聲が洩れてゐた。

『私がこれほど賴んでもあんたは承知が出來んと仰しやるんぢやな。』

『何度云はうがおれの返事は初めから極まつてゐる。出來んと云へば出來んのぢや。』

これ等の言葉でそれが分家の伯父と佐賀屋であることを知つた時、澄子は今までの涙を忘れた。と云ふよりは秘密に對する人間の、殊に子供の激しい興味は、感情のそれほどの激動の中にも、火焰の下のサラマンダーの如く尙容易に生

きてゐた。彼女はその場所から動くことが出來なかつた。二人とも興奮した調子で聲が高くなつてゐるし、襖戸で遮ぎるものがなかつたので、話は一句の曖昧もなしに聞かれた。

『ちやあんたは何んの要り用があればあの千圓と云ふ金は銀行から引き出しやんした。それも百圓札で渡したのを、わざ／＼小さい札に變へさせたと云ふ事まで、私にはちやんと知れてをりやんすで。準さんのことで使ふ積りでなかつたのなら、そんな事までする筈はないぢやござんせんか。それを今になつてどうして出し惜しみをするか、私には譯が分らん。』

『ふん、それまで探りを入れてるのなら別に隱しはせんよ。金は慥かにその積りで引き出したのぢや。ちやんと今も銀行から持つて來た時の風呂敷包の儘金庫に放り込んである。ちやが、おれはその時とは今は考へが違うたのぢや。』

『どう違ひやんした。』

『どう違はうがそりやおれの勝手で、云ふ必要はない。たゞ選擧に使はんことだけは確かぢや。』

『それならこの佐賀屋が一生に一度の賴みぢやとして、どうぞ今夜一と晩だけその金を私に貸して下さいと云うても、あんたは貸しちや呉れやんせんか。』

『貸さぬ。決して貸さぬよ。』

分家の伯父の聲は鐵のやうに嚴しかつた。

『何故貸しては呉れやんせんな。』

『脈のきれた病人にその上藥を飲ませりや何になるんぢや。』

『いや、そこがあんたと私の意見の違ふところぢや。私なら例へ脈がきれようが息が止まつてゐようが、せめて今一度手を盡し度い、藥でも注射でも出來るだけのことはして見た上で死なせ度い氣ぢやのに、あんたのは藥までちやんと調

合してありながら、どうせ死ぬ病人ぢやから飲ませるこた要らん、と斯う云ふ醫者どんぢや。』

『若しそんな醫者どんが本統にあるなら、佐賀屋、おれは今お前にはつきり頼んで置くぞ。おれの死ぬ時にはその醫者を呼んでくれ。おれはさう云ふ行き方が何より好きぢや。』

『あゝあ。』

佐賀屋は唸めくやうな嘆息の聲をあげた。

『本家の大將があれほどこの金のことをあなたに切り出したがつてゐて決して云ひ出さんのも無理はない。今度と云ふ今度こそ、佐賀屋もあんたの性根が分かりやんした。全くの話が、あんたと云ふ人はつくぐ怖ろしい人ぢや。私もこれで世間は少しは見た積りぢやが、あんたのやうな怖ろしい人はまだ見たことがない。』

『ふん、そんなことを云ふからお前は萬年子供ぢや。おれが何が怖い。おれよりもつと怖い怪物をお前や兄貴は面白さうに擔ぎ廻つてゐるんぢやないか。氣をつけろ、佐賀屋、怖いのは彼奴一人ぢや。――あの傴僂の一寸法師ぢや。』

その最後の言葉は相手の佐賀屋よりも、廊下に立ちすくんでゐた澄子を雷霆のやうに打つた。彼女はそれが自分の父親をさした言葉であり、またその言葉を投げつけたものは、父親の現在の兄の口だと云ふことを信ずることが出來なかつた。――それを信ずること、寧ろ、それが聞こえたことは、餘りに悲慘であつた。

明くる日、運命は明白になつた。準造は三百票近くの差でB――氏に負けた。これは併し前夜豫想されたよりはずつと僅かな差異であつた。

準造は即夜夜中過に寄航する上りの汽船で東京に歸らうとした。その別宴は夕方から、二月前彼を迎へた同じ座敷で

その日の朝とはまるで違つた打ちしめつた光景の中に開かれた。女たちは葬式の後のやうに鼻をすゝりながら、酌をした。男たちでも佐賀屋などは顔ぢう涙だらけにしてゐた。今夜だけは酒が咽喉を刺すと云つた。準造はまつ青になつて、極端に無言で、且つ幾らか餘計に小さくなつたやうに見えたけれども、食べるものはむしや〳〵食べ、酒も珍しく飲んだ。たゞ小兵衛だけはよく忍んでゐた。彼にはこの打撃から生じた變化は、表面には何んにも見出せない位であつた。强ひて云へば、幾らか空咳をしてゐた。分家の七郎は加減が惡いと云つてその席には來なかつた。彼は寢てゐると云ふ知らせであつた。さう云へば大概の人が半分病氣でないものはなかつた。貞一は少し日に燒けた顳顬に女のやうに頭痛膏を張つてゐた。

けれども晩食がすんでから七郎は矢張り出掛けて來た。而していつものぬうつとした鷹風な態度で、默り勝ちに寛ろいでゐる一座の人々をじろりと見やりながら、悠々と上座に着くと、

『もうそろ〳〵出掛けるか、準造、おれは船まで見送が出來んから暇乞に來た。おれは兄貴たちと違つて、東京なんぞには用事のない人間ぢやから、これで別れりや今度はまたいつ逢はれるか分らぬ。それでぢや、おれはお前にたつた一言餞別をし度いと思うて來たんぢやから聞いてくれ。――外ぢやない。お前はそんな身體で生中學問などしたのは間違つてゐる。それをさせた兄貴やおれが馬鹿の骨頂ぢやつた。で、向後は分にはづれた望は一切捨てて仕舞はにやいかんと云ふのぢや。佝僂なら佝僂らしく生きて行く決心をしろと云ふのぢや。でないと一生にどんな怖ろしい目に逢ふか分らんぞ。ひどい死方をするぞ、と云ふのぢや、分つたか。ぢやが口の餞別ばかりぢやお前の空腹の足しにはなるまい。さあ、これを持つて行け。子供が水遊びするやうに有るつたけ夢中で蒔き散らして、もう小使錢も殘つちやをるまいが、この馬鹿。』

彼はいつの間にか懷中から取り出した小さい風呂敷包の物を、包ごと怒つたやうに投げ出したかと思ふと、人々の驚

きと感動の中を、不意に變に恥しがるやうな、また何かの出來事を怖れるやうな周章て方でさつさと歸らうとした。と、果してそれが起つた。今までは硬化した死骸のやうに口が利けなかつた準造は、その時急に意識を取り戻して氣狂ひのやうに叫び出した

『待つた。待つた。そんな金を誰が取るか。持つて行け、持つて歸れ。要らない、一文だつて要らない。決して貰はない。七郎の馬鹿、猶太人――準造は飢えて乞食をしてもお前の金は要らん。おれを何だと考へてゐるんだ。何僞ならどうしたと云ふのだ。――』

彼は立ち上つて兄を追つかけようとした。人々が走り寄つて抱き止めた。準造は急に泣き出した。元の座に突き坐つたまゝ大きな張り烈けるやうな聲をあげて。

『準造、落ちつけ、七郎があれで誰よりもお前のことを心配してゐるのは分りきつたことぢやないか。それにお前の態度はよくない。――若しどうしてもあれの金をお前が取れんと云ふのならおれが貰ふ。而して澄子にやる。』

小兵衞は相かはらずゆつたりした調子でさう云ふと共に、持つてゐた團扇の柄でその金包を引き寄せて、實際澄子に渡した。

二日後、準造と澄子と、新吉の乘つた汽船が大阪に着くと、準造は船宛に廻送された多くの電報――彼の不幸な敗戰に對する知人の見舞電報の中に、一つの別種の通信を受け取つた。それには次の文字が記されてあつた。

カヨソノチイツタカヘン

發信人は新吉の妻のよねらしかつた。



變な男

豐島與志雄

一

四月末の午後二時頃のこと、電車通りから二三町奥にはいつた狹い横町の、二階と階下と同じくらゐ疊數がありさうな窮屈らしい家の前に、角帽を被つた一人の學生が立止つて小林寓としてある古ぼけた表札を暫く眺めてゐたが、いきなりその格子戶に手をかけて、がらりと引開けるなり中にはいつた。其處の土間から障子を隔てた、玄關兼茶の間といつた四疊半の、長火鉢の前に坐つてゐた女主人の辰代が、格子戶の音に振向きざま、中腰に二三歩して、片膝と片手とを疊につき、するりと障子を引開けてみた。が、互に見知らぬ顏だつた。

「甚だ突然ですが、實は……」

出迎へが餘り早かつたので、學生は一寸面喰つた形で、さう云ひ出したまゝ後は口籠つたのを、辰代は人馴れた調子で引取つた。

「何か御用でございますか。」

誘はれたのに元氣づいてか、學生ははつきりした言葉使ひで云ひ出した。

「私は帝大の文科に通つてゐる、今井梯二といふ者です。お宅で室を貸して下さることを、友人に聞いて參つたのですが、貸して下さいませんでせうか。」

「それでは、あの、どなたかお友達の方が……。」

「えゝさうです、」と今井は俄に早口になつた。「友人の友人がお宅にお世話になつてゐましたさうで、大變親切にして頂いて、非常に感謝してゐました。それを聞きましたので、お室が一つ空いてゐたら、私に貸して頂きたいと思つて、參つたのですが。」

「左樣でございますか。宅では、どなたか知り合ひの方の紹介があるお方だけに、お願ひすることに致して居りますけれど、さういふわけでございましたら、室の都合さへつけば宜しいんでございますが、只今一寸……。」

「いえ紹介なら、すぐにでも貰つてきます。是非貸して頂きたいんです。」

「それでも、空いてるのは四疊半一つでございますし、今日の夕方までに返事をするから、それまで誰にも約束しないでくれと、賴んでおいでになつた方もございますし、今すぐと申しましては……。」

辰代は言葉尻を濁しながら、相手の押しの强い調子を、圖々しいのか或は朴訥なのかと、思ひ惑つた眼付で、先づその服裝を――古ぼけた角帽や着くずれた銘仙の袷や短い綿セルの袴や擦りへつた山桐の下駄などを、一通り見調べておいて、それから詳しく說明した。二階の八疊と四疊半とを客に貸してゐるが、今空いてるのは四疊半の方で、食事は朝だけしか世話が出來ず、その一食附きで月に十五圓であること、午と晩との食事は、自炊でも他處から取るのでも、そ

れは客の自由であること、それが承知なら貸してもよいが、たゞ、夕方までといふ先約の學生の返事を待たねばならないこと。

「さういふことになつてをりますので……もし宜しかつたら、また夕方にいらして頂けませんでございませうか。」

「夕方……。」と繰返して學生は、可なりの間、何やら考へてる風だつたが、辰代がまた口を開かうとすると、急に云ひ出した。「それぢや、その人が駄目になつたら、是非私に貸して下さい。朝飯だけ拵へて頂いて、午と晩と自炊なら、丁度私に好都合なんです。四疊半で十五圓、それで結構です。私は只今、苦學のやうな形式で勉強してるんですから、萬事好都合です。よろしくお願ひします。もしお差支へなかつたら、夕方まで此處で待たして頂けませんでせうか。もうぢぎですから。どんな學生か知りませんが、朝飯だけで承知するやうな者はなかなかゐやしません。夕方またやつて來るなんて云ふのは、體(てい)のいゝ口實です。大抵來やしません。よし來たつて、斷るに極つてゐます。私の方に貸して下さい。夕方まで來なかつたら、それで宜しいんでせう。よし來たつて、私が談判してやります。では此處で待つことにしますから。」

そして彼は玄關の式臺に腰を下してしまつた。辰代は呆氣(あつけ)にとられた風で、一寸言葉もなかつたが、それなら兎も角も上つて待つてゐて下さいと、ほんのお坐なりに勸めてみた。

「さうですか、それぢや失禮します。」

躊躇もせずにのこのこ上りこんで、入口に近い片隅に坐り、角帽を傍に引きつけて、きちんとかしこまつた。その樣子が何だか滑稽じみてゐたので、辰代は茶菓子でも出してやる氣になつた。そして坐布團と茶と菓子とをすゝめた。然し彼はそれらには手もつけなかつた。

「どうぞお構ひなく。」

さう云つたきりで、狭い庭の方をぢつと眺めてゐて、一座を見るやうにと云はれても、端坐した膝を立てやうともせずに、默りこくつてゐた。

「お國はどちらでゐらつしやいますか。」と辰代は話の接穂がないので尋ねてみた。

「鹿兒島です。」と彼は答へた。「鹿兒島はいゝ處ですよ。」

そして彼は自ら進んで、鹿兒島の風光明媚を說き出した。どの川の水もみな透明に澄みきつてゐて、一丈二丈ほどもある淵でさへ、底まで手にとるやうで、魚の泳いでるのがはつきり見えて、釣をするのなんか實に愉快である。随つて、さういふ川の水の流れ込む海が、やはり底まで澄んでゐて、魚の姿と一緒に櫻島の影の寫つてるのが、云ひやうもないほど綺麗である。

「水といふ水がすつかり、底まで澄みきつてると思へば間違ひありません。」と彼は結論した。

「それでは、舟になんか乗りましたら、恐ろしうございませうね。」

「恐いよりか綺麗です。……勿論、今ぢやもう濁つてるかも知れませんが。」

「へえー。」と辰代は云つたきり、一寸挨拶に困つたが、それをうまくごまかした。「さうしますと、もう長くお國へはお歸りになりませんのですか。」

「三四年歸りません。」

「では高等學校もこちらで?」

「いえ、大學にはいつて三四年になるんです。來年はもう卒業してやらうかと思つてゐます。いつまでゐてもつまらな

いですから。」
「さうでございますね。早くお卒業なすつた方が宜しうございますよ。」
そこで彼がまた默つてしまつたので、辰代はそれをしほに坐を立つた。
「私はかうしてるのが勝手ですから、どうかお構ひなく御用をなすつて下さい。」
「それでは御免下さい。」
中腰でさう云ひ捨てゝ辰代が次の室へはいると、襖の影に娘の澄子が今迄立聞きして居たらしくつゝ立つてゐた。彼女はいきなり母の袂を捉へて、臺所の方へ引張つていつた。
「あの人變な方ね。」
「どうして?」、と辰代は聞き返した。
「だつて、鹿兒島では川の水も海の水も澄みきつてるつて、さんざん話してきかしといて、勿論今ではもう濁つてゐるかも知れないなんて、そんな云ひ方があるものでせうか。こゝが少し、」と彼女は頭を指先でつゝついて、「どうかしてるんぢやないでせうか。」
「まあ馬鹿なことを云ふものではありません。大學生だといふではありませんか、そんなことがあるもんですか。」
「大學生だつて當にはならないわ。三四年も大學にゐるけれど、つまらないから來年は卒業してやるんだなんて、どう考へたつて少し變だわ。」
「でもねえ、それは質朴さうないゝ人らしいですよ。」
「だからお母さんは買ひ被つてるのよ。あんな質朴があるものですか。お慈悲に室を借りてやるといふやうな見□で、

家の中にまで上り込んできて、圖々しいつたらありやあしないわ。お母さんもお母さんですよ、あんな人に上り込まれといて、お菓子まで出すなんて、あんまり人が善すぎるわ。」

「そんなことを云つたつて、あゝいふ風になつたのだから、仕方がないではありませんか。」

「いくら仕方がないからつて、家に上げて待たせるつて法はないわ。もし先の人が來なくつて、晩にでもなつたらうどするの。あんな圖々しい人だから、明日まで待つと云ひ出すかも知れないわ。」

「まさか、そんな……。」

「さうでなくつても、もし不良書生の仲間だつたらどうするの。」

「そんなこともないでせうよ。」

「でも分りやしないわ。」

澄子からさう說きつけられて、不安な眼付でぢつと見られると、辰代の眼も、疑惑の色から不安の色に變つてきた。

「夕方になつたら、何とか云つて追ひ歸してしまひませう。」

早口にさう云ひ捨てゝ、辰代はぷいと流し場の方へ下りて、娘に對する、また自分自身に對する、輕い腹立ちまぎれに、がちやがちやと用をし初めた。それを見て澄子は、またいつもの癖が初まつたなといふ顏付で、そして素知らぬ風を裝つて、奥の室の隅つこへ行つて、雜誌なんかを繰り擴げた。

所が澄子の杞憂は、それから一時間半もたゝないうちに、意外なことのために打消されてしまつた。

表の格子戸の音がして、何やら人聲がするやうだつたので、辰代は一寸小首を傾げたが、濡手を拭きながら急いで出て行つた。そして玄關の茶の間の入口に、呆れたやうに立ち止つた。その姿を見て、澄子も立つていつた。先刻の學生

が、玄關の障子を二尺ほど開いて、その向ふに立つてゐる誰かと對談してゐるのだつた。

「そして君は、」と彼は云つてゐた「本氣でこゝの室に落着くつもりですか、それとも、一時かりに過してくるつもりですか、どちらです？」

「なぜですか。」と相手は尋ねた。

「朝一食だけで、午と晩とは、自炊をするか他處で食べるかしなければならないし、さういふ不便を忍んでまで、あの狹い四疊半に落付くといふのは、特別の事情のある者でもなければ、一時の氣紛れに過ぎないでせう。それとも君には、何か特別の事情があるんですか。」

「私はまだ借りるとも借りないとも云やしません。」

「こちらでもまだ、貸すとも貸さないとも云つてやしません。たゞその前に、君の意志をはつきり聞いておきたいんです。」

「一體あなたは、此處の家の方ですか。」

「いや……一寸知り合ひの者です。」

「それぢや、御主人は？」

「不在です。だから私が代りにお話してるんです。」

辰代は襖の影から一歩踏み出しかけたが、學生の言葉に喫驚して、また身體を引竦めてしまつた。

「それではまた來ます。」と向ふの男は云つた。

「そして室はどうするんです？」

「考へてからにします。」
「其處で考へたらいゝでせう。何もむづかしいことではないんですから。」
「ぢゃあ借りません。」
「では破約しますね。」
「破約ですって……私はまだ借りると約束した覺えはありません。」
「そんならそれでいゝです。お歸りなすつて構ひません。」
「さうですか。」
そして手荒く閉める格子の音が聞えたので、辰代は何といふこともなしに、慌てゝ飛んで出た。學生は平氣で振向いた。
「やあ、すつかり聞いてゐられたんですか。」
辰代は表の方を覗き見ながら云つた。
「あなたあんなことを！」
「なあに構ふもんですか。あんなあやふやな奴は駄目ですよ。借りるならどんなことがあつても借りる、借りないなら斷じて借りない、といふ風にはつきりしてゐなければいけません。あんな意志の弱い煮えきらない者をおかれても、碌なことはありません。」
辰代は仕方なしに腰を下してみたが、それでも心が落付かなくて、また立上つて奥の室へはいつていつた。其處には澄子がくすくす笑つてゐた。それを此度は辰代の方が、臺所へ引張つていつた。

「何を笑つてるのですよ……どうしませう？」
「あの人にお室を貸したらいゝぢやありませんか。」
「でもねえ、あんなでは……」
「隨分圖々しい人だけれど、あの人のは、圖々しさを通り越して滑稽だわ。」
そして澄子はまたくすくす笑ひ出した。
「笑ひごとではありませんよ、あんな人だから、またどんなことを仕出來かすか分りはしません。何とか云つて斷つてしまう工夫はないでせうかね。」
「大丈夫よ。あれで案外質朴な人かも知れないわ。もし變なことになつたら、中村さんにでも伯父さんにでも云つて逐ひ出してしまつたらいゝぢやありませんか。」
「それもさうですね。」
そして辰代は恐る恐る出ていつた。見ると、學生は首を垂れて考へ込んでゐた。その顏をひよいと擧げて、辰代の視線にぶつかると、すぐに眼を外らして、いきなり一つお辭儀をした。
「私は何か惡いことをしたんでせうか。惡いことをしたんでしたら、いくらでも謝ります。」
「いゝえ、そんなわけではございませんが……。」
辰代は口篭りながら奥の室を顧みた。
「それでは私に室を貸して頂けますでせうか。」
その懇願するやうな眼付を見て、辰代は心の据え場に迷つた。そして助けをかりるやうな氣持で、奥の室の娘の方へ

呼びかけた。
「澄ちやん、お茶でもおいれなさいよ。」
澄子が立つて來て、お辭儀をすると、學生は眼を見張つた。
「あの、どなたかお家の方ですか。」
「娘でございますよ。」
「あさうですか。失禮しました。」
彼はきちんと坐り直して、とつてつけたやうに低くお辭儀をした。その樣子を下目にちろりと見やつて、澄子はくゝつと忍び笑ひをした。辰代はその袖を引張つた。
「この方が二階の室を借りたいと仰言るんですが……。」
云ひかけた所を、澄子の笑つてる眼付で見られて、辰代は自分の餘りな白々しさが胸にきて、文句につまつてしまつた。それへ向つて、學生はまた一つお辭儀をした。
「どうかお願ひします。」
ぷつりと云ひ切つて、身を固くかしこまつたまゝ、もう身動き一つしなかつた。
暫く沈默が續いたのを、辰代が漸う口を開いた。
「私共ではこの二人きりで、手不足なものでございますから、何もかも不行屆きがちになりますけれど……。」
「なに結構です。それでは今晩參ります。」
「あの今晩すぐに……。」

「えゝ。學生の引越しなんか訳はありません。」

彼はもう立ちかけてゐた。

「では急ぎますから、失禮します。」

辰代と澄子とは、彼をぼんやり玄關に見送つた。それから障子を閉めきると、辰代はほつと吐息をついた。

「私あんな人は初めてゞすよ。」

「でも正直さうな人ぢやありませんか。少し變つてるけれど、ひよつとすると……あれで天才かも知れないわ。」

天才といふ言葉がすぐには腑に落ちかねて、辰代は眼を瞬いた。

「本當に今晩越してくるのでせうか。」

「あんな人だから、屹度來るに違ひないわ。」

「それなら掃除をしておかなければなりませんね。」

綺麗好きな辰代はすぐに二階の四疊半の掃除にかゝつた。先づ室を掃き出しておいて、押入や疊に一々雜巾をかけた。それが濟むと、もう夕食の時間になつてゐた。

食事中に辰代はふと思ひ出して云つた。

「電氣會社へ行つてこなければなりませんね。」

「どうしてなの。」

「あの人が來て早々から、電氣がなくては困るでせうよ。」

「いやだ、お母さんは。電氣はつけ放しぢやありませんか。」

「さうでしたかしら。」

それでも彼女は、二階へ上つて見て來なければ安堵しなかつた。

卒業したばかりの若い醫學士で、二階の八疊を借りてる中村が、病院から歸つて來て、和服にくつろいで、玄關の茶の間で煙草を吹かしてる時、そして、辰代が澄子に手傳はして、臺所の後片付けをやつてる時、大學生は引越して來た。布團の包みと柳行李を一つと白木の机、それだけの荷物をつんだ車の後から、一人でてくてく歩いて來た。

「今日から御厄介になります。」

形ばかりに膝をついて、誰へともなく云つてから、彼はすぐに荷物を二階へ運び初めた。辰代はそれを手傳つて、なほその上に、室の中の整理をも手傳はうとした。押入も疊もすつかり雜巾がけをしておいたこと、押入の中には新聞紙を敷いといたから、その上にそつと荷物をのせること、机は窓の下に据ゑるがいゝこと、などゝいろんな注意をして、今にも自分から荷物へ手をつけようとした。大學生はその親切を却つて迷惑がつてる樣子で、しまひには坐り直して云つた。

「有難うございました。後は自分でしますから、どうか構はないでおいて下さい。」

「それでは、」と辰代は素直に應じて、「少しお片付きになりましたら、階下においで下さいませ。お茶でもおいれ致しますから。手前共はかういふ風でございまして、何にもお構ひ出來ません代りに、家の者同樣に思つて隔てなくして頂きます方が宜しいんでございます。」

「えゝ、どうぞ。」と彼は云つた。

その可笑しな挨拶には氣も留めないで、辰代は階段を下りていつた。

階下では、澄子が中村に向つて、貸間のことを話してきかしてゐた。そこへ辰代はいきなり、横合から云ひ出した。

「大學生にしては、隨分荷物の少い方ですね。」

「だつて、」と澄子が應じた。「苦學をしてるとか仰言つてたぢやありませんか。」

「でもねえ、いくら何だつて、本箱の一つくらゐありさうなものですがね。」

「本箱は頭の中にしまつとく方がいゝですよ。」と中村が云つた。

「あんまり荷物が少なすぎますよ。」

辰代は自分一人の繰言をしながら、臺所へやつていつた。そして殘りの用を濟し、何か繕ひ物を持出してきて、室の隅に坐つた。

澄子はまた話の續きを初めてゐた。大學生とも一人の學生との應對の所になると、彼女と中村とは、はつと氣付いて口を噤まねばならなかつたほど、愉快な高笑ひを洩らした。

「私あの方を、」と澄子は云つた、「まるつきりの田舍者か、それとも偉い天才か、どちらかだと思ふわ。」

「さうだね。」そして中村は考へ深さうな眼付をした。「わざと衒つてるのぢやないかしら。」

「いゝえ、ありのまゝよ。衒ふことなんか、これつぱかしも出來さうにない人だわ。」

「もしさうだつたら、その變挺なのが正直な所だつたら、澄ちやんが云ふやうに天才かも知れないね。」

「どうして？」

そこで中村は、醫學上の見地から天才といふものを解釋して、天才とは結局、頭腦の一部分が極度に發達して、他の部分が萎縮してしまつてる、一種の不具者だとした。澄子はそれに反對して、天才にもやはり立派な人格者がゐると云ひ、その例に、トルストイやナポレオンを持ち出した。中村はそれを打消して、さう思ふのは遠く離れて見るからだと

云ひ、近寄つて見ると天才は皆不具者だと説いた。

「一番いゝ例は、二階のあの人だね。近く寄つて見るから變挺に見えるので、遠く離れると立派な人格者に見えるものだよ。」

「そんなことないわ。」

「ぢやあ澄ちやんは、あの立派な天才を、天才ではないと云ふのかい。」

澄子は眼をくるりとさしたが、瞬間に、手を擧げて打たうとした。

「まあ憎らしい！」

そのはづみに、火鉢の鐵瓶を危く引つくり返さうとした。

針仕事の上に首を垂れて、こくりこくりやつてゐた辰代が、喫驚して眼を開いた。

「何をしてるんですよ！」

澄子が笑ひ出したので、彼女ははつきり眼を覺してしまつた。

「お二階の、あの方は？」

それで初めて氣がついて、皆は耳を澄してみた。二階はひつそりと靜まり返つて、ことりとの物音もしなかつた。

「さうさう、まだお茶も出さないで……」

辰代は慌て氣味に茶菓子を用意して、澄子と中村との氣掛りげな眼付に見送られながら、二階の四疊半に上つていつた。

すると大學生は、荷物を運び込んだまゝの室の中で、布團の包みに頭をもたせ、仰向に寢そべつて、まぢまぢと天井

を見つめてゐた。

二

斯くて今井梯二は、南に椽側があり東に腰高な窓がある。その四疊半の室に落ち着いた。そして翌朝先づ第一に白木の机をあちこちへ持ち廻つて、結局それを窓の下に据ゑた。この白木の机について、可なりたつてから、彼は澄子へかう云つた。

「机といふものは學生にとつては、最も神聖なものであるべきです。だから私は白木の机を使つてるのです。普通のものは、どれもみな何かゞ塗つてあります。よく紫檀の机や何かで納まり返つてる者もありますが、紫檀は最もひどいごまかしもので、あれにはみな色が塗つてあるのです。そして生地の色らしく見えるのがなほいけません。私のこの白木の机だけは、天然自然の生地のまゝで、どんなことをしても剝げるといふことがありません。」

「だつて。」と澄子は微笑みながら云つた、「あなたはそれを毎日拭いていらつしやるぢやないの。やつぱりごまかしぢやありませんか。」

「磨きこむのとごまかしとは違ひます。私は自然を磨きこんでるのです。」

そして彼は絹のぼろ布で、毎日必ず一回は、白木の机をきゆつきゆつと拭き込んだ。

さてその朝、机を窓の下に程よく据ゑてしまうと、次に柳行李の蓋を開けた。中には、四五枚の着物と、幾冊かの書物と、アルミの鍋と、大きなボール箱とがあつた。ボール箱の中には、砂糖とパンとがはいつてゐた。

午と晩とを、彼はパンと砂糖と牛乳とですごした。所が牛乳は、辰代が臺所の瓦斯で沸してくれたので、アルミの鍋は

押入の中に投り出されたまゝになつた。お茶はいつでも玄關の茶の間にあつたが、彼は辰代が貸してくれた火鉢の鐵瓶から、湯ばかり飲んでゐた。その代り、一週に二度くらゐは、近くの店かち、西洋料理や蒲燒などを取つて貰つた。

「御馳走は、」と彼は云つた、「のべつに食べるものではありません。平素粗食をしてゐて稀に食べると、それがすつかり消化されて、全部身體の營養になるんです。いつも御馳走ばかり食べてると、胃袋がそれに馴れきつて、素通りさせてしまひます。それで、旨い物ばかり食べてる者には、粗食が非常に營養になると同じに、私みたいにパンばかり噛つてる者には、時々の旨い料理が非常に營養になるんです。胃袋といふ奴ほど珍しもの好きはありません。」

然し、さういふ彼の生活を、辰代は不經濟極まるものだと思つた。そしていろいろ經濟の途を說いてきかしたが、彼はたゞ笑つてるばかりだつた。

「經濟法なんて、人間を愚かにするばかりです。」と彼は云つた。

それならそれでいゝ、と辰代は思つた。實際、彼にそれだけの金があるのなら、何をしようと彼の勝手だつた。けれども、たゞ一つ、辰代も我慢しかねることがあつた。

今井の所へは滅多に友人も來なかつたが、それでも時々、怪しい風體の者がやつて來た。髮を長く伸してゐたり、または一分刈りに刈り込んでゐたり、髯をもぢやもぢや生してゐたりする、同年配の青年等で、狡猾とか陰險とかいふ風貌ではなかつたが、少しばかり朴訥さの見える闘々しさを具へてゐて、それが大抵、雨の降る折や夜更けなどに訪れてきた。雨の中を傘もさゝずにやつて來て、霽れ間を待ちながら、自分の濡れた着物と今井の乾いた着物とを、着代へては歸つていつた。そしてそのまゝ、いつまでたつても着物を返しに來なかつた。夜更けてやつて來る者は、よく腹が空いてると云つては、何か食べる物を取寄せて貰つた。中には翌朝までゐて、飯を食つてゆく者もあつた。

「食べるものくらゐは、どうにでもなりますが、」と辰代は憤慨の調子で云つた、「こんな宜しよ濡れの着物を、あなたはどうなさいますか。それも後で取代へにでも來れば宜しいんですが、着て行きつきりですもの。こないだも、あなたの足駄をはいていつて、その上御丁寧にも、自分の駒下駄は新聞に包んで持つていつて、そのまゝ姿も見せないではございませんか。こんな風だつたら、今にあなたは身體一つになつておしまひなさいますよ。」

「だつて、みんな私の所を當にして來るんですからね。」と今井は云つた。

「そんなに氣がお弱いから、あなたはつけ込まれるんでございますよ。第一、他人の物を當にして來るつて法がありませうか。自分の物も他人の物も區別しないやうになりましたら、世の中に働く者はありはしません。」

「いえ、彼奴等だつて、相當には働いてるんです。今働いてゐなくても、これから、後に、大いに働くつもりでゐるんです。」それで取返しがつくぢやありませんか。」

「取返しがつきますつて！そんなことを云つてゐらつしやるうちに、あなた御自身はどうなります。今に何もかも持つてゆかれてしまうではございませんか。」

「なあに私は、かうしてゐさへすれば、どんなことがあつてもへこたれはしません。意志がしつかりしてゐますから。」

辰代は呆れ返つたやうに相手の顔を見つめた。そしてやがて云つた。

「あなたくらゐ分らない方はありません。私がこんなに心配してゐますのに、當のあなたがそんなお心なら、もう口出しは致しません。いえ致すものですか。どうとでも勝手になさるが宜しうございますよ　どんなにお困りなすつても、もう一切存じませんから。」

彼女は腹を立てゝ、その腹癒せの氣味もあつて、やたらに氣忙しなく用をしたり、そこいらのものをかき廻したりし

た。それを今井は濟まなさゝうな眼付でちらと見やつて、それから首垂れて考へ込むのだつた。

然し彼女のさういふ腹立ちを、澄子は傍から可笑しがつてゐた。

「お母さんくらゐ可笑しな人はないわ。御自分のことはそつちのけにして、いつも他人のことばかり心配してゐるんですもの。」

それを辰代は聞き咎めた。

「馬鹿たことを御言い！自分のことは自分でちやんとしてゐますよ。あなたまでそんなことを云ふなら、私はもう何にも知りませんから、あなたが何もかもしてみるがようござんす。他人さんのお世話をするのは、そりやあ容易なことではありませんよ。」

「だつて、今井さんは初めから變人だと分つてるぢやありませんか。」

「いくら變人だからつて、御自分のものを他人に持つてゆかれて平氣でゐるのは、あんまりひどうござんすよ。」

「それくらゐのことは、今井さんには何でもないんでせうよ、乾度。あんな人のことは、やきもきするだけ損だわ。考へてみれば、何もかも變ぢやありませんか。家にいらしてから、一度も學校に行かれた樣子もないんでせう。いくら大學だからつて、あんなに休んでばかりゐていゝものでせうか。それに角帽が一つあるきりで、制服だつて、持つていらつしやるかどうか分らないし、ノートの一册もないんでせう。そして朝から晩まで、あの白木の机を拭き込むばかりでぼんやり考へ込んでゐて、一體、何をなすつてるのか、何を考へてゐらつしやるのか、まるで見當もつかないわ。私今井さんは乾度、文學とか哲學とか、そんなことをやる人だと思つてよ。いくらお母さんが注意してあげたつて、たゞ煩さがりなさるばかりだわ。」

澄子の云ふことは事實だつた。今井は文科大學生だと云つてはゐるが、制服は勿論のこと、ノート一冊も持つてはしたかつた。そして學校へ出ることも殆んどなかつた。朝遅くまで寢てゐて、多くは一日室の中に蘢つてゐた。時々外出することもあつたが、袴をつけたりつけなかつたり、また時間も非常に不規則だつた。そんなこんなを考へると、辰代は淡然とした不安を覺えた

「でもこれは私の思ひ過ぎかも知れない。」と彼女はまた考へ直してもみた。

實際今井が變人だといふことは、日常の樣子を見てもすぐに分つた。辰代や澄子や中村などゝ顔を合せる時には、馬鹿に丁寧な挨拶をすることもあれば、むつつりとして眼を外らすこともあつた。それがまるで氣紛れで、こちらから挨拶なすべきかどうか、その時々の見當が全くつかなかつた。挨拶をしてるのに外方を向かれることもあるし、默つてるのに丁寧な挨拶をされることもあつた。兩方うまく調子が合ふことは稀で、大抵は氣まずい思ひが殘つた。それかゝまた、毎晩玄關の茶の間に集つて、皆で一寸世間話をするのが、殆んど習慣となつてゐた。中村は、一日病院で働いてしみ込んだ藥の香を、それによつて消し去りたい氣もあつたらうし、澄子は、いろんなことを云つて中村に甘へて、父や兄弟姉妹のない淋しさをまぎらしたい氣もあつたらうし、辰代は、話の仲間入りしてる風をしながら、自由に居眠りたい氣もあつたらうが、然し何よりも、皆揃つてのさういふ雜談は、それが習慣となつてしまうと、缺かしては何だか物足りないやうな、知らず識らずの淡い魅力を持つてゐた、所が今井は、辰代がいくら誘つても、越してきて一二度顔を出したきりで、その雜談の席に加はらなかつた。辰代もしまひには誘はなくなつた。そして時によると、今井に留守を頼んで皆して活動寫眞や寄席に出かけた。今日は私が留守をするからと中村が云ひ出し、辰代が今井を案内しようとすることもあつたが、そんな所へは行つても退屈するばかりだと、今井はきつぱり断つた。

その退屈といふ言葉が可笑しいと云つて、澄子は笑つた。
「あんなに一日中ぢつとしてゐて、その方がよつぽど退屈な筈だわ。」
そして彼女は、そのことを今井に向つてまで云つた。
「ぢつとしてゐても私は退屈はしません。」と今井は答へた。
「ぢや何が面白いの？」と澄子は尋ねた。
「何にも面白いことはありません。」と今井は答へた。
「それではやつぱり退屈ぢやありませんか。」
「いえ、面白くもないが退屈でもありません。」
「では何でせう？」
「さうですね、何でせう？」さう彼は繰返して、俄に陰欝な顔付になつた。「まあ、夢をみてるやうなものですね。」
「だつて夢は面白いものだわ。」
「それは後から考へるから面白いので、みてる當時は、面白くも退屈でもありません。」
「あら、さうかしら……。」
そして暫くたつてから、いろいろ考へてみた上で、さうかも知れないと彼女は思つた。と同時に、この新發見を友達に云ひ觸らさうと思ひついて、一人にこにこ笑ひだした。そしてそれを教へてくれた今井のことを、夢想家だとしてしまつた。
その夢想家の今井が、或る晩十一時頃、酒に醉つて歸つてきた。丁度皆茶の間に集つて、少し長くなつて、雜談の種

もつきて、ぼんやりしてる所だつた。今井は酒臭い息を吐きながら、それでも足許は確かで、勢よくはいり込んできて室の片隅に腰を下して、水を一杯ほしいと云ひ出した。辰代は吃驚した顔付で、臺所へ水を汲みに立つていつた。歸つて來るといつもすぐ二階へ上つてしまふ彼が、そして二階には水も湯もある筈なのに、その時に限つて、皆の仲間入りをしたのも珍しかつたし、また酒は嫌ひだと云つてゐた彼が、醉つてるらしいのも珍しかつた。然し水を汲んできて更に彼女が吃驚したことには、今井は立派な西洋菓子の箱を其處に差出して、皆で食べてくれと云つた。

「今日はどうなさいましたの。」と彼女は尋ねた。

「一寸愉快なことがあつたんです。」と云つて今井はさも愉快さうに眼を輝かした。「友人に出逢ひまして……そら、こないだ私の着物を着ていつた奴です。見ると、私の着物を着て澄し込んでるぢやありませんか。それで私は、着物のことであなたからさんざん小言をくつたわけを、そつくり云つてやりましたよ。すると大變恐縮して、今日は少し金がはいつたから、御恩返しをしようと云ひ出したんです。そして私を引張つていつて、御馳走を食はしてくれました。私も常なら酒は飲まないんですけれど、さういふ意義のある酒ならと思つて、可なり飲んでやりました。それから歸りに、彼はこの菓子を買つてきて、是非あなたに上げてくれと云ふんです。だから持つて來ました。」

「まあ、あの方が！」と辰代は怪訝な顔をしたが、急に何やら腑に落ちたらしい樣子で、「へえ左樣でございましたか。それでは皆で頂くことに致しませう。」

それでも、菓子を半分ばかり食ひかけた時、彼女はふと思ひ出したやうに云つた。

「そして、お召物はどうなさいましたの。」

「彼にくれてきました。」

「えッ！」
「向ふでそれだけの好意を見せてくれたんですから、こちらでも好意を以て、着物は君に上げようと云つてきました。」
「まあとんでもない！だからあなたは仕様がございませんよ。それではうまうまひつかゝつてしまつたやうなものですよ。向ふではあなたがさういふ人だといふことを承知の上で、企んでやつたことに違ひありません。それなのに、私にお菓子を買つて寄來すなんて、圖々しいにもほどがありますよ。」
それでも彼女は、手に殘りの半分の菓子を食べてしまつた。
「さうばかりでもないでせう。人の好意は正面から受け容れるのが私の主義です。」と云つてから今井は、俄に話を變へた。「今日だけは小言は止して下さい。珍しく酒を飲んで愉快になつてるんですから。……そんな話よりも、全く素晴らしいことを見て來ましたよ。」
「どんなことです？」
さつきから皮肉な笑顔で二人の話を聞いてゐた中村が、さう引取つて尋ねた。
「私は人間の頭があんなに脆いものだとは思ひませんでした。」
「人間の頭ですつて？」
「さうです。實はこの菓子折を下げて、友人と二人で、或るカフェーにはいつて、酔ひざめの冷いものを飲んでゐました。すると、不良少年……と云つてももう靑年ですが、さういふ二三人の連中と、やはり二三人の朝鮮人か支那人からしい、怪しい樣子の連中との間に、喧嘩が初つたのです。何がきつかけだかは分りませんが、大きな怒鳴り聲がしたので振向いてみると、兩方立上つて毆り合はうとしてるんです。と思ふうちに、その不良靑生らしい方の一人が、相手から先を

越されて頬邊に拳固を一つ喰はせられましたが、一歩よろめきながら、側の卓子の上にあつた空のビール瓶を取つて、向ふの奴の腦天から打ち下したんです。ビール瓶はそのまゝ壊れもしないで、相手の男はばつたり倒れてしまひました。よく見ると、頭の鉢が割れて、血がどくどく流れ出してるぢやありませんか。」

「まあ、本當？」と澄子が聲を立てた。

「本當ですとも。私は喫驚しちやいました。空のビール瓶で、それも瓶がわれて、割れ目で切れるとかなんとかしたなら、まだ分つてゐますが、丸のまゝの瓶で、頭蓋骨を叩き割るといふのは、いくら腕が冴えてゐたつて、一寸考へつかないことですよ。」

「然しそれは、たゞ皮膚が破れたといふばかりではなかつたのですか。」と中村が云つた。

「いえ確かに頭蓋骨がわれたんです。頭の形が變梃になつて、傷口から石榴のやうなぐぢやぐぢやなものが見えてゐました。」

「そしてその男はどうしました？」

「その男が倒れると、カフエー中の者は總立ちになつたのですが、その隙に、毆つた方の連中は、何處かへ逃げ出してしまつたんです。そして皆で、倒れてる男を引起したのですが、もう死んでるらしいんです。即死ですね。それから大騒ぎになつて、その男は仲間の者から、すぐに病院へかつぎ込まれるし、警官はやつて來るし、野次馬はたかるし、ごつた返したのですが、どういふものか、警官は皆をカフエーの外に逐ひ出してしまひました。それを幸に、私達も外に出ました。證人にでも引張り出されちやつまりませんからね。」

「おまけに、金も拂はなくて濟んだわけですね。」と中村は云つた。

その言葉に、澄子は一寸微笑を洩らしたが、今井は不快さうに眉根を寄せた。そして暫く默つてゐた後、宛も胸の鬱憤をでも晴らすやうな調子で、口早に云ひ出した。

「私は人間の頭蓋骨が、あんなに脆いものだとは思はなかつたんです。所があれを見てから、うつかりしてはゐられない、と思つたのを見てから、變に興奮してしまひました。いつ自分の頭も打割られるか分らない、うつかりしてはゐられない、とそんな氣がしたんです。明かに殺意を以て頭を割られるのは構ひませんが、偶然に割られるのは考へても堪りません。あの連中だつて、前から遺恨があつてのことではなく、また殺さうとか殺されるとかいふつもりでもなく、たゞ偶然にあゝなつたまでのことでせう。それを考へると、何だか私はぢつとしてゐられないやうな氣持になつてきます。」

「然し、」と此度は眞面目な調子で中村は云つた、「偶然だからまだいゝんで、初めから殺意があつたらなほいけないぢやありませんか。」

「私はその反對だと思ふんです。意識的に殺されるのは構はないが、偶然殺されるなんて眞平です。」

「では殺す方はどうでせう。」

「殺す方だつて同じです。偶然に人殺しをするやうな者は、永久に救はれない奴です。けれど、意識して人を殺せるくらゐな人間は、またどこか偉い所があると思ふんです。私は友人からかういふ話を聞いたことがあります。ゴリキーの書いたものにあるさうですが、ロシアの革命の頃、或る處の農民は、捕虜にした何十人かの敵の兵隊を、逆様に腿まで地中に埋めて、苦しさに足をぴんぴんやつて死んでゆくのを眺めて、何奴が一番我慢強いとか、何奴が一番息が長いとか、そんなことを云ひ合つて面白がつたさうです。また或る處では、捕虜の腹から腸の一部を引出して、それを立木の幹に釘付にし、皆で其奴を鞭で引叩き、其奴が木のまはりを逃げ廻るにつれて、腸がずるずる出てくるのを見て、皆で

面白がつたさうです。而もこれが、やはり同胞のロシア人なんです。その話を聞いた時私は何もかも打忘れて或る者を愛するとか、一身を擲つて主義に奉仕するとか、さう云つた偉い人間がロシアから出るのは、尤もなことだと思ひました。憎惡とか愛とか、殘忍とか親切とか、さういつた風な感情は、一方が强ければまたそれだけ他方も强いものです。所が日本人は、あらゆる感情が弱々しくて中途半端です、弱い半端な感情からは、決して偉大な行ひは出て來ません。」

「然しさうだとすると、文明の否定といふことになりはしませんか。凡て野蠻な惡い感情を洗練してゆくといふことが、文明の發達のやうに思へるんですが、あなたの說に依れば、野蠻時代に逆戻りをする方がいゝことになりますね。」

「いゝえ逆戻りぢやありません。善い感情も惡い感情も、一緒に磨き上げてゆくのが文明です。惡い感情を善くなしてゆくとか、または惡い感情を滅ぼして善い感情だけを育てゝゆくとか云ふのは、痴人の寢言です。そんなことをしてゐるうちには、感情全體が鈍つてきて、まるで去勢されたやうになつてきます。善と惡とが相對的のものである以上は、善い感情と惡い感情とも相對的なものです。一方が滅ぶれば他方も滅んでしまひます。兩方を强く燃え立たして、たゞそのどちらに就くかだけが問題です。野蠻時代は、いろんな火がごつちやに燃えてゐたのですが、その火を選り分けて、純粹な焰を立てさせるのが文明です。そして肝要なのは、そのいろんな焰のどれに就くかといふ方向だけです。焰を弱める必要はありません。」

「それなら、たゞ一つの火だけ燃やしたらいゝぢやないですか。」

「それはキリスト教で云ふ言葉です。ギリシヤの多神教ではそんなことは云ひません。そしてキリスト教では、三位一體なんてことを說いてゐますが、あの神は實は人間ではなくて、ギリシヤの多神教の神々こそ本當の人間です。」

「それでは一層のこと、人間を止してしまつた方がいゝわけですね。」

「さうです。」

今井が餘り無雜作に肯定したので、中村は一寸意外な顏付で口を噤んでしまつた。それから多少皮肉な調子で、病院に人體解剖を　に來ないか、人の頭の割れたのより遙かに參考になるかも知れない、などゝ云ひ出した。

「そんなものは駄目です。」と今井は答へた「死んだ身體の解剖や、魔睡された者の手術なんかは、學者にしか用のないものです。はつきりした意識を持つてるぴんぴんした人體の解剖なら、私も是非見たいと思ふんですが、そんなのは、野蠻人の間にしかないでせう。」

「では戰爭に行かれるといゝですよ。」

今井は何とも云へない嫌惡の表情をした。

「あなたの理論から云ひますと、」と中村は追求した。「戰爭もいゝぢやないですか。」

「戰爭は人を狂人にますから嫌です。」

「どうしてです？」

今井は何とも答へないで、それきり押し默つてしまつた。

「もうそんな話は止しませうよ。私嫌だわ。」と澄子が口を出した。

中村は何と思つたか、俄に笑ひ出した。そして、今晩頭の割れたお化が出るなどゝ澄子をからかひながら、話は他の方へ外れていつた。たゞ今井ばかりは一言も口を利かなかつた。十二時が打つと、喫驚したやうにして室へ上つていつた。

「十二時になつて慌てゝ寢るなんて、今井さんの柄にもないわ。」と澄子は小聲で云つた。然しそれは當つてゐなかつた。今井は室にはいつたが寢もしないで、長い間考へ込んでゐたのである。

　そしてその晩のことは、或る印象を皆に與へた。辰代は、今井の話がよく分りはしなかつたが、その全體から不氣味な底深いものを感じて、多少畏敬の念の交つた不安さを覺えさせられた。今迄單に變人だと思つてゐたものが、案外根深い所から來てゐるのであつて、まかり間違へば、善にしろ惡にしろ、どんなことを仕出來すか分らない、といつたやうな氣がした。中村は、やはり今井を素直でない人間だと考へ、衒つてゐる――といふのが惡ければ少くとも――僻んでゐるのだと思つた。澄子は、今迄通り今井を滑稽化して眺めたがつたが、何かしら滑稽だとばかりは見做せないものゝあるのを感じた。そしていろいろ考へた上、結局彼を野蠻人だとした。

　所が或る日、その變人で夢想家で野蠻人である今井が、雨にびしよ濡れになつて歸つて來た。學校から戻つたばかりの澄子が、袴姿のまゝ出迎へると、彼は雫の垂れる帽子を打振つて水を切りながら、足が汚れてるから雜巾を下さいと云つた。それを聞いて、臺所にゐた辰代がバケツに水を汲んできた。今井さんにありさうなことだ、と澄子が思つてゐると、辰代の方ではかう云つてゐた。

「雨の中を傘もさゝずに歩いていらつしやるつてことがあるもいですか。あなたも少しお友達の眞似をなすつて、傘を借りつ放しにしていらつしやれば宜しいではございませんか。」

「いや圖書館に行つてたんです。」

「あら、今井さんでも圖書館にいらつしやることがあつて?」と澄子が云つた。

「たまに行つてみたから罰が當つたんでせう。霽れるのを待つつもりだつたんですが、少し氣分が惡いから歸つて來ま

した。」

足を洗つて上つて來た彼の顔は眞赤だつた。その額に辰代が手をあてゝみると、火のやうに熱く感じられた。

「まあ大變なお熱でございますよ。すぐにお寢みなさらなければいけません。……澄ちやん、床を敷いておあげなさいよ。」

澄子がまだ袴を　けてるのを見ると、辰代は自分から二階に上つていつて、寢床を敷いてやり、濡れた着物を寢間着に着代へさしてやつて、それから暫く枕頭に坐つて様子を見守つた。

「大したことぢやありません。」と今井は云つた。「雨に當つたからかつとしたんです。少し寢てればぢきになほります。」

「でも兎に角、晩にはお粥が宜しうございますよ。拵へて差上げませう。」

そして辰代は夕方、粥や梅干や一寸した煮肴などを持つていつたが、今井は何も食べたくないと云つて、それには手もつけないで、たゞしきりにお茶ばかり飲んでゐた。小用に立つて下りてくる時には、足がふらふらしてゐた。それでも大したことではないと云ひ張つて、藥も手當も一切斷つた。

辰代は心配しだした。中村が病院から歸つてくると、診てやつてくれと頼んだ。

「どうされたんです？熱がおありですか。」

さう云つて中村は今井の室にはいつていつた。

「いや何でもありません。」と今井は天井を見つめたまゝ答へた。

「一寸脈を拝見してみませうか。」

そして中村がにぢり寄らうとすると、今井は手先を擧げてそれを制した。傍から辰代も勸めてみたが、彼は承知しな

かつた。

「私で不安心でしたら、懇意な内科の醫者を呼んであげませうか。」と中村は云つた。

「いゝえさうぢやありません。私は醫學を信じないんです。」

中村は微笑を洩らした。

「醫者の大家には、よくさう云ふ人がありますが……。」

「醫學くらゐ進歩してゐない學問はありません。」と今井は云ひ進んだ。「醫學が一番進んでる、などゝ云ふ人がありますが、眞赤な嘘です。私はかう思ふんです。凡そ天地間のあらゆる生物、または現象には、それに反對　生物や現象が必ずあるものです。そして病氣に對して、その直接の反對のものを探し出すのが、醫學の仕事でせう。所が現在の醫學では、さういふアンチ療法といふことは、ごく僅かしか行はれてやしません。行ふことが出來ないんです。それで大抵は廻りくど、間接療法ばかりです。間接療法をやつてるうちには、病氣の方が衰へて、それで癒つたやうに見えることもありますが、それは偶然の結果で、實を云ふと、病氣は獨りでに自然に癒つたのです。そして多くは、間接療法のために他の器官が弱らされて、回復が長引くばかりです。そんなことになるよりは、自然のまゝ放つておく方がましです。癒るものなら必ず癒るし、死ぬものなら必ず死にます。」

「驚きましたね、あなたから醫學の講義を聞かうとは思ひませんでしたよ。」そして中村は取つてつけたやうな笑ひ方をした。「さうするとあなたは……運命論者ですね。」

「反對です。生きるも死ぬるも自分の手で處置したいから、あやふやなことに望みをかけないだけです。」

中村が何か云ひ出さうとすると、今代はその袖を引張つた。それで彼はたゞかう云つた。

「その議論は全快されてからにしておきませう。そして……いやそれくらゐ頭がはつきりしてゐられるんですから、大丈夫心配なことはありません。一寸した冷込みでせうから、温くして寢てゐられるがいゝですよ。」

中村が出て行かうとすると、今井は身を起しかけたが、手で制せられて、またがつくりと頭を枕につけた。

辰代は中村の後を追つかけて、階下に下りてきた。

「ほんとに喫驚なさいましたでせう。私もあんな人だとは思ひませんでした。どうぞお氣を惡くなさらないで下さいましな。あゝいふ變つた方ですから、惡氣で仰言つたのではございませんでせうし、熱の加減もありましたでせうし……。」

「なあに私は何とも思つてやしません。それでも、醫學の説明を聞かされたには一寸驚きましたね。」

「そして、どうなんでございませう？」

「自分で大丈夫だと云つてゐますから。それより確かなことはありませんよ。たゞ頭だけは冷してやつた方がいゝんですがね。」

「ではさう致しませうか。」

辰代は水枕をしてやり、額を水手拭で冷してやつた。今井は默つてされるまゝになつてゐた。そのうちにすやすやと眠つた。辰代は少し安心した。

所がその晩、辰代と澄子とがもう寢やうと思つて、二階の樣子に耳を傾けると、かすかな呻き聲が聞えた。辰代は驚いて上つていつた。見ると、今井は半ば布團から乘り出し、額にじつとり汗をにじませ、夢現のうちに呻つてゐた。身體が燃えるやうに熱くなつて、熱つぽい息をつめながら呻つてゐた。辰代は狼狽し出した。そして澄子を呼んだ。

「まあ、大變な熱だわ。」
「中村さんをお起ししませうか。」
「でもお母さん、またあんなことになつたら……。」
「それもさうですね。どうしませう？」
「氷で冷したらどうかしら。」
そして取敢へず、澄子が水手拭で額を冷してやつてる間に、辰代は氷を買ひに出かけた。もう十二時近くだつた。近所の氷屋へ行つて、幾度も戸を叩いて、漸く起きてきたのに尋ねると、氷は無くなつたとの返辭だつた。辰代は口の中で不平をこぼしながら、少し遠くの氷屋へ行きかけたが、懇意な家でさへかうだから……と見切りをつけて、急いで歸つてきた。
それから辰代と澄子とは、寢もしないで今井の頭を冷してやつた。水枕の水も金盥の水も、水道ので初めからさう冷くはなかつたが、すぐ湯のやうになつた。幾度も幾度も取代へて來なければならなかつた。
雨はまだしとしとと降り續いてゐた。夜が更けるに隨つて、雨が霽れてゆくのか、或はその音が闇に呑まれてゆくのかあたりはしいんと靜まり返つた。時々呻り聲を出したりぼんやり眼を見開いたりする今井の顏を二人はじつと見守つてゐた。どうしたことか、天井裏の鼠の音さへしなかつた。それにふと氣付くと、澄子はぞつと水を浴せられたやうな氣になつた。
「あなたはもう寢んでいらつしやい。明日學校があるから。」と辰代は云つた。
澄子はたゞ頭を振つた。低い母の聲までが無氣味だつた。今井さんは死ぬんぢやないかしら、とそんな氣もした。辰

代が水を取代へに立つてゆくと、彼女は自分でも譯の分らないことを一心に念じながら、今井の額の手拭を平手で押へてやつた。ずきんずきん……といふ音のやうなものが、手拭越しに傳はつてきた。

そのうち次第に、今井の熱は鎭まつてゆくやうだつた。それでも二人は、夜明け近くまだ冷してやつた。ごく遠くの方から、かすかなざわめきが起つてきて、寢呆けたやうな汽笛の音がした。それから暫くたつた頃、すやすや眠つてゐた今井は、突然眼を開いてあたりを見廻した。

「お氣がつかれましたか。」と辰代は云つた。「ひどいお熱でございましたよ。」

今井はぼんやり二人の顏を見比べてゐたが、ふいに上半身を起しかけた。辰代がそれを引止める間もなく、其處に手をついて頭を下げた。

「有難うございました。」

そして呆氣にとられてる二人の前に、はらはらと涙を流した。

「どうなすつたのです！寢ておいでなさらなければいけません。」

きつい調子でさう云ひながら、辰代は彼を寢かした。彼はおとなしく頭を枕につけたが、閉ぢた眼瞼からは涙がにじみ出してきた。それを見て、辰代も澄子も何となしに涙ぐんだ。

暫くすると、今井はまた眼を見開いた。

「まだ夜は明けませんか。」

「もうぢきでございますよ。」

それから、二人でなほ頭を冷し續けてるうちに、今井は本當に眠つたらしかつた。

三

翌日になると、今井は熱が去つてけろりとしてゐた。それでもまだ顏の色が悪く、何處となく力無げな様子だつた。一日くらゐ寢てゐなければいけない、と辰代は說き勸めたが、今井は曖昧な返辭をしながら、朝から起き上つて、そして何をするともなく、室の中にぼんやりしてゐた。

それから引續いて、今井の様子は變つてきた。朝起き上つて皆と顏を合せる時には、必ず丁寧に頭を下げた。晩にはよく茶の間に坐り込んで、雜談の仲間に加はつた。椽側の前の三四坪の庭に下り立つて、植込の間の蜘蛛の巣を指先でつゝ突いたり、またはいつまでも屈み込んで、苔類を一々見調べたりした。臺にのつてる小さな木の箱に、二三十錢の駄金魚が六七匹飼つてあつた。そんなものにまで興味を覺えてきたらしく、麩をやつては眺め入つた。そればかりではなく、今迄の粗暴なぎごちない身體つきに、何處となく角がとれて、弱々しいしなをすることがよくあつた。頑丈な身體を變にくねくねとさして、指先で頬鬚を支へてる様子などは、一寸滑稽に感ぜられた。

「今井さんの様子は、あれから何だか變ぢやなくつて?」と澄子は母へ云つた。

「まだ病氣がすつかりお癒りなさらないんでせう。」と辰代は云つた。「表面は癒つたやうでも、しんに悪い所があつて、それが一度にどつとひどくなることがあるものですよ。注意してあげなければいけません。」

そして彼女はそれとなく、身體の調子や氣分の工合を尋ねてみた。

「天氣がいけないんです。」と今井はいつも答へた。

實際いやな天氣が續いた。梅雨期にはいつたせいもあらうが、しつこい雨が絶え間もなく降つて、降らなければ陰

靜に空が曇つて、何もかもじめじめと汗ばんでゐた。今井は椽先に蹲つて、その雨脚や曇り空をいつまでも眺めてることがあつた。

「今井さんは雨がお好きなの？」と澄子は尋ねた。

「えゝ好きです。」と今井は答へた。「雨の降るのを見てると、都會の上に雨降る如く、吾が心のうちも啖く、といふヴェルレーヌの詩を思ひ出します。」

澄子は喫驚した顏付で、今井の樣子を見守つた。

「あなたは詩もお讀みなさるの。」

「昔讀んだことがあります。夢中になつて讀み耽つたものです。」

「さう。ぢやあ一寸教へて下さらない？私いくら考へても分らない所があるから。」

そして彼女は、英語の教科書の中にある短い詩句を持つてきた。今井はそれをすらすらと解釋してきかした。

澄子はまた意外だといふ顏付をした。

その晩彼女は中村に云つた。

「今井さんはあれで詩人だわ。私喫驚しちやつたのよ。」

中村はたゞふゝんといつた顏をしてみせた。

「詩の解釋はあなたよりよつぽどお上手よ。」

「それはさうだらう。僕は醫者だけれど、あの人は文學者だから。」

所が、その晩今井が下りて來ると、澄子は試してでもみるやうな氣になつて、此處は代數の問題を尋ねてみた。今井

は容易く解いてやつた。

「私は算術は嫌いですが、」と彼は云つた、「代數と幾何とは非常に好きです。中學の時に代數で百點貰つたことがありました。」

「ぢやあこれから時々教へて頂戴。私數學は嫌で嫌で仕方ないわ。」

「嫌なのより下手なんだらう。」と中村が口を出した。「僕がいくら教へてやつても、さつぱり覺えないんだから。」

「あらあなたは駄目よ。教へ方がぞんざいで、獨り合點ばかりなすつてゝ、私がよくのみ込まないのに、先へ先へとお進みなさるんですもの。」

「なあに僕のは天才教育だからさ。」

さう云ふ中村の眼を見返して、澄子はくすりと笑つた。

「かういふ凡才を相手だと、骨が折れますよ。」と中村は今井の方に言葉を向けた。

今井はぼんやり何かを考へ込んでゐた。それからまた話しかけられても、短い返辭をするきりで、多くは默つてゐた。しまひには椽側に立つていつて、金魚に見入つた。

その金魚を、今井は自分のもののやうに大事にし出した。何處から聞いてきたのか、金魚の飼ひ方をいろいろ述べて、麩なんかはもうやつてはいけないと云つた。

「金魚に麩は、人間にお茶のやうなもので、食べても少しも滋養にはなりません。その上可なり不消化です。麩よりも、御飯や鰹節をやつた方がいゝんです。」

「だつて、御飯をやれば、眼の玉が飛び出すといふぢやありませんか。」

「そんなことはありません。やりすぎて、消化が悪くなつて、痩せるから飛び出すんです。」

そして毎日夕方、彼は水を半ば取代へてやつた。大きなバケツに、水を半分ばかり汲んで、それを何度も運んだ。一杯汲んで運んだら早く済むのに、と澄子が云ふと、重くつて仕方がないと答へた。澄子は笑ひ出した。

「私水一杯くらゐ平氣よ。」

そして彼女は、バケツに水をなみなみと汲んで、歯をくひしばりながら平氣を裝つて、とつとと運んでいつた。

水ばかりではなく、少し目方のある物に對すると、今井はいつも重いといふのを口癖のやうにした。それからまた、何をしてもすぐに疲れたと云つた。

「今井さんの弱蟲！」と澄子は笑つた。

「そんなことを云ふものではありません。」と辰代はたしなめた。「屹度どこか身體がお悪いんですよ。中村さんに聞いてみませうか。なほるものなら早くなほしてあげた方がようござんすから。」

「いくら中村さんだつて、診察してみなければ分りやしないわ。そして今井さんは、醫者にみて貰ふのが、あの通り大嫌ひでせう。とても駄目よ。」

それでも辰代は氣にかゝつて、或る時中村に相談してみた。中村は注意深く辰代の言葉を聞いてゐたが、ふいに笑ひ出した。

「いや何でもありませんよ。」と彼は云つた。そして澄子の方を向いた。「澄ちゃん、用心しなけりゃいけないよ。」

「どうして？」

中村はなほ薄ら笑ひをしながら、それきり何とも云はなかつた。

その意味が、辰代と澄子とには解せなかつた。そして辰代はそれを、やはり何か病氣の暗示だといふ風に考へた。一人氣を揉みながら、今井の樣子をそれとなく窺つてみると、前よりも外出することが更に少くなつたり、室の中に寢轉んでゐることが多かつたり、庭の隅に萠え出てる草の芽に見入つてゐたり、雨脚を眺めながら涙ぐんでゐたり、月の晩には遲くまで窓によりかゝつてゐたり、始終默つて考へ込んでゐたり、大聲に笑ふことがなかつたりして、何もかもみな病氣を想像させるやうなことばかりだつた。そして彼女は、或る晩地震のことから、本當に彼を病氣だときめてしまつた。

八時頃だつた。中村は病院からまだ歸つて來てゐなかつた。辰代と澄子とが茶の間で、一人は裁縫を一人は學校の下調べをしてゐた。そこへ可なり大きいのが、どしんと一つきて、それからぐらぐらと搖れた。おやと思ふまに、もう小搖れになつて、天井から下つてる電燈の動くのや、柱時計の振子の亂れたのなどが、自然と眼についた。それが暫く續いた。

「地震ね！」と澄子は分りきつたことを云つた。

「何時でせう。」

「八時少し過ぎよ。」

辰代は胸勘定でもするやうに頭を動かした。

「五七の雨に四つ旱、といふから、まだ雨が續くかも知れませんね。」

さう云つてる所へ、階段に大きな物音がした。二人が喫驚して眼をやると、息をつめ眼を見張つてゐる今井の顏が、薄暗い階段口からぬつと出てきた。

「どうかなさいまして?」
今井はすぐには口を利かなかつた。天井からあたりをきよろきよろ見廻して、それからほつと吐息をついた。
「地震でしたね。」
「まあ、逃げ下りていらしたんだわ。」と澄子が云つた。「あれくらゐな地震に……。私もつとひどいのだつて平氣よ。」
今井は何とも云はないで、長火鉢の横に坐つて、小首を傾げながら耳を澄した。
「また來るかも知れませんよ。」
「えゝ屹度來るわ。」と澄子は肩をそばめて見せた。「搖り返しは初めのよりひどいと云ふから、此度は大變よ。そしたら私、今井さんを負つて逃げてあげませうか。」
今井はなほ遠くを聞き入りながら、火鉢の縁にしつかとつかまつてゐた。
その二人の樣子を見比べて、辰代は怪訝な氣がした。これまで二三度地震はあつたが、それも此度のより强いとも弱くはなかつたが、澄子こそ恐がつてはゐたれ、今井が恐がつたためしはなかつた。それなのに此度に限つて……。そしていろいろ考へ合してみても、今井は病氣に違ひない、と辰代は考へた。
それにしても變梃な病氣だつた。今井は普通に食も進み、別段痩せた模樣もなく、たゞ力が失せ氣が弱くなり身體がなよなよとしてきたゞけで、それも一方から云へば、あの變人が普の人間に近よつてきたゞけで、何處といつて變つた樣子は見えなかつた。
「何處が惡いのかしら?」
さう思つて辰代は、なほ今井の樣子に眼をつけた。すると今井は、萬事澄子にも及ばないほどの弱々しさになつてゐ

た。――庭の木戸の輪掛金に、きつい差金を少し強く差込まれたのが、どうしても取れないで、今井はまごまごしてゐた。それを澄子は見かねて、一度にぐつと引抜いてやつた。――自分でお茶をいれて飲むつもりで、今井は茶簞笥から茶の鑵を取り出したが、少し錆のあるその蓋が、なかなか取れなかつた。「私が開けてあげるわ、」と澄子が云つて、二三度やつてみた後、容易く引開けてやつた。――簞笥の後ろに落ちた櫛を取るから、手傳つてくれと奥の室に、澄子は今井を呼んできた。そして二人で、二段重ねの簞笥の上の部分を、持ち上げて下しにかゝつた。それが今井には大變な努力らしかつた。簞笥を再び重ねる時には、今井は危くよろけさうだつた。澄子は一生懸命に氣張りながらも、今井を叱つたり勵ましたりして、そして勝誇つたやうな顏をしてゐた。――「今井さん指相撲をしませう、」と云つて澄子は手を差出した。今井は一寸躊躇したが、着物の袖口を伸しながら手を出した。そして節の太い頑丈な彼の親指は、反りのよいしなやかな澄子の親指に、何度も他愛なくねぢ伏せられてしまつた。「それぢや此度は腕相撲、」と澄子は挑んだ。「よし腕相撲なら負けやしません。」そして彼は居住居を直して、幅廣い掌と握り合した手先とに、顏まで漲めて力を籠めたが、澄子のきやしやな腕にも餘りこたへがなくて、彼女の頬が赤くなる頃には、しなしなと押伏せられてしまつた。三度やつたが三度とも負けた。「右は駄目です、左でしませう、」と彼は云つた。そして左の腕相撲では、澄子は一たまりもなかつた。右手まで手首に添へても、やはり彼にかなはなかつた。彼はたゞにこにこ笑つてゐた。――或る晩、中村が病院に泊つて來ることになつてた時、夜遲くなつて、裏口に何かしきりに音がした。玄關の茶の間にゐた辰代は、うとうとと居眠りながらも、耳さとくそれを聞きつけた。ことことゝ戸を指先で叩くやうなその音は、間を置いてはまた響いてきた。鼠にしては餘り根強すぎ、犬にしては餘り規則的すぎる、一寸怪しい物音だつた。辰代が耳を傾けてるのを見て、其處にゐた澄子も今井も耳を傾けた。暫くして、「戸締はしてあるでせうね、」と辰代は不安げに尋ねた。してある答

だと澄子は答へた。「でも何だか怪しいわ。今井さん、見て來て下さらない？」と彼女は云ひ出した。今井はすぐに立上つたが、奥の室から薄暗い臺所の方を覗き込んだばかりで、先へ進まうとはしなかつた。「ほんとに意氣地なしね。」と澄子は怒つたやうに云ひながら、後から立つてきて、いきなり今井を臺所へ押しやり、自分も一緒に進んでいつて、ぱつと電燈のねぢをひねつた。今井はその俄の光に、眼をぱちぱちやつてゐた。それを見て、澄子はおどけた笑ひ聲を立てた。

さういふ風な今井の樣子を、辰代は呆れ返つて眺めた。肩幅の廣い骨組の頑丈な今井だけに、滑稽でもあれば痛々しくもあつた。そして、これは多分肺病の初期とか神經衰弱とか、さういつた風の病氣に違ひない、或はその兩方かも知れない、といふやうに彼女は考へた。

「あなたどこかお惡かございませんか。」と彼女は尋ねてみた。

「いえ別に何ともありません。」と今井は答へた。

それでも辰代は肺病とか神經衰弱とかについて、それとなく中村に問ひたゞして、結局今井の生活がいけないと結論した。朝一度御飯を食べるきりで、時々西洋料理や蒲燒などを取寄せはするものゝ、大抵はパンと牛乳とで過してるのでは、身體に精分がつくわけはない。中村のやうに一日病院につめてるのなら格別、今井は家にばかりごろごろしてるので、もし家の者同樣でよかつたら、午も晩も賄をしてやつてもよい、と彼女は考へた。

「ねえ、澄ちやんどうでせう？」と彼女は娘にも相談した。

「お母さんさへそれでよかつたら、今井さんはお喜びなさるでせうよ。」と澄子は答へた。

それで辰代の決心はついた。病氣のことには觸れないやうにして、例の不經濟をたてに、もしよかつたら實費で――

全部で二十五圓ばかりで一―賄付にしてあげてもよい、と彼女は云ひ出してみた。

「結構です。」と今井は答へた。「どうかお願ひします。」

そして翌日から、今井は辰代の拵へてくれる米の御飯を食べることになつた。そのために、辰代の手がふさがつてる時には御膳を運んだりなんかして、自然と澄子が二階に上つてゆくことが多くなつた。さういふ時今井は大抵机に両肱をついてぼんやりと、開け放した窓から空を眺めてゐた。

「空を見てると、一番心がしみじみ落付いてきます。」と彼は云つた。

「だつて、こんな曇つた陰氣な空ぢやつまらないわ。」

「私はあの雲の上の、晴れた清らかな空を想像するんです。人間の世界から雲で距てられた、澄みきつた清淨な空です。」

そして、その高い清淨な空を想像ししみじみと心が落付いてる今井は、澄子へ向つて、彼女の身の上を尋ねたり、隣室の中村のことを尋ねたりした。殊に中村のことについては執拗だつた。

「私はあなたが、中村さんと、親戚とか……從兄妹同士とか、そんな風な關係かと思ひました。餘り親しさうだから。」

と今井は眞面目に云つた。

「そりやあ私、中村さんを兄さんのやうな氣がしてるわ。」と澄子は答へた。「だつて、高等學校の時からもう六七年も家にゐらつしやるんですもの。私まだ十歳ばかりだつたから、よく負さつたりしてあげたわ。今でもどうかすると、僕の背中に乗つかつたことがある癖に生意氣だなんて、人を馬鹿にしてしまひなさることがあつてよ。忌々しいから、そんな時には後で仕返しをしてやるわ。こないだなんか、ウエストミンスターの煙草の袋に、アンモニアを一杯垂らしとい

てやつたの。そりあ可笑しかつたわ。この煙草は臭い臭いつて大騷ぎなんでせう。そして私が放笑してしまつたものだから、とうとうばれちやつたの。でも平氣よ。昔のことを云つて人を馬鹿になさるから、一寸おしつこをひつかけてやつたんだわ、金口なんか吸つて生意氣だと云つてやると、いゝ氣持だつたわ。それでも後でお母さんから、嫌といふほど叱られたの。」

「然しあなたは、何でも中村さんに相談なさるんでせう。」

「えゝ、時々……。でも何だか、本氣に聞いて下さらないから、つまらないわ。」

今井は暫く默つてゐたが、ふいに云ひ出した。

「私はあの人が嫌いです。皮肉ばかりで困めたやうな感じがしますから。」

「だつて、皮肉な人は頭がいゝんでせう。」

「頭が惡くて皮肉な人だつてありますよ。勿論中村さんは頭がいゝやうだけれど……。この室に來た當時は、そりやあ變な氣がしたもんです。妙にあの人から壓迫されるやうで……。第一こちらは、この通り粗末な室だし、向ふは立派な八疊の坐敷でせう。それが、壁一重越しで、緣側續きなんだから、まるで私はあの人の從者といつたやうな感じです。向ふの物音が氣になつて仕方なかつたんです。それでも、負けてなるものか、反抗してやれ、といふ風に心を持直して、それからだんだんよくなつて、もう今では、こちらが主人で向ふが從僕だと、平氣で落付いてゐます。」

澄子は驚いて彼の顏を見つめた。その視線を眼の中に受けると、彼は俄に狼狽の色を浮べた。眼を外らして、煙草に火をつけて、煙草の吸口を親指の爪先で、ぎゆつと押し潰し押し潰しした。そして云つた。

「こんなことは、人に云ふべきことぢやありませんが、あなただから云つたんです。誰にも云はないで下さい。」

「えゝ。」

さう答へて、澄子は自分の胸の中だけにしまつたが、そのことが妙に氣にかゝつた。今井の云つただけのものでなしに、自分自身も關係してゐるやうな、そして何だか悪いことになりさうな、或る大きな影が、心の上に落ちかゝつてきた。

そして澄子がその方に氣を取られてる時、一方では辰代は、以外なことを耳にした。

今井は越してきて、五月の末になると、洋食屋と鰻屋との拂ひだけを濟し、それから五圓紙幣を一枚出して、殘りの下宿料と牛乳屋の拂ひとは、今暫く待つてくれと云つた。辰代は別に注意もしないで、その通りにしておいた。それから六月の末になると、今井は如何にも恐縮したやうな顔付で、十圓だけ差出した。金の來るのがどういふものか後れたので、とにかくそれだけ納めておいて、殘りと諸拂ひとは暫く待つてほしい、と云ひ出した。そして辰代は、すぐに金を催促するからといふ彼の言葉を信じて、それで我慢してゐた。所が、晦日に金を取りに來た牛乳屋が、辰代の斷りの言葉を聞いて、先月から滯つてるのにそれでは困ると、可なりうるさく云つてから、何と思つたか、下宿人には用心しなければいけないと注意して、次のやうな話をした。

やはり或る素人下宿屋で、大學生と稱する學生を世話した所が、それが變な男で、毎日家にばかりごろごろしてゐて、學校へ行く様子なんかはてんでなかつた。訪ねてくる友人連中がまた、みんな破落戸みたいた者ばかりだつた。そして、やれ洋食だの鷄だの牛肉だのと、さんざん贅澤なことを云つといて、月末には五圓しか金を拂はなかつた。次の月もやはり五圓だつた。三ケ月目には一文もないと云つた。餘りひどいので、しまひには主人も腹を立てゝ、内々調べてみると、なるほど大學に籍だけはあるが、學校に出てる様子は少しもなかつた。そしてまた、方々の下宿屋を食ひつ

めた後で、もう正式の下宿屋にはゐられなくなつてることも分つた。それから主人はうろたへ出して、その學生の持つてる品物や書物などを——不思議に書物だけは可なり多く持つてゐたのを——無理に賣り拂はせといて、それでも不足の金はまあ諦めをつけて、とうとう逐ひ拂つてしまつた。それがつい二三ケ月前のことである。

「そんなことがよくありますから、うつかりひつかゝつちや大變ですぜ。」と牛乳屋は云つた。

辰代は驚いてしまつた。話の中の學生が、餘りに今井と似通つてゐた。或は今井であるかも知れなかつた。そして狼狽の餘り、牛乳屋の拂ひはさせられてしまつて、それから澄子へ相談してみた。

「まさか、あの弱蟲の今井さんが！」と澄子は打消した。

「でもあれは、病氣のせいではありませんか。家にいらした時からのことを考へてごらんなさい。」

母にさう云はれてみると、澄子も多少の疑惑を持ち初めた。

「ともかくも、家にどなたかお友達がいらしたといふ話だつたから、その名前をそれとなく聞いてごらんなさいよ。」

「お母さんが聞いたらいゝぢやないの。」

「いえ、私から聞くと角が立つから……。」

それは當然もつと早く聞いてみるべきことでもあつたし、また何かのついでに譯なく聞けることでもあつたが、それを一の手掛りとして氣にとめると、變にこだはつてしまつて、うつかり口に出せない事柄のやうに思ひ做された。さういふ母の氣持が、澄子へも傳はつていつた。さも重大な問題ででもあるやうに、澄子は不承不承にその役目を引受けて、いゝ機會を窺つてみた。

その機會がなかなか來なかつた。辰代は幾度も催促した。それで澄子も遂に決心して、或る晩、二階の戸を閉めに行

つた時、今井から學校の試験のことを尋ねられたのをきつかけに、何氣なく尋ねてみた。

「あなたはちつとも學校にいらつしやらなくて、ほんとにそれでいゝの？」

「行つたつてつまらないから行かないんです。」と今井は答へた。

「だつて、家にゐらした方はみんな、眞面目に學校に出ていらしたわ。……そして……あの……あなたのお友達で家にゐらしたといふのは、何といふ方なの？」

尋ねながら澄子は、背中が寒くなつて顏を伏せてしまつた。

「え、私の友人で……。」

「家にゐらした方があると、さうあなたは云つてらしたでせう。」

「あ、あれですか。あんなことはでたらめですよ。」

澄子が吃驚して顏を擧げると、今井は眞面目くさつて云ひ出した。

「私はあの時、靜かな宿を探すつもりでぶらついてゐますと、ふとこの家が眼についたのです。あの二階に置いて貰ふといゝなあと、二三度表を通りすぎてから、思ひきつてはいつて來ました。全く偶然でした。然し今になつてみると、偶然だとばかりは云へない氣がします。自分の落付くべき所へ、自分で途を開いて、落付いてしまつたやうな氣がします。」

澄子は言葉もなくて、今井の顏をぼんやり見つめてゐた。その時今井は、半分机によりかゝつてゐたが、急に向き返つて、膝をきちんと合せ、握りしめた兩の拳で腿の上を押へつけながら、少し頭を傾けて云つた。

「澄子さん、私はあなたに眞面目に聞いて頂きたいことが……いや、眞面目に聞かして頂きたいことがあるんです。」

「なあに？」と口の中で云ひながら、澄子は一寸居住居を直した。

「本氣で、心から、私に聞かして頂きたいんです。」

「どんなこと？」

「あなたは、私を……どう思つてゐられるんですか。」

「どうつて……。」云ひかけておいて彼女は、今井の眞劍な氣勢に打たれてさし俯向いたが、やがて靜に續けた。「私にはよく分らないけれど、あなたは、詩人で夢想家で、そしていくらか野蠻人みたいな……そして一寸變つた人だと思つてるわ。」

「いえそんなことぢやありません。……私の云ひやうが惡かつたかも知れませんが、そんなら云ひ直します。あなたは私を……。」そこで彼は文句につかへて、自分で自分を鞭打つやうに、膝の拳をぎゆつと押へつけた。そして云ひ直した。「あなたは私を、どんな眼で見てゐられるんですか。」

「私何も變には思つてやしないわ。」

「いえそんなことでもありません。」そして彼はまた、膝の拳固をぎゆつぎゆつとやつた。「あなたは私に、たゞ友達としての感情で對してゐられるのですか、それとも、異性としての感情で對してゐられるのですか。」

「まあー、私そんなことは……。」

「聞かして下さい。本當のことを聞かして下さい。」

「だつて、私、そんなことは考へたことがないんですもの。」

「考へたことがないんですつて！でもあなたは、もう來年は女學校を卒業されるんでせう。そして、やがては結婚もさ

れるんでせう。愛といふ問題を考へたことがないんですか。」

「ないわ。」

「本當ですか。」

「えゝ。」と澄子は力無い返辭をした。

「嘘です。そんな筈はありません。私はあなたを、中村さんのやうに子供扱ひには出來ません。私はあなたに對すると、たゞの友達としてゞはなく、異性としての感情に支配されてきます。そして、いつもあなたのことばかり考へてゐるんです。」

「だつて私……。」

そして暫く沈默が續いた後で、澄子は何かにぞつとして顏を擧げると、今井は眼に一杯涙ぐんでゐた。

「あら、どうなすつたの？」

今井は默つてゐた。

「御免なさい。ねえ、私謝（あやま）るから……。」

「謝ることなんかありません。」と云つて今井は鼻の涙をすゝり上げた。

「だつてあなたは……。」

「いえ、何でもありません。」

「そんならいゝけれど……。」そして彼女はまた繰返した。「御免なさい、ねえ。私には何にも分らないんですもの。」

今井はぴよこりと頭を下げた。

「私の方が悪いんです。あなたは全く純潔です。たゞ、愛のことを考へといて下さい。すぐに分るんです。ほんとに考へといて下さい。」

「えゝ。」

「屹度ですね。」

「えゝ。」

それから、今井はまた默り込んで、いつまでたつても石のやうに固くなつてゐた。澄子は立上つて、自分でも譯の分らないことを考へ込みながら階下に下りていつた。

奥の室で、簞笥の中を片付けてゐた母に、ぱつたり顔を合して、その顔をぼんやり見つめると、澄子ははつと夢からさめたやうに、頭の中がすつきりしてきて、今井と交へた滑稽な會話が、まざまざと思ひ浮べられた。そして急に可笑しくなつて、其處に笑ひこけてしまつた。

辰代は呆氣にとられた。

「澄ちやん！どうしたんですよ。狂人のやうに笑つてばかりゐて！」

「だつて可笑しいんですもの。」

「何が？……どうかしましたか？」

笑ひの發作が靜まつて、少し落付いてから、澄子はなほくすくす殘り笑ひをしながら、今井との對話を話してきかした。

辰代はぢつと聞いてゐた。今井が嘘を云つたことについては、さほど怒りはしなかつたが、愛のことになると、むき

になつて腹を立てた。澄子は啞然とした。
「まあ、可笑しなお母さんだわ！」
辰代は澄子の云ふことなんかは耳にも入れなかつた。
「失禮にも程があります。人の娘に向つて、それもほんの子供に向つて、何といふぶしつけな厚がましいことでせう。お父さんが亡くなられてから、人樣をお世話してはゐますが、それほど踏みつけにされるやうなことを、私はまだ一度もした覺えはありません。嘘をついて人の家にはいり込んできておいて、こちらで親切にしてやれば、圖々しくつけ上つて、何をするか分りはしません。私は何も道樂でこんなことをしてるのではありませんよ。拂ひも滿足に出來ないくせに、何といふことでせう。眼に餘ることがあつても、お氣の毒だと思つて、隨分親切に盡してあげたつもりです。それなのに恩を仇で返すやうなことをされて、いくら私でも、もうさうさうは辛棒出來ません。とつとゝ出て行つて貰ひませうよ。出て行かなければ、私の方で出ていつてしまひます。……澄ちやん何をぼんやりしてるのですよ。さう云つてゐらつしやい。あなたが嫌なら、私がきつぱりと斷つてきます。」
「そんなことを云つたつて、お母さん……。」
「いゝえいゝえ、止して下さい。もう我慢にも私は嫌です。」
そして彼女は、そこいらの品物に當りちらした。澄子がいくら宥めても駄目だつた。中村が歸つてくると、澄子は飛んでいつて、譯を――自分にもよく腑に落ちないその顚末を、かいつまんで話してきかした。そして中村と二人で彼女を宥めた。
「またこんなことがあらうものなら、もう此度こそ許しはしません。」

さう云つて辰代はまだ怒つてゐた。

中村は笑ひながら澄子の方を顧みた。

「だから、澄ちやんは用心しなければいけないと、僕が云つといたぢやないか。」

「だつて、」と澄子は不平さうに呟いた、「私何も悪いことをしやしないわ。」

五

それから一週間とたゝないうちに、辰代も本當に我慢しかねることが起つた。

今井の所へは、なほ時々怪しげな青年が訪れてきた。飯を食つていつたり、下駄をはいていつたり、傘を持つていつたりして、そのまゝになることが多かつた。そして七月の熱い日に、初めて夕立がして、その雨がまだじとじと降り續いてる夕方、洗ひざらしの浴衣に短い袴をつけ鳥打帽を被つた男が、びしよ濡れになつてやつて來た。雨の中を板裏の草履で歩いて來たので、脊中まで跳泥が一杯上つてゐた。辰代はそれを、一度見たやうな男だとは思つたが、はつきり思ひ出せなかつたので、氣がつけば放つておけない性質から、袴だけ脱がして、火に乾かして泥を落してやつた。そして彼は、夕飯を食つて、袴をつけて、雨がまだ少し降つてる中を碌に禮も云はずに歸つていつた。辰代はわざと、傘を貸してやらなかつた。今井ももう、自分の傘を持つてはゐなかつた。

するとその晩、中村が一寸外出しかけると、足駄が見えなかつた。何處を探しても見付からなかつた。確かにその足駄は、辰代が晝間洗ひ清めて、裏口に干してゐたのを、夕立の時慌てゝ取込んで、玄關に置きつ放しにした筈だつた。さう思つて彼女は、なほ玄關の土間をよく見ると、隅の方に板裏の汚れ草履が脱ぎ捨てゝあつた。あの男が足駄をはい

ていつたに違ひなかつた。

丁度今井が玄關の茶の間に坐つてゐたので、辰代はその方へ急き込んで尋ねた。

「この草履は、あなたの所へいらした先刻の人のではございませんか。」

今井は見に立つて來た。

「そうかも知れません。」

「ではあの人が足駄をはいていつたのですよ。私もうつかりしてゐましたが、あなたお氣付きになりませんか。」

「さうですね。……いやさうかも知れません。あの男のしさうなことです。いつか私の傘を默つて持つていつたこともありますから。」

「まあ！」

「濟みませんでした。」

誰に云ふともなくさう云つて、今井はまた火鉢の側へ坐り込んで煙草を吹かした。

その落付き拂つた樣子が、辰代の癪にさはつた。先日の鬱憤もまだ消えずに殘つてる所だつた。辰代は本氣に怒り出した。あんな上等の足駄をあんな男にはいてゆかれるのも勿體なかつたし、殊には中村のを無斷で掠つてゆかれたのが忌々しかつた。

「あんな男が出入りするあなたのやうな人を置いてゐたら、私共でどんな迷惑をするか分りません。まるで泥坊をかゝへておくやうなものです。」と辰代はつけつけ云つた。

「然し彼奴もよつぽど困つてゐたんでせうから……。」

「困れば人さんの物を盗んでいつたつて構はないと云ふんでございますか。それであなたは平氣でゐらつしやるか知れませんが、私共ではそんなだらしのないことは大嫌ひです。」

そして彼女は、傍から中村に宥められても承知しないで、今井の方へにじり寄つていつた。

「あなたのやうな人には、何を申しても應へがありませんから、もう何にも申しません。明日から、今日からでも、何處へなりといらして下さい。もう私共では、あなたをお世話致すことは出來ません。」

調子が落付いてるだけに本當の憤りの籠つてるその言葉を、ねつとりと今井へ浴びせておいて、それでもまだ足りないかのやうに、底光りのする眼を今井の顏に見据ゑた。今井はその顏をぎくりと擧げて、彼女の視線にぶつかると、固くなつて息をつめたが、一秒二秒の間を置いて、ぶるつと身震ひするやうに立上つた。その時、室の隅つこで呆氣に取られてゐた澄子が、はつとして同時に我を忘れて、いきなりそこへ飛び出して、母を庇ふといふよりは寧ろ、母の肩に取縋つた。

「お母さん！」

「あなたが出る所ではありません。」と云つて辰代は、澄子の手を拂ひのけた。そして今井の方へ一膝進めた。「打つたら打つてごらんなさい。女だと思つて馬鹿にして貰ひますまいよ。さあ只今からでも、何處へなりと出て行つて下さい。」

今井はつゝ立つたまゝ、握りしめた兩の手先をかすかに震はしてゐたが　澄子の驚き怯れた兎のやうな眼付を見るとつめた息をほーつと吐くと共に氣勢を落して、其處にがくりと膝を折つて坐つた。その餘勢かと思はれるほどすぐに、疊へ兩手をつき頭を下げた。

「私が惡うございました。許して下さい。」

餘りに急な意外なことなので、辰代も澄子もぼんやりした所へ、今井はまた繰返した。

「許して下さい。謝りますから、許して下さい。」

眞面目だとも不眞面目だとも分らない氣分に支配された、動きの取れない沈默が落ちてきた。そこへ、素知らぬ顔で椽側に佇んでゐた中村が、のつそりはいつて來て火鉢の横手に坐つた。

「今井さんも謝ると云ふんだから、もういゝぢやないですか。」と彼は辰代に云つた。

それが却つて、辰代にとつては助けだつた。

「謝つてそれで濟むことではございません。」と彼女は云ひ出した。「あんまり人を踏みつけにしてゐます。私は何も、足駄一つくらゐどうのかうのと申すのではありません。御自分の胸にお聞きなすつたら、大抵分りさうなものです。出ていつて頂きませう。私共ではもうきつぱりとお斷りします。」

さう云ひ捨てゝ彼女は、荒々しく奥の室にはいつていつた。がすぐに、襖の影から呼びかけた。

「澄ちやん、あなたもこつちへいらつしやい。」

澄子は暫くためらつた後に、中村から眼で相圖をされて、漸く立つていつた。見ると、辰代は押入の中に首をつゝ込んで、手當り次第に品物をかき廻してゐた。

「お母さん、何をしてるの?」と澄子は靜に尋ねてみた。

「何でもようございます。あなたは學校の勉强でもなさい、遊んでばかりゐないで!

澄子は顔をふくらしながら、机の前に坐つて、何を考へるともなく、ぼんやり考へに沈んだ。

玄關に殘つてゐた中村と今井とは、暫くは口も利かなかつたが、やゝあつて、今井は火鉢の上に伏せてゐた顔を、徐

々にもたげて、庭の方を向いてる中村の横顔が、眼にはいる所までなると、ふいに口を開いた。

「私が悪かつたんでせうか。」

「え？」と中村は見返つた。

「私の方がそんなに悪いんでせうか。」

「悪いと思つてあなたは謝つたのではないのですか。」

「悪い……といふよりも、済まないと思つたんです。」

「どつちにしたつて、結局同じことぢやないですか。」

「いえ違ひます。……ぢやああなたは、私が悪いと思はれるんですね。」

「私は何も事情を知らないですから、悪いとか善いとか、そんなことは分りませんが……」そして中村は軽い微笑を浮べた、「たゞ、あなたは少し……芝居氣が多すぎるやうですね。」

「え、芝居氣が……。」

「と云つちや言葉が悪いか知れませんが、兎に角、不眞面目さが……その態度にですね、態度に人を喰つたやうな不眞面目さが少しあるので、それで人から悪く思はれるのぢやないのでせうか。」

今井は一寸顔の色を變へた。そして暫く默つてた後に、怒りを強ひて抑へつけたやうな調子で云つた。

「あなたに聞いたのは私の間違ひです。あなたは純眞なものを、何でも滑稽化して見る人です。こゝの小母さんのことだつて、あなたは滑稽だと思つてゐられるんでせう。」

中村は皮肉な苦笑を洩らした。

「ついでに、澄ちやんのことも滑稽だと思つてるかも知れませんよ。」

今井はぎくりとしたやうに立上つた。そして相手を上から見据ゑながら云つた。

「あなたとはもう口を利きません。」

「さうですか。御自由に……。」

中村がさう云つてるうちに、今井はくるりと後ろを向いて、二階の室に上つていつた。その姿を見送つて、中村はまた苦笑を洩らした。

臺所でじやあじやあ水の音がしてゐた。怒つた時にはやたらに用をしないではゐられない辰代が、夜遅く、他に仕事もあらうに、何か洗濯物をしてるのだつた。中村はその音に耳を傾けたが、やけに敷島を一本すぱすぱ吹かした。それが灰になつてしまはふとする頃、奥の室から澄子が出て來た。眼を赤く泣きはらしてゐた。

「中村さん、どうしたらいゝんでせう?」

敷島の吸殻を火鉢に投り込んで向き返つた中村に、澄子は縋りついていつた。

「私恐くつて……どうしたらいゝかしら。」

「何が?」

澄子は片手で中村の手を握りしめながら、片手で二階の四疊半を指さした。

「あんな天才には、」と中村は云つた、「凡人が近寄つちやいけないよ。」

「あら、私眞面目に云つてるのに!」と澄子は涙聲を出した。

「心配しなくてもいゝよ。あゝいふ人には、つゝかゝつてゆくと始末におへない。そつとしてさへおけば、何でもなく

済んでしまうことなんだ。」
「だつて、私がもとで、お母さんと今井さんとの間が、あんな風に變にこぢれたやうな氣がするんですもの。」
「そんなことなら、心配するには及ばないさ。お母さんもあの人も、あんな風の性質だから、いつのまにかけろりとなほつて、一寸した心の持ちやうで、人一倍親しくならないとも限らないよ。」
「でも、私今井さんが何だか恐くなつてきたの。」
「澄ちやん！」と中村は云つて、ぢつと彼女の顏を眺めた。「澄ちやんは、今井さんを、好き？　嫌ひ？　どちらなんだい。」
「好きでも嫌いでも……どちらでもないわ。」
「それぢやあ何も恐がることはないよ。恐い恐いと思つてると、しまひにはもう動きがとれないほど、好きで好きでたまらなくなるかも知れない。」
冗談かと思つて澄子は、返辭に迷つて中村の眼を見たが、その眞劍な眼付に心を打たれた。
「恐がつてはいけないよ。」と中村はまた云つた。「平氣でゐさへすれば大丈夫だ。」
さうかも知れないと思ふ氣持と、しつかりした柱を見出した氣持とで、澄子は兩手の中に、任せられた中村の片手を握りしめながら、彼の膝に寄りかゝつていつた。
「でも……萬一のことがあつたら、あなた助けて下さるわね。」
「あゝ、安心しておいでよ。」
片手をそつと脊中にかけられて、憐れむやうな笑顏で覗き込まれると、澄子はほつと溜息をついて、その溜息と一緒

に、頭の中のもやもやを吐き出してしまつた。そしてその晩、安らかに眠ることが出來た。

けれども、その翌日から澄子は、今井に對していくら平氣でゐようとしても、それがなかなか出來なかつた。今井は辰代から云はれた言葉を氣にも止めてゐないらしく、今迄通り落付いてゐて、たゞ辰代と中村とに對しては、一言の挨拶もせず見向きもしなかつたが、澄子と顔を合せると、丁寧にお辭儀をするのだつた。澄子はどうしていゝか分らなかつた。彼女には何もかも變挺に思はれた。母があれきり何とも云はないで、而も三度三度の食事の膳を、自分で今井の所へ運んでゆくのも、また中村が始終笑顔をして、今井の姿を見送るのも、また今井がこれまで通りに、長い間階下の椽側に屈んでゐたり、金魚の水を代へてやつたりするのも、凡てが變挺に思はれた。そして、茶の間の晩の雜談に、今井が決して加はらなくなつたのだけが、はつきり彼女の腑に落ちたけれど、その樂しい雜談に於ても、母と中村とが妙に默り込むことが多くて、何だか互に腹をでも立てゝるかのやうなのが、やはり彼女には合點ゆかなかつた。何もかも調子が狂つてきた、とさういふ氣がした。

そして最もいけないのは、澄子の樣子をぢつと覗つてる今井の眼だつた。澄子はその眼を、あらゆることのうちに感じた。

彼はこれまで、朝顔を洗ふのに、たゞ水でぢやぶぢやぶやるだけだつたが、或る朝澄子が吃驚したことには、彼女がいつも使ふクラブ洗粉を、いつのまにか買つてきて、それで念入りに洗つてゐた。髯を剃つた後には、彼女が用ゆるのと同じホーカー液を、女らしい手附でぬつてゐた。――彼はいつも朝寢坊だつたが、俄に早起になつてきて、澄子が學校に行く前に髮を結つてると、少し離れた所に屈み込んで、あかずに眺め入ることが多かつた。「澄子さんの髮は綺麗だなあ、」と彼はよく獨語の調子で呟いた。――或る時彼は、椽側に屈みこんで、しきりに足の指をいぢくつてゐた。何を

してるのかと思つて、澄子がそつと、覗いてみると、彼はひよいと振返つた。その視線が、彼女の素足の親指に來た。

「澄子さんの足の指は、どうしてさうまむしが出來るんです！」その言葉に吃驚して彼女は、力を入れた足の親指に眼を落すと、今迄自分でも氣付かなかつたが、小さな爪が深く喰ひ込んでる子供らしい指の關接に、くりくりしたまむしが出來てゐた。

さういふことのうちに、それからまだいろんな些細なことのうちに、澄子は自分を見つめてる今井の眼を感じた。そしてその眼が、四方から自分の身邊に迫つてくるやうな氣がした。殊に或る日、彼女は臺所で一寸母の手傳ひをして、其處から出て來ると、椽側に今井が立つてゐた。彼女が學校から歸つてきて、脫ぎすてたまゝ室の隅に片寄せておいた袴を後ろ前も前と一緒に持ち添へて、それを帶の所にあてがひながら、しきりに首をひねつて考へてゐた。その樣子が變に滑稽でまた眞面目だつた。澄子は思はず吹笑さうとしたが、喉がぎくりとしてつかへてしまつた。それからどうしていゝか分らなくなつた。いきなり臺所へ駈け戻つて、

「お母さん、玄關にどなたかいらしたやうよ。」

と大きな聲で叫び立てた。そして手を拭き拭き出て行く母の後ろから、自分もそつとついて行つた。見ると、今井は袴を投り出して、素知らぬ顏でつゝ立つてゐた。彼女はほつと安堵して、彼の方をちらと見やりながら、袴を取つてきて丁寧にたゝんで簞笥の上にのせた。

それまではまだよかつたが、やがて、もうどうにも出來ないことが起つた。

夕方から風がぱつたりと止んだ、いやに蒸し暑い晩だつた。眞夜中に、澄子はふと眼を覺した。物に怯えて息苦しいやうな、變な心地がしたので、寢呆け眼であたりを見廻すと、古い十燭の電燈に覆ひをした、影を含んでるぼやけた光

が、薄すらと流れ出してる次の玄關の室に、物の動いてる氣配がした。おやと思つて、蚊帳越しに眸を定めてみると、薄青の地に白菊くずしの模様のあるメリンスの着物が、室の眞中にぶら下つてゐた。そんな筈はない、と思ふとたんに眼が冴えた。長い髮の毛を亂した今井が、横顔をこちらにして、彼女の平常着を引つかけ、襟を合したその兩手を、そのまゝ胸に押しあてゝ、歩いてみようか坐つてみようかと思ひ惑つた形で、なほぢつと立ちつくしてるのだつた。それと分つた瞬間に、澄子はぶるぶると身體が震へて、何を考へる隙もなく、母の方へ手探りに伺ひ寄つて、力一杯に揺り起した。

「お母さん、お母さん、今井さんが……。」

出すつもりの聲が出なかつたのか、辰代はきよとんとした眼で見廻したが、澄子に指さゝれるまでもなく、今井の姿を見付出した。そして、眼がはつきりさめて様子を見屆けるまでの間、ぢつと見守り續けた。今井の姿がちらりと動いて、半ば立て切つてある襖の影に、はいつてしまはうとしかけた時、彼女はがばとはね起きて、次の室に飛び出していつた。

「今井さんぢやございませんか。」

澄子の着物の中で、今井は棒のやうに立悚んだ。

「何をなすつてゐらつしやるのです?」

見据ゑられた眼付を、身體を固めてはね返してゐたが、やがて今井はふわりと女着物を脱ぎすて、棒縞の寝間着一つになつて、押し伏せられるやうに其處に坐つた。辰代は澄子の着物を、片手を差伸して引寄せ、それから前腕に抱へ取つた。その威猛高な立像の前に、今井は頭を垂れて、一語一語に力をこめたがら云つた。

「私はお願ひがあります。澄子さんを……私に下さいませんか、私と結婚を許して下さいませんか。一生、命にかけても、私は澄子さんを愛してゆきます。許して下さい。一生のお願ひです。」

辰代はぶるぶると身を震はして、なほ一寸はつゝ立つてゐたが、くるりと向き返つて椽側に出で、さも忌々しいといつたやうに、澄子の着物を打ちはたき、それを奥の室の隅に投げやり、玄關の室との間の襖を、手荒く閉め切つておいて、また蚊帳の中にはいつて來た。そして、布團の上に坐つてる澄子へ、叱りつけるやうに云つた。

「早く寢ておしまひなさい！」

澄子は驚いて布團の中にもぐり込んだ。母が今井の言葉に對して一言も云ひ返さなかつたのが、異常な恐ろしいことのやうな氣がした。母が息をつめて齒をくひしばつてる樣子まで、まざまざと見えてきた。しいんと靜まり返つた中に一刻一刻、非常なもどかしさでたつていつた。澄子は堪へきれなくなつて、おづおづ呼んでみた。

「お母さん！」

「まだ眼覺めてるんですか。」と母はすぐに應じた。「早く眠つておしまひなさい！」

澄子は布團の中に額までもぐり込んだ。息苦しくなつてまた顏を出した。

だいぶたつと、此度は辰代の方から呼びかけた。

「澄ちやん！」

「なあに？」と澄子はすぐに應じた。

「まだ眠らないんですね。早く眠つておしまひなさいつたら！」

澄子はまた布團を被つた。そして顏を出したり入れたりしてるうちに、三時が打つた。襖一つ距てた向ふの室に、今

井がまだゐるかゐないか、しきりと氣にかゝつた。寢工合が惡くて仕方なかつた。何度も枕をなほしてゐるうち、辰代が本氣で叱りつけた。

「何でいつまでも愚圖愚圖してるんです！」

澄子は息をひそめた。三時が打つたきり、半時間も時間も、いつまで待つても打たなかつた。時計が止つたのぢやないかしら、と思ふ耳へ、秒を刻む音がはつきり響いてきた。仕方ないから、その音を一所懸命に聞き入つた。そしていつしか、精根つきた重苦しい眠に、何もかも融け去つていつた。

非常に長くたつてから……と後で思はれた頃、澄子は消え入るやうな叫び聲を立てた。辰代がはね起きてみると、澄子は脂汗を額から、流しながら、死んだ者のやうに兩手を胸に組み合はしてゐた。眸の定まらない眼を一杯見開いて、母の姿を見て取ると、泣聲とも叫聲とも分らない聲を立てゝ、ひしと縋りついてきた。

「どうしたんです、澄ちやん！」

「今井さんが……私を……殺さうとするから……。」

「えつ、何ですつて！」

しくしく泣き出した澄子を抛つてをいて、辰代は蚊帳から伺ひ出た。そして臺所の中に消えていつた。澄子は泣きやめて、喫驚して起き上つた。辰代は間もなく戻つてきて、足音を偸みながら玄關の室の襖に近寄り、そこにぴたりと身を寄せた。後ろ手にした右手に、庖丁を握りしめてゐた。薄暗い光りにも、ぴかりと光つたその刃先を認めて、澄子は夢中に飛びついていつた。その氣配に押し進められてか、辰代は澄子の手の屆かないうちに、襖をさらりと引開けて、二三歩進んだ。澄子もその後に續いて驅け出た。玄關の火鉢の猫板によりかゝつて、今井が泣いてゐた。二人が飛び出

したのにも顔を擧げないで、猫板の上を一杯涙で濡らしてゐた。

澄子は二人の姿を――髪を亂して庖丁を握りしめながらつつ立つてる辰代と、火鉢によりかゝつて涙を流してゐる今井とを――見比べてみたが、ぞつと脊中が冷くなつて、奥の室に逃げ込みかけた。その足を俄に返して、二階の階段を駈け上つた。そして中村を激しく揺り起した。

「來て頂戴よ、早く。お母さんと今井さんとが大變です。早く……。」

中村はゆつくり背伸びをしてから起き上つた。そして着物を着代へた。帶を結んでる所を、澄子に引張られて下りていつた。

辰代と今井とは、先刻のまゝ身動きもしないでゐた。奥の室から流れ寄る薄暗い光に、中村はぢろりとあたりの様子を見て、ぱつと電燈のねぢをひねつた。その明るい俄の光が、非常な効果を與へた。今井は夢からさめたやうに顔を擧げて、肩をすくめたが、それから寢間着の袖口で、猫板の上の涙を拭き取つた。辰代も同じく夢からさめたやうに、手に握つてた庖丁に自ら氣付いて、それを奥の室に投げやつて、其處にぐたりと坐つた。

「一體どうしたんです?」と中村は誰にともなく尋ねかけた。

誰も返辭をする者がなかつた。いつもあんなにいきり立つ辰代が、その時に限つて何とも云はないことから、中村は事の重大なのを見て取つて、椽側の方へ身を避けた。澄子もついていつて、彼の後ろに身をひそめた。幾匹も蚊が集つてきた。そしてひどく蒸し暑かつた。中村は立上つて、雨戸を二三枚開いた。外にはもう白々と夜明けの光が漂つてゐた。中村は思ひ出したやうに欠伸をして、涼しい空氣を胸深く吸ひ込んだ。その時、今井の聲がしたので、振向いてみると、今井は辰代の前にかしこまりながら、亂れた調子で云つてゐた。

「……私にはどうにも出來なかつたんです。いけないと思へば思ふほど、益々心が囚へられていつたんです。然し自分では、眞劍な戀だと思つてゐます。餘り眞劍すぎる戀だと思つてゐます。がそれももう駄目になりました。いくら說いても、どうにもならないことを悟りました。諦めます。一所懸命に諦めます。」そして彼は齒をくひしばつた。「諦められるかどうか分りませんが、兎に角努力してみます。それで、私は今日から引越すことにします。このまゝ愚圖愚圖してるのは、私のためにもあなた方のためにも、いけないことのやうに思はれるんです。たゞ私は、金がちつともありません。拂ひをしないで引越してゆくのを、許して下さい。私には何處からも金のはいる當がないんです。父も母もゐないんです。たゞ月々十五圓づゝ、或る人から補助を受けてるだけです。家庭教師でもして働け、と云つてくれる者もよくありますが、そんな下らないことに、大切な能力を費したくないんです。私は專心に、讀書と思索とに日を送つてきました。この前の下宿から追ひ出される時、書物を取上げられてしまつたのが、實に殘念でした。然し仕方ありません。一所懸命に勉强します。私一人を食はしてくれるくらゐの餘裕は、日本の社會にもあることゝ思つてゐます。それだけの恩は、いつか社會に報いてやるつもりです。十倍も百倍もにして返してやるつもりです。さう思ふと愉快です。けれど、實は今日引越すと云つても、行く先がないんです。正式の下宿屋は、何軒も食ひ逃げした揚句で、僞名でもしなければ置いてくれません。僞名するのはこの上もない屈辱です。それで、私に月々補助してくれてる人の所へ、押しかけていつてみるつもりです。もし後でその人が何か聞きに來ましたら、ありのまゝを答へて下さい。或は金を拂つてくれるかも知れません、それも當にはなりません。御迷惑をかけて濟みませんが、許して下さい。それから、俥を二臺お頼みします。俥代くらゐは持つてゐます。私は御宅から出て行くのが、どんなに悲しいか分りません。いろんな打算をぬきにして、たゞ純粹な感情から悲しくて堪らないんです。私はいつまでも、あなたと澄子さんとのことは忘れませ

ん。私のこともどうか覺えてゐて下さい。あなたの生きてゐられるうちには、立派な者に、たとひ世の中に名前は出なくとも人間として立派なものになつてお目にかけます。私は感謝の念で一杯です。」そして彼はまた齒をくひしばつた。
「でも長くゐては悪いことになりさうです。すぐに引越します。何もかも許して下さい。すぐに引越します。」
今井はぷつりと言葉を切つて、一つ丁寧にお辭儀をして、慌しく二階に上つていつた。
辰代はまぢろぎもしないで、彼の言葉を聞いてゐたが、彼からお辭儀をされると、やはり丁寧にお辭儀をした。その頭を擧げた時には、彼はもう二階の階段を二三段上りかけてゐた。彼女は一寸眼を見据ゑて、それから立上つて、彼の後を追つてゆかうとした。その時、椽側の柱の影から、仔細の様子を覗つてゐた中村が、飛んで出て彼女を捉へた。
「お止しなさい。」
きつい調子でさう云はれて、辰代は面喰つたやうに眼をきよろつかせた。そして何とも云はないで、奥の室に逃げ込んでいつた。
暫くして、澄子がそつと覗いてみると、辰代は薄暗い電燈の下で、箪笥にぐつたりとよりかゝつて、涙が頬に流れるのも自ら知らないらしく、寝間着の薄い襟に顔を埋めて、深く考へに沈み込んでゐた。澄子は吃驚して、中村の所に戻つてきた。
「お母さんは、泣いてるのよ。」
「放つとくがいゝよ。お母さんも今井さんも、揃ひも揃つて狂人ばかりだ。」と中村は云つて、何故か首を振つた。「まあいゝさ。これをきつかけに、今井さんに出ていつて貰はないと、どんなことになるか分らない。さうなつたら、澄ちやん一人が困るぢやないか。」

「そりやあ困るわ。」

「だから、皆の氣が變らないうちに、早く俥を呼んでおいでよ。」

「さうしませうか。」と澄子はまだ思ひ惑つた調子で云つた。

「そして、お母さんには何とも云つちやいけないよ。」

「えゝ。」

澄子は大急ぎで着物を代へ髮を一寸なでつけて、俥屋へ駈け出していつた。その俥がまだ來ないうちから、今井は來た時と同じ三個の荷物を、一人で玄關に並べてしまつた。そして挨拶もしないで、荷物を積んだ俥の後の俥にのつて、朝靄のかけてる通りを、石のやうに固くなりながら去つていつた。

中村と澄子とが、ぼんやりその姿を見送つた。辰代はまだつくねんと奥の室の隅に坐り込んで、顏をも出さなかつた。

韓信の死

長與善郎

武者小路實篤兄にさゝぐ

斷り書

此脚本の序幕だけは一昨年の『新小說』正月號に載せたものである。それを今度本誌に全部完載するに際して、その序幕をも必要上書き直した。故に以前の序幕を讀むだ人も此改訂された分をもう一度讀み直して貰ふ必要がある。因に此脚本は拙い處と、書き方とを變へた「項羽と劉邦」の續篇と見られてよい事も識しておく。

登場人物

韓信　淮陰侯
殷桃娘　その夫人
韓沛娘　その娘
陳豨　大將。沛娘の許嫁
漢高祖——劉邦
呂后　その妃
戚夫人　その寵姫
李姫　同
道化
謝公著　韓信の馬丁
その女房、その他、侍臣、侍女等數名

時代　前漢の大漢十年頃
場所　支那中國

序幕

韓信の館

質素なる室。

正面、右手の壁に漢高祖の肖像がかゝつてゐる。正面の中央に庭に通ずる階段。その彼方に秋の庭。相當の飾り付け。幕あくと、中央の卓子を挾んで韓信の夫人と娘の沛娘とが差向ひに腰かけてゐる。夫人は鞭のほころびを絲で捲いてゐる。沛娘は本を讀んでゐる。靜かな夕べ。

沛娘　阿母様。これどう云ふ意味。「狡兎死して走狗烹られ、敵國破れて忠臣亡ぶ。」つて。管仲と云ふ人の言葉ですつて。

夫人　それは、獲物が摑まつて了へば獵犬は飼つておくだけ無駄だから、殺されて了ふと云ふ事よ。（から說明して顏曇り、かすかにおのゝく）

沛娘　無駄になるから殺すつて、殘酷ですわね。

夫人　譬へなのよ。だけども、お止しなさい！　日暮れに字を讀むのは。

沛娘　（本をおく。溜息を吐く。）靜かだこと。阿母様、いつか靜かなのは嫌いだつて被仰つた事があるわね。

夫人　（顏を上げる）嫌いではないのだけれど、只氣味がわるい氣がする事があると云つたのよ。昔あんまり度々驚かされつけたもんだから。――本當は安心して、落ちついてゐるのだけれどね。

遠雷の音

夫人　何だらう。

沛娘　遠くの雷鳴りよ。阿母様。

稻妻。高麗の肖像とそのわきの壁の空間を照らす。二人それを見る。

沛娘　阿母様。あそこに皇后の御肖像がないと何だかヘンですわね。陛下の御肖像だけだと、あの壁の空いた處がヘンに眼立つて氣になりますわ。

夫人（嫌な顔する）だつて燒けて了つたのだもの。仕方がない。

沛娘　妾何だか今にも兩陛下が不意に訪ねて入らつしやりさうな氣がしてなりませんわ。そしてもしも此處に陛下の御肖像だけしか懸つてゐないことを御覽になつたら——

夫人（強く遮切る）だつて、何しろあの時は家中の財産まで殆んど灰になつて了つたぢやないの！　それも多分嫉みのつけ火で。それでも阿父様は御自分で火の中へ飛んで入らしつて、やつとの事で此御肖像だけをお取り出しになつたのだよ。貴嬢の知つての通り！

沛娘　でも誰も其事を知つてくれる者はありませんわ。

夫人　あゝ、本當に、知つてくれる者はない。只妾達が懈つてゐたと云ふ事になるのだ。そして懈つてゐたと云ふ事は、つまり……

沛娘　それならその事をお打ちあけすればよろしいわ。さうすれば陛下はあんな偉い方ですし、阿父様をあれほど厚く信用してゐらつしやるのですもの。まさかそんな事位で、

夫人　そのそんな事位と云ふ處に小さな事で人情はぐらつくものなのだけれどね。（氣を取り直し、聲高く）あゝだけど氣におしでない！　第一そんな事はありはしないのだから！　陛下はもう昔のやうにこんな片田舍に私達をたづねて下さるやうな事はないのだからね！

沛娘　（淋し相に）それはさうね

一寸沈默。韓信、階段から上り來る。彼は齡五十位。體格大きく、半白の鬚。一見浪人のやうな、又どこか田舍の好々爺然たる、威あつて猛からざる温和な風采。粗末な普段着、手に菊の花を持つてゐる。

韓信　（その菊で沛娘の頭を輕く打つて）何を考へてゐる。

沛娘　（笑顏で父を見る）阿父樣はすつかり植木屋さんになつてお了いになつたつて、阿母樣とお話してましたの。

韓信　そんなお齡でもないのにと云ふんだらう。はゝ。何しろ父さんは根が百姓だからね。――時に今年は菊は又格別な出來だよ。一度陛下の行幸を仰いで、御覽に入れたいもんだとわしは考へてゐるが。

夫人　それならその前に、皇后のあれを。（壁を指さす）

韓信　御肖像か。（一寸顏を曇らす）お前がその氣なら、早速畫かせるさ。（正面の椅子に、夫人や娘と三角形に對座する）どうだ。實に平和ないゝ秋になつたぢやないか。

やゝ暗くなる。遠雷の音と共に、サラ／＼と云ふ風の音

夫人　でも變な空模樣になりましたことね。雷が鳴つてゐますわ。

韓信　秋の特徵だ。どこかに驟雨でも降つたかな。

沛娘　（菊をいぢり匂を嗅ぎ乍ら）阿父樣。もう戰爭はすつかり濟みましたの。あの匈奴との戰は。

韓信　あゝ、もう濟んだよ。もうどこにも戰爭はないのだ。天下は漸く陛下の御威德の下に靡いて、泰平になつたのだ。

夫人　（傍白のやうに）數知れない幽靈の怨みの上に、そして又次ぎの戰爭の準備にね。

沛娘　本當なら嬉しいこと。では阿父樣が又戰爭にお出でになるやうな事はもうきつとなくつてね？

韓信　あるものか。いや、軍人が泰平を望むのはおかしいやうだが、實際わしのやうな亂世でないと役に立たぬ人間が、かうして安閑と遊んでおられるのは天下のため何よりの大慶と云ふべきだよ。わし抔がいつ迄も大手を振つて出しやばつてゐなくちやならぬやうでは……（ハツと耳を澄ますとかすかに馬の蹄の音）「龍車」の奴　又切りに張つてゐるな。盛んにコツコツ訴へてゐるわ。

夫人（沛娘と眼を見かはす）まあ、あの蹄の音が貴方には床を蹴る音にお聞こえになるんでせうか。

沛娘　あら、うちの門の前で止まりましたわ。（彼女の顏稍くかゞやく）

馬のいなゝく聲聞こゆ

韓信　それ見ろ。あれは「龍車」の聲だ。

夫人　あの救ひを求めるやうな聲が？　まるで庭に火がついてゐる事を知らせるやうに聞こえるぢやございませんか。

韓信　さうぢやない。彼奴はまだ活動したいのだ。戰場へ出たいのだ。毛物には平和の有り難みは分るまいからな。

一陣の風吹く。と不意に後ろの階段に陳豨が現はれる。彼は卅二三の男で立派な大將の服裝をつけ居る。蒼白の顏。

外はまだいくらか明るいが室内は大分暗い。

一座の三人おどろく

陳豨（輕く挨拶して甲をぬぎ乍ら）此お家に對する私の特權を笠に着て、此平和な團欒の御樣子を一度外から眺めて見度いと、無斷に裏から侵入した事をおゆるし下さい。

夫人　（沸娠と共に立ち上る）それや裏からでも、天井からでも傍人していらつしやるのはかまいませんわ。けれど陳豨さん。貴方がまんざら御不滿でもないらしく見へる此許嫁にあれほど薄情な御無沙汰をなさると云ふには定めしそれ相當な理由がおありになつたのでせうね。人の安否を氣遣ふ事を日暮しにしてゐる妾達には考えも及ばないやうな。

陳豨　（わざと冷靜に）左樣。それ相當なと云へるかどうか、趙が獨立の旗上げをしたと云ふ位の事件が理由と云へば……。

韓信　（夫婦共一寸驚く）何だ。又そんな事が。

陳豨　（益々冷靜に）そんな事と云つて、さう馬鹿にしたものでもないのです。趙の謀叛の裏には、燕と魏との後押しがあるのですから。

韓信　それは分つてゐる。で、動員でも降つたのか。

陳豨　えゝ、一昨日。

夫人　（益々驚く）こつちにはまだ何のお達しもありませんでしたわ。――で、司令官はもう定まつたのですか。

陳豨　（やゝ云ひにく相に）實は私に御下命がありました。

夫人　まあ、貴方に！（驚くと共に少し落膽した樣子で、韓信を見、俯向く）

韓信　流石は陛下のお見立てだ。いや、實はわしも今度何かの折があつたら、是非君を推薦しやうと思つてゐたのだつた。まあお目出度ふ。

夫人　でも、婚禮は。

韓信　まあ祝いを先きに云ふもんだ。凱旋して名與を二倍にしてから華々しく華燭の典を擧げても遲い事はない。さ

うすれば祝いの喜びも二倍に引き立たうと云ふもんだ。

　　夫人沛娘に何か云ふ。沛娘去る。

陳豨　ところが私はその「引き立つ」と云ふのが怖ろしいのです。私は此名譽を決して祝つてはゐないのです。實は隨分御辭退したのですが——

韓信　そりや今の君の立ち場として、その氣持ちも分るが、樂しみは先きに延ばすほどいゝのだ。後になればあの時一苦勞しておいてよかつたと思ふのだ。

陳豨　閣下、私が祝さないのはそんな自墮落な氣持ちからではないのです。

夫人　大方、貴方は主人(たく)や他の先輩達に義理を立てゝ、遠慮をなさらうと被仰るんぢやありませんの。

陳豨　遠慮ですつて？　は。私はそんな僭越な遠慮の要を認めるほど閣下と自分との距離を近く見ちやゐません。こんな事位で、私がどれほど無上の勳功を立てた處で、開國の元勳である閣下の大功に比べられやうなぞと……。

韓信　そりや只、君よりわしの方が時代運がよかつたのさ。だがさう云へばわしの功勞だつて、道具立てこそ大袈裟ぢやあつたが、わしのものと云ふよりは矢張り陛下のものと云ふべきだ。わしの仕事は凡て陛下に捧げたもので、又陛下と云ふ一人の大立て物の影にかくれての仕事だからな。なぜと云つて、一つの時代の或る出來事に歷史はさう幾人も代表者を書き止めておく興味を持たんからね。おそらくわしの名が後世に殘るとしたら、それはあの陛下を輔けて項羽を滅ぼした功績の爲めぢやなくて、昔あの野良男達の股をくゞつたと云ふ慓輕な逸話一つのおかげだらうて。はゝ。

　　沛娘、短檠を持つて出る

夫人　（淋しく）本當に陛下は何と云ふ御運のいゝ御方でせうね。御自分を助けて、王冠をお頭(つむ)にお載せした者の名譽

迄すつかりお二人を吸ひ取つてお了いになるのですものね。

韓信　まあ。人物にそれだけの徳、それ丈けの大いさと云ふものがおありになるのだからな。——だが、どうも分らんね。生命の火に燃えてゐる君が柄にも似ず、そんなに引つ込み思案になると云ふのは。

陳稀　そこなのです。（と一寸沛娘をはばかつてゐたが、それはさておき、忘れない中に申しておきませう。陛下は近日の中にこちらに行幸になると云ふ事です。

韓信　何陛下が。

夫人　此處へお見へになるのですつて。（沛娘と顔を見合はす）で、皇后は。

陳稀　知りません。が、多分私の推察では皇后からお誘ひになつたものだらうと思ふのです。

韓信　それや嬉しいな。なに、陛下はわしが楚にゐた時も來て下すつた事があるし、其後も一其中お前を訪ねやうと仰つたものだ。

夫人　（陳稀に）陛下は御自分で貴方にさうお言づけになつたのですか。

陳稀　（意味あり氣に）いや、私は例の戚夫人から、そつとその事を漏らされたのです。

夫人　戚夫人から、そつと——とは。

陳稀　陛下が狩獵と云ふ名目で地方の御檢察にお出ましになる時は毎も前以て內密にされる譯からです。前から公然とお達しがあつたのでは御視察の用には立ちませんからね。

韓信　は、何を云つてゐるんだ。他の土地ぢやあるまいし、此淮陰へ、此韓信の領地へ御視察に入らつしやるもないもんだ。

又、厩で馬の騒ぐ音聞こゆ

韓信　又「龍車」奴が、騒いでゐるな。どうかしてるんぢやないか。（と階段から出て行く）

陳豨　ふむ。臥龍の靜けさ。あんまり靜かなんで、あんな音位に一々御安眠を妨げられると見へますね。

夫人　あの音にはそれは神經質なんです。何でも蹄の音が聞こえると、すぐあの「龍車」が自分に訴へてゐるやうに、責めてゐるやうに感じるのです。尤もそれは大事に可愛がつてゐるのですけれど。

陳豨　（頼もし相に）御自分の内の活動家が床をたゝくからでせう。それはさうと、馬で思い出しましたが、お孃さん。私の馬もどうか厩へ入れて、秣をやるやうに被仰つて下さいませんか。（背りかへつてから云い乍ら情を含んだ眼で沛娘を見る）

夫人　（陳豨に近より沛娘の後ろ姿を指して）ねえ、宮中では貴方とあれとの噂はまだ立つてはゐないのでせうね。

陳豨　御安心なさい。私は都に住んだおかげで口丈けには鍵を卸す事を學びましたから。それに丁度いゝ噂が立つてゐるんで、私を疑り度い者の眼はそつちへ向けられてゐるのです。（懐から一通の書信を出してそつと夫人に渡す）

夫人　（おづ〳〵それをうけ取って見る）まあ、皇后のお筆ではありませんか。（灯りに照らして讀みづら相に讀む）陛下に宛てゝ。――おゝ、貴方の事を。――貴方へ桂施を――娶はせる。桂施とは、――

陳豨　戚夫人の娘です。

夫人　おゝあの寵姫の！　陳豨さん。貴方どうして――こんなものを――

陳豨　あの大ざつぱな陛下から機密を探る位譯ない事はありません。陛下は例の調子で此手紙を側女達にお示しになり、こんな事を皇后から云つて來たが、お前達はこの配合をどう思ふと冗談にお訊ねになつた相です。そしてそれなり此

手紙を打つちやつておゝきになつたのを、私はその側女から嗅ぎ出して、難なく手に入れたのです。――叱！

――侍臣、酒の道具を持つて出、おいて去る

夫人　（侍臣の去るのを待ちかねて）まあ、氣味のわるい！　一體どう云ふおつもりで皇后は急にそんな事を……。何よりも一番憎くんでゐらつしやる者の娘の事を。

陳豨　その娘はまだやつと十三でおまけにあの美人の母親にも似ない不縹緻と來てゐるんです。ところが陛下は眼の中に入れても痛くないその娘の事をかう云はれて、その皮肉に非常な御氣嫌であつた相ですよ。

夫人　え、御氣嫌で。あゝ……（聲を落とす）

韓信の聲――だから存分アラを探して頂かうぢやないか。内に疚しからされば何をか憂ひ、何をか怖れんだ。それは本當の事だよ。

陳豨　ふむ。――

韓信　（沛娘をつれ、弓の杖を持つて這入つて來乍ら）もうお酒盛りの用意が出來てゐるな。ではとも角一つお祝いに。（と一の盃を取つて陳豨に渡し、沛娘に）さあ、お前からお酌を。

沛娘　（夫人に）奥、お酌してよろしいでせうか。

夫人　（努めてさばけて）御覽なさい。陳豨さん。奥に似て疑り深い此娘は貴方に自分がお酌する事をさへ躊躇してゐるぢやありませんか。

陳豨　貴嬢にお酌して頂く事は私も躊躇したくなります。しかしお盃はうけませう。さうしたら私は少し大膽に物が言へるやうになるでせうから。

韓信 （笑ひ乍ら）さあ／＼、そんな馬鹿な拗ね方をするもんぢやない。なぜさうお前達は幸福の前にもすなほになれないんだ。皆の盃に注ぐがいゝ。そして先づ兩陛下の御健康の爲めに乾さう。

沛娘皆の盃に注ぐ。一同それを持つて起つ。

韓信 兩陛下萬歲。

皆一口飲む。併し陳豨だけは盃を擧げかけたが、何とも云ふ事が出來ず、默した儘、又盃を下に置く。一同色をなす。

韓信 どうしたのだ。陳豨。

陳豨 （昂然として切りに興奮を抑えてゐたが、決然として一人立ち、底力ある調子で）とう／＼ぶちまく事になつて了いました。閣下。私が陛下の萬歲を此口で唱へる事に氣がひけないのでしたら、私は疾くの先きにあの御肖像に對して敬禮をしたでせう。（間）皆さん。私はもうあの陛下の忠臣ではありません。叛逆者です！

夫人 }
沛娘 } おゝ。

韓信 （流石にやゝ呆然として）何、叛逆者？

陳豨 忠臣でない以上は叛逆者であるからです。併しどうぞ誤解なさらぬやうに。私は決してあの高祖陛下に怨みを抱いてゐる者ではありません。むしろ私は陛下に對しては變らぬ尊敬と愛とを捧げてゐるのです。――

夫人と沛娘は何か想ひ當る處あるらしく顏を見合はせ溜息を吐く。陳豨座す。

韓信 ふむ。何か一理はあるんだらうな。考え深い君がそれ丈けの事を云ふには。さう云ふ事はまゝあるもんだ。結びつくべきもの、結びつけば幸せであるものが、それが分つてゐ乍ら、どうしても結びつき得ないと云ふ事は…した

が、まさか君は――

陳豨　さうです。さう云ふ事はあるものです。さうして結びつけない以上は、敵として滅ぼし合はなければならないのです。（絶望的な決心を以て一同を見）閣下。私は素より貴方が一介の靑二才に過ぎぬ後輩の私よりも永い御結緣のある陛下に對して遙かに厚い親愛と忠信を持つておゐでの事を知つてゐます。ですから私は貴方々から絕緣の御宣告をうける前に、自分の方から先きに御辭退を申し出る事に決めたのです。

沛娘は思はず盃を手から落して母親に靠れかゝる

夫人　皇后のお言葉に從つて。あのいたづらなお指し金通り、不利益な此方の緣談を打ちやらうと被仰るんですね！

陳豨　（皮肉に）さうです。死刑を宣告された私の緣者になられる事によつて貴方々の上に災難が降りかゝる事のない爲めに！　その點は御安心下さい。私はお別れのつもりで、私の永久な愛とあこがれの的である貴方々御一家の爲めに此盃を乾します。（グイと酒を飲み乾す）

韓信　（四邊の樣子を見廻はし）まあ、落ちついて話せ。陳豨。わし達の間ではないか。君の云ふ事はまるで熱病にでも取り憑かれてゐる者の僻んだ譫言のやうに聞こえる。君はその一言によつて、さつさと約束を取り消さなければならぬやうな男に、わしが娘をくれると思ふのか。

陳豨　あゝ、閣下。しかし――

韓信　（夫人と沛娘とに）お前等は暫く退いてゐるがよからう。（悄然と去りかける沛娘に）沛娘。何も心配する事はないぞ。お前等がヘンに怖はい方に思つてゐるあの陛下はお前が產れ時、特に祝福なさるお心から御自分の沛の字をとつて附けて下すつたのだぞ。それに又阿父さんは親友であるお前の戀人をとりとめもない他人の中傷や、一寸したその容子の變

り方位で、此方から失ふ氣遣いはない。ささ。喜び、安心して、今夜の御馳走でもせいぐ作つておくがいゝ。

沛娘　（父の膝に縋せ來りその手をきつと握り）あゝ、阿父樣！（涙を落す。）

陳豨　（默然と頭を垂れてゐたが、俄かに遮切つて）待つて下さい。閣下。私が云ふべき事をすつかり云ひきつて了ふ勇氣を鈍らせないやうにどうかその有り難すぎるお言葉を暫く預かつておいて下さい。

韓信、夫人に眼くばせする。夫人、沛娘をつれ、入口の簾の處迄行く。沛娘奥に去る。夫人、去りかねてそこに立ち、しばらく不安な眼で此方を見て後去る。

韓信　さ。腹藏なく何でも云ふがいゝ。齢を取るとどんな晴天の霹靂にも大して驚くやうな事はなくなる。それにわしは都に住む君のやうに一々細かい事件は知らずにゐるが、天下全體の形勢を觀てゐる點ではまだぐ君に讓るとは思はない。一體どういふ黑雲が見へると云ふんだね。

陳豨　その信念強い御氣象が無かつたら閣下の魅力は危險と共に失せるでせう。閣下を英雄として尊敬する事が出來なかつたら、又閣下の御災難を惧れる理由もないのです。

韓信　と云ふと、わしは險惡な雲行きにも傘の用意をしないと云ふのかな。

陳豨　恐らく閣下にはその資格がおありになるからでせう。併し大層立派な杖を閣下は突いておゐでですね。あの弓が折れたんですが。

韓信（ふとつり込まれて）何、折れた譯ぢやないが、不用になつたから切つた迄さ。

陳豨　昔閣下があの眼覺ましい奮闘をしておゐでの時分、あれ程大事にしてゐらしつた御秘藏の名弓を。一朝お閑になると此通り無殘にブツ切つてお了いになるのですね。

韓信　仕方ないではないか。尤もわしはあの弓が秘藏であつたればこそ、かうして杖にもして未だに身につけてゐるのだ。

陳豨　が、弓としてはとに角死んだのです。丁度あの忠義一轍な彭越が無用になつた爲めに打ち首に逢つたり、兄貴分の英布が下らぬ不敬罪と云ふ名でぽつくり毒殺されたりしたやうに。

韓信　（額を曇らせ）だが、あれ等には落ち度はあつたのだからね。

陳豨　さうして閣下にもね。少くとも齊、楚、韓の三國は當然貴方のものと誰からも豫期されてゐらしつた大功勞者の貴方が、唯僅か齊一國の領土を授けられた許りか、それも三年たつかたゝぬ中に又召し上げられて、老後の靜養に適してゐるとか何とか云ふ、子供にでも嘘の分るやうな人を馬鹿にした名義で、こんな僻地に祭り込まれる丈けの落ち度はね！

韓信　（強く遮切つて）陳豨。わしは君の若々しい誠意を疑いはしないが、さう云ふ事はもつと謹しみ深く、充分本當の事を知つてから云ふものだ。わしは實際あの頃健康がよくなかつたのだ。して又わしが自ら選んで此淮陰へ來たのは此土地に、（指して）あの陰山の麓にある母方の實家に、わしの少年時代の懷かしい追憶があるからの事だ。それから又わしが齊を捨てたのは、彼處にはもう少し經世の才ある士が行つて治める必用がある。處がわしにはさう云ふ才がない。だからわしはあの土地を活かす爲めに、且つ又、わしの好しみを示す爲に、あの土地をわしの親友の張良に讓つたのだ。

此少し前より遠方にて群衆の喧騷の音聞こゆ

夫人の聲　謝公著。何、あの騷ぎは。

謝公著 （階段に顔を出す）なに、宰相様のお通りでごぜえますよ。

韓信 何、宰相の？ ではあの蕭何が通つたと云ふのか？

謝公著 へえ。御微行で。それでもどへらい人出でごぜえましてな。そこへあの張りきつてる馬ア突つ込んじまつてわつちはハラ／＼しちめえましただ。

夫人 （出て來る）まあ。此處へお寄りにもならずに！

韓信 （少し昂ぶつた調子で立ち）馬鹿な！ お前、又人違いをしてゐるんだらう！

謝公著 わつちも大方人違いだらうと思いましただ。あの宰相様なら此御領内を默つてお通りぬけになる筈はねえと思つてね。（引つ込む）

陳豨 別に不思議はないでせう。彼奴は惡人ではないのですが、腰拔けなのですから。

韓信 （ムッとして）何だつて？ 君は少し不作法になりすぎはしはいか。わしの前でわしの親友の惡口を云ふとは！

陳豨 御免下さい。閣下。私は貴方の御友情を尊敬すればこそ悲しまずにはゐられないのです。なぜと云つて、凡そ友情の中での美しい友情の典型としてあれほど皆から讃へられた貴方と張良殿とのお仲すら昔の通り平和に續いてゐるのでしたら、貴方々の御交際はなんで年に一度の見舞狀さへかはされぬほど冷めたく絕たれて了つてゐるのです。

夫人と韓信苦し氣に顏々見合はす

陳豨 （あはてゝ）それはそれとして、閣下が此淮陰へお移りになつたのがよし御養生の爲めにせよ、閣下の手足とも云ふべきあの兵馬の權、あの項羽をさへ戰のかせた無敵軍團は何の理由で貴方から奪い去られる必要があつたのです。

韓信 （苦々しく）つまり、わしはもうそれを持つてゐる必要がなくなつたからだ。

陳豨　滅亡なさる爲めにはね！

韓信　（思はず起つて杖を握る）陳豨！

陳豨　いつそ劍をとつて頂きませう。どうせ私は此身を投げ出してゐるのです。只一言、私は閣下の知己の爲めに辯解します。閣下から兵馬の權を奪ふやうに陛下におすゝめしたものは決してあの張良殿ではないと云ふ事を！

韓信　（杖を抛り捨てゝ陳豨の肩をつかみ）何、張良ではない？　あゝもう一度云つてくれ！　陳豨！

陳豨　貴方を讒訴したものは張良殿でも誰でもない、只一人の婦人です。

夫人　（まつ青になりおのゝいて額に手をあてる）おゝ。

陳豨　（冷たく）それは貴方々が當然此處に陛下の御肖像と並べて掛けておゝきになるべき筈の處を、一度燒けたが故後二度と再びそれをお書かせになる氣がどうしてもなさらない人の事です。——皆その女から出た陰謀です。中傷です。離間策です！

夫人　（陳豨に飛びついて）おゝ、貴方は、貴方は家の平和をすつかり破つてお了いになる！　破りにいらしつたんですね！

陳豨　さうです。破りに來たのです！　破り捨てゝお了いなさい！　こんなまやかしの假平和を！（韓信に）閣下はまだ／＼こんな隱居じみた小さな家庭の平和を閑々と樂しむでゐらつしやるべき方ではありません。ゐらつしやるのは嘘です。

韓信　（心搖ぐ。横を向いて呻く如く）では此韓信が劍を執つて立たなければならぬやうな天下の患がどこにあると云ふんだ！

陳豨　目前に。患がないと云ふ處にです！　あゝ患を與にする時の味方が、その共同の災が除かれた時に、おのづと競爭者となり、敵と變る事はいかに多い事でせう。禍を與にすべくして、福を與にすべからずとは——

韓信　（强く遮切つて）そんなものをわしは初めから眞の味方とは思つてゐない。……誰が敵だと云ふんだね。

陳豨　貴方が最も信じてゐらつしやる最大の味方です

夫人　陛下！

韓信　（立ち上る）何、陛下だと！、馬鹿な！　あゝもう一度云つて見ろ！

陳豨　（自分の劍を拔いて韓信に握らせその前に首をさし出す）さあどうぞ、此冒瀆者の首をお刎ね下さい！　どうせ亡い物である此首は貴方に斬られなければ、陛下に斬られるのですから。

韓信　（劍を持つたまゝ、グッタリ椅子に腰を卸ろし、うめく）

その時又稻妻が閃めき風燈火を消し相になる。戰慄して立つてゐた夫人は駈けて行つて急ぎ外をのぞき、扉をしめる。

陳豨　戶をしめても稻妻は忍び込んで來ます。奧方、貴女はいつも私と同じ不安に苛まれて、貴女の御運命の危險をあんなにはつきり感じてゐらつしやり乍ら、矢張りいざとなると稻妻にも脅かされて、逃げやうとさへなされないのですね！

韓信　（漸く威厳的に）陳豨。わしは君よりも（夫人に）お前よりも遙かによく陛下を知つてゐるよ！

夫人　妾は又貴方よりもよく皇后の御人物を知つてゐます。貴方は每ももつと陛下を皇后の御良人としてお考えにならなければいけません！　女子には支配され勝ちな男子の御一人としてお考えにならなければいけません！

韓信　それが今更何だと云ふんだ！　（歩き乍ら）陛下はあの通り、浮は氣な方だ。そして浮は氣な男と云ふものは貞

節な夫よりも女を見る事にかけてはえてのろまでないもんだ。もし陛下のやうにあゝ多勢の女を圍つてゐらしつて、一々その云ふ處に從つてゐらしつたら迚も宮廷の平和だけでもお保ちになる事は出來なからうぢやないか。

夫人　あゝあの外見の平和。御自分の威嚴をお見せになるためのあの皇后らしい僞の寛大さ。貴方はあの底氣味のわるい、毒々しい平和を本當のものと思つてゐらつしやるんですね。

陳豨　（滿足氣に、えたりと）しかし一番いけない事は、あの皇后がそれをぢつと怺へて曖にもお見せにならず、陛下には氣隨氣儘におさせ申しておきながら、變な方面で暗に復讐のほむらをお晴らしになると云ふ事です。（語調を變へて）あの虛榮の權化にとつては、陛下のお浮氣に嫉妬してゐると見られるほど堪え難い屈辱はないのです。――あの方にとつて、一番我慢のならない不名譽は陛下が他の女に自分を見かへられるその事ではなくて、それを御自分が嫉妬なさると云ふそのことなのです。――

韓信　（座す）だが、それが政治と何の關係があるんだ。

陳豨　どうして無いと云へませう。もし陛下の御幸福、誇り、富、それらを水泡に化す事が皇后の地位にあるあの方の目的であるとするならば。あの方は男子にとつての最大の幸福が最大の名譽の自覺にある事を知つておゐでゞす。ですからその復讐を果すには、陛下が千辛萬苦のうちに打ち建てられた此漢の社稷を覆せば足るわけです。

韓信　ふむ。どうしてそんな事が出來るものか！

陳豨　どうして出來ないと云へませう。陛下の一番深く愛しておゐでの心腹の者共、仲のいゝ友同士を中傷しては切り離し孤立させて、散り〳〵ばら〳〵の敵同士嚙み合ひの共倒れにし、此帝國の大黑柱を片つ端から自滅させる事が出來たなら！

韓信　さうしたら、あの方御自身をも破滅させる丈けの事だ！

陳稀　ところが陛下は矢張りいざとなれば親友よりは妻子の方をお守りになります。

夫人　それに何と云つても陛下には御自分の弱みから皇后に對する御遠慮と云ふものがありますわ。

陳稀　（夫人と調子を合はせて）つまり、陛下が放縦をなされればなさる丈け皇后の威權は隠然と勢力を増すのです。その威權の一睨みを怖れてあの腰拔け宰相は此處に立ち寄る事もようせずに、貴方の領内をそこ〳〵に通り拔けるのです！

韓信　（兩手を打ち振るやうにして）あゝもう云ふな！　澤山だ！　五十になるわしの眼と仔達の眼と何方が正しいか、近日陛下御自身此處へ來て證明して下さるだらう！

陳稀　（ガッカリして呟く如く）證明して下さるでせう。そしていよ〳〵私は……お別れです。（悄然と立つ）

夫人　おゝ、では貴方はどうしても——

陳稀　（涙を落とす。劍を佩かんとす）

韓信　（急に起ち上り、陳稀の劍を奪い取り）それはいけない！　陳稀！　そんな事をしてはよ、それは破滅だ！

陳稀　（再び熱烈に）さうしなければ破滅しないと仰有るんですか！　進んでも退いても首のない私達は空しく手を束ねて、彭越や英布の二の舞をしなければならんと仰有るんですか！（再び自分の劍を韓信の手に押しつけ跪いて）私の命にかけて賴りにする未來の父上！　もう一度、もう一度、此劍を執つて下さい！　私の爲めにではありません。貴方御自身の爲め、又私と同じに貴方を賴り、貴方を慕つてゐる萬民の爲めに、もう一度「起つ」と仰有つて下さい！　天下の寶である貴方が空しく一女子の犧牲になる事は天も人も共に望まない事を噛が上にお知り下さい！　そして私を扶けて

天下の患を一掃して下さい！　貴方には、そして貴方に丈け、それが出來るのです！

夫人　お、……神々よ。（棒の如く戰慄し立つ）

韓信　（その劍をたゝき捨てる）退いてくれ！　あゝ、わしに惡氣を吹き込む小惡魔奴！　あゝ何と云ふ惡夢だ！　（よろけるやうに短檠を執り、それを持つて高祖の肖像の前に行き仰ぎ見、涙ぐむ）あゝ、わが知己！　わが幹！　貴方とわしとの血のしたゝるやうな十餘年の此結ぼれ。それを想ふとわしは涙が出る！　笑ふ者は笑へ！　譏る者は譏れ！　貴方に捧げるわが愛と信仰との根の深さ。その神聖！　あゝ、それを誰が知らう！

と云ふが否や、どこともなく風吹き來り、韓信の持てる燈火を吹き消す。室内眞暗になる。

夫人　（叫ぶ）あゝ、誰か！　明りを！　明りを！

カナリ強き風の音

第二幕

第一場

前場に同じ。その翌日

前場の終りの暗慘たる光景とは打つて變つて明るき小春日和。幕あくと階段の外には謝公著が立派な白い馬にブラッシをかけてゐ

る。とその女房が階段に腰をかけて、鞍や銀の轡を磨いてゐる。馬は全身は見へないが、心地よげに温和しく、首なぞを振つてゐる。

室には陳稀の兜、上被、劍なぞ、懸けてある。

女房　(室内の様子をこつそりのぞいて聲をひそめ)そんな事云つたつて、妾達が都へ出れやどんなお邸へでも世話するつてあの馬丁さんが云つた時にやお前さんだつてから云つたぢやないかよ。なるほど、もうちつと實入りのいゝ處で一溜めしてから、又田舎へ引つ込んでもわるかあねえな、つてさ。

謝公著　(一寸詰まつて、女房を見る)牝奴。へ、これだから、牝と子供にやうつかりした事ア云へねえてんだ。まさかこんな南瓜つ面でまにうける氣遣いもあるめえと思つて、お前のその縹緻で都へ出れや、とか何とか冗談におだてれやどうして南瓜つ面の方ぢや、へえもうすつかり自惚れちまやがつて、大眞面目に色氣を出しやがるんだから驚かア。(又此方を向き)だがな、今朝もう一度會つて訊いて見ねえ。野郎の方ぢやけろりと忘れちまつてな。誰がいつそんな出鱈目を云つたゞと呆氣にとられてから云ふだ。

女房　さうぞ。何とでもにくまれ口を利きなされだ。へ、胸の疵にさはられたもんだから。(と逃げやうとする)

謝公著　(釣り込まれて)な、何だと？ ま、待てやい！ (と、自分も室の中をのぞいて女房を捕へ)胸の疵たア何だ！

女房　そら、又青筋イ立つて！ (と急に謝公著の耳に口よせて何かさゝやく)ね、だからさ。無理にぷく／＼のお伴をしなくつちやなんねえつて事もあるまいぢやないか。いくら親舩が有り難いからつて、それが……(と舟が沈む手眞似をしかけたが謝公著が怒り相になつたので素速く逃げ去る)

謝公著　(拳を振り上げて妻の後ろを睨みつけ) ふ、不埒な、恩知らずの猫又奴！　あの調子ぢや、この亭主もへえ、いつだしぬかれるか知れたもんぢやねえ。こんないゝ御主人の家つてものが、鐘太鼓でさがしたつて。(頭をふる。女房の捨てゝ行つた簪を取り乍ら) だが、……(と思はず腰を卸して考へ込む)

謝公著が上の如く獨白してゐる間に沛娘眞劍な顔つきで一人こつそり出て來る。謝公著を見、邪魔な者がゐると云ふ風に額を顰め考へる。いゝ事を思ひついたと云ふやうに獨り合點々々し、懷中から白紙を取り出し、それを小さく折り、さて、謝公著の頭を後ろからぴた／＼と輕く叩く。

沛娘　叱！　(と彼が獨白を聞かれたかとひどく驚いて、後を振りむき何か云はんとするのを制し、手紙のやうに見える折紙をその手に握らせ、何かさゝやく) ―― もしあの方が一人でゐらしつたらよ。見つからなかつたら默つて只妾に返しておくれ。いゝかい、爺や。馬は妾が番してゝあげるから。叱！　默つて！

謝公著　(なるほど、さう云ふ譯か。承知したと云ふ表情をし、合點き去る)

沛娘は、してやつたりと一人笑ひ乍ら四邊を氣遣い、さて本物の手紙を取り出して陳豨の上被にさしこむ、それから兜を取り、ヘケをかけ乍ら眺め、香ひを嗅いだりする。その時陳豨後ろから來てそつと彼女の後ろに立ち、ほゝ笑むで見てゐる。

沛娘　(直覺的に後をふり向き眞赤になつて驚く) まアひどい方！　ひどい方！　(とにらみながらほゝ笑む)

陳豨　(いきなり抱きしめて接吻する) 御免なさい。きれいな李を喰べる前に眺めずにゐられなかつた事を！

沛娘　李！　妾は昨夜その李になつた夢を見ました。馬鹿な夢でしたわ。(笑ふ)

陳豨　(彼女を抱くやうにして腰かけ乍ら) それを私が喰べましたか。

沛娘　いゝえ、陛下が――

陳豨　何、陛下が

沛娘　妾を枝からもぎ取らうとなさいましたの。これはうま相だつて。妾は急におびえて叫びました。そして眼をさましたら、何だかおかしくなつて、笑つて了いましたわ。

陳豨　（沛娘を突っ放して起ち上り）何と云ふ暗示的な夢だ！（歩き廻る）ツエ！　あゝ折角私は晴々した明るい氣持になつてゐたのに！

沛娘　（陳豨にさう云はれて自分もいやな不安に襲はれたらしく）まあ迷信家。そんな馬鹿な夢を。（無理に笑ふ）

陳豨　無理に笑ふのはおよしなさい。自分でも不安を感じて來たくせに。しかしさうなつたら、貴孃は定めしおめ〳〵喰べられて了ふ事でせうね。名譽に思つて！

沛娘　貴方と云ふ番人は定めし妾をおめ〳〵その買い手に賣つてお了ひになる事でせうね。賣らなかつたら殺すと云はれたら。

陳豨　（ほゝ笑む）ふむ。流石に貴孃も項羽を打ち砕いた豪傑の娘だけの事はある。それでこそ私の鞍に一緒に乘る事が出來る。（歩き廻はる）さア、當分のお別れの前に、そして盗人の口が貴孃にふれない前に、私をして貴孃の所有權に印を捺させて下さい。

沛娘　（顫へる）印を。それは何の意味。

陳豨　（顫へる）死を通して生きる意味です。此方へ入らつしやい。（沛娘の手をとる）

沛娘　おゝ、此動悸。（胸に手をあて、失神したやうに陳豨に靠れたまゝ、去る。）

謝公著、出る。

謝公著 (二人の後ろ姿を見、それから例の白紙をひらいて見比べ) ふ。なあんのこつて! 馬鹿々々しい。白つ紙だ! (やつと分つたと云ふやうに合點いて笑ひ) へ、なあるほど、那麼者の俺を追つ拂へたつてわけなんかい。陽にやおけぬえや。お孃さん。(彼は又から呟いて笑ひ乍ら馬具をつけにかゝる)

韓信乗馬の服裝にて鞭を小脇にはさみ夫人と話しつゝ出る

韓信 (話波に登場しつゝ) かう云ふ事を考えたんだ。あの淮河の流れをこゝへ引いて來る。(左手の欄干の處へ來て下を見乍ら) そして此處へかうして腰をかけて釣魚が出來るやうにする。

夫人 (浮かぬ氣に) それはきつといゝお發想になりますでせう。陛下は何によらず釣をなさる事はお好きですから。

韓信 (階段を降りて行き場の頸　叩て) 御苦勞。謝公著。(夫人に) どうだ。この光澤の出て來たことは。雪に陽が照りはへてゐるやうぢやないか。

夫人 手入れのいゝものはちがいますわね。

謝公著 今も婢奴と話したでムえますよ。此龍車を見ちや (と少し内緒に) あのお客様の馬なんざアまるで駄馬見てえなもんで、てんで見られたもんぢやねえつてね。

韓信 それをかうして遊ばせておくなあ全く惜しいものさな。(と笑ひ乍ら) それやさうと、謝公著。至急に賴むが、此淮陰にゐる丈けの人夫を殘らず、今すぐにも來るやうにお前云いつけて來てくれんか。遲くも明日一杯にはあの河の支流があの菊畑の中を通るやうにして、近く此處へお越しになる陛下にお目にかけ度いのだからな。

謝公著 (驚く) え、あの皇帝様が! それや本當でムえますかい! (頭をふる) かしこまりましてムえますとも! (喜び勇んで旁白) それ見た事け。鳳凰は雲の上に降りるつてえが、あの猫又奴。皇帝の御信用が何のかんのつて、方途も

ねえ出鱈目こきやがつて！　えゝ、ぶちのめしてくれやう！（ト去る）

一夫人　貴方、今度はよつぽど御應待を上手になさらないと。何か怪しい樣子はないかと探りに入らつしやるのですからね。何のお話をなさるおつもり。

韓信　人と會つてどんな事を云はうか。そんな事をわしは考えた事はない。誠實と信賴とがいつでも最上の應待をさせるのだ。わしは衷心から出來るだけの御歡迎をして、あの方に對するわしの變らぬ眞心を示せる機會を得た事を何より嬉しく思ふよ。

夫人　現在の話をなさらないで、昔の想い出話をなさいまし。巴蜀の山の中で貴方々が三年も御一緖に憂き日をお忍びになつた時分の事なぞを。懷舊話しほど人をやはらかに結びつけるものはありませんからね。

韓信　（回想に耽る如く）あの時は蕭何もゐた。曹參もゐた。そして皆で樅の木に名前を彫りつけたりした事がある。陛下は書がお好きで、又お上手だつた。さうだ。又書を書いて頂かう。實際陛下の字を見てゐるとあのだらしない程大きい御人物が彷彿として來るからな。その又だらしないやうな處が陛下の面白い處なのだ。（奥を見てにこりとし）　おや、君は一人かね？

陳豨　（出る）貴方々をさがしてゐた所です。

夫人　御自分達の姿はくらませておいて！　でもまア見て下さい。陳豨さん。此主人の今朝の若々しさを。一寸昔の主人を見るやうぢやありませんか。

陳豨　本當に昨夜の閣下とは御別人のやうですね。何だか本當の閣下にお目にかゝるやうな氣がします。

韓信　では昨夜のわしは僞物だと云ふのかな。（苦笑して）だがさう云ふ君も昨夜あの雷神のやうに飛び込んで來た時

の君とは全で別人のやうに見へるよ。都で神經病に罹つた君は、此安息所へ來て一晩ゆつくり保養したおかげで健全な人間に歸つたやうに見える。

陳豨　眞個く、こゝにかうしてゐると此しんみりした平和さ丈けが本當で、世間の忌はしい現實が凡て嘘のやうに思へて來ます。そしてあの氣違ひじみた不安さを以て、此うるはしい平安を少しでもかき亂した自分がいかにも馬鹿々々しく、氣耻しくなつて、お詫びし度いやうな氣持ちになつて來ます。

夫人　妾も今はそんな氣がしますわ。あんまり外が平和で美しいので、人間の內の恐ろしい闇が一寸信じられない氣持ちになるのですわね。

　と云い終らぬ中に何か物音が聞こえる。侍臣登場

侍臣　陛下からの御使ひでムいます。（懷入りの書面を出す）

韓信　何、陛下からの。（夫人と陳豨は不安な顏を見合はせて立ち上る。韓信は恭しくそれを開いて讀む。莞爾として）御直筆だ！　突然だが、わしに逢ひ度くなつたから、明日、兩陛下お揃ひで此處へ行幸になる。で、都合はどうだ。と書いてある。

夫人　明日！　おゝ、何と云ふ急な！

韓信　急なれば急な程早く樂しみに逢へると云ふもんぢやないか。（硯を取つて、返書を認め、侍臣に渡し）都合も何もない。謹んでお待ち申し上げるとお傳へしてくれ。

夫人　こんな片田舍で、早急な事ではあり、御歡待を申さうにも心に任せませんがとね。（退場）

侍臣、退場

韓信　時にわしはまだ君の作戰を聞かなかつたね。

陳豨　それを御相談する事は後輩の禮だとは思いましたが、私は自分の獨斷で萬事やつて見て、しくじつたり、成功したりして見たいので。

韓信　さうだ。獨立の仕事でなくちや値打ちはない。それに作戰は臨機應變のものだからね。ではその忠告の代りにわしはあの「龍車」を君への餞別としやう。

陳豨　(驚く)何、あの御秘藏の名馬を私にと被仰るんですか。

韓信　なに只君のと交換する迄だ。(輕く笑ふ)わしも職責上、まだ馬を手離すと言ふ譯には行かぬが、これ程の逸物を飼つて遊ばせておく必要はもうないのだ。君に贈くればあの名馬も再び生きやうと云ふもの。君に對するわしの特別な祝禍を拒まないでくれ。(陳豨の眼を意味あり氣に見る)

陳豨　(一寸間。うなだれ、涙を落とす)閣下の限りなく深い御配慮が胸にしみます。(韓信の手袋をはめた手に接吻して)謹んで有り難いお志しをおうけ致します。

馬嘶く。

陳豨、劔を佩き、上被と兜をつける。

夫人の後に沛娘、水盃の盆を自ら持つて出る。

韓信　お前は水盃を持つて來たな。それもよからう。お前のその覺悟の印しが君の劍をなほ鋭くするだらう。(起つて)ではわしから二人に盃を。

陳豨　(盃をうけ)ではこの世でとは限らず――

沛娘　永遠の世での――

夫人　固めのしるしに。（と二人に注ぐ）

二人盃を取り交はし飲む

韓信　さうだ。そこ迄覺悟が出來てゐれば間違ひない。だが、（と起つて陳豨の肩に手をかけ）獨立を急ぐなよ。青年、運命は敵に廻はさずに、後ろから後押しをさせる事だ。毎もよくそれと相談して、それに强ゐられたら萬難を排して進むがいゝ。此方からそれを强ゐたら忽ち前へのめるぞ。君はその言葉を聞く事の出來る賢い人間だから、一々わしに相談する必要はない。わしも亦君の自由行動に干渉はしない。只どこ迄も正しい運命と手を携える事だ。無理はきかない事を知つて、時を俟つ事だ。

陳豨　それが自分の行手を遮切らない限り、又御無理御尤もにして却つて　こいつは意氣地なし」だとそのいたづら者から侮られないだけの限りに於て、御忠告を有り難く服膺致します。それでは閣下、奥方。貴孃！（と一人々々を抱く）

韓信（彼の耳に何かさゝやく）――そんな場合は十々ないとは信ずるが、萬が一避け難い場合にはだ、ごく內密に――云つて寄來すがいゝ。その場合にはわしも親友である娘の戀人の爲めに一肌ぬぐ事を敢へて辭しはしないだらう。だがそれを恃んではいけない。わしは決してそれを望まない事を知つてゐてくれ！

陳豨（苦し氣に韓信の手を握りしめ）御安心下さい。私も自分の力は心得てゐますから！　では。（と逃げるやうに階段を降り、ひらりと馬に乘る。）

夫人　きつと華々しい御凱旋を！

一同階段に立つて手を振つて見送るうちに馬は一嘶きして勇ましく陵綺を乗せて去る。沛姫、夫人の胸に倒れ、泣き伏す。

第二場　咸陽なる未央宮の奥

夜

半ば垂れた御簾の中で、漢の高祖、寵姫戚夫人の膝を枕にし臥てゐる。戚夫人が高祖の枕になり乍ら化粧なぞしてゐると、他の侍女が高祖の盃に酌をしてゐる。その前で一人の道化が侍女達からおもちやにされてふざけてゐる。その笑い聲で蘇あく。

道化（女達から突き飛ばされてよろけてまん中にぺたりと座る）あゝあり難え、いゝ氣持ちだ。可愛い女達から突きのめされて、あつちへふら〳〵、こつちへふら〳〵、波にゆられる水瓜のやうな陶然たるこの氣持ちのよさと來ては陛下様でも御存じあるめえ。これだから一度阿呆になつたらやめられねえ。阿呆と云はれや阿呆がうれしい。ぶつてくれれやなほうれしい。睨められれやその眼が可愛い。冷めたくされたら（首をかしげる）冷えちまわア。首を切られや、血が出らア。いかゞはしいおいたのちつとやそつとをやつたつて、阿呆に怒りや怒る方が阿呆。仁者に敵あり、阿呆に敵なし。阿呆から見れや阿呆でねえ者が阿呆な譯で。やれ、自尊心だ、名譽心だアなんて厄介な重荷を頼まれもしねえのに背負ひこんで、背汗のたら〳〵で、しやちこばつてる人の顔を見ると、わつちやその御苦勞が氣の毒で、涙がこぼれ

ら。あゝ可哀ちような、可哀ちような見榮坊のお利口さん達よ、だ。（泣きまねする）

女達笑ふ

戚夫人　早くお始め、馬鹿。

道化　へ、へッ！　――ではどうぞその、お冠を。

戚夫人　まア、お冠をだつて。

道化　阿呆は何でも逆樣でさア。と角下の方が好きなんで。あんた樣のそのお美しいおみ足にくつついてゐるお冠り物で結構。

戚夫人　ではさア。犬！（と自分の靴の一方をなげてやる）

道化　ワンゝゝ。（とそれをとつて、フッ／＼と塵拂ひに息を吐きかけ、逆まに頭にのせる）何を笑ふ。憚りながら色道にかけちや天下無敵の帝王樣だ。（低く）あそこにいゝ枕をして殘酷に見せつけてゐる方だけは別だがな。（と口を押へる。）さア／＼皆の衆。先刻教えた通り、間違えねえやうにうまくな。（と頭の靴を押え乍ら一段高座に腰をかけ、皇帝然と氣取つて）女！

側女一　おや、お眼ざめでゐらつしやいますか。陛下。

道化　先刻からお眼さめでゐらつしやらア。

側女二　誰をお呼びでゐらつしやいます。

道化　誰をだと？（とそり返へる拍子に靴おちる。又のせる。）お前達の名を俺が一々覺えてゐられると思ふか。覺えてゐた處で、女はたゞ「女」と呼ぶ方が味いがあつて俺の氣に入るて。

戚夫人（笑ふ）中々大きく出ることね。

道化　（一人の側女に向い）喃、張良。俺があの呂后を妃としてもつており、その下にそば女としてこれ等の女共をはべらせてゐる。俺があの妃と並んで歩く後ろには、三千の美女が銀河の星の如くつらなりついて來る。その様は不自然な、奇しきものに見へるだらうか。それとも亦一しほ王者にふさはしい自然な趣きに見へるだらうか。

戚夫人　まあうけ賣りを燒きなほす事の上手な。

側女三　いかにも陛下がもしあの項羽のやうに、唯一人の婦人にのみ偏愛を傾けておゐで遊ばしたら、却つて物さびしい、妙なものに見へやうかと存ぜられます。

道化　さうぢやらう。造化は女を造つただけで限りなくほむべきぢやな。女が造られてなかつたら人生は沙漠よりもさびしく、王者も乞食に劣るわ。あゝ、女ぢや。女ぢや。女ぢやれば、姐妃だらうと惡鬼だらうと、毒婦だらうと、思い上りの大馬鹿女、妬き餅燒きの見榮氣違えでもそれ〳〵の味面白し。何でもムれ、敢て辭せんやだがなア。（と溜息をつく）

側女四　（クス〳〵笑い乍ら）でも陛下は今一人の可愛い者の事をお考えになつてゐらつしやるんぢやございませんか。

道化　一人の可愛い者。どうしてお前、それを知つておる？

側女二　先刻お夢の中でさう仰せられました。

高祖　（半身を起し）何と。

側女三　おゝ香はしき白き花よ。可憐な蘭よ。なぜ俺はお前に手をふれてはならんのか？　つて。

戚夫人　（膝枕をはづす。高祖に）それは本當に被仰つたのでございますか。

高祖　本當かも知らん。

道化　こつてりした豚料理を食つた後ではさつぱりした生姜を口に入れ度ふなる。美酒に醉うた後には無味乾燥のやうな水が飲み度うなる。あゝ俺はもう牡丹のしつこい匂ひは思つただけで吐き相ぢや。蘭のやうに色氣がなく、薄荷のやうにせいせいした花を久しぶりに手にして見たいワイ。

側女四　その美しいお夢のお樂しみをお邪魔申さないやうに妾共はしばらくあちらへ退つておりませうか。

道化　まあ、そこにおれ、おれ。女共が傍でペチヤクチヤと他愛ない馬鹿話をしおるのを聞いてゐるのは俺を柔かな眠りにさそふワ。（旁白）これやしよつちう狂言をやるに限らア。（側女四によりかゝり）そのふつくらした膝をちよつと枕に貸せい。（側女一に）そちは肩を、（側女二に）そちは腰を、（側女三に）そちは足をさすれい！

と女達の方へ足をなげ出す

側女達皆（それを突つ放して起ち上り）まあ、生意氣な！　無禮な！

道化は體をはずされてそこへころがる。

蕭何くる。長い髯。敬禮する。

蕭何（少し媚びる調子で）これはこれは、阿呆奴が又御愛嬌を致しておりますな。

高祖　蕭何か。いゝ處へ來た。まあ一杯やれ。

蕭何　有り難ふムいます。（と側女から酌をされつゝ）久々の御遊山でさぞお疲れで居らせられませう。韓信はいかゞ致しておりましたか。

高祖　あれか。見違へるほど大きく、美しくなつておつたよ。

道化（旁白）あれだ。（此方にむき）いや、齡頃に達せられた娘御が甘酒のやうな天地の色香をお吸ひになりやがつ

て、ふと性にお眼覺め遊ばしやがるが否や、俄かに花がほころびるやうにパッとお美しくなりやがる。あの急遽なお變り方を御覽遊ばす程お樂しみなものは、へ、へ、ござりませんてなア。

高祖　馬鹿！　もううるさい！　引つ込め！

道化　ハ、ハ、ハツー（と平伏して額を床にぶつけ）おいてゝゝ、おいて益々熾んなる陛下樣。（と額をさすり乍ら起たうとするが、起てない。）おつと、こりや。ちよいとお側女。おみ足を貸しておくんなされ。お腰がお痛くつて……（と側女にすがらうとする）

側女一　誰が足なんぞ貸してやるもんか。（とふり放す）

道化　ではあしからず。（とピンと起つて、元氣よく跳ねながら退場。）

一同笑ふ

蕭何　はゝ。隨分いろ／＼な係りが世にはあるもんでムいます。彼奴もあれで笑はせ係りと云ふ一つの必要な役割を生れ乍らにふり當てられてゐるんでムいませう。

高祖　處で、俺の係りは何かな。

蕭何　建設、創造の係りであらせられると申しませうか。項羽や、桀紂が謂はゞ破壞の係りで、老子や孔子が物を考える係りでありましたやうに。

戚夫人　本に陛下は創造の係りでゐらつしやいます。片つ端から女と云ふ女を愛して、子供をおこしらへになる――。

高祖　大にいゝ係りでないか。そのお蔭げでお前等はさうして幸福を感じてゐるのだからな。さうだらう。戚。

蕭何　大體人間には事業を主にする生き方と、此の生を享樂するその事を主とする行き方との二つがムいます。處で

陛下の如き、大建設者におかれては、事業に對する慾望はもう安らかに王冠を枕に高く、眠られる時が來たので厶いませう。が、それはさうと、韓信はいかゞ致しておりましたか。

高祖　その通りだ。俺はいかなる事業のさ中にも享樂を退けた事はないが、これから俺はもつと、そちの云ふ生の樂しみそのものを主に、悠々餘生を送らうかと考へてゐるよ。（と夫人を顧る）

戚夫人　（傍を見、溜息をもらす）

高祖　（夫人に）溜息をついてゐるな。俺がそろ〳〵あの幽王や始皇帝に似て來たのが心配だと云ふのか。はゝ。ところが俺は、あゝ云ふ風に滅びれば滅びるで、それも亦面白いと思つてゐるのだよ。

戚夫人　そして妾や、子供達が殺されて、もしかしたら親子三人の首が並んで棘門にさらされても、陛下はやつぱり面白いと被仰るんで厶いませうね。（流し眼をする）

蕭何　はゝ。御夫人。陛下はあんな事を御正氣で被仰つたにしろ、お戯れに被仰るのと同様でございます。

高祖　（やにさがつて）これ〳〵。又そんな突飛な事をわざと考へて、困らせに駄々をこねるなよ。（彼女の頭に手をのせ）此小さい頭めがよくもさういろ〳〵な事を考えおるのが不思議だて。

戚夫人　（わざとふさいで）運命に保證のない身は考えずに居られませうか。いえ、妾は此身のことならこれんばかりでも感謝なしに考へた事は厶いません。かうして陛下とお袴の端を穢さして頂いてゐる有り難い一つ時で、妾はもう甘んじて死の鬼を抱きしめてやります。けれども、此身と一つにならぬあの子達の賴りない行末を考えますと、妾はもうつい空怖ろしく、可哀相で……（高祖の膝に泣き伏して見せる）

高祖　（うつゝをぬかし笑ひ）又してもその愚痴か。お前の可哀い者が俺には可哀くなからうか。幾たびお前は俺から

その保證を聞かうと云ふのか。そんなにもそれをくり返へし聞いて喜び度いのか。戚英を皇太子に立て、桂施は陳稀に娶はせると云ふ事を。

戚夫人　（面をあげて高祖の手を取り）それはたしかでムいますか。陛下。

高祖　呂后がそれを云い出し、俺がそれに贊成したのだ。これよりたしかな事があらうか。

蕭何　して陳稀はもうそのお話を承つたのでムいますか。

高祖　いや、俺はあれが出發の暇乞ひに來た時に、わざと只あれの名譽の凱旋には、何よりいゝ褒美をくれてやるとだけ約束してやつたのだ。

戚夫人　皇后がどうしてそんな事を。——あゝ妾はそれが何だか空おそろしふムいます。

高祖　は！　よく怖ろしい〳〵と云ふ奴だ。俺はその言葉を聞くと胸がわるいわ。（横になる）さ、さ、陽氣に一さし舞でも舞つてはどうか！　俺はお前の體の美しさを此謹嚴な學者に見せてやり度いのだ。いやか。（彼女を引きよせる）お前は汗をかいてゐるな。（侍女に）その窓をあけて少し風を入れろ。

侍女窓をあける。星が見へる。

蕭何　陛下。お祝い申し上げます。吉い御星運でムいますぞ。東の空に大熊星座が鏡のやうな光りをあか〳〵と放つて居ります。

高祖　ふむ。星座の吉凶が氣になつたのも征服にこつてゐた昔の夢だ。今ではそれはもう俺の快樂を遙かに取り持つ外には、何の意味もなくなつたわ。

その時道化又飛んで出て來る

道化　ゞ、御注進。御注進。（とわざと慌てゝ出て來て高祖達を見るや否や）　わッ！　これは〱！（と耳をおさへ）や、これは耳だ！（と眼を押え、後ろを向き）陛下。もうその風俗壞亂はお止め遊ばせ！　山から女神様のお降りで厶いますぞ！

高祖　何をさはぐ。馬鹿。（と云いながら戚夫人に、體を起して貰ふ。）

道化指さしをしてクックと笑ふ處を高祖に見られたので、寢臺の下に匐つて逃げ込む。そして戚夫人が寢臺から降りる時、寢床の下から首を出し、先刻の枕をその足に穿かせる。

戚夫人　ではお休み遊ばせ。皇帝陛下。（冷笑の流し眼を送る）

高祖　行くか。では又後でな。可愛い猫！（流し眼を送る）

戚夫人侍女一と二を從へて右手に去る。道化犬のやうに匐つてその後について去る。同時に左手より皇后呂后侍女達を從へて現はる。蕭何と侍女達とは低く敬禮するが呂后は人の敬禮に應へない癖がある。室内を一寸見廻し、侍女達に退れと眼くばせする。侍女等去る。

呂后　妾は戚に逢い度いと思つて參りました。ゐないのですか。（侍女のしつらへた座につく）

高祖　お前に遠慮をして、退つたのだ。

呂后　（體をねじつて後ろの幕を扇子で一寸あけて見る）　おや、此の女達はこゝに殘つてゐるのに、あれは自分だけは遠慮をしなければならぬ身分と思つてゐるのでせうか。

高祖　あの娘の事なら、おれはもう知つて、喜んでゐるよ。

呂后　あの娘なんて、まるで他人の娘の事のやうに被仰いますのね。そして、陳稀には戀人があるのだと云ふ事もで

すか。
高祖　何、戀人がある。
呂后　（ほゝ笑んで）韓信の娘です。
高祖　あの沛娘がか。
呂后　それが、そんなにお驚きになる事があるんですか。
蕭何　さう承はれば思い當る節もムいます。陳稀は出發に先だつてもかねて親しい韓信の方で一夜を明かし、彼からあの秘藏な名馬を讓りうけたものと見へます。
側女三　あの方があの鮮鱗の鎧に黑緞子の帶をおしめなり、あの大きな白い馬をおどらせて
側女四　濤のやうな旗と、槍との林の中を朝日に照らされながら指揮をなさる勇ましいお姿はまあなんとお立派でしたでせう。
側女三　妾は手をふり乍ら涙が出てなりませんでしたわ。
高祖　呂后。お前どうしてそれを知つたのか。
呂后　妾はあの娘の眼と、化粧のし方を見て、すぐ戀をしてゐる事をさとつたのです。そして、何となしにすぐ陳稀の事を考えたのです。妾は陳稀の事をほめて、あの夫婦が妾を寢室へ送りに來た時に、妾が媒になつてやつてもいゝが、そんな氣はないかと一寸鎌をかけて見たのです。すると、あの女房は耳の根迄赭くして、默つて、一眼亭主を見ました。それで妾にはすぐ分つたのです。
高祖　それで、お前はどうするつもりなのか。

呂后　それを貴方からお訊ねになるんですか。勿論あれ達の結婚をやめさせる丈けの話ではありませんか。

高祖　あれ達とは何方の娘だ。

呂后　無論沛娘の方を。

蕭何　併しそのお話のやうな事情では陳豨は中々おとなしく仰せに從ふやうな男ではムいません。彼は若者の野心と反抗心とに充ちておりますで。

高祖　元より俺はそこを見込んで彼を大將にしたのだ。一體あの役はまだ彼には過ぎてゐる。それ故彼はきつと彼の力相應以上の手柄をするにちがいない。

蕭何　それに韓信がきつと智慧を貸すでございませうから。私はあの新進氣鋭の若者が、若者にあり勝ちな誘惑で、萬一自分の手柄と、韓信の勢力とを笠に、増長するやうな事がなければと祈つております。（起ち上り）夜もふけたやうでムいます。お邪魔を申し上げました。之で御免を。（二人に禮して起つ）

呂后（蕭何に）お前には話がある。妾の室で待つてゐておくれでないか。（問）あの爺は何の用で來たのですか。

高祖　ふむ、下らぬ奴だ。俺達が韓信の處へ行つた樣子を訊きに來たのだ。矢張り俺達があゝ云ふ處へ行くと氣になると見へる。決して彼の事を善く云い度くて訊くんではない。そのくせ忠義面をするんだ。だから俺は彼奴が何遍その事を訊ねても、わざと聞こえぬふりをしてゐた。齢甲斐のない馬鹿奴。今になつて奴は昔韓信を俺に推薦した事を後悔してゐるにちがひない。

呂后（いやな顔をする）そんな馬鹿をなぜ貴方は宰相になぞなさいましたの、

高祖　俺は人間をつかふ事は名人だ。宰相抔と云ふものは丁度あの位の腰抜けでないとうるさくていけない。しかし

人民共は奴の勳功と、何かありげなあの將のために奴を尊敬するんだ。それで俺はお前のすゝめに從つたわけだ。

呂后　此間の御旅行ですつかり又韓信がお氣に入つて了ひましたのね。

高祖　前には俺はあれや張良位の人物は別に珍らしいものぢやなく、彼等の金箔は大部分時世の運の着けたものと思つてゐた。しかし時がたつて見ると、中々あれだけの奴でもザラには出て來ない事が分つた。俺はとも角あゝ云ふ珍らしい奴等に佐けられて來た自分を運がよかつたと今更思はぬわけに行かない。

呂后　あの嫌味な君子振りやが。（自ら王の傍へ行つて王に杯を渡し）上の者はいつでも下の者をほめる事が出來ますからね。（狡猾に）しかし貴方を始終見てゐてあれ等を見ると、（侍女王の杯に酒を注ぐ）誰も大海と、泉水とを較べる阿呆はありまんが、まあ何と、あれ等のちいつぽけに詰らなく見へる事でせう。

高祖　（ひそかな滿足にほくそ笑むで、皇后に杯を渡し）ふむ。が、泉水には又泉水の大海にない趣きもあるて。さあ、お前の健在を！

呂后　（侍女に酌をされ）貴方の萬歳を！

二人杯をあげて飲む

呂后　しかし大海が持ち前の寛やかさでその泉水に愚ろな眼をかけてやつてゐる間に、その御寵愛者の方では姿達二人の肖像をはずして、引き裂いて了つてゐます。

高祖　何、俺達の肖像を。

呂后　（冷笑的に）あれを貴方はお氣づきにならなかつたのですか。

高祖　尤もお前はあれに對しては毎も少し邪推深すぎた。それで、俺もあれには常に充分に、よくしてやつてゐたと

許りは云へない。

呂后　ふ！　充分によくしてやつてゐらしつたと許りはね！　――素よりそんな事を妾も氣にしてる譯ではありません。どんな災難で紛失したのかも知れませんからね。――併し、貴方。

高祖　何だ。（呂后を見る）

呂后　あの娘を又お手に入れになつてはいかがです？

高祖　（一寸ギクリとす）なに、あの沛娘を？

呂后　（輕くうなづく）ちつとも綺麗な娘ではありませんから、後宮の御用はつとまらないかも知れません。けれど、ちよつと可愛らしい娘ではありませんか。妾もあの桂施を取られる代りに、丁度あの位のむすめを貴方のお側において、御一緒に可愛がつてやりたう厶いますの。

高祖　（やゝ動搖する。なほじつと呂后を見る）

呂后　さうすれば丁度あの娘の片もつくと云ふわけです。――お氣には召さないのですか？

高祖　お氣には召してゐる。しかし何分、俺はあれの名附け親なのだからな。此間名を訊いて思ひ出したのだが。

呂后　始皇帝は實の內親王にさへ子を宿らせたと云ふではありませんか。そんな事をなさらなくとも、若いむすめに閨の伽をさせると、長生きをすると云ひます。貴方も長生きをなさいましよ。

高祖　それにはあの韓信のむすめである必要はない。

呂后　おや、韓信だけは貴方の臣下ではないのですか。

高祖　臣下だ。無論。だが俺はあの不思議な位忠實な、溫和しい、好人物の心を苦しめ度くはない。

呂后　何を苦しむ事があるんです？　あれ達夫婦はその名譽を喜ぶだらうではありませんか。

高祖　それはさうだ。しかし一方可愛いむすめを失戀させる事の爲めに心を痛めるだらう。俺もたまにはあの特別な功勞者に對する遠慮で、淡はい失戀の盃と云ふものを舐めて見やうと思ふのだ。はゝ。

呂后　（急に冷たく硬い表情で高祖を見る。）では强ゐておすゝめはしますまい。（起つ）妾は只、自分の云ひ出したあれ達の結婚だけは、今でもきつとまとめてやるつもりでゐると云ふ事を、貴方に迄申し上げておきます。貴方からあの母親に取りついで頂けるでせうから。ではお休み遊ばせ。

高祖　お休み。俺も寢やう。

呂后靜かに去る

第三幕　韓信の館

第一幕、及び第二幕に同じ。但し、高祖の額ははづしてある。そして地圖がかゝつてゐる。幕あくと沛娘地圖の前に立ち、或る點から或る點までの距離を指で尺をとつたりしてゐる。その傍に謝公著の妻

沛娘　こゝから榮陽までがざつと三百里。榮陽から梆鄲までが二百六十里で、五百六十里。そして今ではそれよりも

つと先きにいつてゐらつしやるんだわね。婆や。

謝公著の妻　それだつておひい様。あの疾風(しけ)よりも速い龍車を飛ばせていらつしやれば、二日二晩とはお待ちにならないでもあのお方のお顔を抱いてお眺め遊ばす事が出來ますわ。

沛娘　さうだらうかしら。（地圖に指で線を描き）とに角もう此處まで、占領されて了つたんだわね。またよく聞に！

謝公著の妻　ほんにまあ龍が天に昇るやうにとでも申しませうか、すばらしい御威勢でムいますことねえ。

沛娘　（彼女の手をとり）ねえ、婆や、都ではどんな騒ぎなんだつて？　それをもつとくはしく話してお聞かせよ。

謝公著の妻　それはもうおひい様。娘と云ふ娘はまるであのお方が自分の戀人でゞもあるかのやうに、あのお方の御肖像の奪ひ合い、市中は旗と松明の行列に、銅鑼や太鼓の囃しで、到る處あのお方の御評判でもちきり、それは〳〵もう陛下の御即位式の時でもこれほど賑やかではなかつたと申すほどの大騒ぎ大祝ひでムいます。——尤も妾は見たわけではございませんけれどね。

沛娘　（わく〳〵して喜びを隱し得ず）まあ、そんななのかねえ。あたし見たいわ！　どんなだらう。田舍はほんとにつまんないわ！

謝公著の妻　おひい様、お幸せでムいますよ。今そんなものを強ゐて御覽遊ばさなくとも、もうちよつとお樂しみに御辛棒遊ばせば、その十倍百倍の御祝祭の中をあのおいとしいお方と御一緒のお輿で、おねりになつて、嫉み深い街の娘達をやんやとお云はせになる事がお出來になるんでムいますよ。（にや〳〵笑ひ乍ら、去る）

沛娘　あゝ、それがほんとに叶ふなら。妾は星を鏤めた千の空中樓閣より、一つの本物の眞珠の方がいゝ。（懷から肌身離さぬ小さき肖像を取り出してじつとそれを眺めるが、韓信夫婦の聲を聞いてあはてゝそれを又胸にしまふ。）

韓信夫妻正面の階段から話しつゝ登場

夫人　それや會つてゐる時は調子がよくて、離れるとすぐに忘れて了ふ人もあれば、一寸顔を合はせた丈けで、いつ迄もなつかしい人もあり、又あと口のわるい人もあります。けれど、久しぶりに逢つて厚意のわかないやうな人ならまあ、よつぽどいやな人と云ふもんですわ。

韓信　（上氣嫌に）そんな事を云つてゐても、俺の安心した信頼がなる程尤もだと云ふ事はお前達も今更に認めない譯には行くまいが！

夫人　それや、やつぱり貴方の價値を本當に解つて下さる方は陛下だけだと云ふ氣がしみ〴〵しましたわ。そして陛下の方でもきつとさうお思ひになつたにちがいありませんわ。貴方に對して。

沛娘　ですけれど、妾はね、阿母樣。どうしてゞせう。陛下のお前に出てゐると、何と云つたらいゝかしら、あのおやさし相にほゝ笑んでゐらつしやるお瞳の底に、何か底の知れない、或る冷たい〳〵ものを感じますわ。そんな事思つては濟まないと思ひ乍ら、妾の胸はまるで怖しい大蛇(おろち)にでもじつと睨まれたやうに、堅く凍つて、息がつまるやうな氣がしますの。どうしてゞせう？

韓信　大蛇(おろち)に睨まれたやうに？　はつ、はつ、はつ！

夫人　（秘かに戰慄を隱し乍ら）それを御威嚴に身がすくむと云ふのでせうよ。多分。

沛娘　いゝえ、それとはちがふんですの。それなら阿父樣にだつてある筈ですのに、阿父樣の内には決して微塵もないものですわ。それは千萬人の血が眼の前で流されても平氣で見てゐる事の出來るやうな、或るえたいの知れない冷たさですわ。恐ろしさですわ。

夫人（横を向いてかすかに）おゝ。

韓信　いや、たしかにさう云ふ處は陛下にはある。だがそれは陛下の缺點と云ふより强みなんだ。陛下の御性格にあの異樣な力がなかつたら、あの困難な大業を成しとげる事はお出來にならなかつたらう。その力がわしの性質に乏しいのはわしの美點ではない。缺點なんだ。

沛娘（强く）まあ、人を人とも思はない力が乏しい事が缺點なら、妾はその缺點の方が美點よりどんなにいゝか知れませんわ！

韓信　はゝ。（沛娘の頭に手をのせ）お前は戀人の身の上を案じる餘り、無暗に運命を無慈悲な敵のやうに想像してにくんでゐるが、あんまり邪推をすると後で、その神の前に手をついて謝まらなければならないぞ。お慈け深い神樣。貴方をあんなにわるく疑つた罪をどうぞ宥して下さいまし。妾はこんなに後悔して居ります。つて。

沛娘（涙ぐむで、甘へ）ほんとにさうかも知れませんわね。阿父樣。妾どうしてこんなに邪推深い馬鹿なんでせう。（涙をポロ〳〵落して笑ひ）あゝけれど妾さうして謝まれるやうになつたら、どんなに〳〵嬉しいでせう！　いくらでも〳〵泣いて謝まりますわ。地びたに頭をこすりすけて、その神樣のおみ足に口づけして、あやまりますわ！（韓信の膝に頭をうづめ、聲をふるわせて泣く）

韓信、その頭に手をのせた儘、涙ぐみ、一寸默禱する時、蹄の音がする。

夫人（袖で眼を押へてゐたが）さ、さ、貴孃のその熱心に呼びよせられて丁度又お使いが來ました。後の喜びをいやが上に大きくしやうと、戀する者はわざと自分の不安を自分で煽るものだと云ふけれど、あのお使ひにそんな風に取られないやうに、そのぬれた顏を一寸の間かくしてゐらつしやい。

滿娘、懐かし相に笑ひ、右手の入り口迄夫人に送らせられて去る。韓信、いくらか興奮した氣味で何か考へ乍ら歩き廻る。

夫人　ねえ、貴方。妾一寸氣になる事がありますの。

韓信　（立ち停まりいやな顔して夫人を見る）

夫人　別に大した事ではないのですけれど。あの晩、陛下が此處に泊らうと被仰つた時、皇后はなぜあんなにおいやらしく、反對なすつたのでせう。

韓信　——

夫人　片一方だけよりはいつそ兩方をと思つて、あの御肖像をかけておかなかつた事に御不興になつて、こんなきたない家には泊れないといふいやがらせにあんな事を被仰つたのか、それとも、妾達の心を疑つて被仰つたのか——

韓信　（荒々しく）それが兩方であつたにしたところで、それが何だ。下らぬ！

夫人　（とりなすやうに）いえ、もし妾達をお疑りになつての事でしたら、却つて、それで妾達の本心がお分りになつた譯ですから、都合がよかつたと云ふものですけれど。

韓信　俺にあのいやな女の事を考えさせてくれるな！　それは毒のやうに俺の心を腐らせる。（又歩いて）だが、あの女も同情さるべき點はあるのだ。

夫人　（溜息を吐く）あゝ。返へすくも、せめてあの陛下に好色と云ふお瑕さへなかつたらねえ。（去る）

韓信。なほ一人で歩き廻る。

使者出る。敬禮する。

韓信　どうだ。戰況は。彭城はおちたかね。

使者　いや、閣下。落ちるもおちないも、まるでまだ竿もあてない中に敵の方から、バラ〳〵と旗の中に飛び込んで來るのですから、あれなら手前が大將になつてゐたとしても敗けつこはムいません。十里も先きから堂々たる軍鼓の音勇ましく、白濤の如く寄せて來るかと見れば、それは、殊勝な寄せ手とは思ひの外、手に手に白い旗をかざし、鞘ばかりの劍をさげた出迎えの强者共でムいます。之は怪しと眉に唾をつけて、なほも油斷なく城に近づきますと、こはいかに、いかめしき鐵の城門はさながら「歡迎」と書かんばかりに精一杯左右におし開き、どんな主人もあれほど安々大手をふつて我家の門を通る事は出來まいと思はれるほどの呑氣な入城ぶり。いやはや、狐につまゝれたやうなとはあの事です。（と扇子を開く）

韓信　と思つてゐると、門は再び閉されて袋の中の鼠同然、その上で火をかけられ……とでも云ふんではないのか。

使者　左樣。あれで火をかけられては事でした。何しろ只だと云ふんで皆底ぬけにお神酒をさしたのですから。いや、手前共も折角力瘤を入れてゐたんで、それ位の事はしてくれるかと、焚き火もせずに寒さを怺へて、待つてゐたのです。

韓信　趙の軍勢は多分戰ふ勇氣はあるまいとはわしも思つてゐたのだ。何か、陳稀からの手紙はないのか。

使者　ムいます！　（思ひ出したやうに二通の手紙を取り出し一通を渡し）いや、間違いました。こつちでした！　（と又別な手紙を渡す）

韓信　（それをとつて讀みながら）――何だ。――それでは、趙は始めから――

使者　（すぐ察して口を出す）左樣。始めから官軍の大將と密通して、味方に買收する――と云つては語弊がありますがつまり引き入れて同盟する腹であつたのであります。

韓信　默つてゐろ。（なほよむ）何、本營を彭城に移したと？　それはいかん！　それは敵地に陣を張るやうなものだ。あの漳河をふさがれて了つたらどうするのか。それこそ――

使者　はい。しかしあゝ云ふ廣々とした、御馳走たつぷりの袋なら鼠は却つて肥る一方の大威張りでムいます。誰も袋の口をメめる者はないのですから。

韓信　案の定か。（やゝ色をなし歩き廻る）燕や魏は何をしてゐるのか。どんな態度をとつてゐるのか。

使者　まあ氣に入つた聟をとつた花嫁の親御達のその花聟に對する態度、でも御想像になりましたら、當らずとも遠からずでムいますな。

韓信　それが常習の手なんだ。阿呆奴。まさかあれはそんな見えすいた陳腐な陷し穽に警戒を怠りはしまいな。

使者　どう致して。時には無慮二三人の部下を御引率になつて、白晝に堂々と市街へ御視察にお出かけになる位のもので。

韓信　（つい喜んで）人民は彼に危害を加へる樣子もないのか。

使者　はい。もし女達があの方に投げつける花のつぶてがあの方のお眼でも傷けません限りは。いや。まつたくあの方も呆氣に取られておいでです。何しろ、奴等はあの方をば新しい趙王、自分らの自由の主なぞと呼んで、子供等は路並に旗を振る。大人は思ひ〳〵の貢物の競爭。何の事はない、八幡の籔で、どつちが敵國で、どつちが祖國か。どつちを征伐して、どつちへ凱旋するのやら、さつぱり見當がつきません。

韓信　（心亂れて暗い表情）彼はさぞ笑つてゐる事だらうな、眼先きの利害しか分らぬ愚民共の不誠實を彼は素より見拔いてゐるからな！　又彼等は決して彼に本當に敬服してゐるのではなくて、どんな卑劣な馬鹿者にもそれが利益とさへ

見れば同じ敬意と媚びとを安賣りする事を彼は知り拔いてゐる筈だからな！

使者　まつたくでムいますよ。彼等の誠實と來てはあの方にこんな代物迄も獻納する位は朝飯前なんでムいますからね。（と或る箱を持つて來て）餘り香いのいゝもんではムいませんが、御覽に入れませうか。

韓信　何だ。首か！

使者　はい。趙王の。いや、決して贋せ物ではムいません。お疑いなら一寸たゝいて、目方を御覽になつても分りますが。（と箱をかゝへてその重さを見せる

韓信　（顏をそむける）見度ふもないわ。ふむ、何と云ふ淺ましい誘惑だ！（きつと使者を睨み）これはもう陛下にはお目にかけたのだらうな！

使者　いゝえ、手前の記憶では別にそのやうな事は仰せつからなかつたやうに存じます。只閣下に御覽に入れろとだけ伺いましただけで。

韓信　何、わしにだけだと!?

使者　はい。それがいけませんでしたら、之から歸りにあちらへ廻つても宜しふムいます。

韓信　（信じられぬやうに頭を振る）一寸、待つてゐろ！　返事を書くから。（退場）

使者爪先きで歩いて、さつと幕を開くと沛娘が立つてゐる。

使者　（見とれつゝ平身低頭して）これは〳〵。どうぞ平にお宥しを。私は此處の幕をあけて見ろ、さうすれば多分あなたがそこに立つてゐらつしやるだらうから、と私の主人に云いつかりましたんです。

沛娘　（出て來る）よくつてよ！　溪、見つかつたからつてはづかしくはないわ。

使者　めつさうな。何がはづかしいことか！
沛娘　お言づけはそれだけ！
使者　はい。千の「宜しく」をと。
沛娘　では妾からは萬の「宜しく」をとね！　あの方は御元氣？
使者　到つて。只日に幾度となくこちらの空を仰いで、重病人のやうに溜息をお吐きにはなりますが、さりとて醫者を呼ぶ程の事でも御座いません。
沛娘　まあ、あの方を人民達は趙王だの、自由の主だのと呼んでゐるのだつて！
使者　はい。御望みならあなた樣の御部屋でもう一度くはしく御說明申し上げても苦しう御座いません。
沛娘　そんな事してはゐられないわ。（四邊を見て。）あの方はいつもお一人でおやすみになるのだらうね？
使者　いや、その點を御疑りになつては地獄に落ちます。かう申しては何ですが、何ぼなんでもあゝ迄おかたくなくとも……と私どもの間では内々笑はない――いや、感心しない者はない程で。その御辛棒强さ。只もうあなたの御肖像を懷爐のやうにひしとお抱きしめになつて――
沛娘（傍白）それなら妾と同じだわ。あゝわるかつた。心にもないことをつい疑つて。どうぞゆるして下さいね。（使者に）さあ、お手紙を渡して頂戴。
使者（それを渡し乍ら）これをお渡しする時にあの方の代理としてあなたのお手に接吻をさせて頂くやうにと、私は言ひつかつてまゐりました。
沛娘　あなたがもしこれを引きかへにあの方にお渡しする時に、同じ事をきつとなさるなら。（と自分の手紙を渡す）

使者跪いてその手にさかんに接吻してうけとる。

沛娘　（封を開きかけて。）あゝよさう！　あとでゆつくり、一人で、寢床の上で讀む方がいゝわ。何遍も何遍も。あゝ樂しみ！　（韓信の足音がする）もういらしつた！　（使者に强く）ではきつとね！　（飛鳥のやうにまた幕の裏にかくれ去る）

使者跪いたまゝの形。韓信の足音近づきつゝ。

幕

第三幕

第一場

未央宮の奥。第二幕第二場に同じ。戰勝大祝賀會の夜。

始め舞臺暗く。窓の彼方の後宮の明りで次第にやゝ明るく見へて來る。

右手より黑裝束覆面の侍甲、乙、出る。

侍甲　（向ふを見て立ち止まり）や、や‥‥之はどうしたこつた。向ふからも我々同樣の者がやつて來おるぞ。

侍乙　（身構へし）名乘れ。怪しの者。

侍甲　うぬ、身共等の眞似をして、小癪にも人を揶揄ふつもりだな。（刀の束へ手をかける）

侍丙　（扇子でその刀を打ち）ヘ、ヘ、ヘ！　ふざけるのもいゝ加減にしろ。この痴け奴。俺様が分らねえのか！

侍乙　誰かと思つたら丙太郎と丁之進かい。

侍丁　さう云ふお前達は甲之助と乙之丞だな。ヘ、ヘ、笑はせやがるぜ。

侍甲　御同役、今晩は。御苦勞さん。とくる處だな。ヘ、ヘ、なアんのこつてい。

と皆々笑い乍ら覆面をぬぎ、塵す

侍丙　かう敵の偵察隊同士妥協しちまつて見ると、此馬鹿げた見張り役もいくらか面白くなつて來たが、ぢや、お前の方の主人は（と四邊を見廻し）……お拂い下げだな、

侍乙　お拂い下げとは何だ。

侍丁　は、は。手前が見張りを云いつかつてゐ乍らそれを知らねえのか。今度出來たあのもぎ立てのホヤ々々と陛下がどんなお話をなさるか、お前等はそれを嗅ぎに來たんだらうが。

侍甲　そしてお前の方はあの大年増と陛下との間を嗅ぎに來たんだらう。（兩手で二本の角を眞似）これに云いつかつて。

侍丙　ちげえねえ。だが、同時に、珍らしく長く續いたお前の方の主人から久しぶりに椨那をふんだくつて大泣きに泣かせてやらうつて肚で、さしむけたあの若えのと陛下との間を嗅ぐ事も云いつかつてるんだ。

侍乙　ほう。それや初耳だ。ぢやあの（又二本の角を眞似）これにもやつぱり人並みな悋氣はあるんかね。

侍丁　ふむ。お前は長生きの性だよ。オイ、々々、女にやな、子が出來ねえつたつて、子宮てものがあるぜ。子宮て

曲者が。大方お前にはそれも初耳だらうが。

一同クック笑ふ

侍乙　だつておかしいぢやねえか。そんな曲者を持つてる位なら自分だつて負けずに好き勝手な男をこさへられるものを、まるで色氣なんてものは感じねえぽくねんじん宜しくつて堅さだ。いつだつたか、あの物好きな陛下が、まア、いくらか御自分と平均を取らせやうつておつもりだつたんか、あの中國一の好男子の英布を一晩お慰みにさしむけた事があつたらう。あの色男大將、早速皇帝の切符持參でさしもの面の皮もひんむける程テカテカ磨き立てゝお閨へ忍びこんだもんだ。ところで、明る朝にやもうその不敬罪とやらで、胴と首とは別れちやつたぢやねえか。

侍甲　不敬罪だか、何だか、怪しいもんだ。大方御用だけはよろしくさせたんだらうがね。可哀相に。

侍丙　自分がやつちや、何より好きな人を責める事はしにくいからな。あの女があれで一つその事、皇帝と好一對の淫亂なれやいゝんだ。が、奴はそれをしねえつてだけで自分は世界一の義しい、威品の高い、凡そ高貴なものゝ典型と自認しきつてけつかるんだから助からねえ。

侍丁　何の事はねえ、あの大事な排泄器をちよん切られちやつた宦官が、その爲めになほ性惡が内に溜まつて、何倍も濃いゝ毒になつて、他の方へ發展するやうなもんだ。やつぱり人間は相當に糞を排泄しねえといかねえて。

こんな會話の間に、窓の彼方の明りは明暗いろいろに變化し、時々女の高い笑い聲や、喧噪の音聞こえる

侍甲　（窓の處へ行つて見ながら）何て、譯の分らねえ宴會だ。戰捷祝賀會だなんてつて、軍人なんぞ數えるほどもゐやしねえ。女ばかりの亂痴氣騷ぎだ。

侍丙　（やはり窓の處へ行つて）それやさうよ。陛下は今度の戰爭なんぞ全で問題にしちやゐねえんだ。それにその戰

捷なるものが頼るはつきりしねえ鬼火然たるもんなんだからね。

侍乙　だが何だつて皇后はあの戚夫人に限つてそんなに妬けるんだ。

侍丁　あの女は子供のある女を見てにくいんだ。自分に子供が出來ねえもんで。しかもあの夫人の子供は行く〳〵第二世皇帝になるんだからな。——叱！　皇后だ。

侍、甲、と乙、かくれる。丙、丁、又覆面をする。面紗を被つた呂后、一人で忍んで來る。

呂后　(おづ〳〵と、覗く)そこにゐるのは——誰。

侍、丙丁、ぬつと立ち上り、呂后に近よる。と呂后、悲鳴を擧げて逃げ去る。

侍丙　ヘ、ヘ、ハ！　何と云ふ柄にもねえ臆病だ、自分の間諜(いぬ)を見て逃げ出しやがるとは。

侍丁　俺達を暗殺者だと思やがつたんだ！　ハ、ハ、ハ！　面白えな。

侍甲　(出て來て)　むしろ憫れむに堪えたりだな。

侍乙　自分の影坊子を見て悲鳴を擧げやがるとはな。や。今度は此方の主人らしいぞ。又默つてゝ見やう。

侍、丙、丁、かくれる。

戚夫人、矢張り面紗をかぶり一人、右手から出る。

戚夫人　(おづ〳〵)そこにゐるのはお前達だね。

侍甲、乙、ぬつと立ち上る

戚夫人　(一歩後にすざるが、又進んで)　覆面をお取り。

甲、乙、覆面をぬぐ

戚夫人　妾は先刻お前達にあの女と、陛下とのお談しを聞くやうに云つた。しかしそれより、皇后と、陛下との、又皇后とあの女との御密談になほよく注意してゝおくれ。（二人の手に金らしいものを握らせる）では氣をつけて。（去る）

侍、丙、丁、出る

侍丙　うまくやりやがつたな同胞。あの女の方が臆病でもなけれや吝でもないらしい。俺達もそつちへつくんだつたに。

侍丁　臆病さの度合いが惡さの度合を示してゐる。女の臆病さがあれほどにひどいとは恐ろしいこつた。

侍甲　さア、彼方が靜かになつたぞ。いよ〳〵此方の役目だ。どれ、寄席へでも行つたつもりで、あそこいらから一つ茶番を見物してゝくれや。

侍丙　いやはや、さぞ又アテられるこつたらうて。よつぽど取らなきや合はねえや。

皆々裏面にて彼方此方の幕なぞの裏にかくれる。

と二人の侍女が明りを捧げながら出る後に、高祖は新しい寵姫の李姫の肩に腕を廻はし、赭顔にて出る。

高祖　こゝにもゐない。あの女はどこへ行つたかな。

李姫　まあ、陛下。そんなにもあの方のお顏ばかり眺めてゐらつしやりたいんでムいますの。

高祖　（座す）いや、俺は只お前とあれとを並べて見て、あのいつ迄もしぼまないと云はれる花がどの位しなびたかお前がどの位水々しいか、ちよつとそれを見て見たかつたんだ。

李姫　嘘ばかり。陛下は御自分がすつかり精を吸ひ取つてお了いになつたあの方にやつぱり一番深く牽かれてゐらつしやるのは分りきつております。だつて、その筈ではムいませんか。何にしろあの方は陛下との間にあの玉のやうな皇

子と姫君をお生しになる大手柄をなさいましたんですもの。

高祖　（やに下つて）なに、お前がいゝ息子を生めば、それを世繼ぎにせぬもんでもないさ。

李姫　まあ、陛下、勿體ない。太陽は云い譯をしたり、口が上手であつたりする必要が厶いませうか？　（侍女達に）何をぼんやり立つてなの？　お銚子と、お盃を持つて來ておくれな。

と、侍女達を去らせ、愁ひ氣な嬌態をし乍ら

李姫　（旁白のやうに）あゝ女と云ふものはどうしてから罪の深いものかしら。喜んで、祝ふ溫かい心持ちで、晴やかにほゝ笑み乍ら眺めなければならないものを、まるでその反對も反對、冷たく暗らい穴に棲むさそりが我と我身の毒に苦しみうづき乍ら、その獲物をねらふやうな眼付きで……おゝ何と云ふ我れながら愛想のつきたさもしい心だらう。

高祖　ふむ、何か馬鹿な白を囁つてゐるな。誰かにしこまれた駒鳥が、その通り藝をするやうに。その小さな胸と頭とによしどれほどいたづらな小惡魔が一杯につめ込まれてゐやうと、それでお前等が愛され難い理由にならうか？　あらゆる陰と日向とに面白味を見つける事の名人な此俺の不思議な愛をはね返へすほど、それは大きなものだとお前は思つてゐるのかい。（彼女を抱いて撫でる）

李姫　あゝ陛下。それでは此惡性をたつぷりと持つて、たえず自分を憎くんでゐる妾をゆるして、お側においで下さいます？

高祖　は。自惚れるな。俺がゆるせないやうなわるさがこの可愛い奴に出來るなどゝ。俺にはまつたく、どうしてから何もかも面白く見へるのか、可愛く見へるのか、自分でもわからない。

李姫　（誇張的にうつとりとして）あゝ妾は大海に身をひたして、そのひろい懷ろに甘へ戯れ乍ら、身も魂もとけこんで行

くやうな心持ちが致しますわ。なんだか自分まで可愛くなつてしまいます。

高祖　海も亦お前のやうな娘をその大きな腹へのせて、遊びふざけるのは好きなのだ。あゝ海は自分の内に這入つて了ふものを、自分の一部を、にくむ事が出來やうか？

使者出る

使者　申し上げます。陳稀將軍の行動は益々不可解な謎でムいます。前には日に三回づゝ必ず參りおりました使は昨今三日に一度すらも參りおりません。のみならず、聞く處によれば、賊軍との戰端も既に二十日近く、一回も開始されずにおるとの事で……

高祖　うるさい！　むさい戰爭の報告抔の此處は差し出る場所でないわ。そんな下らぬ報告は一切蕭何の耳へ持つて行きおれ。分つたか！

使者去る。

李姬　でも陛下。いくら寛大な海でも不淨な物を捨てると海神が怒ると申します。陛下には人は皆自分の一番體裁のいゝ處だけを御覽に入れるので、陛下はまだ人間の眞にきたない本性を御覽になつた事がおありになるまいと思います。

高祖　うむ。たとへば？

李姬　（わざと云いにくげに）たとへば陛下があのお氣に入りの夫人のお側で皇子や、姬君とおすごしになる世にもお美しい、御幸福なお有樣。それをそつとのぞき見たゞけで、もう惡鬼同然な心になる。――あゝおそろしい！　陛下。妾はどうしても、此御殿の中に、陛下のお側にかうしてゐてはならないものでムいます。（泣く）

高祖　馬鹿な！　春の海や野山を渡る風にも似たこの俺の愛が、一つの花に、一つの鳥に止まるべきではない。止まる事が出來やうかい！　窮屈な籠の中にやつとこさで生きる鈴蟲の愛と、俺の愛とが同一な生き方をしなければならんのかい！

李姫　いゝえ、陛下。ちよつとその鈴蟲の身にもなつて下さいまし。假りに妾が自分を一個の他人と見て、此醜い姿を大眼にゆるす事が出來ると、まア致したにしろ、まだ他の理由で、妾は此御殿に住む事だけはゆるして頂き度いんでムいます。とても／＼妾などには、

高祖　とは何で！

李姫　妾の一命は風前の燈火より危いからでムいます。おゝ、なんと、おそろしい……（身顫する）

此時呂后、左手の入口の影にそつと姿をあらはし、丁度そこへ來た侍女達を停めて、立ち聞きする。

高祖　あゝ今の人間は皆そろいもそろつて恐怖病に取り憑れてゐるのか。何が一體おそろしいと云ふんだ。そんなにふるへて！

李姫　陛下。昨夜も、一昨夜もでムいます。妾が寢床におりますと、あの窓の垂幕の裏から、（と起つて扇子の柄で二三ケ所幕を突く。彼女はさうして突いて見てそこに呂后の間諜がゐるかゐないかをためす。が、戚夫人の間諜が一緒にゐるとは知らない。ひそかに合點々々して）かうして何者かの劍が妾を突き刺さうとするではムいませんか。

高祖　なに、劍が？　お前を刺さうと？

李姫　幸か、不幸か、そこには妾の體の代りに枕がムいました。それで劍は枕を突いたゞけでムいましたけれど。

高祖　（何氣なき體に）ほつほつ。それは危なかつたな！　して、その曲者の正體を、お前は見なかつたんだな。

李姬　（なほも眞劍に）まア見るどころでムいませうか。妾はもう生きた心持はなく……一晩中只只おびへ、ふるへて……あの腰元と……

呂后はゝ笑むで去る。

高祖　昨夜も。一昨夜も。そして昨日はその前夜の餘りの恐ろしさを信じる事も出來ずに、俺に打ちあける氣にさへなれなかつたんだな。で、お前はその曲者を誰だと想像するんだ。

李姬　陛下。もうその事はお訊ねにならないで……。妾は却つて、自分がたくらんでした噓のやうに取られないとも知れぬ事を、もう申し度くはムいません。

高祖　お前はあの戚がお前に對するかねての嫉妬からやらした事だと思つてゐるんだらう。

李姬　あゝ陛下。もうどうぞ被仰らずに！　妾は自分自らの嫉妬で、とんだ見當違ひな邪推をしてゐないとも申せませんから。――

高祖　では俺はお前を安心させる爲めに、お前が今の俺にとつてどれほど大切な寶物であるかをお前に納得させる爲めに、此事をお前に約束してもいゝ。あの娘、桂施は事によつたら匈奴へ贈物にしてもいゝと云ふ事を。

李姬　え？　（思はず喜色を見せて）あの、匈奴へ？

高祖　うむ。匈奴と和睦する爲めにだ。此帝國にとつての久しい脅威であるあの北狄を俺は今更もう征服しに出る根氣はない。此厄介な禍の片を平和につけるには俺の娘でもあの單于にくれて喜ばせてやるよりないのだ。

侍女等酒を持つて出る。

李姬　（表面は悲し相に）まア、陛下。でも、それはあんまり……（と侍女等に去るやうに眼くばせして酒の酌をする）

高祖　可哀相かい。はアー

第二の使者（出る）陛下。いよ〳〵永い間の疑念の雲は除かれ、征討軍の陰謀は最早殆んど疑ふ餘地はなくなりました。最近迄彼等の遣はしおりました報告は皆眞赤な僞報で、彼等の本營は豫定地の邯鄲ではなく、趙の首府の彭城である事が暴露致しました。

高祖（そつちへ向く）

第二の使者　陛下。本營を彭城におくと云ふ事は趙、及び、燕、魏と彼等が密通しおる事を意味しております。なぜと申せば、賊軍を全く討伐しきるか、彼等と腹を合はすかの何れかでなくば、あの敵にとつて最も都合のよく、官軍にとつて最も不利益な袋地に彼等が本營をおく事はあり得ぬからでムいます。

高祖（聞く丈けは聞いて了つて）えゝ、此處へ來る事はならぬと云ふに！　たとへあの小僧が百萬の大軍を率ゐて、此きざはしの下から俺に向つて謀叛を叫ばうと、俺は今、そんな聲に貸す耳は持たんわ！　うせおれ！　馬鹿。

第二の使者去る

高祖（飲み乍ら）あゝ俺には眼前に弑逆者の群を見乍ら起たうとも逃れんともせず、あの褒姒を抱いたまゝ從容陶然として溺れる如く死んで行つた幽王の氣持ちが分る氣がする。あゝ項羽よ。もう一度墓場から起き返へつて俺を打ち倒しに來い。征服者と云ふ空な名前なぞは、抱き飽きた女と一緒に、俺はもう誰にでもゆづつてくれるわい。

李姫（旁白）あんな事を被仰つて、少し末恐ろしい者が頭を擡げかけるとは早くもその芽をつんでお了いになるくせに。

高祖　あゝお前に注がれた此生の甘酒が魔藥のやうにこのまゝ死の酒と變つて俺をだましても、俺はなほその陶醉に

ひたりつゞけるだらう。俺をまともに征服し能はぬ運命がさうして俺を狡猾にだましてゞもくれたらな。あゝ醉つた。

（と横になつて寢入る）

李姬　（立つて高祖の寢姿を凝視する）

と、その大きな長い寢臺の一部から道化の足がぬつと出て、彼女を蹴る。

李姬　（驚いて飛びのく）まア、びつくりさせるぢやないの！　何かと思つたら――、このにくらしい阿呆奴が！　（とそのダランと下がつた足を蹴る）

道化　（寢臺からずり落ちて伸びをする）あゝ。よく寢た。十年位は寢てたやうな氣がする。（眼をこすり乍ら李姬を見る）あまぶしい！　眼がつぶれさうだ！　あ、あなたはどなたで。（と頭を振すつて李姬を眺め乍ら）俺はまだ夢を見てるのかな。（額を抓つて見て）さうぢやねえ。おきてら。おきてるとして見ると、――ハア、分つた！　あの精力絶倫さん、俺が寢てる間に又、あなたてものをこさへたね。

李姬　そんなとぼけた眞似をして、お前は何もかも聞いてゐたんだらう。

道化　さア、それを想ひ出すにや半日ばかりお手間がとれますが、なに、たとへ聞いてゐたにした處で、御心配は要りませんや。わつちは自分が溺れ死なうつて處を向ふ河岸で呑氣に見物する者がありや、そいつを又羨みながら見物してくれやうつてほどの見物好きな男です。何を聞いて何を見たつて、どつちの味方になるでもなけれや、どつちを裏切るでもありません。同情とか、義理とか、利害關係なんと云ふうるさいものをすらわつちは傍觀してるんです。つまりまアどんなにくい敵もわつちの味方で、どんな親しい仲もアカの他人なんです。ところで、わつちの觀察によると、あなたはそんな美しい、蟲も殺さないやうな顏をして何か一仕事たくらんでゐますね。大いにおやりなさい！　わつちは

あなたの味方にはならないで、あなたにつきませうて。さ、さ。しつかり劍をふるつて、[illegible]下さい。わつちに見物されるのを氣にするのは猫や鼠にいゝ恥を見られるのを恥かしがるやうなもんです。（呂后、わきの高い臺の上に身輕に飛び上つて）が、お望みなら眼はつぶつてゝ上げませう。

李姫　そのきたない眼と、口と、耳とを、みんな潰いでおいで。口をあけたら命はないとお思い。

道化らなづく。李姫幕を開くと、戚夫人の間諜甲、乙、丙、殺面のまゝ立つてゐる。

李姫　これからがお前達の役だ。お前達は只「耳」であればいゝのだ。もしお前達にまだ少しでも良心や、義理立てが殘つてゐるとしてもそんなものは眠らせてお了い。だから（と金を出して、三人にそつと握らせ）お前達は妾の爲めにも働いてくれなければいけない。あの女の談しと一緒に皇后と、陛下とのお談しにもね。妾の大敵は却つて……（と横を見た時呂后の來る氣配いがするので三人を幕でかくして了ふ。）

呂后、左手に現はる

李姫　（媚くやうに）ぎよ殺になつてゞムいます。

呂后　（爪先きで來て、高祖をのぞき見李姫に）何と被仰た？

李姫　（呂后の耳に何か云ふ）

呂后　だまされてはいけないよ。此かたの云ふ事はまつたくあてにならないのだから。

高祖　（寢言を云ふ）運のわるい奴。お前には一度天下をとらせて見度い。

呂后　韓信の事を云つてゐらつしやるのだ。

高祖　（つゞけて）安心しろ。俺はお前の娘を取りやせぬよ。何と云ふ蒼い面をして、お前はふるへてゐるんだ。おや

お前は俺を殺す氣だな。うーむ。（苦し氣な息をする）

呂后　これは耳寄りな事を聞いた（李姬に）あの女がもう來るだらう。さア、この方がどんな二枚舌をつかふか、これをあのいぬ達に聞かせやう。

道化　面白い。面白い。（さう云つてあはてゝ眼と口とを押へかくす）

呂后、李姬をつれて去る。戚夫人出る。水瓶を持つてゐる。

戚夫人　一體どう云ふつもりなのかしら。妾にはどうしても分らない。陳稀と、韓信の娘との縁談を皇后はたしかに探つてゐらしつたにちがいない。そしてそれを知るが否や、あんな話をこつちへ持ち出すとは。

高祖　（眼をさます）そこにゐるのは誰だ。お前か。

戚夫人　陛下のお氣に入りの「お前」ではムいません。捨てられ、ふみにじられた皺くちやの亡き骸でムいます。――お氣に入りを呼んで參りませうか。

高祖　あれが俺のお氣に入りなら、お前はお氣に入りではあり得ないのか。

戚夫人　人間は二つの者を同等に愛する事は出來ません。いくら陛下でも。

高祖　さうかな。だが、少くとも今俺はお前に逢い度くなつてゐたのだよ。どうも俺はお前をわきにおく時に一番おちつくやうだ。――水はないか。

戚夫人　ちやんと持つて參りました。お渇きになつてゐらつしやるだらうと思つて。（と杯に水を注いで渡す）

高祖　（嬉し氣に）やつぱり俺のわきにはお前が必要だ。お前位の年輩の女、人生の鹹味を一通り嘗めて、水底の貝が美しく光るやうに、幾度か練り漉された美が、意識の水を透してじんわりと底から耀く女。それに比べるとむすめの色

はあつけない。（水を飲む）

戚夫人　（旁白）あゝ此方の命をかうして亡きものにするのは何と容易い事だらう。（高祖に）陛下。人のくれる水を疑はずに飮む事の出來る者は仕幸せでムいますね。

高祖　——お前はさうでないと云ふのか。

戚夫人　なんで。もうこんな年貢を納めて了つたものの身に幸不幸がムいませう。これからどんな酷い年貢を納めなければならないか知れぬ者、もう早くも死神からそれを求められてゐる小さい者達。陛下。妾は誰の事を云つてゐるとお思し召します？　あの妾がお預り申してゐるお子樣方の事を申し上げてゐるんでムいますよ。

高祖　あの子達がどうしたと。

戚夫人　陛下。どうぞ今の中に一つ時も早く、あのみ子達をどこか、遠くの、人知れぬ安全な山の中にでもお移しになつて下さいまし。さもなくばいつその事、一思ひに、陛下御自身のお手におかけになつて下さいまし。あゝあのおためごかしな、やさし氣な笑顏をした死の鬼の冷たい手に、あのいぢらしい二つの首がじり／＼と締めつけられて行くのを見るより、その方がどんなに思いきりがようムいませう。この母にはもうとてもあの魔風のやうな鬼の手からあのみ子達を守る術も力もムいません。

高祖　（旁白）流石にこ奴の方が上手に云ふわい。（夫人に）毒でも飮ませられたと云ふのか。

戚夫人　妾は自分の召使に作らせて、自分で毒味をしたものでなければあれ達に喰べさせた事はムいません。けれども、人を信じるな、と云ふ事を小さな淸い心に注ぎ込むのはあんまり不憫でムいますからね。

高祖　又それは間違つてゐる。

戚夫人　併し妾は今日あの二人に頂いたお菓子を一緒に、頂からうとしてためしに狗にやりました。すると狗は眼の前でくる／＼舞ひをして、――それは此お菓子で厶います、（袂から紙包みの菓子を一つ取り出して割つて見せる。と中から粉がこぼれる）

高祖（見て）それが毒なのか。――誰から貰つたか。

戚夫人　陛下はとてもそれをお信じになれる筈は厶いません。それを申し上げたら、妾をお手打ちになる事は分つてをります。いゝえ。たとへお手打ちにならないでも、妾の立ち場がこの逃れられない關係の縛めから此身を解く事を要求してをります。

高祖　馬鹿な。そんな立ち場があるものか。人間はどんな場合にも、死ぬ必要はない。

戚夫人　妾より何倍も死ぬ必要のない者を陛下はあんなに易々と數知れず、お殺しになつてゐらつしやるでは厶いませんか。

高祖　それらは同時に生かしておくほどの必要もない者だつたからだ。併しお前は是非生きてゐる必要がある。俺の爲めに。又子供らの爲めに。

戚夫人　死ぬ必要があるのも陛下の爲めと子供らの爲めで厶います。けれども妾はあの可愛い二人を見す／＼殘忍な死神の手に渡して、先き立つ事は出來ません。妾は親の最後の愛として、あの二人を一緒につれて參ります。（高祖をきつと瞳視める）

高祖（流石に心動いて）あゝ、お前がさう云ふなら、他の者なら、俺はどうにでもしてやるのだが、――

戚夫人（甚だ冷たく嘲笑するやうに）何分、陛下もお頭のお上りにならない畏れ多い方の事で厶いますからね。

高祖　うむ。俺にも苦が手と云ふものがあるのを、俺は面白いと思つてはゐるのだがね。

呂后突然に出る。戚夫人は、立つて、少時反抗的な眼で彼女を見るが、打ち敗かされたやうに彼女の前に跪いて禮をする。

呂后　陳豨が獨立の旗上げをしたのを御存じですか。

高祖　聞いた。

呂后　（戚夫人に）結婚は六ケしくはなつたけれども、お前の望み次第で出來ない事とはまだ限つてゐない。あの閼賊の聟が俘虜として生きてさへゐれば。どこか遠くの島でね。

戚夫人　（旁白）そんな事を誰が始めから宛てにしてゐると思つてゐるのか。あゝもうこれ迄だ。執る道は一つだ。（去る）

高祖　呂后。お前は凡ての低い嫉妬や愛憎の上に超越してゐる妃として、かねて俺に敬意を拂はせてゐた。――

呂后　陛下、賊の聯合軍は三十萬でムいますよ、

高祖　だがお前はその輕蔑してゐる嫉妬から矢張りぬけきる事は出來ないと見へるな。

呂后　謀叛人共は貴方を皆「劉邦」「劉邦」と呼び捨てにしてゐる許りか、無類の女たらしの、大猫被りの狸、あの野蠻な項羽の方が貴方よりはまだましだと云つてゐる相でムいますよ。

高祖　お前はあの女に妬けてゐるのか。

呂后　（旁白）まア、どうだらう。聞き度くない事はみんな耳のわきを通過させて了つて、都合のいゝ事だけを耳にお止めになる。

道化　そつくり御自身の方にあて欲まらア。

呂后　妾が妬けるとか貴方の被仰るその女とは誰の事でムいます？

高祖　今お前が眼めくらをした女さ。
呂后　戚？　あれは名姫ではありませんか。
高祖　さうさ。その名姫にお前は妹けてゐるんぢやないのか。
呂后　貴方も邪推をなさるんですね。邪推は嫉妬より決して高尚なものではムいませんよ。貴方は御自分の好きなものは何でも妾が嫌いだと決めてお了いになるんです。
高祖　ではお前は決してあれや、あの子達を亡い者にしやうと思つた事はないのだな！
呂后　誰かの死を願つた事のない者があるでせうか？　しかしそれは殺し度くて、殺しにくい者の事です。あんな賤しい者の存在を妾がもし氣にかけてゐるとしなら、何で今迄のめ〳〵時を俟つて、自分の子のやうにあの子の嫁入り先きを案じたりしたでせう。
道化　嘘吐き同士の間でもやつぱり男の方が正直だ。
呂后　あのはしため達はつまり、只厠で貴方のお手に水をかける御用を努めてゐるだけの者ではムいませんか。妾は貴方が厠に行らつしやるのを氣には致しませんよ。
高祖　それならそれでいゝ。ところで、あの叛亂には韓信を遣はすとしやうではないか。
呂后　まア。息子を討ちに父親を遣はさうと被仰るんですか。
高祖　しかし他には之と云つて此任に當る者は誰もないではないか。
呂后　「之」と云ふほどの者は貴方がみんな殺してお了いになりましたからね。韓信にしたところで妾達に怨みを持つてゐる者です。事によつたら、あれがあの若者をおだてたのかも知れません。きつとさうですわ。

高祖　そんな馬鹿な事が。俺の想像では陳豨の方が彼奴をおだてたのだ。一體奴等は皆俺には快く心服してゐるのだが、お前を怖れてゐるのだ。
呂后　ふ。誰でも自分だけは善い者にして了いますからね。
高祖　まつたくな！　それで奴等は俺の死後に於ける自分等の立ち場の不安から、今の中に聯合して天下を取るに如かんと企らんだのだが、韓信がたつてそれをとめたにちがいない。
呂后　たしかにあれは珍らしい忠義者ですわ。その忠義は實は臆病から來てゐるのですが、しかし貴方はあれが一人者ではなく、あれのわきには女がついてゐる事を、結婚してゐる男はいつも二人として考えなければならない事を、お考えにならないんですか。
高祖　さうだ。あれ達はもう銀婚式を擧げていゝ頃だ。だが俺はあの女を別に惡い女だとは思はぬよ。
呂后　あの思い上りが。さうでムいませうね。貴方の惡いとお思ひになる女は天下に一人もないのですから。
高祖　（先刻呂后の云つた言葉の調子を眞似て）お前は自分の嫌いな者は何でも俺が好きだと云ふ事にして了ふのだ。だが俺は男にだつて寛大だ。
呂后　御自分に都合のいゝ限りはね。
高祖　（とぼけて）とに角あの火のついたやうな若者の野心と反抗心とは、あれの手綱でもとめきれなかつたと見へる。あの好人物は聟と俺との板挾みになつて、さぞ苦しむでゐる事だらうよ。可哀相に。
呂后　しかしいざとなれば娘の戀人の方に附くにきまつてゐます。聟の方でもあの有力な後楯てが附いてゐると思へばこそ、あんな無謀な事をしたんです。——どうしてもこれは貴方御自身御出馬になるよりムいませんね。おいやで

も。

高祖　お前は俺を留守にさし度いのか。

呂后　お留守がお氣になるんですか。

高祖　臆劫だからさ。それに態々俺が出るほどの事とは思はんからな。夏侯嬰でもまア遣つて見るのだ。

呂后　さう。そしてその樣子次第になすつたら宜しいでせう。御出征のおつもりではなく、お慰みの狩獵のおつもりでね。きつと又いゝ獵がおありになるでせう。趙には美人が多いと云いますから。

道化　そら、もうお顏の空模樣が變つた。（飛び下りる）陛下。お出ましならどうか手前もお伴を仰せつかり度いもんで。獵には犬が必要でムいます。陛下が、あの鳥を……と眼くばせをなされば、飲みこみのいゝ手前は山羊のやうに飛んで行つてくわへて參ります。又本物の戰爭ごつこと來ては手前の大好物。尤も自分がその中に加はるのは眞つ平ですが、高みで見物してる分には、まアあらゆる見せ物の中で一此寸位い力の入るものはムいませんて。

高祖　（起ち上る）あゝ俺はもう何にも誰にも飽き〳〵だ。久しぶりに呑氣な戰地へでも逃げ出すか（道化に）萬一行く時にはつれてつてやらう。仕事をする者のわきには道化が必要だからな。

第二場　韓信の館

月夜

韓信の親子三人。韓信をまん央に、卓を圍んで、夫人と沛娘とは兩方から地圖の上に顏を突き出して、韓信の説明を聞いてゐる形。
輕い物音に、三人は唐突に、一齊に右手の入り口を見る。
韓信は二人を手で制して、入り口に起つて行き、帷を開く。
戚夫人が、そこに立つてゐる。彼女は黑い面紗を被り、百姓の婦のやうに變裝してゐる。
三人は呆と立つたまゝ彼女を凝視する。

韓信　貴女は誰だ。

戚夫人　（面紗をとる）妾。戚です。

三人おどろく

夫人　おゝ、戚夫人！

韓信　（輕く禮をして）どうしてこんな處へ、貴女は――

戚夫人　（二人の顏色を素早く見て）あゝ、貴方々はお娘御の結婚の破壞者、敵が來たと思つてらつしやるのですね！
それなら御安心なすつて下さい。妾は貴方々の敵どころか、貴方に助けて頂きに、もう貴方の力にすがるよりなくて、
突然こんな風をして……（張つてゐた力が弛んだやうに泣き出す）

韓信　（彼女の傷ましい樣子をしげ／＼と見て嘆息し）まあお掛け下さい。危險は貴女によりは私達の方に近づいてゐる筈
だが、その貴女が此私にすがらうと――

夫人　夜夜中此遠くへわざ〳〵さうして忍んでいらつしやると云ふのは——（沛娘に去れと眼くばせする。）

沛娘去る。

戚夫人　貴方々は陛下が昨夕不意に戰地へお立ちになつた事を御存じですか。

韓信　何、陛下が？　昨夕？

夫人　夏侯嬰が立つたと聞いたゐたのは例も通り、嘘の宣傳だつたのですか。

戚夫人　日向ぼつこをしてゐる猫のやうに眼を細くして、急に虎のやうに飛びかゝる毎もの御筆法です。貴方々はもうあの謀叛人と呼ばれる聟君の討死を、引いてはそのお身内に當る貴方々御一族の滅亡を覺悟しておゐでゞせうね！

夫人　素よりでムいますとも！　けれど、どうかあの憐れな娘に少しでも遲くその事を聞かせるやうに、そつと小聲で被仰つて——

戚夫人　（ヒステリックに嘲笑的に）あゝ、幸せなお子。たつたこれしきのいやな話すら耳にも入れないほどその方が大事に守られてゐらつしやる時、妾の子、戚英は口に入れるものさへ、毒を贈られて夜の眼もおち〳〵閉じる事が出來ずにゐるのです。

韓信夫妻、啞然として顏を見合はす。

戚夫人　（息もつかせずつゞける）貴方の幸せなお娘御がいとしい人を失ふやうに、妾の娘は親切らしげな嘘八百にかゝらかはれて、侮辱された上に、匈奴へ賣られるのです。あの敵の頭蓋骨で酒盛りをすると云ふ北の夷へ！

韓信　何、あの皇太子となられる方には毒が贈られ、歷とした內親王は——

夫人　（同時に）匈奴へお賣られになるのでムいますつて？　一體何とした事で——

戚夫人　皇后の御氣嫌を陛下がお取りになるためにです！　あゝ妾は何から何と話したらよいか。しかしお二方。妾が貴方々の方の御緣談も知らずに、あの太將と妾の娘との結婚をまとめると云ふ皇后の惡戲をアテにしてゐたと思つては下さらないやうに！　それは只妾を揶揄い旁々、こちらの結婚をぶちこはしにしやうとのたくらみにすぎない事を妾は見拔いてゐましたから。

夫人　おゝ、なんでそんなに迄妾達を怨みに――

戚夫人　（遮切つて）人の幸福と云ふ幸福はきつと呪はずにはゐられない例の御持病をあの方がお起しになるのになんで强ゐてそんな怨みの必要がありませう。こゝへ來て此御家庭の圓滿な幸福さを一眼御覽になれば、充分です。

韓信　自分に無いものを人が持つてゐる事をすなほに祝福出來る者は、男にしても餘程の善人ではあるが。しかし貴女にその話を持ち出すより先きに皇后はどうして此方の話をさぐられたか。

戚夫人　人の身の上の吉い事、凶い事、幸不幸にかけてのあの方の不思議な嗅覺を知つてゐる妾にはそれは些しも不審ではありません。陛下が妾の處に來ておゐでの時は、あの方は遠くでそれをお感じになります。そして御自分では入らつしやらずに、きまつて、誰かしらに何かの用を拵らへさせてはそこへ邪魔しに、さぐりにお遣はしになるんです。

韓信、起つて彼方此方步く。

夫人　でもまさかあの人が叛旗を飜へす事まで皇后は豫め御承知ではなかつたのでせうね。力のあるものには手柄をさせるだけさせておいて、その後で不意にあられもない寃罪を被せて、死刑にすると云ふ毎もの御筆法は、外れるかも知れませんからね。

戚夫人　しかし少くともその寃罪の理由はもう出來てゐます。皇后の有り難いお言葉に背いて、身勝手にこちらのお

娘御と結婚をなさると云ふ事だけでもね。

夫人　あゝ……

成夫人　（つゞけて）恰度妾があの若い女を――妾から陛下を奪ふために御自分がおさしむけになつたあの女を、暗殺しやうとしたと云ふ風にも馬鹿々々しい嫌疑をかけられてゐるやうに……（ヒステリカルに笑ふ）

侍出る。

侍　（書簡を韓信に渡し）御返事を待つております。

韓信　（起つたまゝ讀む）「最後迄親愛なる永久の父君。小生は、出發に際し、閣下と小生との關係の何なるかを何人にも直ちに了解せしむる意味深き御贈品、かの御秘藏の名馬を給はりたる時の閣下の深重なる御配慮を決して仇にせんとする者に非ず。而も今不幸にしてその御配慮に背くが如く見ゆる、此際に止むを得ざる天命的行動に對して、小生は敢て何等の辯明をくり返へす事を爲さざるべく候。一切は運命の悪戯なる强請に過ぎず。陛下は三十萬以上の大軍を率ゐて、目下邯鄲に陣し玉ふ由。あゝ閣下は小生を憫み玉ふや。素より小生はそを千萬覺悟の上にて候へ共、―（數行默讀して後蒼惶に）あゝ、閣下にしてもし後ろより立ち玉はば――必勝萬々疑ひ之れなし――（ぐるぐると紙を卷き、沈痛な面持ちで一點を見凝める。）

夫人　（後ろから取りつくやうにして）あゝ。貴方。覺悟をなさるのは今で厶いますよ！　せめてあの子の事を考へて下さい！

韓信　（呆然と）あゝ俺はどうしたらいゝのか。（急に夫人を振り拂ひ、侍に）使はどこにおるか！　（去る）

侍も去る。

夫人　（立すくんだまゝ）あゝ、今だ。娘の心のわきには蛇の眼が必要だとあの人は云つた。（戚夫人の手をとり）あゝ、貴女。妾に力を添へて下さい！

戚夫人　それは妾の方のお願です。あの方は今でもまだ陛下を信じてゐらつしやるのですか。

夫人　氣の毒なほど苦しむでゐます。それでも昨日あの人から、いゝ軍隊が整つたと云ふ報知が來た時には非常に喜んで、晩には、珍らしく元氣でした。神は神自らの爲めに生きる。俺も、俺自らの爲めに生きるのだ、抔と申しましてね。

戚夫人　おゝ、たのもしい！　あの方が後ろから立ち、そして陳豨殿が前から攻めて挾み討ちにすれば勝つにきまつてゐます。（興奮して）おゝ、きつと／＼勝つにきまつてゐますわ！

夫人　でも貴女はまだ陛下を愛してはゐらつしやるのでせう。

戚夫人　誰が！　人を、すべての人間を、御自分の神壇への生贄の肉としか考えない人を誰が愛さなければならないのです？　御自分の成功と名譽を輔けた功勞者のお后の爲めには、御自分の子を生した妾を捨て、その方の一睨みに實の娘をさへ蠻賊へ人質に送らうとなさる人を！　その功勞者の熱心な力添へも、實を云へば、只御自分自らの虚榮の爲めなればこそであるのに。皇后の愛しておゐでなのは陛下ではなくて、そのお妃であると云ふ名譽そのものですのに！　その虚榮心を充たしてくれる方なればこそ陛下を愛して、輔けてゐらつしたんですのに！

夫人　おゝ、何と云ふ不幸な人達だらう。

韓信自分の書いた書簡を持ち、なほも迷ふやうに、沈んだ樣子で出る。

夫人　何とお書きになつたのです。拜見してはいけませんか。

韓信、椅子にグツタリと凭りかゝつて、無言にて、その書簡を夫人に手渡す。

夫人　（それを見て）あゝ貴方のお字とも思はれないこの亂れ方。それでも貴方はまだ、あゝ――（絶望してくずおれる）

戚夫人　韓信殿。貴方がそんなにまで迷信しておゐでの陛下は、夢のうは言の間に貴方が御自分を殺さうとなさる恐怖をお洩らしになつたのですよ。貴方が今更どんな忠實な態度を陛下にお取りにならうと、兩陛下が貴方を叛軍の黑幕とお認めになる事に微塵の變りもないのですよ！

夫人　あゝ、今貴方がお起ちにならなければ妾達は全滅です。あの人が死ねばあの子は死ぬにきまつてゐます。しかし妾達が生きる事は陛下を殺す事とはきまつてゐません！

戚夫人　（兩方から韓信にとりついて）さうして妾達親子も、救はれるのです！　妾は自分の娘の結婚であの方に復讐しやうとは思いません。けれども意地にも貴方々の方の御結婚丈けはあの方に見せてやらずにはゐられません！

韓信是等の歎願を聞いてゐる間に靜かに書簡をズタ〳〵に引き裂く。

夫人　（その手にとりついて）お願ひです！　お願ひです！　妾達を殺さないで！

戚夫人　起つて下さい！　起つて下さい！　みんなの爲めに！

韓信　（決心の色を滿身に現はして猛然と立ち上る）よろしい。起たう！　わしは起つぞ！

夫人　おゝ、貴方！　起つて下さる！？　起つて下さる！？

戚夫人　有り難ふ！　有り難ふ！

二人の夫人は嬉し泣きに抱き合つて泣く

韓信　おゝわしの内に十年の力が涌き上つたぞ！　天下の蒼生よ、この韓信の下に集れ！　陛下を倒す爲めにではな

い。わが愛する者皆が生きる爲めに、わしは起つのだ！

夫人　（いそ〳〵と硯箱と紙とを持つて來る）では、さア早く、その事をあの人に、一筆でも！

戚夫人　（興奮して段を降り乍ら傍白）あゝ、あの女が手を後ろに縛られて、私達の前へ連れて來られる時、妾はどうしてくれやう！！　あの傲慢な顔に唾を吐きかけて、あの菓子を口に捻じこんでやつたら、あの女は、どんな顔をするだらう！

韓信　他所ではともかく、戰場では陛下はわしの玩具だ。どうか、お怪我のないやうに生捕りにし度いものだ。（紙に何か走り書きをする）

夫人　家來の生捕りになる位なら潔よくお死になるでせう。

戚夫人　まア、あの繪のやうに變通自在な方がですか。大惡漢の盗賊にでも時と場合では、手を合はせて拜む位あの方は平氣でなさりかねません。死ななければならないやうな場合をあの方は決して感じる事の出來ないほど一種の恥知らずなんです。

韓信　では急いで。（と書簡を夫人に渡す。夫人それを持つて急ぎ去る）蕭何が、お留守を預つてゐると云ふ事は、まあ、心丈夫な事に思へる。何と云つても、私を初めて見立てゝ陛下に推薦したのはあの男だつたのですからね。

戚夫人　あゝ、妾には又新しい任務が生じて來ました。夜の白けぬ中に妾は又あの漢宮へ歸つて、どこ迄も猫を被り妾につかへるだけの手をまはして雲行きを覗つてゐませう。さうして貴方への嫌疑が一刻でもおくれるやうに、妾の全力を盡しませう。

韓信　（夫人の手を堅く握つて）私が秘密に檄を飛ばして兵を募るに要る二日間の御辛抱です。天下の榮譽は今わしの

上に向いてゐますから、その間にわしは、容易く十萬の精兵を集め得る自信がある。私が兵を擧げたら、貴女はすぐそこへ逃れて來さへすればいゝ。

戚夫人　有り難ふ。それでは。

韓信と戚夫人、退場する。

沛娘出る。

沛娘　あゝ、もう遲い、遲い。妾にはとてもそんな望みをアテにする事は出來ない。（くずれるやうに椅子に凭れて月を見る）

雁の啼き聲がする。

沛娘　あゝあの雁の聲の哀しい事。あれでも希望を感じてゐるのかしら。南の方へ飛んで行く。あの方の方へ行くのだわ。

夫人、一人出る。

夫人　まア、お前。妾はお前の喜ぶ顏を見度いと思つてさがしてゐたのに、どうしてそんな處に、一人で――お前は何もかも聞いてゐたでせうに。

沛娘　お母樣。妾もう知つてますわ。妾達は――もう會ふ事は出來ないのです。二度と、此の世で、あの方のお顏を見る事は、もう出來ないのです。どんな事しても！　阿母樣。妾もうちやんとそれを――知つてますのよ！

から云つて、彼女は母の胸に顏をうづめ、おいおい聲を放つて號哭する。

再び雁の聲聞こえて、月光皎々と二人を照らす。

幕

第三場　同じ場面

此間なるべくダアクチエンジにて前場につゞく。暴風雨の深夜。

謝公者一人出る。

酒徳利を提げ、泥酔してゐる。

暗くて誰だか分らないが、稲妻が時々その姿を照らす。

謝公者　（蹣跚として。歌ふ）

會いてえ者とは別れにやならず

好かねえ者とは會つてにやならず

それがいやでもうき世も去れず、と

こちらさのさと來た

せめて酒でものんでませうだい

（と徳利の口から飲む）

おらはおめえに惚れてるよ
悋氣の强えは十々承知で
いやならよしやがれよしべの子んなれ
おらはおめえが嫌えだよ
萬兩くれたら知らぬこと
いやならよしやがれよしべの子んなれ
こらさのさと來た
せめて酒でも飲んでませうだい

又酒を飲む。

韓信夫妻、寢着の姿にて出る。
夫人は燈火を持つて出る。

謝公著　や、これは〱檀那樣。奥方樣。御免下せえまし。わつちは決して、怪しいもんではごさらつしやりません。何をかくさう。あの馬丁(べつとう)の、謝公著と申しまするものに他なりません。

夫人　何を云つてるんだ。謝公著。お前、あの使と一緒に、陣處へ行つたんではないのかい。

謝公著　陣處へ。へえ、行つて參りましたよ。行つたつて事を、手前かくしや致しません。あのお使い衆が連れてつてやるつてえからつれてつてもらつたんで。尤もわつちはあそこに一寸會い度えものがおりますだ。會い度えものつたつて、人間ぢやごさらねえ、四つ足の毛物で、龍車さんて云ひますだ。わつちはあの戀しい奴の面ア一寸見てやりてえ

と思つてね。するとどうでげせう。奥方樣、可愛いもんぢやムえませんか。あの野郎、まだよう〳〵わつちの香いを憶えてゝ、ヒン〳〵啼きやがる。躍りやがる。とう〳〵あの亂暴な情人（いろ）奴。わつちのこゝん處へ喰らいつきやがりましてね。とんだ怪我アしちめえましただ。（と、笑い乍ら腕をまくつてアザを見せる）

韓信　そして、お前はそこから、まつすぐに歸つて來たのか。

謝公著　（おのゝく）へ、へ。檀那樣。それやもう一分も曲らねえ桁のやうにまつすぐに歸つて參りましたんで。

韓信　只居酒屋に寄つただけか。

謝公著　へ、へ、そのちよつくら。どうもわるい飲み仲間につかまつちめえまして、いやだつてえのを多勢に無理に引つ張り込まれて、口から捻ぢ込むやうに酒をつぎこまれちまつたでムえますよ。いや、どうもこんなひでえめに逢つた事は、度々あつた事で、又あらしてえ事で——

韓信　（夫人に）こいつは醉つて、何を喋舌つたかわからない。

夫人　本當に。でもまさかこんな者にあの使ひは何ももらしはしますまい。

韓信　分るものか。（謝公著をこづいて）こら、貴樣はそこで何を云つたか、とても憶えてはゐまいな！

謝公著　（びつくりして）へえ？　わつちが何を云つたかつて、と、で、飛んでもねえ。わつちは何も、そんな、云つてならねえ事はしやべりなんぞは致しません。わつちは生れつき無口な忠義もんで、大事な秘密なんぞ、百兩貰つたつて、これんばかりも口から洩らすなんて氣遣えは——（こくりと居眠りをしかける）

此時、謝公著の女房半身を窓に現はし、中をのぞく。

韓信　てつきり、こ奴は喋舌つたにちがいない！

夫人　おゝ、もしさうだつたら、――

謝公著　(居睡りし乍ら)萬兩くれたら知らんことだ。(ごろりと横になる)

韓信　あゝどうしてくれやう！　こ奴を生かしておく事は出來ぬわい！　(劍をとつて拔きかける)

夫人　(それを止めて)まア、そんな手荒な事を！　貴方にもお似合にならない。これを殺したつて何になりませう！なほ人に疑ひを起こさせるだけの事ではありませんか。又もしこれが喋舌つて了つたものなら、殺した處で追つきはしませんわ

韓信　(なるほどと一寸テレて)まあ、そんな事は大抵、あるまいとは思ふが――

夫人　きつと只妾達の疑心暗鬼だと思ひますわ。心配の餘りの。それにこんな醉つぱらいを檢べたつて何にもなりやしません。明日でもこれの正氣の時に、妾が何氣なく上手に聞き出して見るとして、まア、今夜はお休みになさいましよ。

韓信　(なほ不機嫌に)あゝ、何と云ふいやな晩だ。陛下の夢におこされて見ると、こ奴の聲が聞こえる。あのいやな夢のせいだつたのかも知れん。(去る)

夫人も去る

謝公著　(急に)ア痛た、た、た、た！　命だけは、命だけは！

謝公著の女房そこへ來て彼をゆり起こす。

女房　お前さん！　お前さん！　お起きよ！

謝公著　(眼をさます)あゝ、おらア死んだんぢやねえのか！　(溜息を吐いて)あゝ有り難え！　おらア生きてる！

女房　だけど死ぬかも知れないよ。殺されるかも知れないよ。

謝公著　おどかすねえ。馬鹿野郎。おらアもうへえ、すつかり醉がさめちやつたぞ。

女房　だけど、お前さんは、今此處で、檀那様と奥様がお前さんを殺すの殺さないのつて、恐ろしい相談をしてらしつたのを知らないだらう！

謝公著　何だと？　ぢや、お前、おらと一緒の夢を見てたんか。

女房　夢なもんか。本當だよ！　お馬鹿さん。お前さんがあの居酒屋で飲んだ時に、お前さんはきつとこゝの檀那様の大事な秘密を皆にぶちまけちまつたんだらうつてぷんぷんださ。

謝公著　大事な秘密たア何のこつた。

女房　（小聲で）いづれあの謀叛人のお聟さんとぐるになつて——ふんだくらうつて陰謀だらうぢやないか。だつて今時さうでもなけれや、それを喋舌つたお前さんを殺さうつてほどの大變な秘密があるわけはないぢやないか！

謝公著　おらアそんな事アさつぱり知らねえや。しや、しやべつた覺えもねえ。

女房　だけど、お前さんはその覺へのない證據を人に見せる事が出來るかい。出來なけれや殺されるんだよ、

謝公著　馬鹿野郎。そんな無理な話があるもんか。死ぬのは夢でも懲り〴〵だ。

女房　それなら逃げるよりないよ。妾と一緒に。

謝公著　逃げるつて、どこへよ。

女房　都へさ。お上へさ。

謝公著　何、お上へだと！　手前いよ〳〵氣がふれたな。

女房　ふれてもふれなくつても他へ行きやつかまるよ。つかまらない迄もうだつの上らない事は今迄以上だよ。だけど皇后樣ん處へ、訴へて出れや、御褒美にありつかうつてものさ！

謝公著　（流石にムキになつて）訴へるつて、何を訴へるつてんだ！

女房　お前さん、意氣地なしだからね。妾にお任せ。だけどお前さんだつてむざ〳〵獄門のお作をするのはいやだらう。

謝公著　手前、いよ〳〵此親船を見限るつもりだな！

女房　當り前さ。妾達は生きる方につく勇氣が大事だよ。さア、蹤いて來なけれやおいてくよ。

女房去る。

謝公著　やい、待て！　婆奴！　おらアどうも氣がさすぜ！

と後からついて去る

幕

第四場　大詰

未央宮の中の大廣間

正面に玉座。その前に左右の幕。侍數人

侍甲　よくも陳豨に似た首があればあつたもんだな。
侍乙　又よくもみんなだまされもだまされたもんだな。
侍丙　獄門の前は人の黒山だ。それが誰一人の泥棒の贋せ首だと思ふ者がない。
侍丁　尤も七年も前に牢にぶちこまれて、今ぢやあんな泥棒のゐた事なんぞ忘れてない者はないんだからな。だまされるのが當り前と云へば當り前だ。
侍甲　それに死ぬと面相が變ると云ふから、ごまかしも利かアね。（向ふを見て）はア。又あの宰相さん、二人の女の板狹みになつて、ギユウヽヽヽ脊を搾られてるぜ。
侍乙　二た股膏藥奴。さア、旗を立てに行かう。

皆去る。
戚夫人と蕭何出る。

戚夫人　（氣が氣でない樣子）妾は街も帝國の宰相であるあなたの名譽にかけて、訊くんです。妾があれ程頼んだ使を、あなたは確かに立たしてくれたでせうね！
蕭何　（苦し氣にしかし曖昧に）は、はい。あんな使は——强ゐてわざく、立てなくとも、韓信は參りや致しますまいが。
戚夫人　來たらどうします！　妾はそんな事を訊いてやしない。使を立てたかと訊いてゐるんですよ！
蕭何　た、たてました。

戚夫人 （傍白）あゝあの人はどうしてこんないゝ加減な男を信用したんだらう。（蕭何に强く）きつとですか！

蕭何 （正面を遠く指さして）そ、それ、あの森の手前に左手に、硫黄の煙のやうに黃塵を捲いて、一騎飛んで行くのが見へませう。

戚夫人 ど、どれ、どこに！（と首を延ばして見る）あれ？ まア、まだ、あんな處に！

蕭何 いゝえ、あれではムいません。あれです。ほれ、もう一つ先きの森の……

戚夫人 あゝ、あれがもしさうなら、あの使よ。昔女媧氏の乘つた子車と豐車のやうに速く速く飛んで行つておくれ！ 妾は拜む。（手を合はせる）お前が一足おくれたら——あゝ、妾はそれより先きに、（と懐劍を出し）これをつかふだけだ。（去る）

蕭何 ところがあの使は、邯鄲の陛下へ此顚末を豫め知らせに行くにすぎぬ。第二の報知が、餘りにだしぬけな驚かしにならぬやうに。尤もあの陛下はその時も大して、ひどくはお嘆きにはなさるまいが。（去る）

又別の侍三人出る。

侍一 叛逆者陳豨は討たれて、芽出度く陛下は御凱旋、剩へ皇后の御誕辰節とかち重なつてお布令を出されちや、凡そ此大漢帝國の支配に屬する諸侯と云ふ諸侯でまア參内を怠る者はあるまいな。

侍二 ところが問題の淮陰侯だけは來るか來ねえか、と云ふんで、彼方でも此方でも賭をやつてゐる。と云ふなア、何しろ、來なけれやムキ出しに角が立つ。たとへ、皇后の御誕辰節と云ふ事だけを抜かしちや、皆嘘つぱちの布令だと云ふ事は分つてゝもな。

侍三 阿呆野郎。なんぼ角が立つたつて、來れやゝられるにきまつてる處へ、のめ〳〵出かけて來る唐變木がある

侍一　ぢや賭をしやう。お前は來ねえつてんだな。
侍三　來ねえどころか、あべこべに後ろへ向いて進んでるだらよ。南の方へな。
侍二　ところが、奴さん、來るて。
侍三　よし來た。ぢや一兩宛だ。（金を出す）いづれお前なんぞは此處と、淮陰の間に許り連絡つてものがあると思つてやがるんだらうからな。
侍二　さうよ。（手を出す）なぜかつてえと、淮陰と戰地との間の連絡はもう一昨日からぱつたり斷たれちまつてるんだからな。
侍三　なに、斷たれてる？
侍一　それはまつ先きに先づ斷たれちまつたんだ。だから陳豨は自分がまだピン／＼してる事をあの後ろ楯に知らせる事が出來ねえんだ。
侍二　さうして韓信は自分のおそろしい秘密がもう此方に握られたつて事をまだ知つてる筈はねえて。
侍一　何より賴みな陳將軍が討死しちまつたとして見れや、元來忠義者のあの大將がいくら豪傑でも自分一人で打つて出る氣はあるめえ。いかに百戰百勝の名將たりと雖も、軍勢無しの素手ぢや木から落ちた猿も同然──
侍二　として見れや、まだ秘密が露見しねえと思つてゐる今の中に、白ばつくれて、泣く／＼此方へ、妥協して來るのが唯一の道だ。──さア、一兩貰つとくか。（手を出す）
侍三　まだ早えやい！　お前達、人間にや蟲の知らせてものがあるのを知らねえんか。豚だつて屠殺場へ曳つ張られ

る時には前脚を突つ張つて首を振らア。

侍一　違えねえ！　あの大將は豚のやうに四つん匍ひで歩いた事もあるんだからな。

侍二　はつは。どうだ見ろ。來たぞ〳〵！　あの西の駱駝のやうな格恰をした雲の股ぐらん處に、ヒラ〳〵する紫の旗の一群は韓侯の連中だらうぜ。

侍三　ぢやあの東の方から來る樺色の旗は齊の小猿共だな。

侍一　南に見へる綠なのは楚の水牛共か。

侍三　馬鹿。あれや、芋畑だ。さア、見物旁々出迎えに出やう。（去る）

侍二　おい〳〵、ごまかしちやいけねえぜ。一兩ごまかしちやア。

皆々去る。

と一人の役人に謝公著がグイ〳〵引張られて出る。

謝公著　お役人の方、どうぞそれだけは御勘辯を願いてえもんで。わつちはまつたく、そのこんなおつそろしい冥加のつきた事をしでかさうなんて、そんな太え肚ぢやございません。まつたく、只あのわる女奴にさそはれたんで——

役人　え丶かれこれぬかすな！　何をしろつてんでもねえ。只此處にかくれてゐて、合圖の時にあの主人にその面を見せさへすれやい丶んだ。

謝公著　その面ア見せるつてえのがわつちにやたまらねえんで！　あの鬼婆奴！　どうぞわつちの代りにあの婆奴をお會はせなすつて！

役人　そんな事を俺は云いつかつておらんよ！　いやなら眼でもつぶつてゐろ！（彼を森の裏に突き飛ばし去る）

謝公謝（森の中で）あゝおんな方まで殺されるやうな世の中ぢやア生きてるがものもねえ。いやだ〳〵。

蕭何（一人出る）あゝ世にもいやな女位いやな、恐ろしい女ほど恐ろしい者があらうかい。そのいやな恐ろしい女の手先きに黙した良心に苛まれ乍ら已れを瞞まし〳〵使はれる俺は又何と見下げ果てた腐れ犬か。――あゝ俺を見離した天よ。どうかあの善人を守つてくれ。あの男の來るのをとめてくれ。（森の奥をのぞいて）呪はれた馬丁奴。貴樣の主人に合はす顔のないのは貴樣許りではないわい。

呂后出る。

呂后　お歴々達はそろ〳〵集まつては來た。が、肝心の鳥がかゝるかどうか、妾はまだ安心が出來ない。

蕭何（敬禮して）間違いなく來ると存じます。しかし（階下を見降ろして）まだ楚使の旗が見へません。

呂后　それは何の事かい。

蕭何　私は、こちらから直接に淮陰へ使を立てゝは臭いが眼立つと思ひ、此都から一番遠方で、從つて天下の形勢に一番疎い楚侯に韓信を誘つて來るやうにそれとなく言づけてやりました。

呂后（滿足氣に）それはよかつた。

侍出る。

侍　楚侯と、淮陰侯とを除いて、最早全部お集まりになりました。

呂后　謁見の時は呼ぶから、待たせておゝき。

侍去る。

呂后　あの鷹揚な男をおびき出すのは譯はないが、きつとあの疑い深い女房が感づいてあれの出發をたつて止めるに

ちがひない。その時は第二の手段を取る丈けの話だが。

蕭何　それには及びますまい。止めるには止めても、それは結局行かない方がいゝと思ふが、と云ふ丈けの事で、行つてはならぬと斷然止めきる事は出來ますまい。彼等にまだ希望があればでムいますが、すつかり裏口を閉まれてると思ふ者は、何氣ない顏をしてわざと正門から正々堂々と出かけて見せるものでムいます。

呂后　その捕つ手の頭は陛下で捕つ手には親友のお前がゐる事をあの正直者はまだ賴みに思つてゐやうからね！

蕭何、苦し氣に横を向く。

呂后　それにあれ達は妾達があの家へ行つてやつたその禮にもまだ來てはゐないのだ。

蕭何　（汗を拭き乍ら）案外あの男は無造作に出て來やうかとも存じます。大體彼は只あの娘への情に牽かれて止むを得ず本心に背いて　羽の味方になつた者に過ぎません。それが失敗だと知つては一方、苦しい良心の重荷を卸したやうなすが〳〵しい氣分になつて、却つて今迄にも增した忠誠を陛下に示さうと云ふ態度に出やうかと思はれます。

呂后　陛下はお喜びになるだらう。親木が斃れゝば、あの寄生木は絕望丈けでゞも自然枯れ死なうと云ふもんだから（蕭何に）用意は出來てゐやうね！

蕭何　（奧に向つて手を擧げる）

十數名の武士手に手に槍をもつて出る。

蕭何　（額に手をあてる、あゝ、眼まいがする。

呂后　さア、早く！

蕭何　（武士等に後ろを向いたまゝ）二た手に分れて、――あの幕の裏へ。

武士が二た手に分れて左右の森の蔭にかくれる。

呂后　それでよろしい。合圖は妾がする

侍　（出る）淮陰侯韓信殿がお着で厶います

蕭何　あゝ！

呂后　ではすぐ、謁見を！

侍　（禮して去りかける）

呂后　それから序でにあの女を、戚を呼んでくるのだ。見せるものがあるからと云つて。

侍去る。

蕭何　韓信よ。ゆるしてくれ！　わしは君を殺したくはないのだが、君を庇つて、共に斃れになる事を――あゝ、わしはもうこゝにはおれない。（よろ／＼と去る）

呂后　（その後ろを見送つて）意氣地なし奴が。今度はお前の番だ。（正面の王座につく）

韓信、大殿に出る。

韓信　（呂后を見る。蒼然として四邊を見廻はす）　陛下は。蕭何は。

呂后　お前の二人の親友はこゝにはゐない。

韓信　（立ちすくむ）お、……。

呂后　しかし、お前に會はせる者がこゝにゐる。こつ方へお進み、

韓信躊躇しつゝ二三歩前へ出る。

呂后　(わきに向つて)その下男を曳き出してお見せ。

謝公著　(韓信の足に平伏して)あ　檀那様。ゆるして下せえ。わつちは……(泣く)

韓信　(おどろく)おゝ、貴様は謝公著！　(絶望的に拳を振る)あゝ、天よ！　わしを見捨てたのか！

此時呂后、眼くばせすると同時に左右から一時に十數本の槍が突き出て韓信を突く。戚夫人の悲鳴聞こゆ。韓信、バッタリと俯向きに倒れ、死す。

呂后　(起ち上り)見捨てたのだ！　あゝ天よ。はゝゝゝ！　(狂ふ如く打ち笑ふ。)

幕　(完)

一九二三八月五日

殘された夫

正宗白鳥

退屈したので書物を抛出して首を持上げると、隣家の子供が祖母から握り飯を貰つてムシヤ〳〵食べてゐるのが見えた。父親は風呂の水を汲込んでゐた。母親は麥を干したあとの莚を棒切で叩いては物置小屋へ收めてゐた。祖父は肩に補綴の當つた勞働服を着て肥料を運んでゐた

「そんな汚ねえところに蹲んでどうするだよ。衣服の裾が汚れてしまふでねえかよ」母親は子供の襟元を邪慳らしく攫んで立上らせて、「手についた御飯粒は早く鳥に食べさせな」と云ふと、子供は鳥小屋の側へ寄つて、手の平を押付けた。鷄は嘴を突出して一粒々々奇麗に平らげた。

祖母の脊で眠つてゐた小さな女の子が泣出したので、母親は埃で汚れた襟をひらいて、その子に乳房を與へた。顏は赭く日に燒けて、手はゴツ〳〵と堅くなつてゐる母親も、乳房は白くて、健かにふつくらしてゐた。おれは母親にかい抱かれた女の子が、可愛らしい指先でその乳房を弄びながら吸つてゐるのを見てゐると、堪へがたい

暗い氣持に襲はれた。いつも隣りの庭に現はれる一家團欒の平和な光景が、今日は妬ましいくらゐに羨ましく思はれた。

おれは首をすつ込めて横になつて、無念無想を志したが、今見た乳房が目の先にちらついて、いやな追憶がムカ〳〵と胸に込上つて爲様がない。弟の信三が海水から歸つて來たら、甘い物でも買ひにやつてお茶を入れて、兄弟二人で影の薄い團欒の樂みの眞似でもして、いくらか心を慰めるのだが、信三もおれの側にゐるのが面白くないためか、今日も歸りが遲い。元氣のない顏をして、海ばたの賑はひをボンヤリ見てゐるのであらう。

おれは信三の顏を思出してゐると、自分の顏を見てゐるやうだ。おれとは十歲以上も年齡が違つてゐるのに、彼れには青春の力が何處にも宿つてゐない。彼れの顏は生れながらに虐げられてゐるやうな顏だ。おれはあの二つの亡骸どもに夜となく晝なく虐げられたゝめにこんなみぢめな御面相になつたのだが、信三は天然自然にあゝいふ風に育つて來たのだ。造物主といふものがあるのなら、不公平にも信三には世間並みの惠みをさへ與へなかつたのだ。おれは信三の顏を自分の顏として思浮べてゐると、先日海の中でふと念頭に浮んだ恐ろしい考へ――それを恐ろしいと云ふのは世間並みの言艸で、おれには安んじて決行されさうな考へ――が再び浮上つた。

信三の手を執つて泳がせながら、海の底へ引摺込んで、たつた一人の肉親とゝもにおれの命を絕つことなのだ。弟を殘しておれだけが死んだなら、弟は獨りでこの苦しい世の中を人並みに渡つて行かれはしないに極つてゐる。生れながらに心身ともに弱々しい彼れが、おれのやうなむごい目に會つたならんどんなになるだらうかと想像すると、まだ女といふ女に少しの掛り合ひも出來ないうちに、童貞のまゝで死なせた方が、彼れに取つて却つて幸福なやうに思はれてならない。……出來ることなら、太平洋か何處かの遠い所で沈んで、鱶か何かの餌食になつて、醜骸を人目に曝したくな

いものだが、弟を連れてノコ〳〵と遠方へ死にゝ出掛けるやうな悠然たる自滅手段はおれには實現し得られさうではない。咄嗟にやるより方はないのだ。

で、おれは仰向けに寢ころんだまゝ、自分だち兄弟が、ここの濱で溺死したあとの有様を想像したが、さういふ想像には身が入らなくつて、かの二人の亡靈が緋縮緬の扱帶(しごき)で胴體を縛合せて、××の濱で溺死した知らせを聞いた時分の氣持が、またもおれの心を浸しだした。

おれが獨りで死ぬにもせよ、信三を連れて死ぬにもせよ、强いて入水を選ばなくつても、毒藥でも刄物でも、命を絶つ手段は外にいくらもある譯なのに、おれの死骸の棄て場は水の中といふことに、運命の神に極められてゐるやうに、心がそつちへ向つて行くので氣味が惡いが、あの二人の奴、おれを海へ招いてゐやあがるのだな。おれを虐げた二人の死樣(しざま)の眞似をするのは恥の上塗りだと、おれは千も萬も承知してゐながら、おれは刄物ではどうしても死ぬ氣になれない。毒藥もいやだ、縊死は考へても身ぶるひがされる。首くゝりは考へたゞけでもゾッとする。それで、水の中なら安んじて死ねさうに思はれてならない……あの二つの亡靈がおれの魂を摑んで、そつちへ引摺つて行かうとしてゐるのだ。

おれは二人の死場所へは行かなかつた。知らせを聞くと、直ぐに飛んで行つて、彼等の最後のザマを見たくつて溜らなかつたのだが、齒を喰ひしばつて我慢した。おれに代つて行つて跡仕末をつけて吳れたKは、おれに遠慮して、露骨に有りのまゝに二人の樣子を話しては吳れなかつたし、おれの方でも聞きづらかつたので押して聞かうとはしなかつたのだが、その時おれは自分で行つて見たやうに、實際の光景がハッキリ分つてゐると思つた。相川――その名を思つてもおれの心臟は鼓動する――の奴は息をひいたあとまでも、邪惡な面(つら)に勝誇つた色を現はしてゐたのに違ひない。土左

衛門の水膨れで、生前の正體とは相好が變つてゐたにしろ、檢死の役人の目にはどう見えようとも、あの男の勝誇つた色はおれにだけは明らかに感ぜられるのだ。すでに二た月の月日が過ぎてゐるのに、あの男は毎日々々勝誇つた面をおれの前へ突付けるではないか。そして、よし子の顏は影の形に添ふ如くに、彼れと一しよにおれの前へ現はれるのだ。かつては戯れにおれの胴へ捲きつけたことのある肌觸りのいゝ緋縮緬の扱帶で、二人は腹と腹とを縮合せて、おれの前へ二つの面を突付けるのだ。よし子は最早おれの前へ彼女一人では顏も姿も現はさなくなつてしまつた。五年以前、若葉の蔭ではじめて彼女の手を執つて、彼女の温い頬へわが温い頬を觸れた懐かしいあの時を思出さうとしても、今はその若葉の蔭にあの男が目を据えてゐて、おれに思出の自由をさへ許さなくなつてゐる。よし子は過去にも現在にも未來にも、おれを離れたのだ。

あの時おれが××の濱へ行つて彼等の死態を見たならば、おれは見つかり次第の石を取つて、彼れの面をも肢體をも打碎いたかも知れなかつた。……いや、そんなことはようすまい。その場に臨んだら青い顏をして震えて、卒倒でもしたであらうと、おれを嗤つて呉れるな。おれは空想のうちでども、彼れの面を打つてゐなければ腹が癒えないのだ。自分の女房を人に取られても平氣で、たやすく諦めてゐられる男は、おれの未練を嗤へ、おれの腑甲斐なさを嘲けれよ、そんな經驗がありもしないで、いけしやあ〳〵とおれを愚弄の標本として井戸傍會議の口を利いてゐる奴があると思ふと、おれは業が煮える。おれに造物主のやうな力があつたなら、公平に男といふ男みんなに妻に裏切られる苦しみを味はせてやるのだと、おれは何度思つたことか。

唯一人の親友であつたKは、おれを慰めるつもりで、頻りにあの男の不徳を責めたり、時代の惡傾向を罵つて淫蕩な思潮にかぶれた女としてよし子を非難したりしたが、それがおれに取つて何の慰めにならうぞ。親友のKでさへ口では

あの男を罵つてゐても、心ではおれを腑甲斐ない間拔けな男としてゐることは、彼れの目付を見てもおれには察せられる。……自分の女房を取られた間拔けな男がそこを歩いてゐると、すべての人が侮蔑した目を此方へ向けてゐるやうに、おれは東京の町を歩いてゐる間につねに感じてゐた。それはまだしもおれには忍び得られた。が、Kが旅館で見つけて持つて來た二人の遺書の文句は、おれに取つては永遠に救はれない呪ひの聲だ。

「二人とも死ぬる間際には良心に責められたのだね。君にすまないと思つたのだ」と、Kは遺書を讀んでおれを慰めるつもりで云つた。

「さうだらうね」と、おれは事もなげに答へたが、おれにはこの遺書が憎い。柔しさうな文字の羅列が、おれの胸に向けられた鎗の穗先のやうに感ぜられる。お前に謝罪する。お前にすまない。二人はお前のために泣いた。お前に氣の毒だ。お前が不憫だ。これもお互ひの運命だから諦めろ。……

おれは彼等が最後に汲みかはした色氣に一層濃い味はひをつけるための藥味になつたやうなものだ。おれは敵役にされないで、最後まで道化師にされてしまつた。彼奴はなぜおれを憎んでくれないのか。腹の底でも上べでも口でも筆でも、なぜおれを極度まで憎んでくれないのだ。おれの寶を奪ひながら、お前には氣の毒だと、おれの方を見てニヤ〱と笑つてゐる彼奴の目付を見てゐると、おれはゐても立つてもゐられない。

その目付だ。よし子の心を捉へたのは。あゝいふ目付が柔しくつて愛に滿ちてゐると云はれて婦女子に好かれるのなら、おれは生れながらに女に背かれるやうな不運な眼をもたされてゐるのだ。……おれ自身でさへ、はじめてあの男に會つた時には、その目で見られてゐるのが快く感ぜられた

「あたしあなたに死なれて獨りぼつちになつたら、どうして生きて行かれるか、心配でならないわ。」

「おれはまだ歳は若いし、不治の病にも罹つてやしないぢやないか。これから十年も二十年も眞面目に稼いだら、おれだつて相當の資産はつくれないことはないのだから、お前が老後に路頭に迷ふやうな氣遣ひは決してないんだよ。用心のためにそのうち生命保險を掛けて置かうか」

「保險なんていやなこと。お金が欲しさにあなたの命を賭けるなんて、あたし思つてもゾッとするわ」

「ぢや養老保險にでも入つて置かうか、お互ひに歳を取つてから樂隱居が出來るやうに」

「でも、あなたも三十になるやならずで、お爺さんじみた意見を起すやうぢやいけないわね。若いうちに貯金だの保險だのと、ケチ／＼したこと考へるやうぢや、人間はいぢけてしまつて、エラクはなれないのよ」

「さうだとも。先のことばかり考へてちや果てしがないからね。今日は今日だ。久振りに竹葉へでも行つて鰻を食べて來ようか」

「御馳走樣」

おれはよし子とこんな事を話合つていゝ氣になつてゐた。信三を留守番にして、夫婦で鰻屋や洋食屋や鳥屋などへ口腹の慾を充たしによく出掛けた。時々は二人連れで三越や白木へも出掛けた。おれの着物は買はなくつてもよし子のは季節々々に何かしら新調してやつてゐた。日常夫として妻に對して當然爲すべきことをしてゐるつもりでゐた。

女はいゝ衣服を着てゐるのが何よりも樂みなのだと、世間の人が云つてゐるし、おれもさう思つてゐたのだが、よし子の奴、長い年月の間におれの勤勞のお蔭で一枚々々つくり溜めて、二棹もの箪笥に一杯にしてゐた衣服をそつくり殘したまゝ、未練氣もなく死んでしまつた。あれほど好きだつた衣服よりもあの男の方が價値があつたのか。「あなたに拵へて頂いたものはあなたに返します」と、それでおれに一生の債務を果したやうによし子は云つてゐたが、あいつ衣服

を脱棄てて裸身であの男の所へ驅けて行つた。髮の毛から足の爪先まで、脊の黒子の數までもおれには知れてゐるよし子の裸身を、おれはあの男の手から離しては思出せなくなつてしまつた。よし子の身體とあの男の身體とは、地球が滅亡したあとまでも、宇宙の何處かに相擁して佇んでゐるやうに思はれてならない。たとへおれが死んでも、あいつらは魂とともに身體をもあのまゝに保つてゐて、おれを見下して憐んで、おれの死體を蛇の死骸のやうに卑しんで、自分たちの勝利を誇るのだらう。

「恥ぢて死んだのだ、許してやれ」誰れかゞさう云つたが、他人には本當のことが分らないから、そんな呑氣なことが云つてゐられるのだ。あの二人は入水してこの世の息を絶つたあとの今日でも、在りし昔の姿をそのまゝに生きてゐるのぢやないか。瓦斯のやうな靈魂がフワ／＼と漂つてゐるだけぢやない。……彼等が過去に無道な戀を樂んでゐたのを、おれは思出して怒つたり恨んだりしてゐるだけではないのだ。今日も明日も、未來永遠に、よし子の肉體はあの男の——相川の——胸に抱かれてゐるのが分つてゐるから、おれは苦しい。おれは口惜しい。……幼いをりに見て、あまりに陰慘だつたので腦裡に深く刻まれて今も覺えてる草艸紙のある挿繪に、獰猛な惡漢が白刄を疊へ突立てゝ威嚇して、美女を引寄せて酒の酌をさせてゐる所が描かれてあつたが、縁先には美女の夫らしい男が縛られながら苦澁な相好をして座敷の方を見上げてゐた。おれは現在の自分の心があの繪やうに思はれてならない。しかも、繪の中の美女は心ならずも惡漢の命に從つてゐるのであらうが、よし子はさうではない。おれは二人によつて縛られてゐるのだ。おれは縛られながら、二人の酒盛りを夜は夢に見、晝はまぼろしに見てゐなければならないのだ。

肉體を具へた二つの亡靈に、今——七月十日の日の暮れ前——も襲はれてゐるところへ、信三が前觸れの足音をさせないで、だしぬけに庭から上つて來ておれの前に姿を現はした。

「今まで海に入つてゐたのかい」と訊ねると、

「いや、濱で久田に會つたから、××軒へ寄つて今まで話をしてたのだ。久田は一週間も前から此方へ來てゐるんださうだよ」と云つて、信三は臺所へ出て頭を洗つたり身體を拭いたりした。それで、おれの方から、「何故久田を家へ連れて來なかつたのか」と訊ねても、おれの聲が聞えなかつたか、それとも返事をしたくなかつたのか、何とも答へなかつた。多分おれが知人に會ふのをいやがつてゐるだらうと、おれに遠慮をして、彼れの親友をも此家へ誘はなかつたのだらうと、おれは推察したので、重ねて同じ事を問掛けようとはしなかつた。

信三は他の事にはボンヤリの方なのだが、おれの身については、神經が鋭敏で、おれの一擧一動に絶えず注意してゐて、おれが腹の底でひそかに思つてゐることさへも、どうかすると見破つてゐるやうだから油斷がならない。

生溫い麥湯を飲みながら、久田のことを話題にしてゐると、信三は

「久田は此處にゐる間に富士へ登ると云つて、僕に一しよに行かないかと勸めてゐたが、どうしようかな」と云つて、おれの贊否を糺した。

「富士登山は苦しいだらう。お前のやうな弱い身體で久田に隨いて行けるかしら」

「だつて、この頃は女でさへ登るんだからな」

「女が男よりも弱いとは限らないよ。お前よりも強い女はいくらでもあるよ。」

「富士へ登つたつて生命に懸るやうなことはあるまい」

「しかし危險に近づかない方がいゝよ。若しも山へ登りたけりや、箱根か大山へでも登つて來るさ」

おれは信三の身を氣遣つて冒險を許さなかつた。唯一人の弟を死出の道連れとして海の底へ引摺込まうとする暗い空

想は抱いてゐても、彼れを友人に托して山の上で身を傷つけさせたくなかつた。彼れもおれに逆らつてまで富士登山を決行しようとはしなかつた。

「近いうちに、日歸りで箱根へ遊びに行かうぢやないか。」と、おれは弟の機嫌を取らうとして云つた。

「あゝ。箱根なら湖水まで行つて見たいな。僕はこんな荒い海よりは靜かな湖水が好きなんだ」

「おれもさうだよ」

兄弟は山上の湖水の美しさを想像して話合つたが、信三は東北や北海道の湖水を數上げ、支那の洞庭湖とか瑞西の湖水など、遠い所のものをも憧憬してゐた、

「海岸は汐くさいし、砂が火照つて暑くるしいね。汐に燒けた身體を見てると、僕は醜い感じがするよ。」

「丈夫さうでいゝぢやないか。お前も早く汐に燒けて眞黑になるといゝ。お前の身體を強くするために海岸へ來たのだから」

「僕は避暑に出るのなら山の方がよかつたのだが、兄さんがはじめから海に極めてるやうだつたから反對をしなかつたのだ。」

「なに。おれは海でも山でもどちらでもよかつたのさ。お前の健康には海水浴がいゝと思つてさう云つたのぢやないか。お前が山へ轉地したかつたのなら、此處へ來る前に早くさう云へばよかつたのに。可笑しな奴だな」

おれは弟の愚かな遠慮をムキになつて非難したが、おれ自身でさへ氣づかないおれの心の中を弟に見られてゐるやうで後目たかつた。信三は默つてしまつた。そして、おれに背を向けて彼れの机の側へ寄つて、毎日つけてゐる日記をつけだした。弟が口を噤むとおれは、首を持上げて隣家の庭を見やつたが、そこには湯から出て來た主人が、裸體のまゝ

垣根越しに隣りの人と今日の晴をいつてゐた。

「信三」とおれはふと呼掛けて、「今度久田に會つたら連れて來いよ。一度御馳走してやらう」と云ふと、

「うん」と、信三は云つたが、「一度呼ぶと、しよつ中やつて來て煩いだらう。」

「おれが煩がるだらうと思つてるのかい」

「いや、僕も久田にたび〳〵やつて來られても困るんだ。勉強の邪魔になるから」

「ろくに勉強もしてゐないのに」

「だつて、此處にゐる間は成べく知つた人と交際しない方がいゝだらう。僕等が此家にゐることを人に知られちやよくないからね」

信三は唯一人の兄の汚辱を自分の身に染みて感じてゐて、そのために世間の狹い思ひをしてゐるらしいのだが、彼れがあの事件の記憶から早く超然として呉れないのが、おれにはもどかしかつた。傍にゐる信三の目がよし子やあの男の亡骸を見てゐるのだと思ふと、おれの目に映つる二つの影が一層濃くなるのであつた。互ひに一言も口には出さないで、この部屋に動いてゐる二つの亡骸を毎日見詰めてゐるのは、おれにはたまらなく苦しかつた。兄弟で以前の生活の話をするにも、互ひによし子の事に觸れまいと注意するので、自然に話が氣まづくなつた。……それに、信三はあの男に馴染んでゐて、あの男も信三を愛してゐた。信三はおれよりも早くあの男とよし子との關係を勘づいてゐたのぢやないかと疑はれないでもなかつた。「あのボンヤリに男女の秘密が氣づかりやすまい。よし知つてゐたにしても今更それを問糺して何にもなることぢやない」と、今までは思つてゐたのであつたが、おれの頭腦は次第に惡化しつゝあるのか、今日は信三を捉へて白狀させたくなつた。

おれの頭腦の惡化し衰退しつゝあるのをおれは悲しむ。あの二人がおれを摑まへてあの海の底へ引摺込まうとしてゐるためにかうなのだ。おれは昨夕、あのいやな夢から醒めると、信三も目を醒ましてゐたので、暗闇のなかで、あのことを訊ねた。どうしても押へ切れなかつたのだ。

「相川の弟が亞米利加へ行つた時に、お前とよし子とが横濱へ見送つて行つたのだが、あの時の歸りに、お前たちと相川と三人が東京驛で晩餐を一しよに食べたと云つてゐたね。それでお前だけは自分の用事で、二人に別れて他所へ廻つたと云つてたが、その時の事をくはしくおれに聞かせてくれ」と云ふと、

「あの時分のことなんか僕はよく覺えてゐないよ。それを聞いてどうするの？」

「どうもしないさ、たゞお前がおれに隱してるから聞きたいんだよ」

「僕は何も隱してやしないけれどな」

「噓を吐け。お前はあいつにたび／＼御馳走になつて買收されてるんだ。」

おれの激語に恐れて、信三は返事をしなかつたが、おれが追窮すると、

「Bさんの洋行を見送つた時は何でもなかつたのだよ。相川さんはBさんが亞米利加へ行つてる間に、自分もあつちへ行つて歐洲の方へも廻つて見たいと云つて、頻りに西洋の話をしてゐたゞけで、別段異つた話はしてゐなかつた。……僕が腹の中に何か隱してると兄さんが怒るのなら僕は云つてもいゝがね。……相川さんのしたことは不道德で惡いには極つてるが、それよりも姉さんの方がよつぽどいけないんだと、僕ははじめから思つてるんだ。僕は姉さんから長い間侮辱を受けてゐたんだからね。僕はまだ獨立して生活をする力はないし、それに僕だつて大川家の一人なんだから、兩

親の遺産で養はれるのは當然だと思つて、兄さんの家にゐたのだけれど、姉さんにはいつも厄介者あつかいされてゐたのだ。遺産は僕等二人の生活費や學資の足しに充分なつた譯なのに、姉さんの贅澤のためにみんな費はれてしまつたのだらう。さう思ふと僕だつて忌々しくつてならないよ」と、信三は例になく意氣込んで云つた。喧嘩口調であつた。

「お前も遺産を狙つてゐたのか。馬鹿な奴だ。遺産がいくらあるものか。おれがお前にないしよで親爺の財産を何處かにしまつてると思つてるのなら大間違ひだぞ」

「どんな財産だつて費へばなくなるに極つてらあ。今は持つてゐなくつても、以前はたしかにあつたのだ。僕だつてそんな野呂間ぢやないからね。親爺が僕等に殘して呉れたものを、あんな女のために無駄に費はれちや、僕だつて癪に觸るよ」

おれの弟の信三の言艸ぢやないと、おれは思つた。今夜は何かゞ信三に乘りうつゝてこんな口を利かせてゐるのだと、おれはその何かの正體に對する恐れと憎みとのために身ぶるひをした。が、それに負かされないやうにと反抗して、

「よし子が衣服なんぞに多少の贅澤をしてゐたにしても、みんなおれの月給や賞與を費つてゐたのだから、お前なんかに文句をつけられる筋はないんだ。お前には人並みの學資を出してやつてるし、夏冬の衣服もよし子が氣をつけて拵へてやつてたぢやないか。よし子は決してお前の惡口をおれに向つて云つてゐたことはなかつた」

「あの女は陰險だから露骨に僕の惡口を云やあしなかつたらうがね。……」

「よし子が陰險なものか。陰險な人間があんな死に方をする筈がないぢやないか。お前にはまだ女の心が分らないのに、生意氣な口を利くものぢやないよ」

「默つとれと云へば僕はいつまでも默つてゐるよ」

信三は呼吸をも殺してしまつたやうに沈默を續けたが、すると、おれは知らず〳〵よし子の揶揄をしたことに氣づいて、胸くそが悪くなつた。

「信三」と、おれは親しみを籠めた聲で呼掛けて、「お前はよし子に侮辱されてゐたと云つたな。それならあれの死んだことをお前は喜んでるだらう。よし子がゐなくなつてからは、おれとお前との兄弟仲を氣まづくさせるものはなくなつた譯だね。……今夜は腹藏なくお前の思つてることを云つちまへよ。何を云つてもおれは怒らないよ」

信三は返事をしなかつた。おれは、信三がよし子のことを「あの女」呼ばゝりして、いつになく悪態を吐いたことを思ふと、弟に對する不斷の情愛も亂されて、「こいつはボンヤリのくせに生意氣だ」と、一度もおれの手を當てたことのない信三の横つ面を、拳固でぶんなぐつてやりたかつた。

暗闇の中でゝも彼れの青白い、青年らしい元氣のない顔は見透されてゐるやうであつたが、それとゝもに、よし子の派手な生々した顔が、兄弟の寝床の間に顔を突出した。信三も眼を開いてそのよし子の顔を見てゐるやうであつた。毎夜々々この部屋の中であの二つの亡靈の顔を見てゐるのはおればかりではないのだ。弟も同じやうに見てゐるのだと思ふと、おれはギヨツとした。おれは、相擁した二つの影を自分だけで見てゐるのはまだしも堪へられるが、信三にいつも見てゐられるのは我慢がなりがたいのだ。

おれは、海水着をつけた水泳場のさま〴〵な女姿や、鬱憤晴らしに接した東京の賣女の顔を思出したが、よし子を取られたおれは、すべての女を取られたも同様で、他のどの女もたゞよし子追憶の餌になるのに過ぎなかつた。

おれは亡靈の影を追拂はうとして立つて電氣を點けたが、明るみで見ると、信三は死んだやうになつて眠つてゐた。

……さつきおれが信三の口から聞いたと思つてゐた不穏な言葉は、おれが夢の中で聞いてゐたので、信三は宵のうちからスヤ／＼と眠つて太平樂の夢を見てゐるらしかつた。

おれが朝の夢から醒めきらない間に、信三は水を汲んで飯を炊いて、家のまはりの掃除をもしてゐた。海風は波の音と〻もに蚊帳越しにおれの枕元を襲つてゐた。おれは起きると井戸端へ出て、汲立ての冷たい水で顔を洗つて、信三と共力して家の中を片付けて、兄弟でちやぶ臺を挾んで朝餐の箸を執つたが、鮮明な朝の光でまともに信三の顔を見ると、彼れの身心に生氣のないことがよく分つた。

「昨夕お前はおれに何か云つたね。覺えてるだらう」と、おれはつとめて輕く云つたが、信三は面羞さうに目を外して、

「何を云つたかよく覺えてやしないが、昨夕は變だつたよ。夜中には隣りの子供がギヤ／＼泣立てるし、兄さんは譫言を云ふし、僕も眠づらくつて困つた」

「嘘を吐け。よく眠つてゐたぢやないか」おれは、信三が間が惡さにこしらえ言を云つてゐるのだと思ひながら、「昨夕おれがお前に訊いたことは詰らないことだが、お前が知つてゐるのなら話して聞かせてくれよ」と攻めると、信三はいやな顏した。

「誰れよりもお前の目に一番おれは馬鹿に見えるだらう。おれの馬鹿な眞似をよく見たのは、生きてる人間のうちではお前だけなのだ。お互ひに親友のつもりでゐるKだつて、お體裁をつくろつたおれを知つてるだけだ。兄弟の目の前で醜態を見せるのは誰だつていやなことに思ふにちがひないが、おれには親はないし、お前とは年中一つ家にゐたのだから、自然にお前にいやなざまを見せることになつた。それをみんなお前が忘れてくれてゐればい〻が、外の事は何事を

も忘れてゐても、それだけは意地惡くお前が記憶してゐるやうに思はれてならないよ」。

おれがよし子を詰問したり毆つたり髮の毛を摑んで引摺つたりしたことを信三にたびたび見られてゐるだけならいゝが、おれがよし子の前で涙をホロホロ落しながらクドクドと、愚痴の百萬遍を並べて搔き口說いたことも彼れには知られてゐるのだ。眞夜中によし子が便所へ立つたのを、家を逃出すのぢやないかと、おれはふと目を醒ますとゝもに疑ひを起して、彼女のあとに隨いて便所の側で立番したことも信三にはよく知られてゐるのだ。おれが勤めに出てゐる間のよし子の身を、信三にひそかに監督させたこともあつた。あの男とよし子との關係に氣づいた時のおれの憤怒や煩悶を信三に知られてゐるだけならいゝが、おれはあの二人や信三と一しよに、銀座のカツフエで紅茶などを飮みながら、腑甲斐なくもあの男の歡心を買ふやうな口を利いたのであつた。あの男がおれだちに別れて尾張町で電車に乘るのを見送ると、おれは縛めを解かれたやうに喜んで、心の進まないらしかつたよし子の機嫌を取りとり、獨りではしやいで、お喋舌をして、十一屋へ寄つて臺所用の舶來の道具を買つたり、資生堂へ寄つて舶來の化粧品を買つたりした。よし子がさういふものは今は慾しくないと云ふと、「ぢや、おれが使つてもいゝ」と云つて、おれはその夜家へ歸ると、自分の身體をその香水や白粉で粉飾して興がつた。

「男だつてこの頃はお化粧するやうになつたのだね」と云ふと

「見つともないからお止しなさいよ」と、よし子は可愛らしく眉を顰めた。……その間おれは散髮にもいゝ床屋を撰んで刈り方にも注意し、湯に入るたびに今までよりも念入りに身體を磨き、衣服の着こなしにも氣をつけてゐたのであつたが、厭ふべきあの男を知らずしらずお手本にしてゐたのであつた。

「信三さん、あなたの部屋は寒いから此方へおやすみなさいな。日あたりのいゝ廣い部屋があるのに、わざとそちらに

ゐるのは詰らないぢやないの。それに、あなたが隣りの室にゐると、この頃のやうに世間が物騒な時には、あたしも心丈夫でいゝのよ」と、よし子は、おれだちの寝室の次の室を信三の晝夜兼用の部屋に當てようとした。信三はそれに同意しなかつたが、おれも不快に感じて言爭つた。世間が物騒なのを恐れるよりも、よし子はおれを恐れてゐたのだ

信三にはその日のことなどを一々知られてゐる、

「おれの知らないこともお前は知つてるだらう」と、おれは、食事が終つてから再び訊ねた。

「たとへ僕が知つてゐるにしても、過去つたことを穿鑿してどうするんです。……僕は兄さんがいつまでも一つ事に頭を痛めてゐないで、新しい家庭をつくつて、以前よりも綺麗な生活をはじめたらいゝと思ふんだけど、さうは出來ないものかしら。それが僕のためにもいゝんだけれどな―

「お前のためにもいゝんだつて?」

おれは信三でさへおれの新たな結婚を望んでゐるのを不思議に思つた。Kも屢々さう云つてゐたし、それが世間の習はしなのであらうが、おれには新たに娶るべき女があるのであらうか。女に背かれて蹂躙られた世間の男のすべてが新たな女を求めて新たな生活をはじめるにしても、おれだけはそれに倣ふ力は根こそきなくされてゐるのだ、

「お前はおれのことよりも、自分で家庭をつくりたいと思つてるのだらう」と、おれは信三の不量見を非難する氣持で云つた。

「僕はまだそんなことを考へてやしないよ」

「今に考へだすのだらう」とおれは呟いた。

おれの醜態を見てゐながら、またあの二つの影を見てゐながら、薄ボンヤリの信三が結婚のはかない夢を見てゐるの

かと思ふと、おれは不憫でたまらなくなつた。おれのやうな顏してゐる信三が、運命か何かによつて彼れのよし子と極められてゐる女の前に涙を落したり、その女の口先次第で立つたり坐つたり、角兵衛獅子見たいに逆立ちしたり、わざと亭主顏して世間體の虚勢を張つて見たりした揚句に、その女には外の氣に入つた男と、永遠の愛の世界に逃げられて、自分だけは蛆虫のやうに下界の泥の上をのたうち廻りながら、はてしなく二人の影に嘲けられるやうな破目にやがて陷ることを想像してゐると、おれは信三の顏を見てゐるのが堪へられなくなつた。

「あなたにはお氣の毒だ」と、よし子の遺書の文句が、今彼女の口から、兄弟二人に向つて語られてゐるやうにおれには感ぜられた。

「僕は散歩して來るよ」

信三は箸を擱くと直ぐに立上つて庭へ下りた。

「まだ海へ入るのは早いぜ」

おれは後から聲を掛けた。今日は朝からおれの側を逃出したなと、信三に行かれたあとの淋しさを覺えながら、おれは四五日打やつて置いた碁盤を持出して埃を拭つた。碁經を見ながら定石の研究をやつて、閑棊にもかういふ動かない理屈があるのかと、ひとりで感歎した。パチリ〳〵打ちおろす黒白の石の音はおれの耳にも快かつた。日除けの簾は涼しい風に動いてゐた。……ふと、疊の上の微かな音に神經がくすぐられたので、左右に目を留めると、碁盤の側には、大きな蜘蛛が匐つてゐた。

おれはびつくりして後退りした。そして、次の室へ行つて箒を持つて來ると、蜘蛛めは碁盤の上に匐上つてゐた。箒を振上げて、その奇怪な生物を打据ゑようとすると、も一匹の蜘蛛が碁盤の緣から頭を出した。……曩夜おれを惱まし

てゐる二つの影の正體を今こそしかと見屆けたと感じたおれは、渾身の力を揮つて、二つの蜘蛛を續けざまに叩き砕いた。腸までも潰された醜骸を、烈日の照りつけてゐる庭へ掃き棄てゝ、再び碁盤の前に坐つたが、碁石はあたりに散亂れてゐた。碁盤を浄めて再び研究を續けようとしたが、おれの頭はもはやそれに堪へられなかつた。盤上には、二つの蜘蛛が頭を並べて縱横に動いてゐるやうだつた。

碁盤を隅へ押しやつて縁先へ出ると、庭には小松の間を黒い蝶が飛んでゐた。蜂も忙がしさうに飛んでゐた。あゝいふ生物にも雌があり雄があるのかと、おれは不思議に思つて見てゐた。ぺたんこになつた二つの醜骸に永遠の愛が殘つてゐるのかと、おれはおれを苦しめる永遠の愛を粉な微塵に蹂躙るつもりで庭へ下りて、下駄の齒にかけようとしたが、ふと躊躇した。

「今日は非常に暑いよ」と、外から歸つて來た信三は云つて、おれの見入つてゐる方を見て、「これは何だね。蜘蛛のやうだね」と何氣なく云つた。

「蜘蛛だよ」と、おれはあたりまへに答へたが、ふと、この碁盤の上に現はれた二つの奇怪な生物は、あの緋縮緬の扱帶で胴をくゝつて入水した二人の化身ではなくつて、おれたち兄弟のやうに思はれた。

「暑くつてたまらないから、僕は海へ入つて來るよ」と、信三はおれの許を乞ふやうに云つて海水着を取出した。

「今日はおれも一しよに行かう」

おれは誰れに見せるためでもなく、こんなことを書留めた。おれが（あるひは信三と一しよに）いつか海の底へ引込まれて醜骸を磯へ打上げられたなら、この數十枚の文章がおれの遺書として世の人の目に曝らされるであらう。あの二人の遺書に比べて、おれの遺書の見窄らしさは世の人の哂ひを買ふことであらう。哀れや、おれは永遠にあの二人に勝てないのだ。（大正十二年八月六日午前十時、日本晴れの碧空を仰いで重くるしかつた筆を擱く。N・O）

お紺の出京

藤村千代

一

隣りの娘のお品が大阪から戻つて來るまでは、お紺も大した不平を持つて居た譯ではなかつた。

尤も、小さい時分から、

「お紺ちやんは今んこと好え女房におなりるでよ。」

と、誰れ彼れから賞められる度びに、母一人娘一人のしがない暮しこそして居れ、今は思ひも及ばないやうな幸運が驅て迎へに來るだらうと、ぼんやり思つて居ないでもなかつたが、それとても人間無上の幸福と言ふのは、町の紙問屋のひとり娘のようにちよいとの走り使ひにも歩く度びに鈴の音のする表附のかつぽれ下駄を惜し氣もなく履き捨てる、そんな風な事位にしか考へて居なかつたやうな、ほんの小娘のお紺であつたから、霜の酷い朝なぞ、凍つてかちかちになつた蠟引きの爪掛けの中で足の

指が死んだやうにかぢかんで了つたりすると、工場通ひをしんから辛い事に思つて、未だ明けきらない薄暗がりの中で今にも泣き出しさうになつたりはし乍らも、工場へ行つてから、大勢の朋輩と一緒になつて村の若い衆の品定めや面白い流行唄などを喧しい杼の廻る音と張り合ひになつて喚いて居ると、それで辛い思ひなぞ何處かへ消し飛んで了ふので、兎も角もそうして居さへすれば、人並な盆暮の晴着の支度にも事缺かないのだと思ふと結構、その境涯を好い事にして濟まして行かれたのであつた。

それがもう、醉狂にもそんな眞似をするのが可厭になつた。人一倍苦勞性な母親の手前もあつたから、まさか、工場へ行くのは今日限り眞平だとも言へなかつたので、やれ、腹が痛いの頭が痛むのと言つては居たけれども、そんな言ひ草の種が盡きると同時に、利きさうにもない赤玉なぞを持つてまご〳〵して居る母親の顏を見るのが、却つて荷厄介になつて來た。なまじひ、こんな年寄なんぞが居なければ、今夜にでもあのお品の行つて居るやうな繁華な街へふつ飛んで遣るのに、と思つたりした。

こんな場合のお紺であつたから、蒲團の中での考へにしてからが、勢ひ、自分とお品とのみめ容の比較から穩かならぬ空想の方へ延びて行くやうになつたのであつた。

お紺はよく憶へて居た。年齒こそお品の方が二つも多けれ、つい竹垣一つ距てて、

「お遊びんか、」

と言ひ合つた幼などちであつたのだから、白粉でも軟膏でも塗り潰せないお品の體中のあらをすつかり知つて居た。

幼い頃の二人は、お品の家の薄暗いそれで居て滅法もなくだだつ廣い板敷の上で、—其頃は、お品の父親が生きて居た頃遣つて居た錢湯の流し場であつた、商賣を止めてからは表の板戸をぴつしりと締め切つたもんだから、底冷えのした

恐らく表の板戸を下した隙間から忍んで居たであらう古沼のあぶくのやうな空氣が、一杯にこめて居た。家の者はずつと離れた母家の方に住んで居て、その板敷は殆んど一年中誰からも忘れられて居た。三尺帶を解いて腹這ひになり乍ら小さい兩肱を曲げた掌の上へ顎をのつけて、こまつしやくれた瞑想に耽つたり、如何かした拍子には裸の股でからみ合つたり抱き付いたりしたのであつた。幼い乍らにそうした眞似が何かしら氣恥しかつた二人にとつては、出るにも這入るにも人にめつかると言ふ事は禁物であつた。それで居て、歪つきり締め切つて了つた中の暗さも不氣味であつたので、お品はよく佛樣の手燭の中から一文蠟燭を盗み盗みしては、そつと持ち込んで來た。

その一文蠟燭の薄ぼやけた光りの中ではあつたけれども、そうした遊びが度重なるに連れて、お紺はお品の體の形も色もほんの一寸したかすり傷でさへも諳んじて了つたのであつた。もつと小さかつた時分にゐろりに掛けてあつた茶釜の煮湯を浴びたのだと言ふ襟から肩一體にかけたひつつりは、今二十歳にならうと言ふお品のためには、少し許りの投衣紋にも氣がさす位の手痛い疵に違ひないと言ふ事を、今は最早や見る事も出來ないであらう一文蠟燭の灯かげと共に、ふつと思ひ浮べたのであつた。

そのあとに繋がつて、お品の耳朶のうす青い黒子や、折角高くなり掛けようとして居るのに先を一寸拇指で小突いたのだとでも言ふ風の愛嬌鼻や、さてはべそを搔きそこねたやうな上眼遣ひの癖まで、一つ一つ思ひ出されたのであつた。

それには又、附きものの已惚も手傳つて、お紺はこの幼い頃の女友達が大した見處のありさうな女ではない、それ處か、もし往來ででも出逢つて自分は汗染みた手織の綿を、お品はあの縮の羽織から長襦袢までかなぐり捨てて、眞裸になつた儘で突つ立たなければならないものとすれば、誰一人としてお品の方へ團扇を上げるものはなからうと言ふ事

まで、うす〳〵乍ら感づいて居た。

この、お紺の餘り健全だとは言へない自負は、膨れ上る前にもつと深く進んで行つた。彼女は考へた。

今の二人の境遇の距りは、ほんの一足踏み出し方が違つただけのものであつた。お紺は、若い娘と言ふものは製糸工場へ出るよりほかには能のないやうに考へて居る村人のしきたりを、一も二もなくうけがつて居たのにひきかへてお品は、それを小馬鹿にして、氣隨氣儘に世を送らうと言ふ位の勇氣を持つて居た。それに、お紺は固い一方の如何かすると阿呆のやうな母親を持つて居たのに、お品は、一寸した洒落者で髪こそお茶筌に結んで居たが、男の客でもあらうもんなら銘酒の一杯も振舞はうと言ふ、氣の若い母親を持つて居た事であつた。

……それよりほかに、あの女の方が仕合せになる理由がない。いや、それもほんの紛れ當りかも知れないのだ。

……お紺はこの五六日來、寢ても醒めても考へ續けて來た同じ事を、頭の中で卷いたりほぐしたりして居た。彼女の眼先きには、絕えずお品の姿がちらついた。

前を態ざと總髪にした粋好みの銀杏返しや三つ輪なぞの變り頭に結ひ上げて、紺絞りの浴衣に伊達卷一つと言ふぞんざいな、それで居て田舍藝者などの及びも附かない仇つぽい樣子と言ひ、しな〳〵と變に甘つたれた足の運び方と言ひ、大體は田舍言葉の儘乍ら、時々、それもつい不用意に口を滑らしたのだと言ふ事を聽く人にはつきりと思はせるやうな呆け方の、艶かしい上方言葉を交へては話しをする時の目立たない位な澄まし方と言ひ、お紺には何から何までが、美しい事づくめであつた。

そこで、お紺は誰にも內證で、子供の頃に弄んだあの紙人形の首でもあるやうに、お品の首と自分の首とをすげ替へたところを、そつと思ひ浮べて見たりした。大變よく似合ふやうにも、全つきり駄目なやうにも思はれた。そう思ひ

乍らも、自分だつてものの半年も都會生活を續ければ、お品の一人や二人さう氣にもならなくなるだらう位の自惚もあつた。

で、お紺は母親の考へを固いなりにほんの少しづゝでも自分の方へ向けて置かなければと思ひ乍ら、流石にそれとは切り出し兼ねて、唯「お品」と言ふ女を中心に置いた圓の廻りをぐる〳〵廻つては、ちよく〳〵と母親の氣を惹いて見る位にして居た。それは全で、下手な雜魚釣りが手堪へを持ち兼ねて糸を引くやうな具合で、何の役にも立ちはしなかつたが………。

「お品さんのお母は仲々お戻りんのう？」

「とても五日や十日そこらじやあ見盡されまあてえ。京のお西へも詣らいて貰ふちうて言ひよいでた。好え樂みな事じや。」

と母親は、さう言ひ掛けて何か一ひねり言はないでは居られないとでも言ふやうに、

「好え樂みな事じやが、余り自慢にもならんでよ。自分の娘に妾なんぞをさせて、そのお蔭で西京見物をさせて貰ふのじやあのう。………ぞいじやが、人と言ふものは好え加減なもんじや。ああ金持におなりつら、誰も何とも言はんやうになつた。大阪で妾を遣つといでるちう事が解つた時にやあ大騷ぎじやつたが………、誰も人間のやうに言ふ者はなかつたが………。」

「そん時、お品さんはさうお言ひたげな。誰でもわしの眞似が出來りやあ遣つと見い、ちうて、」

「さう、さう、さうじやつた。あん時、下駄屋のお國さあがいきり立つて、そんとな女子はこの村へ入れる事あならんちうてお言ひたげなが、妙なもんじや、こないだ、あの前を通りよつたら、お品さんの下駄の鼻緒を立てる立てる、一

生懸命でおべんちやらを言ひよいでた。」

「お母、わしも一つ何處かい行つて妾にでもならうか知らん。」

さう言ひ乍らお紺は、これは勿論冗談だと言ふ風に聲を立てて笑つたけれども、心の底では、すつかり冗談にはしてて了へないやうなこちんとした固いものが溜つて居るやうな氣がした。で、母親が何か言つたら、それをきつかけに水を向けようと思つて居たけれども、

「馬鹿な事をお言ひな。仇事にでもそんな事を言ふもんではないでよ。お品さんもあれで、末が榮えるものとお思ひるのは大間違ひじや。」

と、もう少しで例の因果應報のお說教でも始りさうな樣子であつたから、お紺は早速その思ひ附きをひつ込めた。然し、決して自分の考へまでひつこめた譯ではなかつた。

お紺の頭の中で、母親を言ひくるめる口實が二つも三つも考へ出された。好い加減な事で誤魔化されると思つて居た母親が、案外に厄介なのが面倒臭くもあつた。さうかと言つて、兎も角も唯つた一人の母親を置去りにして出奔する程の決心も付き兼ねて居たお紺は、誰かの手を借りてさも、その人から仕向けられたためにひとりでにさうしなければならなくなつたのだとでも言ふ體に、母の手前だけでも取繕ふ必要を認めたので、彼女は彼女なりに精一杯の智慧を絞つたのであつた。

さま〴〵な男の影が現れたり消えたりした。お互に八つ位から女夫ごつこをし續けて、それが氣恥しくなつた年頃にふつと別れて了つたきり、今は京都で煎餅屋の職人になつて居ると言ふ男や、盆踊りの晩に言ひ寄られたのが始りで、毎年、夏休みだと言ふと歸つて來て、東京へ出たくないか、出たければどんな世話でもするがなどと、何處までが氣紛

れなのか本氣なのか解らないやうな學生や、是非嫁に欲しいと言つたのに男振りのよくないのがお氣に染まない許りに可厭で通して遣つたのだつたけれども、今でも未だ一人身の儘で大阪に洋品店を持つて居ると言ふ男や、その他、ほんの僅かな因緣でさへも今のお紺には直ぐにも取りすがりたいように思ひ出されるのであつた。然しいざとなると何の男も頼みにならないやうな氣もして、お紺の思案は或ところまで行くとぽきりと折れて了はなければならなかつた

その時ふと、吉助の猾い微笑を含んだ顏が、なまじい男前の好い爲めに尙更意地惡く見えるその笑顏が、お紺の眼の前を掠めて過ぎた。その顏は今までおしのけやうおしのけやうとして居たものであつただけに、お紺の爲めにはとつて置きの顏であつた。他の男の影がすうつと薄れたあとに、ぽつかりと見るも鮮かなその笑顏だけが浮いて來た。

お紺は全でつい側に居る彼に話しかけでもするやうな氣易さを持つて、東京の下宿屋に居る筈の彼の許へ、長い長い手紙を書いたのであつた。

二

折返して來た吉助からの手紙は勿論母親宛てになつて居た。下宿住ひの騷々しい事不便な事を細々と書き列ねて、で今度、學校のつい近くに手頃な家を見附けたから、二三人の仲間と語らつて引き移る事になつて居る。就いては男手許りで困つて居るから是非お紺さんを貸して欲しい。製糸工場で取れる位の金なら何とかしてお母さんの方へ助けられるやうにするから、と言ふ文句まで、すつかりお紺の注文通りにしてあつた。

注文通りにしてあり乍ら、さうした狂言にかけては、ほんの小娘のお紺なぞが思ひも初めないやうな凄腕を持つて居るらしい彼の事であつたから、お紺が一夜漬けのたくらみを俟つまでもなく、お手のものの細工が、細工とは見えない

程しつくりと組合はされてあつて、母親なぞは手もなくころりと參らされさうなのは勿論、お紺自身さへ自分が頼んで遣つた事も忘れて、全で吉助自らの發意でこんな親切な手紙を寄越して呉れたのだとでも言ふ風に、すつかり感動して了つたのであつた。

「如何おしる？　斯う、事を分けて頼まれて見ると、可厭でも可厭とは言へんやうなもんじやが………」

氣の好い母親は、この手紙とお紺とを結び付けて考へる程娘を疑つては居なかつた。又、吉助の事に就いても、東京へ勉強に出て居る萬屋の一人息子で、お紺とも滿更の他人でもないと言ふ以上に穿鑿はしなかつた。

吉助に對するこの無穿鑿の底には、多少の仔細がないでもなかつた

お紺の母親とは血續きの萬屋のお内儀が未だ生きて居た時分の頃、お河童頭のお紺と吉助とを抱いた母親同志は二人の子供達を一緒にしたあてもない將來の事を語り合つては娯しんで居たものであつた。そのお内儀との冗談めいた口約束がその儘、吉助の父親に依つてうけ繼がれて居るものとも思はれないけれども、（今では雪と泥ほど違ふ兩家の格から言つても、この考へは僻みだと許りも言へないものであつた。）お紺の母親にして見れば、すつかり煙にして了へたものでもあるまい位の積りもあつた。

で、欲得の打算づくと言ふのでも、女親の甘さからと言ふのでもなくて、娘のお紺と吉助との曰くのありさうな交際をもその儘見過ごして居られたのであつた。

だから今、吉助からこんな手紙が來たところで、母親には大して意外なものでもなかつた。若い女の身空で、男暮しの而も遠い旅の家へ行かうと言ふのにしてからが、一應は心配にもなつたけれども、まかり間違つて二人の間に妙な關係でもなり立つたとすれば、嫁に貰つて貰ふまでの事だと言ふ、其處は又、氣が好いだけに存外ルーズな考へで濟まし

て居られる安心があつた。

然し、こんな事は急いでお紺に言ふべき事ではなかつた。お針の一通りも習ふ事が出來れば、何かの足しにならうからと言ふので、愈々お紺は望み通り、母親の手許から離れる事になつたのであつた。

それは秋口のよく晴れた午後であつた。

好い加減な當て推量をせられるのが五月蠅いからと言ふ母親の考へから、お紺の上京は何處へも吹聽してなかつたので、誰一人見送りもない儘にそれを却つて氣易く思ひ乍ら、二人はじつと波止場に立つて沖の船が近づくのを見て居た。

二人とも先刻から幾度言つたか知れない。「體を大事におせえよ。」とか「風邪を引かんやうにおせえよ。」とか「手紙をさいさいお呉れえよ。」とか言ふやうな、言はゞ別れには附きもののあり觸れた言葉を飽かずに繰返して居た。さうでなければ、全でこの場に關係のない、十年も前に死んで了つた人の噂や遠いメキシコに出稼ぎに行つたと言ふ人の噂なぞを、何の繼ぎ穗もなくぽつんぽつんと話し合つたりして居た。それ程、沈默つて居る合間々々にそつと忍び寄つて來る「別離」そのものの空氣に、まともに觸れるのを惧れてでも居るやうに。

が、二人とも心の底では全で別々な事を考へて居た。

今となつては、唯つた一人の娘を手離して遣つても好いなんて、とてつもない決心をしたものが自分だと言ふ事を、母親は到底もほんたうには出來なかつた。又當の娘が行きたがつて居たからだ。いや今でさへあんなに行きたがつて居るのだ。と思ふ事も恐ろしかつた。娘の居ないのちの事は、想像するだけで澤山であつた。母親は、この苦しみを自分

でも娘でもない誰かのせいになすり附けて了ひたかつた。……だが、一體誰だらう。……吉助のやうでもあり、さうでないやうでもある男が、遠いところから眼に見えない糸を綾釣つて、お紺の心をぐい〳〵と手繰り寄せて居る有様がぼんやりと眼頭に映つて來た。母親は、その糸が腐つて朽ちて他處眼には今にも切れさうに見え乍ら、變にぴか〳〵と光つて居るやうなのを感じた。これはお紺に話さなければと思ひ乍ら、さてどんな言葉で說明して好いのか解らないのであつた。解らない儘に、こんな事を考へるのは、皆老人の愚痴に過ぎないのだらうと、何時の癖の氣弱い諦めの中へ引つ込んで行つた。

お紺はこの間、小さい艀に荷物が積まれるのを見て居た。(港と言ふ程でもないこの波止場に船が寄るのは、半分以上荷物を積み込むのが目的なので、米俵や丁度季節の罐詰にした松茸などが山のやうに積み上げられて、最後に、目立つて新らしいお紺の小さい行李が積荷の山のてつぺんにひよいとのつかると、艀がゆらりと一つ大きく搖れた。)見て居るやうな振りをして居た。

彼女は如何かすると、自分の直ぐ側に母親が立つて居ると言ふ事を忘れた。彼女の空想はあの小さい行李の綁索がほどけるところから始まつて居た。そこから「お紺榮華物語」とでも言ふ風な繪卷物の一卷が、彼女の頭の中にじゆんぐりじゆんぐり擴げられて行つた。お紺はその繪卷物の中で、阿呆のやうになつてすつかり放心して居た。ほんの一時、彼女は此處が何處なのか、自分は今如何しようとして居るのか忘れて居た。若い船頭が、お紺の方へ腕を差し伸べた時でさへ、お紺は、今自分がふるさとの陸から知らぬ他國の水の上へ足を掛けようとして居るのだと言ふ事にも氣附かずに、ひよいとその腕に縋つて、さも輕々と艀に飛び移つて了つたのであつた。

その時、お紺は誰かが自分を呼んで居るのを聽いた。お紺、お紺、と二度續けてそれは弱い哀訴するやうな聲であり

乍ら、お紺はもう夢の中から半分呼び戻されて居た。そして、つい眼と鼻の波止場の棒杭に片手を掛けた母親が、せい一杯片手を伸して何か風呂敷包みをお紺の方へ差し出して居るのを見た時に、お紺の他愛のない蜃氣樓は跡方もなく消えて了つた。あの風呂敷包みの中には鹽のまぶつたうで卵が這入つて居ると言ふ事や、母親の今思つて居さうな事などが、お紺の心に別れの切なさと混つてのしかかつて來た。お紺は言ひ殘した、それで居てさうとつさの間には思ひ出せさうもないやうな事が澤山にあるやうな氣がした。それをゆつくり思ひ出す爲めに、もう一遍陸へ上つて見たいやうな氣がした。

然し丁度、船頭が片足を積荷の上へふまへて竿を押さうとするところであつた。竿の先が波止場の板切れにあたつてカタカタと探ぐるやうな音を立てた。

母親はその皺くちやの頬をぴく〳〵と痙攣(ひきつ)らせ乍ら、

「お紺、卵を、卵を」

と言つた。そして宛てずつぽうに放り投げた風呂敷包みがひよいとお紺の足許に落ちた時、ヒヒ……と聲許りで笑つて居て顔は今にも泣き出しさうな變な笑聲を立てたのであつた。――お紺や、何にも心配する事はないよ。私はお前が氣樂に彼地へ着けば好いがと思ふより外には何にもないのだ。それにあの卵もうまく渡せたし、ね〳〵私はついうつかり忘れて了ふところだつたよ。」――その顔と笑聲からこれだけの心を汲んだお紺は、何か知ら母親を慰めたかつた。少し離れたところで風に持つて行かれない用心にも兩手で口を圍ひ乍ら、

「其處に立つとらんと早うお往にい。ぱんげは寒うなるけえ風邪をお引きるといけん。」

と態さと大きな聲で言つたけれども、その言葉の底にはお紺自身も氣附かない彼女の本音が隠れて居た。お紺は一時

も早く東京の夢の中へ這入りたかつたのであつた。それを母親にさへ邪魔されたくなかつたのであつた。

然し、お紺は自分の心を知らなかつた。別れの悲しさがぴつたりと心に浸みもしないで始終そは〳〵してゐるような自分に氣が咎めて居たので、じつと立ち盡して次第に眼鼻立ちも解らなくなつて行く母親の顔の邊りを見詰めて居た。

本船に移されてから、ものの半里もあらうと思はれるのに未だ母親らしい影の見えて居た時、お紺はもう放つて置かうかと思つた、丁度、直ぐ足許から急勾配の狹い階段が見えて、その暗い船底から聽へて來る面白さうな談笑の聲がお紺を引つ張つて行きさうであつた。

それでもお紺は甲板に立つて居た。と、母親がハンカチを――いや手拭であらう。母親はハンカチなどを持つて居た事はない。兎に角、甲板からは只、白い、風に靡いて動いて居るものとしか見えない。――出して振つて居るのを見た。

お紺はぎくつとした、不斷なら如何間違つてもそんな、新派悲劇のしぐさのやうな眞似の出來ない昔者の母親が、氣恥しい氣恥しくないのけじめも忘れて一途にさうして居るところを見るのは、流石に悲しかつた。

この母親のハンカチは、お紺の心を頻りにふるさとへ呼び戻して居た。ハンカチの搖れる毎にお紺の心はひくひくと痙攣した。お紺にはハンカチが、兎も角もあの母親が別れがたなく思つて居ると言ふ事を告げて居るあのハンカチが見える間は、何時までも立つて見て居なければならないやうな氣がしたからであつた。

軈て、白いものは殆んど見えなくなつた。――あれはあの、子供の時分に紙つ切れを棕梠の毛で縛つたのを二本の指で捻つては、ひら〳〵と舞はせたつけが、丁度あの紙蝶々のやうだな、――さう思つて居るひまにふつと見えなくなつ

て了つた。

　お紺は思はず、

「お母！」

と呼んで見たが、その聲はほんの海面へ出た許りで消えて了つた。

　彼女はほつとした。自分はもう何處へでも好き勝手な處を飛び歩く事の出來る自由な體だと言ふ、それは如何しても喜びだと名附けなければならない感情がはつきりと頭を擡げて來た。そこでお紺は物珍らしさうに邊りを見廻した。

　つい後の蒸汽釜のところでは、牢屋のやうな石炭庫の窓から男が機關夫であらう帽子の腮紐を掛けた儘の煤けた顔だけを出して、さも冗談口を叩きたげに笑ひかけて居た。その左側では汚い青ズボンの足を投げ出して手慰みの札をいちくつて居た船員と、棵子辨當の空を頻りに洗つて居たコックとが聽えよがしの高話しを遣つて居た。その、思ひ切り荒つぽい上に耳馴れない他處言葉では、無論細かい遣り取りは解らなかつたけれども、何かしら自分の事を話し合つて居るのだと言ふ事をお紺は朧氣乍らに感附いて居た。それは半分以上ざれ調子で人を馬鹿にして居るのだと言ふ事まで解つて居て、お紺はちつとも腹が立たないのであつた。

　兎も角も彼等は若い男であつた。若い男が自分を氣にして居た。さう思つただけでにや／＼と何の蟠りもないあの、愚かしい微笑がひとりでに頰に上つて來るのを堪へる事が出來なかつた。

　お紺はくるりと一つ體を廻して、一わたりこの惜しげもだらしもない笑顔を彼等の顔に送つてから、カタ／＼と駒ド駄の音を立てて船室へ下りて行つた。

三

刻みの細かい思ひ切り急勾配な階段を氣にしいしい降り盡したところで、お紺は初めて眼を擧げて先づ、隅つこの梯茶けた心細いかんてらの光りを、そのかんてらのほやに一杯蜘蛛の巣が引掛つて居るのを見た。その薄ぼやけた光りに馴れるにつれて、彼所にも此處にももごもごと動いて居る頭や手や足や——それから、それらのいぎたなく伸びて居る手や足はそれ〴〵たつぷりと領分を擁つて居てそのために、自分が坐らうとする隙間もないと言ふ事までが——お紺の眼に映つて來た。

お紺は一寸立つて居た。と、

「姐さん、此處へお坐んなさい。」

と言ひ乍らかんてらの直ぐ下の處に陣取つて居た四十がらみの脚絆掛けの男が、起つて自分の荷物を態々積み重ねて空席をつくつて呉れたり、きちんと折り疊んで膝の下に敷いて居た薄汚い毛布を伸して呉れたりした。

お紺は一寸頭を下げてから、其處へちんまりと足を屈めて坐つた。

「もつと樂になさい。足を伸しなさい、斯う、」

とその男は先づ、自分の足を毛布の上に列べてぎくぎくと動かして見せたが、お紺は曖昧な薄笑ひを浮べ乍ら何處こちんと固くなつて、ぎこちない身構への儘で少し體を退いた。——それは、この男にうつかり氣が許せないとか、薄氣味が惡いとか言ふのではなかつた。始めて船と言ふものに乘つたのだつたけれども、お紺の思ひ描いて居た船室はもつと違つて居た。こんな、木賃宿の一寸した座敷ほどもない暗い室で、洋傘直しでなければ煙管の羅宇替へでもして居さ

うな煤けた男と、同じ毛布の上に雑魚寝めかして横になると言ふ事は少し心外であつた。それに、一遍この男の言ふ通りに足を伸して横になつて了はうものなら、もうめつたな事では起たれないやうな氣がしたのであつた。――すると男は、

「斯う伸しなさい、斯う。船の中は寢て居るに限る。寢てじつとして居さへすりやあ醉ふ事はないから……」

と言つたのだがお紺には親切の押賣としか思へないこの惡じつこい調子が、大人しく言ふ事を聽くもんだ、何なら俺がこの手で伸して遣らうかとでも言つたやうに聽へたので、お紺は狼狽てて横になつた。

さうして一旦横になつたのだつたけれども、お紺は如何しても其儘じつとして居れなかつた。その男の何かしら臭いするやうな體が、恐らく一二寸とは距たらない位の近さに列んで居るのだと思ふと、安毛布のチクチク刺すやうな毛の觸感と共に今にもその毛布の上をそうつと、男の手が伸びて來さうなけはひまで感ぜられるやうであつた。お紺は急に體を起した。

彼女は、その考へを只の忘想と思ふ事が出來なかつた。自分の足許の方にも直ぐ後にも大勢の男や女が同じやうに横になつて居るのだと思つて見ても、そんな人達まで態ざとお紺の災厄を見逃して居さうに思はれた。お紺の眼に紺碧の海の彼方でまだひら〳〵として居るであらうあの白いハンカチが映つて消えた。――もつと氣易いお爺さんかこれでなければ、ほんの巣立ちをした許りの若い男かゞ居ないものかと思ひ乍ら、お紺はそうつと邊りを見廻した。と、つい筋向ひの隅つこのペンキ塗の丸柱へ學生帽を冠つた儘の頭を凭せかけて、それはずつと前から見續けてでも居たやうな靜かな、然しじつと動かない視線を向けて居る若い男を見出した。あの人のところへ行きたいな、お紺はさう思ひ乍ら矢張り動かないで居た。側の男が見張りでもして居さうな氣が頻りにした。

お紺は又そうつと横になつたが、今度は片手で上體を支へるやうにしては少し宛體を捻ぢ向けて、側の男の方へすつかり背中を向けて了つた。そうした上で、少し宛體をずらして遠のくやうな工夫をして居た

「姐さん、氣分でも惡くなつたのか。動かない方が好い、動かない方が、」

お紺は、この男を用心して居るのだと言ふ事を感附かれるのが恐しかつたので、それなりじつと固くなつて息を詰めて居たが、何時の間にかついうと〱と眠つて了つたのであつた。

どれ位經つたのか夜に這入つてからの時間は一向解らないなりに、お紺はふと眼を開けた。

側の男は何時の間にか何處かの港へ上つて了つたものと見へて、枕許に積み重ねてあつた信玄袋の荷物も、お紺の眠りかけた時には確かに下に敷いて居た筈の毛布までが綺麗に捲り取つてあつて、お紺は剝き出しの七島蓙の上へ抛り出された儘で寢て居たのであつた。

自分がそんなに能く寢て居たと言ふ事を、お紺はほんたうに出來なかつた、あの胡散臭さうな男が大人しく上つて了つたと言ふのも危つかしい氣がした。邊りに大勢の人は居てもあの暗いかんてらだし、めい〱の考へに耽つて寢呆けて許り居る人達なのだからその中で、人情本や探偵小說の中にでも出て來る薄命な佳人のやうに、さもやす〱と眠り藥でも嗅がされたのではあるまいかと言ふ馬鹿げた考へが、ふと浮んだ。

さう思ふと、夢とうつゝとのけじめも附かないやうな氣がした。お紺はいきなり、立ち上つてきよときよとと邊りを見廻したが、軈て、下駄を突掛けて甲板へ上つて行つた。

海は今明けようとして居るところであつた。朝日が剝き卵のやうな顏を突き出さうとして、地平線の一點を此處か彼處かと探して居る前の變な豫感を感じて居るのだとでも言ふ風の三人五人が、沈默つて沖を見て居た。

お紺は用を足す積りで上つて來たのだつたが、一寸これらの人々の中に混つて立つて居たかつたので、甲板の手摺に凭れて同じやうに沖の方を見て居た。

その時、昨夜お紺を見詰めて居たあの若い男が上つて來て、お紺の方へ馴々しい笑顔を向け乍ら遣つて來た。餘つ程のお洒落と見えて到底も根つからの學生とは思へないやうないでたちの、それも何時の間にか着替へまでしたのか昨夜に變つた本ネルの仕立卸しに態ざと兵兒帶だけにして、すらりと着こなした樣子あひがお紺の眼を惹いた。

「よく眠れましたか。——貴女もこの船は初めてのやうですね。此處の沖の日の出が素敵だと聽いて居たもんだから、態ざと船にしたんですが、もう直きらしいですね。」と言ふきつかけで、絶えず衿を掻き合せたり長い頭髮を五月蠅さうに掻き上げたり身振たつぷりで、色々な面白い話をし始めた。それは皆この男の自己吹聽を一歩も出て居ない事許りなのだけれども、田舍者のお紺には、態々自分のためにお膳立をして呉れた話しよりも面白く聽かれたのであつた。

饒舌る種がと切れると、その男は甲板を歩き廻つては奇妙な慄へ聲で聽き慣れない唄を唱つたりした。何時の間にか太陽は海からすつかり離れて了つて居た事を、お紺はもとよりその男までちつとも氣にしては居なかつた。

斯うして饒舌り切つて了つてから若い男は蟇口の中から名刺を出してお紺に渡し乍ら、

「東京へ行つたら是非遊びに來て下さい。僕も伺ひますから。」

と言つた。

軈て二人は一緒に船室へ下りて行つて、又一頻り話し合つた。

お紺はふと聲を落して、

「私、お財布が無くなつた。」

と獨言のやうに言つた。

「お財布？　自分で持つて居たんじやあなかつたんですか。それとも何處かへ置いといたんですか。」

「此處。」

「其處？　そんな處へ？　如何して又そんな處へ出して置いたんです。裸の儘ですか。」

お紺は頭を振つた。

「よく考へて御らんなさい。帶の間にでもありはしませんか。」

然しお紺はよく考へ一見たりするまでもないのであつた。もともとその財布は、何處へ置いたものやら又果してなくなつて了つたものやら、なくなつたにしても何處へ如何落したものやら、皆目覺えなぞありもしなかつたのを、ふと帶の間をまさぐつて見て如何もなくなつたやうに思はれたので、つい好い加減に口へ出して了つたのであつた。(口へ出して了ふと、全く何時の間にかその財布は見えなくなつて居た。)それにもう一つほんたうの事を言ふと、如何眞似ようと思つても又口へ出すまでに頭の中でちやんと組立てて置いても、如何も甘く遣ひこなせない東京辯でやりとりをしなければならないので、この男の矢繼早やな手當り放題な質問に少々辟易して居乍ら、それでもこの男との話しをもつと長く續けて居たかつたお紺は、ふと何か短い言葉でこの男の興味を繋ぐやうな事が言つて見たかつたのであつた。

お紺の頭の中に、昨夜の何時の間にか居なくなつて居たあの四十男の事が浮んだ、何一つ手出しをしたと言ふではなし、お紺から言ふと親切にこそして貰つたが恨み一つある筈のないあの男を、お紺は何故か一寸盜人にして了ひたかつた。

「あの男が持つて行つたのか知らん。」

「昨夜の？　あゝ彼奴だ、彼奴だ。彼奴に決つてる。甘く捐つて逃げやがつた。――だが、弱つたな、彼奴ならもうずつと前の港で上つて了つたからな。一體、幾ら位這入つてたんです？」

「船の切符と――それからお金が四圓――三十六錢」

お紺は又、獨り言のやうな小さい聲で言つた。それは十圓から來た船賃のお釣錢だけであつた。

男は少し笑つて

「それだけですか、それぢやあ、あれがなくつちやあ困りますね。ぢやあ、僕が立替へて上げませう。」

と無雜作に言つて金を出して與れた。

お紺は眼を瞠つた。工場の稼ぎ高にすると殆んど七八日分に當つて居る四圓なにがしと言ふものが、後から返す金にしろ嘘まじりの二言三言で斯うもやすやすと人から貰へると言ふのは、如何にも不思議な事であつた。その上にこの男は、それを喜んで居る風にさへ見受けられた。

お紺の心に何處からともなく狡猾い考へが――この男に東京の行先を教へないで置けば宜かつたにと言ふ事や、いや、こんな風な男なのだから假令遊びに來ても返して與れなぞとは言はないだらうから、同じ貰ふ程ならもつと多い金高を言つたとしても解りはしなかつたらうになぞと言ふ虫の好い考へが――忍び込んで來た。

船が、直きに大阪の築港へ這入らうと言ふ處で、お紺はボーイに喚ばれて事務長室へ言つた。

「お金をなくなすつたと言ふ事ですがお氣の毒な事をしました。あとから充分取り調べて差上げますが、兎に角、當座のお小遣だけでも船の方からお立替しようと思つてお呼びしました。」

と言はれた時、お紺は一寸へどもどした。唯つた今、先刻の若い男の親切に對して考へた狡猾い考へが、もう一邊お

紺の頭の中を通り抜けた。

――「はい、あれを失くしましては路金にも困つてしまひます。」と唯つた一言言つて了へばそれで好いのだ、恐らくこの船から外へはめつたに出る事もあるまいこの事務長と言ふ男と、東京へ行つて了へば何處をほついてゐるのか解らない先刻の若い男とが出會つて話し合はない限りは、又そんな事のある筈がないと解り切つて居る以上は、ばれる惧れは絶對にないのだ。――

然しお紺は、ちんまりとはして居るが、ニツケル飾りの化粧臺、どろんと下つたカーテン、マホガニ製の書物卓に花まで置いたこの部屋の見慣れないきらびやかさと、眼の前に腰掛けて居る男の見るから柔和な色白の優面こそして居るが、金線入りの制服を着て端然と構へた様子とに、少し宛けおされて居た。若しくは心を奪はれてゐた。この時のお紺にとつては、こんな立派な男からこんな叮嚀なあしらひを受けたと言ふ事だけで充分であつた。

そこでお紺はぎごちない言葉つきで、もう他の人に立替へて貰つたと言ふ事を述べて、その室を引き下つた。ぎい――と重い扉が締つた時には、お紺はもう自分の馬鹿正直さをちつとも悔いては居なかつた。それは晴々とした好い心持になつて船底へ下りて行つた。

（然し、この紛失した財布の思ひ出はお紺を充分に自惚させた。お紺はそれから後も時々、あの財布はほんとうに失くなつて了つたのだけれども、あれを帯心の中とか肌着の間とかへ態ざと隱して置いて、失くなつたのだと言つたとしても、同じやうに金が貰へただらうと言ふ事を信じて居た。何の男も何の男もあれ位の事件にかづけて自分の方へ手を差出さうとして居るのではあるまいか位の自惚がともするとき動きかけて來るのであつた。）

軈て船は着いた、親類へ寄つて行くからと言ふので連れの若い男とは船着場で別れてから、お紺は敎へられた通りを

ひとりで停車場の方へ歩き乍ら考へたのであつた。こんな内海通ひのちつぽけな、人數なら百人とは居さうにない船でさへ面白さうな東京のかけらを一杯に積んで居た。ほんたうの東京はもつともつと面白可笑しいお膳立をしてお紺の方へ笑ひかけて來るだらうと言ふ事を、――

お紺はこの時、織るやうな人混みの中へ眼を遣つてふとお品の事を思ひ浮べた。

「お品さん、私は今東京へ行く途中なのよ。」

と大きな聲で眼に見へないお品に向つて叫びたいやうな氣がした。微笑がひとりでにお紺の頬へ上つて來るのであつた。

四

お紺が東京驛へ着いたのは、其夜も遲く十二時を幾らか廻つて居た。

田舍を發つ時に確かに電報で知らせて置いたのに、廣い構内には吉助の影も見えなかつた。時間も遲いには遲かつたが、遲い許りが彼の出迎へに來ない理由ではないやうな氣がして、お紺は途方に暮れ乍らも彼の思惑を探り當てようとした。

がむしやらに東京へ出たかつたお紺は、出て了つてから後の事を考へる暇もなく、只漠然と出さへすれば如何にかならうと思つて居た。出るまでの口實に吉助を使ひさへすれば、あとはひとりでに道が拓けるであらうと高を括つて居たと言へば餘り氣が好過ぎると思はれないでもないが、そこには吉助をさき〴〵まで頼りたくも頼れない理由があつた。いや、頼りたくも頼れないやうな不安なものを吉助自身の中に持つて居ると言ふ事を、お紺は知つてゐた。知つて居た

と言ふよりも、それは足る程覺めさせられたと言ふ方が中つて居た。

はる〱田舍から來たと言ふのに、又假令表向きだけにもしろ吉助が呼び寄せたと言ふ體裁になつて居るのだのに出迎へにさへ來ない彼の事を考へると昔と言つてもつい去年の夏の吉助とのいきさつが、可厭でもまざ〱と見えて來るのであつた。

――もと〱二人の間には、ほんの子供の時分から凡ての機會が與へられて居たやうなものであつた。お紺はそれを知つて居た。知つて居乍ら、東京へ勉强に出るやうになつてから一飛びにお紺なぞの手の屆かない高い處へ飛んで了つたやうに見える吉助の、何から何までのしぐさが、何時でも彼の方からはぐらかして來るのだとしか思へないやうにあしらはれつけて居たお紺であつたから、戀ひ惚れるとか惚れないとか言ふ事は考へない事に決めて居た。

それだのに、去年の盆の踊り場歸りにふとした彼の氣紛れから、――氣紛れでなければ前以つて仕組んであつたからくりの爲めにか、――全で底なしの谷へ轉げ込みでもしたやうな呼吸も出來ない眼まぐろしい熱情の中へ陷ち込まされて、それも日數にすれば十日でもあつたらうか、ああこの切なさが男を思ふと言ふ事かと嘆息しようとする間もなく、吉助からそれは生眞面目に開き直つた吉助から、手を替へ品を替へて體よく說き明かされる時が來たのであつた。

その時の細々した尤もらしい言ひ草は今では忘れて了つたが、所詮は一緒になれる二人ではないと言ふ事を納得させられると同時に、その悲しみを堪へると言ふ事が男の爲めだと言ふ風に思ひ込ませられて居た。

斯うしてお紺は半泣き半笑ひの體で別れたのであつたが、吉助が發つた同じ汽車で彼の馴染んで居たと言ふ年增藝者が來つて居て、それが單に彼の道連れであつたと言ふ許りでなく、東京へ着いてからも暫く同居して居たと言ふ噂をちらほらと耳にしたお紺は、吉助の心なしを恨むと言ふよりも寧ろ、彼の植ゑつけて行つた愛情を枯らして了はうと努め

たのであつた。

それから一ケ年餘りの間お絹にはお絹なりの新らしい生活があつて、この思ひ出は腐つた毒草のやうにあとかたもなく消えて了つたのであつた。

さうこだはりもなく諦める事の出來たお絹の前にも、彼の惡ごすい、けれども鮮かな美しい笑顔だけは、時々すいすいと通り過ぎた。通り過ぎる度びに恨みこそしないけれども、あの笑顔が曲者なのだ、うつかり氣も許せない、と言ふ風な用心は絶えずつき纏うやうになつて居た。

そう言ふ風な吉助なのであつたから、昔の事には口を拭つて、お絹の言つて遣つた通りおいそれと呼び寄せの手紙を書いて寄越した彼の遣り口には、一番用心が肝要だと言ふ事位解り切つた事であつた。

然し、解り切つた事だつたと思ふのは、今この、誰も出迎へに出て呉ない東京驛へ着いてから、やつと氣が付いた事なのであつた。

汽車の着いた一ときこそざはめいて居たが、直きにがらんと人影が散つて廣いだけに尚更、勝手の解らない田舍者を底の知れぬ不安に追ひ込みさうな構内の片隅に、お絹は腰を下してそれも何かに困つて居ると誰にも氣附かれない用心をしいしい、思案に暮れて居たが、結局外に行く處もないので、兎も角も彼の下宿まで車を驅つて遣らうと決心した。船で憶へた仕込みの東京辯で田舍者には大出來の驛前の俥を言つてから、ぢかに下宿屋へ驅け付けて行つた時は、如何な客商賣とは言へ固く戸を鎖して寢て居た後であつた。けれども、無理に起きて貰つて吉助の在否を聽くと、何處へ行つたのかこの二三日歸つて來ないと言ふ事であつた。

この二三日歸つて來ないのでは電報も見なかつたのだらう。さう解つて了ふとお絹は又、吉助の心に縋りたいやうな

氣にもなるのであつた。夜夜中叩き起した上に、何の前觸れもなく男の宿へ泊り込まうと言ふのであつたから、宿の女達から疎まれるのは知れて居たけれども、兎も角彼の歸つて來るまで待つて居るより外には仕方がなかつた。

しもたや建ての家を間に合はせたと言ふ風に廊下なしの、何の座敷にも客らしい人が寢て居るその蒲團の側を幾つか通り拔けてから、ずつと奥の暗い三疊へ通されたが、不斷は女中部屋か押入代りにでも使はれて居たらうと思はれるぷんと黴臭い中に電燈も點いて居なくて女中が後から持つて來た蠟燭の前にしよんぼり坐ると、流石に聲を出して泣きたいやうな心細さがこみ上げて來るのであつた。

ぬるま湯のやうな申譯許りの出流れを注いで持つて來たり、薄い蒲團を抱へて來たりする女中に、吉助の日頃の様子や、この二三日留守と言ふのは何處へ出掛けて行つたものであらうかなぞと訊いて見る程の智恵もなく、只うすぼんやりと考へ續けて居るお紺の心に今宵で二た晩淋しいひとりの寢床に眠つてゐるであらう母親の姿が、頻りに思ひ出されるのであつたが、軈て思案に餘つて來ると、そんな影は何時の間にか消えて了つて、だん／＼と自暴半分な考へに移つて來るのであつた。

――吉助がこの儘歸らないものなら歸らないでも好い。あの船の中で連れになつた男の處へでも尋ねて遣らう。あはよくば當分世話にもならうし小遣錢位ねだつても好いだらう。――そんな風な存外虫の好い氣になるとともに、流石長旅の疲れも手傳つてぐつすりと寢て了つたのであつた。

翌日の午前に、吉助はひよつこりと歸つて來た。お紺の部屋へ這つて來るといきなり、

「やあ、」

と言つたきり、何處そこへ行つて居たのだとも、出迎へもしなくてさぞ心細かつたらうとも言譯一つするどころか、あの眉と眉との間の近い然し美しい額を寄せて、

「荷物は？蒲團や着物はあとからなんだね？大急ぎでその手廻りも提げて僕と一緒に來給へ。」

とさもせか／＼と言ふのであつた。あゝあの調子で、去年の事にはもうちやんと鬼が附いて居るんだよ。と思はせる積りなのだな、と悟ると――その事ならちやんと心得て居ますよ。位な事を言つて遣りたかつたが、何か知らこの男の中には文句一つ言はせずに相手を思ふ通りに動かさないでは置かない、變な押しがあつた。お紺は素直に荷物を提げて男の後から隨いて出た。

ごみ／＼した裏路を二つ三つ折れ曲つた角の、小さいミルクホールの椅子に腰を下すと、吉助は急に笑顔になつて、

「さあ、此處で腹を拵へよう。お紺ちやん、吃驚した？彼處は不可ないんだよ。下宿料が三月も溜つてるんだから流石の僕も少々氣が差して、飯だけは他處で喰つてる始末なのだからね。だしぬけに女の客なぞに泊り込まれちやあ、一寸工合が悪いのさ。だがお紺ちやんの居る處はちやんと用意してあるんだから、心配しなくても好いよ。」

と圓卓子の上へ體をおつ被せるやうにして、さも内證事だと言ふ風に耳へ口を附けて囁くのであつた。その擽つたい觸感からふとお紺はあの盆の夜の吉助が再び戻つて來たやうな幻想に囚れた。――

「あんた、學校は？」

「學校？學校なんぞそんな間の抜けた處は此方からお拂箱だ。と言ふのは冗談だがこの頃親爺の奴、如何かしててね、碌すつぽ送つて呉れやがらないので、仕方なしに自分で働いて居る。學校へ出る暇なぞなしさ。」

さう言へばもう氣の早い連中は羽織でも引掛けようと言ふのに、よれ／＼になつた綿セルの着流しで、不精髭の伸び

たせいか酷く寠れて居るやうに見えた。

お紺は安つぽく感動し乍ら、

「私、船の中でお金を貰つたのよ。」

「お金を貰つた？」

「ええ、矢つ張り東京へ來る學生さんなのよ。今日位着く筈だから行つて見ようかと思つて居たところなの、」

「へえ？その男の處へかい？」

「ええ、何だかもつとお小遣位呉れさうな氣がするの、」

「それで僕に貢がうつて言ふんかい？冗談じやあないぜ、」

「不可ない？」

「お紺ちやんも隅へ置けなくなつたなあ、」

と態ざと嘆息して見せたが、

「そんなへつぽこ書生から取つた金でちよび／＼貢いで呉れなくつたつて好いよ。今に此方から頼む時があらあね、」

と、一寸固い表情をして言つた。

其處で輕い晝食を濟ませてから吉助は、前から用意して置いたと言ふ鮨屋の二階へ、眞直ぐにお紺を連れて行つた。

京橋も極く裏通りの小汚い店並びだとは言へ、東京の眞中によくもこんな家があつたものだと思はれるやうな、一寸峠の茶屋とでも言ひたい店構への、長い竿の先に布でつくつたお稲荷さんの旗を括り附けたのを軒先に立ててあるのだ

けれども、鮨屋とは名許りのほんの通りすがりの土方人足が腰を下す位のもので、婆はそうして鮨を賣るが夜になると近所の小供を集めて三味線の手解きもすると言ふ、小意氣な婆さんがひとり住んで居るのであつた。

外から這入つて來た眼には足許も解らないやうな狹い階段を上り詰めると、中二階風の低い天井と東向きの高窓が一つと言ふ何處までも陰氣づくめの六疊であつたが、お紺にとつてはこれから芽を出さうと言ふ東京での生活の足場になる處だと思ふと、上つて來早々から彼處を斯う此處を斯うと、女らしい裝飾癖さへ出て來るのであつた。

「僕もあとから直ぐ逃げて來るからね、夜にでもなつたら一緒に買物に出ようか。」

吉助はさう言つて、一旦部屋を出て行つたが又、暗い階段の中から首だけ出して、

「それから、お母さんに手紙を出すんだね。餘り細かい事は知らせて遣らない方が好いよ。」

と言ひ捨てて下りて行つた。

五

ひとりになるとお紺は、手提籠の中から小さい鏡を出して窓際に立て掛けた。

自分の顔を覗き込んで見たり、つい先刻ミルクホールの店先で見掛けた若い娘の結ひ振りを眞似て頭をいぢくつて見たり、同じ帶を幾度も締め直して見たりして居る中に、急に、何の屈托もないお嬢樣にでもなつたやうな氣がして來た。そうして、すつかり身仕舞ひが出來上ると、この練塀の中のやうな部屋にひとりで居るのが詰らなくなつて來た。

彼女は窓を開けて背仲びをし乍らそつと往來を見た。狹い露路であつたから、向ふ側のほんの一二尺位の軒下が、薄汚い暖簾や夏から掛け通しの日覆が下つた儘、直ぐ眞下になつて見へるだけで其處を通る男はあつても、態々お紺の居

ろ窓を見上げて行くものも居なかつた。

お紺は、窓から離れて喰べ殘しの卵を剝いたり、こんな時あの湯で一緒になつた男でも遊びに來ないものかと思つたりして居ると、階下で、

「御免なさい、お鮨をお呉れ。」

と呼んで居る聲がした。お婆さんは何處かへ出掛けたのか知ら、と思ふより早くお紺はもう階段を驅け下りて居た。

店先には印半纏に股引と言ふ風體に似合はない、色の生白い若い男が立つて居た。當り前なら、今はお婆さんが居ないから、と言つて歸すべきところを、小さい蝿帳の中に立てかけて居る値段書きの木札をさぐりに、男の言ふだけを包んで遣つたのであつた。それは只のおせつかい許りとは言へなかつた。その男がその氣にさへなりさうなら、無駄話しでもして見たい、そんな甘いきつかけはないものか位の氣持が動いて居たのであつた。

然し、その男はお紺の掌に五十錢玉を三つ載せると、「あとはお前に上げらあ、」とでも言ふ風な笑顏を殘して往來へ走り出て了つた。その五十錢玉一つが餘計であつたのだが、お紺はそれを前からちやんと知つて居たやうな氣がした。あの、見た事もない男ではあるけれども、五十錢玉一つ位呉れるのが當然だと言ふやうな氣がして居た。

彼女は暫く、蝿帳の板の上へ三つの銀貨を列べて見たり轉がしたり、その一つの上を食指で押へつけてぐる／＼圓を描いて見たりして居たが、ひよいと摘んで自分の掌の中へ握つて了つた。そして、あとの二つの上へ側にあつた茶盆を伏せて隱して了ふと、とんとんと音をさせて二階へ上つて行つた。

お紺は非常に晴々とした好い氣持になつた。心待ちにして居た吉助の事なぞ忘れて了つて、早く彼の手からも離れて

知らない路でも何でも矢鱈に歩き廻つて見たかつた。

　とつぷり暮れて了つてから、又吉助が還つて來た。

　上つて來るといきなり、あの光る眼でじろじろと見廻して、

「誰かに話したかい？僕達の事を、」

「いいえ、如何して？」

「下の婆さんにも話さないね？これから誰にでも兄妹同志だつて言ふんだよ。」

　吉助は笑ひもしないで押へつけるやうにさう言つた。

「だつてそんな事、誰もほんたうだと思ひやしないでせう。」

　と口では言つたけれども、お紺は吉助が如何言ふ積りでそんな事を言ふのか、ぼんやり解るやうな氣がした。

「解つた？解つたね、」

　と幾度も念を押してから、吉助はもう一度階段のところへ行つて下を覗き乍ら、

「おうい、上つて來いよ。」

　と言つた。

「ついでに上り口の行李を下げて來い。何たい、そんなとこでにや〳〵するなよ。」

　と言ふ吉助の調子は、お紺に向つた時よりも至極明るいものであつた。

「誰あれ？」

　鳥打帽を冠つた男の首から上だけが階段のところに出た。

「ほうら、お紺ちゃんのよく知つてる男さ、職人の癖に思ひ切りよく五十錢玉を一つ張り込んだ男じやあないか。」

「止せよ。手前だつて唯つた今下宿屋から夜逃げをして來たばつかりじやあないか。そんな事を言ふと、俺あ此處からこの荷物を轉がしちまふぜ。」

「おつとつと、ふざけちやあ不可ないよ。そん中に何が這入つてると思ふ、」

「知れてらあな、洗ひ晒しの浴衣が二枚とあとは新聞紙が一杯、」

「と思つてると大間違ひだぜ。――――何あんだ。減らず口を叩いてる間に到頭ひとりで持つて上つちまつたじやあないか。矢つ張り龜公は重寶だなあ、」

「人を馬鹿扱ひにするなよ、」

ひよいと行李を座敷の上へ投げ出してすつかり上り切つて了つたところは晝間の印半纏がけと打つて變つて八端擬ひの袷か何かに角帶と言ふりゆうとした扮裝で、吉助と並ぶと身態の好いだけ眼目があつた。

ああ、あの男だなと思つた瞬間から、お紺は何となく笑ひ度いやうな氣になつて居た。男にしては珍らしい肌理の細かい丸顏の、幼な顏をそのまゝに持つて居るやうな、何方かと言ふときりりとした顏付ではないけれどもそれだけに吉助などの持合さない善良さが浮いて居て、如何な惡垂れ口を叩かうとも、口と顏とは別々なあどけなさがあるので、年こそお紺より三つも五つも多いのであらうが、小馬鹿にすると言ふ程でもない或、氣安さを抱かせるからなのであつた。

お紺はこの男になら何を言つても構はないと言ふ氣がして居乍ら、甘く遣ひこなせない言葉のために縛られて、一體に道具立の大きい派手な眼顏にものを言はせるやうに、龜三と言ふ男の語り出す言葉毎に、眼をしばたいたり瞠つた

りさも可笑しさうに笑つて見せたり、それにはさう愛想の悪い女でもないと思はせようと言ふ技巧も手傳つて、他處眼には少し意を向へ過ぎるとも見へさうなしぐさをも、知らず識らずに遣つて居たのであつた。

そのしぐさに操られてでも居るやうに、總三は口輕に饒舌り續けるのであつた。――――暗くなるのを待ち兼ねるやうにして、下宿屋の二階から吉助が一つ宛、目ぼしいものから投げ出すのを、つい下の板圍ひの外に立つてゐる總三がひよいひよいと受け止めては、豫じめ物蔭に用意してあつた行李の中へ詰め込んで後をも見ずに逃げて來たと言ふ今宵の夜逃げの話しから、こんな男の友達にせられて居る人間こそ好い災難だと言ふ話しになつて、今日此頃の吉助がどんな風に困つて居るかと言ふ事、その困つて居る彼のためにどんなにして財布をはたかなければならない破目になるのかと言ふ事――――まで身振り聲色入りに少し仰々しく話すのであつたけれども、只、面白づくで聽いて貰ひたいと言ふより他意のなささうなだけに、

「これからお紺ちやんもせい／＼兄さん孝行をする積りで、少し宛つ喰はれて遣るんだな、」

と絡んだ言葉さへ、お紺はちつとも氣にしなかつた。只、耳馴れない「兄さん孝行」と言ふ言葉が、異樣に頭をかすめて行つた。

「さんざこき下しやがつたな、その代り今夜は活動位ゐで胡魔化されやしないぜ。いつその事活動は止しにして彼處をおごれよ。好い加減腹もへつて來たし、――――何あに、お紺ちやんも行かあ、ね？」

「あれだ、全く叶はないなあ、」

と聲だけはさも叶はなさうに言ひ乍ら、固い角帶の上をとん／＼叩き叩き、自分が眞つ先きに下りて行つた。

吉助は總三が下りて行くのを見すましてから、お紺の方へ寄り添ふやうにして、

「おい、帶を一寸結び替へな、少し垂れがまくれてる。——奴さん、少うし調子づいてやがるね、だが、あの調子をのみこみさへすりやあ締めたものなんだよ。」

と低い、が顏でも見たらさぞ北叟笑みでもして居さうな聲で囁いた。

お紺は返辭がしたくなかつた。强いて笑はうとすると、ひん曲つた冷い笑ひが頰に浮んで來るのを感じた。

三人は明るい街を列んで歩いた。

雄三が煙草屋へ駈け出して行つたり少し先きに立つて歩いて居たりすると、吉助はつと寄つて來て、

「お紺ちやん、もつと機嫌の好い顏をおしよ。」

と幾度となく言ふのであつた。

お紺はその度びに上眼を遣つてちらと吉助を見た。——もつと機嫌の好い顏をして雄公を喜ばして遣れよ。彼處をおごるだけぢやあるまい、事によるともつともつと甘い事があるのかも知れないぜ。——彼の顏がさう言つて居るのではあるまいかと言ふ事が微かに感じられたけれども、それでなくても、一番初めに見た時からちう好きになつて居た雄三に、斯う言ふかたちでおべんちやらを言はせられるのは、少し可厭であつた。その時から吉助を疎ましく思ふ心がお紺の胸の中で忍び歩きをして居た。

然し、それはほんたうに忍び歩きをして居たのであつた。斯うした裁斷が自分の心の底で行はれて居ると言ふ事をお紺自身さへ知らないで居た。若しくはこの微かな憂鬱の方が、ほんの一瞬間より長くお紺の心に留つては居なかつた。女主人公めかしく二人の若い男からちやほやされて居ると言ふ意識が、お紺を有頂天にさせて居たからであつた。

「彼處」と言ふのは、とある四つ辻の角店になつて居るほんの二階二間許りの小料理屋であつた。男二人には行きつけ

の處と覺しく中でも吉助は、座に落付く前にもう降りて行つて、つい階段の下でここの女とふざけたりして居た。

「あれなんだから、此處へ來るのは全くあの男へのお交際見たいなもんですからね、」

と總三は笑ひ笑ひ、それでも他人行儀な言葉で言ふのであつたが、さうして吉助が少しでも座を外して居て呉れる事は有難い事のやうであつた。お紺と二人限りになるのがそれは嬉しいのだと言ふ風な氣持を隱さうともしないのであつた。

「お紺ちやんは學生が好きなのでせう？」

「え？」

「僕もこれで中學の三年頃まで遣つたんですよ。」

「さう、今だつて學生さんのやうだわよ。」

お紺は總三の機嫌を取るやうに斯う言つたが、ふと、あの船の中で連れになつた男と何處か似通つて居るやうな氣がして、

「私、船の中でそれは親切な學生さんと一緒だつたのよ。その人……」

お紺はその男が金を出して呉れた事を話さうとしたが、急に口を噤んだ。

「その男が如何かしたのですか。」

「ええ、貴方にようく似てゐたからふつと思ひ出しちやつたの。」

總三は嬉しさうに、眼瞼の腫れぼつたい小さい眼で笑ひ乍ら、

「僕だつて學校は可厭じやあなかつたんですよ。叔父さんとこで人手が足りないつて云つて無理に言ふもんだから、仕

方なしに退いたんですが、今でも大工になつて了ふ氣になんぞちつともなれないんです。だから、友達でも學校へ行つてる連中と許り交際ふやうになつて、——だけど、叔父の處に居れば金に不自由をしないだけ好いと思つて諦めて居るんですよ。お紺ちやんさへ可厭でなかつたら、僕、指輪だの帶だのを買つて上げても好いと思つてるんだけど……」

「何だい。人が一寸居ない間にもう遣つてやあがる。僕、僕つて言ふから何處の書生さんかと思つたら、」

何時の間に上つて來たのか、兩方の手にビール壜をぶら下げた吉助が障子のところからひよつこりと顏を出した。其處へ摘まみものか何かを持つた女も上つて來た。吉助は、もうぽつと赫くなつたきれの長い眼でしげじげとお紺を見詰めて、

「お紺ちやん、そんな男に口說き落されるよりも、こんなところの姐さんになつた方が氣が利いてるぜ。ほら、如何だい。白粉で胡魔化して居るがこの女なんぞ大した代ものぢやない、それで結構通用してるんだからね。まあ、さう怒るなゝ。——ところで、妹の事を斯う申しちやあ口幅つたいが、お紺ちやんなぞ磨きをかけると素晴しい女になるぜ、なあ、お召の素袷か何かに黑繻子か鹿の子の腹合せを締めて、——これだ、この女だつて錦紗の裾廻し位引摺つてるんだからね。——だが、お紺ちやんならさぞ稼ぐだらうなあ、」

斯う獨りで饒舌り立てて居る吉助の顏は、初めの間こそふざけ半分に見えて居たが、少し宛つ醉が廻つて來るにつれて血走つた眼が、如何かした拍子にぢつとお紺を見詰めて動かなくなるのであつた。——お前はもう逃げる事ぢやあない。いや、逃げようつたつて逃げられるんぢやあないよ。何でも俺の言ふ通りにならなきやあならないよ。——その眼は、言葉の調子とは全でうらはらに斯う言つて居た。

お紺はそうつと眼を反らした。反らすと同時に、吉助の眼の奇妙な壓迫から逃がれたと言ふ、或のう〳〵とした氣易さ

の隙間に乗じて、おぺんちゃらのありつたけを言はれた時の女らしい誇らしさが、他愛もなくお紺の心を捕へて了つた。
お紺は、あの愚かしい笑ひで身を藻掻き乍ら、
「可厭あな兄さん、」
と言つたのであつたが、その、「兄さん」と言つた自分の聲に、お紺は我にもなくぎくつとした。まあ、あれはこの私が言つたのか知らと思ふと、耳がかつと赫くなつた。それは、誰も見て居さへしなければ、ぺろつと赤い舌を出して自分で自分を笑つて遣りたいやうな恥しさであつた。
吉助は態さと素知らぬ顔をして、
「おまけに色んな男からちやほやされて、さ。全くそこへ來ると男は慘めだなあ、綿セルの單衣で慄へてるんだ。」
これらのおべつかは、快くお紺の耳に浸みて行つた。お紺は眼を大きく瞠つてじつと上眼を遣ひ乍ら、低い軒の間から僅かに見へる空を、その空の彼方の大坂で、恐らく今もしな〳〵と捲足をして歩いて居るであらうお品の上を見遣らうとした。

六

軈て二人は表へ出た。
「今度は賑やかな通りの方へ出よう。」
と吉助は先に立つてぐん〳〵歩き出した。
「駄目だよ。其方へ行くと大廻りになるぢやあないか。」

「なあに、お紺ちゃんに東京見物をさせて遣るんだ。」
　吉助はお紺の側へ寄つて來て、
「如何だい、お紺ちゃん、あんな處の女になるのは好いだらう？　なあ、なつても好いだらう？」
「私、解らないわ。」
「解らなかあないよ。實物教授をして遣つたぢやあないか。」
「だつて私、全で眼の前がぐる〳〵廻るやうなんですもの、」
と少し笑ひ乍ら言つた。
「ほんたうだよ。今日着いた許りだのに、あんな處もこんな處もありやしないよ。」
と龜三が側から言ふのを、吉助は露骨に――お前なぞ沈默つてろ、――と決めつけるやうな眼でじつと見返した。
　お紺は、吉助のその眼に手もなくけをされさうな龜三をかばふやうに、又、龜三のところから吉助の眼をこちつと引戻すやうに、氣弱く笑つて、
「あの、今朝御飯を喰べたでせう？　あの、」
「ミルクホール？」
「ええ、あんなとこぢやあ不可ないこと？　私、今のやうなところも可厭ぢやあないけど、先刻の女の人ね、あんな風な様子なら到底も出來さうぢやあないもの、」
　ほんたうの事を言ふと、お紺の頭の中にはお品の事がこびり附いて居た。何んなものになるにしてもお品には負けたくなかつた。と言ふよりも、お品とは全で違つた世界でお品を出し抜いて遣りたい、と言ふ氣持の方が動いて居た。

「ぢやあ其處だ。この電信柱の陰に立つて御らん。」

「あの明るい店？」

「うん、今朝のとどつちが好いんだ、」

十間もあらうと言ふ間口をぶつ通しの叩土にして、一面にお伽噺の袋の中からぶちまけでもしたやうな卓子と椅子と人の頭と灯の光りとがぎつしり詰つて、その灯の中に溶けて一夜を歡樂の聲が漲つて居る有様は、お紺の眼を奪ふのに充分であつた。

「何方が好いんだい？」

お紺は極り惡げに首を縮めて笑ふ眞似をし乍ら、

「だつて、あんなとこ、」

「あんなとこなら好いんだらう。ね、好いんだね。」

金で取引でもするやうな素氣なさであり乍ら、變に固い調子で吉助は念を押すのであつた。

五六日過ぎた。

吉助は朝起きるとから殆んど日暮れまで、それもほんの斉流しの傍でぶらりと出るのであつたから、勿論學校ではなし、さうかと言つてちやんと極まつた勤め口でもありさうな様子にも見へないので、彼が外へ出た時間を何處で如何様して居るものか、お紺には皆目見當も附かないのであつた。

朝と晩と一日の中二度は、面と向つて同じ膳で箸を取つて居乍ら、いやそれよりも同じ一つの寝床の中に寝て居てさ

へも、ついぞその事に言ひ及んだ事もないのであつた。と言ふのも、一度などは遠廻しにでも訊いて見やうと心組んで切り出したのであつたが、手際よくするりと抜けて了つた上に、――一體、お前なんぞがそんな事を訊いて何の足しになると言ふのだ。――と逆に決めつけて來さうなけはひまで見えたので、その訊いてならない仕事の正體がうすうす伴らたちの好いものであらう筈がない、と感づかれると同時に、お紺はぷつりと口を噤んで了つたのであつた。

仕事の解らない不氣味さは、お紺に始終用心させた。ひとりでに、得體の知れない男だと思ふやうになつては、假令肌と肌とが觸れ合つて居ようとも、全で木の幹でも抱いて居るやうな、男の體がすうつと雲の上へ漂つて行かれでもしたやうな、うつろな思ひがするのであつた。さうかと思ふと、縷々として盡きない睦言を囁かれる時、お紺ははつとして、ああ、吉さんは矢張り此處にお出でたのか、と思ふのであつた。

結極吉助と言ふ一人の男は、お紺に取つて幻燈の繪のやうなものであつた。淡いけれども眼に見えて居た。見えて居たかと思ふと遠のいた處で消えて了ふのであつた。

お紺は捕へどころのない男に精根を疲らす事の代りに、ちよいちよいと鑑三の方を見返した。見返さうと思はないで見返して居た。

その鑑三は最初の日以來、毎夜のやうに遣つて來た。初め二三日こそ諂ふやうな笑ひ方をして、

「如何だい？　今夜も何處か甘い處を奢れよ。」

と吉助から言はれれば、仕方がないと言ふ風にお紺も一緒の三人で飲み喰ひをして歩く事にして居たが、後には階段を上つて來早々、自分の方から機嫌を買ふやうに、

「飯はもう濟んだのかい？」

なぞと言ひ出すのであつた。總三の顔には一日増しに氣弱さが現れて來て、偶に吉助の好きなハイカラな洋酒でもあつらへやうものなら、

「いよう、今日は又素晴しいんだな、大丈夫かい？　もつと飲んでも好いんかい？」

と吉助に言はれるのを、しんから嬉しさうにやつと應揚さを失はない程度の作り笑ひをしいしい、隠居でも持つて居さうな町人好みの布でつくつた三つ折財布を態々出して見せるのであつた。

――俺はお紺ちやんに惚れて居る。吉公がお紺ちやんの兄さんなら、吉公の機嫌を取る事だつて俺にはどんなに嬉しいのか知れないのだ。何なら俺はもつともつと金の工面をして來ても好いのだが、――その苦しさうな作り笑ひは眞つかふからさう言つて居るのと同じであつた。

如何した拍子に又何時の間に、總三にこんな眞似をさせて居る惡黨が「兄さん」になり了せたのかお紺は解らなかつた。お紺自身の口から、田舎に居た頃の「吉さん」と呼ぶ代りに、さもやす〱と「兄さん」と言ふ言葉が出て居ると言ふ事を信じる事が出來ないのであつた。

彼が無理強ひにさう呼ばせて居るのだと言ふ氣がしたり、總三のお人好しが一も二もなくさう思ひ込んで了つたために、自分までがさう呼ばなくてはならなくなつたのだと言ふ氣がしたりした。

總三はお紺の顔さへ見れば、

「兄さんは？」

と一番先きに訊くのであつたが、さう訊かれる毎にお紺はぎくつとした。魔法箱の中からぽつかりと浮き出たやうな鮮かさで、吉助の夜の姿がお紺の頭の中をかすめて行つた。――兄さんじやあないのよ。あれは皆嘘なのよ。あの人はず

うつと前から私の情人なのよ。――お紺はさう言ふ事の代りに、

「兄さんは用達し。夜にならなくつちやあ歸つて來ないでせう。」

と言つて退けるのであつた。――何の構ふ事があるものか。兄さんだの兄さんでないだの、そんな事はどつちだつて好い事じやあないか。――お紺は、龜三の子供つぽい顏を眞直ぐに見詰め乍ら、自分の心に言つて聽かせるのであつた。

龜三は法被掛けの儘で晝間もよく遣つて來た。洗濯場もない長屋建ての事であつたから、お紺は往來、と言つてもほんの五六尺幅の狹い往來の片側の水道栓のところにしやがんで、吉助から言ひ付けられた彼のシャツや足袋や如何かすると猿股まで――彼はほんの一時間前までお紺を甘やかして居た事さへ忘れたやうに、いかつい眼をして、

「忘れるんじやあないよ。吃度洗つときなよ。」

と言ふのであつた。そんなきつい眼をしなくつたつて、私、忘れやしない事よ。とお紺は心の中で氣弱くあらがひ乍ら、沈默つてそれを受取るのであつたが――その吉助の汚れものを洗つて居る側へ遣つて來て、それはいつも乍らの事であつたが、着て居る法被の衿を引つ張つて見せるやうにして、

「變でせう? 僕にはちつとも似附かないでせう?」

と言ふのが癖なのであつた。

「僕、ほんたうはこんな格好で來たくないんだけど、つい近くで仕事をして居るもんだから、お八つの時分になると拔けて來て見たくなつちやつて……」

と言ふのであつた。そして、吉助は居ないと聽くと、法被の下から伊達卷だの帶締めだの、偶には鼈甲擬ひの中挿し

だのを出して、

「僕、今日はこんなものを持つて來たんだけど、」

と極まり惡げにしてお紺に遣るのであつた。

斯うして、お紺の田舍から持つて來た小さい手提籠の中に龜三からの贈り物がだん〳〵殖して行つた。

或夜、少し許り飲み過ごした吉助の手で、その籠は引つ掻き廻された。

「龜公の奴、今に失敗じりやがるぜ。」

「失敗じるつて?」

「さうさ、いくら叔父さんだつて高が職人の親方ぢやあないか。さうさう遣ひ込まれちやあ、沈默つてなぞ居つこないよ。こんな細々したもんだつて金目にすりやあ大したもんだぜ。それに毎晩のおつきあいだつてあるし、」

「あの人、居候なの?」

「居候でなくつたつて追ん出されて了ふよ。――まあその時は、お紺ちやんと言ふ凄い女が附いて居るんだから、何とでもして遣らあ、ね?」

「可厭あな――ひと、」

その笑ひ顔とはうらはらに、お紺の胸をうそ寒さが通り拔けた。

七

龜三は小さい眼を血走らせ乍ら、詰問するやうな調子で言ふのであつた。思ひなしか顏色の非常に蒼くて何時もなら

「兄さんは未だなの？」位聴くところを出し抜けに、
「兄さんが何とか言つたでせう？」
窓際に立つて頭を梳かしかけて居た手を止めて、お紺は不思議さうに龜三を見詰めたが、
「貴方の事？」
「いや、お紺ちやんに何處かい出ろとか何とか、」
「ずつと前にはね、ほら何時やらの晩、貴方も一緒だつたじやあないこと？」
「あれつきりですか、」
「ええ、」
「——構はないからお梳かしなさい。」
さう、龜三は、角兵衛獅子のやうに中ぶらりんに下げた頭の顔だけを此方へ捻ぢ向けて、長く垂れ下がつた黒髪の間から自分を見て居るお紺に言つてから、自分はじつと下唇を嚙んで眼を一ところに凝らして居たが、
「じやあ、今夜でも言ふ積りなのかなあ、——僕、如何してあの人があんな氣になれるのか不思議で仕様がない。」
「どんな氣に？」
「だつて僕には、體よく欺して居た女なのだが、途中から可厭になつたから、何處へでも賣り飛ばすのだ、位にしか考へて居ないやうに聽へるんだもの、」
「私を何處かい賣るつて？」
お紺は首をかくつと仰向けて髮の毛を後へ跳ね返し乍しながら、ぺたんと坐つた。突然、お紺の心に、賣るとか賣ら

れるとかの當面の問題を離れて、この自分は吉助にとつて何であつたらうと言ふ、もう解り切つて居る筈であり乍ら考へて見た事すらなかつた疑問が、頭を擡げて來た。

この十日許りの吉助が、自分に何として與れたと言ふのか。何かして與れるどころか、自分の方が朝から晩までだしに使はれ通しだつたのじやあないか。あの可厭な退屈な雜用、——炊事、縫物、掃除、洗濯、——それもあとからあとから態ざと人をこき使ふために汚してでも居るやうにしか思へない、まあ、何だつてあんな馬鹿々々しい事を辛抱して居たのだらう。それでも私は、どんなに苛々したか知れなかつた。こんな事をして居る間に、私は何か、それはもうめつたに出會す事も出來ないやうな出世の蔓を、見逃がして居る處なのじやあるまいか知らと、どんなに氣が揉めたか知れはしない。それだのに私はじつとして居た。それから夜は？　夜は私をえばに使つて、この總三さんの財布をはたかせて許り居た。それから？　ああそれから？　それから如何したのか、それから二人で一緒に寢たのじやないか。毎晩、毎晩、……

お紺は、ここでぴたりと止めて、そうつと總三の顔を見た。

「賣るんじやないけれども、何でも前借が大分出來さうだとか、これで當分飲めるのだとか言つて居た。」

「それは何時の事なの？」

「昨夜ですよ。お紺ちやんが着替へをして居る間階下で待つて居たでせう？　あんとき、——だが、それを今までお紺ちんに話さないとすると、ああ言つとけば僕が又何とか思つて金でも作つて來ると思つたのかなあ、ほんたうの事を言ふと、僕、」

——本能的な惧れがお紺の胸を掠めて通つた。——

「僕、金をこさへて來たんだけども、」

つい昨夜の吉助との會話が、もう一度はつきりお紺の頭に浮んだ。お紺は惧れに滿ちた眼を擧げて、今にも、——お紺ちやん、ほんたうの事を言ふと俺あ、この金を盜んで來たんだ。叔父んとこの錢凾からそつと盜み出して來たんだ。これで俺あ、もう二度とあの家へ歸つて行けなくなつて了つたのだ。——と、斯う言ひ出すのかも知れない龜三をじつと見た。

が、さう言ふ代りに龜三は、言はでもの事に破目を外して、とでも言ふ風な所在なさの眼の向けどころに迷つて、つい眼の先に落ちて居る、さきおととひ自分の手からお紺に遣つた新ダイヤ入りの飾櫛へ眼を遣つたのであつた。

龜三の哀愁を滿へたうす暇い眼瞼はお紺の胸に浸みて行つた。恐らく今の龜三の胸に往來して居るであらう思ひが、龜三自身でもあつたかのやうに、お紺の胸にも往來した。——俺は、お紺ちやんをあんな處へ出すのが可厭なのだ。そりやあ俺だつて、派手好きなお紺ちやんのこつたから、ひよつとしたら自分からあんな處へ出たがつて居るのじやあるまいかと思はないではないのだ。然しお紺ちやん、俺はあんな處でお紺ちやんが俺よりも別な澤山の男共に、何かお愛想を言ふやうになるんだらう、と思ふのは堪らない。何卒、俺のためにあんな處へ出たがらないでお呉れ。そのために俺は、お前の兄さんに遣つても好い、と思つてこの金を持つて來たのだ。——

この時お紺は、この愚かしくも素直な男と一緒に、何處か遠い處へ突つ走つて了ひたいと言ふ、突然な誘惑に唆かされた。……金も持つて居ると言ふのではないか、恐らく、こんな男との女夫ごつこは五日と續きはしないだらう、然し三日は續く、而もそれはどんなに面白い三日であらう。……

然しそれらの慌しい思ひは、お紺の心に影も留めないで行き過ぎて了つた。丁度歸つて來たらしい吉助の聲が、階下

から聞えたからであつた。

「龜公、來てるのか。」

龜三はちらと階段の方へ眼を遣つたが、常に似氣なくきつぱりと、

「いや、今歸るところだ。」

「來てたから歸るんじやあないか。何だい？」

二人の男は、階段を上り詰めてほんの疊、半疊ほどの板敷の上に突つ立つて、一寸の間お互に顏を見合せた。お紺の坐つて居る處から龜三の肩越しに、したたか飮んで居ると見え乍ら尙更蒼白み渡つた吉助の顏が、つい今まで浮べて居たらしいふやけた笑ひの名殘りを片頰に漂はせ乍ら、それでも努めていかつく裝はふとして居るらしい顏が、半分見えた。

「又來る。」

「ああ、又遣つて來な。」

吉助は、龜三がすつかり下りて了つた處でつか〳〵とお紺の方へ遣つて來た。

「何を話してたんだ。」

「唯のお話し」

「唯の何の話しなのだ？」

今までお紺の心の底を忍び歩きをして居た吉助に對する憎しみが、表面に躍り出た。お紺はうそぶくやうな顏付をして上下の齒をカチ〳〵と噛み合せた。

吉助は急ににやりとして、

「俺がもつと遲く歸つて來れば宜かつたのかい？　ええ？　何か面白い話しだつたのかい？　――まあそんな事は如何でも好いや。今日は是非ともお紺ちやんに機嫌の好い顏をして貰はなきやならない事があるんだ。俺あもう、約束して來たんだが、」

「私を賣つて了ふつて約束？」

「賣る？　冗談言つちやあ不可ない。總公の奴、餘計なおせつかいを燒きやがつて仕樣がないなあ。第一、お紺ちやんが賣られるやうな間拔かい？　それどころじやない、俺あ出來るだけお紺ちんの好きさうな處を撰つてたんじやないか、この十日の間、俺は物好きでほつき歩いてたんじやあないぜ。やつと好いとこがめつかつて、さあ行つて貰はふと言ふ段になつて、さう開き直られちやあ參つて了ふじやあないか。」

「あんたは！」

――その前借でもう飲んで來たのね、――と言はうとしたが、我乍らはつとして、

「私何處へも行くのは可厭よ。行きたかつたら自分でさつさと行くわよ。」

「何だつて？　お紺ちやんは怒つてるのかい？　それちやあ全で、お紺ちやんは可厭がつて居るんだのに、俺が無理おしつけに遣らうとしてるやうに聽えるじやないか。若しさうだつたら、お前の言ふ通りに賣ると言ふもんだ。――だがお紺ちやん、お前、自分でさう言つたのじやあなかつたのか、あの本通りの角にあつた明るい店のやうなんなら行つても好いつて、」

「ええ、あの時はさう言つてよ。だけど今は可厭！」

「弱つたなあ、そんな駄々つ子のやうな事を言ふのはお止めよ。俺あ、今夜一緒に連れて行くつて言つといたんだのに、」

「何と言つても可厭！」

「何？」

「行くのは可厭よ。」

「さうか、可厭なのか、」

　吉助は暗い部屋の中を行つたり來たりした。

「可厭なら可厭で可いから、何故可厭なのか聽かうじやないか、――おい、何故可厭なのだ。ついこないだまで、何處かの書生つぽを蹴して、俺に貢いでも好いなんて太え量見で居たお紺ちやんじやないか。如何してこれ位の事が可厭なのだ。

　俺なんかにはもう用がないつて言ふんだな、俺の爲にするのが可厭だつて言ふんだな。斷つて置くが俺はもう、金を六十圓許り借りて來たんだよ。今更お紺ちやんが行かないからつて、それを返して來る氣になぞなれやしないよ。俺あ盜つて了ふよ。そして、今夜からでも此處には居なくなつて了ふよ。可厭だつて言ふからにやあ、そんな事位承知の上だらうが……」

　お紺はじつと押し沈默つて居た。何も彼も如何でも好いやうな氣がした。――ふいと今頃、少し屈み加減の腰を曲げ乍ら蜜柑の皮を干して、來年の蚊燻しでも拵へて居るであらう母親の姿が思ひ浮んだ。――

「如何だ。それでも、行かない積りなのか。」

お紺は急に顔を擧げた、

「あんたは、私が行くと言ふまでは押して來る積りなのね。私、如何しても行かなきやならないやうになつてるんでせう？」

「さうさ。」

「そんなら行くわよ。その代り、これからは何も彼も私の勝手だわ。」

お紺は斯う言ひ乍ら櫛に絡まつた抜け毛を一本一本自分の指に捲き始めた。急に眼がしらが霞んで來て、大粒の涙がぽたぽたと落ちた。

吉助は憎さげにその横顔を白眼んで居たが、怒りを制へて努めて冗談らしく言つたのであつた。

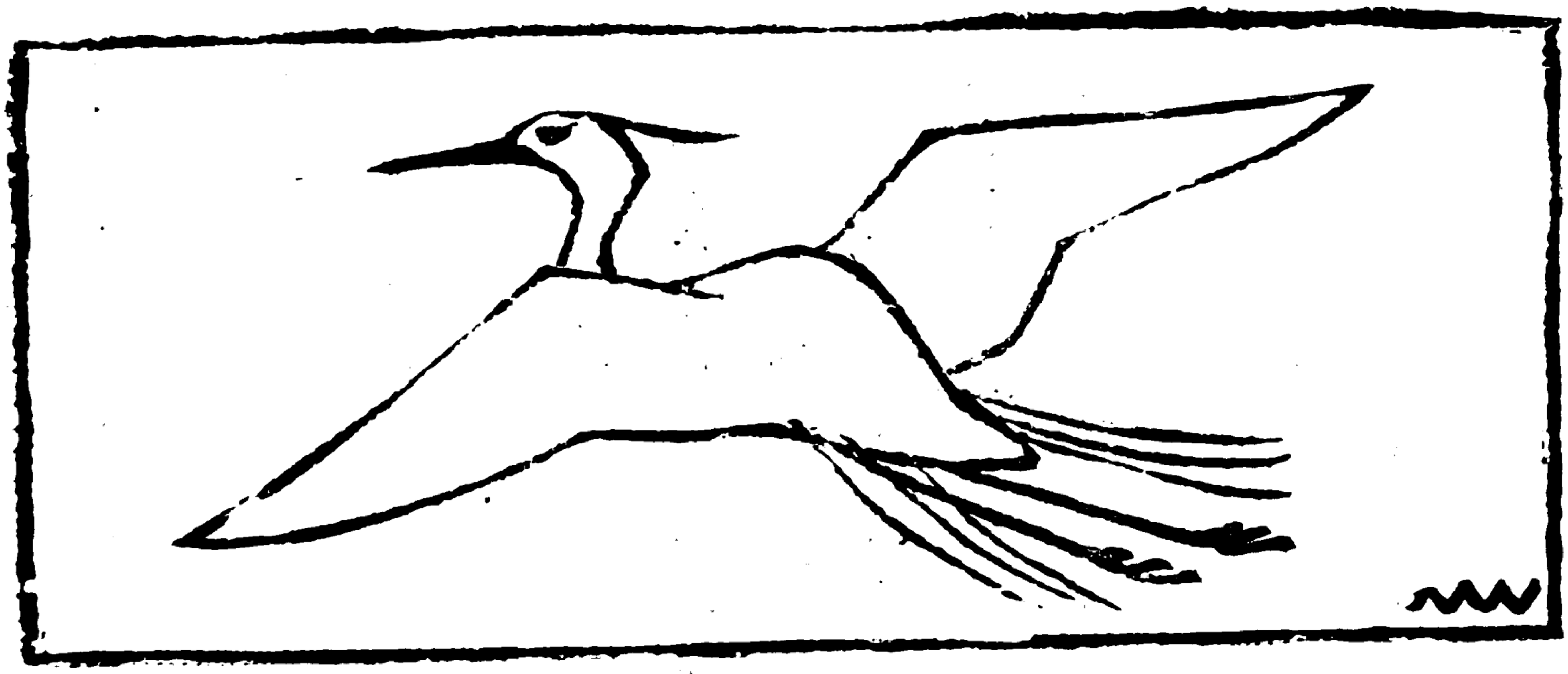
「じやあ、早く髪を結つてお了ひ。それから……少こし白粉をはたくんだな。」

「ええ、ええ、それはそれはお面のやうに塗つて遣るわよ。」

お紺は荒々しく窓を開けて、青ペンキ塗りの鐵格子に手鏡を立てかけた。

ふと、この窓の下の暗い露路に龜三が立つて待つて居るのではあるまいかと言ふ氣がした。

——一九二三、八、八、——



盗み

菊池寛

私は、十三のとき、昔の制度で、高等小學校の二年生のとき、友達から盗みをすることを教へられた。

その友達は、香川と云つて、才ばしつた少年であつた。どんな機會に、どんな風に教へられたのか覺えてゐない。とにかく、香川は私に、商店の店頭に在る品物を、盗むことを教へて呉れた。そして、それをマイナスと云ふのだと教へて呉れた。マイナスと云ふのは、卽ちその頃、覺えた算術の符號で、引くと云ふことなのである。つまり、店頭に在る品物を引き取ると云ふ意味なのである。

私は、マイナスと云ふ言葉と、その仕事とをどんなに珍しがつたか分らない。マイナスと云ふことが、つまりあの家庭や學校で、蛇蝎のやうに卑しむ盗みと、同じであるなどは、私は考へつかなかつたやうである。

私は、早速そのマイナスをやつた。今でも、私の鄕里の町にある宮崎と云ふ大きい書店で、一冊の「日清戰爭實記」を、マイナスした。明治三十三年頃のことだか

ら、「日清戰爭實記」も古本であつたに違ない。私は、店のはづれに置いてある、その本の堆積の上に、上半身を掩ふて、一番上の一冊を見るやうな風をしながら、その下の一冊を、私の膝の方へ滑らした。そして、それを着物の膝の下へかくすと、素早く店頭を離れた。私は、直ぐその足で、香川を尋ねて報告した。香川は、私の大膽さを賞めてくれた。私は、非常にそれが面白い冒險的な仕事に思はれた。

私は、直ぐその面白い冒險を、私の家の近所の遊び友達に敎へた。私の親類に當る計太や、東京から來てゐた中學校の先生の息子の敏夫や、町の工藝學校の小使の息子の保吉に敎へた。みんな、この新しい遊戲をどんなに、面白がつたか知れない。それは、その仕事その物が、冒險であるばかりでなく、ちやんと貴重な收穫があるからだつた。私達は、銘々その技に熟練を競ふた。計太が、五錢のものを取ると、私は十錢のものを取つて、彼に見せびらかした。すると、その翌晩は、計太が二十錢のものを取つて、私に見せた。世の中が、今ほどは世智がらくなかつたのだらう。私達は、町中を遠慮なく横行することが出來た。一の玩具屋の同じ棚から、私達の仲間が、銘々に同時に、一つ宛獲物を、さらつて出て來たりした。

丁度、その頃私の町に、あの深川言葉が、流行つて來た。深川言葉と云ふのは、一つの音の下に、それと同じ段のカ行なり、ナ行なりの音を加へて話をする方法で、「お前」と云ふのを、「オコマカエケ」と云ふの類である。私達は、その言葉を、早速私達の黨類の隱語にしてしまつた。

私達は、その隱語で、盛に我々の仕事の話をした。毎日、夕方になると、私達は此方の辻、彼方の辻に寄り集つて、その晩の手筈を、隱語で話し合つてから、その夜の襲撃に出かけた。ほんとうに、襲撃だ。冒險的で、ロマンチックで、不安と希望とで心が躍るのだから。

私は、ある晩、町の水神さんのお祭りに行つて、露店の果物店で、桃をマイナスしようとした。私が、その仕事に掛つてゐると、私の横に並んでゐる私と、同じ年位の美しい少女が、私と同じやうにモヂ〳〵してゐる。蛇の道はへビで、私は直ぐ、その少女の擧動不審を感じた。私は、自分の仕事を忘れて、その少女を注視してゐた。すると、その少女の白いしなやかな腕が、一つの大きい桃を掴んだかと思ふ、鼠が物を曳くやうに、徐々にそれを白い浴衣の上前の後へかくした。私は、それを見て何う感じたか、思ひ出せない。美しい少女の同類が居るのを知つて、微笑を洩したか、それとも、自分のする事を、人がして居るのを見て、あさましく思つたか。前のやうであつたやうに思ふし、後のやうに感じたやうにも思ふ。とにかく、何だか怖しくなつて同じ店で、桃を取らなかつたこと丈は記憶してゐる。

私達のマイナス行は、一年近くもつゞいた。殊に、工藝學校の小使の息子の保吉は、單獨行動を始めて、だん〳〵金高の嵩む品物を取つてゐた。その頃、珍らしいハーモニカを取つたり、櫻井鷗村の冒險小說のシーリーズを揃へたりした。私達は、何だか恐くなつた。

「保吉のやうな事をしたらいかん。あんな高い物を取つたらいかん。」

私達は、そんなことを云つて非難した。何だか保吉丈が、悪人のやうな氣がした。

私達の非行が、學校へ知れたのは、私達があまり、マイナスをやらなくなつてゐたその年の秋の終りであつた。私達の仲間の敏夫丈は、師範の附屬小學校へ通つてゐたが、何か別な事を調べられたとき、喋べらないでよいマイナス行を喋べつたのである。

附屬小學校からの通牒があつたので、私達の犯罪は直ぐ分つた。私は筆と紙とを與へられて、自白を强いられた後、學校の玄關へ立たされた。筆紙を與へられたので、何だか大罪が發覺したやうな氣がして怖しかつた。

私の父は、當時その小學校の事務係をしてゐた。面目を潰ぶされた父は、火のやうに怒つて、玄關に立つてゐる私を、つゞけさまに毆つた。玄關には體操用の銑器を並べてあつた。私は、父に小突かれたゝめに、その銑器の金物に、いやと云ふほど、頭をぶつつけたので、その方が可なり痛かつた。

家へ歸つたとき、父はまた煙管で私を毆ぐつた。

「萬引をしてゐたんぢや此奴は、萬引を。」

さう云つて、父は口惜しさうに、母に報告した。私は、小さい時から、小說や講談が好きなので、講談などで、泥坊などがよくやる萬引と云ふことを知つてゐた。私は、自分のしてゐたことが、その下品な怖しい言葉で、說明されたので、ハッと思つた。母は泣きながら云つた。

「お前は家では、一錢のお錢だつて、だまつて持つて行かんのぢやから。こなゝ事しようとは、夢にも思ふとらなんだ。」

私は、自分がやつてゐたマイナスと云ふことを、父や母の云ふやうな賤しい怖しいことゝは考へられなかつた。いな少くともそのときまでは、考へてゐなかつた。

その日から、四五日私は學校へ行けなかつた。そのあくる日の朝、私はよつぽど、氣が轉動してゐたと見え、母の手鏡を踏み割つた。母は何時になく險しい眼で、私を見た。

その以後、私は自分の行爲に對する罰を、いろ／＼な形式で、受けた。私の親類の計太は、私と同じ教室であつた。習字か何かの時間に、彼は悪戯をして、先生に叱られた。强情な彼は、二言三言口答へをした。先生は怒つて云つた。

「何を云ふんか。お前は、コレをした人間ぢやないか。」

さう云つて、先生は右の手の人指し指を曲げて見せた。計太の直ぐ、近所にゐた私は、カツとなつて暫くの間は、頭を上げることが出來なかつた。

三年になつて、先生が變つたが、その先生も絶えず、私に侮蔑の眼を送つた。「盗みをした子だ」、そんな意味が、絶えずその眼の裡によめた。

その先生は、生徒の行狀を一等、二等、三等に別けた。名札を三等に別けて、教室の壁にかけた。三等丈は、黒札に朱で名前をかいてあつた。そればかりでなく、運動場へ出るときは、三等者は、その札を首に吊つて出る規則だつた。私は、前年の非行のために、三等に編入された。そして、當分の間であつたが、安達ヶ原の宗任のやうに、札を首に吊つて運動場をかけづり廻つてゐた。

その先生は、何かのときに云つた。

「人間は氏より育ちと云つて、士族の息子だつて性根の曲つてゐる奴は、曲つてゐるのだ。」

田舎の町では、まだ士族と云ふことが問題であつた。私は、それを自分に對する攻撃であると解せずにはゐられなかつた。

さうした侮辱は、私の小さい心には可なり徹へた。私は、マイナスと云ふことを、そんなに惡いこと丶は、思へなかつたが、その罰の怖しさにこり〳〵したのである。

たゞ、私の級の少年達は、みんな寛大で自由であつた。彼等は、私の行爲に對して、大人が持つてゐるやうな概念的な非難などは、少しも持つてゐなかつた。黒札を吊つてゐる私を、喝采こそすれ、侮蔑するものなどは一人もなかつた。私は級の中では、人望もあり何かの場合には、肝煎役などになつてゐた。

私は、中學時代を大過なく過した。たゞ、青年時代を通じて「盜み」と云ふことが、人並以上に怖しかつた。私は、その嫌疑のかゝることとさへ怖しかつた。だから、私は小學校以來、書店の店頭などに立つたことは決してなかつた。私は他人のものなどには、指も觸れないやうにした。そんな意味で、破廉耻罪の關する限りでは、何人よりも身を愼しみ通したと思ふ。

二十年近く經つた。四五年前の事だ。新聞記者をしてゐた私は、本鄕三丁目の角の長島と云ふ洋物店で、手套を買つたことがある。店員は、私が撰んだ手袋を紙に包んで、私に渡すと、私の渡した紙幣につり錢を與れるために、奧へ引つ込んだ。

氣短で、ムラ氣の、いつも何かしてゐたい私は、一旦包んで與れた手套を、また包み紙から、取り出して見て、それを今度は紙に包まずに、無雜作にズボンのポケツトに押し入れた。その途端に他の店員が、私の方をチラリと見た。彼は、險しい眼付をしたかと思ふと、いきなり私の前に置いてあつた幾つもの手袋を、手荒くしまつた

「早く品物をしまはなけりや駄目ぢやないか。」

彼は、つり錢を持つて來た小僧を叱りつけた。私は、顏を逆さまに撫でられたやうに、カツとした。

「何だ! 僕が、手套を盜つたとでも云ふのか。調べてくれ。これは、今買つたんだぞ。見ろ! 見ろ!」

私は、眞赤になつて手套を突き付けながら、怒鳴つた。

主人や、奧に居た店員が、出て來て詫びを入つた。人だかりがしたので、私はさう〳〵に其處を出た。私は、口惜しさで、ムカ〳〵した。が、冷靜になつて、考へると、やつぱり二十年前の古傷が、血を吹いたのだと思つた。

それから、二三年經つた。私は、新聞記者をよしてゐた。私は、ある日、本鄕の大學の正門前の古本屋で、日本文學

全書の「榮花物語」を初め四五冊古本を買つた。私は、代價を拂つてから、それを一まとめにして、脇にはさむと、自分の家の方へ二三町歩いた。其ときに、ふとその一まとめの古本の一番下に、自分の買ひもしない本が、交じつてゐるのに氣が付いた。私は、あはてた。それは、「韓非子講義」と云ふ表紙のとれてしまつた本だつた。

私は、先刻金を拂ふときに、自分の買つた本を、まとめて店に並べてゐる本の上に置いた。そして、今度持ちあげるときに、餘計に一冊取り上げたのである。私は、何かの本で、東京の不良少年が、パクリをするとき、それと同じ方法を用ゐることを讀んでゐた。私は、無意識の裡に、同じことをやつてゐたのだ。

私は、その本屋の主人とは、一面識があつた。私は、ひき返して行つて、

「間違つてこの本を持つて行つたよ。」と云はうかと思つた。が、それが妙に、こだはつて出來なかつた。まさか、本屋の主人だつて、二三十錢もしない汚い「韓非子講義」を、私が盗んだとは、思ひはしない。さう思ひながらも、私は恬淡に返しに行くことが出來なかつた。私は、思案をしながら、到頭その本を、自分の家へ持つて歸つた。持つて歸つたものゝ、その本を持ち扱つた。私は、郵便でそつと本屋へ送り返さうかと思つた。が、そんなことをすると、却つて本屋が不思議がるに違ないと思つて、さうすることも出來なかつた。

私は、机の上へ置いたり、本棚の上へのせたりしても、何うしても氣が落付かなかつた。

私は、押入れを開けて、そして反故や古雜誌が、亂雜に積み重つてゐるのを、掻き分けて、一番下へその「韓非子講義」を置いた。かうして置けば、誰もが「韓非子講義」を、私が取つたことに氣が付くまい。さう、自分の心を休めたが、一月位は、その二三十錢しかしない古本が氣にかゝつて、仕方がなかつた。(終)



私は生きて來た

近松秋江

一

それはまだ明治二十……年の、九月の中旬頃でもあつたらうか、蒸しものでもしてゐるやうに朝霧の頻りに騰ち昇つてゐる海の上は、靜かな朝日の光を浴びて茜色に凪いでゐた。二百十日前後からかけて半月以上も降りつゞいてゐた秋雨がやうやく一昨日頃から晴れ上がつて、さしもの低氣壓が何處かの遠くの洋上に去つてしまふと、いよ〳〵本當の秋らしい空の色になつて、日の光も爽かに澄んで來た。

泉州堺の大濱の沖から纜を解いた、大阪灣の小蒸汽船は、見渡す限り朝日の光を漲らしてゐる平らかな水の上を滑るやうに動いて、大阪沖を徐々に兵庫の方に向つて進行してゐた。

その時分は、そんな大都市と大都市と連絡する交通機關もまだ極めて不完全な時代であつたので、十日ばかり前、連日の豪雨のために大阪と神戸との間の諸川が汎濫し

て鐵道が不通になると、それと又前後して淀川筋の各支流が非常な洪水で、大阪川口の天保山沖では汽船が二艘も三艘も顚覆するといふ騒ぎで、わづかに目と鼻との近距離である大阪と神戸の間でさへ水陸の交通が一週間ほどの間斷絶してしまつた。それで、やう〳〵雨が晴れるのを待つて鐵道局――その頃の日本の鐵道事務はまだ一局の仕事であつた。――は大阪商船會社や日本郵船會社と交渉して、陸路を絶たれた旅客を水路によつて運搬することにしたのであつた。それゆゑ大阪から神戸へ往かうとする者は、難波のステーションから、わざ〳〵汽車に乘つて泉州の堺港まで遠廻りをしてそこから汽船に乘らなければならなかつた。

つい二三日前まではさながら魔神の怒つた如く濁浪を揚げて渦巻いてゐた海も、今日はそんなことは、けろりと忘れてしまつたやうに美しい顏をして、涼しい初秋の風が海の面から吹いて來た。いづれの旅客も、疊の上にゐるやうな船路を喜んで甲板の上に出て明媚な茅渟の浦の風景を眺めてゐた。匂ふやうな藍色に染められた雨後の淡路の島山には眞白い朝霧が長く横さまに棚曳いてゐる。六甲山から摩耶山は手に取るごとく鮮かに浮きいでゝ、その麓につゞく神戸兵庫の瓦甍白堊は靜かな波に影を涵して、恰も龍宮の繪を展べたやうに見えてゐる。

多勢の旅客の中に交つて、甲板の鐵欄に凭れながら先刻より其等の景色に眺め入つてゐる一人の青年があつた。年の頃二十か二十一。久留米がすりの單衣に黑いメレンスの扱帶を締めて、赤皮の半靴を穿き身體は痩せ形。顏の色も白いといふより靑白くて優れぬ方であるが、神經質な大きな眼や眉のあたりに何處か意故地で癇癖持らしいところが表はれてゐる。そのために一寸見たところ賑やかなやうな容貌でありながら、やゝもすれば陰氣に見えるのであつた。甲板に群がつてゐる旅客の中には大分學生らしい青年も見受けるが、彼は同伴者もないと思はれて何人とも口をきかうともしない。たゞ一人孤獨の無聊をまぎらさうとするやうに、甲板の上に立つて、あちら此方を歩いて海の上を覗いて見た

り、遠くの島や山を眺めたり、知らぬ旅人の話してゐるのに耳を傾けてゐたりしてゐた。彼の顏にはいつも、何か氣の晴れぬといふやうな憂ひの雲がかゝつてゐるやうであつた。それは、おほかた、是から先きの前途の不安を、誰れを對手に相談する者もなく、たゞ彼れ一人の胸に思案して迷つてゐたからでもあつたらう。

實際彼は、東京を志して中國の方の郷里を出立したのはもう彼是れ十日ばかりも前であつたが、それだけの日數を今日まで無駄に途中で費さねばならなかつた。出立ちの最初の晩降雨の中を京都まで來ると、ステーションの掲示には木曾揖斐二川氾濫の爲め岐阜大垣間鐵道に故障を生じ當分前途開通の見込立たずと書き出されてあるのを見た。その晩はともかくも京都に一泊し、翌日は近江の草津から關西鐵道により、伊勢路を經て名古屋に出られるであらうといふ豫想で草津まで乘つて行くことにした。前路を遮られてステーションに溢れてゐる旅行者の中には東京に行く者、歸る者などあつて、彼れと同じ道筋を經て東京まで到着しようとした者も多かつた。そして草津の驛まで來ると、そこでも又掲示が出てゐて、關西線の桑名から先は不通になつてゐた。止むを得ずその晩は又草津のステーション前の旅宿に一夜を明かすこととなつた。田舍の小驛に東西の旅客が雜踏したので彼は、京阪見物をして東京へ歸る途中にある魚河岸の老人夫婦だの大阪の土修町の生藥屋の老主人などゝいふ老人連れの中にまぎれ込んで、四五組の旅客が八疊六疊の二室に雜魚寢をするといふ騷ぎであつた。

翌日になつて、一夜の起臥を共にした其時の行旅の老人達は銘々各自の志す方に向つて袂を別つた。その中に交つてたつた一人の青年であつた彼は、昨夜から旅客の間に話題になつてゐた、神戸から横濱まで水路を往くことを考へて、一應神戸まで引返へす決心をして、又汽車に乘つて後戻りをして來た。しかし、僅かにそれだけの短距離の汽車に乘るにも、發車の時間などは非常の際とて、全く不定期になつてゐるので、彼が草津驛からやうやう大阪まで歸つて來る間

にもう幾日の淫霖に降り罩められてゐる四邊の野は早くも暗に蔽はれて夜が迫まつてゐた。大阪に近くなつて、ふと、あるステーションで聞いたことは、神戸と大阪との間もその日の晝過から不通になつたといふことであつた。彼は前後に進退を絕だれてしまつた。そして、大阪の梅田驛に着くと、止むを得ずそこで下車して、何處か又宿を求めようとすると、大阪の市中でも到る處に橋が流れたり浸水家屋があつたりして、平常は喧騷を極めてゐるステーションの構門は電燈も消え、眞暗で、人影さへ稀れである。偶に人が通ると見ると、長い袴口を杖について、尻を端折つた物々しい身ごしらへをしてゐる。彼は車夫は居らぬかと思つて構外の廣場を少しく步いて行くと、もう其處らは膝を沒するまで水が漲いてゐて無暗に前へ進めない。彼は一時途方に暮れて今夜はステーションの待合に夜を明かさねばならぬかと覺悟を定めてゐるところへ、一人の老車夫が眞黑暗の中を、雨にたゝき消されさうな提燈の光を覺束なく照しながら向うの水の中を車を挽いてやつて來た。彼は救け船に出會つたやうな氣で、それを呼び留め、小荷物と一緒にその車に乘つて暗い浸水の中を渉つて、そこから近くの、ある小い宿屋を探ねて一泊を賴んだ。宿屋ではもう此の濕けに客を斷はつてゐるのであつたが、老車夫が顏を知つてゐたのと、その靑年の別條なささうな學生姿を見てとつて、

「合宿でよろしければ。」といつて承知してくれた。

「合宿でも構ひません。」といつて、彼はやうやく蘇生の思ひをした。

そしてその晚も又、廣島縣の人間だといふ三十餘りの男と、天井の低い、陰氣な二階の隅の方で一夜を明かした。

翌日になつても神戶まで開通の見込みは絕えてしまつた。彼は進退に谷まつたが、その時ふつと思ひ浮べたのは、一昨年の春暫く大阪に來てゐる時分に下宿してゐたことのある土佐堀の方のある下宿屋であつた。

「あゝ、さうだ。暫く彼處にいつて泊り、交通の開けるのを待たう。」と、そこに氣が着くと、彼は獨りで喜びながら早

速傳を命じてそこまで往くと、幸ひに先きでもまだ顏をよく覺えてゐて快く泊めてくれた。そして、たうとう其處に一週間ばかりも逗留してゐるうちに鐵道の開通はまだなか／＼容易ではなかつたが、やうやく水路の交通が開けたのであつた。

彼がさうして、一旦郷里を出立ちした以上、出來るだけ東京に早く行き着きたいと思つて、水路を往かうと決心するまでには、ひとりでいろ／＼迷つた。高が神戸から横濱までの船路くらゐ何でもないやうであるが、一人の同伴者もなく、神經質で苦勞性の彼にとつては、それが實に容易ならぬことであつた。加之彼がこれから先き東京に往くにしても、その前途は恰も此度の行路の困難なるがごとく困難であつて、今回の天災によつて前路を杜絶されたことは、何かしら彼の生涯の前路の險難を前兆してゐるかのやうに思はれるのであつた。

彼は船舷に凭れて明媚な茅渟の海の風光を愛でながらも、一度び明日の遠い海路のことに思ひ及ぼすと、何ともいひやうのない不安と恐怖とに襲はれた。遠江灘はひどく浪が荒れると聞いてゐる。紀州の潮岬から熊野の浦は屢々汽船が進路を誤つて沈沒する難處であつて、先年トルコの軍艦オスマンパシヤ號であつたかゞ破船した處である。彼は刻々に明日に近づく前途の險難を豫想して殆ど死地に向つて踏入る時のやうな危惧を抱いてゐるのであつた。そんな不安や恐怖を抱きながら何故彼は萬難を排しても東京へ往かうとするのであるか。

それは一と口にいへば、東京が、たゞ何といひやうもなく好ましい處で、自分の向上心を滿足せしむる地の如く思はれたからであつた。彼は、彼くらゐの年齡の多くの青年と同じやうに、海のやうな茫漠とした希望や空想を胸に抱いてゐた。それなら東京にいつて是れから何をして身を立てようかと問はれゝば、それに對して答へるところも亦た極めて茫漠としてゐた。

彼は、今からまだ四五年前やうやく小學校を卒はつて、これから中學校へ向つて進まうとする時に、彼の父は、彼が好んで繪畫を巧に描くのを見て畫家になれと勸めた。彼の兄は、その頃田舍の醫者が物質的に裕福なのを見て醫者にならんことを勸めた。けれどもその時彼は何方にも肯じなかつた。それでは一體何になるつもりかと反問せられて答ふる所を知らなかつた。けれども彼にはその時から、自分だけには、茫漠としてゐながらも形を具へた目的のやうなものが有るやうな氣がしてゐたのであつた。それは醫者とか畫家とか又は軍人とかいつたやうな一定した職業の人間にならうとするよりも、先づ人間になりたいといふ希望が旺盛であつた。人間は、專門の職業を身に習得して生涯無難に口を糊して通る前に、何か人間としての目的がなければならぬ。人間の存在はそも〳〵何であるか。自分はたゞ生活の爲に學問を修めたくはない。況んや低卑な技術に沒頭して生涯を終はるといふことは堪え難い失望である。自分はたゞ人間としての價値を意義あらしめたい。――それは、それからずつと後年になつてトルストイの思想に接する時になつて思ひ合はしたことであつたし、又彼の思つてゐたことには大分誤謬のあることも後になつて段々明かになつたが、無論その頃の彼はトルストイのことなど知る筈もなかつた。そして、それは多くの、哲學や文學に志して進む青年が何人も同じやうに抱く懷疑や希望であつたかも知れぬ。彼も亦た何人からそれを啓示せられるともなく開發せられるともなく、彼れ自身のその時分の智識や感情の發達がひとり手にその方に傾いて來た、殆ど生まれながらの性質であつたのだ。

さういふ性情の青年に得て有り勝ちな、これといひ解くことの出來ない、取留めのない不安や迷想や懊惱に彼はいつも苦められてゐるのであつた。そして、さういふ生まれながらの傾向の爲にある一定の專門の職業の修得に向つて迷はず進んで行くことの出來ない性格によつても何時も自から惱んでゐた。

二

小蒸汽船は二時間ばかりにして兵庫の棧橋に到着した。彼は群客と共にそこから上陸して、明日横濱ゆきの汽船に乘船する旅客を取扱つてゐる附近の汽船宿について一切のことを委任した。しかし、いよ／＼自分の原籍姓名年齡等を書き出して賃銀を拂ひ乘船劵と交換する間際になると、又してもそれが死地へ覺悟して入つてゆくかのやうな恐怖と不安の念に襲はれた。彼は餘程獨りで躊躇してゐると、彼の通された、表の通りに臨んだ船宿の二階座敷のすぐ隣室にも二人の學生がゐて、彼等が快活に談笑してゐるのを見受けた。一人は單衣に扱帶を締めてゐる普通の學生姿であつたが、一人はその制服（ユニホーム）から一見東京の商船學校の生徒であつて、顏の色も海風に曝されて赭く照り、動作言語が活々としてさながら明日の海上旅行を樂み待つものゝ如く見えた。開放した襖の向うに、彼は制服のまゝ仰向けに寢そべり、天井の方を見ながら、

「あゝ」と、ひとつ大きな欠伸をして、「この船に乘れてよかつた。船の方が汽車で往くより、遙に氣樂だ。大連丸といふやつは、きつと支那のを分捕つた船だ。」

彼がさういふと、連れの學生は、

「どのくらゐの船だ。」と訊いてゐる。

「なに三千噸くらゐのものだらう。」

此方の座敷でそれを聞いてゐた彼は、彼等のいかにも快活さうに會話してゐるのを見て、自分の意苦地のないことを心に恥ぢた。たとひ明日の海上にどんな事が起らうとも、彼等も平氣で乘つてゆかうとしてゐるのだ。それに後れるや

うなことでは自分の前途は駄目なものと思はねばならぬ。さう思案して、彼は、一方の自分が厭だといふものを、もう一つの自分に背後から押されるやうな氣で、たうとう貸銀を拂つて乘船切符を買ふことにした。

尤もそれは、彼にとつては初めての上京ではなかつた。一昨年のやつぱり恰も今時分彼は父母にも告げずして單身東京に出て來た。そしてわづかに一二ケ月三田の學校にいつてゐる間に父の訃に接して急いで歸郷したまゝ殆ど二年間東京に往かなかつたのである。その間には又父の死後やうやく一年ばかりして壯年の兄が死んだりしたゝめに、何となく一家の内が不幸に呪はれてゐるやうな陰欝な氣持ちに鎖ざされてゐた。彼もその爲めに一時東京に往くことを斷念しなければならなかつたが、これから前途に何かしら希望のある生涯を思ふと、彼は徒らにそんな陰欝な空氣の中に窒息してゐることは到底堪えられなかつた。どうかして明るい、洋々たる希望の滿される世界へ出て行きたかつた。それにつけても、彼が萬難を排して東京に往きたい切なる希望を、誰れよりも最もよく了解してゐるのは彼の母親であつた。その頃もう五十六七であつた彼女は、所謂昔しの女で、田舍者で、學問などもなかつた―、無論家事の經濟についてもう世を讓つた人間であつたが、本能的の親の愛は、不思議に若い悴の心持を驚くべき明察を以つて了解したのである。それは母と子とが常住座臥の間に心に思つてゐることを何も彼も凡て打明けてゐたからでもあつたらうが、彼は心の中で、かくまでも親の愛情といふものは、年齢や智識と異にしてゐる若い悴の心に同感出來るものかと、むしろ奇異の感を抱いて居つたのである。それはたとへば、彼の父や兄が賢者になるとか猾家になるとかいふ一定の職業の習得以外のことをば考へ得なかつたにも係はらず、彼の母は、彼が常住腹藏なく語つてゐることを朧ろげながらも了解(のみこ)んで、ほかの者にはまるで夢のやうな空想にも同感することが出來たのであつた。

それで、二年前家に無斷で上京した時と今度の上京とは、父兄の死によつて彼の境遇や氣分に大變な相違があつた。

殊に、假ひ既う家事向きには一切世を譲つた身であるにしてもまだやう〳〵五十を三つ四つ越したばかりの夫に死なれた上に、一年を出でずして又次男に先立たれた母親の不幸は最も甚だしかつた。次男はやつと二十九になつたばかりの一月の初に四歳になる男の兒を一人遺して死んだ。彼女は重なる不幸の中に、その遺兒を守り育てゝやらねばならぬといふ傷ましい不憫を感じてゐた。死んだ者を哀悼する情は遺兒に對する悲しい慈みを幾層倍の哀感的なものにした。一度不幸に出會つた者は又同じことが二度ありはせぬかといふ憂懼に襲はれるのは止むを得ぬ俗情であつた。彼は、さういふ不安や憂懼に沈んでゐる母親を、暗鬱な家に殘して別れてゆくが堪え難い苦痛であつたが、母親は幾月も〳〵思案した末に、思ひ切りよく、

「そんならまあ、お前往きなさい。往きたいと思ふところへいた方がよからう。」と、いつた。

さういふ、彼等の感傷的な心持は、世上の何人の身にも有りがちのことで、特にその爲に彼等が不幸であつたとはいへないことであつたが、とにかく彼は明日に迫まる船路の不安から又しても郷里に殘つてゐる母親のことが追被さるやうに胸に迫まつて　その日は一日センチメンタルな氣持ちに鎖されてゐた。

それでも又、隣室にゐた學生に彼の方から口をきゝかけて、午後から誘はれて一緒に湊川の楠神社の方へ見物に出掛けたりした。商船學校の生徒は若狹の人間であつた。彼は自分よりは二つ三つ年長らしい、その血色の好い學生の快濶な態度や言語を心に讃美して、自分もあの通り元氣でなければならぬと思つたりした。

そして又かういふことを強ゐて思つてみたりした。その頃東京のある著名の小說家の書いた小說に一人の意思の強い少年の話があつた。それは、彼などよりもつと不如意な境遇に置かれた少年であつたが、もつと意思の強い、そして遙に偉大なる人間であつた。その少年は甲斐と武藏と信濃との國境に峙つ甲武信岳の麓の桑畑の中に生ひ育つた農夫の

子であつた。どちらを向いて見ても天を衝くばかりの山に圍まれ、屛風を立て連らねたやうに聳り立つた山の中に、彼の祖父も父も生まれては死んで去つた。少年の彼は子供心にも夙に、この狹い天地に一生を果てたくないと思つて、常に高い山の彼方の廣い國の方の空を仰望してゐたが、恰も通さん坊をしてゐるやうに犇々と重疊してゐる其等の山は十四や十五の子供の脚では、とても踏破して越して往くことが出來さうになかつた。少年は毎日々々野良に桑摘みに出て、四方を取卷いた高い山を眺めて、ふはり〳〵と自由に峰を越してゆく白雲のゆくえを追ひ、山の彼方の世界を空想しては考へてゐた。

たうどう彼は强い決心をして、父母にも告げず、尻切袢纒のまゝ、あれを越せば江戶の方に往かれると聞いてゐた高い峠を攀ぢ登つていつた。それは雁坂越えであつた。少年は、喘ぎ〳〵やつと數千尺の峠の絶頂に達し、空を渡る涼しい風に顏を吹かれながら立つて向うの方を見放すと、そちらには、生れて嘗て見たことのない濶い〳〵關東の平野が遠くに開けてゐるのが見えた。彼はそこで一と息入れると又勇躍して江戶の方に向つて驅け降つていつた。それから水を呑み〳〵江戶に出て來て日本橋の大店に住込み天秤棒を擔いで、鼻で息をするほど働いた。それはまだ德川幕府の時代であつたが、それから世は變轉して明治になり、たうどう、彼は一代の豪商になつた。

彼はその少年のことを强く胸に思つてみた。自分の今往く路はそれに比べると、平夷なものであつたが、しかし自身の氣持の上では、やつぱり幾重の山川が前路を沮んでゐるかの如く思はれた。さま〳〵の憂惧に曇つた母の顏が、旅に疲れた彼の頭の中にぱつと浮んで見えたりした。けれども彼はしまひにそんな妄想を聲を發して叱咤した。

そして、恰も低氣壓のやうに憂惧の雲に蔽はれてゐた氣分も隣室の學生と伴ふて楠公社へ散歩に出ていつたりしたゝめに、段々胸が開けて來て、自分も寧ろ明日の海の上を樂み待つやうな氣がして來た。

三

翌朝早く眼を覺ますと、今日も空は青く晴れて、明るい日が美しく輝いてゐた。隣室の學生と連らなつて波止場に往き棧橋から小い傳馬船に乘つて海の上に出た。どろりと油を流したやうな深碧の水には太陽の光線が底の方まで透きとほるやうに射し込んでゐる。涼しい風がその水の面から吹いて來た。廣い港内にはそつちにも此方にも山のやうな巨船が横はつてゐた。商船學校の學生は、彼等の乘つた傳馬船が、その巨船の一つの間近を通つて往く時、ふと小舟に乘つて親船の船腹にペンキ塗りの作業をやつてゐる若い男を認めて、

「やあ。」と遠くから名を呼んで聲をかけた。

おゝと向うでも此方を振向いて何かそれに應へてゐた。そして、二言三こと言葉を交はすうちに、舟は通り過ぎてしまつた。彼等は、

「ぢや、失敬、失敬。」と互に笑顏で別れを告げた。その後で此方の學生が同伴の學生に話してゐるところによると、ペンキを塗つてゐた學生はもう學校の方を卒はつて、今練習船に乘つて、之から又遠く外國の方へ出掛けようとしてゐるのであつた。

彼は、自分と略ぼ年齡を同じうする其等の青年が、まるで海の上を搖籃にでも乘つてゐるかのやうにしてゐるのを見て密かに心に恥ぢた。

やがて傳馬舟はずつと向うの港の出口に碇泊してゐる可なり巨大な船の方に向つて近づいていつた。だん〳〵傍に寄つて往くと、方々から自分達と同じやうに傳馬舟に乘つてそつちへ漕ぎ寄せてゆくのが見える。その船は、同行の

學生の話してゐるのを聞いてゐると、もう隨分の老朽船で郵船會社では北海道の方から肥料の鯡の乾魚を積んで來る貨物船に使つてゐるのであつた。黒い船體も塗料の色が褪めてひどく汚れてゐるのが見える。船梯には乘船者が群がつてゐた。それを上つていつて、更に又梯を下りて船室の方へ入つていつてみると、そこは旅客の爲に急に貨物艙の船倉を空にして、それへ一杯に莫蓙を敷いたものである。水面よりも大分下になつてゐるらしく、高い窓からさし入る海の光で中は相當に明るいが、嚴めしい船壁などの有樣がまるで牢獄にでも入つてゐるやうな氣がして悽愴の感がある。同伴の學生は、

「やあ、こいつは南京蟲でも居さうだな。」と獨語をいひながら暫くそこに突立つて、そこらを見廻はしてゐる。

疊數にしたら百疊くらゐも敷けさうな廣いところに、もう先刻から乘込んだ客の中には、好いと思ふ處へ毛布などを敷いて場を取り、寢轉んで本を讀んでゐる若者があつたり、趺坐になつて話したりしてゐる者がある。その多くは學生である。彼もやがて、そこらの空いてゐる處へ手荷物を置いて自分の場處を取つた。そして一應席を定めると、又同伴して來た學生と一緒に甲板の上に出て見た。

學生達は大抵穴藏のやうな下層の船室に籠つてゐるよりも甲板に出て、遠くの海面を渡つて來る涼しい風に吹かれてゐた。船は左舷に紀州の陸地を眺め、右舷に淡路の島山を見ながら靜かな波の上を滑るやうに進行を續けていつた。そして、段々淡路の陸地を遠ざかるとゝもに、前方には眼も達かぬ煙波が雲の果てまで開けて來た。船が丁度紀州の南端潮岬の沖あたりを航行する頃から太陽は次第に西方の波の上に沒しかけて、海の上にもやうやく暮色がかゝつて來た。風もなく波も穩かであるが、大きな波濤のうねりとゝもに船は前後に大きく搖れてゐた。夕飯時になると甲板に出てゐた旅客はいづれも皆な船室に降りていつたが、彼はそこらにまだ居殘つた二三の者と同じやうに甲板から動かうとしな

かつた。そして靜つと欄干に身を凭せ掛けて無言のまゝ、刻々暗くなつてゆく海の上を見るともなく見入つてゐた。大分船暈を覺えて胸が苦しく、もし少しでも身體を動かせばすぐ嘔吐をしさうな氣持がするので、そうつと堪えてゐた。傍にゐる旅客はそんな風もなく何かしら海の方を見て話してゐるのが餘處ごとのやうに聞えてゐた。五十ばかりの商人風の男は、甲板の一二等船室から夕飯を濟ましてそこへ出て來ると、

「靜かな波だなあ、こんな靜かな航海はめづらしい。」と、頻りにひとり語をいつてゐたが、さういつて見入つてゐる薄暗い海の上には、直徑一尺から二尺もあるやうな、二間ばかりの長さの丸太が幾百本となく波の上に漂ふてゐるのを認めて、

「おほ、大變な材木だ。みんな熊野から流れて來たんだな。惜しいものだな。」と、さも／＼惜しいもののやうにいつてゐる。

彼はそれを默つて聞くともなく聞きながら、大きな丸太の波に乘つて浮みつ沈みつしてゐる海の上を見詰めてゐた。そのうちすつかり波の面は暗くなつてしまひ、機關の轟く音が大きく鈍く聞えてゐるばかりで、廣い夜の海の上はたゞ暗黑のほか何物をも眼に入らない。甲板に殘つてゐた人々もいつしか一人づゝ去つてしまつた。それでも彼は尙ほ一人そこに居殘つて、認か夜の風に面を冷ましてゐた。さうしてゐるうちに一時今にも嘔吐しさうであつた胸の惡氣もだん／＼段々薄らいで來て、頭も輕くなつた。

それで、そうつと欄干を捉まへて身體を動かしてみると、大丈夫なやうな氣がするので、漸くそこを立ち上り、靜に甲板を歩いて船室に下りていつた。船室にいつて見ると、薄暗い石油ランプのところ／＼につり下つてゐる處に旅客はもういづれも、そこに算を亂して寢轉んでゐた。彼も自分の手荷物を置いた處に戻つて來て、小いヅックの鞄に凭れな

から脚を伸ばして横はつた。

それでも疲れのためにぐつすり一と寝入りして、此度ふつと眼を覺ましてみると、もう海の上の夜はおほかた明けかけたらしく、有明のラムプはまだ夢のやうに高い處にともつてゐるが、廣い船室の中には、もうそつち此方に枕から起き上がつてゐる者がふえて來た。彼もうこの上まだ眠られさうでなかつたので、そのついでに起き上がつて甲板の方にある洗面所に出ていつた。甲板にはぽつ／＼人が出てゐたが、海の色は空も水もどんより鉛色に曇つて、朝明けの寒いやうな風が吹いてゐる。彼は不自由な水で顔を洗つたり、絶えず水で洗ひ流してゐる便所に入つて用を足したりした。船は今丁度遠江灘の中央を航行してゐる時で渺茫たる水と空とのほかには何物も眼を遮ぎるものはない。それでも波濤は昨晩の熊野の沖よりもまだ穩かで船の揺れるのも少い。彼はそのまゝ甲板を彼方こちらして、唯時を過してゐた。さうするうちに後から起きた者が次第に甲板に顯はれてきた。黎明の色もだん／＼明るくなつて、遠くの東の方の海にぱつと明るい光が流れたと思つたら、太陽が深い雲の中にまだ十分夢の覺め切れぬやうに淡い大輪を掲げてさし昇つて來た。

甲板に群れてゐる者は一樣にそちらを向いて日の出たことを口々に唱へた。

その時分から彼は熱心に東北の方の空を見つめてゐたが、やがて突然に、

「富士が見える／＼。」と叫んだ。

それを聞くと、傍にゐた者はいづれも又そちらの方を遠く肉眼で探した。

「あゝ、なるほど見える／＼。」

さういつて指す東北の方の中天に、たゞ微かにかすかに富士の輪廓ばかりが雲の色よりもまだ淡く望まれた。船が次第に遠江の御前崎から駿河灣の沖を進んで行く頃は富士の姿が一際鮮かに見えて來た。それから伊豆の石廊崎の突端を

廻はり、相模灘にさしかゝつて來る頃は日もだん／＼高くさし昇つて頭の眞上から照り付ける日光が燒けるやうに磐い。相模灘は、豫想した遠江灘よりも風浪が高く、遠く外洋から吹いて來る南風に煽られて靑い波が眞白に碎けて渦卷いてゐた。船は大分搖れて進行も手間どつた。旅客はいづれも烈しい太陽の光線に疲れたやうになつて、少しも早く橫濱に到着するのを待ちあぐんでゐた。やうやく三浦半島の突鼻を廻はつて、左舷に向つて東京灣に入つていつたが、もう其處だといふ時分になつて、時間が長かつた。

そして橫濱に入港したのはまだ大分日のある時分であつたが、彼はそこからすぐ汽車で東京に入つた。東京は一昨年の十一月の末に立つて歸國して以來であつた。その頃はまだ電車も自働車もなかつた。彼は新橋に着くと小荷物もあるので俥で、駿河臺下の方にゐる郷里の知人の家に先づ訪ねていつた。

四

さうして身體だけは東京に着いたが、何時までも鐵道の故障の爲に後から送つた筈の夜具や衣類の入つた行李が着かぬので、ちよつと一晩か二晩のつもりで泊めてもらつた知人の家から早速下宿へ落着くことが出來なかつた。そして半月ばかりも、遠慮しながらそこの家に厄介になつてゐたが、やつと通運會社から荷物を屆けて來たのを待ちかねて、駿河臺の見晴しの好い處にある下宿屋に移つた。そこからは神田の三崎町から猿樂町一帶の低い街つゞきが一眸に見えた。その先きには九段の高臺も見えてゐた。

さうして彼はそこに落着くと、これから行く學校について考へた。何處の學校へ入らうかと思つて、さま／＼に迷つた。しかし、それは、彼に何の目的も思慮もないからではなかつた。むしろその反對にあまり空想や希望が多過ぎた。

一體彼は早くからその空想や希望が多過ぎるために、目前に横はる現在の事を一つ〳〵形付けてゆくことの忍耐が出來ないで、競爭試驗には最も優等の成績を以つて入學した中學校も十八歳の時に無殘々々中途で止めてしまつた。三年後の今となつては、それもいくらか後悔せられるのであつた。無用な空想や餘計な希望を持つてゐない、着實な彼の級友は丁度今年中學校を卒はつて尙ほその先きへ進む時であつた。彼は遠江灘を航行する船の上で大學の正帽を冠つた學生や縁の廣い麥藁帽に小豆色の鉢卷をした高等學校の學生姿が最も眼に着いたのであつた。

彼が東京に來て、何處の學校へ行かうかと迷つたのは、恰も婦人子供が三越や白木屋のやうなところへいつて、いろんな物に眼まぎれがして、どれもこれも欲しいと思ふのと、やゝ似たものであつた。夏の雲の湧くやうな希望や空想を成就するには、何處から手を出したら、それが達成されるかと思つた。

一昨年初めて東京の土地を踏んだ時には、今よりもまだ方向が確定してゐた。とても中學校からやり直す辛抱の出來ないと自覺してゐる彼は、自分の行く道は私立學校よりほかにないと思つた。そればかりでなく彼は東京に出る前から夙に、明治文明の先達である福澤諭吉先生を靑年の心に何となく崇拜してゐた。その頃は政治家になりたいとか、論文家になりたいとか思つてゐた。それゆゑ一度早稻田の專門學校を見にいつたにも係らず遂に三田の學校に入つた。然るに二年後の今度は大分考が違つてゐた。實はその二年の間に彼は軟文學に對する眼が開けて來た。樋口一葉といふ若い閨秀作家の天才らしい作品に魅せられたのも郷里に歸つてゐるその間のことであつた。文學界といふ、若い文學者達の群れによつて成つてゐる雜誌に引き着けられたのもその時であつた。一たびさういふ軟い文學の味を知り覺えた後は、將來自分はその方で身を立てようとは思はなかつたにしても、それを全く放棄してしまふ事は出來さうもなかつた。

そして、十四五歳の頃から日本外史を讀むことを教へられて、それを愛讀することを覺えたり、可なり早くから八犬

傳を愛讀したり、矢野文雄の經國美談に心醉してゐたりするにも係はらず、たゞ名ばかり聞いてゐた尾崎紅葉の小說などを讀まうとする心が何故か生じなかつた。然るに一度、文藝倶樂部に發表された樋口一葉の「濁り江」といふ作を讀んでから、彼は今まで遂に心に經驗しなかつた、ある深い人生といふものに出會つたやうな氣がしたのであつた。そして、今まで彼が、誰れに敎へられるともなく、何となしに戯作として卑んでゐた小說であつても、一葉の如き深い人生を書表はすことが出來るものならば、小說も亦た有意義である。いつそ小說を書くことを硏究しようかといふ心が近頃になつて萠してゐたのであつた。彼はそれよりずつと前から、文章は經國の大事なりといふことを何からか知つてゐた。それから又治國平天下の文學といふことをも知つてゐた。自分は將來文章を以つて身を立てるには、どうしても經國といふことを以つて念としなければならぬと思つてゐた。さういふ空想や希望を抱いて彼自身心密に誇つてゐた。彼が海上旅行を意に介しない商船學校の學生を見て、海を氣づかふ自分を心に恥ぢたり、着實に一歩々々學校の課程を踏んでゆく大學生や高等學校の學生の颯爽たる容姿を甲板の上に眺めて心を動かしながら、自分は何處までも先づ人間になるべき學問を修養し、將來それを文章の上に發揮するのだぞと思つて、動もすれば失望に沈み勝ちな自己を引立てたり、或時は一人で意氣軒昂となつたりしてゐた。今の世の日本外史や八犬傳の著者にならうとするには、どういふ學校へいつたらいゝかと思つたが、何處にも滿足を與へさうな學校がなかつた。それで、今度東京に行つたら樋口一葉を訪ねて小說を書くことを習はうと思つてゐたのが彼の上京した目的の一つであつた。

すると、彼が上京した九月の頃から、その若い閨秀作家は病の床に就いてゐるといふ消息を新聞で見てゐたが、秋になつて彼女は遂々病が癒えずして死んでしまつた。今に癒つたといふことが新聞に出たら是非とも一度訪ねていつてみよう、會つてくれるであらうかと思つてゐたのに、そんなことになつて、彼はひとり心の中でひどく失望してゐた。

それで兎も角も、今度は早稻田にいつて、文學部に進む豫科への入學試驗を受けてみた。無論試驗などもたゞ型ばかりのことであつたが、數日後に入學許可といふ學校からの通知は受取つたが、何となしに早稻田の文學部に入るといふことが氣が進まないので、そのまゝ早稻田には往かず、神田の方の英語を專門に敎へる塾に通學して傍ら二松學舍へ通つて漢學の講義を聽いてゐた。しかし、その爲にどれだけ彼の學問や思想が進歩したとも思はれなかつた。霧の中にゐて、たゞ遠い處にある物をあてもなく追ふてゐるやうな空想と、それの容易に實現されさうもない物足りない寂寞と不安とに惱みながら、殆ど無益な日を消してゐるに過ぎなかつた。

そのうちにも日は流れるやうに過ぎて、秋は段々深くなつた。下宿のある處は駿河臺の、ずつと奧の方になつた處で、彼のゐる部屋の外には、まるで雜木林のやうな樹木が繁茂してゐた。栗や樫の葉が机を置いた肱掛け窓を蔽ふてゐた。空氣がだん〳〵乾燥して來るにつれて、そこから富士が見えた。朝の寢覺めには、純白な皺襞までが浮彫りのやうに朝日を浴びて薄紅に輝いてゐた。夕方太陽が九段の丘陵の彼方に沒する頃になると、さながら象牙の塔のやうに、淡蒼い晩霧の中にくつくり秀でゝ見えた。低地の街の方から樹立を透して、絶えず鈍い響きを送つてゐる中に、ひとり富士ばかりは永劫の沈默を守つてゐるかの如く思はれた。彼は屢々心を澄ましてその秀麗な姿に見入つてゐた。

白い夜霧の街を立ち罩めた晩方など、彼はよく高臺を下りていつて神田の繁華な街筋を散歩してゐた。しつとりとした秋の夜の水菓子屋の店頭にはもう紅の林檎や蜜柑のオレンヂが日ごとに色を増して、清涼な燈火の下につやゝかに輝いてゐた。その街筋には殊に雜誌屋や古本屋が多かつた。彼は共等の書肆を軒から軒に歩いて見た。何處の書棚にも讀んで見なければならぬと思ふ書籍が山のやうに積んであつた。

彼はさうして東京にゐることに智識の光があり、それから齎らす文明の凡ての幸福や向上心が達成されるやうに思つ

たが、それとゝもにまだどうしても、食物やその他の習慣がしつくり東京の生活に馴染まないために、日に日に蕭寥として寂れてゆく四圍の風物を見るにつけ、ともすれば心弱くも思郷の念に惱まされてゐた。夕陽が沈んで富士の見える幾山河の彼方に故郷があるのだと思ふと、何の慰めもない下宿屋にゐて不自由な生活をしてゐるよりも、いつそ、やつぱり郷里に引込でゐて將來の空想を斷念した方がよいかと思ふこともあつた。が、それはどうしても出來ないことである。

やがて正月が來た。彼は東京で初めてする正月に若い興味を持つて、その頃すぐその高臺の崖下の素人下宿にゐて明治法律學校にいつてゐた、同郷の、彼より二三年上であつた小學校の友達と一緒に宮城のお濠端を廻はつて二重橋の方を拜觀にいつた。お堀の高い土手には老松が翠蓋を翳してゐて、それに風のない麗かな旭の光が輝き、深い水の上に雁や鴨が長閑さうに群れ泳いでゐるのが、さながら泰平の瑞祥のやうに思はれた。金ピカの禮裝をした文武の役人が宮中の年賀から退出して來るのを二重橋の外に立つて、ぼんやりと眺めてゐた。

一月も大分過ぎてから、今までゐた下宿が何となく親みの乏しい家であつたので麹町の英國大使館の裏の方にある下宿を探して變つていつた。先の家は主人夫婦も使つてゐる女中も凡て越後の者であつた。國から送つてくる爲替が、どうかして月を越して二三日遲れるやうなことがあつても、おかみは、彼が朝學校へ往かうとして玄關の下駄箱の前に立つてゐる處でも遠慮なく催促をした。そこには方々の學校へ出掛けてゆく宿泊人が多勢居つても、そんなことに容赦はなかつた。彼はその家を去つた後いつまでもそのおかみの、ぞつとするやうな劍のある眼付を忘れることが出來なかつた。

彼がその下宿を變るといひ出した時分に、崖下の猿樂町の素人下宿にゐた明治法律學校の男も、今居る家は可けない

ことがあるから、何處かへ變りたいといつてゐた。彼は、その男に、今度探して來た處へ一緒に行くことを勸めたが「まあ、君先きへ行つて見たまへ。よかつたら僕も後からゆく。」といつてゐた。その男は彼より年も二つ三つ上で、老成な處があつた。そして、二三日立つてからそこを見に來て、一緒に晩飯を食つてから、そこへ變つて來るといひ出した。それから四五日して月の變り目に引越して來た。そして六疊の座敷に二人は同居してゐた。その男は、彼が毎日雜誌やその他いろんな書物を雜讀して、貴重な時間を空費してゐるに反して、判檢事の試驗を受けようといふ一定の目的があるので、學校へ行く時のほかは、一日机に凭つて法律講義錄のやうな物と首つぴきで勉強をしてゐた。無論その方面の學問に對する理解力も彼よりはずつと進んでゐた。けれどもその男は、何處か私立の速成の法律學校の學生などに屢々見るやうな田舍者臭い、形式ばつた所があつた。彼は時々、その男の、一定の目的に向つて迷はず精進してゐるのに比べて自分を振り返り、試驗とか卒業とかいふ關門を通過することによつて、社會的に資格づけられるやうな方針を選んで勉強してゐるのでないことを思ふと、前途が實に茫漠としてゐるやうで不安な懊惱を感じた。

するうち故鄕のある町で古く辯護士をしてゐる叔父の方から、不足がちな學資を仰いでゐたその男は、時々「此家にゐてはとてもやつてゆけない。何處か、もつと安い處を探がしてゆかなけりやならん。」と、法律書を息をも吐かず默讀してゐる頭を上げて溜息を洩してゐた。彼にしてもあまり豐かな學資を仕送られてゐる譯ではなかつたが、それでも、餘計な金を使ひさへしなければ、そのくらゐな下宿にゐることには事を缺かなかつた。止宿人といつても高々十人くらゐを容れられる部屋があるくらゐなもので、多くは麹町あたりの諸官省へ出勤してゐる下級の官吏などであつた。

そして、彼の伴れの男は、やつと二た月ばかりもそこにゐると、何處かもつと金の掛らぬ處を探して又もとの神田の方へ轉居していつた。あとに殘つた彼は、ひどく稚らしい寂しさを感じた。感傷的な思鄕の念に襲はれがちであつた。

その男などが目的の爲に鐵の如き意思を以つて一心不亂に勉强してゐるに反して、彼の意思は屢々鈍つた。たゞ、人間になる學問がしたい、そして會心の文章家になりたいといふことばかりには焦燥を感じてゐても、それに到着する手段については、いつも怠つてゐた。神田の英語の塾と今度の處からは以前よりも近くなつた二松學舍とへはそれでも毎日通つてゐたが、一日の大半はたゞ取留めもない空想に耽つてゐることが多かつた。

五

その頃九段の中坂に、やつぱり鄕里の中學校で彼より二三年も上級であつた男が、上京して來て神田の法學院に通つてゐた。それも家の事情でそれから上の學校へ進むことが出來ず、鄕里で二三年小學校の敎師をして東京へ往く學資を貯蓄しながら講義錄などを取寄せて讀んでゐたのであつた。中學校では級が大分違ふので彼の方ではその男の顏を知つてゐるだけであつた。今度東京へ出て來てから、その從弟が三田の學校にいつてゐるところから、始めて會つて口を利いた。そして彼はある日中坂の下宿にその男を訪ねていつた。その男は、旅館を兼ねた下宿屋の入口のすぐ脇の三疊の間に居つて、飾りつ氣もない、古道具屋から買つて來た机の上に法學院の講義錄の引き千切つたのを無雜作に小撚でとぢて、朱筆で頻りにそれに檢點を打つてゐるところは、先に彼と一處にゐた明治の法學生と同じことであつた。その男は辯護士の試驗を受ける目的であつた。そして明治の人間の妙に法學生氣取りの臭味があつて、頸に白ハンケチなどを卷いてゐたのに比べて此方は極めて氣取りのない普通の人間であつた。

「貴下は中學校の成績が好かつたのですから、高等學校へ入られゝばよかつたでせう。」

彼は上級の人間に對する敬意を持つて云ふと、

「金がないんで、それが出來なかつた。敎頭も僕を認めてくれて、僕の親父にぜひ大學へ遣つてもらひたいと勸めたさうだ。親父は中學校より先は貴樣自分でやれといふんだ。……養子に行けば大學まで遣つてくれる處があつたけれど、そいつは親父も僕も厭だつたから。」その男はぽつり〱話した。

それから半月ばかり經つて、丁度また月の變り目に、彼はその男に勸めて自分の下宿に同宿さした。一つ座敷を二人で使つてゐれば部屋代の方はお互に負擔が輕減された。

その男も先の明治の男と同じやうに暫くの時間をも惜むやうに講義錄の粗雜な假りとぢと一日首つ引きをしてゐた。そして彼が何と定まつた學科を一貫して勉强するでもなく、「國民の友」とか「日本人」とかいつたやうな政治社會の雜誌や「太陽」とか「文藝倶樂部」のやうな物ばかり讀んでゐるのを見て、

「君は一體何をやるつもりなんだ！」と、いくらか輕ずるやうにいつて訊いた。

「うむ、……僕は、いろんなことがやりたいんだ。こんな雜誌に書いた物を載せたいんだ。」

彼が自信のなささうにさういふと、法學院の男は、にやりと、生まれ付の大きな眼をむいて冷笑する微笑を浮べて、

「君に出來るか？」といつた。

彼はそれが必ず出來うると自から信ずることはできなかつたけれど、さうありたいと思ふ心は止まなかつた。そして一日明けても暮れても法律の講義錄ばかり讀んでゐる人間が明治も法學院も同じやうに雜誌などに餘り興味を持つてゐないのが彼には物足りなかつた。そして雜誌の智識を輕蔑してゐた。無論それは彼も知つてゐることであつたが、どうしても新聞と雜誌は一生涯自分から關係を絕つことの出來ないものゝやうな氣がしてゐた。それは生活の爲といふのでなく、何となくそこに淸新な智識があり、溌溂とした世間が開展してゐるやうに思はれてゐた。そして明瞭なる自意識

を以つて自分は實に新聞や雜誌が好きなのだと思つてゐた。

「そりや、遣れゝばそれも好いさ。」法學院の男はいつてゐたが、その男の理窟づくめの頭の中には少しの空想を容れる餘地もなかつた。

　さうして彼は時々自分の理想に適ふ學校についてあれ是れと思ひうかべてみるのであつたが、やつぱり何處にもなかつた。三田には福澤先生がゐるので、やつぱり心を惹かれてゐたが、そこの學生や卒業生について觀る所によると、何となく理想の低い世俗的の人間が多いやうに思はれるので再び入る氣になれなかつた。それにあまり文學趣味の乏しいのも慊らなかつた。さうかといつて早稻田の文科は又あまりに純文學に狹められてゐて、彼の期待する人間としての教養に意を拂つてゐないやうな感じがして、どうしても早稻田の人間となることに氣が進まなかつた。そして彼が中學校にゐる頃から愛讀してゐた「國民の友」や「國民新聞」の發行所である民友社が假りに學校を設けるとしたら、一も二もなくそれへ入るであらうと空想したりしたが、それには又キリスト教臭味が多いのが彼には何となく好まれなかつた。所詮やつぱり英語は英語で修學し、漢學は漢學で學んで、その上は自分で自分の好きなやうな人間になつて行くより他はないと思つてゐた。

　その頃よく雪が降つた。ある大雪の翌朝、乞食の洗濯といふ、一點の雲翳もなく眞青に晴れ渡つた大空には美しい日光が漲つて、慵いやうな單調な軒滴の落ちる音が一日聞えてゐた。明るい日のさしかゝる眞白な障子の內で彼は火鉢を擁して讀書をしてゐると、軒端に來て遊んでゐる雀の影が繪のやうに障子に映つた。そんな時には何ともいへない、幼時が懷しく思ひ出されるやうな、故鄕のさま〴〵が偲ばれるやうな心地にもなるのであつたが、東京で初めて見る雪景色も美しく、又さういふ日には何となく安らかな落着きを覺えて、將來の空想がそれからそれへと無限に湧き上がつ

た。彼はお濠端の雲解け道を歩いて學校に出ていつた。宮城の土手に並んだ老松の枝はまるで繪のやうな美しい雪が積もつてゐた。

彼はその時分既う異性の智識は幾らかあつたが、いくら空想であつても前途の望みを實現したいといふ決心はなか〳〵强かつたので、異性に心を亂すといふことを堅く愼んでゐた。それは一つは初心者の臆病からでもあつたらうが、人間の修養がしたいとか、一代の名文家になりたいとかいふ空想に始終溺れてゐるために其方に氣が散らなかつたのでもあつた。

それに比べると法學院は何處までも現實的の人間であつた。その男は壹錢五厘の風呂にも儉約して四日おきくらゐにいつてゐる癖に、そして東京へ來てからまだやう〳〵二三ケ月にしかならぬのにもう四谷の先きのある安價な歡樂場へいつて二三度馴染の女が出來てゐた。

彼もその男も、いくら前途の大なる希望の爲に目前の小さい欲望を努めて節抑してゐても折々無聊に困むことのあるのは何方にしても止むを得ぬことであつた。何となく怠屈で堪らないやうな氣がしてくると讀書をする氣にもなれず、何を深く考へることも出來なかつた。それにその男は落語とか義太夫とかを聽くことの興味もなかつた。落語などの巧妙な洒れの味などは、てんで解らなかつた。それに比べると彼は、もう東京へ來たそも〳〵から寄席といふものゝ興味に强く惹き着けられてゐた。それは彼が東京といふ都會情調を愛するやうになつた一つの原因でもあつた。彼は時に法學院を寄席に誘ふことがあつたが、應じなかつた。

ある晩食後、二人はいつものやうに机に凭つてゐたが、同じやうにとても抑へ切れないやうな無聊に惱まされてゐた。その男は老成せた手付で、まだ中學校にゐる頃から鉈豆煙管で刻み烟草を吹つてゐたが、その時講義錄から目發の

やうに眼を放して、
「あゝあ。」と一つ大きな欠伸を發して、とても堪らないやうに、朱筆を投げて銘豆煙管を取り上げて二三服たてつゞけに刻み煙草を吹かした。
「君は何處へも遊びにいかないのか。」彼の方を見て笑ひながら訊いた。
「うん、いかない。」彼は面白くない顏をしていつた。
「そりや感心だなあ。僕はもう行つた。」その男は淡白にいふのであつた。
「別に感心するほどでもないが、僕は何だか行く氣がしないんだ。そして、あんな處は汚いだらう。」
「そりや汚いさ。しかしそんなことはもう思つてゐられやしない。」
その頃の潔癖な彼は、單にそんな場處が汚く思はれたばかりではない、たゞ賣買關係による異性との交渉には何等の興味を持たなかつた。そんな處に戀愛關係などの起るのが寧ろ不可思議でならなかつた。
「誰れでも勝手に買へるやうな女は僕は厭だなあ。」彼はいろ〳〵自分の心持を話してさういつた。
「それは君のやうにいへばさうだが、そんな戀愛などでなくつても、たゞ好いよ。」
その男は、いつもの彼と丁度正反對な、唆られるやうな調子になつて、强い本能的な衝動に驅られてゐるやうな顏をしてゐたが、
「いつてみようか?」といひ出した。
「いやだ。」
「どうしても?」

「うむ。」彼はそんな興味のないことに切り詰めた學資を浪費するのも厭であつた

法學院は沈吟するやうに、

「僕一人でいくのも怠儀だ。」といつて、暫く思ひ止まるやうな樣子であつたが、又强い本能の刺戟に盛返へされて、

「いかう。」と勸めた。

そんな押問答の末二人はたうどう夜もう十時頃から外に出た。

「汚いのは君、そのつもりで居つてくれたまへ。」

「それは分つてゐる。」彼は自分の方から何の要求も持つてゐなかつた。

もう三月の中ごろのことで、空には黑い雲が迅風(はやて)に吹かれて走るやうに低く飛んでゐた。空氣がめつきり生暖くなつて來た。

五番町から見附の方に出て四谷の大通りを何處までも宿の方へ歩いていつた。そして兩側に店屋の灯がもう殆ど絕えさうになつた處まで來ると、また其處に明るい一區劃があることを發見した。大きな屋體の廣い間口に格子のはまつた家が兩側に並んでゐて、表通に沿ふた小意氣な板塀の中に入つてゆくと白く紋か何かを染めぬいた淺黃暖簾が掛つてゐた。そこから三尺帶を尻の上に締めた若い男が二三人何か戯談をいひながら出て來た。法學院は「君はこゝを知らないんだらう。まあ一寸歩いて見よう。」といつて、一軒々々暖簾を分けて庭の中に立ち入つて見た。そこには格子の中に、こつてり厚化粧をした安つぽい顔の女が赤や青の毒々しい色の着物を着て五人も六人も坐はつてゐた。

見てゆく内には一寸引締つた好い顔をした女などがあつた。家によつては着物の好みなども、そんなに下卑てゐない處があつた。「法學院は何處へ伴れてゆくのだらう。同じことならこんな家へ上がつて、あんな女を買はしてくれるとい

ゝ。」と彼は心の中で思つた。

やがて法學院は今まで見て歩いた中でも一番灯の薄暗い、見すぼらしい小家の入口を入つていつた。するとそこの暖簾の蔭に立つてゐた男はもう顏馴染と思はれて、「いらつしやい。」と笑顏で迎へた。

それからすぐ取付の大階段を二階の方に上がつてゆくと、思つたよりも中は廣さうで廊下が方々に通じてゐるやうである。すると何處からか、五十恰好のいやな婆さんが薄暗い廊下に立ち表はれて來て、

「おや、ゐらつしやい。」と、無遠慮な調子でいつた。

法學院はいつもの、むつつりに似ず、それと何か調子を合せて輕口をいひながら、その婆さんの後から廊下脇の座敷に通つた。

「暫くだつたのねえ。」といひながら婆は茶を入れて出したりした。

「暫くさ。さう度々來られないぢやないか。」どんな戲談にでもすぐむきになる癖の法學院は眞顏になつて笑ひながらいつてゐる。

「そりやさうだけれど。……そして?」と、婆は餉臺に手を載せて立ちかけながら訊いた。「どういふところ?　階下で見て來たの。……あなたの事ぢやないよ。そんな浮氣な話でなく、こちらさ。」と彼の方を一寸見ていふ。

法學院はそれで何か注文を附けてゐたが、婆は、

「ところが此の頃濕けでねえ。」といつて、又じろつと彼の様子を見てゐる。それから、

「まあ精々ねえ。」とか何とかいひながら立つて行かうとして、「お肴は?　彌助にしやうねえ。」

といつて、そのまゝ廊下の方へ出ていつた。

彼は一昨年はじめて東京に來た時にも三田の學校にゐる同郷の道樂者に誘はれて、吉原を見にいつて、格子先で友達が女と煙管の取り遣りしながら狎々しく浮戯けたことをいつてゐるのを散々傍に待たされて聽かされたが、その時友達は、やう〳〵芝口から雷門まで乘る鐵道馬車の賃銀さへも持つてゐなかつたので、彼が二人乘りの俥代まで支辨したが、その時

「餘計は入らない、君貳圓だけでも持つてゐないか、一寸上がつてみやう。」と、幾度となく訊くのを、彼は丁度それだけの金は所持してゐたけれど、それはぜひとも明日學校へ月謝に拂はなければならぬ金なので、腹の水落ちの處に銀貨入れが溶けてしまひはせぬかと思ふほど熱くなるまで確乎りと藏つて置きながら、

「持つてゐない。」と、何度訊ねられても、さういつて、たうどう、その頃三田の學校中で評判の放蕩者を、空しく素見かしだけで戻つて來させたことがあつた。それつきりそんな歡樂境へは今晩まで足を踏み入れたことがなかつた。

それで彼は、さういふ處の人間が、まるで遊びに來た客に自分の同輩か何ぞのやうに狎々しい粗雜な言葉を使つて話しかけるのがひどく情味を傷けるやうに思はれて厭で堪らなかつた。

さうして暫く二人きりになつてゐるところへ、ばたり〳〵廊下を歩く音がして、

「ゐらつしやい。」と、氣のない聲を掛けながら入つて來た妓は、これが法學院の馴染と思はれて、彼女はその傍にいつて坐はつた。年も女の方が三つ四つ上のやうで少しも別嬪ではなかつたが、小づくりの締つた女であつた。

そこへ婢がつけだしの酒を運んで來た。法學院は碌に風呂にもいかないやうにしてゐるのに酒が又大好きであつた。渇したものゝやうに、いきなり酒盃を取つて、不斷講義錄と首つ引きをしてゐる時とまるで別人のやうに、氣輕な調子で、

「はい。」といつて女の方に酌の催促をした。

彼等は三人で何か詰らない戯談をいひながら酒盃の交換をしてゐた。彼は自分にも酒盃をあてがはれて、少しづゝ嘗めながらつまらなさうに默つて見てゐた。

「どうしたんだらう彌助は、遲いねえ。」といつてゐるところへ、印袢纏を着た若い男が、「へえ、お誂へ。」と掛け聲をして大きな鉢を持ち込んだ。

「あなた御酒がいけないやうだ。これを召上れ。」といつて、婆が皿に取り分けてくれた。

さうして一と仕切り酒がまはつてゐるところへ廊下から入つて來た妓は、年は先のよりいくつか若いやうに見えたが、とても我慢の出來ない、骨の太い大きな女であつた。

その夜彼は何だか厩の中にでも寢てゐるやうで、まんじりともせず、夜の明けるのを待つてゐた。法學院も好い加減な時分に起きて顏を洗つて出て來た。

昨夜の風が未明から雨になつたやうであつたが、ひどくは降つてゐないので二人はそこから出て來ると軒の下をつたひ〳〵辻俥のある處まで步いた。

下宿に戻つてくると、女中やおかみが、笑ひながら、「まあ、何處へゐらしつたのかと思つて隨分遲くまで待つてゐましたよ。お樂み！」と、口々にいつた。

法學院は頭を抱へるやうにして階段を驅け上がつて自分の部屋に飛び込んだ。

六

それから陽氣が急に變つて、いやに生暖い南風が紅の砂塵を吹揚げるやうな日が幾日も續いてゐるうちにもう早い彼岸櫻がちらほら咲きはじめた。麴町のその邊は殊に櫻のある處が多かつた。靖國神社の境内にもあるし、紀尾井坂から辨慶橋の方にいつてもよいし、すぐ近くには英國公使館の前の廣い芝生にも櫻の立木が多かつた。彼はいつかのやうな歡樂境に行くことを欲しない代りに靜かな春の夕べを樂みながらそれ等の場處へよく散步に出掛けていつた。殊に英國公使館の前の柔かい芝生を步くのが彼には何よりの慰樂であつた。取留めもない樂しい空想に耽りながら、それを確と手に捉むことの出來ない、もどかしさの淡い憂愁がひた〱と身のまはりを包んでゐるやうで、下宿の狹い一室に閉ぢ籠つてゐるのが堪えられなくなると夕方になつてそこの芝生に出ていつた。柔かい靑草の匂ひのする櫻の若葉の下を步いてゐると、向うの方でも誰れか明笛を吹いてゐる者があると思はれて爽かな夕風に伴れて朗々たる音色が何ともいへない懷しい悲しみを胸に映つた。その笛の音色に含んでゐるやうな人生が何處かにあるやうな氣持ちになりながら冷くつて心地の好い靑草の上に腰をおろして恍惚となつてゐることが屢々であつた。

わけても樹木の多いその邊は淸々しい靑葉に埋まつてゐた。その頃は女子敎育などもまださほど振はず女學生の姿も稀れであつたが、五番町のすぐ近い處に靜修女學校といふ看板を揭げた學校があつて、あまり振つてゐる學校とも思はれなかつたが、土曜日の晩など帶をきちんとお太鼓に結んだ二十前後の若い娘が小鳥のやうに校庭に群れて靜かに讚美歌のやうなものを歌つてゐるのが彼の興味を惹いてゐた。彼は時々その前を通り合はして若い女學生の姿を見て樂んでゐたが、戀愛などに心を勞することは恐るべき魔道に陷入つてゆくことのやうに思つて、それ以上何にも考へようとはしなかつた。

その家は下宿といつてもあまりその商賣の手を擴げようとせず主人は時々兜町などへ通つて、氣樂にしてゐる家であ

つたが、すぐ近處の懇意な家の娘が毎日のやうにおかみの處へ「小母さん〳〵」といつて遊びに來てゐた。年は十七八であつた。大分平面の顏で、眉の濃い、ちよつとした縹緻であつたが、いつも白粉を眞白につけて、束髪に結ひ、出來るだけめかしてゐた。主人は長唄の稽古にいつたり、おかみも三味線が彈けるので、時々下の茶の間などで「學生さんの御勉强のお邪魔にならぬやうに。」といひながら好い音をさせてゐた。お咲ちやんといふその娘も少しは出來るのでおかみに稽古をしてもらふのだといつてぽつん〳〵やつてゐることがあつた。その娘はいつも「小母さん今日は。」と氣取つた調子で聲を掛けながら入つて來た。そして入口などで誰れでも止宿してゐる男達に顏を見られるのを羞かしさうにして、急いでおかみの茶の間に逃げ込むのであつたが、その身體つきにも極まり惡さうな樣子にもいゝう若い男を見たいやうなところが見えてゐた。

彼も、その羞含んだやうな若い娘らしい美しさに輕い興味を持つてゐた。そして毎日二階の自分の室にゐて下の茶の間にその娘が來るのを待つやうな心になつてゐた。さうかといつて主人の茶の間に入つていつて坐り込んで話をするやうな度胸は、たとひそんな娘がゐなくつても彼はまだ持つてゐなかつた。止宿人の中には押々しく茶の間に入り込んで話してゐる者もあつたが彼も法學院もそんなことは遠慮してゐた。それで彼は極めて眼に立たぬやうに、たゞ心の中でお咲ちやんの朗かな氣取つた調子の聲を遠くにゐて聽いて悅んでゐるだけであつた。どうかした機に廊下でばつたり行きあつたり、入口で偶然顏を見たりするのを待つてゐるよりほかはなかつた。

ある時彼は法學院と一緒に外に出てゆかうとして玄關の處に下りていくと、丁度そこへお咲ちやんが、いつものとほり水際の立つおめかしをして入つて來るところへぱつたり出會つた。彼はそこで妙な當惑したやうな顏をした。彼女の方でも羞含んだやうな顏をして、いそいで茶の間に入つた。

法學院はその光景を意味ありさうに笑ひながら見てゐたがやがて外に出ていつて歩きながら、
「君はお咲ちやんに惚れてゐるなあ。」といつて、からかつた。
「そんなことはないよ。」と彼はいつてゐたが、
「いや、惚れてゐるよ。そんなことはすぐ分るもんだ。」といつて、法學院はそれに定めてしまつた。
ある靜かな雨の降る日の夕方下宿のおかみは、
「××さん今晩下へお遊びにゐらつしやい、お咲ちやんが來て三味線を彈きますから、」といつてゐた。
彼はたゞ、
「え。」と、よく聞きとれなかつたやうにとぼけた振りをしてゐた。
果してその晩夕飯も濟んでから、下にはお咲ちやんがやつて來た樣子で、いつも派手な調子の笑ひ聲が聞えてゐた。やがて間もなくぽつん〳〵と好い音がしはじめた。彼は机に凭り掛りながら階下の樣子にじつと耳を澄ましてゐると、おかみが何か女中にいひ付けるやうであつたが、女中は二階に上がつて來て彼の部屋の入口に膝をついて障子に手を掛けると、階下からおかみの聲がして、
「あゝ一寸。」と女中を呼び返へした。
階下では一寸の間三味の音が止んで、主人がおかみに何か一言二言いつてゐるやうであつた。三味の音は又暫くしてゐたが間もなくそれも止めてしまつた。
そんなことが、もう十日も前に見た夢のやうに淡く彼の胸を通り過ぎていつた。前途に何か大きなことをしなければならぬといふ空想が常に彼を小心翼々たらしめてゐたとゝもに彼は異性に對してまだひどく臆病であつた。

ゆく春の快しいやうな日がつゞくと、彼はいつもその頃になつて慨な食欲の不進と睡眠不足とに困められてゐた。讀まなければならぬ書籍の多いことや知らなければならぬ知識が何處までいつて際限（はてし）のないといふやうな考へが壓倒するやうな脅威を以つて彼を倍々憂鬱に陷らしめた。彼の學問がまだ甚だ幼稚な程度のものであり、世間に關する知識もまた極めて蒙昧であつたにもかゝはらず、彼は何だかさういふ苦しい境地から退いて暫く自由に解放されたいやうな氣分になつてゐた。しかしそれは何處まで逃れていつても影の形に伴ふ如く彼の傍を去らないものであつた。それでも彼は今のまゝに其處にじつとしてゐることに堪えられなくなつたので、も少しすると暑中休暇が始まるのであつたが、そんな規則正しい學校にいつてゐる譯でもないので、五月の末に東京を立つて郷里の方に歸つていつた。そして夏は郷里の方から近い處の海岸にいつて海水浴をしたりして過してゐた。

七

九月の末、ずつと涼しくなつてから上京しようと思つてゐると、又去年と同じやうに幾日も秋雨が降り續いて去年と同じやうに鐵道が不通になつた。その時は山陽線にも不通の箇所が生じた。それが開通するのを何日までも待つてゐられないので、その時郷里から神戸の方に用事で出て來る小學校の教員三人と同行して、岡山まで十里ばかり西の方へ逆行してそこから汽船で瀬戸内海を夜船に乘り、翌日神戸に上陸し、教員達と一日神戸の街を見て歩いたりして去年の今時分そこから横濱まで陸路を往つたことなどを思ひ起してゐた。そして二晩神戸に泊り、その翌晩彼は同行の教員達に別れを告げ、一人で神戸から汽車に乘つた。その小學校の教員といふのは彼がまだ十三四の頃小學校にゐる時分いづれも長い間訓陶せられた人達であつた。學校で教へられる外に教師の自宅にいつて夜學を教はつてゐたこともあつた。小學

校を卒業する前、彼が中學校に入學する試驗の準備をしてゐた時分にはその教師の一人を彼の家に泊めて算術だの日本外史だの十八史略などを毎晩教へてもらつたりして緣故が深かつた。

　彼の母はもう、彼がどうしても東京へ出て行かずには居られないものと諦めてゐるのであつたが、それでもやつぱり暫く傍に戻つてゐる者が又遠くへ去つてしまふのが新しい哀傷の種であつた。それで、せめても其等の教師達と途中まででゝも同行することが何となく心丈夫のやうに思はれたのであつた。

　彼は堅い三等室の腰掛けに寢苦しい一夜を眠つたり目を覺ましたりして、翌日沼津あたりまで來ると、そのことはもう前から知つてはゐたが、箱根山中の鐵道の破壞の箇所が案外甚くつて、小山（駿河驛）と山北驛との間を三里くらゐ歩かねばならぬといふことが段々そこへ近づいて來るに伴れて分つた。昨夜は鄕愁に沈んだりして碌々安眠出來なかつたうへに三里も山道を歩かねばならぬことゝ思ふと、落膽りしてしまつた。そして、どうしてかう、自分には東京へ來るといふと必ず前途に障害が起るのだらうと思つて、迷信的な危惧の念に離られた。そのうち汽車は御殿場を過ぎるとそれから先は急勾配の道を間もなく小山驛まで駛せ下つて來た。いくら難澁でも歩かぬといふわけにはゆかない。深い箱根の山の中のことで車はもとより山駕籠などもなかつた。小山驛に着くと、まるで戰場のやうな雜沓である。汽車が不通になつて客の荷物の運搬に不意の儲け仕事にあり附いた土地の婦や若い男が荷物を引つ背負つて山道を案内しながら次驛の山北との間を往復してゐるのである。彼は汽車の中で口を利き合つた二三人の旅客とゝもに二人の婦に小荷物を背負はし、尻端折りになつて、小雨のそぼふる中を威勢よく出掛けた。そこはもう神奈川縣の領域でところ〴〵に這伏つたやうな草屋があつた。行々煤けた民家の軒の表札をのぞいて見ると足柄上郡に屬してゐた。彼は、子供の時歷史で讀んだ足柄山の嶮とはこの邊であつたらうかといふやうなことを考へながら歩いた。旅客は絡驛としてつゞいた。道

は辛腸として三度び高い峻阪を上つたり下りたりして三時間ばかりを費して山北驛に達した。びしよ〳〵雨の降る中をやつと驛前の旅宿に辿りついて、そこで滾々流れてゐる清水で脚の泥を洗ひ流し座敷に通つて遅い晝支度などしながらそこから東京行きの汽車の發車するのを待つてゐた。

雨の降る中を東京に着いたのはもう日の暮れ方であつたが、その頃法學院は麹町の方の下宿には一人で居り切れなくなつて、神田の駿河臺寄りのけちな宿に變はつてゐた。彼は暗い雨の中を、長時間氣欝せな俥の幌の中に揺られて、ともかくもそこへやつて來た。

彼は折角さうして海をこえ山を越えして出て來た東京が、わびしい雨の降りつゞいてゐるせゐであるか、或は法學院の居る下宿が薄暗くつて汚い家であるがためか、ひどく荒寥とした感じを與へた。そして、五月の終から四五ケ月[illegible]きな風呂敷に包んだまゝ法學院が預つておいてくれた蒲團など取り出して、疲れた身體を黴臭い寢床の中に横へた。

翌日、その下宿ではとても彼には辛抱出來さうになかつたので又麹町の先の下宿にいつてみると、幸にもとの座敷が空いてゐたので、又そこへ居るにしたが、春の時分から可けなくなつてゐた腸の具合が今度の不快な旅行のために又一層いけなくなつて來た。彼は學校へは捗々しく行かないで醫者に通つたりして空しく一ケ月ばかり日を消してゐた。そして昂奮狀態で嘗て思ひ描いてゐた夢のやうな空想は脆くも打ち消されたやうな意苦地のない氣持になつてゐた。内分は何よりも先に健康狀態からいつても、とても東京にゐて今後學校に行き、それから世の中へ出て働いて行けさうな人間でないやうな氣がして來た。どちらにしてもすつかり今の身體を癒してしまはなければ駄目だといふ氣になつて、その頃内幸町の方に新に出來た消化器專門の病院へいつて診察してもらつた。

院長はやつと數年前長い間の獨逸の留學から歸つた若い綺麗なドクトルであつたが、最新の診察法によつて診察した

うへで、ドクトルは何も包むところなくいふと云ふやうな率直なけのきゝやうで、

「胃も大分擴張してゐる。それからこの肝の處が脊が少しいけない。その方が大事だ。これから入院してはどうだ。入院して腸胃を良くしながら、肺の方の試驗をしてみる必要がある。」といつた。

彼は突然に非常な運命的な宣告を與へられたやうな氣がして、はつとした顏になつたが、入院するといふことについては、今急にひどく惡いといふやうな狀態でないだけに即座に決しかねた。

「十分御療治をして頂きたいとは私も思ひますけれど、入院は私の一人の考にはいきませんから、よく國元とも相談しまして。」といふと、

「そんなことは事後承諾でいゝぢやないか。」

ドクトルは、黑い上品なモーニングの襟頸から細い金鎖の紐を長く懸けて、二重瞼の黑い大きな眼で、小柄な紳士であつた。さういつて、對手は入院なぞの自由の叶ふ人間のやうにいふ。

「でも二三日はいろ／＼都合もありますから。」といふと、

「さうか。ぢやさうする。」

彼は下宿に戻つて來る途すがら考へた。もし肺にでも故障があるやうであつたら何も斯も諦めねばならぬが、自分にはどうもそんなことを今まで思つたことがなかつた。それでも素人には自分で氣の附かぬことを上手な醫者は知つてゐるのかも知れぬ。醫者があんなことをいつたことから、ふつと思ひ起してみると、去年まだ東京に出て來ない前に四五月頃でもあつたか、同鄉の子供の時からの友達が日淸戰爭の時補充兵に徵せられて滿洲の方に往き、後赤痢に病罹つてそれが一應回復すると、後送せられて到頭除隊になり、自家へ戻つて靜養してゐたが、いつまでも風邪が癒らないとい

つてよく咳をしてゐた。その後あんまり長くさつぱりせぬので縣廳のある市に出ていつて縣立病院の診察を受けた。病院では肋膜炎だといつた。そして翌日入院することになつた。その時同行して市へ出ていつた彼とその友達とは、その晩懇意な家へ泊つて一つ夜具の中に寢た。友達は彼より二つ三つ年長であつた。そして朝床の中で眼を覺ましてもよく咳をしてかつと手布に赤い痰を吐いて、それを寢ながら彼の方に見せて、

「こんな赤い痰が出る。」

といつてゐた。しかし、病院では前日たゞ肋膜が悪いといつたので、誰れもそんなに氣使はなかつた。彼は市で用事を濟まして間もなく一人で郷里の自宅へ歸つて來た。それから四五日過ぎて、やつぱり彼等の幼友達で市の醫學校へ行つてゐる人間が歸つて來て先日病院で肋膜炎といつたのは、あれはたゞ氣休めに本人にだけさういつたのであつて、もう高度の肺結核に進んでゐるのであつた。病院では、とても今後一ヶ月の生命もむつかしいといふ診斷であるといふ話をした。果して醫者の豫言のとほり病人は丁度一ヶ月くらゐして死んだ。それで、ひどく神經を惱んだのは彼であつた。その時それを聞いてもう自分には必ず肺結核が傳染してゐるものゝやうな氣がして一時居ても起つてもゐられないやうな恐怖に襲はれてゐた。

たゞそれのみならず、去年の一月兄が死んだはインフエルエンザが原因で急性肺炎に變症したのであつた。その時彼は實に自分の身を傷ぶるまでにその兄の死を悲んだ。その結果自分もインフルエンザの氣味で、氣管を惡くし、冬から五月頃まで長い間輕微な發熱に惱まされてゐたのであつた。肺結核の友達と一つ寢床に寢たのが丁度その輕微な熱の進退のある頃であつた。尤も彼はその後五月になつて、醫者の同意を得て、風光明媚な瀬戸内海の海上旅行に出掛けて十日ばかり小豆島を巡ぐつて來たゝめに殆ど奇蹟かと思ふほど、すつかり不快な熱のさし引もなくなり、冬の間からと

かく進まなかつた食欲も海の上にゐる間からどん／＼食べられるやうになつた。そして、その九月に勇氣を出して東京に出て來たのであつた。

それ以來病氣のことなど暫く忘れてゐたのであつたが、春時分から又とかく不健康に惱まされてゐた。

彼はもうすつかり、醫者に運命的な宣告を與へられたやうな弱い失望を胸に抱きながら地上を踏みしめるにも脚に力の入らないやうな氣がして、病院の門を出ると、そこから俥に乘つて下宿に戻つた。その頃は日比谷公園がまだ茫々たる草原であつた。季節はもう十月の中旬で、冷々肌に觸はる風に吹かれながら俥の上でさま／＼な空想に沈んでゐた。

どちらにしても自分は東京に居ることを斷念しなければならぬ。さうなれば東京は諦めてもよい。そして田舍に歸つて氣儘に讀書をしよう。幾度か途中の難關を踏み越して東京に來たのであつた。それを思へば殘念であるが、田舍ではとても見てもらふことの出來ない名醫の治療を受けて身體を良くし、そして歸國すれば折角思ひ立つて去年以來東京に來てゐたことが全く無意味にもならぬ。さう決心して下宿に歸るとすぐ田舍の方へあてゝ委しい手紙を書き、入院の費用を仕送つてもらふやうに請求した。

八

病院は三等に別れてゐて、彼は無論三等に入つたのであつたが、三等は入れ込みであつた。彼の入つた病室は十疊で、そこには既う一人老人の患者が寢てゐた。その病院は極めて新式の療法を施す病院であるにも係らず病室は恐く瀟洒とした日本座敷で、殊にまだ出來てから二三年にしかならぬので、何處でも病院といへば汚いに似ず清潔でひどく感じが好かつた。それに座敷がそんな風であつたから病院へ入つてゐるといふよりも好い宿屋にでも泊つてゐるやうな落着い

た氣持がした。寢具なども上等の綿の入つた、全部を洗濯したての包布でつゝんで、それを度々取り換へてくれた。それに厚地の白毛布を添へてあつた。食物には殊に細かい注意が行き屆いてゐた。

彼は思つた。病院とだけ聞けばすぐ陰氣な感じのするのに、格別吊り床で擔ぎ込まれるやうな病人でもなく、こんな處に生命を預けて、何も彼も今までの希望や空想を放棄してしまつて、たゞ呆然として日を消してゐたら、こんなに安樂な處はあるまいとさへ思つた。どの患者を見てもさう氣持ちの惡くなるやうな病人もゐなかつた。それはまだ好い家庭などを持つた經驗のない、下宿屋生活ばかりして來た彼にとつてはさう思はれたのも當然であつたかも知れない。

醫者からは何よりも食事の際によく嚙み消化すことを注意せられて、胃の洗滌をしたり、胃部に電氣を掛けることを毎朝の日課にしてゐた。服藥も食前と食後との他に何ほ錠劑の物を一種與へられてゐた。それは何でもなかつたが、院長は毎日午後の回診に來て見ていつたが、二三日立つてから、傍の醫員に何かいつてゐた。そして、彼の方を向いて、

「明日一つ肺の方の試驗をして見るから。藥を注射してみて、それで熱が出て反應があつたら肺が良くないのだ。……どうだ夜盜汗をかくやうなことはないか。」

院長はまだ三十四五の人で、そんな物のいひ方であつたが、それでゐながら何となく親みがあつた。

「えゝ今はあんまりありませんが、去年の春時分にはよく盜汗をかきました。」彼は、去年風邪の時分のことを思ひ出してさう云つた。

「とにかく明日から一つ始めて見よう。」と又醫員を振返つてさういつて、「一週間に一度くらゐ、少くとも五六度やつてみて、それで反應がなかつたら、何ともないのだ。もし可けなかつたら、此處で十分胃腸を癒しておいて、それから又他の病院へいつて今度はそつちの方を治療しなければならぬ。」

院長は彼にさういひ渡して、次に同室の老人を診察した。老人は黄色く憔悴した顔色をしてゐたが、年もゝう七十近く看護婦からそつと聞かされたところによると、胃癌でとても見込みはないのだといつてゐた。それでも茨城縣の田舍の大盡と思はれて、もう世を讓つてしまひ、隱居の金にも困らぬところから、どうしても生きたいと思つて、散々方々の醫者にもかゝり、手も盡した揚句こゝの病院にもう三四十日も來てゐるのであつた。

老人は仰臥したまゝ瘦せて筋張つた胃腑のまはりを手で擦りながら、院長に向ひ、

「此の怪物はどうも爲樣がありませんな。」

と、尻上りの水戶辯で突如としていつたので、院長をはじめそれに隨つてゐる醫員や看護婦まで、どつと噴出してしまつた。老人も仕方なく濁つた皺だらけの顏ににやりと笑ひを浮べた。本人にはそれが致命症であることを明かしてなかつた。院長は診察を濟ますと、診斷表など見比べて何かいひ置いて出て行つた。

老人はなかく氣むづかし屋であつたが、孫のやうな彼に向つて退屈まぎれによく話をしかけた。そして小言のやうなことをいつたりした。そんな東國の果ての人間にも似ず義太夫が何より好きだといつて、氣の向いた時には寢床の上に起き上がつて三勝半七のさはりのところなどを嗄枯れた聲に色氣を付けて語る眞似をしたりするのが滑稽であつた。

彼が銀座から買つて來た新型の懷中時計を手にとつて頻りに好いくと觸つてみたり、自分の持つてゐる茶碗のやうな大きな銀時計を出して自慢に見せたりした。彼もゝう將來の空想や希望を斷念した氣持になつて　そんな時計などを入院科の餘分の金で買つて來たりして玩弄を弄ぶやうな無欲な氣になつてゐた。

翌日の午前醫員は看護婦を伴れて病室に入つて來て、彼の背の肩甲骨の脇の處に注射をした。「なるたけ今日は靜にして寢てゐるやうにしてゐて。」と、それだけ注意をして出ていつた。

彼はもう半分死んで往く者のやうな觀念の眼を閉ぢて、漫平と注射の後の鈍痛を局部に感じながら仰向けに寢床の中に横はつてゐた。もし發熱するやうなことになつたら、自分の運命は決定されるのであると思つて、今に熱が出るかであるかと、待つ心になつてゐた。すると午後になり、やがて最も體溫の高まる五時六時になつても格別發熱を覺えなかつた。看護婦はそれまでも每日六度づゝ驗溫器をあてゝみて體溫表に誌してゆくのであつたが、平日にくらべてわづかに一分か二分くらゐの相違に過ぎなかつた。

そんなことが三四十日の間に六回ほど行はれた。一回ごとに藥の分量は度を增してゐた。一週間に一度。今日はその日だといふ時には彼はその度ごとに運命の覺悟をして待つてゐた。しかし不思議なこと——であつたか、なかつたか——には六回とも殆ど熱といふ熱は出なかつた。最終の注射にたゞ五六分の體溫が上つたきりで先づ何事もなかつた。

院長はその翌日診察に來た時にじつと診斷日誌を眺めてゐたが、

「ふむ、なかなか成績が良いぢやないか。」

といつてゐた。

そんなわけで、一と月ばかりの豫定であつた彼の入院日數が意外に延びた。胃の方は食欲もあるし、さほどでもなかつたが、腸の具合が何時まで經つても本當にならなかつた。便通が常に不規則であつた。患者は大抵みんな幾らかづゝ體重が增したといつて喜んでゐるのに彼は何時も同じやうに輕かつた。彼は時々それを院長に訴へた。院長は親みのある笑ひを含みながら、

「今にふえる。」といつてゐた。

彼も長い間の經費のことを考へて、郷里の方に氣の毒だと思ふこともあつたが、如何なる前途の功名も榮達も斷念し

て、もう東京はこれきりにするのだと思ふと、何だか死んでゆく者のやうな諦めた氣持ちになつて、その埋め合せに十分に醫者の手當てを受けて田舍に歸りたいと思ふのであつた。

そして郷里に歸つてから後のことなどを、彼これといろ〳〵空想をしてゐた。醫者は、たとひ發熱はしたくつても身體は健康とはいへぬから、此の冬は退院したら何處か鎌倉か大磯あたりへ往つて暖かくなるまで養生するがよいといつてゐるが、もう此の上そんなことをして遠く離れた處にゐて金を使つてゐては郷里でも心配するであらうし、學生といつても自分などは大した金滿家の悴でもないのだから、これから十二月一杯もゐて退院したら一旦郷里に歸り、そして郷里からずつと近い處に須磨明石といふやうな處もあるのだから、あの邊で此の冬を過さう。それで身體が良くなつたら田舍の日當りの好い山や空地を開拓してそれへ果樹などを栽培しよう。そんなことを考へて彼は銀座へ散歩にいつた時に果樹栽培の書籍などを買つて來て見たりしてゐた。

內幸町の病院から銀座へはすぐであつた。その頃は土橋から虎の門の方までずつと芝と麴町との間に深い外濠があつて青い水を湛え、古い石垣の上には芝生の土手があり、それに水の上に枝を翳した老松が並んでゐた。病院の板塀の外は閑散な道路を境にしてすぐその芝生の土手がつゞいてゐた。彼はいつもその道路の方に出て、ぶらぶら歩きたがらまだ古い石垣の殘つてゐる見附から濠を渡つて土橋の方に出ていつた。今までは神田や麴町の高臺の方にばかりゐて、銀座の賑かな夜店などは殆ど見たこともなかつた。さうして格別何處がひどく惡いといふこともなく身體の方は病院に任かせて、毎日當てがはれる三種の藥を服用しながらまるで宿屋に泊まつてゐるやうな氣で銀座を歩いてゐた。夜の街にはしつとりと白い靄が立罩めて灯の色などが水の中を透して見るやうに潤んでゐた。それを思ふと、秋の初神田の薄汚い安下宿にゐる法學院の處へ到着した晩の感じとは又打つて變つて東京はさすがに去り難い好い處のやうにも思はれ

た。

その頃胃癌の老人は息子が迎へに來て一先づ退院していつた後、彼は一週間ばかり廣い病室に一人でゐた。がある日散歩から歸つて來るとそこに三十餘りの一人の新しい入院患者が來て寢床の上に横はつてゐた。傍には妻君らしい貧弱な女が附添ふてゐる。彼が戻つてくるど、患者は一寸起き上がつて挨拶をした。その顏はひどく憔悴してゐて蒼白く、眼の色にもう死相が表はれてゐるやうに思はれた。彼は直覺的にそれが肺病患者のやうな氣がしたので少時そこに坐つてゐたが、すぐ廊下に出て醫員の所に急いで行き、二等室がもし空いてゐるなら病室を取換へてもらひたいと賴んだ。長い間の入院で、醫員や看護婦とはもう懇意になつてゐた。

「先生、今日私の所に入院して來た人は、あれは何病氣ですか。」といつて彼は訊ねた。

「さあ、僕はまだ見ないんだが、どんな病氣か知らん。」さういつてゐるところへ丁度彼の方を受持つてゐる看護婦が廊下を通りかゝつたので、醫員はそれに、

「どんな病氣だね？　今此の人に訊かれてゐるんだけれど僕は見ないから知らないんだ。」

すると看護婦は肥つた黑い顏に、眞白な齒を見せて意味ありさうににや／＼してゐたが、醫員に向つて、彼にはよく解らぬことをいつて何か話してゐた。醫員は、

「さうか。……二等室が一つ空いてゐるだらう。」といつた。

そして看護婦が一つ空いてゐるといふと、

「ぢや、そこへ變へて上げたらいゝ。」と看護婦に命じて、彼の方に向ひ、「ぢや今變へて上げますから。……少し氣を附けるどいゝんだがなあ。」と終をひとり言のやうにいつた。

彼はもう再び自分の病室に後戻りする氣にもなれなくつて、そのまゝ廊下に待つてゐて、書籍や手廻はりの品を看護婦に今度移る方の室に持運んでもらつた。その室は六疊に床の間と違ひ棚が附いてゐて三疊の次の間もあつた。その晩から寢具や食べる物なども今までより又ずつと好くなつた。從つて入院料も今までの半分高くなつた。彼は最も上等の旅館にでも泊つてゐるやうでまだ學生の身分で勿體ないやうな氣がするのであつたが、これつきり東京を斷念するのだと思ふと、少しはそのくらゐのことをしたつていゝだらうといふ氣にもなつてゐた。

南陽を受けた六疊の病室の障子の外にはずつと廊下があつて、欄干に凭れて二階から前を見下すと、植込みの向うの板塀の外にはすぐお濠の土手のいざり松が眺められた。

それから四日も立たぬうちに彼の恐れた入院患者は深夜に秘密に裏の不淨門から運び出された。果して肺結核であつたことが後の看護婦の口から洩らされた。彼は幾ら高い入院料を拂つても轉室した方がよかつたと思つた。

腸の方は何程十分に整頓しなかつたけれど、追々年暮にも迫つたので、院長にも相談して、彼は十月の中旬から七十日ばかりも入院してゐた病院を退院することにした。そしてその晩はすぐ近くの芝口の方の旅館に引揚げて一泊し、東京に永久の別れを告げてその翌日朝早く新橋から立つて歸國の途に就いた。

八

彼はもうすつかり自分から重態の病人のやうな氣持になつて、褞袍にくるまつた身體を列車に凭れながら、時々沈んだ眼を上げて冬枯れた窓外の野山を眺めてゐた。

汽車が箱根山にさしかゝると、三四ケ月前九月の末に雨の中を難澁して三里の峠を踰えて來たことが、今となつては

まるで徒勞であつたことを思つた。トンネルと鐵橋との連續してゐる山北から小山あたりの嶮岨な峰の容を窓から覗いて、あの邊を歩いたのだらうと思つてみたりした。

途中で名古屋に一泊して翌日の夕方郷里のステーションに着いた。郷里の山や野は何時見ても平凡であつた。何の奇趣もない低い山が冬枯れの姿で寂しく田圃の向うの方につゞいてゐた。子供の時から見馴れた其等の野山を眼の前にするとゝもに、汽車に乘つて歸つて來る道すがらも、今後の事について今の今までいろ／＼考へてゐた空想がぱつと虹のやうに消えてしまつた。彼は何だかつまらない氣持になつてステーションから三十町あまりの川沿ひの田舍道を寒い風に吹かれながら俥に搖られて點燈頃に村の中の我が家に入つた。

母も兄も、

「そして身體の具合はどうぢや？」といつて、心配さうに訊ねてくれたが、何よりもさうして恙なく彼が東京を引揚げて歸つて來たことを喜んだ。母親はいつも彼が歸つて來ると一つ處に寢ることになつてゐる座敷に入つて來ながら、

「おう／＼もう戻つて來たがえゝ／＼。身體が惡うては何にも出來ん。」と、安心したやうにいつてゐた。

間もなく正月になつた。子供の時から餘り雜煮などの食べられなかつた彼は、病院で喧しく食物のことを注意せられたので、そんな物には一切箸を着けぬやうにして、出來るだけ病院でして來たとほりの食物を攝取するやうにしてゐたが、不便な田舍ではそれが自由にならなかつた。

入院の日數が自分にも意外に長びいたうへに、後には上等の病室に轉じたりしたゝめに隨分金も使つたのであるが、それは、遠くにゐて手紙では委しい事情が分らなかつたりするので、近村から出ていつて、大阪のある會社の東京の支店をあづかつてゐる人間に話して、一時彼の一存で融通してもらつてゐた。そんな多額の金の支出については家の方の

思惑も氣になつてゐたが、表面では爲方のないことゝ思つてゐるらしく、兎も角借りたゞけの金は兄が出してくれたので、彼は、田舍では十四日の松飾りもとれてから、年末の間に合はなかつたその金を持つて隣村の借りた人間の處へ拂ひにいつた。その人は丁度彼と前後して歸鄕してゐた。

そして一ケ月ばかり彼は家に靜としてゐたが、醫者の勸告もあつたので何處か暖い海岸に行つて冬を過したいと思つてゐた。するとその金を貸してくれた人間が大阪にゐる時分に時々海水浴にいつてよく知つてゐる民家が須磨の手前の鹽屋といふ處にあつて實費で置いてくれるといつて紹介してくれたので、そこへ行くことにして、彼は又夜具と少許の手廻りを持つてその鹽屋まで出掛けていつた。そこまでは汽車で三時間くらゐのものであつた。それはなるほど鹽屋のステーションから遠くない海岸の須磨の街道に沿ふた處にある小い家であつたが、海水浴の貸間に建てた粗雜な家で、彼を通した二階の六疊の間には床もない、汚い疊の敷き合はせが一寸ばかりも空いてゐるやうな處もあつた。海に面した方からは淡路島がすぐ前に見えたが、家の外の街道には絕えず荷馬車などがぽこ〳〵塵埃を揚げて通つてゐた。飯だけは炊いてくれるといふことであつたが、東京でその頃最も設備の行き屆いた上等の病院に長く入つてゐた贅澤な便宜が習慣になつてゐるので、往つたその晩からとても長く辛抱は出來さうになかつた。風呂なども、漁師などの入りに行く汚い、小い洗湯が村はづれにあつた。彼は薄汚い座敷に碌々落着いて安眠することが出來なかつた。そして翌日はそこから二つめの驛になつてゐる明石の町を見にいつてぶら〳〵海岸を步いて見たりして、そこにある立派な旅館を兼ねた料理屋に上つて晝食をした。そこからは淡路島が一層手に取るやうに見えた。こんな處に居られたらばと思つたが、それはもう此の上到底望まれないことであつた。その晩仕方なくもう一晩戾つて來てそこに泊つたが、翌日は又向うに見えてゐる淡路島に渡つて見たくなつて、兵庫から船が出るといふので、又鹽屋から二つ三つのステーションを乘り越

して兵庫に往き、そこから淡路の洲本に渡つていつた。

短い冬の日脚は摩耶山の方にもう春きかけてゐたが、海の上は靜かであつた。船がだん〳〵淡路の方に近づいて來るにつれて、次第に暗く黄昏れてゆく麓の村には夕煙が遠く棚曳いて、懷しい人家の燈が點々として瞬きはじめた。途中一二ケ處に寄航して、やがて洲本に着いた時分にはもうすつかり夜であつた。暗い港の棧橋には印の入つた提燈を振り翳して宿屋や問屋などが犇めくやうに多勢騷いでゐた。彼は、めづらしいそんな古風な港の夜景に詩的な興味を唆られながら、そこに提燈に灯を入れて梶棒を並べてゐる人力車の一つに乘つて、旅館へ案内さした。その旅館はこんな處には案外に思はれるほどの立派な旅館であつたが、それは考へてみると不思議でもなかつた。大阪や神戸あたりの人間が始終遊びに來る處であつた。彼は垢拔けのした女中に案内せられて表二階の方の絨氈を敷いた廣間に通されたが、何處か遠くの方の座敷では宴會でもあると思はれて、絃歌の聲が大きな建物に快い反響を起して鳴りひゞいてゐた。多勢が合唱で、

「和歌の浦には名所がござる……」

といふ義太夫節を高らかに語つてゐるのであつた。

彼は凝乎とそれに耳を澄ましながら、今まで何處で、どんな巧みなその一節を聽いたよりも不思議に詩的な感興を唆られてゐた。ふつと思い浮べてみると、もうそのあたりは丁度紀州の和歌浦の對岸になつてゐるのであつた。肌に觸る夜の空氣も一月頃の厳冬とは思はれぬ暖かさであつた。

京阪風の垢拔けのした女中が鯛のおつくりだの鱧の吸ひ物などの載つた食膳を運んで來た。彼は箸をとりながら、遠くにローマンチックな思ひを馳せてゐた。朗かな三絃の調子が涙するやうな快い感情を彼の胸に搖つた。

「姐さん、こゝであの節を聽くのは何ともいへず好いなあ。こゝから和歌の浦は近いだらう。」

「へえ、すぐこの向うでござります。よう晴れた日には和歌の浦の磯馴れ松が霞の中に見えてます。」

その晩彼は詩の中の人間のやうな好い印象を抱きながら枕に就いた。夢の中に遠くの方でどゝうといふ浪の響が聞えた。

翌日そこからまだもつと〳〵南の方へ往つてみたいやうな氣持に促されて、旅館から人力車に乘つて海沿ひの道を由良の港の方まで往つてみた。南へ南へと何かしら空想が導いてゐるやうに思はれた。

淡路から歸つて來ると、その晩又もう一夜鹽屋に泊つて、その翌日彼は、三四日前に持つて來たばかりの荷物を纏めてそこを引揚げて歸つて來た。

鹽屋の貸間をした家の女房は、

「あんたはんは一寸落着かんお方やなあ。」といつて、彼が荷造りをしてゐるのを立つて見てゐたが、彼は默つてゐた。

家に歸つてからは、前年感冒の後瀬戸内海の海上旅行をした時の結果の好かつたことを思つて、今にも少し暖かくなつたら又そつちの方へ出掛けていつてみようなどゝ思ひながら、暫く家に靜としてゐた。けれども何時までも腸の具合が整はなかつたり、一寸した咳が出たりすると彼は自分から、もう餘程高度に病勢が進んでゐるやうな氣がして、そのことを考へ出すと、とても靜に落着いてはゐられなかつた。東京の病院を退院する時處方箋に書いてもらつたとほり藥品を求めて自分で藥を調合して絕えず服用してゐた。退院證の病名には胃酸過多症と神經衰弱症としてあつたが、別に炭酸グヤコールとかいつた强肺藥を處方箋に指定してあるのが、ひどく彼の神經を惱ました。隣家に幼友達で市の醫學校にいつて卒業に近づいてゐる人間からいろんなことを話して聞かされるので彼は一層自分で病を重くしてゐた。そして

聽診機を胸や背にあてゝ見て、
「お前は何ともないよ。」
といふのが何だか氣休めに好い加減なことをいつてゐるやうに思はれて爲方がなかつた。
「そんな好い加減なことをいはずに、もつと本當のことを云つてくれ。」彼がさういふと、
「何にも好い加減なことをいつては居らん。」
まだ小學校にいつてゐる時分から近村で秀才の名を馳せてゐた、老成なその友達は、さういつて勃然としてゐた。しかし彼の方ではそれでも容易に安心出來なかつた。病菌の無有を確めるには喀啖を檢査するのが最も確かだとその友達にいはれて、それを檢査してくれと頼んだが、友達は笑つてそれに應じなかつた。生半檢査などすると悪い結果が明かにされるので、それを拒むのだらうと思つて、彼は小い硝子壜に少量の喀啖を入れて、東京の病院で馴染になつてゐた醫員の一人にそれを送つて檢査を依頼した。その返事には、少しもそんな憂ひはないといふことが書いてあつたが、それでもまだ彼は何だか安心がならなかつた。

九

平凡な野山のほか何物もない彼の村の中を汽車が横斷してゐた。山陽線は東海線に連續した鐵道の幹線であつた。汽車は日に幾回となく東の方の稍ゝ高い山と山の峽を出て來て轟々たる響とゝもに鐵橋を渡り通り、過ぎた村の空に一抹の煤烟を殘して置いて西の方に見えてゐる山際の村に隠れて行くのであつた。西から來るのは反對に東の方の山の峽に姿を消していつた。道はたゞ一と筋であつた。汽車はそんな詰らぬ片田舍を通過しても、行く果ては神戸や大阪京都のや

うな繁華な都會を經て遠くの東京まで續いてゐた。幾重の山や河を隔てゝゐても自由に往つたり來たりしてゐる汽車を思へば其等の繁華な都會は近いやうでもあり、また遠くも思はれた。彼は一日家に居ることに倦み疲れると日に幾度となく田圃の方に出て歩きながら東に向つて馳せ去る汽車の後を見送つてゐた。そんな草深い田舍にゐては繁華な都會のさまを聯想せしめるのは、わづかに汽車を見てそれを偲ぶくらゐのものであつた。

それに、いろんな一家の事情がやつぱり彼を不愉快にせしめた原因であつたのみでなく、何時とはなしに都會生活の便宜や贅澤な習慣を多少でも味はい覺えた彼には、とても是から先貧しい田舍の生活など辛抱出來さうでなかつた。都會的な何の色彩も娛樂もない田舍に永い一生を老い朽るといふことは、功名榮達は兎に角として、彼には唯その一事だけが死そのものゝやうに絶望的なことであつた。けれども東京は、病院に入院する決心をした時からもう斷念すると聲明してゐたので、それでなくてさへ何時も病に襲はれてゐるやうな氣持でゐて、この上また東京へ出て往くといふことは言ひ出されないことであつた。わづかに東京から取寄せて讀む雜誌や新聞によつて癒し難い憧憬の渴を慰めてゐた。文學志望の青年の投書によつて出來てゐる雜誌を暗記するほどの熱心を以て讀んだりして、毎號誌上に華々しい文名を馳せてゐる投書家の才藻を羨望しながら自分の才能の乏しいことをいつも悲觀してゐた。彼は幾度か何か書いて見やうとしてもそれが少しも意の如くならないので獨りで絶望の聲を發して懊惱してゐた。

彼が一體何を目的として東京に往つたり戻つたりしてゐるかといふことに就いては深い洞察も理解も持つてゐなかつた代りに、彼の志望等に對してゝ何の干渉も助言もしなかつた。たゞ飽くまでも手堅い理財家であつて、通俗な意味の現實的な人間である兄が彼の進退について交渉のある點といへば學資を要求せられることの迷惑だけであつた。兄の意中は彼の將來がどうといふやうなことよりも差當り彼が東京へ往かうとさへしなければ金を出さないで濟むのが何より

も滿足なのであつた。尤も兄にしては、そんな得體の知れぬ目的の爲に月々幾らかづゝの學費を仕出することが甚く詰らぬことのやうに思れたのも強ち無理でもなかつた。そして少し氣に向かぬことがあると彼が直々に驕慢な素振りを見せたり不滿な顏をしたりするのが兄などには不快であつた。又彼の方の考になつてみると、金はなるたけ出したくない、しかし自分が家に居つて何にもせず、ぶら／＼してゐられるのが何となく眼障りであるのが見え透いてゐた。一度一寸法師の門付けに彼が錢箱の中の錢を拾錢くれて遣つたとか、五錢やつたとかいふやうな些細のことが原因で兄と氣まづひ言ひ諍ひをしてから、彼は心中、自分はどうしても生涯この家に住むべき人間でないといふ決意を堅うした。勿論何時かは生まれた家を外に出なければならぬのが彼の運命ではあつたが、それよりも早く何とかして自分で生活する道を考へなければならぬと決心したのがその時であつた。新聞と雜誌とが何よりも好きであつた彼は、自分の將來生活してゆく道もそれよりほかに無いと思はれた。けれどもそれはやつぱり覺束ないことであつた。その頃文學青年の投書によつて成つてゐる雜誌に寄稿してゐた若い文學士が神戸のある新聞に主筆として來てゐることを其等の雜誌の上で知つてゐたので、彼はその文學士を訪ねていつて、自分の熱心なる希望を訴へて其新聞社にでも／＼入れてもらへれば仕合せだと思つた。

そのことを兄に話して神戸に往きたいといふと、兄はそれには二つ返辭で同意した。

「お前が自分で金を取つて何かやつてみようといふんなら、そりや何處へいて、何をしようと内では何もいはん。」

その頃から可なり皮肉であつた彼は、その一言で兄の心が一層よく分つたやうで餘り面白くは思はなかつたが、兎に角家にはどうしても居る氣はしなかつたので、神戸へ出て來て新聞社で宿處を訊いてその文學士を諏訪山寄りのある旅館に訪ねていつた。學士は紹介狀も持たなかつた彼にすぐ會つてくれた。座敷に通ると、廣い二間つゞきの二階座敷か

らはすぐ向うに神戸の海が一眸に見晴らされた。彼は、若くて新聞の主筆になつて、こんな眺望の好い座敷に陣取つてゐるその學士の才能と幸福とが羨望に堪えられなかつた。

もうそろ〱、初夏の頃で、若い學士は圓く肥つた身體にセルの單衣を着て坐つて話したが、寡默の方で向うからはあまり口を利かなかつた。それでも格別矜し付けるやうな六ケしいこともいはず

「何か今までに書いた物がありますか。」と氣安に訊いてくれた。

その時彼は、心の中で、せめて何か一つでも、絶えず購讀してゐる東京の投書雜誌に撰拔されて掲載されてゞもゐるならば、大變心丈夫であるのだがと、ひどく慚愧とした。そして顏を赤くしながら、

「いや、まだ何にも書いたことがありません。」といつた。

「何か一つ書いた物を見せて下さい。さうでないと、私の方でも貴下に對してどうといふ見當が付きませんから。何でもいゝです。」

彼はそれを至極當然のことゝ思つたが、どんな物が書けるといふ自信がなかつた。彼はその若い學士の文章を腹から讃美して居つた譯でもなく、自分は意の如く何物も書けないながらに、自分相應の批評的見地から學士の文章があまりに漢文臭く、溌溂とした清新味のないのが物足りなかつた。たゞその人によつて新聞社にでも入れてもらへれば好都合だと思つたのであつた。

彼は用談はそれで濟んでもまだ、何だかそこに坐つてゐて、東京の雜誌に文章を掲載してゐる學士から何かしらいろ〱な話を聞いてみたいやうな氣持に囚はれてゐた。けれども學士はそれつきり後は默つて何にもいはうともせず、所在なさゝうに長い煙管を指先で弄びながら、ぐるぐる廻はさうとしては盤に取り落してゐた。

彼はそれからすぐ歸郷して何か詰らない物を二三日苦心して書いて送つたが、學士からは何の返事もなかつた。自分でもとてもそんな物では駄目だと知つてゐた。それでもゝう一度學士を訪問してみたくつて、すつかり夏になつてから又神戸まで出掛けて往つた。神戸まで往くにも兄から汽車賃を貰つていかなければならなかつた。兄は澁々幾らかの小使を出してくれながら、

「神戸へいたて、おへる（駄目なこと）もんか。」と吐き出すやうにいつてゐた。

神戸では先の旅館を訪ねていつたが、眞實かどうだか學士は不在であつた。夕方にはお歸りになりますといふので、そこらを一と廻りして二三時後に又行つてみたが、やつぱり留守であつた。彼は、もし學士が都合よく居ても、つまらない物を書いて越したので、却つて會つてみようといふ強い自信もないのであつた。暑い日に照り付けられて、彼の顏面はひどく神經が焦立つてゐた。旅館の廣い玄關には番頭や若い綺麗な女中などが三四人も脚を投げ出したりして閾に腰を掛けて話してゐたが、二度目に不在と聞いて彼が悄然出て戻らうとして、板塀の外まで來ると、いけすらしい若い美しい女中と思はれて、彼に聞えるやうな大きな聲で、

「脈な坊さん！」と、變に節を付けていつた。彼はひどく侮辱されたやうな氣がして、一人で顏を赤くした。

その晩神戸のステーションで又西へ引返へさうか、いつそこのまゝ東京へ往つてしまはうかと大分思案した揚句、どうかかうか東京までの汽車賃だけはあつたので、到頭東京往きの汽車に乘つてしまつた。夜が明けてから、驛ごとに停車するステーションで擦れ合ふ汽車の窓から見える多くの學生は、あれは皆な樂しい暑中休暇になつて、歸郷を急ぐのであらうと思ふと、彼は自分の、いつも確實を缺いだ進路を悔むやうな氣もするのであつた。

その頃法學院は又先の麴町の方の下宿に戻つて、それも郷里の中學校で知つてゐた人間と部屋を並べてゐた。その人

間はもう早稻田の政治科を去年卒業して京橋のある雜誌社に勤めてゐた。彼が其等の處へ突然顏を見せたので、「また來たのか。」と呆れた顏をしてゐたが、最初に彼が居着いた家なので、そのまゝそこに轉がつてゐた。

神戸まで往くといつて、又東京へいつてしまつたことが分ると、氣嫌好く家に居なかつた後のことなので、母親は又ひどく心を痛めて、彼が子供の時から公私の敎育に與つてゐた例の小學校の先生に賴んで、その先生から彼を一應呼び返すやうな手紙を出してもらつた。それには出來るだけ本人の希望を遂げさするやうに取計ふから、ぜひ一度歸つて來い、老母がひどく心配してゐるといふやうな意味のことが可なり嚴重な口調で書いてあつた。

彼は東京に來て十日ばかりしてその手紙を受取ると、早速又素直に歸つていつた。そして今度は凡てその先生が話を纏めてくれて、今後三年間くらゐで修業出來る學校を何處か迷はずやることに定めた。

「何處の學校にするか、學校も今こゝでちやんと定めて置かうぢやないか。」と、敎師はてきぱきと話を片端から定めてかゝつた。

何處の學校にするかといふことになると、彼はまだ心に迷つてゐた。それは必ずしも彼の志がふらついて居つたのではなかつた。むしろ餘りに理想が高過ぎて學校の撰擇が困難であつたのである。つまり依然として何の學校も氣に入らなかつたのであつた。自分の生涯の大事を輕々しく定められないやうな氣が、やつぱりしてゐた。しかしもう退引ならぬ此場になつて何時までもそんなことをいつては居られなかつた。丁度これならば一點の異存もないといふやうな氣に入つた妻が何時までも發見せられないのを、好い加減な處で折合を付けて生涯泣寢入りに諦めなければならぬと同じほどの辛さであつたのだ。彼は暫く凝乎と思案してゐた。

「あんたも、もうこれから先五年も六年も學校へ行くにしては遲過ぎる。」敎師は彼の確答の督促するやうにいふので

あつた。

「えゝ、早稻田か慶應よりほかにないのですが……慶應にしようかどうしようかと思つてゐるのです。……」

「慶應より早稻田の方がいゝぢやないか。」

「えゝ、それでもいゝのです。ぢや早稻田にしませう。」

「さう。それぢや學校は早稻田に定める。そして何科をやる？」

「それにも迷つてゐるんですが、文學科にするか、政治科にするか、どちらにしようと思つて。」

「政治科の方にしたらどうだ。あんたは政治が好きなんぢやないか。」

「それは好きですけれど、文科の方をやつてゐると、まさかの時に中學校の先生でもするのに都合が好くはないかと思ふんです。」

さういふと教師は、自分のやつて來た道に思ひ比べて、その方を安全だと思つたのか、

「あ、さうか、それなら文科の方にするさ。」

と、遂にそこで、それに定めてしまつた。彼には、さういふことに物事を定めてしまつたことが、殆ど堪えられないやうな、現實との妥協でもあり屈從でゝあるやうな感じがした。それから一ケ月にどれくらゐの學資を仕出してもらふといふやうなことまでも、母や兄などの居並ぶ其場で先生の裁きで定めてしまつた。

十

そして九月の初に彼は又何度めかの新規蒔きなほしで上京した。

早稻田の新學期が始つてから、今までの麹町の方からは道が遠過ぎるので、早稻田の南町にまだ、郊外のやうな野趣の多分に殘つてゐる處にある下宿を見付けてそこへ引移つていつた。その邊には武藏野の一部のやうな深い雜木林があつたり、清楚な竹藪などが水の涸れた大きな古池の土手を取卷いてゐたりした。そして日を追ふて秋氣が清くだん〳〵讀書の好季節になつて來るにつれてさすがに氣迷つてゐた彼の心も落着いて、好學の氣分が湧いて起つた。

その頃健康も相當に回復してゐたからでもあつたらうが、不思議に、病氣の恐怖に襲はれるやうなこともなくなつた。生命に對して大膽になつて來た。死とか自殺とか厭世とかいふやうな問題を考へてみることも度々あつたが、それは段々學問の進步に伴れて半ば書籍の上で考へてみることであつた。三年の歲月は過ぎてしまへば、思つたよりも意外に早く立つてしまつた。その頃から歲月の流れることの早さを思ふやうになつた。しかし三年の學校生活は、その學校を好む好まなかつたにもかゝはらず、その間に彼の智識の進步したことは爭はれなかつた。敎師にも好い敎師が居つた。文學といふものが今までたゞ漫然と小說だけを讀んで思つてゐたことよりもゝつと明瞭なる意味を以つて考へられるやうになつた。けれども彼はまだ小說の作家にならうとする自信もなかつたし、それをさほど高尙な有意義の仕事とは思はなかつた。やつぱり彼の志は少年時代に空想した硬派の文學にあつた。殊にその頃學校の敎師の一人であつたある若い文學士は天才的の論文家であつたが、その人の淸新な物の見方や壯麗な文章には彼は、まだその學校に入らない前から夙に憧憬してゐたのであつた。彼は殆どその人の文章に魅せられて自分の將來に對する美しい空想を描いてゐた。

十一

學校を卒業すると同時に學費の給與も絶え、自活の道を始めなければならなかつたが、幸ひに卒業すると間もなく恩師の心配でその頃最も盛大を極めてゐたある雜誌社へ就職することになつた。そして半歳ばかり熱心に仕事に携はつてゐたが、我儘でもあり自負心も強い彼には面白くないことが度々あつたので、年が改まつてから間もなく折角就職したそこを止めてしまつた。しかし、彼はそれを悔ひはしなかつた。その時から彼は原稿を書いて錢を取ることを知つた。自分の如き者の書いた文章が錢に換へられることを考へて不思議のやうでもあり、それが多年の理想に一致したことでないのが最も遺憾であつた。

その後或は一年とか半歳とか方々の雜誌社や新聞社に就職したこともあつたが、何處でも長くは勤まらなかつた。少年の頃から抱いたゐた空想は何時になつて實現される期があるとも思はれなかつた。淸く描いてゐた理想は實世間に打突かる度ごとに無慘にも粉つぱ微塵に打碎かれた。美しい靑年の夢は、丁度夕方の虹の如く敢果なく消えていつた。志望の成就を熱心に思ひ詰めてゐるあまり、戀愛などのことを考へてゐる心の餘裕もなく、又そんなことを快しとしなかつた彼も追々成熟する年とゝもに異性を欲求するやうな氣持になつてゐた。そして靑春少年の夢が悉く破れてしまつた後、荒寥とした現實生活の絶望をまぎらすものはやつぱり戀愛であつた。

それから殆ど二十餘年、人間の一生涯で最も働き盛りの期間は意の如き藝術の成らざる歎きと、それに伴ふ生活の艱難と、女性に對する絶望や憤恨とで具さに疲勞と困憊とを極めてゐた。人の一生涯はもつと面白いもの、順調に幸福が得られるものと思つてゐた期待は根柢から覆され破碎せられたやうな慘めな狀態になつてしまつた。それは例へば西瓜のやうな物を石の角にでも打突けて微塵に碎かれたとか、太根の葉房のところを捉んで水々した白根を力一杯地上に毆き付けたかといふやうな、打ちのめされたる慘憺たる感じであつた。あまりに、空想してゐた期待と違ひ過ぎた現實の

不如意と苦澁とに愛想が盡いて、これではいつそ生存を中絶してしまつた方が好いと思ふことが屢々あつた。殊に戀愛の絶望と憤恨とは彼にとつては確かに死よりも強い苦惱であつたに違ひなかつた。

彼は其等の失望や疲勞から、生きねばならぬ努力を投げ出してしまつて、何處か、何人とも顔を見ないやうな遠い處の山の中にでも入つて往つてそのまゝ出來ることなら、行えも知らずに消えて無くなつてしまひたいやうな氣持になつてゐたこともあつた。しかしながら生存の劣敗者として死ぬことの意苦地なさを思ふと、どうしても死ぬ氣にはなれなかつたとゝもに、女に對する執着と怨恨とは彼を生きることに絶望せしめるよりも一層生に執着せしめたのであつた。

人間は何處から、何故に生まれて來て、そして何を爲すべきであるかといふやうな、彼が少年の頃自然的に抱いてゐたやうな架空な懐疑は學校生活を卒はる頃からもう問題ではなくなつてゐた。トルストイのさういふ思想に始めて觸れた時にもそれは無難に見過して通ることが出來た。藤村操の厭世自殺に共鳴するにはもう四五年の遲速があつた。彼が早稻田の學校、あまりに好まなかつたにも係らず、その學校の創立者の一人である ある博士や又ある哲學の教授の説く現實の中に理想を發見するといふ、飽くまでも現實に即した教説は遺憾なく の若い架空的な懐疑を一掃するに力があつた。その哲學の教授はいつた。

「君、人間が何處から何故に生まれて、何處へ往くかといふやうな愚かな問題は、何千年考へてゐたつて分らないよ。」

西鶴の描いた人間の苦惱が凡て金と女との現實的のものであつた如く彼の失望も落膽も憤恨も悉く現實の渦中に在つて起つた苦みであつた。そして少年の頃抱いてゐた社會とか國家とかいつたやうな問題については諦めてしまつて、それよりも自己の個人的問題が遙に痛切なものとなつた。

勿論彼は、藝術のみを以つて意義のある仕事とは決して思つてゐなかつたのみならず、もつと他に力の入れ効のある

人間の仕事があるやうな氣が何時もしてゐるのであつたが、生活の方便にもなるところから段々その仕事に離れられなくなつてしまつた。そんなことも彼にとつては、現實の爲めに理想を裏切られたやうな遺憾があつた。それでも後には藝術の完成が彼にとつては最も永遠の滿足であり最後の安心であるやうな氣もするのであつた。それに比べると戀愛は遙に一時的の喜悅であつたにちがひないが、ある女に熱中してゐる時には、良き藝術を成さうといふやうな淡い喜びなどとは到底比較にならぬ凄じい深刻な魔力を以つて彼は深い泥濘の中に引擦られていつたのである。

そこで前後二十餘年の間に幾度となくにたやうな失敗と苦みを重ねて繰返して來た彼の戀は、何年か後になつて振顧つて見ると、どうしてあんな女の爲に貴重な人間の精力と時間とを浪費したかと馬鹿々々しいやうに思ふのであるが、それは恰ど第三者が、「よくあんな女に。」といふのと同じことであつた。

そして今の彼は、最後に深い痛手を受けた女の憤恨から漸く回復して來たところである。彼は恐らく今後はもう戀をしないであらうと思ふ。少年の時空想した志望が成し遂げられなかつたと同じやうに戀愛の滿足も遂に得られなかつたのである。

十二

それでもどうかすると、極めて稀れに昔關係のあつた女のことを思ひ出してみることもないではないが、彼の經驗によれば時といふものが最もよく胸の痞痍を醫してくれた。或は時のほかにはそれを癒しうるものはないものはないともいへる。さういふ經緯については、彼の今日までその時々に發表した記録によつてほゞ明かである。其等の苦々しい日の事を再び此處で思ひ起して見ることは實に忍び難い厭はしさである。出來ることなら、それを皆な忘れてしまひたい。

く燒き棄てゝしまひたい。それは彼に取つて何の誇るところもない、たゞ人間の醜い弱點の表現に過ぎないものである記錄も悉から。

けれども又かういふことも思つてみる。彼の心持では、どんなに好い女であつても、それが向うの方から此方を向いて來る女であつたならば、きつと難有いものには思はれなかつたであらうが、多くの女は大抵彼に背いて去つてしまつた。その背く理由は彼の方でこしらへたのであつたかも知れぬが、さうして彼の方に背を向けて去つた女に對する憤りと如何なる方法によつてかその憤りを晴らさねば濟まされない一念の爲にのみ生きてゐる興味を刺戟されたやうにも思ふ。それは恰も敵討ちを志願とする者が慘澹とした生活を續けながら最後の目的を果たす爲には凡ての他の欲求を犧牲にして悔ひないのと似てゐた。

それは凝滯なく物とよく推移るといふ賢慮を缺いた、愚かなことであつたには違ひないが、それをどうともすることの出來ないところに、餘程の賢人でない限り、人間の避け難い惱みがあつたやうにも思ふ。

彼は、どちらかといへば女を家庭とか生殖とかを目的とした實用的なものに見ることを餘り好まないで、常に自分の審美的要求を遺憾なく滿足せしめるやうな者を求めながら、遂にそれが得られないで、いゝ加減なところで折合をつけなければならないのが恰ど少年の頃の空想が實現し得られなかつたり、思ふやうな藝術の成らなかつたりする物足りさなと同じやうな不滿足であつた。

彼は前後二十年の間それほど女の事について幾度となく死よりも強い苦惱を經驗して來たけれども、同じ文學者の中に屢々あるやうに女との關係の行き惱みや醜い事實の破綻をありのまゝに見ないで、いつになつてもその醜に氣づかず、子供のやうな心持で、それを讚美するとか又は一種の迷信的な自信を以つて平氣で決行するとかいふやうなことは曾て

考へられなかつた。自分では極度に人間のそんな醜い弱點を忌み嫌ひ、まざ〱とさういふ醜穢な心の狀態に面接して、時とすると、あまりの胸苦しさから獨りで「あゝッ！」と歎聲を發して唸るやうな羞恥と嫌惡を感じたのであつた。そしてそんな醜い事實に面接することがなくして濟んだなら、どんなに好かつたらうかと思ふのであつた。

×　×　×　×　×　×　×
×　×　×　×　×　×

現實生活の繁瑣と困難とを認か見て來た彼は、今まで自分の通つて來た道を振顧つて、自分は決して賢い人間ではなかつたといふことが明瞭に眼に映ずるのであるが、それとゝもに時々「自分は兎に角生きて來たのだ。……よく生きた。」と、寧ろ不思議に思ふことさへある。些細な現實の艱難に打突つて死んでしまふやうな人間でなかつたことを考へると、案外に自分の强さを意識する。それについては自分を少しの容赦もなくくちや〱に揉んでくれた廣い世間に向つて感謝の一念がないでもない。恰も物凄い萬里の蒼波を望みながら、夏日の炎天に快よく海水に戯れてゐるやうな氣持もする。それは又恰ど彼が東京のやうな活動の劇しい大都會の中に住むに堪えられないで、少し離れた市外の田園にその喧騷を避けながら、繁華を遠くから眺めてゐるやうな氣持とも通じてゐる。

立秋が過ぎて十日ばかりも立つと、高い青空の色にも初秋を思はしめるやうな白い雲が浮いて來た。借家の座敷に寢ころんで、じつと軒端の外に空の方を遠く眺めてゐると、三坪ばかりの庭に立つてゐる數竿の嫩竹にさや〱と風の揺れて通る音が凉しい。夜は寢床の下から雨戸の外、垣根のまはりに地蟲の啼く聲が降る如く湧いて起るのを聞いてゐるのも、何となく寢心地がいゝ。さうして靜かにしづかに彼の日が立つてゆくのである。（おはり）



春

芥川龍之介

一

或花曇りの朝だつた。廣子は京都の停車場から東京行の急行列車に乘つた。それは結婚後二年ぶりに母親の機嫌を伺ふ爲もあれば、母かたの祖母の金婚式へ顔をつらねる爲もあつた。しかしまだその外にもまん更用のない體ではなかつた。彼女は丁度この機會に、妹の辰子の戀愛問題にも解決をつけたいと思つてゐた。妹の希望をかなへるにしろ、或は又かなへないにしろ、兎に角或解決だけはつけなければならぬと思つてゐた。

この問題を廣子の知つたのは四五日前に受け取つた辰子の手紙を讀んだ時だつた。廣子は年ごろの妹に戀愛問題の起つたことは格別意外にも思はなかつた。豫期したと云ふほどではなかつたにしろ、當然とは確かに思つてゐた。けれどもその戀愛の相手に篤介を選んだと云ふことだけは意外に思はずにはゐられなかつた。廣子は汽車に揺

られてゐる今でも、篤介のことを考へると、何か急に妹との間に谷あひの出來たことを感ずるのだつた。

篤介は廣子にも顔馴染みのある或洋畫研究所の生徒だつた。處女時代の彼女は妹と一しよに、この畫の具だらけの青年をひそかに「猿」と渾名してゐた。彼は實際背の低い、いつも無性鬚に半面を埋めた、妙に鈍重と云ふ感じを與へる、――つまり猿じみた青年だつた。のみならず身なりも貧しかつた。冬は毛糸の襟卷をしたぎり、マントも着ずに歩いてゐた。廣子は勿論篤介に何の興味も感じなかつた。辰子も――辰子は姉に比べると、一層彼を好まぬらしかつた。或は寧ろ積極的に憎んでゐたとも云はれるほどだつた。一度なども辰子は電車に乘ると、篤介の隣に坐ることになつた。それだけでも彼女には愉快ではなかつた。其處へ又彼は膝の上の新聞紙包みを擴げると、平然とパンを嚙ぢり出した。電車の中の人人の目は云ひ合せたやうに篤介へ向つた。彼女は彼女自身の上にも殘酷にその目の注がれるのを感じた。しかし彼は目じろぎもせずに悠悠とパンを食ひつづけるのだつた。……

「野蠻人よ、あの人は。」

廣子はこのことのあつた後、かう辰子の罵つたのを今更のやうに思ひ出した。なぜその篤介を愛するやうになつたか？――それは廣子には不可解だつた。けれども妹の氣質を思へば、一旦篤介を愛し出したが最後、どの位情熱に燃えてゐるかは大抵想像出來るやうな氣がした。辰子は物故した父のやうに、何ごとにも一圖になる氣質だつた。たとへば油畫を始めた時にも、彼女の夢中になりさ加減は家族中の豫想を超越してゐた。彼女は華奢な畫の具箱を小脇に、篤介と同じ研究所へ毎日せつせと通ひ出した。同時に又彼女の居間の壁には一週に必ず一枚づつ新らしい油畫がかかり出した。油畫は六號か八號のカンヴアスに人體ならば顔ばかりを、風景ならば西洋風の建物を描いたのが多いやうだつた

廣子は結婚前の何箇月か、――殊に深い秋の夜などにはかう云ふ油畫の並んだ部屋に何時間も妹と話しこんだ。辰子は

いつも熱心にゴオグとかセザンヌとかの話をした。當時何處かに上演中だつた武者小路氏の戯曲の話もした。廣子も美術だの文藝だのに全然興味のない譯ではなかつた。しかし彼女の空想は藝術とは殆ど緣のない未來の生活の上に休み勝ちだつた。目はその間も額椽に入れた机の上の玉葱だの、繃帶をした少女の顏だの、芋畠の向うに連つた監獄の壁だのを眺めながら。………

「何と云ふの、あなたの畫の流儀は？」

廣子はそんなことを尋ねた爲に辰子を怒らせたのを思ひ出した。尤も妹に怒られることは必しも珍らしい出來事ではなかつた。彼等は藝術の見かたは勿論、生活上の問題などにも意見の違ふことは度たびあつた。現に或時は武者小路氏の戯曲さへ云ひ合ひの種になつた。その戯曲は失明した兄の爲に犧牲的の結婚を敢てする妹のことを書いたものだつた。廣子はこの上演を見物した時から、（彼女はよくよく退屈しない限り、小說や戯曲を讀んだことはなかつた。）藝術家肌の兄を好まなかつた。たとひ失明してゐたにしろ、按摩にでも何にでもなれば好いのに、妹の犧牲を受けてゐるのは利己主義者であるとも極言した。辰子は姉とは反對に兄にも妹にも同情してゐた。姉の意見は嚴肅な悲劇をわざと喜劇に飜譯する世間人の遊戲であるなどとも云つた。かう云ふ云ひ合ひのつのつた末には二人ともきつと怒り出した。けれどもさきに怒り出すのはいつも辰子にきまつてゐた。廣子は其處に彼女自身の優越を感ぜずにはゐられなかつた。それは辰子よりも人間の心を看破してゐると云ふ優越だつた。或は辰子ほど空疎な理想に捉はれてゐないと云ふ優越だつた。

「姉さん、どうか今夜だけはほんとうの姉さんになつて下さい。聰明ないつもの姉さんではなしに。」

三度目に廣子の思出したのは妹の手紙の一行だつた。その手紙は相不變白い紙を細かいペンの字に埋づめてゐた。しかし篤介との關係になると、殆ど何ごとも書いてなかつた。唯念入りに繰り返してあるのは彼等は互に愛し合つてゐる

と云ふ、簡單な事實ばかりだつた。廣子は勿論行の間に彼等の關係を讀まうとした。實際又さう思つて讀んで行けば、疑はしい個所もないではなかつた。けれども再應考へて見ると、それも皆彼女の邪推らしかつた。廣子は今もとりとめのない苛立たしさを感じながら、もう一度何か憂鬱な篤介の姿を思ひ浮べた。すると急に篤介の匂――篤介の體の發散する匂は干し草に似てゐるやうな氣がし出した。彼女の經驗に誤りがなければ、干し草の匂のする男性は大抵淺ましい動物的の本能に富んでゐるらしかつた。廣子はさう云ふ篤介と一しよに純粹な妹を考へるのは考へるのに堪へない心もちがした。

廣子の聯想はそれからそれへと、とめどなしに流れつゞけた。彼女は汽車の窓側にきちりと膝を重ねたまま、時どき窓の外へ目を移した。汽車は美濃の國境に近い近江の山峽を走つてゐた。山峽には竹籔や杉林の間に白じろと櫻の咲いてゐるのも見えた。「この邊は余つぽど寒いと見える。」――廣子はいつか嵐山の櫻も散り出したことなどを思ひ出してゐた。

二

廣子は東京へ歸つた後、何かと用ばかり多かつた爲に二三日の間は妹とも話をする機會を捉へなかつた。それをやつと捉へたのは母かたの祖父の金婚式から歸つて來た夜の十時ごろだつた。妹の居間には例の通り壁と云ふ壁に油畫がかかり、疊に据えた圓卓の上にも黄色い笠をかけた電燈が二年前の光りを放つてゐた。廣子は寢間着に着換へた上へ、羽織だけ紋のあるのをひつかけたまま、圓卓の前の安樂椅子へ坐つた。

「唯今お茶をさし上げます。」

辰子は姉の向うに坐ると、わざと眞面目にこんなことを云つた。

「いえ、もうどうぞ。——ほんたうにお茶なんぞ入らないことよ。」

「ぢや紅茶でも入れませうか?」

「紅茶も澤山。——それよりもあの話を聞かせて頂戴。」

廣子は妹の顔を見ながら、出來るだけ氣輕にかう云つた。と云ふのは彼女の感情を、——可成複雜な陰影を帶びた好奇心だの非難だの或は又同情だのを見透かされない爲もあれば、被告じみた妹の心もちを樂にしてやりたい爲もあつたのだつた。しかし辰子は思ひの外、困つたらしいけはひも見せなかつた。いや、その時の彼女のそぶりに少しでも變化があつたとすれば、それは淺黑い顔の何處かに殆ど目にも止らぬ位、緊張した色が動いただけだつた。

「ええ、是非わたしも姉さんに聞いて頂きたいの。」

廣子は内心プロロオグの簡單にすんだことに滿足した。けれども辰子はさう云つたぎり、少時口を開かなかつた。廣子は妹の沈默を話し悪い爲と解釋した。しかし妹を促すことはちよいと殘酷な心もちがした。同時に又さう云ふ妹の羞恥を享樂したい心もちもした。かたがた廣子は安樂椅子の背に西洋髮の頭を靠せたまま、全然當面の問題とは緣のない詠嘆の言葉を落した。

「何だか昔に返つたやうな氣がするわね、この椅子にかうやつて坐つてゐると。」

廣子は彼女自身の言葉に少女じみた感動を催しながら、うつとり部屋の中を眺めまはした。成程椅子も、電燈も、圓卓も、壁の油畫も昔の記憶の通りだつた。が、何かその間に不思議な變化が起つてゐた。何か?——廣子は忽ちこの變化を油畫の上に發見した。机の上の玉葱だの、繃帶をした少女の顔だの、芋畠の向うの監獄だのはいつの間にか何處かへ消え失せてゐた。或は消え失せてしまはないまでも、二年前には見られなかつた、柔かい明るさを呼吸してゐた。殊に廣子

は正面にある一枚の油畫に珍らしさを感じた。それは何處かの庭を描いた六號ばかりの小品だつた。白茶けた苔に掩はれた木木と木末に咲いた藤の花と木木の間に仄めいた池と、――畫面にはその外に何もなかつた。しかし其處にはどの畫よりもしつとりした明るさが漂つてゐた。

「あなたの畫、あすこにあるのも？」

辰子は後ろを振り向かずに、姉の指した畫を推察した。

「あの畫？　あれは大村の。」

大村は篤介の苗字だつた。廣子は「大村の」に微笑を感じた。が、一瞬間美しさに似た何ものかを感じたのも事實だつた。しかし辰子は無頓着に羽織の紐をいぢりいぢり、落ち着いた聲に話しつづけた。

「田舎の家の庭を描いたのですつて。――大村の家は舊家なんですつて。」

「今は何をしてゐるの？」

「縣會議員か何かでせう。銀行や會社も持つてゐるやうよ。」

「あの人は次男か三男かなの？」

「長男――つて云ふかしら？　一人きりしかゐないんですつて。」

廣子はいつか彼等の話が當面の問題へはひり出した、――と云ふよりも寧ろその一部を解決してゐたのに氣がついた。今度の事件を聞かされた以來、彼女の氣がかりになつてゐたのはやはり篤介の身分だつた。殊に貧しげな彼の身なりはこの世俗的な問題に一層の重みを加へてゐた。それを今彼等の問答は無造作に片づけてしまつたのだつた。ふとその事實に氣のついた廣子は急に常談を云ふ寛ろぎを感じた。

「ぢやお忍びの若樣なのね、鈕の貝だらけのブルウズを着た。」

「ええ、そりやボエエムなの。下宿も妙なところにゐるのよ。羅紗屋の倉庫の二階を借りてゐるの。」

辰子は殆ど狡猾さうにちらりと姉へ微笑を送つた。廣子はこの微笑の中に突然一人前の女を捉へた。尤もこれは東京驛へ出迎へた妹を見た時から、時どき意識へ上ることだつた。けれどもまだ今のやうに、はつきり焦點の合つたことはなかつた。廣子はその意識と共に忽ち篤介との關係にも多少の疑惑を抱き出した。

「あなたも其處へ行つたことがあるの？」

「ええ、度たび行つたことがあるわ。」

廣子の聯想は結婚前の或夜の記憶を呼び起した。母はその夜風呂にはひりながら、彼女に目どりのきまつたことを話した。それから常談とも眞面目ともつかずに體の具合を尋ねたりした。生憎その夜の母のやうに淡白な態度に出られなかつた彼女は今も唯ぢつと妹の顏を見守るより外に仕かたはなかつた。しかし辰子は相不變落ち着いた微笑を浮べながら、眩しさうに黃色い電燈の笠へ目をやつてゐるばかりだつた。

「そんなことをしてもかまはないの？」

「大村が？」

「いいえ、あなたがよ。誤解でもされたら、迷惑ぢやなくつて？」

「どうせ誤解はされ通しよ。何しろ研究所の連中と來たら、それは口がうるさいんですもの。」

廣子はちよいと苛立たしさを感じた。のみならず取り澄ました妹の態度も芝居ではないかと云ふ猜疑さへ生じた。すると辰子は弄んでゐた羽織の紐を投げるやうにするなり、突然かう云ふ問を發した。

「母さんは許して下さるでせうか？」

廣子はもう一度苛立たしさを感じた。それは恬然と切りこんで來る妹に對する苛立たしさでもあれば、だんだん受太刀になつて來る彼女自身に對する苛立たしさでもあつた。彼女は篤介の油畫へ浮かない目を遊ばせたまま「さうねえ」と煮え切らない返事をした。

「姉さんから話して頂けない？」

辰子はやや甘えるやうに廣子の視線を捉へようとした。

「わたしから話すつたつて、——わたしもあなたたちのことは知らないぢやないの？」

「だから聞いて頂戴つて云つてゐるのよ。それをちつとも姉さんは聞く氣になつてくれないんですもの。」

廣子はこの話のはじまつた時、辰子の少時沈默したのを話し悪い爲と解釋した。が、今になつて見ると、その沈默は話し悪いよりも、寧ろ話したさをこらへながら、姉の勸めるのを待つてゐたのだつた。廣子は勿論後ろめたい氣がした。しかし又咄嗟に妹の言葉を利用することも忘れなかつた。

「あら、あなたこそ話さないんぢやないの？——ぢやすつかり聞かせて頂戴。その上でわたしも考へて見るから。」

「さう？　ぢや兎に角話して見るわ。その代りひやかしたり何かしちや厭よ。」

辰子はかう云ふ前置きをした後、彼女の戀愛問題を話し出した。——(次號完結)

小説 **カルメン** 新刊

四六判縮子表紙製本頗優美
定價一圓三十錢送料十三錢

佛國文豪プロスペール・メリメー原著

第一高等學校教授 バチラ・オヴ・アーツ 岡田實麿先生
第一高等學校教授 ドクトル・エス・レットル 石川剛先生 共譯

夙に一高教授として、亦學界の重鎮として名聲高き兩教授が、原文に忠實に、極めて平易に、此の名著を飜譯紹介せられたることは、讀書子の必ずや滿足せらるゝ所であると思ふ

小説 **イルの女神像** 新刊

四六判縮子表紙製本頗優美
定價一圓五十錢送料十三錢

カルメンと聞けば、諸君は直ちに「あゝカルメンか」「あのカルメンか」と、歌劇や西洋音樂の彼のカルメンを思ひ浮べられることであらう。然るに、佛國文豪メリメーの小説が御本家であることを知る人は少い。美しき妖婦カルメンに飜弄されたる、正直な青年を主人公として艶麗凄慘を極め、意味深刻に渉り、しかも尚ほ、簡潔流暢なる筆を以てよく文章の品格を保てる名篇。成程之れは世界的の學者で、文豪の傑作小説であつたと讀者諸君をして言はしむるであらう。

東京神田仲猿樂町十九
開文社
振替東京二四一九七番
電話九段四九四六番

メリメーが西班牙に近い佛國西南に在るイルの市で、遭遇した奇談を學者的靈筆を以て敍述せられたもので、女神の妖艶な肉體美と其の獰猛な表情を想像し、アルフォンスの不可思議な死因を心に描き見る時、一種の神秘的な感興に打たれざるを得ない。巴里大學教授故ファゲーが實に優秀なる作品であると聲を高く推稱したのも無理はない。——其他メリメー傑作「マダム・ルクレース街」「シャルル十一世の幻影」「マテオ・ファルコネ」等の短篇を納む。

勞働運動の研究

社會局勞働課事務官　法學士

安井英二先生著

菊判全一冊總紙數四百頁

總ボプリン裝幀函入特製

定價金參圓五拾錢

送料廿七錢

「本邦に於ける勞働運動の趨勢」を劈頭に、或は勞働爭議調停立法論を提げ、或は勞働組合法を說き、又或は同盟罷業權の確立と消費者の自衞權を痛論して、最後に之等に關する獨逸法制の研究を以て結んだものが本書である。著者は此の述作に際し一個純然たる學徒の見地を踏み出なかつたと誌してゐるが曩には內務省警保局にありて、目下は社會局勞働課にありて、專ら此の問題に親面しつゝある著者の理論には、必ずや勞働運動及び之が對策を考究せんとするものの傾聽すべき多くの特質を藏してゐるであらう。切に識者の三讀を俟つ。

日本大學發行

清水書店發賣

東京神田今川小路

◇電話九段五七七・五七八番◇
振替口座東京七四四七番

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
同　神田區通神保町　上田屋
同　京橋區銀座三丁目　東海堂
同　京橋區元數寄屋町　北隆館
同　日本橋區本石町　至誠堂
同　本郷區春木町　盛春堂
大阪市北區梅田町　盛文館
同　北區東梅田町　立盛堂
京都市七條停車場前　共盛社
同　四條西洞院　前田大誠社
名古屋市富澤町　中京堂
朝鮮京城本町二丁目　日韓書房

◉定價　金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）
但支那を除く

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六十錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附録號増刊號は各倍册に付背通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし

廣告取次所

博報堂　萬年社　告天社　正路喜社
豐國通信社　弘盛社　三誠社
金蘭社　大興社　一星社

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金口座番號は東京三十四番なり
一郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるるを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず
　一金二圓以上五圓迄　金七錢
　一金拾圓迄　金八錢　（集金委託料及送料共）
一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌料當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十二年八月二十三日印刷納本
大正十二年九月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木島三

發行所　東京市丸ノ内ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話　丸ノ內三〇二
電信略號　コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
大正十二年八月廿三日印刷納本

中央公論 九月號

（第三十八年第十號）

◎本號特價金壹圓八拾錢

郵税金五錢